

Nihon meicho zenshū; Edo
bungei no bu



日本名著全集
江戸文藝之部第十一巻

黄表紙廿五種

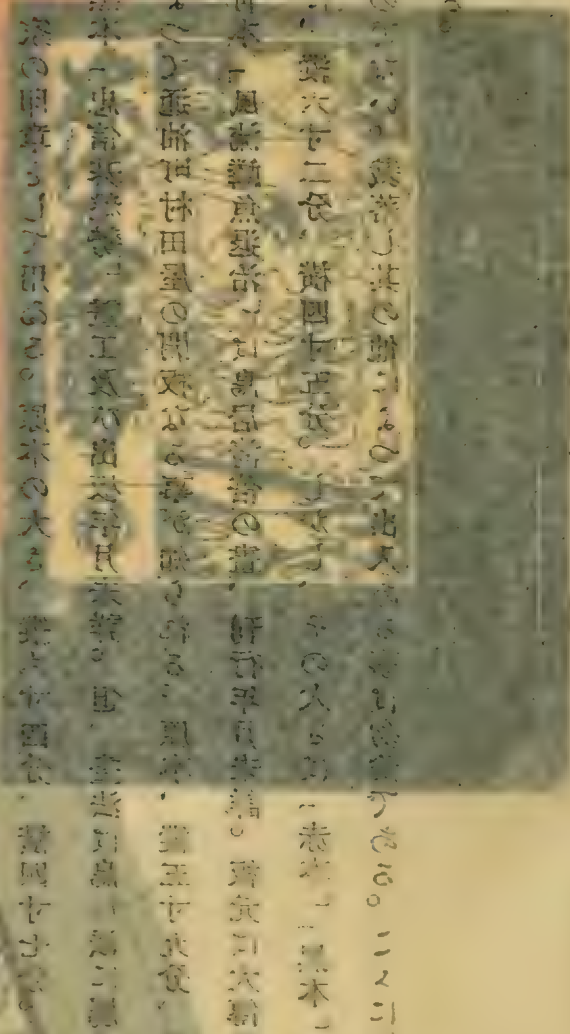
この卷の裝幀――

背及表紙意匠	木村莊八氏畫
見返し前附	小杉未醒氏畫
同上後附	木村莊八氏畫
背文字	渡邊新三郎氏筆
扉文字	近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案	小杉未醒氏畫

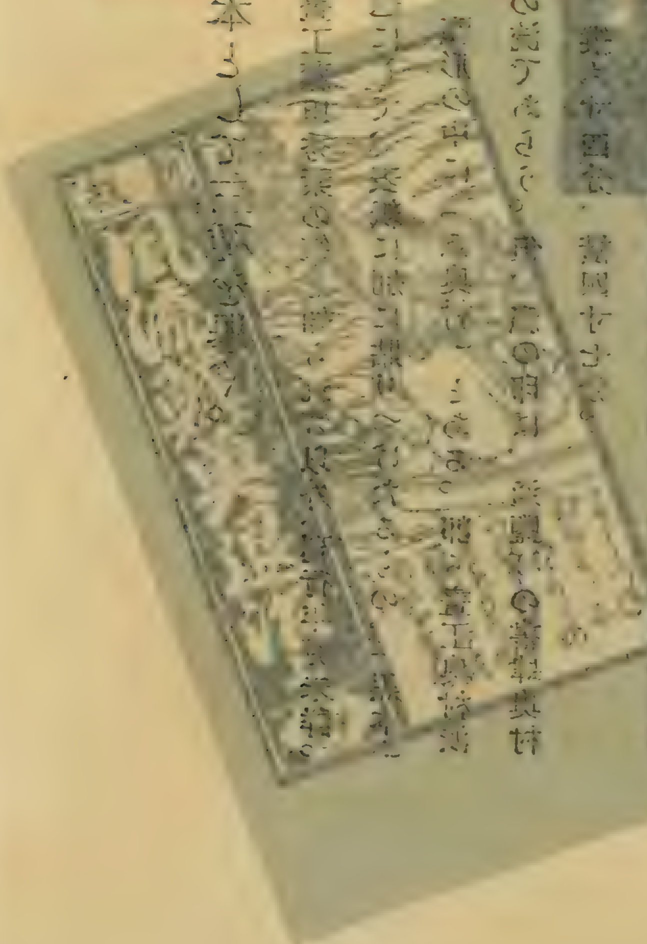
黄表紙の表紙及び貼外題を原色のまゝに示す。

但、表紙の色合はこれに限らず自ら濃淡がある。貼外題は、初期に於てはたゞ一遍の黒刷に過ぎざる事、なほ「赤本」「黒本」と同じ事であつたが、漸く彩色を施すに至り、「金々先生榮花夢」の如きも簡單なる色刷であつたが、その後、模樣にも色合にも工夫を凝して、こゝに見るやうなものを出した。これやがて文化の「合卷」の錦畫表紙となる前程である。圖中、蔦に山形は書肆蔦屋の目じるしである。なほ貼外題は毎册、意匠を異にする。これ「赤本」以來の習はしである。本書の原形、縱五寸五分、横四寸二分、これ亦黄表紙の大さの大體を示すに足りる。


五大力
京傳作
延命長尺
御誂染
長壽小紋
上
通油町
屋板







ある。
ものではない。裝幀して其の前に[illegible]出入[illegible]る。こゝには大體を示すに止めて
本には、紫六十二冊、黄四十五冊[illegible]、その人々が「赤本」「黒本」「青本」を規定する
青本「風流鯉魚退治」は鳥居清倍の畫、刊行年月未詳。[illegible]山本であらう。黒
こゝに通油町村田屋の開版なる事が知られる。圖案、畫工[illegible]、[illegible]五冊。
黒本「忠信栄花夢」畫工鳥居清満筆、年月未詳の[illegible]、[illegible]鳥居清満の印章
も、次の印章として用ゐる。黒本の大さ、[illegible]四寸五分。
な意味するものであるから、赤本黒本の[illegible]の形、[illegible]の[illegible]
「青本」に於けるも亦同じ。題外畫中に、[illegible]の中に[illegible]とある。[illegible]畫工[illegible]
赤本表紙の[illegible]而して[illegible]
赤本にもあれど[illegible]の赤本[illegible]、享保中の畫工[illegible]
「赤本」「黒本」「青本」の表紙の標本としたものは[illegible]

「赤本」「黑本」「青本」の表紙の標本として三種を擧ぐ。

赤本「むかし／＼の桃太郎」は、寳暦中の畫工富川吟雪の畫と知られる以外、刊行年月未詳。桃太郎の繪を配したる外題は、所謂貼外題にして、表紙に別に貼りつけたるもの、「黑本」「青本」に於けるまた同じ。貼外題中に、瓢形の中に「ゑ奥村」とある。即ち畫工奥村派を意味するものであるから、秀葉亦政信の流であらう。但、瓢の印は、通鹽町の書肆奥村も、家の印章として用ゐる。原本の大さ、縦六寸四分、横四寸七分。

黑本「忠信碁盤勢」畫工及び出板年月未詳。但、畫法は鳥居派に屬する。丸に村の印章によつて通油町村田屋の開板なる事が知られる。原本、縦五寸九分、横四寸五分。

青本「風流鱗魚退治」は鳥居清信の畫、刊行年月未詳。板元は大傳馬町山本である。原本は、縦六寸二分、横四寸五分。しかし、その大さは「赤本」「黑本」「青本」を規定するものでない。裁落し其の他によつて出入ある事は勿論である。こゝには大體を示すだけである。



むかしの
桃太郎
下
新板
上



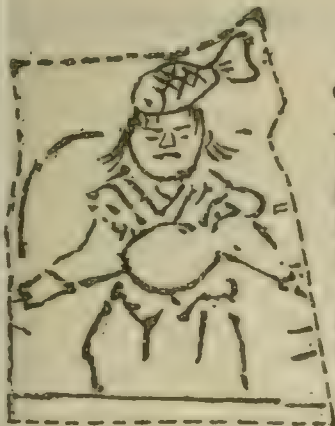
七二〇頁上段、左方へ寄せて貼付ける補圖



七二一頁上段、右方へ寄せて貼付ける補圖

人間萬事吹矢的（草稿）貼付用補圖

御面倒でも左の貼付用補圖を點線通りに切取つて、それ〴〵を指定の場所へお貼付下さい。貼付かたは、七三六頁の貼付のやうに片一方だけを糊付にして、他方はめくつてのぞけるやうに願ひます。



七一六頁上段、人物の上に貼付ける補圖



七一七頁上段、右方の人物の上に貼付ける補圖



七一九頁下段、右方の女の上に貼付ける補圖

黄表紙廿五種目錄

解題

黄表紙について

山口剛

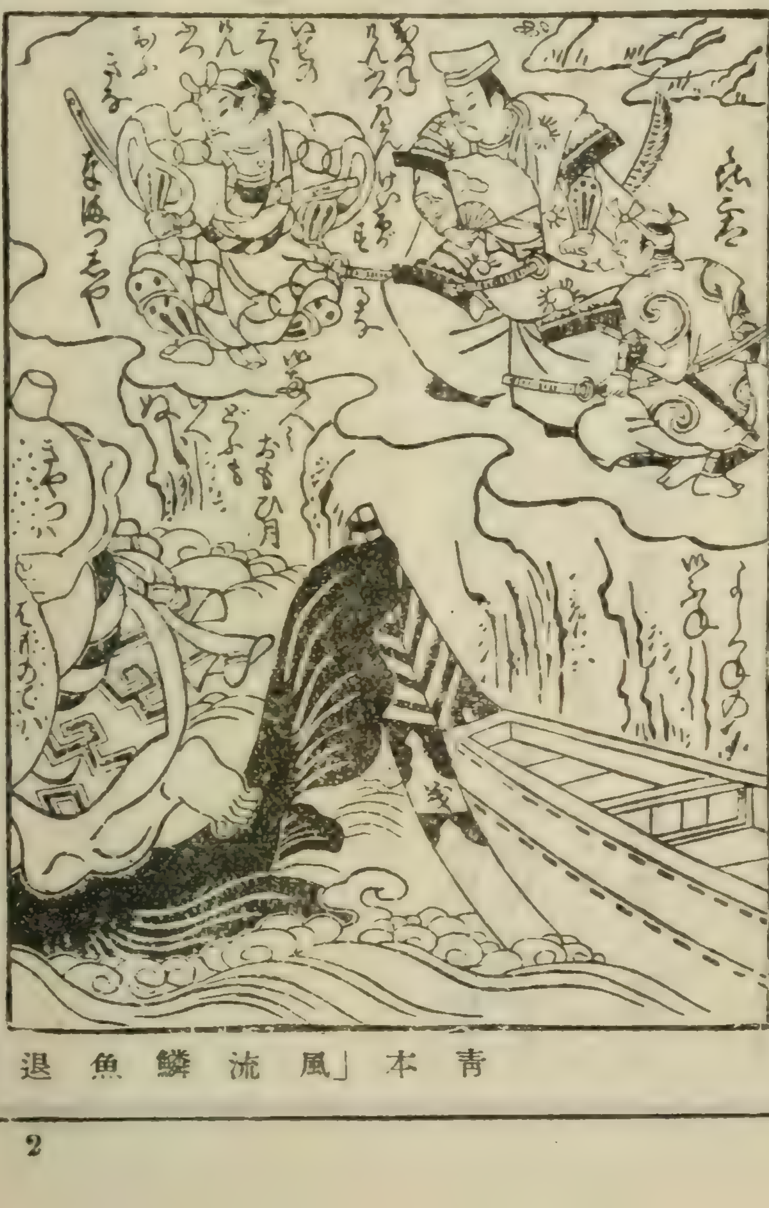
一　黄表紙以前

「黄表紙」は戀川春町の「金々先生榮花夢」によつてはじめてその實を得たといはれる。それは「黄表紙」が當世風の寫實をなし、今様の洒落を盡すことを意味する。「赤本」の昔から、「黒本」、「青本」さて、「黄表紙」となつた「草雙紙」は、この安永四年に於て漸く子供の手から離れて大人のもの、通人のものとなつた。いふ所の、「草雙紙」とは、「赤本」、「黒本」、「青本」、「黄表紙」及び、「合卷」の總目であつて、江戸時代に於ける江戸の小説の一主潮を成すものである。

「草雙紙」の字義は、さまざまに沙汰せられる。草假名で書いてあるために、草の字を冠するともいはれる。すきかへし紙に灰墨で印刷する、その一種の臭みから臭草紙といふが、臭の字面を避けて草の字を書くともいはれる。また、草を草相撲、草芝居の草と見なして、常法通りでなく、格式張らぬ意味にとつて、草雙紙とは讀み易い堅苦しからぬ讀物の義にも解せられる。いづれの解釋が當れるか否かはさて措いて、これらの言葉はおのづから、「草雙紙」のいかなるものであるかを説明する。

「草雙紙」が本格の雙紙と對をなすのは、もと婦女童幼のためにした繪畫本位の小冊子であるがためである。その繪解の文が、おもに草假名によつて書かれる。すべてが輕い意味でとり扱はれるので、その製本も印刷も極めて麁雜であつた。たゞ時相の推移は、「草雙紙」の内容形式にも種々の變化を與へて、後には絢爛を盡したものも作られたものゝ、つひに「赤本」以來の繪畫本位に終始する。また冊子の大さは、「赤本」によつて、半紙二つ切りと治定せられて、「合卷」にまで及ぶ。時に半紙全紙に刷つた事もあつたが、それは一時の變態に過ぎなかつた。そして一冊の紙數を五枚に限る。何冊の續物にせよ、この單位を守つてゐる。これも「赤本」にさだまつて、「合卷」になほその名殘をとゞめる。

「草雙紙」は、「行成本」の後をうけて、端緒を「赤本」に開く。「行成本」とは紗綾形、萬字つなぎ、毘沙門龜甲などの所謂行成表紙を附けて、金平物、また御伽草子などに關する繪



青本「風流鱗魚退」

解本である。「赤本」亦それらの筋書や、御伽噺の幼稚なものであつて、元祿・貞享の頃から行はれた。その赤本といふのは、赤表紙の本といふことである。これよりさき、赤表紙の繪解本が天和・延寶の頃から存して居た。内容は、「赤本」とかはりはないが、その大さが例の半紙半截より小さいので、特に「小形赤本」の名によつて區別せられる。

享保の頃になつて黒表紙のものが出た、所謂「黒本」である。これに前後して萌黄表紙のものが出づる、所謂「青本」である。その萌黄色が黄色に一變したのが、即ち「黄表紙」であつた。「黄表紙」はまた「青本」ともいはれる。「黄表紙」といひ「青本」といひ、表紙の色によつて區別せられる名であるのに、どうして黄と青とを混同するのであらうか。青表紙の本の流行期は短く、出版部數も少く、それに子供の弄びに過ぎないものとて保存に力むることもなく、從つてその本體は早くも跡を絶つて、後に、



治の内容の一例」

「青本」と「黄表紙」の名が曖昧となり、つひには、「黄表紙」の別名とまで混同されたのであらう、と稱書刊行會複製の鳥居清倍筆、「風流鱗魚退治」の解說に見える。これは林若樹氏の考說に基くといふ。なほまた、「青本」の萠黄色と、「黄表紙」の黄色とは、ともすれば混同せられるほどに相似通つて居ることも考へ合はせられる。あの馬琴の「江戸作者部類」中の所說の如きは、あまりに牽強附會に過ぎて居るであらう。馬琴の言は次の通りである。

「黄表紙なるをあをと唱へること、理にかなはざるやうなれども、寶暦以後墨の臭氣もあらず、世俗草冊子と心得たるもあれば、草の蒼々たる義を以てあをと唱へ云々」



（赤本）桃太郎

初期の「草雙紙」にあつては、かゝる表紙のうつり變りのみが問題とせられる、また表紙の上に貼る外題紙の地色・地質・繪模樣・摺方のみが問題とせられる、それほど内容は「赤本」の昔ながらの稚ぶりを墨守する。しかし、その内に

入つて考へれば、さすがに所謂黃表紙ぶりへの近づき、「金々先生榮花夢」への步み寄りが注意せられる。それと共にその步みのゆるやかなことに驚される。

桃太郎・猿蟹合戰、さては初春の祝ひ物として、鼠の嫁入などの御伽噺を主とした「赤本」から、「黑本」となると軍記物・敵討物などが加はり、妖怪談が行はれる。さて「黃



（黑本）二八義經

＊表紙」にも、依然としてその筋はくりかへされるもの、淨瑠璃や狂言の色さしもあり、また訓書も多くなり、地口をもとり入れて來た。短いながらに時の流行文句を引き、流行物に取材するものも見える。「赤本」の頃には近藤清春・鳥居清滿・富川吟雪（房信）などの畫工こそ署名すれ、作者名は明にしるされなかつた。それほど作者は介意せられなかつた。すべてが繪を主體として見られて居たからである。ところが寶曆の頃から、作者として

署名するものも現はれた。觀水亭丈阿がそのはじめであるといはれる。これらの小事も「草雙紙」の遲々たる進歩の上には、以て考ふべきことであつた。

二　黄表紙の變遷

安永四年の春町の一著は、かゝる間に出でゝ、草雙紙史上に一線を劃した。されぱとて、その翌年から黄表紙のすべてが金々先生もどきの當世の洒落風になつたのではない。なほ舊様依然たるものが多い。こゝにその翌々六年の「花絓對兄弟」中の一葉をとつて「榮花夢」との相違を明にする。

安永から天明となつても、「黑本」の類は往々にして外題替をして出板せられる、けれど大勢の趨くところは「榮花夢」に尾をつけ鰭をつけた當世ぶりである。山東京傳は北尾政演畫作の名によつて「手前勝手御存商賣物」を出して、その間の消息を諧謔のうちに語る。

上方下りの「八文字屋本」と「行成本」とが、「青本」「洒落本」の流行に世を狹められることを、くちをしく思ひ、何とぞしてあれ等に貶をつけようと企んで、しきりと「赤本」「黑本」を唆す。けれどそのたくらみは思ふやうにならなかつた。一體が「青本」は貴賤の別なく、人の目を喜ばし、世辭にかしこくいきを專として當世の穴を探し、俳氣も少しあつて毛筋程も拔目がなく、雨中の徒然には豆煎と肩をならべ、女中様方御子樣方の御贔屓強く、新板の工夫に新規を凝して居る上に、常に驕る心なくこれまで通りのすきかへし紙ですごす身持故、上方本の姦計をおひ退けるの力量があつた。隱謀は露顯する、「八文字屋本」「行成本」などは引つ解いて腰張にされる、下り繪本は皆顏へ無駄書をされる。「黑本」「赤本」は、本の仕立が惡

いから、悪事に加擔したとて定木にかけて裁ち直し、とぢ直しをされる。その根性のとぢ直しから、またもとのやうに繁昌する。

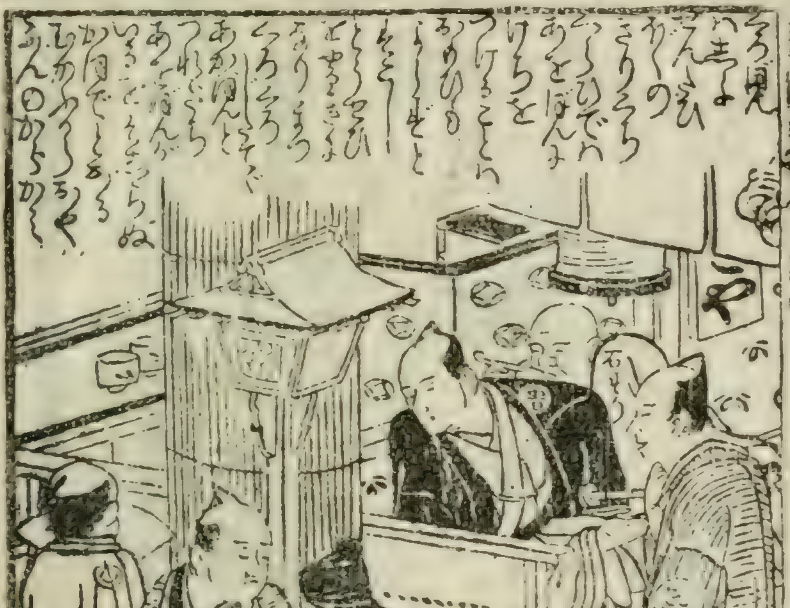
この趣向立は蜀山人の激賞するところとなつた、京傳の名は直に世に喧傳せられた。蜀山人の評は、「黄表紙」四十八部の評判の書、「岡目八目」に於てなされ、京傳の書は總巻軸の榮位に推されたのである。それは天明三年の出板であるが、その前年にも蜀山人は「菊壽草」を著はして前年度天明元年の黄表紙四十七部を評した。「御存商賣物」の「下り本」が「赤本」と「青本」を唆すくだりに、「去年の春出たる青本の評判記を出し、おの／＼方の御繁昌は青本が發行故なればけちをつけ給へと手前は手を濡さぬ工夫」とある、その評判記は本書をさすのであつた。また天明五年には同じ體裁の書「江戸土産」が出板せられた。「黄表紙」の世界は天明度に至つて極めて多事ならんとする。



花粧對兄弟

黄表紙の妙は輕快奇警を縦横にするにある。天明度は狂歌川柳の隆興にも著しいやうに、輕快にすぐれ奇警に長じて居る。當時の「黄表紙」が多く傑作したものを出したのも偶然でなからう。即ち「黄表紙」の銷々たるは安永天明に聴くべく、その遺響は寛政にたづぬべきであらう。

寛政に入つて「黄表紙」の作風は一變した。その轉機は寛政二年出板の京傳の「心學早染草」にありといはれる。これは當時流行の心學を利用した趣向立であつたが、新しいものとして大に迎へられ、ひき續いて續編續々編を出すに至つた。その作風は黄表紙界の全體にゆき亘つて、教訓を寓し、勸懲に托する作が多きを加へる。それはさうせねばならぬ事情も存して居た。安永天明はいふところの田沼時代であつて、世はたゞ太平の逸樂に流れ、人は通に憂身を窶し、酒落に心肝をくだき、そのはては子供の手から草雙紙を奪ひとつて



御　　存

の遊戯三昧である。すべてがおもしろ、をかしいに精進する。されば田沼の沒落、つゞく樂翁の改革が齎す世間の動搖もこよなき黄表紙種としか映らなかつたら。「文武二道萬石通」「時代世話二挺鼓」「天下一面鏡梅鉢」などの數多くの作が現はれる。もとより諷刺としては輕いものに過ぎなかつた。されど事苟も時政に關する以上、幕府はその刊行を禁ずる。更に當時峻嚴を極めた風俗の取締は、京傳の洒落本の筆をも封じてしまつたので、彼は黄表紙方面に主力を致すと共に、一身の安きを欲して教訓物を草するのであつた。

さすがは京傳である、腕達者が棒縛りの跡をしこなすやうに、さういふ窮屈な條件の下にも縱横に滑稽の才を盡した。しかし碌々の徒はつひに他奇に出づる事がなく、趣向に困じては安永以前の化物話の復活を來し、軍記物の流を起した。



商賣物

寛政七年「黄表紙」の作風はまた一轉して敵討物の流行となる。敵討物は「黑本」時代、春町時代すでに一盛を見せ、その後も時々くりかへされたものゝ、つひに今日一代を席卷するやうな事はなかつた。楚滿人にしても、天明三年に「敵討三味線由來」を作つたが、何の評判にならずにをはり、こゝに「敵討義女英」によりて敵討物の中興の祖と稱せらるゝに至つた。要するに時勢の然らしむるものであらう。「黄表紙」の流れとしては新趣向を索めて、これに至り、「黄表紙」の外にしては、「讀本」が影響する。この流行はつひに京傳にも幾つかの敵討物を作らせた。

三馬は文化二年に「嬲訓歌字盡」を作つた。その趣向は京傳の「扮接銀煙管」「兩頭筆善惡日記」を踏襲した滑稽物であるが、そのはじめに「一部の大意」と題して一篇の作意を示すと共に又かういうて居る。

「近頃敵討の冊子に滑稽の名を奪はれ、三年筆を執らざれば、紋切形を失したる作者が筆の手まどひなり。冀くは江戸氣の皆樣、敵討の堅みをやめて喜三二、春町傳來の青本に碎け給へと、おのが田へ引く水掛論云々」

また同年の作「親讎胯膏藥」にはなほ一段と敵討物に對して不平を洩らし、酒落のために氣を吐き、又皮肉の趣向立をなした。その序の一節にいふ、

「そこで捻つて臨るにすべて板元といへるもの內股の膏藥に等し。その謂は時花物には移りやすく、那にも箇にもべつたりにて、義理にも法にもかまはどこそ、新作の誂も、ヤレどう參つた孔明が智慧を揮つて考へたる書の寓言はいゝや否、古風な酒落もいゝや否、唯當時よく賣れる敵討物ばつかり鑄たいなと戲作者などには屁も放りかけず、そこでも此でもまた敵討、似たり、よつたり、討たり、擲つたり、繪ばかり看ても旨

の分つた一部の段取、是が流行といふものは、ハツア時なるかな〳〵とひとり歎息した所が、おのれが粗拙(へた)の負惜しみにて敵討の本よりも遙に野暮の至りなり。夷狄に素しては夷狄を行ひ、郷に入つては郷に従ひ、敵討がはやるなら、人眞似をして敵討と板元が勸にまかせて久しぶりにて筆は採れども、老實(まじめ)ばかりの趣向では戯作者の戯の字へ對して面目なしと我意を立(たて)ぬく戯作の復讐(うち)、りきんだ口はたゝけども、*ヤツパリ作者も内股膏薬云々」



備前擂盆一代記

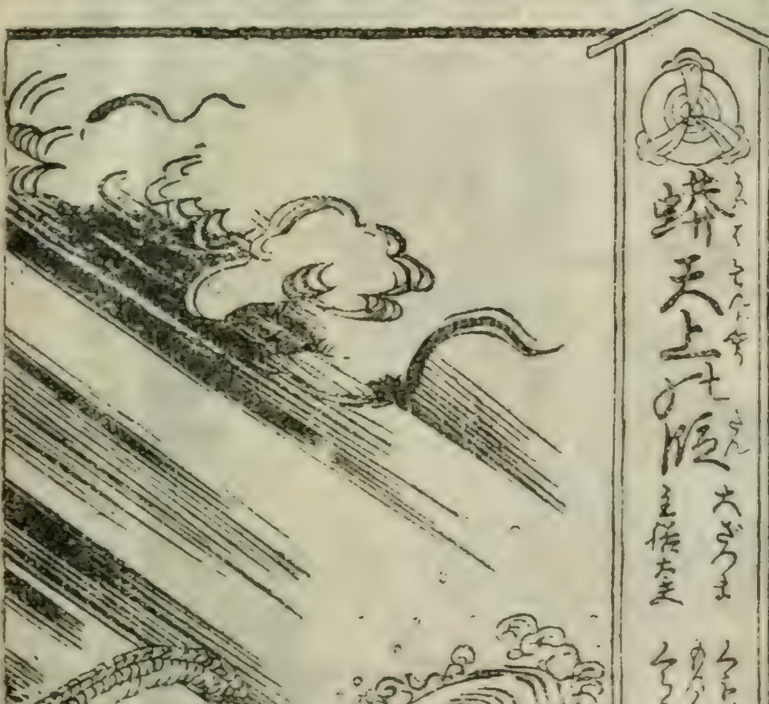
しかし、その三馬さへ翌三年の「雷太郎強惡(らいたらうごうあく)物語」には、「黄表紙」の體裁の約束に背いてしまつた。「黄表紙」は二冊二冊と續いても、また時に五冊六冊の續物を出しても、なほ従來の一冊五枚の定めを守つてゐたのを、この書は、「黄表紙」の五冊宛を合綴して前後二編二冊に製本した。いふところの「合巻」がこれである。内容と外形が相伴はぬ様になつて來た「黄表紙」としては

當然の歸着であらう。世間はこれを歡迎した、今までの黄表紙仕立は影を消し、三冊合一冊、五冊合一冊などと附記して出板する様になつた。合綴の體裁は紙數を増加し、それと共に繪畫、彫刻、印刷、製本に意匠を凝した。斯くて「合卷」はつひに種彦の「諺紫田舍源氏」「正本製」を出すに至つた。

「黄表紙」變遷の輪廓は大方からうであらう。もしその變遷を具象すべき作者畫工また作物については、本編收載するところの二十五種の解題の中にいはうとする。今はまづ「黄表紙」の一性質について考へようと欲する。

三　黄表紙の特質

敵討物といはず、敎訓物といはず、洒落、穿ちといはず、「黄表紙」の全體を貫くものは戲である。かつて丈阿は署名と共に戲作の二字を置いた。春町、喜三二またその戲作を本意とする。三馬の頻りに古風の洒落を説いて戲作家の本領を守らうとす

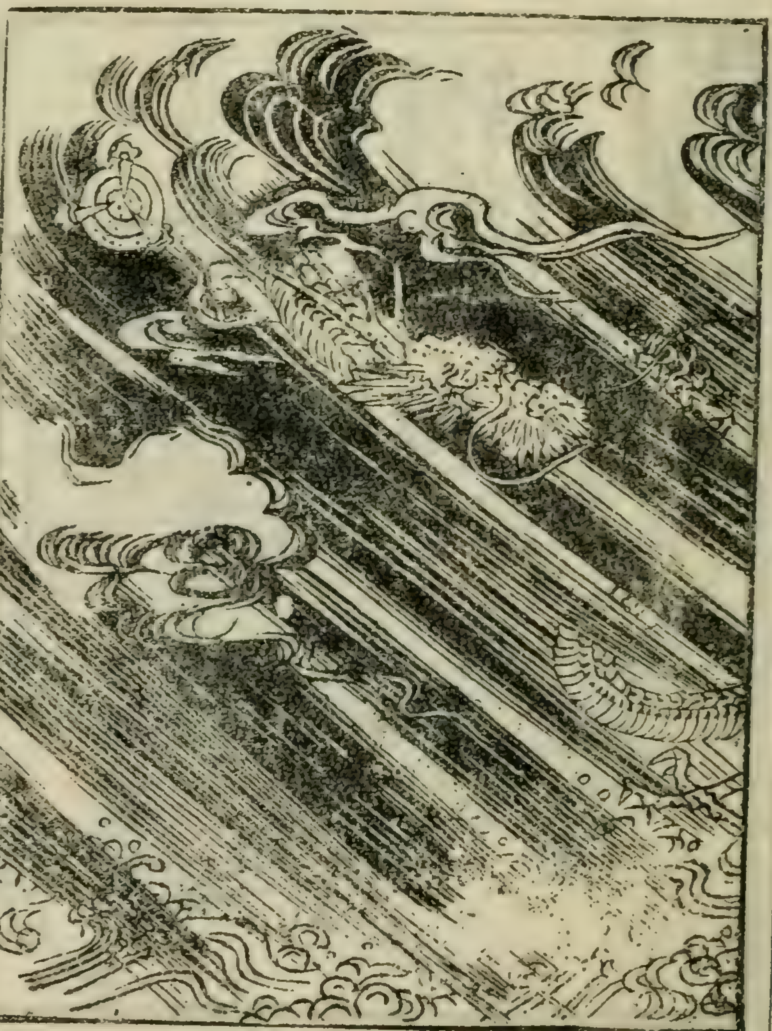


三千哉成

るのは、よく「黄表紙」の本質を解したものといはう。馬琴は江戸小説家の雄であつたが、「黄表紙」にはさまでの佳作がなかつた。「備前擂盆一代記」の如きは聞えた一つであるが、全體の立案は醜陋避くべきものがある。それといふのも、彼が戯作を解せず、戯作を樂しむことを知らずして、徒に「黄表紙」の讀者に迎合せんとするためである。彼が戯作を肯しとせざる事は「料理茶話卽席話」の中の述懐に見える。

「かゝる太平の時に生れながら一つとして爲す事も無く、臭草紙の戯作者となり、あたら月日を慕すこと、今の飯粒よりはかなき業なり、今より作の筆を絶ち早く廢めるに如くはなし云々。」

京傳となると決してさういふ言葉を口にしなかつた。彼は戯作者たる事に甘ずるとよりはむしろ見榮とする。彼は嬉々として戯作の筆を執る。その「作者胎内十月圖」は、黄表紙の立案のはじめをはりを胎兒の成長



云　蛸　蛇

に見立てたものであるが、その中の案前案後實虚散の處方に「黄表紙」の要素を細に示したものが見える。滑稽の間に、おのづから眞實を語る。

○教訓 三匁意見にておろし細末 ○面皮 一枚厚くむいて用ゆ ○趣向 一兩 ○工夫 一匁、うその皮を去りて用ゆ ○案思 一兩 ○地口 三兩、燒直しても用ゆべし

○故事附 五分 ○小文才 三分 ○智慧 三文はかり ○畵意 二匁 ○氣根 十匁 ○横好 一匁へたを去りて用ゆべし 以上

十二味、硯の水一杯半入れて器量一杯にこじつける。小雅一へぎ入れる、案じ樣常の如し。

なほ實虚散を盛る醫者の言葉として「誹だてが肝腎でござる、作者の毒だてと申すは、ちんぷんかんを横脚へにすべからず、故事來歴を生噛にすべからず、假名違、片言、てにはの誤り、草雙紙には許します」とある。

「黄表紙」をかう心得て居る京傳は、いつも讀者と共に「黄表紙」を作り、又描くといふ態度をとる。たえず讀



龜山人

者と共に戯れ、共に笑はうとする。「金々先生造化夢」の金々先生の寝言のくだりに、鼾の音コウコウ、口嘗めずりムニヤ〳〵とのみ書いて、「此外にもし寝言の文句御案じ御座候はゞ御知らせ下さるべく候、早速書入候」とあるが如き、また、「三千歳成云蟒蛇」の蟒天上の段のくだりに大薩摩主膳大夫とのみあつて唄の文句はなしに、たゞ「雲の中にいろ〳〵面白き文句あまた御座候へども眞暗にて一向分り申さず候」と斷つたなど、隨分讀者を喰つたやうであるが、結局は讀む人、作る人と膝を交へてのうち解けぶりである。

かゝる態度を持する者は京傳のみではない。黄表紙作者は皆これを心掛け、讀者また斯うあることを要求する。即ち作者も作者部屋を見せ、樂屋部屋を見せようとし、讀者もそれを覗き、そこに入りびたらうとする。京傳の作中に、京傳みづからを出すものが少くない。さきの「作者胎内十月圖」がそれであり、「京傳憂



家妖

世之酔醒」もその一つである。このやうな趣向は、すでに春町の「其返報怪談」に見え、その後「萬象亭戯作濫觴」全交の「全交法師常々草」などをはじめ、多くが數へられる。中にも一九のものにはその姿があまりに屢現はれて、やゝ煩はしきに過ぎる。

それ等の中に喜三二の「龜山人家妖」の挿繪は、よく喜三二その人の面影をうつし得たといはれてゐる。岡持、朋誠堂、龜山人は皆喜三二の別號である、故に狂詠一首を題してある。

岡持か朋誠堂か喜三二か龜山人かと聞くも氣まぐれ、

「黄表紙」からはなほ色々なことが考へさせられる。しかし、核心はこの戯であり、笑である、作者讀者共に相寄りて樂しむ點にあらう。今、「黄表紙」を繙くとせば、これを念頭に置くべきであらう。さもなかつたら、その一冊を見るにつけ、讀むにつけ、腹立しさに堪へざるものがあらう。それにしても、その當時に、これ等はどれほどの賣行をなして居たらうか。「江戸作者部類」を引いて書き添へる。

「此時（天明寛政）に當りて通油町なる地本問屋鶴屋蔦屋二軒店にて毎春印行せる臭草紙は必作者を擇むをもて、前年の冬より發兌して春正月下旬迄、二冊物三冊物一廻にて一萬部賣れざるはなし、そが中に當り作ある時は一萬二三千部に至ることあり。猶甚しく時好に稱ひしものあれば、之を拔出して別に袋入にして又三四千も賣ることありといへり。」

同書には賣價の變遷が記されてある。それによれば初期は新板一冊物六文、八文、古板物は一冊五文。後に新板は一冊八文、古板七文。寛政には新板一冊十文、古板八文であつた。また天明頃には特に製本を美しく、三冊を合綴して袋入にしたのを五十文或は六十四文に賣つたといふ。

金々先生榮花夢　二冊

戀川春町の畫作で、安永四年鱗形屋から出板した。從來の作風を一變して黄表紙史に一線を劃した名作である。

春町は倉橋氏、名は格、通稱は壽平、駿河小島侯の家臣、狂歌名を酒上不埒といふ、その戀川といひ、春町といふのは小石川春日町に住ひするためである。繪を烏山石燕に學び、喜多川歌麿と同門の友である。

黄表紙の作としては「金々先生」以外に「高慢斎行脚日記」「楠無益委記」「鸚鵡返文武二道」が聞えてゐる。「鸚鵡返」を除いては自畫作であるが、また他の作者のために繪筆を執つたのも少くない。

「金々先生榮花夢」は邯鄲



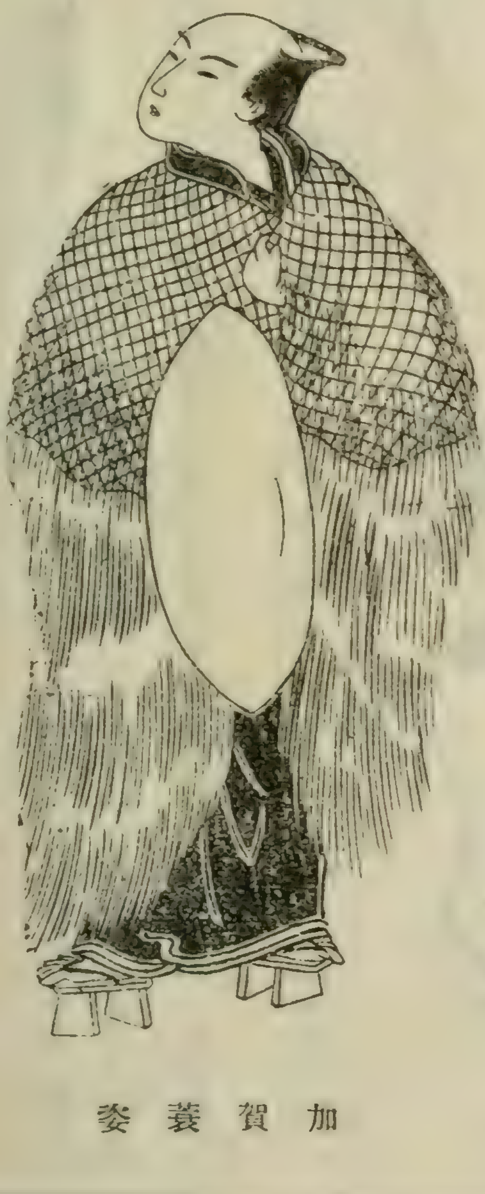
上之令子風

の夢の話に基く。邯鄲の夢は唐代李泌撰の「枕中記」に見える。しかし、春町は直にそれに據らずして、それに立案した謡曲「邯鄲」の輪廓を用ゐた。本文の中にも「邯鄲」の文句が引用せられる。和泉屋座敷の體は原文の樣子を少しく更めてあり、主人淸三と金々先生對面のくだりの「天の濃漿(こんづ)ともいふべき程の酒を出し云々」は「さる程に天の濃漿や沆瀣(かうかい)の盃、これまで持ちて參りたり。そも天の濃漿とはこれ仙家の酒の名なり。」をにほはせてある。

書中また「鉢の木」から出



中之息子風



加賀蓑姿

でた言葉がある。この謠曲趣味は「榮花夢」がまだ〳〵黄表紙の初期の作である事をおもはせる。けれど、黄表紙の趣向を一變させたゞけの當世ぶりも隨所に見出される。たとへば金々先生を雷子(らいし)の物ぐさ太郎に見立てたのもそれである。雷子は上方役者京屋(けうや)雷子、即ち二世嵐(あらし)三五郎である。物ぐさ太郎は彼が江戸に下つた三年目の安永二年、市村座夏興行の「十帖源氏」の役名である。物ぐさ太郎と盧生と金々先生とおのづから繋がれる一縷がある。春町はその細きものを利用するを忘れなかつた。しかも雷子はやつし事(こと)に於いて、江戸の人々から迎へられてゐたのである。「うつちやつて置け、煤掃に出よう」といふ言葉がくりかへされる。これは明和七年板の「辰巳(たつみ)の園(その)」に「構はぬといふ事、物の見えぬ時にいふ事を諸事に用ゐるなり。」と註記せられた通言である。また深川の遊所での唐言(からこと)は、これも「辰巳の園」に説明せられた通じ言葉の類である。



與作頭巾姿　竹田頭巾姿

こゝに書中の唐言を註する。一はゲンシロウサンガキナサイト。一はイマイクカラマチナトイツテクンナである。春町は當時流行の通言をもとり入れて、こゝに當世ぶりを發揮せんとする。それと共に挿繪の上にも當時の風俗をさながらに描き出さうと努めた。

安永二年板の「當世風俗通」は當時の江戸の風俗を如實に傳へる。著者の金錦先生は、或は春町の變名であるといはれ、或は喜三二の戯名であるともいはれる。いづれにもせよ、その挿繪は春町の筆に成つた。それに見える息子風と金々先生とを對照すると、春町の繪意が會得せられる。

金々先生の吉原通ひの打扮は同書の「上之令子風」に「竹田頭巾」を用ゐたもの。その説明に從へば、これは高慢といへどなほ柔和で行過ぎがないとの事、即ち金々先生のまだおとなしさを失はぬ程を見せる。品川通の打扮は以ての外の高慢で、歌は露ゆふ楓江安兵衛が、肺腑をさぐるといふしろものとある「中之息子風」に「與作頭巾」を冠つたもの、即ち金々先生の金に窮したのと共に遊蕩の漸く皮肉に入つたことを現はすのであらう。深川雪中の姿は所謂異體の一つ、これも流行の加賀蓑姿である。これらの通な風俗の前後に野暮な田舎の風俗を配する、かういふ工夫が異常の喝采を江戸の或種の人々から送られたのであらうか。

しかし何というても「榮花夢」には先驅者の堅さが纏つて居る。それは筋をずつとこまやかにし、もつと當世を穿つた「見徳一炊夢」と比較すれば一層その感を深うする。「一炊夢」は喜三二の作であつて、「榮花夢」の趣向に倣つたものである。京傳もまた「金々先生造化夢」を作つたが、これはその外形を假りて内容を新にする。

親敵打腹鼓　二冊

喜三二の作、春町の畫、安永六年、蔦屋の開板である。

お伽噺を主題とすることは赤本以來の傳統であるが、さすがに此頃となつては、筋をわづかに變更したゞけでは滿足せず、世間周知の筋の上に立つて何かの新しみを加へようとする。この作はかち／＼山の話の後日譚といふ形式をとり、子狸が親の敵の兎を討たうとする、兎はちゝばゝの息子と子狸との義理合から切腹する。また子狸が手引して獵人に殺させた狐の子は狸を殺して親の敵を打つといふ趣向である。

その芝居がゝりをすべて洒落で運ぶのが、この面白みであらう。當時の名物川魚料理中田屋、即ち向島の葛西太郎が持込まれてある。葛西太郎はもと隅田の堤下に鯉を賣つて居たが、やがてそれを肴の麥飯料理で世に知られるやうになつたといふ。圖中の看板に麥飯菜飯の目が見える。兎が切腹する、狸が一刀兩斷にする。上半分が鵜、下半分が鷺となる。ある歳の夏の旱天に鰻鱺が拂底で中田屋が困り切つて居ると、鵜と鷺とが來て鰻鱺を吐き出す、これは中田屋が狸に追はれる兎を庇つてやつた恩に報いるもの、その鰻が即ち反吐前の大蒲燒、後の江戸前の大蒲燒であると洒落る。

さういふ洒落ぶりは、遙に「榮花夢」の上に出づる。春町喜三二の相違ばかりでなく、安永四年より五年六年といふ時の移りがさういふ運びをさせる。鵜と鷺が鰻を吐き出す場合には「無間鐘」を用ゐた。狸と獵人が兎詮議で葛西太郎の主に迫る時、女房が「獵人の袂も」と歌ふのは、琴曲の「ふき組」を假りて、始皇帝の宮中の難を附會したのである。

作者喜三二は秋田藩士で平澤平格といふ。江戸住の留守居役である。狂歌狂詩に長じ多くの狂名を有する。手柄岡持、韓長齢、朋誠堂、龜山人などゝいふ。黄表紙の作には「鼻峰高慢男」「鐘入七人化粧」「長生見度記」「文武二道萬石通」などの聞えたのがある。

長生見度記　二冊

喜三二の作、春町の畫、天明三年の蔦屋の板である。

これが春町の「楠無益委記」の趣向の模倣であることは本書の序にも見える。喜三二と春町との間には密接の關係があつて、喜三二の作に春町が描いたのも少くないが、その作にもまた交渉を有する。喜三二の「文武二道萬石通」が成ると、春町はその趣向を襲うて「鸚鵡返文武二道」を作つた。

しかしこれは喜三二春町だけのことでなく、黄表紙の全體に於いて見らるゝ現象である。模倣、踏襲、時に剽竊も、人は咎めることとなくして、却つてその染め直しぶり、燒き直しぶりを評價する。作る者、讀む者、すべて悠々の間にあつた事が考へられる。

「無益委記」くはしくは「夫は楠木是は嘘氣無益委記」といふ、天王寺の未來記に擬して、未來の風俗を豫想して滑稽を弄したもの。安永八年の出板である。その手法は現に見るところを誇張するか、或は反對をいふにある。たとへば大通の羽織長さ三尺八寸五六分といふのは、當時長目になつて來た羽織を誇張したものである。放蕩娘が惡原へ通つて母親の勘當をうけ、新吉原に男郎を出すとは反對をいふことである。その反對のいひ方はやり手婆は貰ひ手爺となり、禿は「ぶろか」とよぶとある。

「長生見度記」は、その手法をさながらに用ゐて、材料をその遺漏にとる。たゞ二者を比較すれば、その誇張が漸く内端(うちわ)になつたことが注意せられる。即ち穿ちが細やかになつたといはれよう。江戸芭蕉塚の三十三所、また發句の節物などは、たしかに當時の俳人の弱所を衝くものであらう。劇場の陳皮買(ちんぴかひ)はよい見つけ所であらう。

「無益委記」においては一般的のものがいはれたが、これは一人一事に觸れて來た。從つてその穿ちは強く響く。萩寺の萩寺におけるが如きがそれである。また角力のところの「今度の地藏獄は小さな男だが轉ばぬ奴(やつ)さ」とは身長七尺五寸といふ名物角力釋迦獄の穿ちである。敵役の中島三甫右衛門をおやまとし、おやまの岩井半四郎を敵役としたのは當時*の人々の一目見て笑ひこけたことであらう。



楠無益委記

この趣向は竹杖爲軽(たけつえのすがる)によつて天明四年の作「夫從以來記」に持ちこまれた。そのうちの穿ちがいよ/\こまやかになつて行く。

中に草雙紙についていふ。

「わい/\天王一萬八千年に當つて、草雙紙は大人の讀む物となり、正月三日會初(くわいはじめ)ありて、それより月々會讀あり。

丈阿が草子に大木の切口で太いの根ときて合點か/\など丶申すは至つての古文字で、一通では解(げ)せませぬ。たとへて申せば、喜三二は徂徠、春町、四方は春臺、南郭、吐芳は東涯、通笑は朱子學で一體が堅う御座

る。」この趣向は蔦唐丸、即ち書肆蔦屋の主人重三郎の自作といふ「本樹眞猿浮氣噺」においてやゝ一轉する。これは「三未來記」がなす豫想を豫想にとゞめないで、實際に行ふことより起る失敗のをかしさを叙する。たとへば正月の遊びに大宮人の子の日の遊びをうつして、金儲をしようと、束帶、直衣、狩衣の貸衣裳まで仕込んだが、誰も來手はなく、夜鷹ならぬ晝鷹を出しても遊ぶ折助一人もないやうなをかしさである。

右通慥而啌多雁取帳　三冊

奈蒔野馬乎人の作、忍岡歌麿の畫、天明三年、蔦屋の開板である。

作者奈蒔野馬乎人とは、卷末の印章によつても明であるやうに志水燕十の別號である。燕十はまた志水裡町齋ともいふ、通稱は鈴木庄之助、烏山石燕の門人、挿繪を描き、また洒落本を作つた。

本書の序によれば黄表紙の作は、これがはじめのやうであるが、實は天明元年に「化物二世物語」を作つた、但、これには燕十の名を署する、それを避けて今の名を用ゐ、黄表紙の初作といふのは何か事情が存して居らう。

畫工忍岡歌麿は燕十同門の名手喜多川歌麿である。忍岡といふのは、その當時の住所を冠したのである。

藤井乙男氏によれば、本書は赤本「只とり山のほとゝぎす」からの思ひつきとの事。黄表紙と赤本との關係にかやうな譯合が多からうが、赤本の類は多く散佚して、後人をして考察の途を絶たせる。「只とりの山のほとゝぎす」も上卷のみが存する、それには萬徳長者が戯れに鴨を捕るとて二三十羽を腰に挿んだところが一時に羽ばたきして舞ひたつので、長者は虚空に上る、そして七福神の隱里の酒宴の席に落ちるとある。即

ち燕十は、その長者を遊蕩の餘り主人から追ひされた貧しい番頭に代へ、七福神を大人國の人々に代へる。

赤本の下卷との關係は不明であるが、本書はその大人國を持込んだことに興味があらう。大人國小人國の不思議の世界はすでに「風流志道軒傳」「和莊兵衛」などによつて展開せられて居る。燕十はそれを利用する故に「雁國」などゝいふものを作り出した。

そのやうに利用しながら、談理に陷るを避けて、飽くまで洒落で通したことが工夫であつたらう。金十が當時籬屋に身を窶して居たところから、大人國で手盥の籬をかけ、その大きいのに困じて、どうせうと慶子の道成寺の身振でゆくのも工夫なら、その籬にはぢかれて、もとの住所に飛びかへるといふおちもまた捻つた工夫であらう。

狂言好野暮大名（きやうげんすきやぼだいみやう）　三冊

岸田杜芳の作、北尾政美（まさよし）の畫、天明四年の出板である。杜芳は岸田豐治郎といふ表具師、芝に住した。本書の署名に芝櫻川と冠らしてある。杜芳が櫻川杜芳ともいふのはその住所による。黄表紙の作が十數種ある。また狂歌に遊んで言葉の綾知といふ、本書對面のつらねの下の署名はそれである。

畫工政美は別に蕙齋、又杉皐と號す。錦畫、黄表紙の作多く、名手として聞えて居る。作者未詳の黄表紙評判記である天明五年板の「江戸土産」に、この作の評が見える。當時の讀者にはどういふ點が注意せられたかを示すために左に引用する。

○中の卷にて松葉屋の女郎を惣仕舞にして、お屋敷へ召し、狂言を申しつける所にて、花魁のいふ書入に


古人櫻川杜芳似顔

わつち等はついに芝居を見た事はおぜんせんと有る。」名にし負ふ松葉屋の花魁が芝居を見ぬははづかし、潮來か輕井澤なら知らぬ事。△答「此人も正直な人だ、態とさう云つて、はぐらかすのだわな、潮來や輕井澤とは江戸の內か。」

「狂言好野暮大名」は大名と遊女と俳優とのとり合せが面白いと見られる。大名屋敷の素人芝居に遊女を參加させたのが趣向であらう。大名屋敷の素人芝居は天明時代にはない事ではなかつた。白河樂翁の「燈前漫筆」にいふ。

「淨瑠璃三味線の如き賤しく、しかも淫哇といふて人の心を蕩し、和に流れ、無禮失義に陷るものを、高貴の方にも慰みとし給ふもありといふ。是を聞いて慰みにし給ふだにあるに、後に自ら其藝を習ひ、はては芝居物眞似などいふ賤しき者の業をなし給ふもありと聞ゆ。貴き御身にて勿體なく歎はしき風俗なり。」

俳優が俳優としての技藝を離れて戯れる茶番狂言から出でゝ、素人が無理にも黒人めかさうとする素人狂言は、明和の頃から流行しはじめて、所謂田沼時代の天明の頃はその極に達した。この作はその世相を穿つにあつて、その意自ら樂翁の慷慨と反する。芝居好でありながらなほ野暮から脫し得ぬをかしさを嘲弄する。元祿期に於ては大名の吉原通ひも稀でなかつた、天明にはもう聞かざる事である。作者は大名を吉原に拉れて行かずに、遊女を屋敷に推參させる。かういふ事もあるべき筈はない。作者はそこに滑稽を企んだ。作者は何故松葉屋を選んだであらうか。其處は素人芝居の流行つたところといはれる。そこに穿ちの一つをおいたのであらう。此書は杜芳の芝居好である事と合せ考へ、またその弟子櫻川慈悲成に幾多の素人芝居關係の著述のある事とを考へると、おのづから領かるゝ節がある。此の項中に挿入した肖像は慈悲成が三馬の需によつて描いたものである。

大悲千祿本　御手料理御知而已　一冊

芝全交の作、北尾政演の畫であつて天明五年蔦屋の開板である。全交は山本藤十郎といふ大藏流の狂言師、西の久保神谷町に住居するので芝と名乘る。この人に對しては馬琴も和漢共に學問はなけれども滑稽の上手にて當り作多しと評した。「鼻下長物語」「白髭大明神御渡申」「十四傾城腹之內」「大違寶船」などがある。また自傳めかしたものに「芝全交智惠程」「全交法師常々草」がある。畫工政演は山東京傳の畫名である。「大悲千祿本」の構想は謠曲「田村」に基く。それは淸水千手の觀音の靈驗によつて田村麿が鈴鹿山の鬼神を退治した事が書かれてある。中にも千の矢先の辭は人口に膾炙して、時には五百嘘などゝ川柳に揶揄せられる。しかし全交はこれを正面から受けて、滑稽を縱橫にする。卽ちこれは田村麿鬼神退治發端說といふよりは、手に關するいろ〳〵を巧みに案配したもの、御手料理とは自名自註であらう。此書全體でわづか五枚の中に手といふ言葉によつて聯想せられる程のものを盡して、時に巧みに猥意を匂はせ、時に巷說をとり入れたなど凡手では出來かぬる事であらう。その巷說を利するとは、俠客として知られた神田の與吉、「神田與吉一代記」に書かれた者の女房の噂をもとり逃さぬ事である。また同じ條の淺間山から降つた云々とは、此書發行の前々年七月の淺間山噴火の折、江戶に砂が降り、また毛のやうな物の降つた事を意味する。その當時の落書に「砂毛歌」といふがある。

「天明三卯年七月六日頃より信州淺間山燒候由、六日暮時比より、八日迄、震動、並灰降る、毛降る。
砂や降神代も聞かぬ田沼川米くれなゐに水のもふとは。

浅間しや富士より高き米相場火の降る江戸に砂の降るとは。」

本書は大當りにて板が磨滅したゝめに後には手に入れ難く、黄表紙好として知られた下谷上野町京紺屋の主人はこの一冊に一分を投じた事が「忘れ殘り」に見える。また幸堂得知は「大通世界」に嘉永の頃或藏書家が關宿商人何某が秘藏する事を聞出し、態々出向いて讓り受けようとしたが、先方も惜しんで金錢に換へ難しと謝絶するので、色々交渉の結果煙草の緒〆玉と交換した事をしるして居る。或は同じ人の同じ出來事が二様に語られたのでなからうか。

江戸生艶氣樺燒　三冊

山東京傳の畫作、天明五年蔦屋板。京傳は岩瀨傳藏、その京傳の號は銀座に住ひするとて京橋の傳藏の義をとつたのである。はじめ畫を北尾重政に學んで葎齋政演と號した。安永頃は他人の著書に挿繪を描いて居たが、天明に入つて自畫作を出した。

天明二年の「御存商賣物」が蜀山人に認められてから作名大いに聞えた。しかし、まだ他人の作の挿繪を描いてゐたが、寛政に入ると專ら述作に當り、自畫の暇もなく、挿繪をば歌麿、淸長、豐國等に囑することも多くなつた。實に黄表紙界の巨擘であつて、また洒落本の重鎭である。

その洒落本のために處刑せらるゝや、力を讀本に割くの外、すべてを黄表紙に畫した。その當り作といふだけでも列擧する煩に堪へない。中にも「艶氣樺燒」は最も知られて居る。

この書は、醜貌ながら自惚心強き男の金に飽かして浮名を購はうと苦心するが、事毎に失敗してゆく痴態

を語る。
その失敗の一つ〳〵を逆に見てゆけば、自ら當時の色男の資格のいかなるものであるかを知ることが出來よう。その主人公艶二郎には粉本が存するといはれる。その一つは高田與淸の「松屋筆記」に見える。「岸本田豆流は金座の手代の孫なり。その祖父引負して金座を逐はれ、遂に町人となる。その子は草雙紙の圓次郎が事なり。」圓次郎は艶二郎の誤記であるが。艶二郎は朝田榮次郎に當り、遊女浮名は瀨川に當るわけである。榮二郎は賣名のために讀めもせぬ群書を買集めた※といふ。して見れば、めりやすのくだりの挿繪の艶二郎の背後の本箱の源氏伊勢の叢書は、それを暗示することであらう。

艶二郎粉本說はまた「山東京傳一代記」にも見える。それには太申の事蹟を書いたとある。太申とは三十間堀の富豪和泉屋甚助、賣名のために手段を擇ばなかつた者である。果してそれだとすれば、遊女は豐里に當る譯である。しかし前說に從ふべき節々を書中に見る。


初代豐國の描ける京傳の像

とにかくに賣名の自惚男何某は京傳の筆によつて廣く世に紹介せられた。艶二郎の名は遊里においては自

惚の異名となり、醜男の象徴である艶二郎の牡丹鼻は京傳鼻と呼ばれるやうになつた。

この書の大いにもて囃されたのは、狂言心中の愚さ、また「道行興鮫肌」の文句のをかしさもさることであるが、吉原の穿ちを巧みに書込む點にもあらう。その一例は茶屋の女房の詞「木挽町で高麗屋が墨河さんをするさうで御座いますね。」に見られる。墨河とは吉原江戸町扇屋の亭主であるが、嘗て素人芝居で曾我の工藤を演じたことがある。「通言總籬」に「墨河さんが工藤で、玉屋の山三さんが五郎で大門の四郎兵衛さんが祐成でをかしい事が御座りやしたつけ。」と見える。こゝに高麗屋の四代目松本幸四郎は天明四年正月は市村座で工藤を演じて居る。即※



※ち女房のいふ墨河さんとは工藤を意味する楽屋落である。

またそこにある「歌姫」とは松葉屋の女郎で、京傳の馴染である。この種の楽屋落も隨所に見られる。

これはまた京傳の自書だけに挿圖の上にもいろ／＼の工夫がある。その一例は妾抱への圖中の「小便無用」とある柱の聯である。それが「小便組などゝいふところは御免だよ」といふ詞書と相俟つて興を惹く。「小便組」といひ「小便無用」といふのは、妾がわざと寝小便をして仕立金をたゞ取りにする當時流行の奸策をさしていふのであつた。

「艶氣樺焼」の世評に氣をよくして京傳はその續編を草した。洒落本の「通言總籬」と黄表紙の「碑文谷利生四竹節」がそれである。「四竹節」は艶二郎の子艶太郎の醜男が、一時碑文谷の仁王尊の靈驗によつて美男となつたことを書く。黄表紙作者が世の流行を題材とする事は、神佛の流行にまで及ぶ。天明七八年からの流行佛となつた碑文谷の仁王は、京傳をして此の作をなさせ、全交をして「拜壽仁王参」を作らせた。同年の三河島不動の流行は、また京傳をして「三河島御不動記」を作らせた。



艶二郎の趣向はまた時鳥館主人をして「呼繼金成植」を草せしめた。これは主人公金鶏が艶二郎を眞似て、例の狂言心中をもなして、また新なる失敗を重ねる。この駿河安倍川の川原の道行の綺姿と、あの向島堤の綺姿の類似を比較するを要する。また一九に「唐人寝言」がある。これも二代目艶二郎と冠らして居る。

莫切自根金生木　三冊

順廻能名代家

唐來三和の作、千代女の畫、天明五年、蔦屋開板。

三和は加藤氏、通稱を和泉屋源藏といふ。もと士籍に列して居たが、故あつて町人となり、本所松井町なる私窩子茶屋和泉屋の婿養子となつて家業を嗣いだ。「言行共に老實の好人なるに、さる渡世をするは過世あやしむべしといふ人多かり」と「作者部類」に見える。

また「能文にはなけれども、趣向は上手で、折に當り作もありき」と同書に見える。

黄表紙には本書の外、「天下一面鏡梅鉢」が大に行はれ、酒落本には「和唐珍解」「通神孔釋三敎色」が聞えて居る。



呼繼金成植

畫工千代女は歌麿の門下、それが挿繪を描ける黄表紙も數種ほどある。

この作の趣向は黄表紙類想の一つともいはうか。黄表紙には金欲しやに堪へずして「無間鐘」を撞く趣向は隨所に見えるが、それと反對に金の置場に困却するやうな筋もくりかへされる。

これは黄表紙の出板が正月であることにも關係があらう。春のもの、正月の物と祝儀の意を籠めるためである。それはまた赤本以來のことである、たとへば赤本に鼠の嫁入が屢々用ゐられたのも、子孫繁昌を祝ふためであつた。

その類作の多い中にも、さすがに本書は傑出して居る。また外題の回文であることが世評に上つた。「きるなのねからかねのなるき」と上から讀んでも下から讀んでも同じことなのが、盡きせぬ金のめぐりを示す。故に順廻能名代家とも冠したのである。

この作は春町の「榮花夢」にも基いて居るが、主として同じ作者の「金銀先生再寢夢」から脱化して居る。「再寢夢」は、金銀先生が南鐐に唆されて小判を海へ棄てゝしまひ、はじめこそ貧を樂しんだものの、後には貧に苦しむ夢物語である、これには多少寓意があるが、三和はその貧の苦しみを富の苦しみに更へたのである。

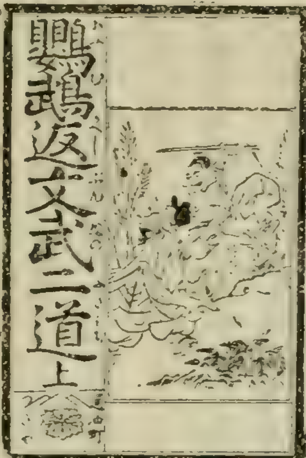


金々先生

文武二道萬石通　三冊

喜三二の作、歌麿門人喜多川行麿の畫、天明八年蔦屋の板。

天明四年三月、田沼意次が殿中において、佐野善左衞門に斬られてから、さしもの田沼の權勢が搖き出す、落首の類が頻りに行はれた、黃表紙も亦それに取材する。六年いよ／＼田沼の沒落となり、七年白河樂翁の改革が端を發してから、落首更に加はり、それに關する黃表紙がひと盛を見せる。黃表紙の時政諷刺めくものの出でたのはは、この時に極まる。それが中にも三和の「天下一面鏡梅鉢」と、喜三二のこれが最も流行したといふ。「江戸作者部類」に「文武二道萬石通古今未曾有の大流行にて早春より袋入にして市中を賣あるきたり、赤本の作ありてより以來かばかり行はれしものは前代未聞の事なりといふ」とある。



萬石通は米と糠とを分ける道具、作者はそれを假りて、文と武に士を分けるのは、いふ迄もなく樂翁の文武獎勵を諷した事になる。賴朝の言葉「先に重忠に計らせ、文武の性をふるひわけ、ぬらくらの面々は七湯にて晒し、大



再寝夢

咲にて身上をふるはせ、文武二道に導かしむ」は、その作意の底を割つたことである。

しかし作者は、その全體の行方もさることながら、寧ろ遊蕩のすべてを文と武とに分類する牽強附會を得意としたことであらう。この作の行はれた爲に、官憲から要せられて戯作の筆を絶つに至つた。春町がその趣向に倣つた「鸚鵡返文武二道」も亦流行したことは「作者部類」に「これも亦大半紙摺りの袋入にして、二三月頃まで市中を賣あるきたり、流行此前後二篇に勝るものなし。當時世の風聞に右の草紙の事に就て白川侯へ召されしに、春町病臥にて辭して參らず、此年寛政元年巳酉七月七日歿」とある。或は自殺したとも傳へられる。



土隣



夫從



青砥銭



以來記

孔子縞于時藍染　三冊

京傳の自畫作、寛政元年大和田の開板。

これも所謂寛政の改革を諷したものであるが、喜三二、春町の二者が武士の方面をうつしたのと異つて、これは町人の生活に終始する。

蜀山人の寛政改革の諷刺詠と稱せられる狂歌に、「孫の手のかいゝ所へ屆き過き足の裏までかき探すなり」一といふがある。蜀山人自らは僞作なりと辯じて居るが、寛政の改革をば隨分好感を以て迎へながら、一面に

於て、この狂歌と考へ方同じくする者も多かつたらう。さらでも物を誇張して、そこから滑稽を産み出さうとする黄表紙作者にあつては、あの改革は好個の題材であつた。「楠無益委記」「長生見度記」「夫從以來記」の所謂三未來記には、時相の誇張と共に反對の場合を書示すことによつて滑稽を產ませたが、これは手の屆き過ぎを趣向の旨とするだけに、すべてが誇張の上に立つ。そこに他の物との相違を見る。しかし京傳の趣向が三未來記に負ふところの多いのは一々指摘することが出來る。今「夫從以來記」中の一葉を拔いて本書の中のものと對比の資とする。

題名は文武の奬勵から朱子學の勃興となり漢籍講讀の流行となつた事にあて込めたのである。書中頻りに



天道



人間一生



大福帳



胸算用

經子の語句の引用せられるのはそれが僞である。

京傳の寛政改革に取材したものに「玉磨青砥錢」がある。樂翁を青砥藤綱に擬して、その政道によつて世の中皆眞面目になりゆくことを例の誇張して述べたものである。たとへば役者も舞臺を捨てゝ百姓となつて田を耕す、さすがに女形は鋤鍬も持てないので、芝居がゝりで田植をするなどのをかしさを傳へる。なほこの後編として、京傳は翌二年に「藍返行義霰」を出した。また竹塚東子に三編として「磨光世中魂」がある。これも同年の作である。

大極上請合賣　心學早染草　三冊

京傳の作、政美の畫、寛政二年、大和田の板。

この書大に流行し、その作風世に弘まつて、黄表紙は「榮花夢」出でゝ洒落となるに對し、「早染草」出でて眞面目となるといはれる。京傳の黄表紙の作風一轉の因をなすだけでなく、黄表紙全體の傾向を一轉させたものとして知られて居る。

一編の趣向は、人には善魂惡魂があつて、善惡の所業をさせる、しかも人が本心にある間は善魂よく惡魂



鬼　殺



四　通　摺



心角樽



心學草紙

を制するも、本心を失へば善魂は惡魂に壓せられる、故に人たる者は常に心を正しうして惡魂に乘ぜられぬやうにせよとの理を善玉惡玉の繪姿の面白さと伴つて書いた。據るところは勿論當時流行の心學である。主人理太郎の名、すでにこれを示す。また道理先生は心學の大家中澤道二を示して居る。

「早染草」はその筋合もさることながら、殊に善玉惡玉の繪工夫が喝采を博した。その工夫は喜三二の天明六年の「天道大福帳」から出て居る。喜三二は天道が善人に福を與へ、惡人に禍を與へるのが商賣であるとする。人、善をなせばその氣天に昇つて金銀を凝り成し、惡をなせば燒味噌となつて金銀の氣を減らす故に勸善懲惡は結局人のためにあらで、天の利益のためであるとする。今、赤穗の浪士の義擧があるのでその氣

天に昇つて天をしていろは藏を造らせ、これを假名手本忠臣藏と名づけるとの趣向を立てた。そして「忠臣藏」の事件は皆天道樣が天人に指圖させてする事になつて居る。

政美がそれに描く時、天道樣を日輪とし、丸をもつてそれを現はし、これに淨衣を着せた、また天人には熊手を持たせて雲間から人間の所業を助けさせた。たとへば九段目には天道樣は天人に命じてお石がふりかざす刀を抑へさせる。天道樣の言葉の書入に、

「お石が御無用といふ迄は必ず放すな。後に本藏が槍で突かれる時は止めずと突かせろ、あれは死ぬ覺悟で來たし、由良之助も大概推量して居る事だぞ。」

とある。京傳はその天道樣から淨衣を剝いで、裸とし、それに天人の役廻りをさせ、それをまた善惡の二つに分けたのである。

この繪の面白さと話の筋合が無上の評判を得た爲に京傳はひき續いて翌三年に「人間一生胸算用」、五年に「堪忍袋緒〆善玉」を出した。「胸算用」は善惡を心と氣とにいひ代へ、「緒〆善玉」はもとの善玉惡玉の名にかへして居る。

京傳は同じ趣向を更に持ち越して善惡を鬼と佛にしたのが、五年の「四人詰南片傀儡」、酒と餅とにしたのが「鬼殺心角樽」である。

また善玉惡玉の趣向をうけ繼いで、これを善人惡人とし、しかも一體分身としたものに「扮接銀煙管」「兩頭筆善惡日記」がある。

馬琴また京傳の善玉惡玉物の第四編として八年に「四遍摺心學草紙」を著した。これは玉の數を多くして

あつて首、金、替、涙、生根、善、悪、慾、膽、色、屁、手、珠また青、凶などゝいふ、例の馬琴の僻であらう。その序の一節にいふ、「昔時朋友山東何某、善悪一雙の玉を磨いて世に輝くこと已に三遍に竪べり。這頃耕書堂主人余にその四遍を需む。あゝ我川童子の屁玉を以てなんぞ卞和子の眼玉を欺ん云々。」

即席耳學問　三冊

市場通笑の作、北尾重政の畫、寛政二年、蔦屋の板。

通笑、名は寧一、俗稱は小平二である。「作者部類」によれば岡附鹽町に住した表具師と見える、また「戯作者小傳」に「通油町に住居し一生を無妻にして市中の仙たり」と見える。

安永八年の「虚言彌二郎傾城誠」を初作として引續いて寛政頃まで戯作を續けた。馬琴は「滑稽の才なしと雖も、いと古き作者なれば世の人に知られたり」と評する。けだし適評であらう。

その作では「御物好茶臼藝」「一升酒底拔男」などが聞えて居る。

通笑の作は常に教訓を趣旨とする。されば早く「洒落の喜三二」といふに對して「教訓の通笑」の稱がある。

重政も古き畫家である。書肆須原屋の子、獨學にて繪を好くし、文政二年八十二歳の高齢まで筆を絶さず、また人物の謹直を以て知られてゐる。畫名を政演といふ京傳はその弟子である。

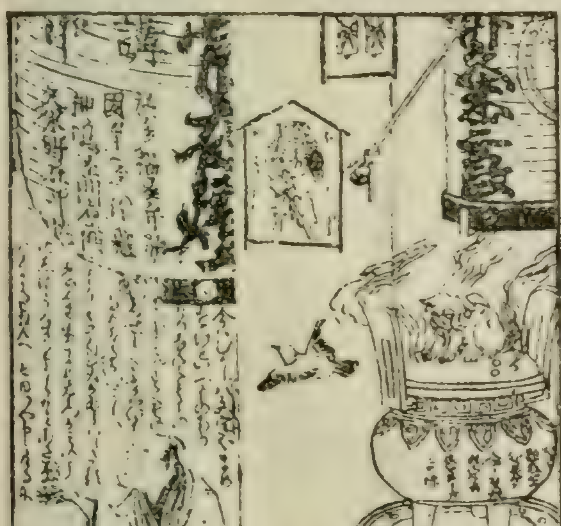
「即席耳學問」は、性格をも年齢をも同じうする作者と畫工と相俟つて、この謹直の書を成したといへる。通笑が教訓を專らにする事の不評判は、彼自らも知つて、天明三年には「教訓不仕候」と題したものを作つたこともあつたが、今年寛政二年、五十二歳の通笑は、この書の序において意のある所を明にした。即ち「意

地にかゝつてしやつき張り、いつもの僻の十割まし」といひ、「御祖父さん御婆さん御土産に持よい、さし合禁物のないところを尻持とす」といふ。

この作は心學に基いてゐる、話手の老人の名をも心學を倒に「學心」といはせて居るほどである。心學は宋儒の説を中心に神、佛、老の説をも交へて極めて通俗的に處世修養の道を語る。京の梅田石巖にはじまつたが、その後を繼ぐ中澤道二が江戸に下つて講説するに及び江戸にも大に行はれた。さうでなくても教訓通笑ともいはれた作者は、直にこれを利用したのである。

もしこの作を「早染草」と比較すれば、同じ心學物でありながら、いかに京傳の底意と異なるかを知ることが出來る。更にこれを浮世草紙「浮世榮花一代男」と比較すればどうであらう、同じく隱れ笠の趣向でありながら、一は畜類の心をも憐む殊勝心を産み、一は閨房の秘をあなぐる蕩兒の滿足となる。

またこれを京傳の「唯心鬼打豆」と比較したらどうであらう。これは後に「七色合點豆」と改題し、「榮花二代目」と冠書する、隱笠の趣向を豆男に代へた八文字屋本のあとを襲うたものである。京傳は間接に「浮世榮花一代男」から、直接に喜三二の「女嫌變豆男」からこの趣向を得た。淺草の觀音から授けられた豆



唯心

によつて、おのが魂を他の人や鳥獸の魂ととりかへる事が出來てさまぐ〵の惡戯をなすことを敍する。即ち「耳學問」の殊勝なるとは大なる相違がある。音の抽象に拠るを避けて例を「唯心鬼打豆」からとらう。淺草觀世音から魂を自在に變替する豆を得た豆助は、吉原の遊女屋の前に立つ。そこの美しい遊女にひかれて、その女が飼つて居る狆と魂を入れかへる。もとは藝なしの狆であつたが、豆助が勝手な藝盡しをするので江戸一番の評判を得る。遊女の馴染客がそれを五十兩で買ひとる約束をする、そして其の金を狆の首に掛けて重くて苦しむのを見て興がつて居る。豆助は其の金が欲しくなり急に飛び出して田甫にゆき深田の中へ飛び込む、魂をわが體に戻して狆の死骸を引き出して五十兩をせしめる。

豆助の惡戯はこれだけで濟まぬ。彼は今度は賣卜者の姿をして、さきの遊女屋の前に立つ。例の遊女が身の上を見て貰ふと、狆で居た時の見聞を種にして、見通しと驚かせ、すこしの中に多くの見料を懐にする。

豆助は魂を他にかへる間は時によい目にあふが、他の魂を自分の體に置く場合にはいつも失策をする。そのをかしさを主としたのが弘化二年の一筆庵主人「魂膽夢輔譚」である。

「即席耳學問」はかゝる比較の上に於て、一層通笑その人の特長を明瞭にする事が出來よう。



鬼打豆

盧生夢魂其前日　三冊

京傳の作、寛政三年蔦屋の板。畫工の名なけれど、重政といはれる。

春町の「榮花夢」と喜三二の「見德一炊夢」との趣向を合はせて、それに新樣を寄せたもの。故に京傳は古きを温ねて、新しく書きかゆるが、卽ち趣向の新しきといふものと序にいうて居る。この言葉はまた一黄表紙全體の趣向にも及ぼして然るべきであらうが、兎に角に京傳はわざと據るところを示して奪胎のあとを語らうとする。「榮花夢」はいはずもがなであらう。「一炊夢」は邯鄲の枕を貸して榮華の夢を商ふ新店がある事に話がはじまる。その代金によつて夢の面白さ長さに差がある。ある若黨は三十二文を出して一時の夢を見る。晩の七つの鐘を聞きながら、永久橋あたりで舟饅頭を見て、舟に飛び乘る調子に水に落ちたと見て目が覺める。またある侍は四文錢一本をはづんだので、きんとした女郎を相方に坐敷も一杯に樂しむ夢を見る。さういふ中に蘆の屋息子淸太郎は千兩にて五十年の榮華の夢を見ようとする。

まづ旅に出かける。江の島、鎌倉、それから京に上る。二十一から二十五歳までは京都に住んで近畿めぐり、その間に江戸の三座の役者を呼び寄せて曾我の狂言を見る事もある。三十一歳に長崎へ行つて丸山の遊びをする。三十七八歳に唐土へ渡る。四十歳で江戸へ下り、吉原、品川、深川、新宿に金をつかふ。また俳諧に耽つて號を蘆生とつける。五十餘になつて道成寺の所作事、六十になると能を習つて、「邯鄲」を演ずる。七十近くなつて茶の湯に凝り、愈々七十になると我家なつかしく、もとの住居を訪ねる。もとより父の淸右衛門はとうに亡き人であり、手代が百萬兩の身代を繼いで居る。今日しも家出を命日にした淸太郎五十

年の法事をして居る矢先に、清太郎は歸つて來た。そして手代から身代を受取つたが、今までの惣勘定で無一物となり、剃髮して諸國修業に出ようとする。百萬兩持つて居る人も、百萬兩つかひ棄てた人も、共に生れし時は丸裸、あら面白や南無阿彌陀佛といふ悟である。

「一炊夢」の夢商ひを更に進めて夢作りにしたのが「其前日」である。「榮花夢」を謠曲の「邯鄲」にかへして、金々先生ならぬ盧生のもとに復したのである。ここにも京傳の古きを溫ぬる工夫がある。しかも京傳は、はじめに盧生を出し、それをして「榮花夢」「一炊夢」を羨ませる、これまでのを逆に見るところに新工夫があらう。

今更に「枕中記」に於ける盧生の夢の本來の姿を知らうと欲する。唐の開元十九年、盧生が邯鄲途上の客舍で呂翁といふ道士に邂逅する。いろいろと話をして居るうちに睡氣を催すと、呂翁が枕を貸して吳れた。その時客舍の主は、黃粱を炊きはじめた。

盧生は夢に枕の中の世界の人となる。試驗には及第する、官吏にはなる、一時は國政の大權をも握つたが、冤罪によつて處刑せられようとし、漸く冤が雪がれてまた宰相となる。五人の子も立身する、孫は十人の上を越した。段々と老衰したので致仕を願ふと、上命あつて慰留される。さて死に臨んで今しも息が絕えようとする時、夢が覺める。この時客舍の主が炊いて居た黃粱はまだ熟さなかつた。盧生ははじめて人生の榮華の意義なき事を知つた。

これが「一炊夢」では誂へた蕎麥がまだ來ない中の清太郎の榮華の夢とする。故に題名の上に「榮花程五十年蕎麥價五十錢」と冠書する。

夢を古しといふのは、「榮花夢」以來屢々くりかへされた爲である。黃表紙の趣向はもと見る人の意表に

出づるを主とする。故に夢が頻りに利用せられた。けだし、黄表紙はその時代の風として奇抜の想と共に思ひ切つた寫實を要求せられる。京傳は此間に夢の趣向を出す故に古い新いの辯をなさゞるを得なかつたのであらう。しかも夢の成立を說き、夢の組立を說いたものはこれまでに見なかつた。

馬鹿長命子氣物語　二冊

櫻川慈悲成の作、歌川豐國の畫、寛政三年伊勢屋の板、

慈悲成ははじめ「親の慈悲成」といひ、後に櫻川と名乘る。暫亭はまた芝樂亭と號す。岸田杜芳の門に入つたが、其年、師の死に會した。鞘師とも餝屋とも陶器屋とも傳へられる。馬琴は評していふ。慈悲成は古き草雙紙の作者なれど當り作なし、文化に至つて落語を專門にしてまた草雙紙を作らず、落語は草雙紙の手際に似ないで上手で可樂、夢羅久、焉馬と頡頏したと。さまでの傑作はないのは事實であるがまた知名の士であつた。豐國は美人繪役者繪を以て知られて居るが、また黄表紙の挿繪を描くことも多かつた。「馬鹿長命子氣物語」の題名は後生樂故に長命する男の子供らしい物語といはせながら「長明四季物語」



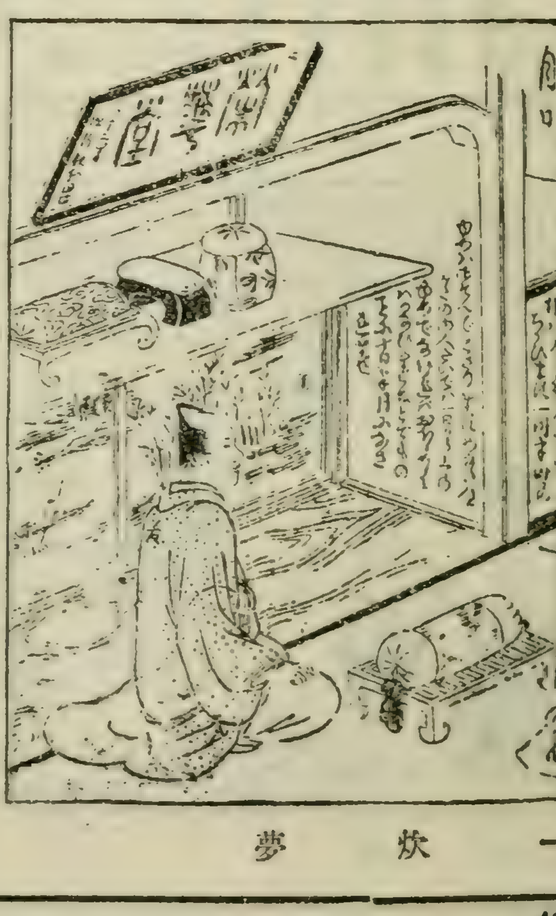
見　德

と附會して「馬鹿」を上に置いたのである。

「四季物語」は長明の著といふもの丶實は僞書であることは明であるが、それはこの作者の關せざるところである。作者は「四季物語」が四季に分ち、十二月に分つて、年中行事を說き、その出來を語ることに倣ひ、年中行事をば滑稽に解釋すればよいのである。卽ち牽强附會を恣しうして、笑ひを招けばよいのである。この種のものは黃表紙の通性であるが、こ丶に稍注意を要するは、これが「四季物語」の形骸を假りるだけに努めて古典めかさうとする事である。

おもふに寬政頃は國學が隆盛を極め、語義語原の研究が頻りに行はれた。慈悲成はその傾向を追うて、この滑稽を弄するのであつたらう。しかも彼が後に落語に名をなし得るやうに、この種の手法には長じて居たことであらう。

三月の條、彌生を矢野の山川に醉る故に矢醉(やよひ)の節句と解して、「俗說に」と斷り、なほ「いかにも古事つけな事と聞えます」と加へて、他の附會を眞面目らしく裝はうとする。また正月の條に正月の譯名を親玉へ付云々はすべて役者の紋所についていふのであるから、「はくせつ」といふのは幕の內の意を以て幕說ときかせてしかつめらしく裝ふのでなからうか。彼が當り作の乏しい中に、この書の推さる丶もかういふ點にある



一　炊　夢

であらう。

世上洒落見繪圖　　三冊

京傳の畫作、寛政三年、蔦屋の板。卷尾に菊亭主人書とある。菊亭主人とは京傳の別號である。何故に亭に命ずるに菊を以てしたかといふに、この書出板の前年二年二月、吉原扇屋の遊女菊園が年滿ちて京傳の妻となつた爲である。本書の第二葉の菊亭の額に注意すべきであらう。五年出板の「堪忍袋緒〆善玉」には菊軒の額を揭げたのがある。菊亭、一に菊軒とも稱したためである。

圖中、机に倚れるは京傳、坐客は書肆蔦屋主人重三郎、茶を薦めて居るのはもとの菊園、今のおきくである。裾模樣の菊花は、それと知らせるためである。

題名の「洒落見」は勿論「細見」のもぢりである。京傳は當時の洒落、また通の行過ぎを更に誇張して笑に資さうとする。この種の趣向はすでに三未來記に存する。京傳もとより、これを摸倣する。京傳みづからにしても、天明七年には傑作「三筋緯客氣植田」がある。幼兒を吉原に連れ行きて、自らはその幇間となつて悦ぶ樣な通人の行過ぎを叙したものである。



堪　忍

京傳は今それらの趣向を題名いふところの洒落に籠める。即ち洒落を「しやれかうべ」のしやれと解して、あらゆる通人がしやれて石のやうになり、結局彌勒菩薩の洒落のなき世となるといふにおちをとる。書中また天道様の案内がある。これは前年の作、「京傳浮世酔醒」の趣向をとり入れたものである。その厄介仙人を天道様にしたのであつた。

昔々桃太郎發端話說　三冊

京傳の作、勝春朗の畫、寛政四年蔦屋の板。

春朗とは後の葛飾北斎である。春朗は勝川春章の門に居た時の名である。また黄表紙の作がある。時太郎可候、是和斎などの作名を附して居る。

桃太郎は赤本以來黄表紙となつても屢々繰りかへされる。その趣向の多くは桃太郎をして、いかにもして當世化さうとするにある。

「發端說話」は題名がすでに示すが如く、桃太郎未生以前のことを語る。しかも意外にも舌切雀を骨子とすることが作者の得意であつたらう。作者はまた赤本古風の昔をしのばせようとして、書込の言葉の中につとめて赤本時代の口調を現はさうとする。たとへば「てんこちも無いよい天氣」「てんやわやのあく」「何とす



袋

さまじからうがや天井を見たか―「牛の角の切口太いが根付と來たわ」などを數へる事が出來る。

作者またその古さを古典の上に結びつける、序文の「古今集」の序によるもそれであらう。更に童話の原流に溯らうとする、これ亦當時流行の考證僻を現はした作者の好みであらう。舌切雀の原據を示すために「宇治拾遺」を引くが如きがそれである。また賓方雀を趣向とする。このことは早く「十訓抄」に見える。

「賓方藏人頭になられてやみにけるを恨みにて執とまりて雀になりて殿上の小臺盤に居て臺盤を食ひけるよし、人いひけり」

但、作者はこれを引用しなかつた。

十四傾城腹之內　三冊

全交の作、重政の畫、寛政五年鶴屋の板。

この作の趣向はいふところの經絡を傾城に附會することである。十四傾城の十四には別に意味がない、たゞ十四經絡をそのまゝに襲ふに過ぎない。

十四經絡とは漢方醫の人身解剖圖によつて明にされる。滑壽の「十四經絡發揮」において見ることが出來る。全交はこれを「發揮」そのものに據らずして、岡本一抱の「十四經絡和語抄」から取つたと思はれる。



十四經

經絡とはいはゞ身うちの筋である。手に三陰經三陽經足に三陰經三陽經がある、すべて十二種、それに任脈、督脈を合はせて十四經となる。それらの經は心、脾、胃、肺、肝、膽、腎、膀胱、大腸、小腸等と起止を保つ。作者はかういふ身内の機關の活動をうつして滑稽を弄する。醫方の眞面目なものをはじめから諧謔の材とすることがこの作の出發點であらう。十四經筋圖の「仰人尺寸之圖」「伏人尺寸之圖」が「眞向成噓言吐圖」となり、「後向尻掬者謨圖」となる。これが黃表紙の作者の常法であるにしろ、全交はその材料を意外のものから得たことが味噌であらう。當時大に喝采を得、また三馬から名作二十三部の中に數へられた。



絡　圖

一九は寛政十一年に「腹内養生主論」を作つた。二者を比較すれば、おのづから作者の相違を明にするであらう。

一九は全體の構想を「腹之內」に據つた。たゞし、これは傾城を避けて養生訓とする、故にまづ夢に貝原益軒が現はれて身内の活動を示すことにする。そして口があまりに働きすぎるので脾胃の苦しみ、腎の惱みを來すことをいひ、中に元氣と精氣との色事を交へる。しかも所々に醫書を引く。すべてに亘つて全交の放膽とひとしなみに見ることが出來ない。

「腹之内」のはじめに傾城の心の内を示すのに心の臓から・いろ／＼の相の展開せられる圖がある。思ひつきとして面白いものであらう。卽ち三馬は文化八年の「腹之内戯作種本」には、これをそのまゝに摸して、戯作者の腹のいろ／＼の考を示した。心の臓の形の中にある心の臓の字を消して式亭の印を捺したのがまた一興であらう。この書の初名は「式亭三馬腹之内」であつた。

榮花夢後日話 金々先生造化夢　三冊

京傳の作、重政の畫、寛政六年蔦屋の板。

京傳はさきに「廬生夢魂其前日」を作つて、「榮花夢」の後を承けた。今また「榮花夢後日話」と銘うつて再金々先生を生かさうとする。この場合前作と全然異つた工夫を用



腹之内戯

ゐるが眼目であらう。

邯鄲夢の本來は敎訓である。春町はそれを假りてあらぬ方に用ゐた。京傳は春町と異つた方向をとつて敎訓にかへす、しかも呂翁の敎訓と同じでない。京傳は夢から覺めた金々先生を悟りすました者とする。人間の萬事を疎んずる者とする。その行過ぎを世間にかへして再び人間の意義を解させようとする。しかし、斯樣な論は京傳の深く問題とする所でなかつた。恐らくさういふ事をば世の心學者に委ねてのける事であらうが、こゝに京傳は心學めく敎訓を說くやうな顏をして、實は日常の生活に細い穿ちを與へる。一椀の米、それに手數がかゝる事は心學者もいはうが、斯らいふ隅の隅までの穿ちは遂に考へ得なからう。



作種本草稿

この書が當り作として世間に沙汰せられたのはそれの爲であらう。但仙界には茶を煮る水もないので金々

先生の爲に新に井戸を堀るといふ以前に、丁稚の仙人がお茶を汲んで出すの失策もあるが、これも穿ちの細さに追はれた爲であらう。また一寸した事ではあるが、米の成立なども米のなる木を知らぬ江戸の黄表紙讀者には珍しかつたらう。まして雨を降らせ、風を吹かせ、雷電を働かせる工夫また畵組みは作者京傳の政演がさきに杜芳の「草雙紙年代記」のために描いたのと同じものである。蓋、作者が得意を以て下繪をものして重政に附した事であつたらう。

忠臣藏前世幕無（ちうしんくらぜんせのまくなし）　三冊



親鍵



草雙紙



膀膏藥



年代記

京傳の作、重政の畫、寛政六年の板。忠臣藏は黄表紙中にも曾我狂言と共に異作が極めて多い。人口に膾炙し、世間に熟知せられた事件は、それを種々に轉成するところに黄表紙作者の手腕を揮ふ事が出來る。忠臣藏に異作の多きも當然であらう。忠臣藏を巧みに黄表紙の題材としたのは喜三二である。その「案内手本通人藏」は所謂忠臣藏の範を示したものといはれる。その後の幾十部中に於て京傳の此の作は同年の「忠臣藏卽席料理」と共に傑作と稱せられる。「卽席料理」のをかしさはすべてを料理に附會する事である。卽ち定九郎の死を鰒の中毒とする。といふ意は鰒はよく當るとて鐵砲の異名を負うて居る爲である。

「前世幕無」とは三世の因果は現世過去未來連絡してその間にたゆる事なしとて、延つゞけの狂言に見なし

この事であるが、因縁話だけに牽強附會は「即席料理」より自由である。奇想往々失笑せしむるものがある。しかし、定九郎の鐵砲の死を鰒に結びつける事は「即席料理」と同樣であるが、さすがにその傘を猪の包紙に見立て、なほこの傘も前生故新しと言葉をつけ添へ、また九郎助稲荷を背景にする程のをかしさがある。この因果譚は「天道大福帳」に於ける忠臣藏の事件が、一々天道樣の意圖に出づる趣向なのを延長して、こゝまで到達させたのであらう。即ち京傳の前年の作、「四人詰南片傀儡」はその中間に位置する事が知られる。これはすべての善悪禍福が鬼と佛との人形遣の遣ふ傀儡の因果の絲によつて決するといふ趣向で「南片傀儡」とは南京あやつりのもぢりである。もし三馬の文化二年の作「親讐胯膏藥」を以てこれ等と對照すれば、自ら趣向のうつりゆく樣を明にする事が出來る。これは「大福帳」「前世幕無」其他を摸倣するものであるが、忠臣藏の世界を鏡山に變更し、上中二巻を復讐の前生とし、下巻を鏡山の現在とす

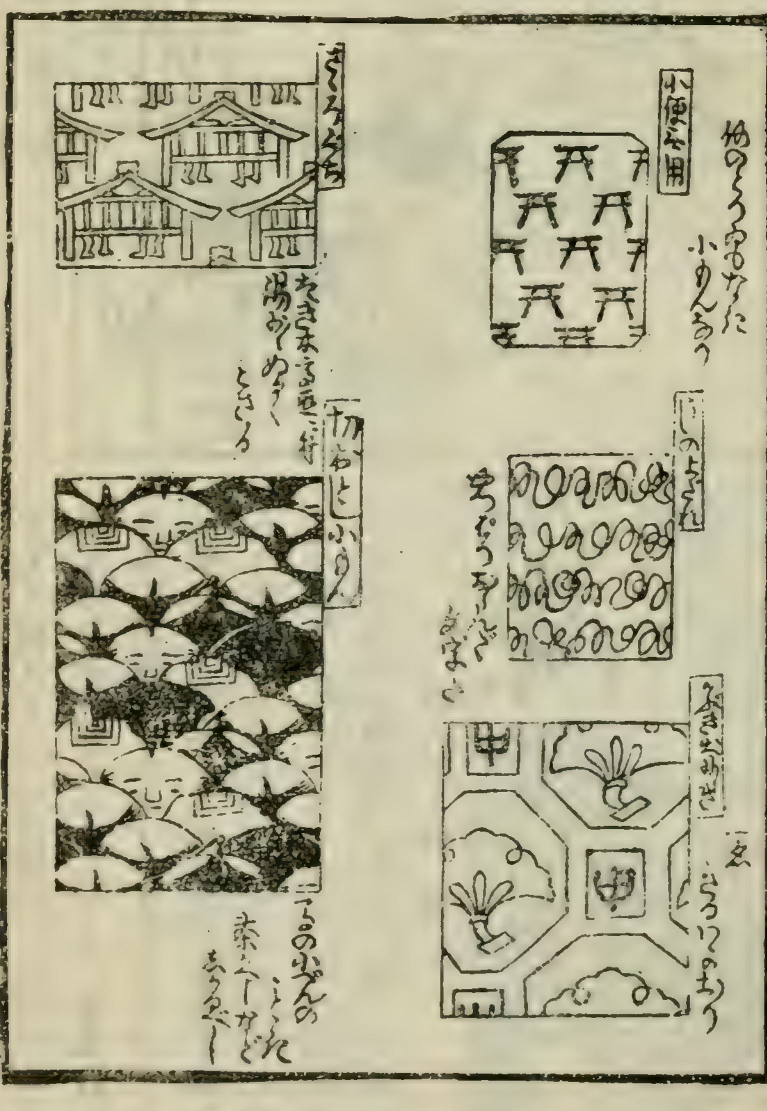


忠臣藏即席料理

る。忠臣藏の筋書と「前世幕無」とを一つにした事となる。なほ上中下共に上欄に天道様と天人とを配する事は「大福帳」そのまゝである。

世諺口紺屋雛形　三冊

曲亭馬琴の作、子興の畫、寛政十一年蔦屋の板。馬琴は瀧澤氏、名は解、字は瑣吉、著作堂、蓑笠隱士などの別號がある。讀本界の巨星であるが、はじめは黄表紙を作つて居た。寛政三年、京傳門人大榮山人の署名で公にした「廿日餘四十兩盡用而二分狂言」にその才氣を見せ、七年の「四遍摺心學草紙」の當り作によつて其の名を知られ、九年の「无筆節用似字盡」また佳作



小紋雅話

京傳主十六利鑑



曆の同門、榮松齋長喜の別名である。

馬琴の黄表紙は、兎角に理にからむ事によつて輕妙の趣を缺く。本篇の如き、洒落をまづ呉服の地質、模樣、紋所に盡として聞える。「作者部類」にみづから自負して「流行江戸のみならず、こゝをもてその翌年京師より新織の金襴緞子の似字を織たるを江戸へ送りこしたり」といふ。その他二三の迎へられたのもあるが、つひに讀本より見れば劣る事數等である。畫工子興は歌

兒訓影繪喩



して、次にその譯合を說く、その說方にはつひに京傳の奇警も輕快もないのが缺點であるけれど、また往々その丁寧ぶりを悅ぶ者もあつた。「似字盡」及びその後篇の「𪉩相案文當字揃」が喝采をうけたのもそれが爲である。そのいかに京傳と異なるかは「小紋雅話」に於ける模樣の案じとこれのとを比較すればおのづから明であらう。こゝにその一葉を揭げる。この洒落はつひに馬琴の解し得ざるところである。但、これは黃表紙以外の物であるが、黃表紙の類型と比べたならばどうであらう。京傳の作中に、寬政十年の「兒訓影繪喩」十一年の「京傳主十六利鑑」享和二年の「通氣智之錢光記」三年の「裡家算見通座舗」がある。これ等、右の框內の模樣と框外の說明とを對照せしめる趣向は全然同じであるだけに、二者の才氣がよく比較せられる。よしその說明はともあれ、繪の趣向はつひに京傳の奇なるに及ばぬ事が一日にして認められる。



通氣智之錢光記

又焼直鉢冠姫 稗史億説年代記　三冊

式亭三馬の畫作、享和二年丙寅の板、「浮世風呂」「浮世床」の作者として有名なる三馬は通稱西宮太助、書肆の丁稚より身を起し、寛政六年、十九歳の時、黄表紙「天道浮世之出星操」及び「人間一心覗替操」を著はした。その十一年「俠太平記向鉢巻」を出板した。それは前年のよ組の火消人足の喧嘩をあて込んだので、彼等の怒に觸れ、板元及び自宅を破壊せられて裁判沙汰となつた。爲に三馬の名が世に弘まつた、



俠太平記



草雙紙



向鉢巻



年代記

三馬が獨力にて名を成したのは、書肆の丁稚時代に草雙紙を耽讀した結果であるといふ。「稗史億說年代記」の素はその頃から出來たのであらう。しかし、これには岸田杜芳の天明三年「草雙紙年代記」といふ先蹤が存する。杜芳は小町、四位少將と黑主の戀の經緯を叙しながら草雙紙の變遷を示さうとする。繪も、繪解も、言葉もさながらに現はして年代記に擬する。

はじめに目錄を暦風に現はし、中に鳥居、吟雪、丈阿、春町、可笑（淸長）、全交（北尾）、芝蘭（しゅらん）（北尾）、通笑（關畫）（せき）、喜三二（花藍）の作者畫工の名を擧げる。鳥居、吟雪、丈阿の赤本黑本時代を示すものは人物を公卿姿にして、妖怪を出現させるが、黃表紙時代の世話となるところでは、金々先生と其女房をして小町少將を當



草雙紙年代記

世風に改めさせるなどのをかしさがある。作者時に讀者を驚かす。目錄を見れば、通笑の部に「少將女郎買をはじめる」とある。敎訓の通笑をばどうしてと思はせながら、本文には小町の嫉妬せぬ事を說いて通笑の通笑たるものを會得させるなどの工夫がある。今これを三馬の作と比較すればその基くところが明かであらう。即ち「又焼直」といふ譯である。三馬が鉢冠姬を題材としたのは便よきためであらう。何となれば赤本時代よりくりかへされる趣向で、しかも黃表紙時代となつては世話にくだいたものも少くないからである。

三馬は自ら諸家の緒を摸し、文の調子を傳へると共に、草雙紙知識に資すべきものを擧げた。たとへば地本問屋目印、戲作者名寄、草雙紙の體裁の變遷、名作靑本略記として傑作二十三部を數へる。今も名作二十三



草雙紙

部の名によつて呼ばれるものはこれである。但、往々にしてその記載に誤謬がある。たとへば喜三二の「鼻峯高慢男」を春町の作とし・馬呼人の「啌多雁取帳」を喜三二の作とするが如きがそれである。赤本黒本の變遷を說くところ未穿鑿の至らざるものがある。作者自らもそれを知つて億說といふのであらう。しかも後人が便を得る事は少々でない。

延命長尺御誂染長壽小紋　三冊



年　代　記

京傳の作、歌麿の畵、享和二年蔦屋開板。黄表紙の面白さは繪と文とが一つに動く點にある。もし黄表紙の文が單なる繪解に過ぎなかつたなら、その面白みは半減せられるであらう。傑れたるものといへば、全體の趣向も勿論であるが、繪と書入が不即不離の關係を有つ事であらう。京傳の作は、もと〳〵畵工出身の人であるだけに、その點にぬかりはなかつた、その佳作の多いのも偶然でない。さてまた文と書とは、時に繪と字との關係を見る事がある。なほあしで書の面白さを見せる事がある。「虛出實草紙」のひまの二文字を繪にあしらつたのもそれてある。この「御誂染長壽小紋」はその案じでおしてゆく。但、命の字を繪模樣にしたのは巳に寛政八年の「鬼殺心角樽」の中にもある。

京傳はその工夫を復活し、更に擴充したのが此の一篇である。作者は命の繪模樣を利用する事が出來る場合々々をこゝに拾ひ集めた、故に全體を通ずる趣向といふものはない。故に作者はこれを卷末に於て、笑が命の藥であるとて、此繪草紙を御覽じて命を延ばせといひ、お年玉にもつて來いのめでたい冊子といひ結ぶ。題名の「延命長尺」といひ「長壽小紋」といふのはそれが爲である。もとより「命」は紋形をきかせたのである。

京傳に「小紋雅話」があり、「奇妙圖彙」がある。皆これと同一類のものである。たゞ黃表紙の形式をとらなかつただけである。即ちこれ等は文を以て對應する事がなかつた。

この命の字の趣向は多くの模倣を產んだが、天保板の樂亭西馬の「心學命洗濯」に至つては丸盜みとして笑ひ棄つべきであらう。

的中地本問屋（あたりやしたじほんどひや）　二冊

十返舍一九の自畫作、享和二年村田の開板。一九は重田氏、名は貞一



出　　　盧

通稱を與七といふ。「膝栗毛」の作を以てその名世に喧傳する。黄表紙は寛政六年の「心學時計草」の自畫作をはじめとする。これが好評であつた爲ひき續いて著作に從事したもの丶さまでの當り作なく、たゞ中本に於て其の名を成し得た。



鬼殺心角樽



實草紙

戯作者が自傳めかすものを綴る事は喜三二の昔から絶えなかつた。黄表紙を玩ぶ者が悦ぶ爲であつた。更に地本問屋の樂屋内を見せ、いかやうにして一冊の黄表紙が出來るかを説明する。まづ作者の原稿が出來上ると、彫りにかゝる、次に刷る、丁合をとる、前後上下を切り

揃へる、表紙をかける、草紙を綴る、さうして出來上つたのを小賣の本屋におろして歩く。三馬はこの順序を示しながら、事を誇張して例の滑稽を弄する、作者には馬糞千鯛鋤鍬、彫師には富士噴火の折の琵琶湖の水、刷師には朝比奈景清の腕を黒焼にしたものなど飲ませるなどのをかしさを見せる。また草雙紙の賣出には蕎麥の祝ひがあつて作者も招がれる事を說いて、蕎麥の樣に身代も延びると祝儀の言葉を以て結ぶ事例の通りである。

これは一面村田屋の廣告ともならう。黃表紙には、たとへば京傳の如く、書中に自家の廣告をなすものが甚多い。故にこの樣な事もあやしむに足らないが、三馬の如きは此年に全然はじめから廣告づくめの「仙方長壽綿溫石」の如きをも出して居る。、但これは自家のではなかつた。

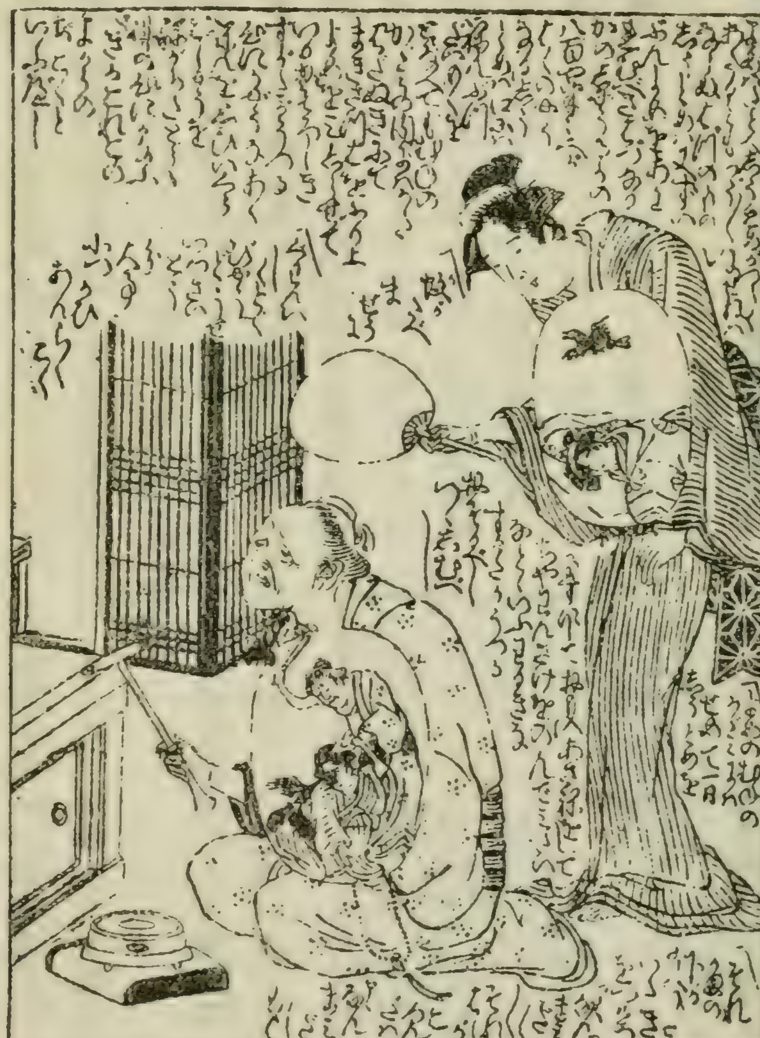
一九は今年村田屋の爲に廣告もどきを書くと共に、また岩戸屋の爲に同じ樣のものを作つた。これは作者自身の作の成り立ちを主として居る。一九は同じ樣な趣向の「屈伸一九著」を岩戸屋から出した。これは前の二者にわづかに觸れて居る前年の銚子濟來の旅を主題とするものである。同年同時に似たり寄たりの作を同じ店から出し、外からも出すなど、悠長な一九であり、一九の時代である事を考へさせられる。

人間萬事吹矢的　三冊

京傳の作、重政の畫、享和三年鶴屋の板。こゝにいふ吹矢的といふは、からくり的とて、矢が的に當れば綱をつけてある人形を出す。からくりになつて居る物である。その人形はいろいろで、鬼も、蛇も、朝比奈も、化物もある。また人形ばかりでなく、家もあれば山の形もある。京傳は吹矢が的に當らぬの理を、心の

正しきか正しからぬか、息の長きか短きに關する事として例の心學流の洒落を用ゐんとする。人の心と吹矢の店の緣の下には何が潛むかゞわからぬものとし、矢が的に當るのによつて心の正體そのまゝの人形が現はるとする。この趣向は京傳に於ては屢々くりかへされた。たとへば、その人形と人の心との關係は「假名手本胸之鏡」の人物と鏡にうつる人物との關係であらう。或は「人心鏡迺寫繪」の人物と心の鏡にうつる本心との關係であらうか。但、後者の場合はすでにうつる者とうつる姿が反對をなすのである。

兎に角これ等の趣向を吹矢的によつて新しみを見せたのである。しかも吹矢の人形の言葉書が一々洒落を盡して居る事が注意すべきであらう。「吹矢的」には京傳自筆の稿本が存して居る。これとの對比が黃表紙出版の事情を一九の「地本問屋」と共に闡明するであらう。



人心鏡迺寫繪

黄表紙は多く新春に出板する、作者はそれに間に合せる様に原稿本を纏めねばならぬ。しかも作者は少くも數種多くて十數種を出す、それが黄表紙だけでなく他の種類のもの丶筆を執る。勢後れがちになるので本屋からは矢の催促をうける。「地本問屋」に於て、作者一九が馬糞干鰯入の酒を飲ませられたのはその作をよく早くする爲である。作者自身を現はして居る黄表紙には、きまつて本屋から催促を受けて困却して居る有樣をしるしてある。

ところで黄表紙を書く時は、何にせよ、繪を主として居るだけに作者自ら下繪を描く必要がある。京傳の如きは書家出身なる爲に下繪は易々として描く事が出來る、のみならず略畫のおもしろさが見られる。また繪組に工夫を凝して、描きかへたあとも見られる。作者は下繪を示すと共に畫工に對して注意を與へ注文を附ける。「此草紙、繪は吹矢の人形の氣ドリニテ御書可被下候。上ノ段ハ人形ノ氣トリ、下ノ段ハ常の繪也」とも、「わりよりも的を大きくして、的のうちの字は目立樣に御書可被下候」とも「吹矢的」では重政に對して注文をつけて居る。また序文についても重政に注文をして居る。「此序文北尾先生へ御願、筆工トモ御書可被下候。文字アラク律義ニヨメ安キ樣ニ、印校合ノ節此方ニテハリ入申候」とある。畫工は挿繪を描く外本



假名手本

文の筆耕をもなす場合がある。こゝの重政はそれである。また古くは「榮花夢」の如きは自作ではあるが春町が板下をも書いた、しかし多くはそれを專門に職とする者に委せる。

重政への序文の注文中に校合といふのがある、ハリ入といふのがある　それは彫り上つたものを校正するのである。その誤字を朱書にし、或はハリ紙をして、最一度彫り直させる。今板本と稿本とを比較するに往々にして異同を見る。たとへば龍宮の玉の條が、板本に「魚は龍宮の家來にてよく玉を守護す。これを守る玉は主人なり。よく守るは役目に怠らぬなり」とある。これを守る玉は云々ではどうやら意味が通じない。稿本は「魚は龍宮の家來にてよく玉を守護してこれを守る。玉は主人なり」とある。これではじめて會得せられる。これは筆工の誤である。また盧生の夢、及び春駒の所が、板本には「きん／＼たる息子株は手演をかむ爺と變る、田鼠化して鶉となり、白紙芥子之介が鮹となり」とある。こゝの白紙とは何であらう。芥子之介の姓か、また異名かと疑はれる。芥子之介といふのは、當時淺草の奥山に手品を演じて居た辻放下師である。眞桑瓜を鮹とかへる曲藝をなした。ところで稿本を見ると「白紙芥子之介で鮹となり」とある。白紙が眞桑瓜と同樣手品によつて鮹となつたのである。でをがとした筆工の誤はつひに後人をして幾度か首を傾



胸之鏡

けさせる●

京傳ははじめ、此の作に「有金時有化物人意吹矢的」とし、下卷を草するに及んで「人間萬事吹矢的」と改めた。下卷表紙に附記していふ、

「上卷中にしるし候外題はやめて、此通りの外題に仕候間、割印御帳面へ此通りの外題御記し可被下候。」

これは板元鶴屋喜右衛門に對しての言葉である。割印御帳面とは稿本出板許可の割印を係から捺して貰ふ帳面の義である。當時に於ては草雙紙の出板は一々地本問屋の行事によつて取締られて居た。

京傳の稿本は斯くの如き事を教へる。また卷尾の一枚が板本と稿本と異つて居る事が注意せられる。こゝには人物も二度描き直されて、しかも最後には全然改められて板本の如くなつた。作者が色々に頭を捻つた樣子が髣髴として見える。なほ稿本に於て披露せんとした京傳の述作目錄の中、人相手紋を書きかけたのは「裡家算見通座舗」である。京傳は今年、鶴屋から「怪談模々夢字彙」「悟道迷所獨案内」をも出してゐる。

京傳の今年、享和三年の作は、黄表紙として以上の他に「分解道胸中雙六」がある。また讀本に「安積沼」があり、滑稽本には「奇妙圖彙」がある。

なほ參考の爲に、同年にどれ程の黄表紙が出板せられたかを書きつける。すべて五十餘種、その中、京傳の五種以外、おもなるものを擧ぐれば、楚滿人(八)　一九(八)　馬琴(四)　處呂利(五)　石上(三)　鬼武(三)　榮女(二)　猗錦(二)などである。他は一種宛、慈悲成もそのうちに數へられる。

これを題材から見れば、敵討物が殆ど半に達せんとする。また楚滿人の活動ぶりが注意せられる。今年は「敵討義女英」出板の後、九年目に當る。

校訂餘言

黄表紙二十四部、稿本を合はせて二十五部にいさゝかの解題を附し終つて今更にかへりみせらるゝのは、選擇の宜しきを得ざる事である。二千部の黄表紙中にわづかに二十四部を取るので、すべてが思ふまゝにならず、もとより他に缺く可らざるものゝある事を知りながら、善本を得ざるために削除せねばならず、殊に風紀上採るを憚らねばならぬ事もあり、旁收載の不備を致した。その收載せられたものゝ中にも時にいかゞはしき繪や文や言葉の削るのやむなきに至れるものも往々にして存する。校訂者として憾しむところであるが、事情やむなきに出づる。その個所、また削除の程度の如きは、これを編輯者より開かれん事を望む。しかし、二十五部とはいへ、これを通じてやゝ黄表紙の面目を傳へ得たといふ事も、或はゆるさるべきであらう。

黄表紙の歷史の上から見て當然採るべくして、わざと省いたものがある。南仙笑楚滿人の作、「敵討義女英」は其の一つである。これは豐國の畫、寛政七年泉市の出板、非常な當り作でその影響甚大を極め黄表紙の作風を一變したともいはれる。今こゝにその梗概を叙して補遺とする。

源頼朝の時代、駿河の鄉士に桂新左衛門といふがある。とかく病身ゆゑに一子淺太郎を連れて伊豆の溫泉に行き下總の士舟木逸平と同宿する。逸平も一子茂之介を伴つて居たが、十五歳と十四歳との二人の少年は將棊の戯から口論をし、はては刄傷に及ばうとしたが、親々の扱にて仲直する。逸平は新左衛門の角たてぬ扱ひぶりに敬服する。しかし茂之介の心は平でない、父と共に歸國する際、父に秘して淺太郎と決鬪して、

つひに殺した。新左衛門は淺太郎の死骸を見、またその場に落ちてある逸平の手拭を見て、下手人を逸平と思ひ込む。一方又茂之介も淺太郎に切られた傷がもとで旅中に死亡する。新左衛門は家に歸つて病死する。死に臨んで當時七つの子岩次郎に兄の敵を討つべき事を諭す。岩次郎は十六歳となつた時下總に下つて逸平の動靜をうかゞふとて、しばし一僧音の庵室に身を寄せる。その間、竹筍齋の娘小しゆんと契をこめる。竹筍齋こそは逸平その人であつた。岩次郎は小しゆんに手引させて兄の敵を討たうとする。小しゆんは父に代つて殺される。作者はこゝに袈裟御前の死によつて趣向を立てた。岩次郎は切腹んとする、逸平の竹筍齋は之を留めて事件の眞相を語り、その因緣を正して、岩次郎を養嗣とする。岩次郎は鄕里より母を迎へ、實父養父の知行を合せ領してめでたき生涯に入る。



最後に校訂者として慚愧の一言を添へる。

二十四部中いかにしても讀み難く、先輩にたゞして得ず、つひに缺字にした二個所が存する。一つは「馬鹿長命子氣物語」三七六頁の書入れ、「京棧にしようと思つたが唐棧」と「どうだ」との間の數文字である。或は「唐棧鐵色でよからう」かとも讀んだが、唐棧の鐵色も異なものと思はれるのでやめた。同じ場所の「羽織のとう」と「ありか、ありか」との間の數文字である。「ありか、ありか」はもとより「ありがたし」を意味する「ありが」の濁點を逸したものであらうが、中間の數文字は二字か三字か、遂に意を以て迎へ讀む事が出來なかつた。も一つの個所は「莫切自根金生木」一九九頁の書入れ「お金をつけると云々」の上二字である。

其の他誤つて讀み、誤つて字を當て、しかも氣づかざるものも少くなからう。殊に洒落の場合に於て多からう。たとへば「十四傾城腹之内」四七九頁の「火焔奉公」は「臥煙奉公」または「臥焔奉公」であらうが、火焔の洒落に囚へられ過ぎ、「御誂染長壽小紋」六二〇頁の「忉利天」は「通り天」であるべきを、やゝ理に泥み過ぎたのがある。畢竟校訂者の無識不通の然らしむるところである。


新板
金々先生栄花夢
きん〳〵せんせいゑいぐわのゆめ

序

文に曰く、浮世は夢の如し、歡をなす事いくばくぞやと。誠にしかり。金々先生の一生の榮花も、邯鄲の枕の夢も、ともに粟粒一炊の如し。金々先生は何人といふ事を知らず。おもふに古今三鳥の傳授の如し。金ある者は金々先生となり、金なき者はゆふでゝ頓直となる。さすれば金々先生は一人の名にして、一人の名にあらず。神錢論にいはゆる是を得る者は前に立ち、これを失ふ者は後にたつと、それ是これを言ふかと云々。

畫工　戀川春町戲作

序

文に曰く、浮世ハ夢のごとし。歓をなす事いくばくぞやと。誠なるかな。金々先生の一生の栄花も、邯鄲のまくらの夢も、ともに粟粒まひの如し。金々先生ハ何人といふ事をしらず。おもふに古今三鳥の伝の如く、金ある者ハ金々先生となり、金なき者ハ由ふでゞ頓直となる。しからば金々先生ハ一人の名にあらず、すべての人の名なり。神銭論にいはゆる、是を得る者ハ、ちりしを集まふ事ハ後よふくし、かふうとを云

画工　恋川春町戯作

今はむかし片田舍に金村屋金兵衛といふ者ありけり。生れつき心優にして浮世の樂しみを盡さんと思へども至つて貧しくして心に任せず、よつて熟々思ひつき、繁華の都へ出て奉公を稼き、世に出で思ふ儘に浮世の樂しみを極めんと思ひ立ち、まづ江戸の方へと志しけるが名に高き目黒不動尊は運の神なれば、これへ參詣して運の程を祈らんと詣でけるが、早日も夕方になり、いと空腹になりければ名代の粟餅を食はんと立ち寄りける。抑目黒不動尊は靈驗著しく遍く



諸人の知る所なり。本尊は慈覺大師の作にして寺號を龍泉寺といふ。此所の名產粟餅并に餅花といふものあり。竹を割りて華鬘の如くに結びこれに赤、白、黄の餅を花の如く付るなり。よつて餅花といふ。

「何でも江戸へ出て、番頭株とこぎつけ、算露盤の玉はづれをしこため山と出かけて奢を窮めませう。

もしもし、も早何時で御座りませうの。何なりと賴みます。」

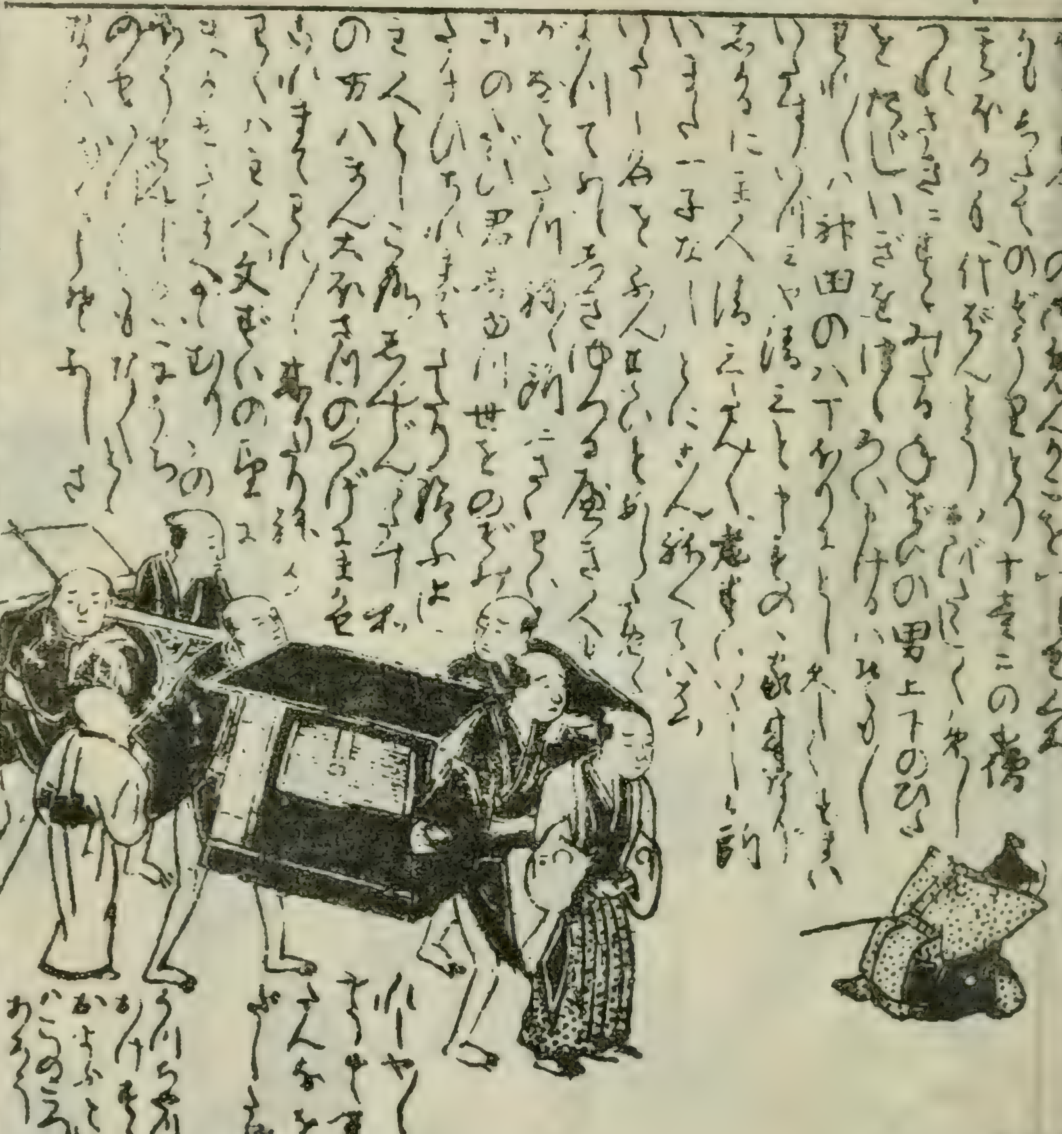
「あい、大方晝過で、御座いませう、御奥へお通りなさりませ。」



金兵衛空腹の餘り、粟餅屋の奥座敷へ通りけるに折しも粟餅はまだ出來合せず、しばし待ち居るそのうちに旅の勞れにや、すこし睡氣萠しけるまゝ側に在り合ふ枕引き寄せすやすや思はずまどろみける夢に、何處ともなくほふせん寺の御免駕籠を釣らせ、黒鴨仕立の草履取、十一二の小僧其外手代番頭夥しく召し連れ、さきに進みたる年配の男裃袴の裾を正し、威儀をつくろひ申しけるは、抑われわれは神田の八丁堀に年久しく住ひ致す和泉屋清三と申す者の

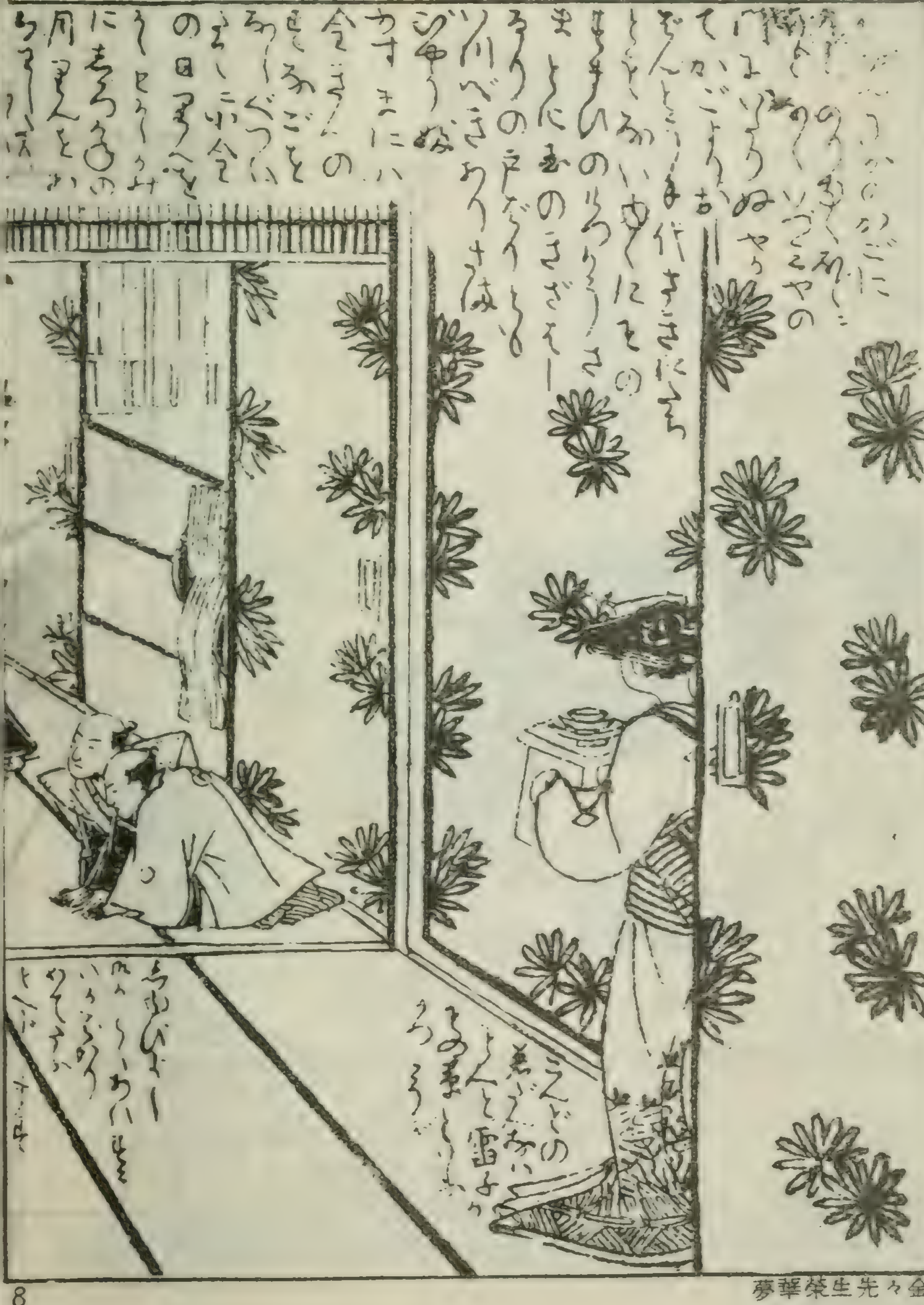


家來なり。然るに主人清三段々老衰致し候處、いまだ一子なし、殊に今年剃髪致し名を文ずいと改め候、よつて跡式讓るべき人もがなと尋ねる處に、幸此度君出世を望み給ひ、是まで來り給ふ由、主人年頃信心致す所の萬八幡大菩薩の告にまかせ、これまでわれ〳〵來りたり。願はくは主人文ずいの望にまかせ給へと無理かのほふせん寺駕籠に打乘せ、何處ともなく伴ひ行くこそ不思議なり。金兵衛思ひも寄らざる事いと不審に思ひけれどもこれ幸福德の三年目、開いた口へ餅、天へも上る心地して、即ち駕籠にうち乗りていづこを當てともなく出ゆきける。「嬉しや〳〵漸く若旦那を探し出したぞ。」



「うつちやつておけ、煤掃にて出ようといつたはこのこつたあらう。」

金兵衛かの駕籠にうち乗り行く程に、程なく和泉屋の門に至りぬ。やがて駕籠より出し番頭手代前に立ち伴ひゆくにその住ひの結構さ、まことに玉の階、瑠璃の帷とも謂つべき有様、屏風、襖には金銀の砂子を並べ、衝立には黄金の日輪をかゝせ、唐紙には白金の月輪を現はしたり。程なく主の老翁清三立出で喜びの眉を開き即ち金兵衛にわが名

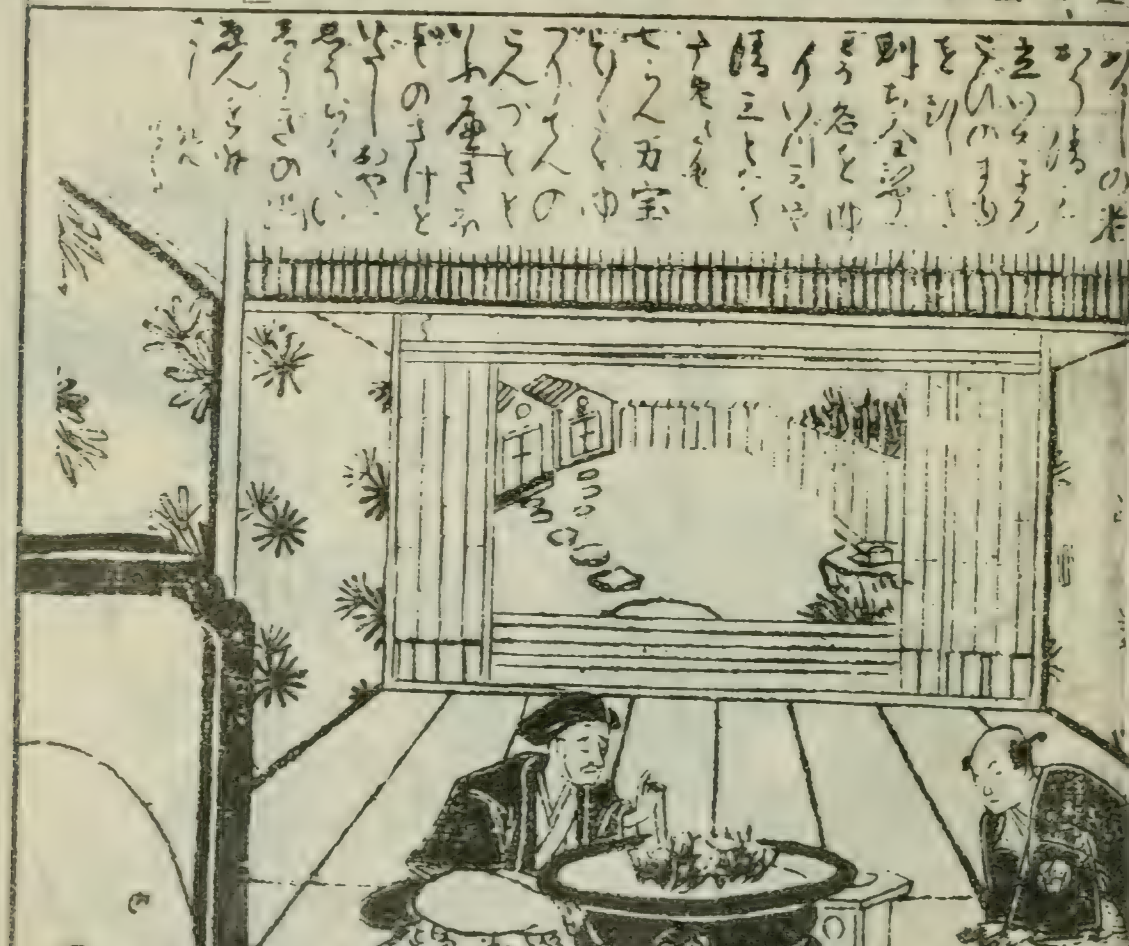


を譲り、和泉屋清三と改めさせ、七珍萬寶悉く譲り、天の濃漿ともいふべき程の酒を出し、親子主従の祝儀の酒宴をぞはじめける。

「不思議な縁で御座る。これから随分と身上大事にしませう。」

「首尾よく御家督相済みいかばかりめでたう存じまする。」

「今度の若旦那はとんと雷子が物草といふ恰好だ。」



金兵衛家督を嗣ぎてよりなに不足もなければ、段々奢に長じ、日夜酒宴をのみ事となし、昔の姿は引かへて今は頭も中剃を鬢のあたりまで剃り、髪の毛をば鼠の尻尾位にして本田に結ひ、着物は羽二重づくめ、帶は天鵞絨、または博多織、風通、回々織など〻出かけ、あらゆる當世の洒落を盡せば、類は友を以て集るならひにて手代の源四郎、幇間の萬八、座頭の五市なぞ心を合はせ、こ〻を先途と唆しける。



その昔金村屋金兵衛なれば、その名をとりて諸人金々先生ともて囃しける。手代源四郎、藝者を呼び集めて金々先生を唆す。「何と旦那、内でばかりの騒は、とんとさえませぬ。明日は北國へいき山とお出かけなさりませ。」四谷アャ、引新宿馬糞の中によ、女郎あるとはつゆ知らず、きたきたきたさぬきの金比羅。おますところが嵐雷子たしかかやうにか申しました。



金々先生唆され、ふと吉原へ行きけるが、それよりかげ野といふ女郎に馴染み、親の異見も何のその、一寸先は闇の夜も、かの手代源四郎萬八をつれて、ひたと歩みを運びけり。

金々先生の打扮(いでたち)、八丈八端の羽織、縞縮緬の小袖、役者染の下着、總屋頭巾に目ばかり出(いだ)し、人目を少し忍びけり。

「旦那のお姿どうもいひませぬ。凄(すご)いひやう〳〵。」



金々先生傾城かげ野にのぼり詰め、今年も早、歳の暮、折節年越の夜なりけれ(ば)かの源四郎がすゝめにて豆は古しと金銀を枡に入れ、節分の祝儀を祝ひける。

「福は内鬼は外〳〵。」

「これがあり難(がた)山のとんび烏これ持つて検校なり山と出かけよう。」

「これはきびしい薩摩やま源五兵衛と来て居る、とんと梅が枝(え)もどき、ありが〳〵。」



金々先生北國(ほくこく)の遊もし盡しければ、これより辰(たつ)巳(み)の里と出かけ、あらゆる才を盡しけり。されども俄の酒落なればさしたるおちの來る事もなし、ただ阿彌陀の光も金ほどにて、山吹色を播き散す故皆金々先生ともて囃しける。「あゝ降つたる雪かな、世に



なき人はさぞ寒からん。雪は鵝毛に似て飛んで散亂し人は紙衣(かみこ)を着て川へはまらうとア丶ま丶よ。」

「この大雪にお駕籠にも召しませず、加賀蓑の御打扮(いでたち)は、ソレヨ辰巳の里に猪牙(ちよき)はあれど君を思へばかちはだしといふ御趣向、おそろ〳〵。」



先生辰巳の里のおまづといふ色に嵌り、毎日歩みを運び、多く遣ひけれども、おまづはもとより勤の習にて表向は深く金々先生に嵌りたる景色に見せかけ、内證にては源四郎と色事にて金々先生の目を忍びて樂しみける。

茶屋の女かくし言にて相圖をし、金々先生を茶にするところ、

「ゲコンカシコロウサコンケカキコナカサカイコト、よしかえ。」

「イキマカニケクコカクラマコチケナコトイキツケテクコンケナ、よく言つてくんねえ。」



金々先生今まで
は委細を知らず、一筋に眞實とおもひ嵌りけるが、今夜のおまづが仕打兎角合點ゆかずと思ひ、大きにいざを起し、おまづとも切れてしまひけり。

「おまづさんお前はまあ構はずと、彼方へ行きねえ。ほんに呆れたとんちきだね。」

「どうせうが、斯らせうが、うつちやつておけ煤掃にや出よう。」

「マア旦那お急きなさりますな、どういふいきさつで御座ります。」



金々先生は所々にて大く嵌められ、今は最早光も失せ果て、日頃這ひ屈みし者も知らぬ振にて寄り附かず。無念至極に思ひけれども詮方なく、今は四つ手にて押させる力もなく、漸くぱつち尻端折に桐の柾下駄と出かけ、心細くもたゞ一人、夜な夜な品



川へ通ひける。

「昨日までは金々先生と持て囃され猪牙(ちよき)や四つ手に乗りし身が、今はばつちに日和下駄、變れば變る世の中ぢやな引ナニいま〳〵しい。」

「駕籠の衆、こひかけて早めませうぞ。」

「ぎやうにお江戸は賑だ。」



金々先生日々に奢長じ、今は身代も斯うよと見えければ、父文ずい大きに怒り、手代源四郎が勸にまかせ、金々先生が衣類を剥ぎ、昔の姿のまゝにて追ひ出しける。

手代源四郎はじめ金々先生を唆し、多く金銀を遣はせ、その餘りは皆我が手へくすねける、よつて物を盗むことを源四郎とは申すなり。

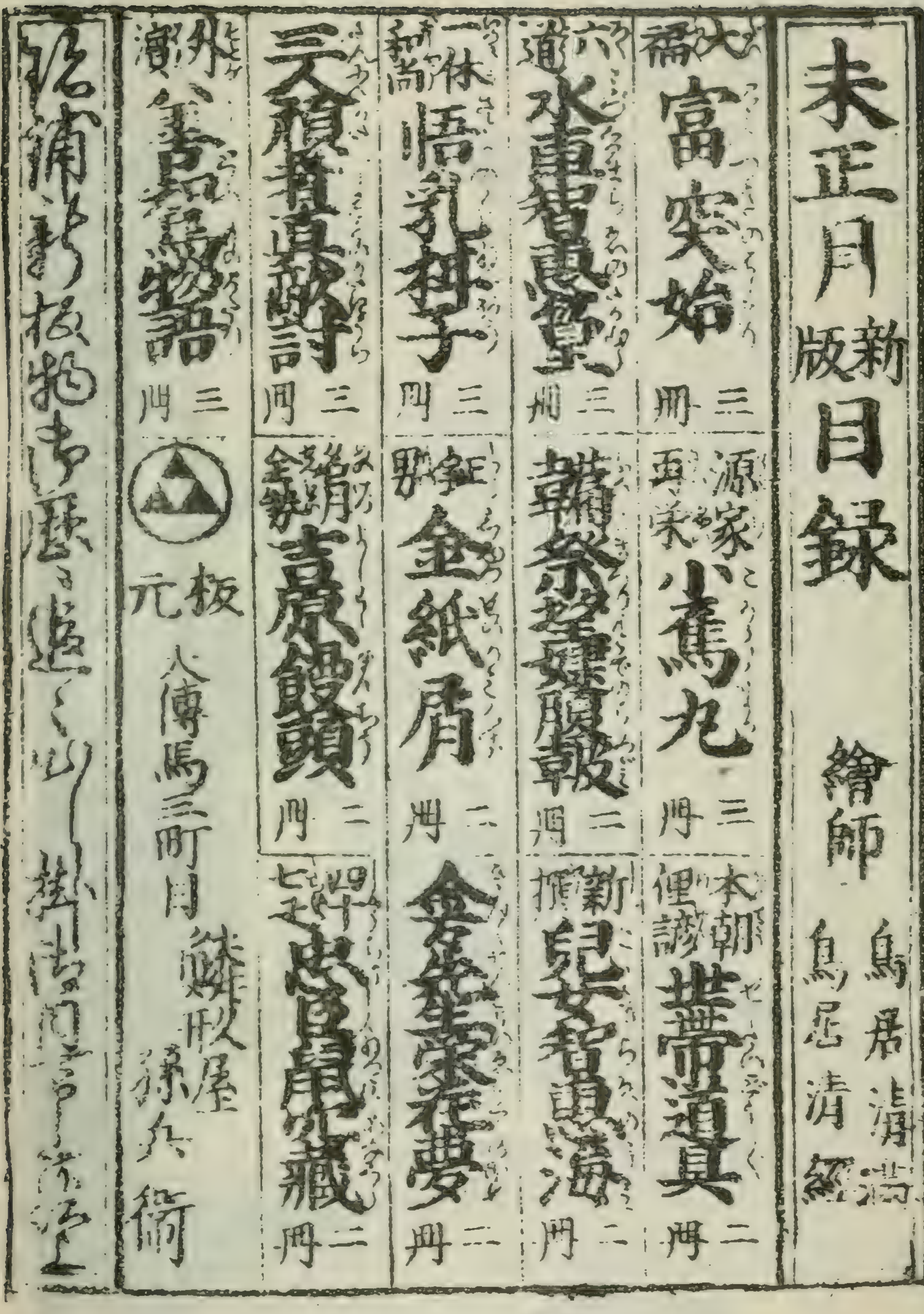
「ア、よい態だ。」



金々先生追ひ出され、今は立ち寄るべき方もなくいかゞはせんと呆れ果て、途方に暮れて歎き居けるが、粟餅の杵の音に驚き、起き上つて見れば一炊の夢にして拵への粟餅未出來あがらず。よつて金兵衛横手うち、我夢に文ずいの子となりて榮華を極めしもすでに三十年、さすれば人間一生の樂みも僅に粟餅一臼の内の如しとはじめて悟り、これより直に在所へ引とみける。



「もし〳〵餅が出來ました。」


未正月新版目録

繪師 鳥居清満 鳥居清經

大福 富突始 三冊

六道 水書者直覚 三冊

一休和尚 悟乳柑子 三冊

三人 貧者真詩 三冊

源家再栄 小鷹丸 三冊

[illegible] 腹鼓 二冊

正字 金紙周 二冊

名月 [illegible] 饅頭 二冊

本朝俚諺 世帯道具 二冊

新撰 兒女寶鑑 二冊

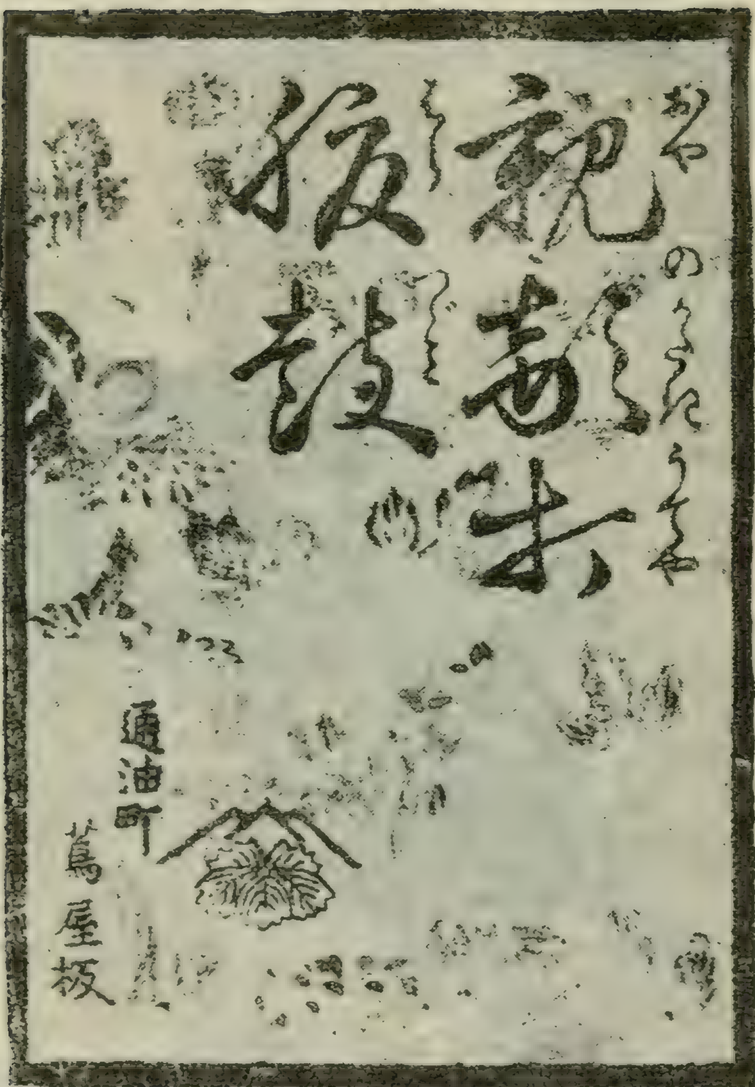
金々先生榮花夢 二冊

四十七手 忠臣藏 二冊

[illegible] 物語 三冊

板元 大傳馬三町目 鱗形屋孫兵衛

金々先生榮花夢


おやのかたきうてや
通油町
蔦屋板

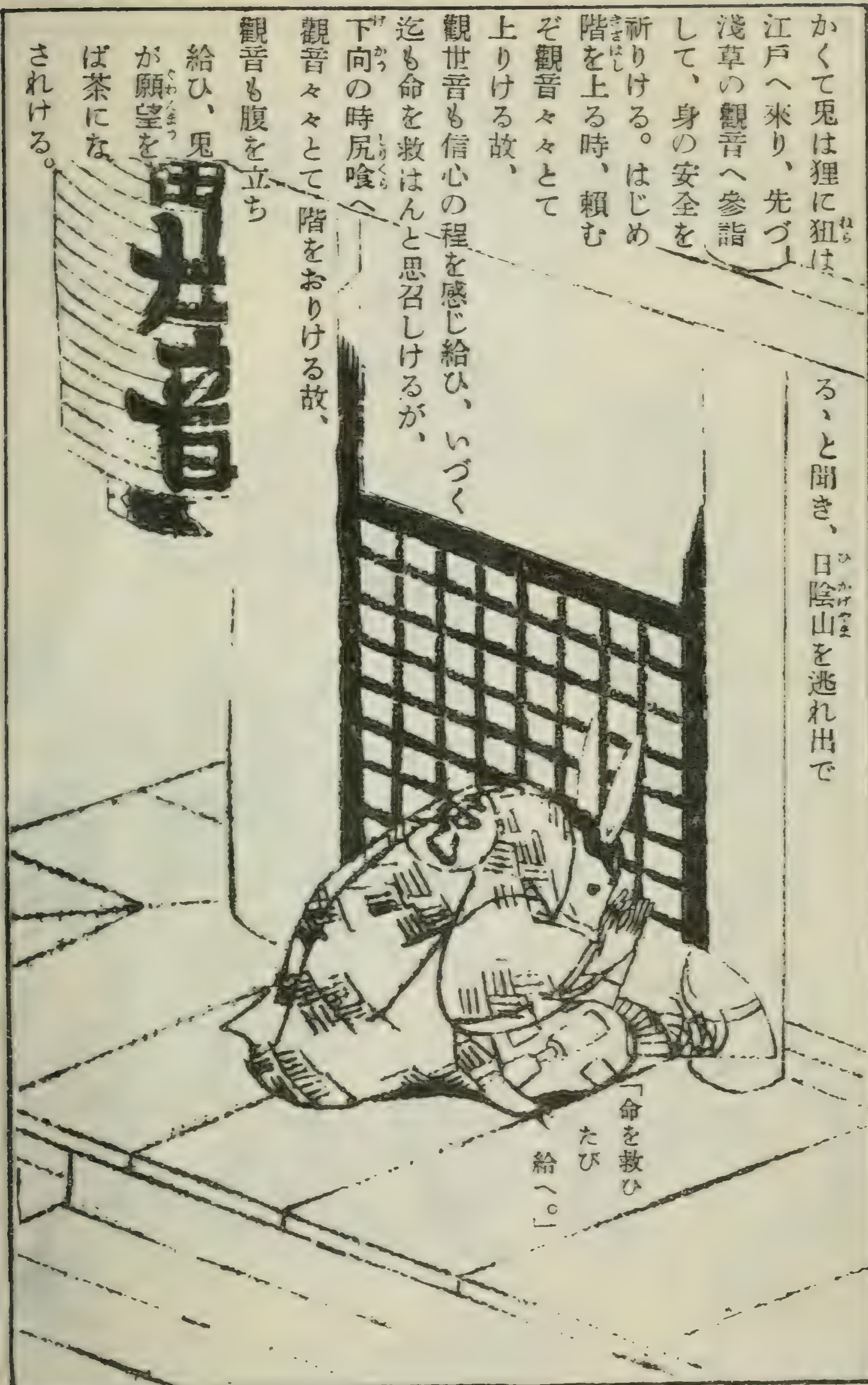


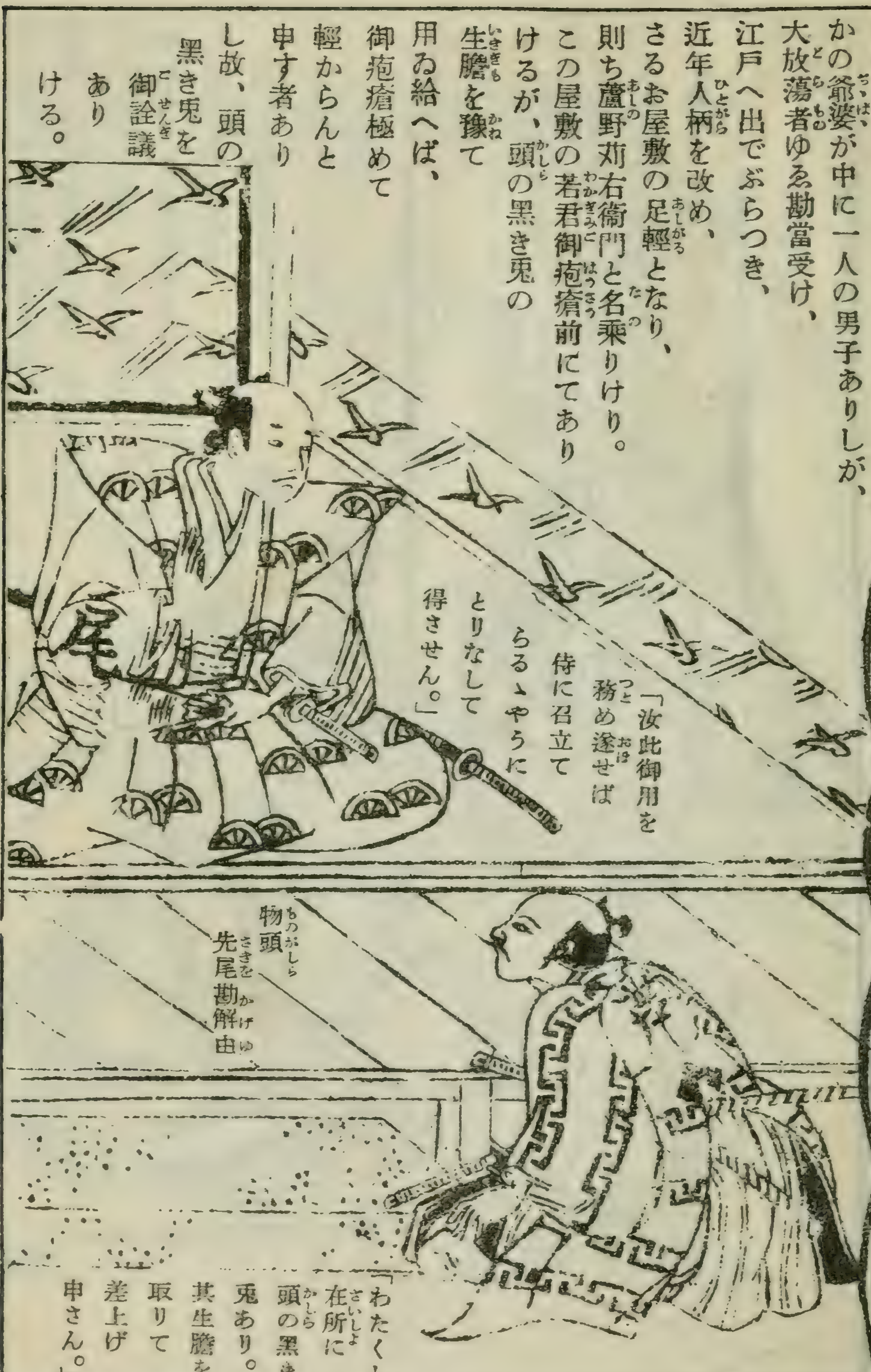

昔々日陰山の兎、婆の敵狸を殺せし事、兎のお手柄とて世にかくれなし。此狸の子成人して親の敵を討たんと思ひ立ちけれども敵を討ちに出て獵人に撃たれん事を恐れ、種ケ島村の宇津兵衛といふ獵人を抱込み、我身を全くして敵を討つ力にもせばやと此所に來り頼む。
兎様子を聞き驚く。
「隨分力になり申さん、兎角氣長に尋ね給へ。たぬきは損氣ぢや。」
「明日は化仲間の會合なれば、狐、狸、貉など此山蔭に集まる筈なり。此ところへ伴ひ、金儲させ申さん、其代りに敵討の力となり下されよ。」


かち〳〵山の奥に年經たる白狐あり。手下の狐を始め狸、貉、猫又など、月に一度づゝ會合して化の云合せあり。
「おらが仲間をば助けて狐組ばかりを撃つて下され。」


所の猟人も
これを知らず、
宇津兵衛は
今日狸の導きにて
此所へ来り
隙を見すまし
老いたる狐三疋
撃ちとりけるが、
白狐をば撃ち洩しけり。
「呑みかけ〳〵
白狐の
この〳〵
玄關前、
さあ〳〵皆も歌へ〳〵。」
「此お神酒は
四方のあかと
飲めます。」
白
猫
「鯛の
味噌吸とは
油鼠の
事だ。」

かくて兎は狸に狃(なれ)はる、と聞き、日陰山(ひかげやま)を逃れ出で江戸へ来り、先づ浅草の観音へ参詣して、身の安全を祈りける。はじめ階(きざはし)を上る時、頼むぞ観音々々とて上りける故、観世音も信心の程を感じ給ひ、いづく迄も命を救はんと思召しけるが、下向(げかう)の時尻喰(しりくら)へ観音々々とて階をおりける故、観音も腹を立ち給ひ、兎が願望(ぐわんまう)をば茶になされける。




かの爺婆が中に一人の男子ありしが、大放蕩者ゆゑ勘當受け、江戸へ出でぶらつき、近年人柄を改め、さるお屋敷の足輕となり、則ち蘆野刈右衛門と名乘りけり。この屋敷の若君御疱瘡前にてありけるが、頭の黒き兎の生膽を豫て用ゐ給へば、御疱瘡極めて輕からんと申す者ありし故、頭の黒き兎を御詮議ありける。
「汝此御用を務め遂せば侍に召立てらるゝやうにとりなして得させせん。」
物頭 先尾勘解由
「わたくし在所に頭の黒き兎あり。其生膽を取りて差上げ申さん。」


刈右衛門兎の御用承り在所へ歸り
勘當の詫事かなひて親園子兵衛に對面し、
母の最期の様子、兎の蔭にて
敵をとりしことを聞きければ、
かの兎はわがために
大恩あるものなれば、
生膽のこと大きに
心當違ひ、
當惑し
又江戸へ
立歸り
神力を
頼まん
と思ひ
定め
けり。
「御機嫌の
態を
拝しまして
これ程喜ばしい
儀はござり
ませぬ。」
近所の者
取持して
勘當を免させ
同道して來る。


「扨、足の早い奴だ。」
兎は大川端を向うへ渡りしに、三囲の土手にて狸と猟人に出合ひ此所へ逃げ来る。
中田屋の亭主葛西太郎頼もしき男にて、兎を鰻舟の内へ隠す。
「あとより追手のかゝる者、お慈悲にかくまつて下され。」
大蒲焼
中田や
兎
狸

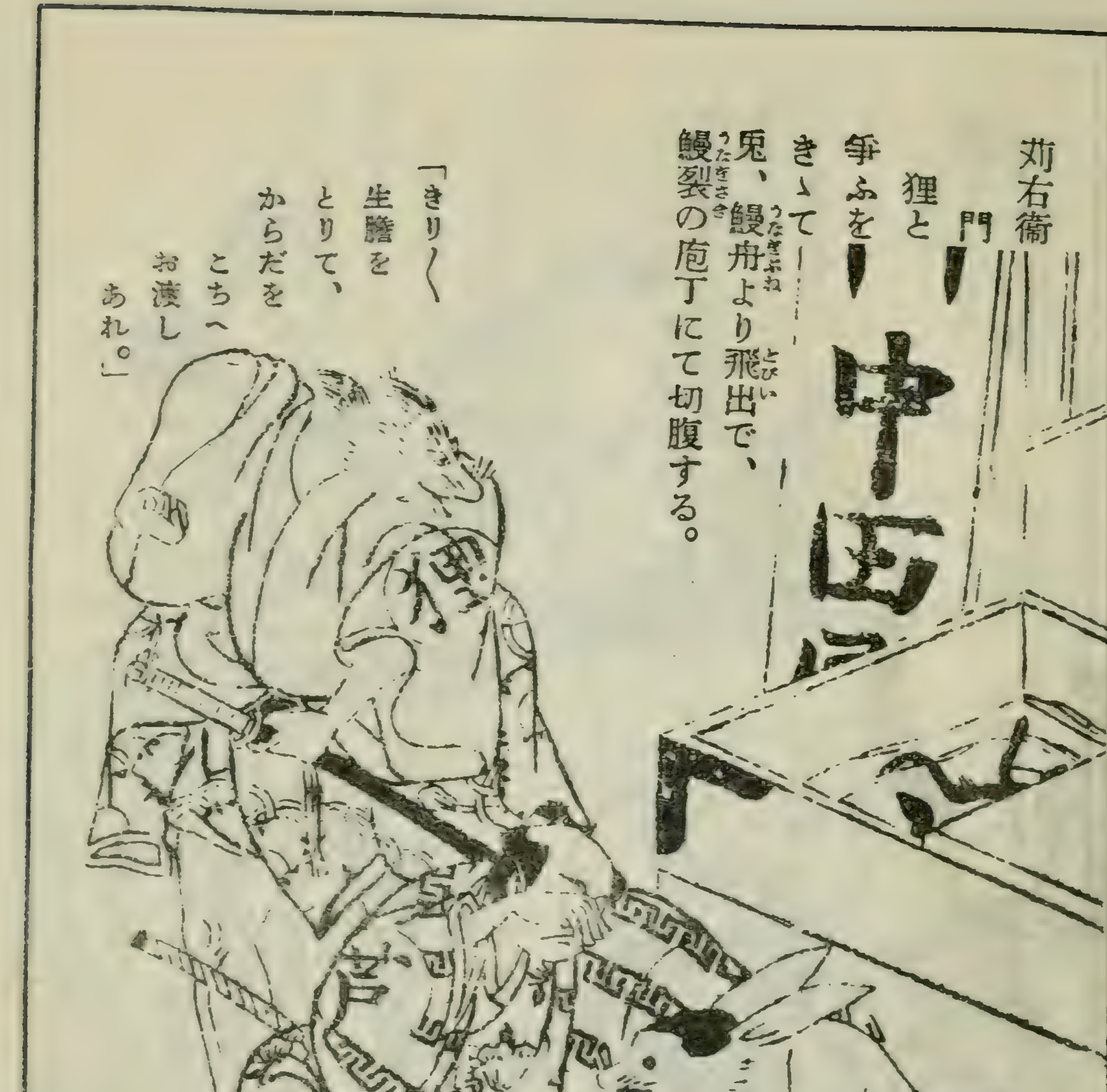
狸、猟人、中田屋へつけこみ鰻舟の中を探さんといへば、亭主舟の上へ飛上り、天川屋もどきにて力みけれども、胸元へ刀を差付け責める。

女房お花、蔭にて鰻を焼きければ、狸、猟人此匂に氣を奪はれて眠を催しける時、猟人の袂もひかばなどか切れざらん




八疊の睾丸(きんたま)も飛ばゝなどか越えざらんと歌ひければ亭主悟りて飛びのく。
「獵人(かりうど)浮かそ、根元(こんげん)蒲燒、こんちきち。」
宇津兵衛は山家(やまが)の賤(しづ)の女(め)ばかり見し者ゆゑ、お花が顏の白きと、歌の聲と、蒲燒の匂と、狸の狂ふとに見とれ、同じやうに浮かれる。
近所の事故(ことゆゑ)人買(ひとかひ)とぞ見えける。
狸、蒲燒の匂(にほひ)を始めてきゝければ燒鼠(やきねずみ)も及ばぬ匂なる故、心亂れ狂ふ。
お内儀(ないぎ)の蒲燒に性根(しやうね)を奪はれ鬼の敵討はわきになりける。


刈右衛門は他に頭の黒き兎を授け給へと秋葉へ祈誓を込めんと此所へ来りしに、狸、親の敵の兎を出せと争ふを聞けば、わが大恩ある兎ゆゑ命を助けんとさまぐ〳〵にいひつのる。
屋
狸
「いらぬそなたの庇ひ立てそこのいて通されよ。」
「そちに討たせてよければ、主人のため生膽をほしき兎なれども、それさへせぬは、よく〳〵義理ある事と思へ。」


苅右衛門――狸と争ふを――きゝて――兎、鰻舟より飛出で、鰻裂の庖丁にて切腹する。
「きり〱生膽をとりて、からだをこちへお渡しあれ。」
「苅右衛門様のわれを圍ひ給ふも、狸殿のわれを討たんとあるも、皆孝の道の義理づく、とても逃れぬ此場の仕誼はや〱生膽をとり給へ、その上は狸殿存分に親の敵を討ち給へ。」
「その深手にては助かるまじ。不憫ながら生膽をとりて忠義をたてん。」


宇津兵衛海人（あま）の謡（うたひ）をうたひ、狸はお家の腹鼓を打つ。
平家は船にて讃岐（さぬき）に亡び、狸は土舟にて兎の為に亡び、兎は饅舟にて常山（くさぎ）の蟲同然に、疱瘡の薬となれり。皆これ前世（ぜんせ）の約束事（やくそくごと）なるべし。
「南無阿彌陀佛〳〵。」

兎、膽を抜かれ
氣も絶々と
なる所を、
狸引出して
親の敵思ひ知れと
胴切にしければ、
上の方は黒き鳥と變じ
下の方は白き鳥となり
飛び行きけり。
うさぎを二つに切りて
出來たる鳥なれば
黒きを鵜と名づけ、
白きを鷺と名づけしも
この時よりの
ことなりけり。





此程白狐會合の節狸の導きにて宇津兵衛に老狐三疋を撃たせし事こんくわい先に立たず、かれ等が敵の獵人並に導きしたる狸を討たんと、僞の謀を以て先づ彼の狸を抱込み懇にたのむ。

獵人に撃たれし狐の子供敵を討ちたき由を願ふ。」

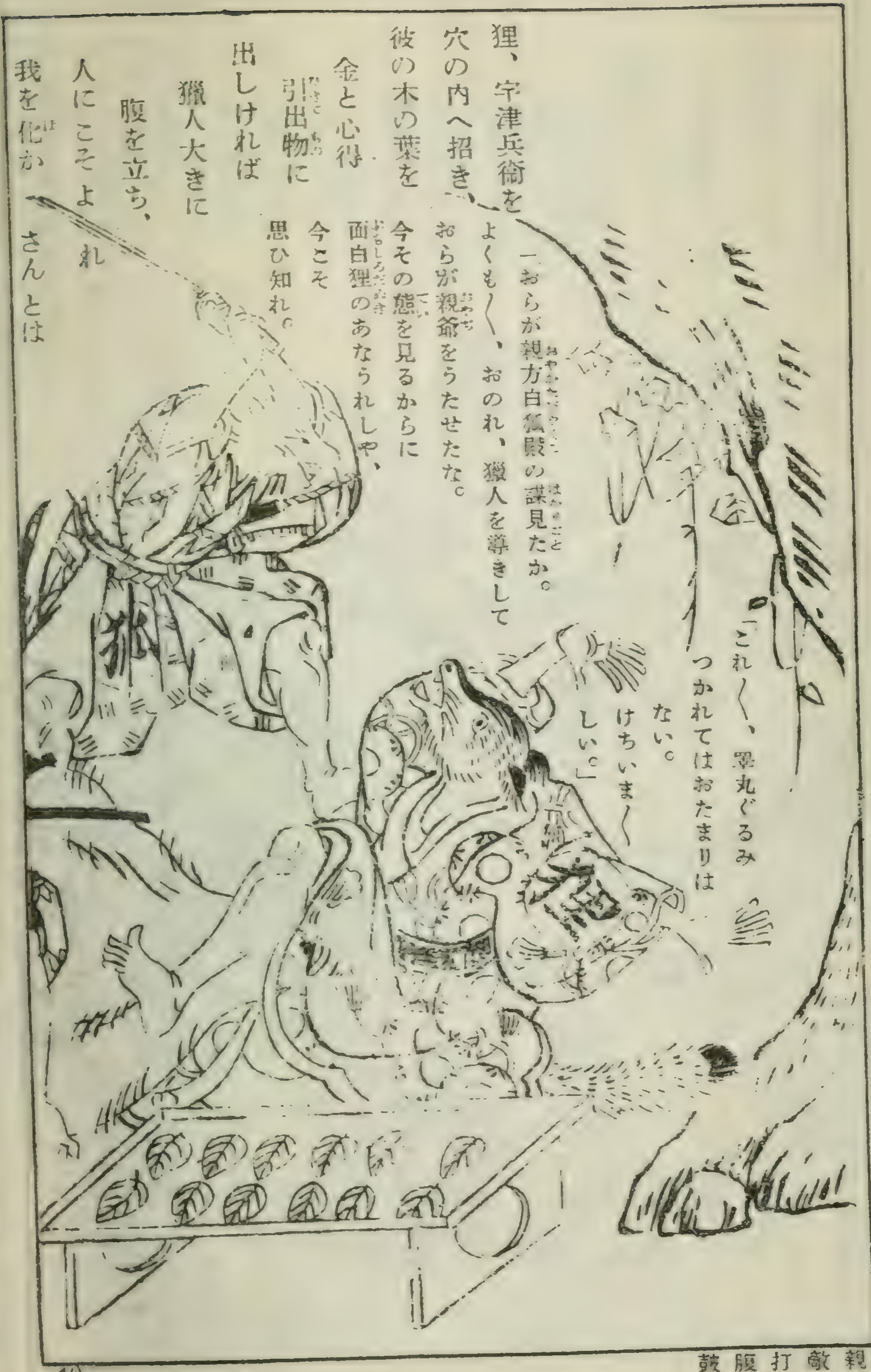
「汝が恩ある宇津兵衛なれどもたばかりて此子狐共に討たせなば、汝を狸の金比羅に祭りて得させん。その金は當座の褒美なるぞ。」

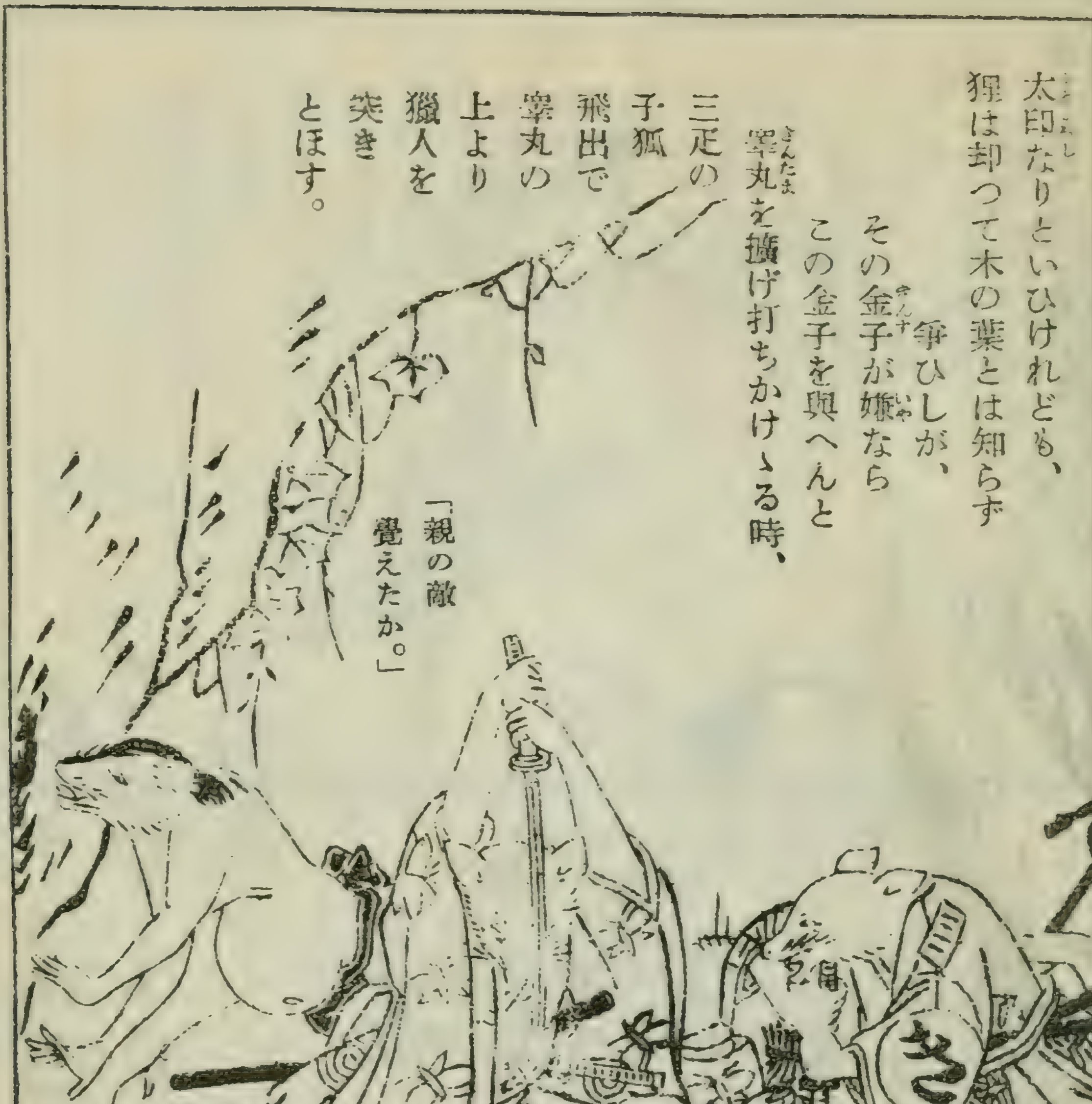
「敵を討ちし祝儀に
事寄せ
宇津兵衛を
我穴の内に
招ぎよせ申さん。
方々は豫(かね)て
我穴の内に
忍び居給へ。
例の睾丸(きんたま)を
うちかくるを
合圖(あひづ)に、
いづれも仇を
報い給へ」と
しめし合せけり。



狸は、木の葉を
小判なりと思ひ喜ぶ。
同じ化仲間(ばけなかま)にても
油断のならぬ世の中なり。

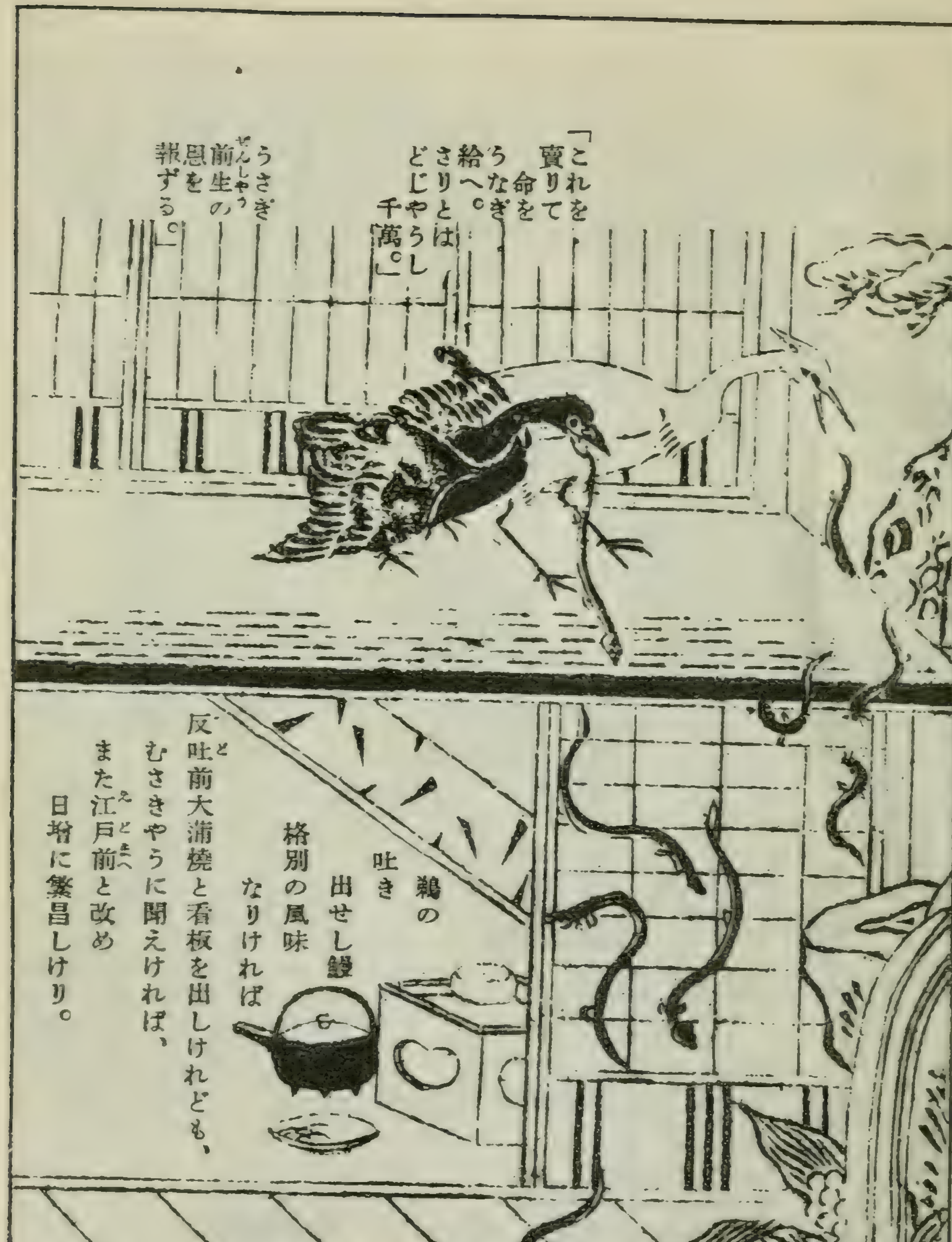
「委細
かしこまり
ました」


狸、宇津兵衛を穴の内へ招き、彼の木の葉を金と心得引出物に出しければ猟人大きに腹を立ち、人にこそよれ我を化かさんとは今こそ思ひ知れ。
一おらが親方白狐賊の謀見たか。よくも〳〵、おのれ、猟人を導きしておらが親爺をうたせたな。今その態を見るからに面白狸のあならうれしや、
「これ〳〵、睾丸ぐるみつかれてはおたまりはない。けちいま〳〵しい。」


太印なりといひけれども、
狸は却つて木の葉とは知らず
爭ひしが、
その金子が嫌なら
この金子を與へんと
睾丸を擲げ打ちかけゝる時、
三足の
子狐
飛出で
睾丸の
上より
獵人を
突き
とほす。
「親の敵
覺えたか。」
「いつぞは
うつべい〳〵と
思ひ儲けし
こん〳〵
今日。」
「たばかられたか
無念な。」
隣穴の狸
客の取持に來り、
此態を見て
逃げ行く。

さても夏の頃
大いに日でりして
鰻泥鰌大切物なれば
中田屋も
客がたさに商賣止り、
大きに難儀し、
妻のお花三兩の金につまり手水鉢に向ひ
ほまち無間を
つきしに、
不思議や、
鶉と驚
と來り
三兩ほ
との鰻
泥鰌を
はらり
〳〵と
吐き
出す。




「これを賣りて命をうなぎ給へ。さりとはどじやうし千萬。」
「うさぎ前生の恩を報ずる。」
鵜の吐き出せし鰻格別の風味なりければ反吐前大蒲焼と看板を出しけれども、むさきやうに聞えければ、また江戸前と改め日増に繁昌しけり。


かくて
かる右衛門
生膾を
差上げければ
侍にとりたてられ、
芦野重右衛門と改め
重く用ゐられ、
在所の
親爺をも引取り
楽々と育み、
其身も
立身
して
富栄え
けり。
喜三二戯作
「長生をすれば又
このやうな
目出度い春にも
會ひ申す。」
「千代萬代も
お榮えを
願ひ奉り
ます。」
戀川春町画

長生見度記

大門口



序

友人戀川春町が作りし楠無益委記をよみつゝとろ〳〵とまどろみし夢のうちに徼人皇三萬三千三百三十三代にあたりて、いやましに治れる御代のさまを見侍りしが、無益委記の趣に少しも違ふ事なし。而てかの巻に漏たる事をひろひあげて、又小册としゞあはれ長生してかゝる事をまさに見たしと思ふより、とりあへず長生見度記と題して

喜三二書

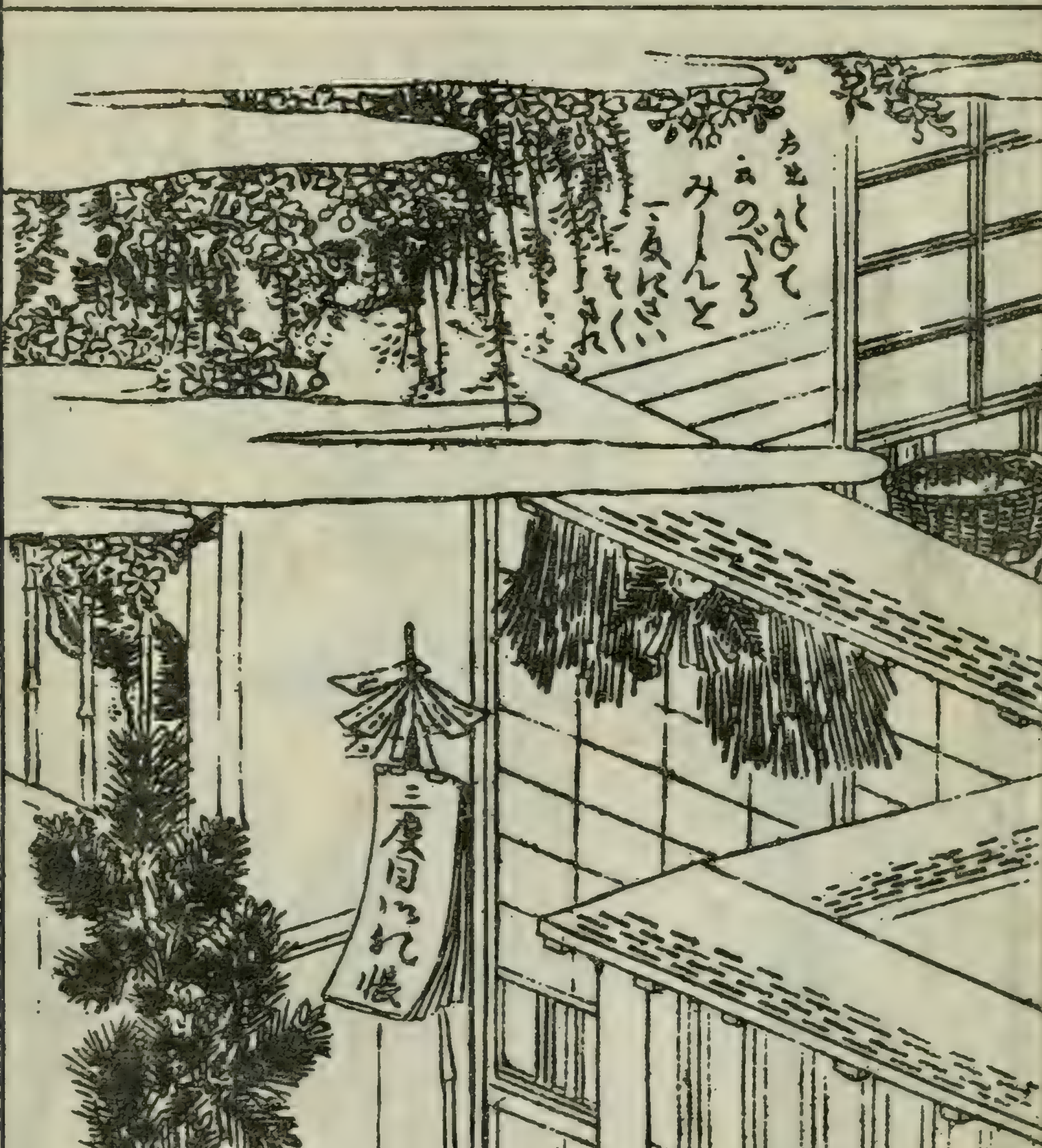
序

東人恋川春町が作りし猶無益委記を
よみつゝおかしくとまどろみし夢のうらつゝに
彼人皇の万三千三百三十三代めあたりく
いやましに治まる御代の千歳を見給ひしが
無益委記の趣にずしも遠ふゆゑなし
而くり此巻に編する事をしらい
あげく又小冊としあつれし長生しかくれ
書をとまさに見せしと思ふもろとてあくで
長生見度記と號しく　喜三二書

正月の三つある歳にて娘の子はねゝ様のべゝを五つ縫つて下されといびれば息子はかゝ様長い話をして聞かせなとせがむ剰隣の子まで來ておばさん摘草に連れておいで、とかねて言ひのべたる未進を一度に催促される。
「それでも正



月の三つある時といふ約束だものを。」
「ア、もう氣上りがするやうだ、正月の五つある時まで待ちや。」



三年のうちに彼岸に當る者は定業、當らぬは非業の死といへども、與一兵衛も勘平も其年の八月彼岸に當りければ、これも嘘に極まりしが、今では大きに心得ちがへて、三年の内に當る人は上戸、當らぬは下戸と覺えたるもをかし。

彼岸には必ず



天氣悪しく、別けて中日荒れとて犬に荒れる、其時米の相場狂ふ。

「明日が中日(ちうにち)ならばおらが内も勾張(かつぱり)でもかはずはなるまい。」

「雨やめたい佛南無雨たい屈。」

「此降にはひがんとも致し方が御座りませぬ。」

「どうでも彼岸のしるしで悪いお日和(ひより)で御座ります。」



女の奉公人切米男より高し

「おはりかへし物は御指南を得ませう。お切米は五兩三分戴きたう御座います。」

「去年から居た所には子供衆でも有つたのか。」

「若旦那樣とお孃樣が御座りました。」



「おらが五六雨も切米（きりまい）をとればとうに折介（をりすけ）も止（や）めてしまふ。さりとは女中衆は美しい。」



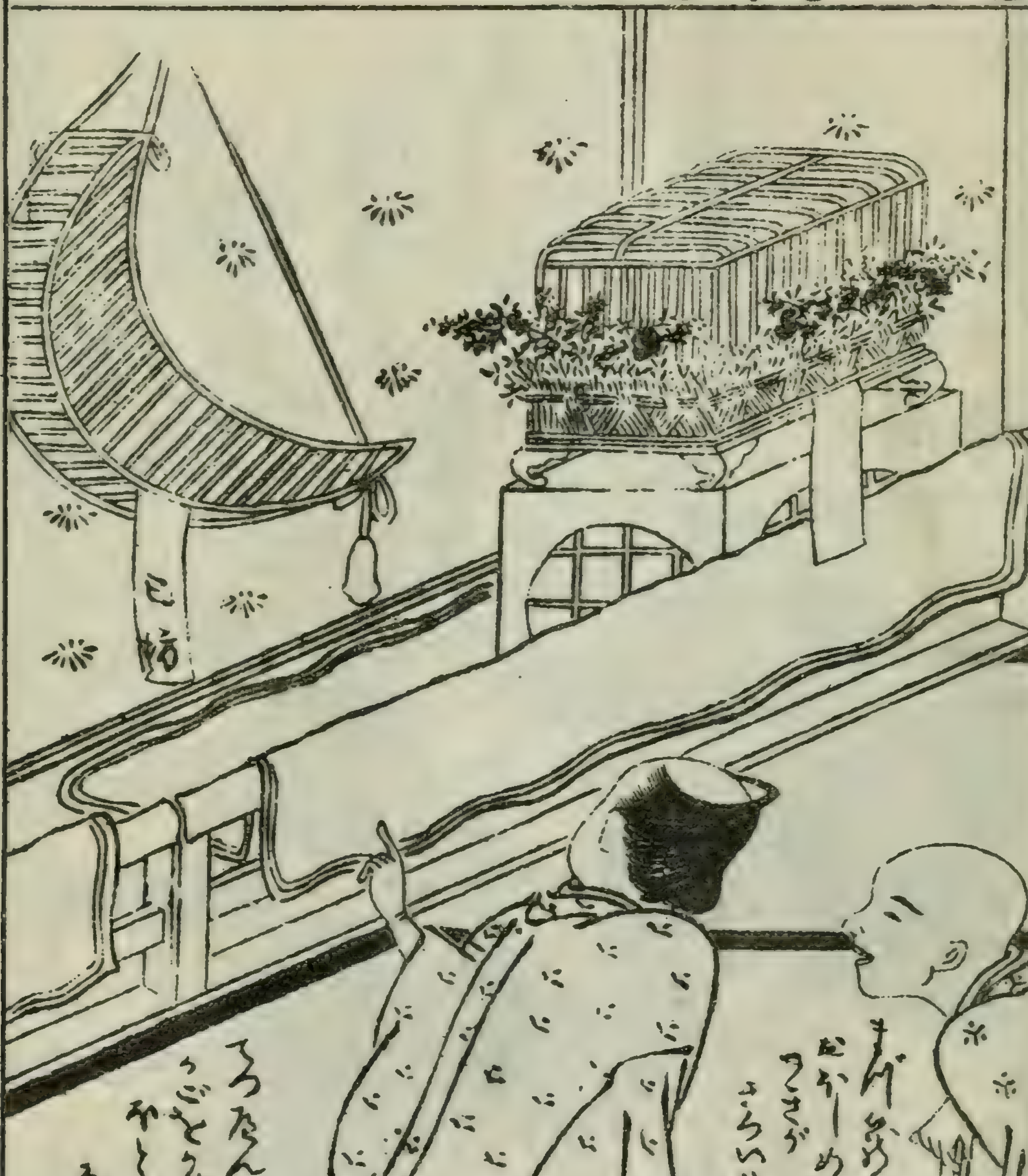
ほとゝぎすの會あり。

昔は時鳥といふものは山にばかり有つた物と見えて、古歌にはとかく山時鳥と詠んで御座ります山では食物に困りさうな事の。

「さう飲んではへどゝぎすさ。」



「まづ籠の思召附がきつい物だ。」
「天邊へ籠をかけたか時鳥、なんとどうだらうか。」



角力があると鬼角雨が降る故、雨のもらぬやうに芝居をたて雨天三十日興行する。「角力は入梅内の事さ。今度の地蔵が嶽は小さな男だが轉ばぬ奴だ。」

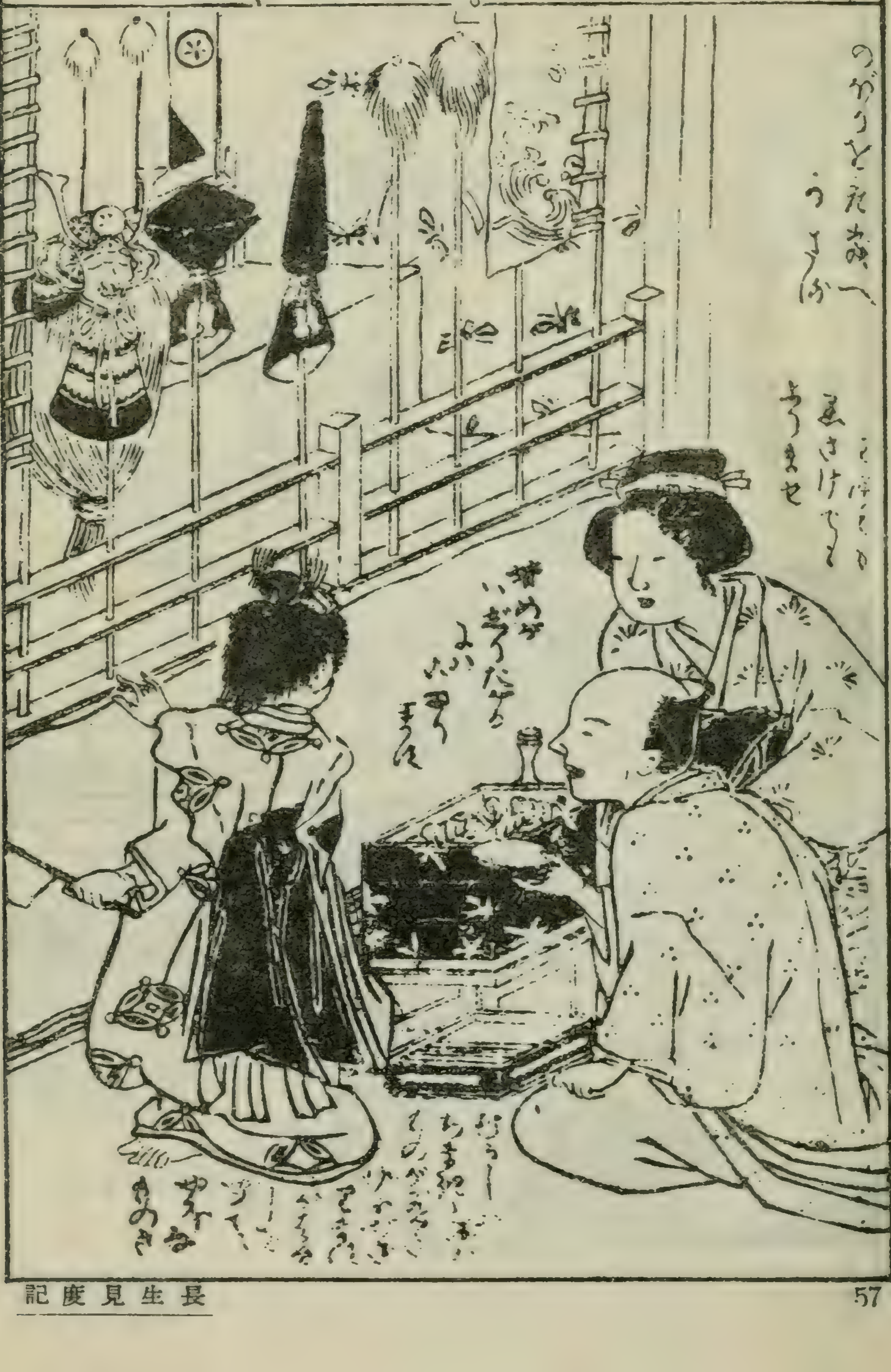


幟（のぼり）を座敷へ飾る。

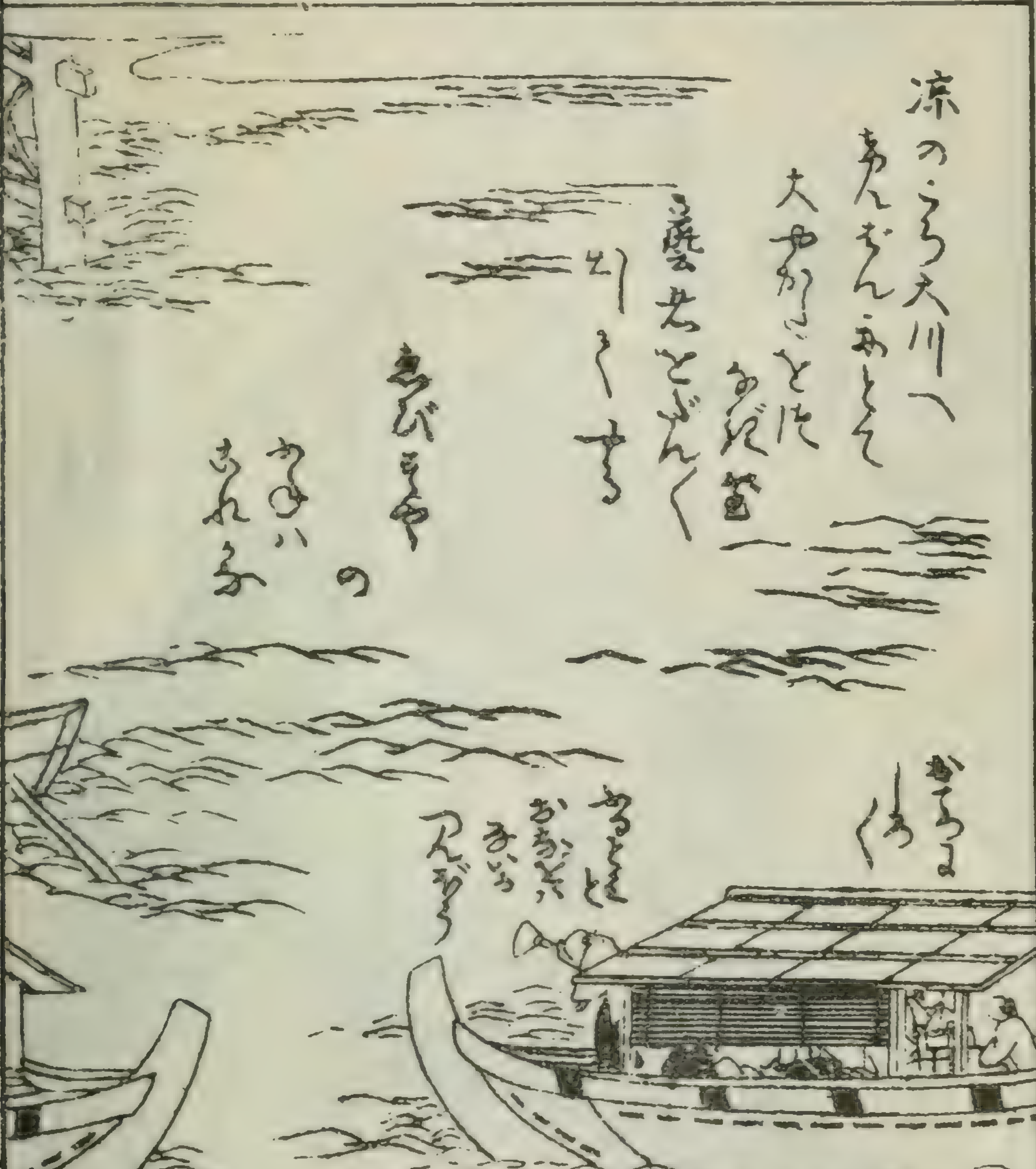
「柏餅でも黒酒（くろざけ）でも上りませ。」

「妹めがいぢりたがるには困ります。」

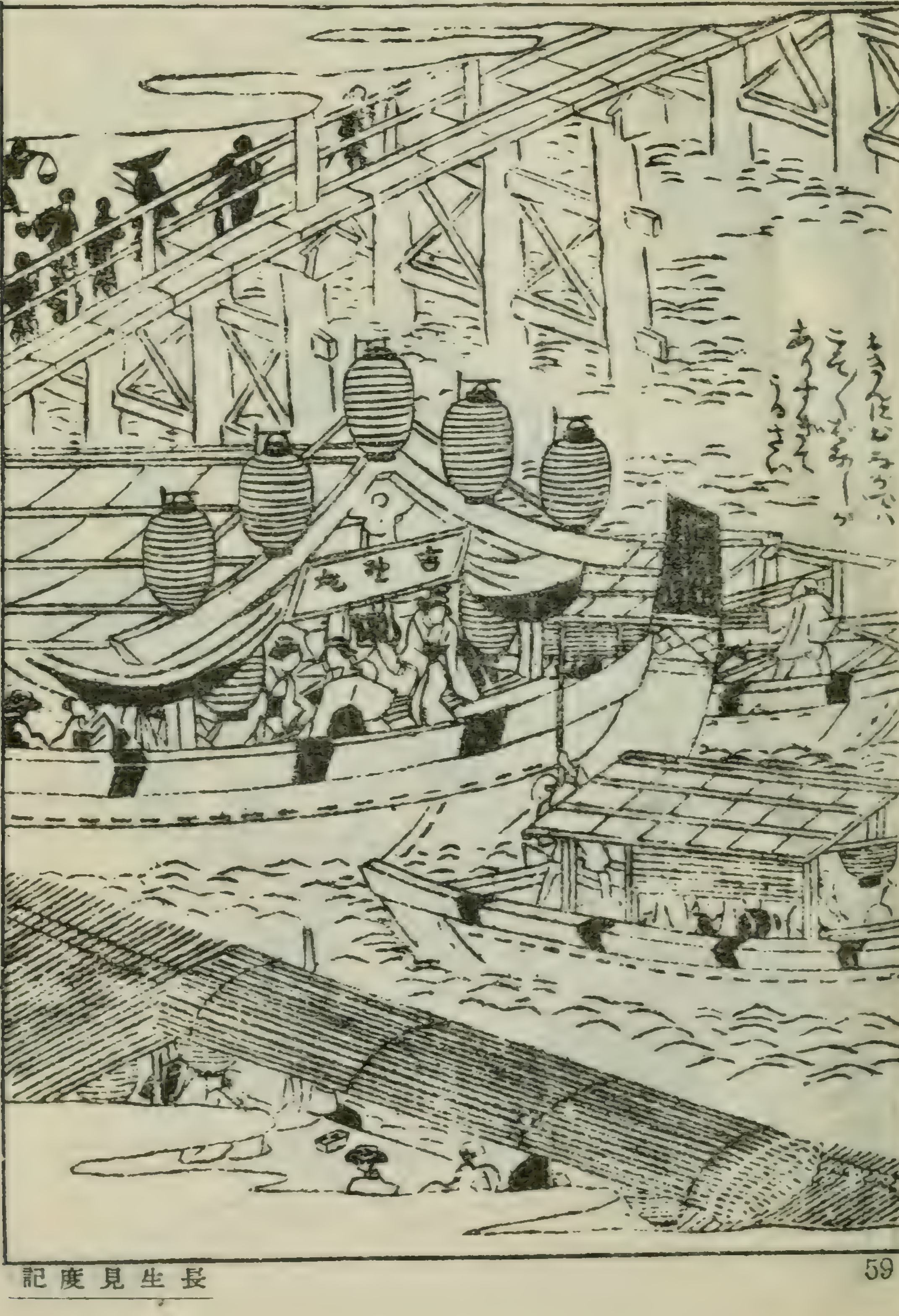
「昔は粽（ちまき）といふものが有つたげに御座りますが、話で聞いては野暮なものさ。」



涼の頃大川へ見番舟とて、大館船を繋ぎ置き、藝者を段々出してやる。
「惠美須屋の舟はこれかな。」
「ふる富とお直はないか、つんぼう。」
「おきんにお仲ではこそこそ話があ



り過ぎてうるさい。」「おてつにしろ〳〵。」けんばんたる後朝中流(こうてうちうりう)にとゞまる、何か堅い事を言出した、艾屋(もぐさや)がどうして見番舟にいるものだ。



高輪の海手、新地出來て高輪の茶屋兩側となり、向が閊（つか）えて暑がる。

「高輪茶屋の歸るさにどうだ有難いか。」

「椎の木三本と付けねば請取られぬ。」



「廿六夜様を拝みに今年は神奈川の臺へ行きませう。」



女の石尊参り男より多し。石尊様のお山も段々木を切りすかし、道幅廣く家建ち込みければ天狗の棲む所もなき程の事にて美なる参詣数多なれば、壁の白きに通を失ひ、杉の木末より落ちて、鼻を打折り、又は羽節を打折り、是非なく只の山伏となつて紛かせば、山伏は我が株を天狗に渡して素人となる。



「あのほんやま〱が食ひたい。」
「此やうな物を擔いで行くは全體大無理村の無理薬細工だ。」
「かゝさん肩が痛い。」
吉原道者(だうじゃ)が見える。
「おいらん、いつそ草臥れんした。」
「此子は馬鹿らしいの。」

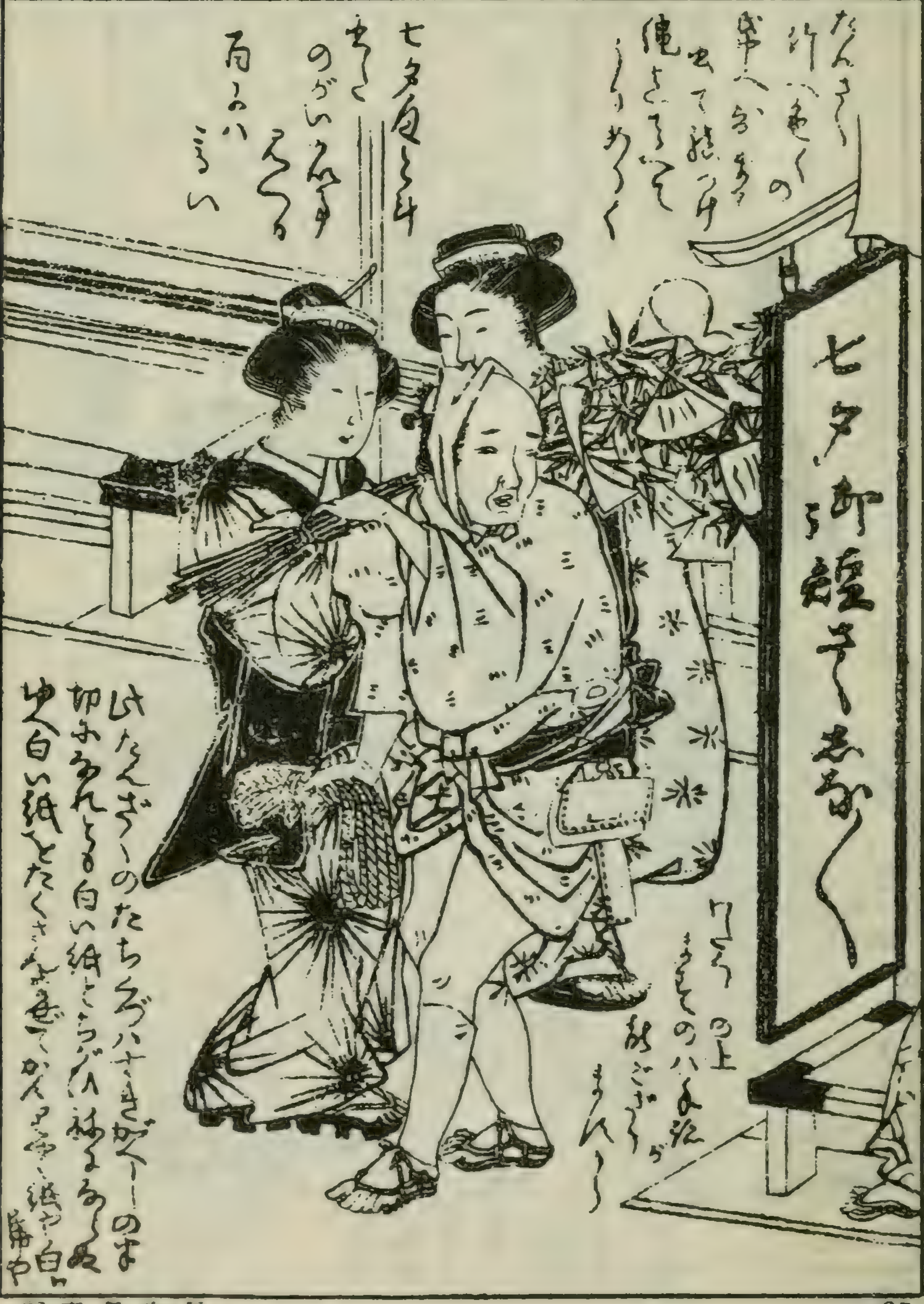


七夕の短冊を百枚十文づゝにて書いて渡す。紙捻（こより）を添へて穴も開けてよこすのを紙捻を通して渡すのが三百枚通して五文づゝ。短冊竹へ色々の紙へ歌まで書いて結びつけ繩まで添へて賣り歩く。

此短冊のたち屑は漉返しの半切（はんきれ）になれども、白い紙と違ひ、値（ね）にならぬ故、白い紙を澤山に混ぜて簡略紙（かんりやくし）や、白（はく）ウ紙や



「二三枚書かぬのを混ぜてくんな。」
「とても事に皆書かぬのにしな。」
「七夕様とばかり書いたのがいかい事見える、百には高い。」
「わたくしの上げますのは、手跡が能う御座りますから。」



八月になれば月見といふ物をして、吉原へ客の來る事なし。十一日頃より二十日過迄は見世を引いて休みなり。

「月見といふ物は何故喰ひ物のないものだね。」

「から暇で居て酒や肴がいつものやうに有るならさぞよからうね。」



深川邊の寺に萩を植ゑ、萩寺と名づけ、客は座敷へ來障子をたて込め、萩の上風(うはかぜ)を聞いて樂しむ。

「あのに水にさかだち、ざはノ\といふ所がどうもいへぬ。」

「此間に鹿寺へ鹿を聞きに參りませう。」



江戸芭蕉の塚三十三所程に殖えて、俳人參詣する、御發句といふ物に節をつけ唱へながら歩く。「一番ㇾに牛ィ島ァのヲ雪ィ見ィ塚、いざさらば雪ィ見にィ轉ぶヲ、とヲこヲろヲまァで。三圍には其角塚といふが出來て餘り照續きて作のために惡い時は百姓此塚に雨を祈れば、忽ち雨降る。就四ツにて拍子をとりながら、二人に



て祈る。其祝詞（のつと）に曰く。「夕立や田をみめぐりの神ならば降らしやんせぬは怨みぢやと、あけ暮に思うて暮らすえ。「三十三所歩くはちつとうちやす。秩父の開帳のやうに芭蕉塚を一つ所へ片付けたいね。」「金通を誘つた所が一昨日片瀬へ立つたといつて來やした。日蓮の御難へ行く位なら、今日江戸を歩けばえゝさりとは俗な奴だ。」



顔見世前紋看板出る。

江戸

若女形 娘形 中島

三甫右衛門

敵役 岩井

半四郎

「天幸が揚巻に介六は篠塚浦右衛門、意休は半四郎だといふ事だ。此奴はきつと宜からう。」

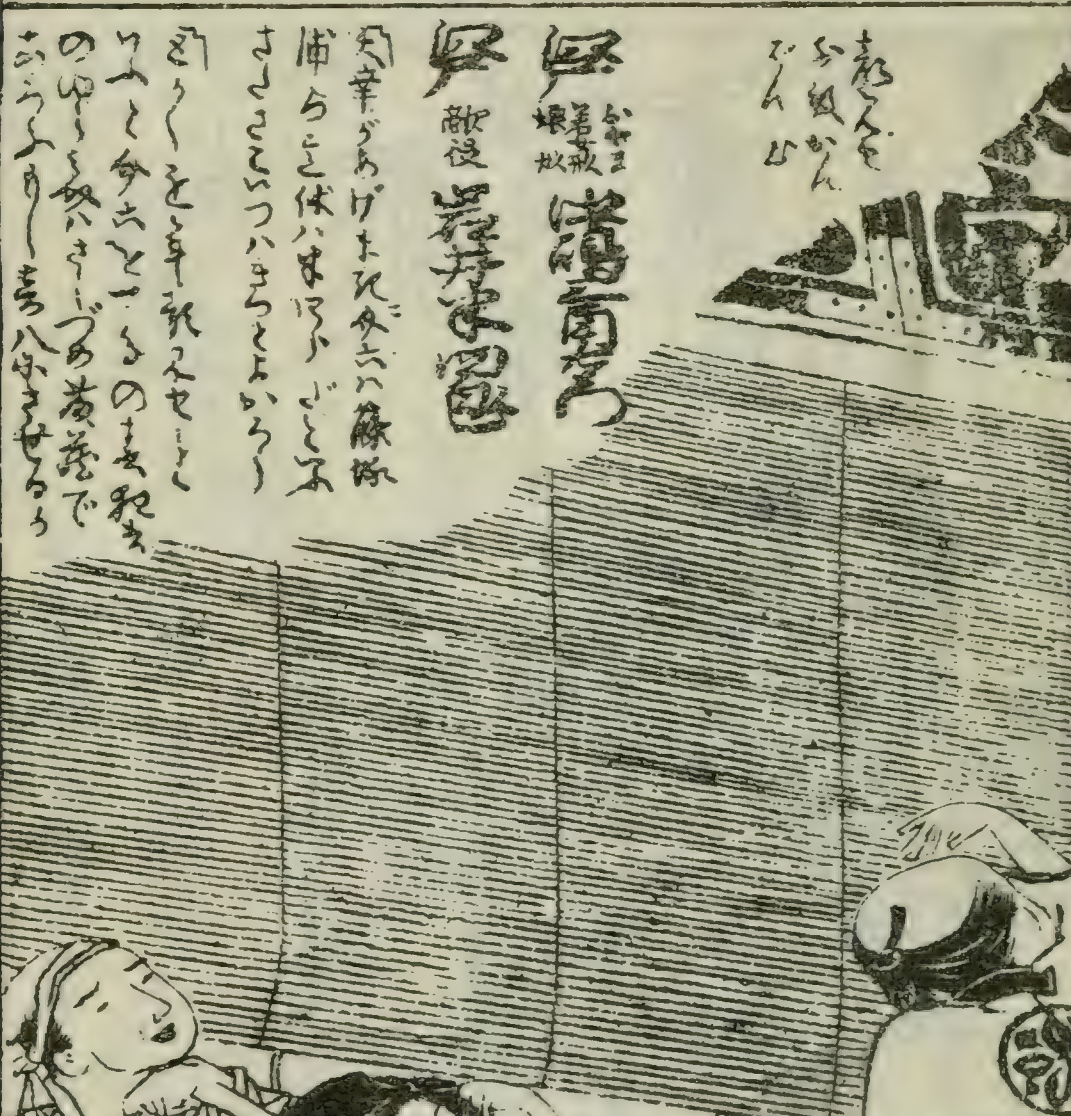


「兎角近年顔見世といふと介六をするの。春狂言の由良之助はさしづめ藤蔵であらう。もし音八にさせるか。」

「市川紋之介といふ道化(だつけ)は下(くだ)りか。」

「あれは江戸から行つた大谷廣右衛門といつた若衆方のことさ。」

「あの火で干して居るのは土手だの、うらは波さ。」



「春興入を上げますか、いくら位の所がお望みで御座ります。」

「こゝへ大小を百枚下され、思附は悪くても廉いのがよい。」



「大小をかねて、両節は値段が難しからうの。」

「名開（ひらき）の刷物は新板だの、人のかへぬ内、おらも名をかへようか知らぬ。」

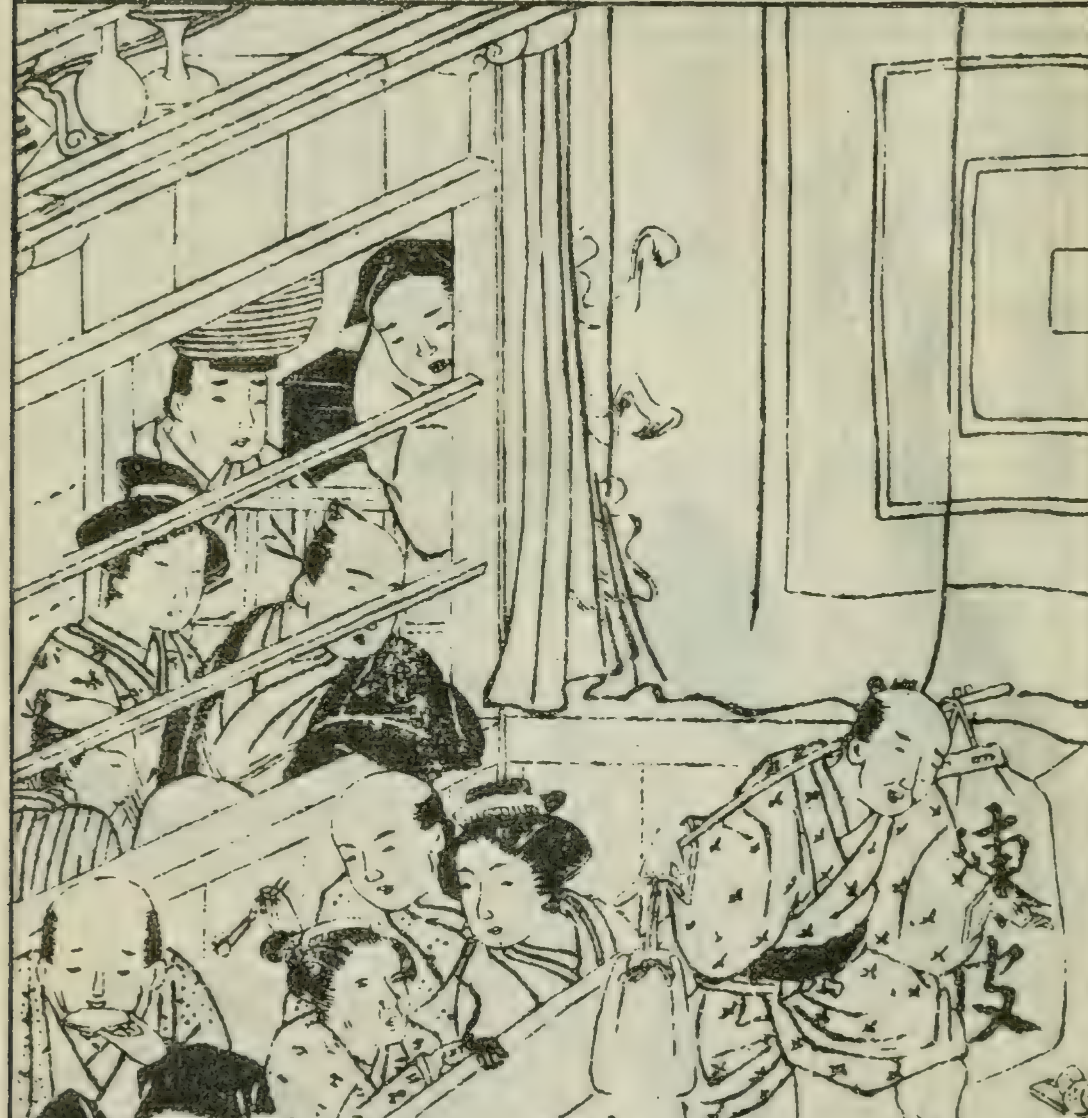


顔見世切落しを陳皮買（ちんぴかい）歩く、尻尾をつけて投げるなどはとんと無い事。
「おこし、蜜柑。」
「これ陳皮よ、此處にもあるぞ。」
「今此皮も賣るぞ。」
「蒟蒻の殘も買手があるとえゝ。」
「五文よこせ。」



「あて事もねえ二文〳〵。」

「隣の入りと來ては途方もない事さ、隣とこつちとでは陣皮ばかりも十貫目から上ちがふといふ。お半長右衛門この方の入りだといひやす。」

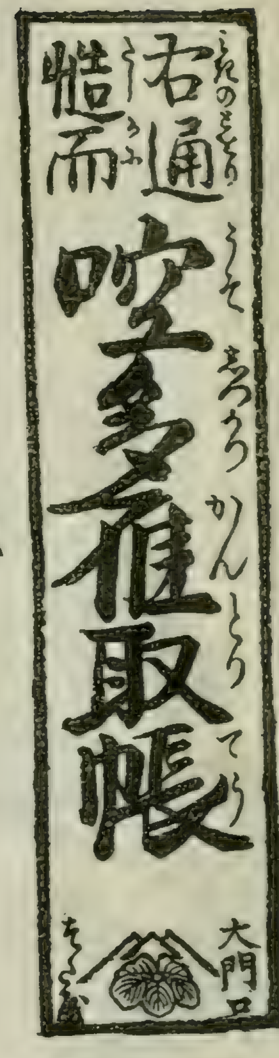


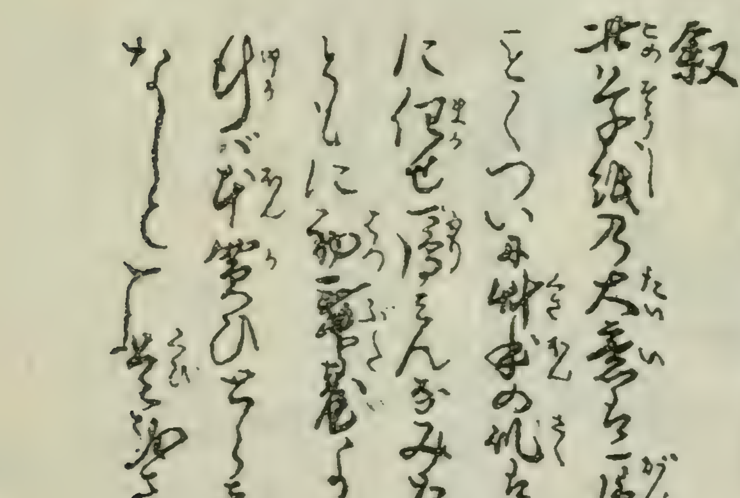
師走鏡餅五寸六寸乃至一尺それ〲に飾り物、鹽物、破魔弓、羽子板、そへていくら、ごまめぱかり二つ添へていくらと注文次第に取りにやる但し十二月朔日より、歳暮の使を出し、二十日頃は喰積まで拵へ二十一日頃より年忘れの女郎買初る。

「今年から惣領の破魔弓はやめて先度生れたのへばかり遣るとさ。」

「此頃はとんともう年忘れ年忘れで、ろくに寝ぬから睡たくつてならねえ。今夜は新造買の明日までぐい寝にせう。貫公は例のであらう。所詮正月はとかまり印えゝはらだ。」







敍

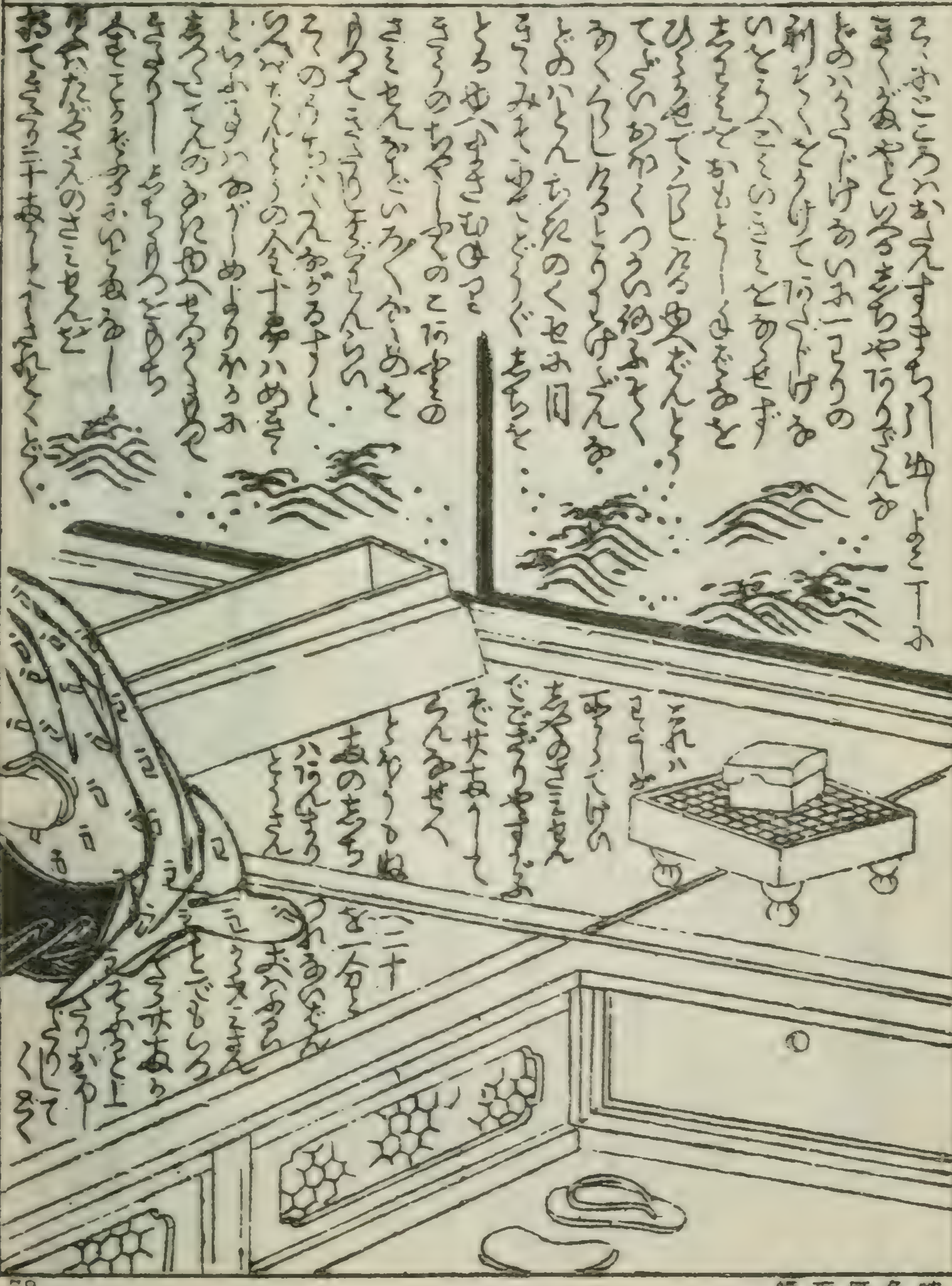
此草紙の大意は、雁が飛べば、石龜のじたんだといふ如く、つひに草本の作はなさねども、蔦十が趣向を咄すに任せ雁みんなみなさるやうにとならば、舊作ともに初舞臺よき御評判に跡の雁が先へ行かば本買ひとらしよ、雁々の三つものとなして雁首を下げて申上げます

奈蒔野馬乎人

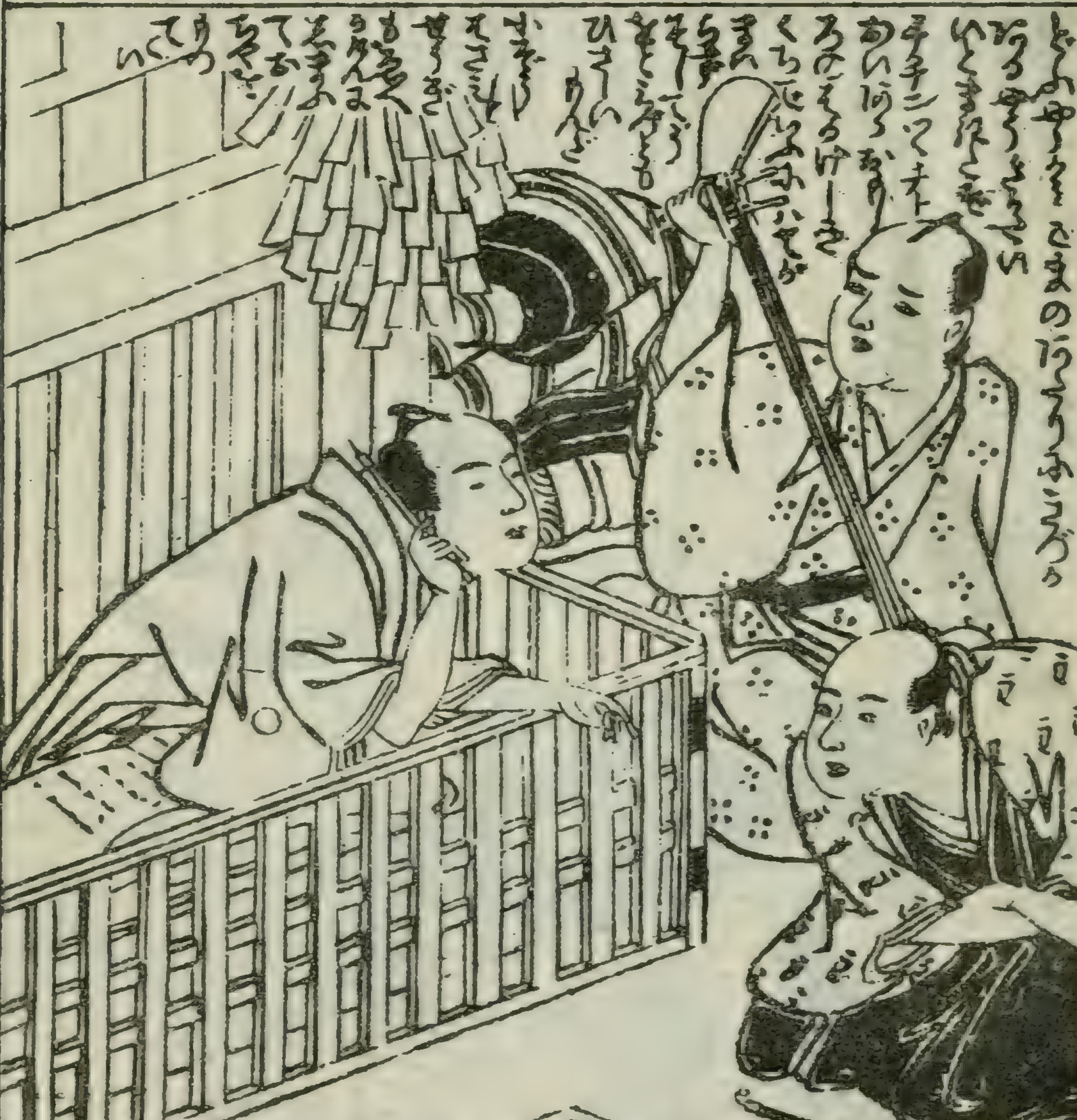
こゝにところはお箪笥町引出し横丁にきくがま屋といへる質屋あり。旦那殿はかたじけないに一割の利息をかけて、あたじけないを植ゑこみ、意氣みをならせず呑みを主とし、手淺をひゞかせて暮しける故、番頭手代多く使ひ、何不足なく暮しける。とりわけ旦那殿はとんちきの辯に目利味噌にて道具質をとる故、正宗利久の茶杓の古近江の三味線などいろ／＼なものを持つて來りしが、元來こゝのうちは旦那が留守といへば、番頭の金十郎は目利といふ事は盲目より知つた點のなき故、折角持つて來りし質物を持ち歸すこと數ふるに暇なし。今日は鐵刀木の三味線を持つて來り、二十兩貸して下されと口說く。

「これはわたしが所柄で藝者の三味線でござりやす。どうぞ二十兩貸してくんなせえ。」

「なんぼたがやさんだといひなすつても、旦那



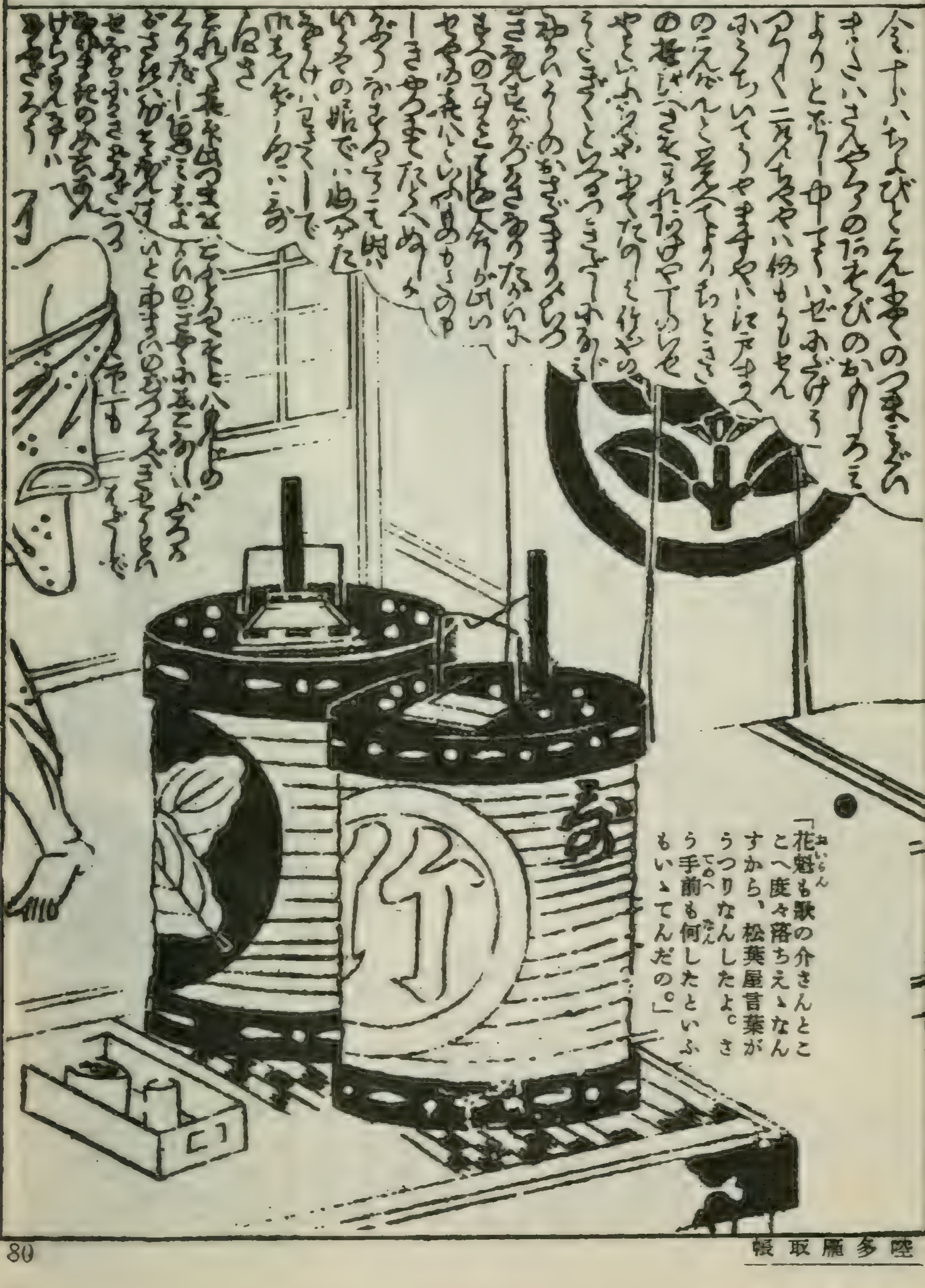
「殿は留守なり、わたしはちつとばかり米櫃を嗇る位はずりやすが道具の方はお先眞暗、旦那の歸るまで一分持つていきな。二日ばかりに二十兩遣ひ果して一分殘るといふ文句さ。せん度の袷羽織も返しなせえ。但、附け更へかの。」
「途方もねえ、二十兩の質を一分とは餘りつれない番頭さん、丈は古いから才三さんとでも云つたら、二十兩貸さうか。」
と上げたり下ろしたりしてくどく。
「何うやらかみ駒のあたりに瑕があるやうだ。堅い糸巻だぞ。チチンツツチトおいあら面白の春景色、口でいふには手が廻らず、そして魚と水とも久しいもんだ。」
「小僧、挾み將棋も、えゝ加減にしまうて、お茶を持つて來い。」



金十郎は、ちよびと蒟蒻の摘み食ひ、または山谷くらの遊びの面白味より土橋中町は錢だけうつくしく、二軒茶屋は何もかもせんにうち、銀杏屋、桝屋は江戸前の根元と覺えてより、ちと北の遊びへ誘はれ、揚屋町の伊勢屋といふ茶屋にて樂しみ竹屋の歌菊といへる突出しに馴染み、初會うらのお定りより、いつ來なんすが數重なり、互に末のことを話し合ひしが、この伊勢屋の喜八といふものも頼もしき奴にて、

「たとひ、主がかぶりなすつたら、その時は、糸屋の娘ではねえが、店請けはわたくしで御新造樣は歌樣さ。」

「これ〳〵喜印。この裙をからとつて、外八文字のくり出し歩み、初會の客にしこなしは、ぶろかゝさきへぼとたぼん、酸いと甘いの賓くらべ、起請誓(紙)脊中にかき、どうだ鶴市もはだして、逃げ卷の



「花魁も歌の介さんとこゝへ度々落ちえゝなんすから、松葉屋言葉がうつりなんしたよ。さう手前も何したといふもいゝてんだの。」

助六、あんけらもん平はどうだらう。」
もし旦那へ、二階で歌の介さんの云ひなんすには、いつそむら様は酔ひ潰(つぶ)れて寝て居なんすから、今宵(こよひ)帰(けえ)し申して心許ならありいす、泊め申さうと云ひなんすが、さうしても可(よ)からうかね。金様えゝ加減に裁きなんし。」
「二階の客人は引け時分に帰し申せばいゝ。袖の梅でも買つて来て上げたがいゝ。金さんの道中はおそろが池の大蛇、一瓢や麥斗が昔を思ひ出します。」
「ヲヤ〳〵馬鹿らしいよ、道中の眞似かえ。富士太郎が後前(あとさき)になりいしたよ。」
「二階に外の客人もありいす、ちつと靜かにしなんし。」
「歌野や、また眠るぢやアねえか。」



金十は旦那の金で奢りちらし、仲の町は人目を忍しと揚屋町で洒落しが、散菊にのぼりつめ、揚を無性に憎がり、鐘つき[illegible]を親の敵のやうにいはしが、朝の帰りのずいぶん[illegible]りには大門で必ず[illegible]と鐘が耳に這り、[illegible]なしこさる井戸の[illegible]六ツ[illegible]い[illegible]ころへ来た時分、[illegible]しえ何ぞ忘れやァなんせんかといはれ、頭を振るも人目を恥ぢれども、心の中では内の工面を[illegible]向つくつて案じ、十一両[illegible]首へ[illegible]もかけられず、も面倒なりとな[illegible]養にな[illegible]さお為なり。

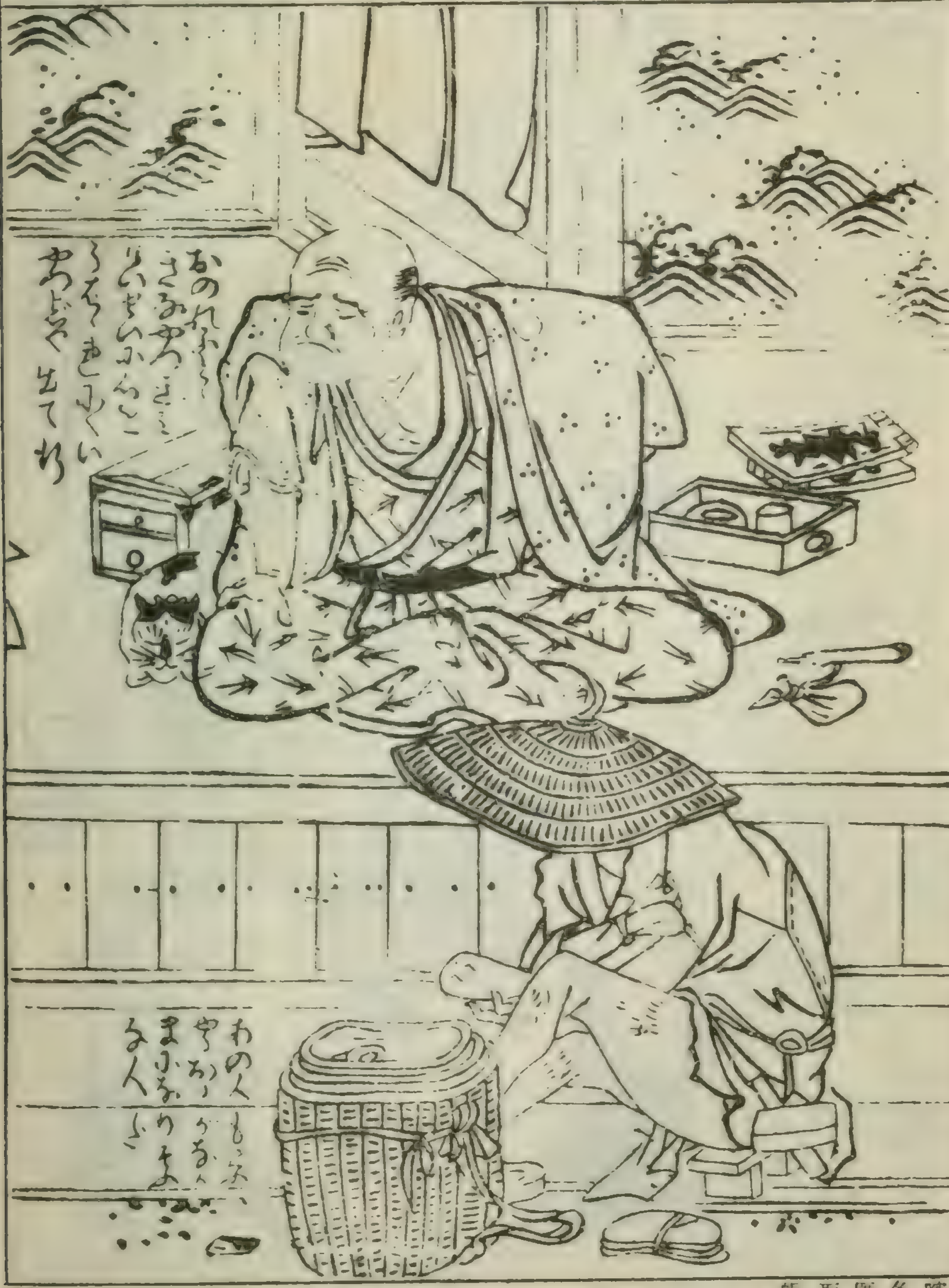
こゝの内にも[illegible]た[illegible]事ある。もう一ぽん鐘だぜえで今夜はなぜか引けが見えね



えの。」
「むからに人〳〵、早く來さつせえよ。」
あすの朝は茶漬を食ひのずい歸りだぜえ。今夜は大方菊ぞのか菊の井といふ名代らしい晩だ。」
「惡推(わるすい)ばかり仰(おつせ)んす。行燈(あんどん)に無駄事、もう歸るも古い奴ね。」
「もう歌の介樣はとんだお志のよいたて引きも御座ります。手はよし、唄はなさる、ほんに六(りく)藝とやら、厄介とやらが揃ひやした。」
「またはあそこの格子先面白さうに話(はな)して、居さしやんしたと聞く時は、泌(し)み〳〵腹も、立田山。」



金十郎は流連けなどが度かさなり、親方の大のもうせんとなり、親方のおやぢ甚だ腹をたち、古温袍に縫蓙一枚にてお掃ひ箱の身となりしが、いつぞや喜八がまさかの時はどうともといひし言葉にまかせ料理番でもしてみる氣になりしが、世にありし時質にとりし鐵刀木といふ三味線は高いものなるよし、これから箍屋を初めけるが、初手のうちは釣瓶の底の抜けたのや、四斗樽を切つて水桶にする位の事をして、裏店住居してゐるうち、揚屋町の喜八たのしき奴にて、淺草竹町に表店を借りて手桶を夥しく仕込みける。



「おのれ不屆な奴。君傾城に心を奪はれ、皆々奴ぢや、出て行け。」

「ア、氣の毒な事だ。今まで二の膳を食つた代りにこれからはお冷飯の長だ。金々が過ぎたからあの通り、大通のしまひは鈍通には劣つたものだ。」

「あの人もどうやらおらが仲間になりさうな人だ。」

久しいものだが、頼風といふ身だね。座一つで、飛鳥の別れ、おのれを責むるおのが家、出でゝ行くとこそ悲しけれ。」



それより喜八が店請(うけ)になり、竹町邊に店借りして桶屋をはじめしが、今日は長屋振舞をはじめしが、一つ長屋の左次兵衛が話に、おらは嘘を筑紫の果てと御座るが、途方もない寒い國で、雁や鴨が大きな池に凍りついてゐるのを頸をねぢつてはとりとり腰へつけて出ます。これを通ひでとりに行く故に雁取帳といふを拵へ、がん谷關でその鳥肉を改めます、金十これを聞いて膝を潰し、

「何とそれはとつて來て安針町へ賣つてやるといふ所はどうだあらう。」

「そりやアいゝ點さ。」

「どうぞ路銀を拵へて金儲けに行きたいものだ。」

「今時の傾城に誠なしとは嘘さ、誠も少しは有馬山、また喜八が諸事世話をして葬の鏡、と洒落るも根つから冴えやせん。」



もうお一つ、お咄し

毎日たが屋殿は昔の客に引き代へて、がたりなしりして、憂きを送りしが、いつぞや雁の凍りついて居る話をきゝ、内へは市に賣り出す手桶を萬と揃へんと手間取りを多く入れて、その身は雁の國へと赴きしは咄の種とぞなりけるは、どうやら萬八のおつ延せらしい仕打ちを一肌抜けてまゐります。

この箍懸けてしまつたら柳行李を買つて來て雁をしよしめに行きませう。もしとれぬときはがんといふ話だ。



金十羅國の道行

ごんと打つ鐘に唄は多けれど[illegible]といふ名に隠れて、身を紫紫の雲國へ、[illegible]根[illegible]を東[illegible]に行く心の中の懸心の、利口にはしやべれども、一[illegible]がまやなれば、本読む事も奈良[illegible]、黄帽子は高く思へども、[illegible]方ばかり金[illegible]大[illegible]とせつかれて、どうぞ今度は[illegible]をいくらも捉まへて楽[illegible]をせん志、内へは手間を入れ仕事、當所もなしに旅に出るとは大[illegible]、人の手柄をかり捲に、つるべた錢を儲け溜め、世間の奴を[illegible]頓と、[illegible]めて見んと思ひつゝ、旅の衣装をみがきたが、[illegible]て出でて行く、慾の程こそうたてけれ」



「何だかとんだ所へ来た。中田圃といふ所だ。これよりさきに道もなく、頼光殿に腰をかけ、といふ風景だ。」



雁國へ行きついてみたところが、左次兵衞が話に違はず、雁はみんな凍りついてゐる故、雪の中を押しわけ〳〵、頭を捻ぢつては腰へはさめば、その重たきことは挽臼を腰へつけた樣なり。雁どもは人を見ても飛ぶことも ならず、みんながんといふ目に逢ひしは、この國よりぞはじまりける。「これは〳〵凄じい雁だ。みんながつとしてゐるが、どうやらきつ先生の化かすといふ仕打ちではないか、



空多雁取帳

家鴨なれば來い來い豆食はせうとも云はうが、雁來い〳〵小豆を食はせう。」



思いれ雁を腰につけて、しよつて立たんとする時、東おしの・あの景色おかく、朝日たちなりしかば、雁に挾みし雁の羽六羽次第に開けて蝙八百羽ほどの雁が羽ばたきをする音は鐵砲だまに帆を掛けたるが如く、金十郎も一時に雁と一緒に飛び行くありさまは、その昔桃若は天狗に淩はれ金十郎は雁に淩はれ、見ぬ國々を見下しありくこそをかしけれ。

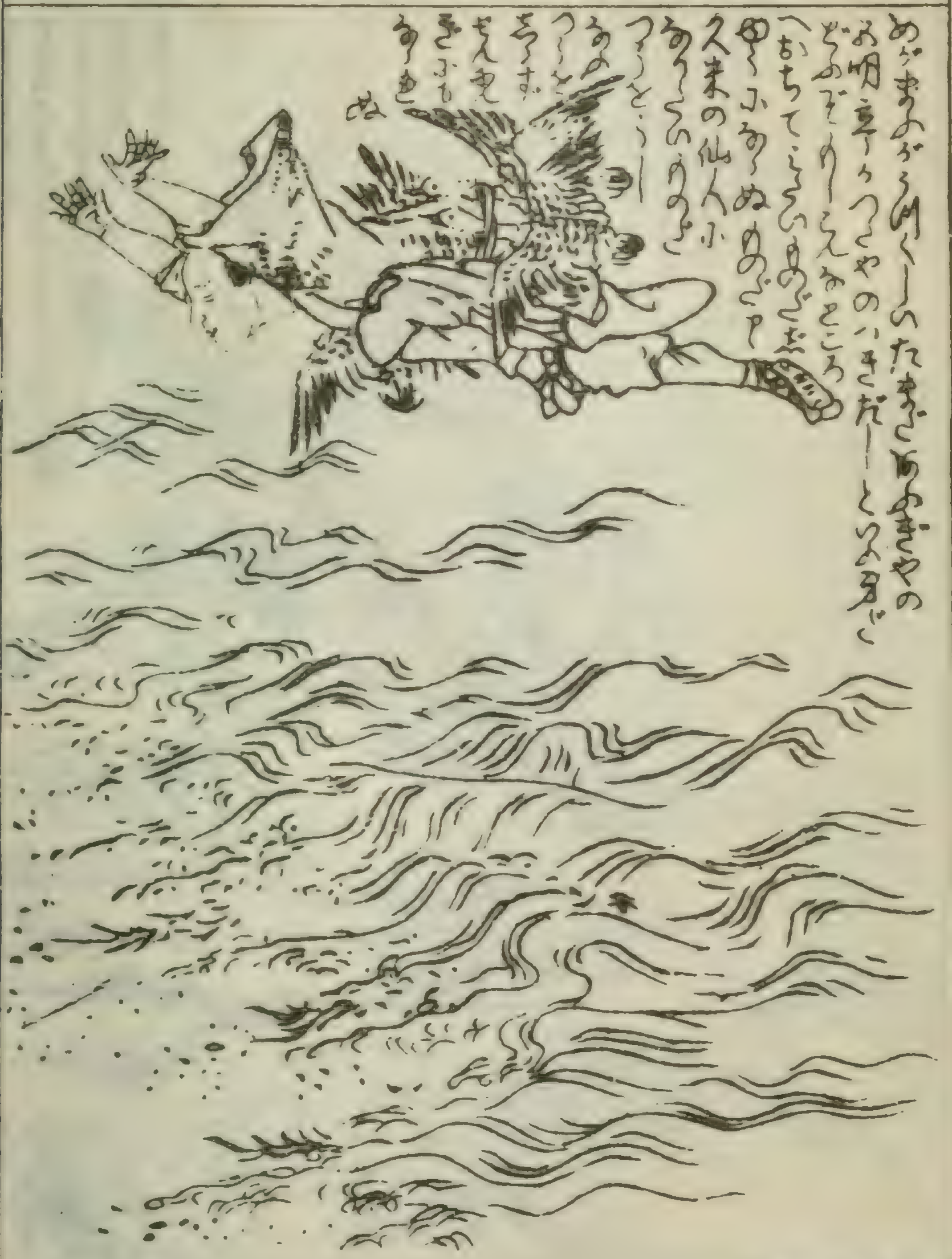
お



「鶴に乗つた仙人は見たが、雁に乗つたはこれがはじめて。さぞ内では駈落でもしたと思ふであらう。ほんの雁が飛べばしつぽんの地團駄。」



見下せばいきちよん國のありさまは、うちに錢少く、きやんこくかんはその昔こりやまたといふうんつくが、とはうもないを植ゑしとかや。大通國には大樣に錢金萬（ぜにかね）とききちらし似た山のうぬ櫻、文の使は來たりぶらまの山、女子の島には男なく、向島の如くなる舟着き宜しき所にて、舟から客のあがる時於橋へ迎に出るお茶屋の役、中居といふとも中にみず、太鼓といふとも音もなし。金次第にて鵬利生（はたりしやう）ある國々を鵬と一しよに飛び行き、とまりも知らぬ雲の上、雲を掴（つか）むといふ事も、かゝる事をやいふなるべし。



「目が舞ふがうつくしい玉だ。扇屋の五明亭（ごめいてい）か、葛屋の突出しといふ身だ。どうぞもしこんなところへ落ちてみたいものだ。自由にならぬものだ。ア、久米の仙人になりたいものだ。通を失ふ通を知らず。仙人気（き）にもなられぬ。」

「あれ見なんし、雁と一しよに道中をしいす。人間の様だね。あれが比翼の鳥とやらでありいせう。どうか助兵衛さうに見えいすよ。」

「おさきどん見さつせい。アレが久米の平内とやらいふ仙人かの。」

「おまへとんだ事をおつせえす。そりやア久米の天人さ。」



金十も物を食はずに飛びあるきし故、蟲酸も走りしまひ腹が脊へつくほど、ひだるくなりし故、帶は段々緩くなるに從ひ、雁は殘らずがや〳〵で、いつ來なんすといふ捨て言葉の暇乞もせず飛び行く故、金十は羽根なき鳥の如くにて伯良が羽衣を質に入れた如く、大人國へ眞逆樣に稻光どろ〳〵の世話もなく雲の破れから落ちかゝりしは、久米の仙人二代の後胤ともいふべし。

一さて大きな頭の國だ。久米の仙人は脛の白いを見て通を失ふが、おれは頭の通を失ふとは、世が末になれば脛と頭ほどちがふものだ。」



大人國の名主殿の引窓から茶釜の上、薬罐の蓋の上へ落ちしを、娘や母親寄り合ひ、弄びにする。
「よく御覧うじまし、豆人形とは大方この事で御座りやせう。」
「餘り弄り廻はして潰さねえやうにしやれ。」
とねぶにしたる鬼灯の如くとり扱ひけり。
「さても大きな女だ。仁王の嫁御だあらう。たゞしは奈良の大佛の娘か、釋迦が嶽が花魁といふやうな事か。」
「あれ何か言ひやすよ。」



それより大人共みな〳〵寄り合ひ、汝は何人なりといふ故、われは大日本江戸の生れなるが、此國へ來りし事、無上に寳より數寄が交など出して見せければ、その方が商賣は何なりと問ひし時、私は箍屋なりと挨拶する。そんなら手習の鏡を懸けて哭れろとたのむ故まづ飯の種にありつき、珍らしき人なりとて大盃に酒を振舞ふ。合十八石の盃を兩手とり、腹中の力を出してやう〳〵持ちあげ半分呑みしが、その酒およそ三升ばかり、肴は何か知らねども挾んでさしたるを、兩手にて俵を持つやうに肩へあげて腰をのし、横の方からむつとづゝ食ひける。時に大人共は歌菊が文を見れば、こまかな上に小さくして見えず、よつて虫眼鏡に入れてこれを讀む。



「あい、零れます、ではねえ潰れます〳〵花さんが描いた浮瀬の盃が随分大きいが、これから見ては小原でもねえ。」

「しつかりと持て〳〵。」

「おれが所の手盥もちと小さいから、ちと大きくして貰はう。さしわたし八尺位あればいい。」

「何だ、ようも〳〵せんじはからうしに御すゝませなされさみしく夜をあかしまゐらせ候。いやな奴だがいゝ手だ。歌菊といふはどんな女だか見たいものだ。」

「さあ、おれにも見せたがいゝ。手前ばかり見ずともちつと見せ·こよみ。」



手鏡の箍を懸けてみるところに、江戸の井戸側より十層倍大きし。よっていろいろにして櫻ノ木に消しあけ段々と箍を懸けしが、箍の組蕪一つに色々と工夫すれども懸らず、その上箍はまはつて来る。そろそろと泣き出す故、大人共はどつと笑ふ。その時金十そばにありける大人の上着をしばし假りに着て、既に拍子をはじめける。

どうせう寺

雁に恨みは数々ござる初手に雁をとる時は、諸行無性につかむなり、後に羽をのす時は、世上滅多に飛びあるき、天上のゑひ腹も寂滅爲樂となり、大人國へどつたり落ちるぞはかなける。

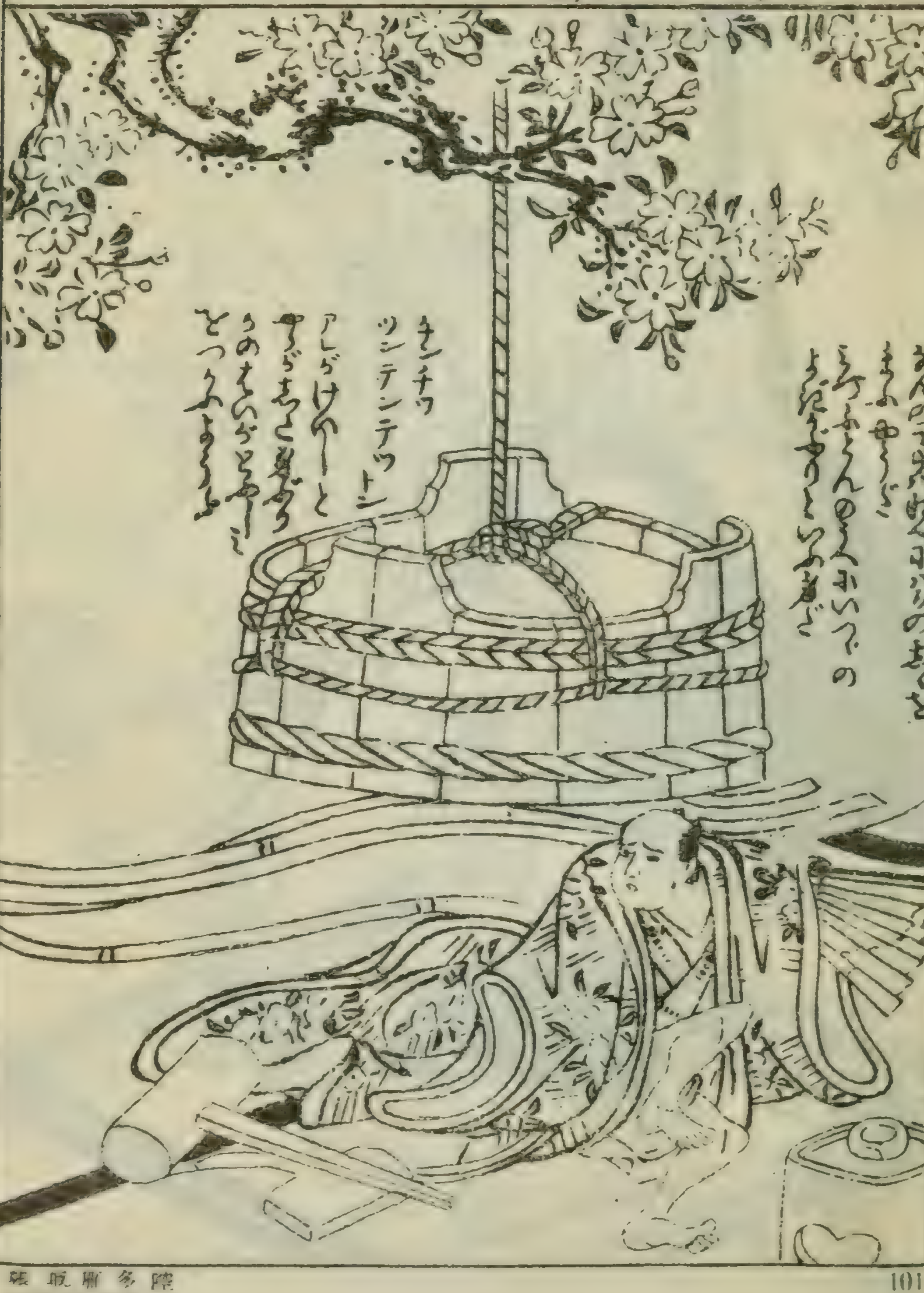


「何のことはねえ、俄の獅子を舞ふやうだ。」

「三つ蒲團の上に五つの夜着かぶりといふ身だ。」

「チンチツンテンテツトン。」

「アレが慶子とやらおした身振りかの。蝋が燈心をつかふやうだ。」



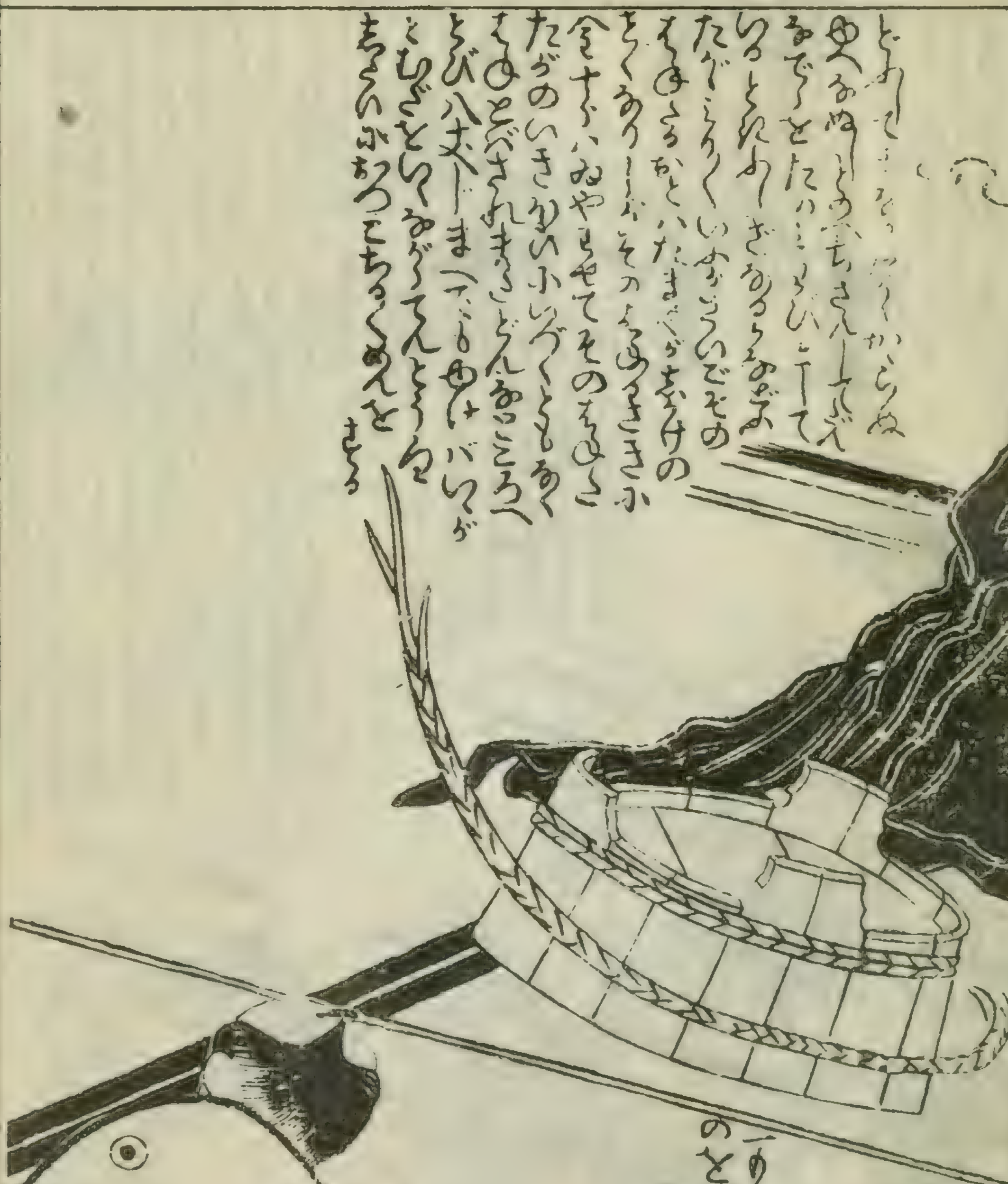
どうしても中籤が懸らぬ故、名主殿へ持参して旦那寺を頼み詫び言してゐる折、不思議たるかな、鬮籤がみり／＼いふが最期、その跳ねたる音は玉屋が仕掛の如くなりしが、そのはねるさきに金十郎は居合はせて、その跳ねた籤の勢に、いづくともなく跳ねとばされ、またどんなところへとび八丈島へでも行けばいゝがと、むだをいひながら、天道様次第におつこちる工面をする。



「あれ〳〵褌の下りが見えます。

「一文凧の緒の切れたやうだ。」

「とんだことゝは大方此んな事だあらう。」

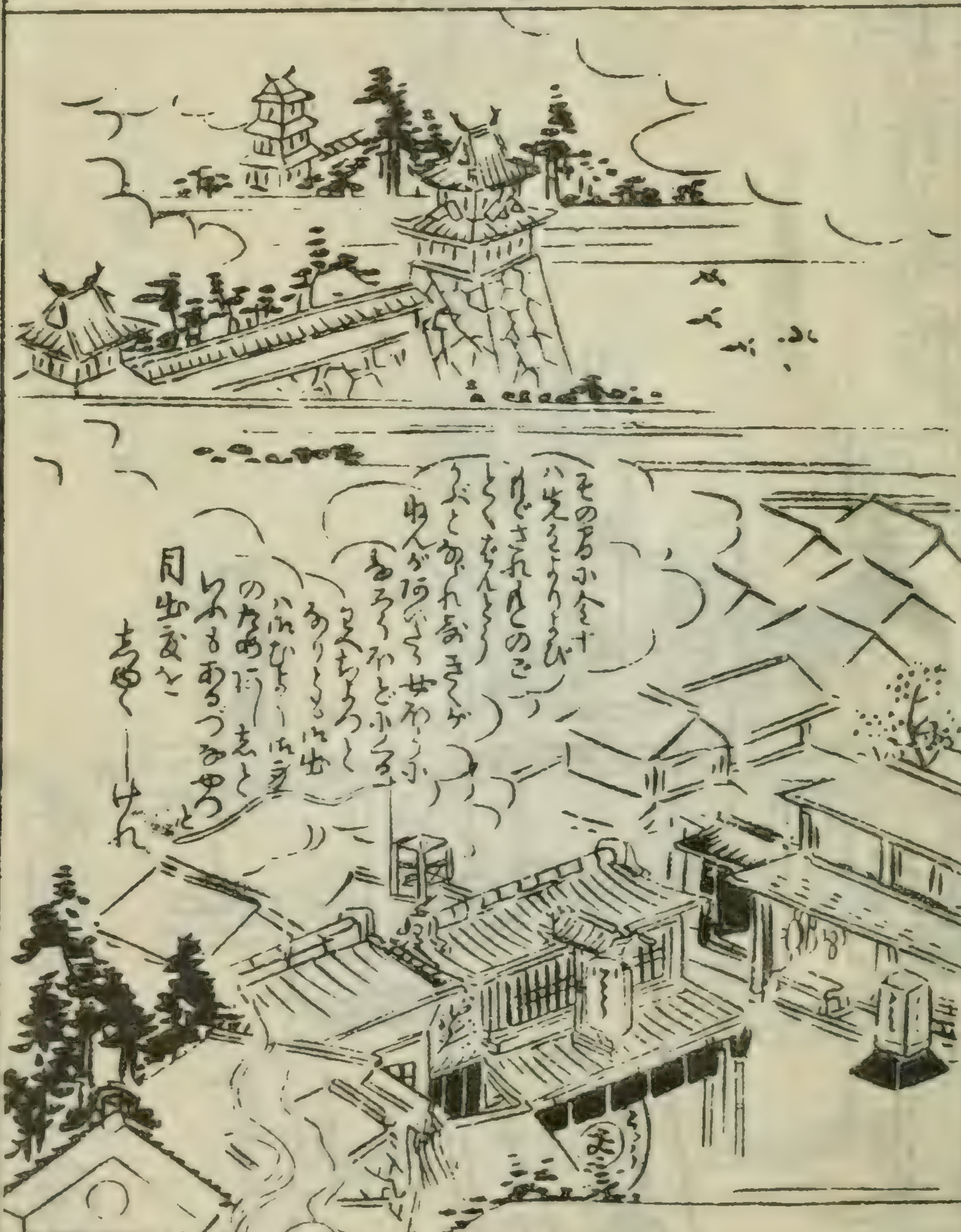


金十郎は跳ねられたる勢に、いづくともなく飛びあるき、浅草蔵前通りへ飛んで来て、やう／＼おのれがうちの前の手桶の積み上げたる上に落ちかゝりし故、家内の手間とり共何事ならんと見てあれば、旦那殿なり。これは／＼丁度よい時お帰り、明日は浅草の市なれば、留守に拵へた飯手桶を残らず賣り出さんといはれて、金十郎も件の様子を話し、大笑ひをして、夜も明ければ手桶を運び出し、奥山狭しと積み並べしに、吉原より来りしとて、只一日に十二萬三千四百五十六の手桶を買ひ上げしは、驚の潰れしことなれども、金十は金儲けしたあとで、よく聞ければ、歌菊が喜八といひ合せ、主に金も盗られまいしと、違つてのけたる達引(たてひき)狂言。



「犬の糞や馬の糞のねえところへ落ちればいゝが、犬道人殺さずだ、あんまり行き過ぎて海へでものめりこみ、青海苔にでもなつて年玉になるもいゝところだあらう。」

その間に金十は先主（せんしゆ）より呼び戻され、もとの如く番頭様となられ、歌菊が年（ねん）があいたら女房にならうほどに、廓（くるわ）へちよつとなりとも御出は御無用、御身の爲惡しといふもある圖（づ）な奴と、目出度を祝しけれ。



このところは皆様御推量でも知れた千秋萬歳、書くはきつい無駄。



狂言好野暮大名

きやうげんずきやぼだいみやう



昔々、鼻の下長門守殿の子息馬之介殿と聞えしは大名の懐子(ふところご)と、譬の通りの大様(おほやう)なれども、一家中を憐み給ふ事、花魁(おいらん)が禿(かむろ)を可愛がるが如し。

「いかに浦右衛門、我も人も長壽でなければならぬ。下下(しもじも)はいから身を労するもの故、施薬(せやく)をしようと思ふがどうだらう。」

家老淺黄浦右衛門「これはよい思召しつき、下々を憐れませらるゝ御仁心の程日本だ〳〵。」



されば馬之介殿家中へ施薬あるべき様子を、家老浦右衛門申し渡しければ、お長屋の女房娘皆々有難き由申し上げる。馬之介殿も御機嫌よく我等施薬の事を聞いて家中の女房娘子供かく喜び申す事、薬の冥加に叶ふべければ、すぐに薬の名に呼びて女の悦ぶ文字を其儘女悦丸と名づくべし、御家老殿如何に〳〵と宣ふ。浦右衛門眉をひそめ、女悦丸の名然るべからざる由申上げければ、然らば命を延ぶればとて長命丸と名



づくべし、如何に〳〵と又宣ふ。浦右衛門又此名差合(さしあひ)なりと申し上げしが大きに腹立ち給ふ。

「憚りながら女悦丸と申す名は差合、長命丸と申す名は不躾(ぶしつけ)でござります。その故如何となれば、後(あと)をいつちやアまけだ。」

「長命丸女悦丸の名何故(なにゆゑ)差合ぢや、仔細は何と〳〵。某(それがし)がいひ出したる事を用ゐぬ奴、身が前へはかなはぬ。立て〳〵。」



浦右衛門が金言却つて耳にさかひ、閉門仰せつけられければ、御家の忠臣残らず御前へ出、色々諫言を申上げる。

「殿には大通の相が見えますれども、余り野暮にて渡らせ給ふ。ちと通にお成り遊ばされませう、然し初めから廓通ひは御無用、まづ芝居から通にお成りなされませ。」

「成程、ちと芝居でも見物致さうよ。」



浦右衛門如き直臣を側を遠ざけらるゝ段、甚だよろしからざると申して唐の猿でござります。きやつとお叱りで堪忍なさるの事だ。まつた女悦丸長命丸の名は御前(ぜん)では申上げ憎い事もそれござるから、ノソレよしかソレと申上げしかば、殿にも御心解けて浦右衛門が閉門を許し給ふ。

床懸數馬
本田大藏
折目角兵衛



と若菜貞九郎之丞が殺さ家老中の連中を聞入れ急に桟敷を仰せつけられ老臣引連れ見物ある。

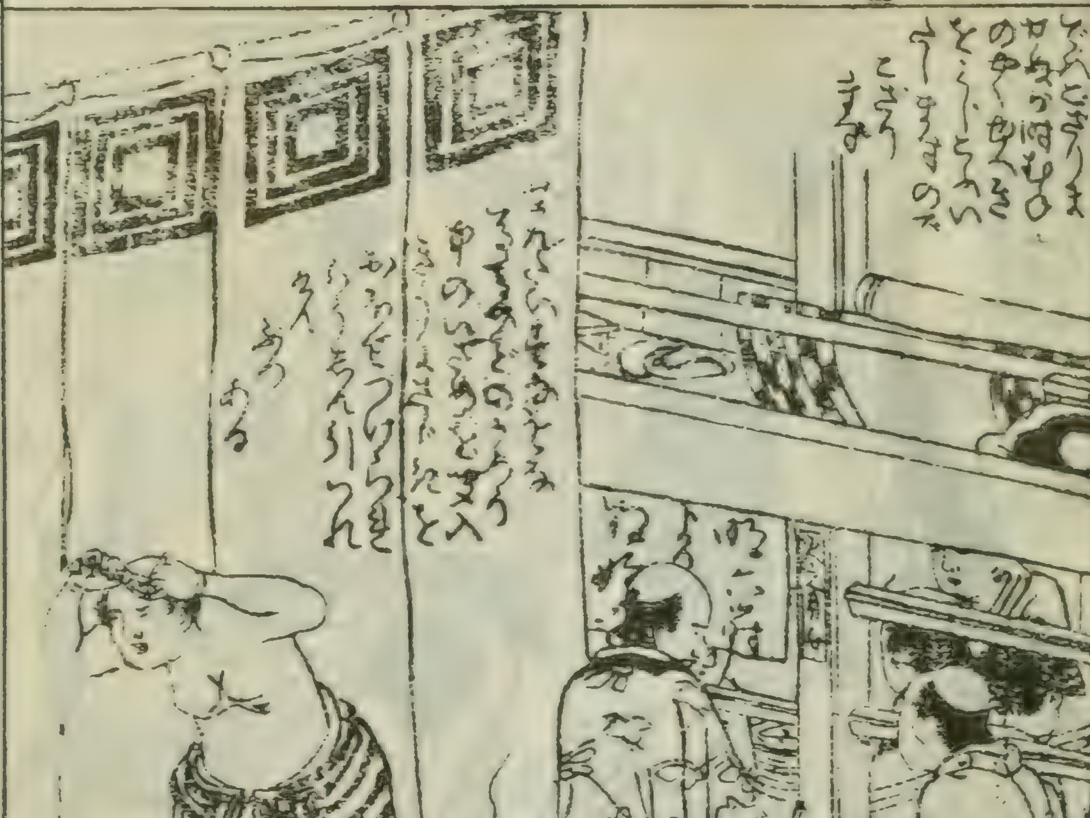
「今日の座頭は頼朝公か、祐経も團十郎、景清も團十郎ぢやな。さすれば景清と祐経を兼帯して居やるのか。」

「只今首を抜かれましたは稲荷町と申しまして役者の下々でござります。」

「門之介は日頃は短



氣ではございませぬが、時致(ときむね)の役者故氣を短う致します。」



萩大名や靫猿より外面白いと思うた事なき馬之介殿、芝居の面白味に心をうつし、芝居は通なるものと心得、諸事歌舞伎肌にし給ふ。

殿の思ひ附にて鼓に合せてお庭に水を打たせる。

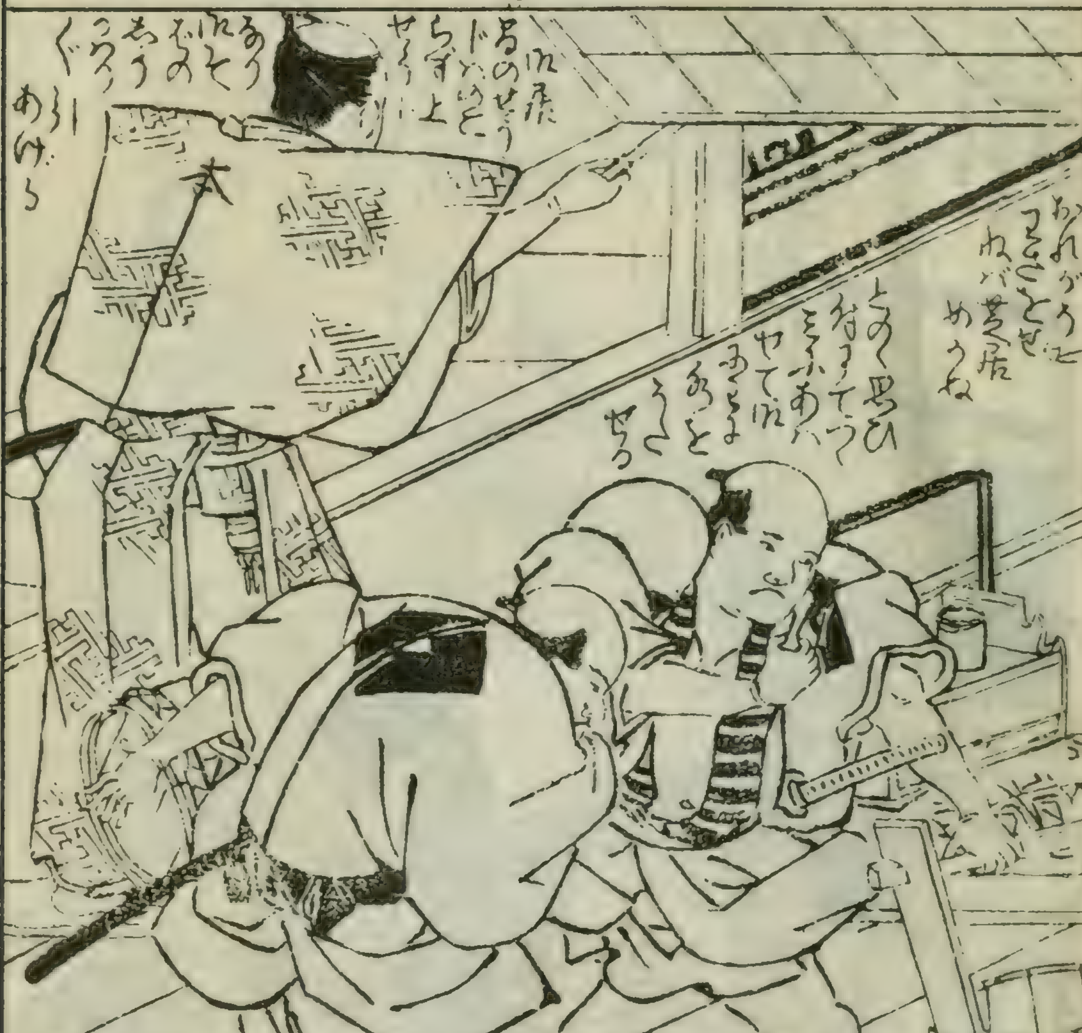
「ヨイヤサア。」

アリヤアリヤ〳〵。



「皆申しつけた通り
水は打つが後(あと)でお
れが噂をせねば芝
居めかぬ。」

御居間の障子は残
らず上げ障子なり。
お側の衆かはり
ぐ〵引上げる。



馬之介殿は何卒芝居で諸をとらんと明暮心掛け給ふ。或日御錠の日芝出て見給ふに、小間物屋と女中の話を立聞き、こゝぞ芝居の景物なりと不義者見つけた動くなと聲をかけて立出で給ふ。

「四ッ紅葉の帯はまだ出来ねえかえ」

「ハイ近日出来上ります」

此小間物ならば年久しきお出入にてなかなか色がましき事に



あらねば、さやうなる者にてはござりませぬといふを、殿には芝居の思付しゆゑそしておのれは何者だと宣(のたま)ふ。小間物屋は正直一遍なれば、たゞお出入の小間物賣なりと申上げる。小間物賣なら小間物の謂因緣(いはれいんねん)故事來歴を語れ、聞かん、と宣ふ。

「小間物の始めは存じませぬが、只それ〴〵の下細工で致させます。元値を聞かれては微塵(みぢん)だ。」

「サアそれはといへいへ。」

「怪(け)しからねえ。」



淺黄浦右衛門、本田大藏、床かけ數馬等よりく〜評議しけるは、殿様この間はたゞ芝居の事さへいへば通とお心得なされ、何事によらず芝居でこじつけ給ふ。ちと芝居の事はぐい流しに遊ばされ、北國通ひありたき事と忠臣の面々晝夜心に思ふ。



「あの様に芝居でばかりなさせられては、きつい野暮大名だ。能狂言の名とは聞えまい。」

「然し吉原へお通ひなさるゝ事は悪からう。いつそお屋敷へ遊君共(いうくんども)を召し呼ばるゝ事だ。」

「女郎屋はいづれがよろしからう。丁字屋か、扇屋か、松葉屋だらう。」



浦右衛門が計らひにて松葉屋の遊女を御屋敷へ呼ばせらるゝ。

「扨々、忌々しく重い葛籠だ、舌切雀ぢやアねえが、チヨチヨチヨ」



「花魁(おいらん)江戸へいつたら跳る御馬を見んせう。」

「瀬山さんはもう來なんしたか。」

「さアき行きなんした。」



女郎屋を一軒遣手禿（やりてかむろ）まで惣仕舞（さうじまひ）にて御屋敷へ呼んだ所、側の堅藏（かんざう）の殿様、此頃少し芝居の氣取（きどり）を覺えし故、芝居でさへすれば通（つう）な事とおもひ、女郎と家中をまぜこぜの芝居をせよと宣ふ。

「その方は白拍子（しらびやうし）どもか、白拍子のは



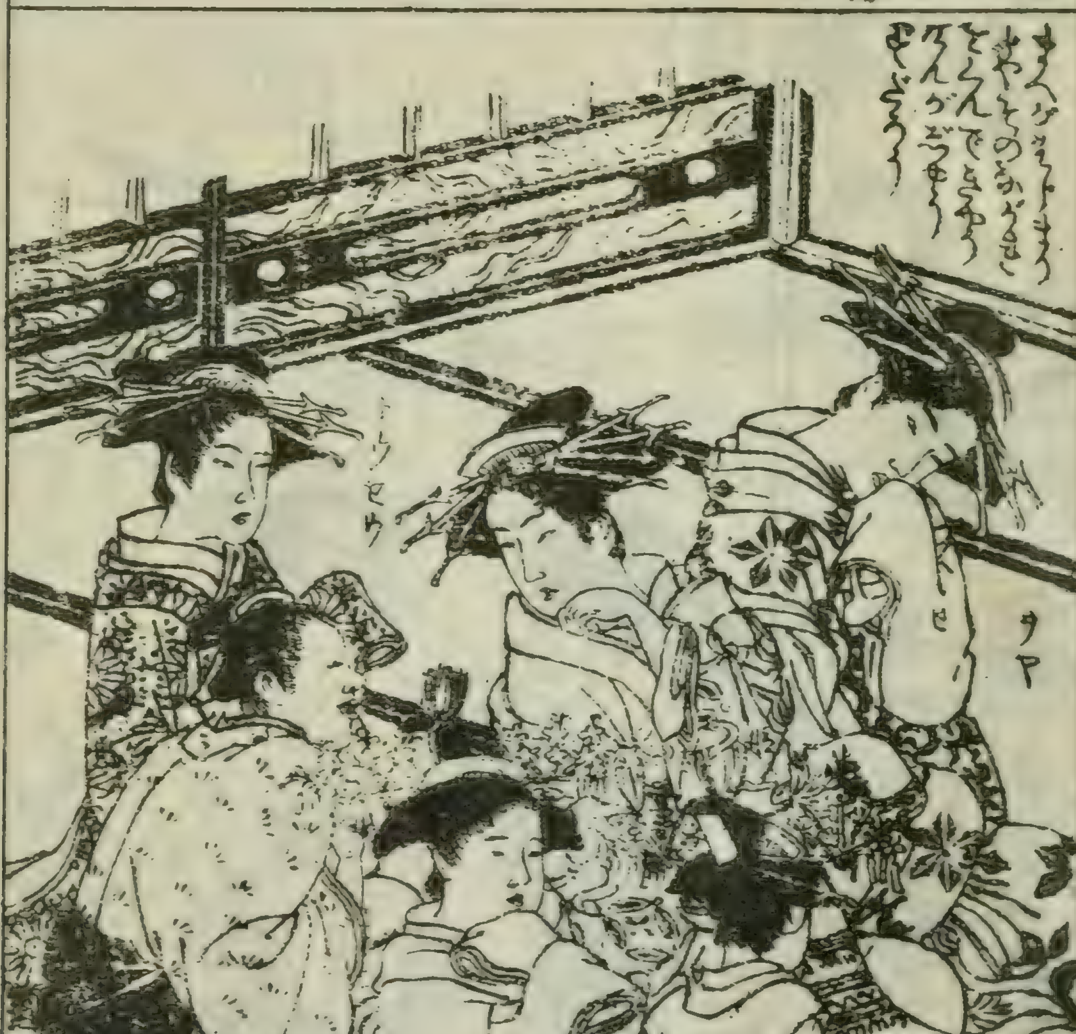
じまりは鳥羽院の御時、島の千歳、若の前がはじまりぢや。この流を掬んで狂言が上手だらう。」

「ヲヤ。」

「ム、。」

「ドウセウ。」

「手に汗を握つて居る、さぞ堅まつたらう。」



殿様のお好み故、家老の面々女郎共へ芝居の事を頼む。

「わつちらは遂に芝居を見んした事はおぜんせん。馬鹿らしい。」

「一変に居られやす松庵老さへ芝居を致さるゝやうにとの事でござります。」

「やつがれは古法家故下り役者と悪落



が來ねばいゝが。」

「どうも君達が芝居をなさつて下されねば、拙者共痛い腹を切りませねばなり申さぬ。自腹を切るより餘ツ程痛事々々。」

「ぬし達が腹を切りなんしちやアお氣の毒でありんす。苦勞しなんすな。どうともしんせう。」



お次の間を楽屋にしつらひ、皆々衣裳をつけるところ。

「おれを楠成とはきつい見立違ひだ。忠臣蔵なら了竹か加古川本道だ。」

「しやんとして居たり。小い子が月代を剃るやうで衣裳がつけ憎い。」

「この白粉へは膠を入れぬせいか、根つからつかぬ。顔へ礬水を引けばよかつた。」



「このやうなものを着ていつそ氣恥しい。どうしんせう。いつそいごき憎うおつす。」

「出語りは揃ひの社袴、淺黄小袖ははえのあるがいゝの。お前の役は時致か。但し曾我の女郎素見なりか。」

「いつそ重たうありんす。」

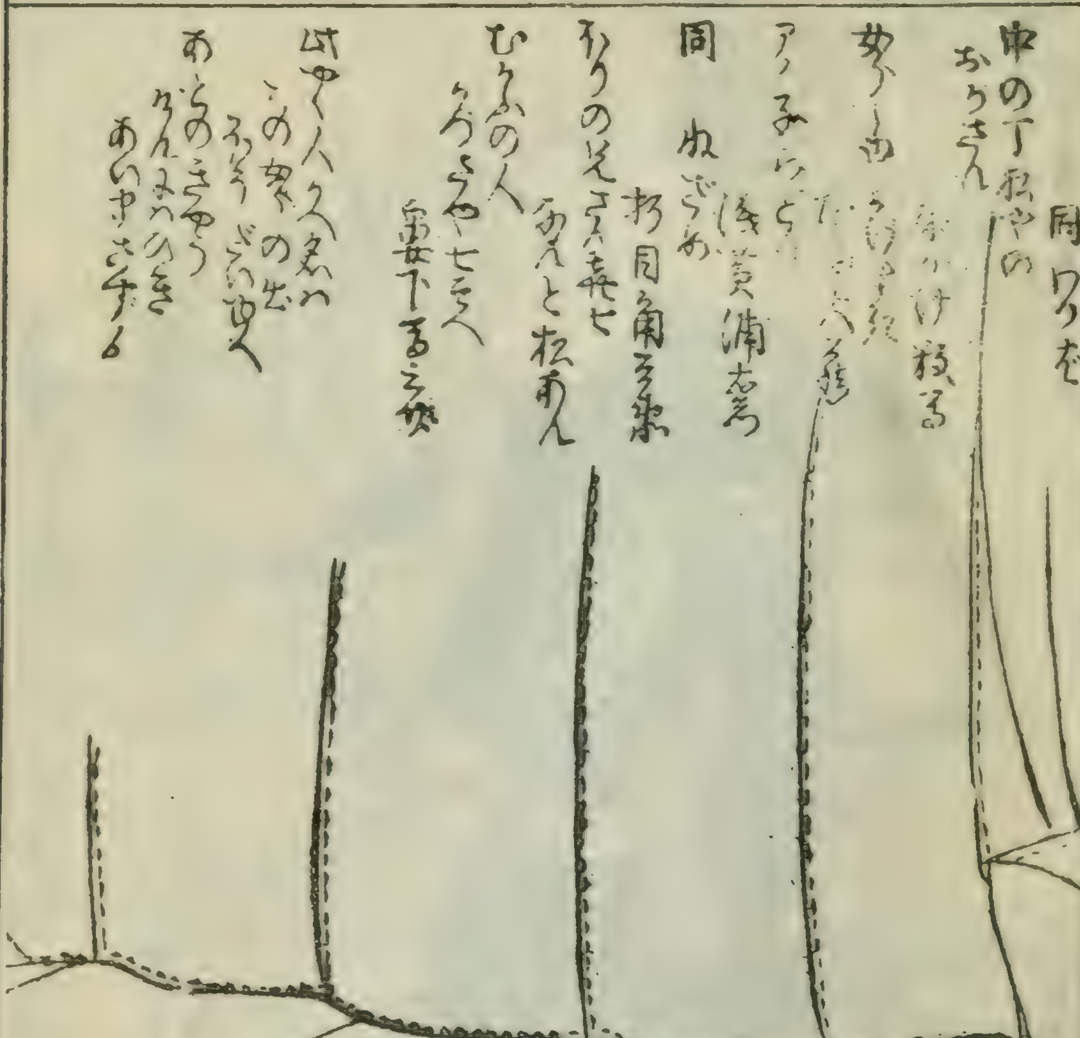


東西々々。高うはござりんすが御免の蒙りいして一寸申しんす。この所はね、第一番目三立目でおざんす。役人替名の様子を聞きなんし。いきくけすか大盡禿緑、遣手衆お粂どん



同若葉（おなじくわかば）仲の町松屋のおかさん床がけ數馬、女郎衆わけ卷本田大藏、アノ子千鳥淺黃浦右衛門、同ねざめ折目角兵衛、堀の兄さん喜七なんと松庵、向うの人上總屋七兵衛鼻下馬之介

此役人替名はこの女郎の出放題故、あとの狂言には引合ひ申さず候。



此所第一番目二立目
世界は何だか分らず
只大でけ！。

「怪しい奴と見える
から大門口につけ
て居た。サア尋常



に酸漿を渡せ。拜みんす。」

「おろかや、松井の源五貞景が奪ひとつたる此酸漿、めつたに渡してつまるものか、まだ嘴の青酸漿の辛い目に合はねえうち、とつと〻十ざしなくなれ。エヽ。」



八幡の三郎に床がけ數馬

工藤左衛門祐經に座元馬之介、「兄弟の子供に對面の印は赤木の短刀を四五十本取らせい。朝比奈呼び出しやれ、大儀々々。」

近江の小藤太本田大藏、「兄弟が持つて來たは屠蘇袋と袖の梅、そんな酔を覺ますものは入らねえ。早く持つて下れ



〳〵。」

小林の朝比奈に淺黃浦右衞門。

「コリヤ兄弟、これにおいでなさるお方が大分その方共をお笑ひなさる。屠蘇散と袖の梅の來由をおくぜりあられい〳〵。」

梶原源太に禿若菜。

「曾我兄弟なら此やうな座敷へ出つけぬ故いつそ震へんす。早く引込まねえと遣手衆につからせるにえ引。」



對面のつらね
言葉の綾知述
十〽丸散人のまず、たゞ薬研の香をきくと四方の赤良が通詩選、醫者のいの字は命のいの字、風に騒ぐは藪醫者殿と福内鬼外が淨瑠璃の。
五郎〽文句紋日の約束も、ま逢ひ鼈甲鼻の下馬之介つね大名客
十〽きやくや痞に奇妙とは、これ朝鮮の弘慶子、先に立たずと氣を長う
五〽待つ年明けも十八年、數ゆる月日突出しの顔赤澤屋松屋まで新造三人迎ひにやり。



十一「待つとはいざや紫金錠(しきんちやう)、酒の醉覺(ゑひさめ)ふみ返す駒の足なみ駒下駄の
五二「外八文字(ここ)を一文字に飛びかゝりんして惡性(あくしやう)な男の髮切指切の意氣地は外にアアつがもおぜんせん
十「お全盛なる女郎を荒事株の役割は、これぞ一粒金靈丹、仕打(しうち)は黑上黑丸子、
五二「二人一座の初對面、十「袖の梅酒、五二「屠蘇白散、十二「謂(いはれ)「因緣「古事「來歷「あらくかくの「通りでなしと、十二「ホ、二人敬(うやま)つて申す。



茶ア〳〵〳〵。
饅頭や茶菓子、有
平や羊羹。



御料理御知而已

大悲千禄本

芝全交戯作





千手観音とも云ふべき佛も、不景氣なには是非もなし。痛はしや千本の御手を、安く損料貸にせんとの御誓願。面の皮屋千兵衛といふ山師、大悲のお手を一本一兩づつに仕切り、金子千兩、手切金を出し、手前で損料貸をせんと切拂ふ。

「皮切三本堪へたらモウ痛くもない。悪い手があつても撤き直しはなし。」

「せんじゆつめた事だ。」

「こちらの方は大方手古摺ました。」

ばら〳〵〳〵〳〵〳〵

てきり金千兩箱。



千手の御手を損料貸にするときくより、先づ薩摩守忠度を先として、茨木童子、人形芝居の捕手、手のない女郎、てんぼう正宗、無筆、三味線の弾き習ひ、その他手の入用の者、貴賤群衆して借りに來る。

てなし貸の手代てれめんてい兵衛、帳を付ける。

「桝掛筋のあるは、一よがた



高らござる。」大悲の御手、澤庵漬の大根の御手の様なり。

「モシお足のお餘りがあらば下さりませ。」

「拙者事は御存じの通り、借人知らずと御誌し下され。」

「痿びて落ちたは誰にやろ、かにやろ、いとしいもんのに、やりまんしよ」との御誓願。



茨木、觀音の腕を借りけれども、毛のない腕は用ひられず、神田の臺の與吉を頼み、毛を生して貰ふ。

「此節猪の毛は品物でござるから鹿の毛でつけました。」

「猪の毛なれば愛宕山、鹿の毛なれば春日やんまへ御出なさい。」

與吉が女房、「茨木さんぢやきがない〳〵よ。」

「私が妻などは唯今では、

「淺間山から降つたのではないか。」



忠度の打落されたは右の腕、忠度少し急き込み給ひ、餘りの嬉しさ、矢ツ張り左の手を借りて來給ひ、漣やの短冊も左文字に出來、これはどうだと右の手を借りにやり給へば、最早貸切りて無いとのこと、忠度今はかなはじとや思し召し、左の御手にて無駄書をし給ひにしにもかまはずこれは仕舞つた、南無阿彌陀佛〳〵と念佛を稱へ給ふ。



手の無い傾城共、千手の御手にて客をだましたれども、損料借の御手なれば、間に取りに來るには度々困る。禿と云ふ者は、お手が鳴るなら銚子と悟るもんだ、客人はお手が無いなら笑止と悟んなんし。

「この子は客人の見ていさつしやるに、氣のつかねえ。早く持つて行きやな。」

「それでも取りに來んしたものを。」

「怖しく手のあるいとたてのたての樣だ。



無筆な奴、千手の御手を借り、高覺に手紙證文なとを書けども、佛の手なれば、梵字ばかり出來て居て一つも通用せず、商い奴の料簡は格別、只返すのも損なりと、爪に火を燈し蠟燭の代りにするこれ手燭のはじまりなりと云ふも久しい奴さ。

「梵字と書狀と取違へ、今にも用事と云ふならば、梵字で書狀が書かれうか。へんちき〳〵〳〵よ。」

「熱(あつ)いよう〳〵」

「はてやかましい蠟燭だ。」



其頃、勢州鈴鹿山(すゞかやま)に鬼神(きじん)棲みて、國土の民を惱(なや)しければ、田村麿に宣旨ありて退治せよとの勅なれども、千手のお手が無くては、一度放(はな)せば千の矢先(やさき)と云ふ狂言が出來ねば借りに來給ふ。

「貸出して手は一本もござらぬが、とり集めてお貸し申さう。」

「一本南位(なんぐらゐ)でお貸しなさらぬか。」



觀音千兵衛と通屆し給ひ、貸出したる御手を取集めて田村麿に貸して又儲ける。

「千兵衛手を改める。女郎に貸したは手指がなくなり握りこぶしで歸るは喧嘩の手傷、鹽屋へ貸したは鹽辛く紺屋へ貸したは青くなり、下女に貸したは糠味噌臭し。飴屋のはねば〳〵する、飯炊は凍瘡だらけ搗屋に貸したは肉刺だらけ。

人差指と中指が。こいつはすこ合點が行かぬわえ。



「そんならナニ田村麿殿、鬼神を首尾よく退治めされたなら、損料をつけて千本の手を、九ッの鐘を合圖に待つて居るよ。」

田「云ふにや及ぶ大望成就した上で、兩に八本の損料を以て、手を千本お返し申さん。」

クワン「なにそれまでは田村どの。」

田「觀音様。」

兩人「さらばア手手てん／＼／＼／＼／＼／＼／＼てゝてゝてゝ手手手手手手手手手手手手手手手手ててててててててててててててててててててて



「ハテ此ての字がめの字だと薬師どのへ進ぜたい。」


江戸生艶気樺焼



爰に百萬兩分限と呼ばれたる仇氣屋の獨息子を艶二郎とて、年も十九や二十といふ頃なりしが、貧の病は苦にならず、他の病のなかれかしといふ身なれども、生得浮氣な事を好み新内節の正本などを見て玉木屋伊太八、浮世猪之介が身の上を羨しく思ひ、一生の思ひ出に此のやうな浮氣な浮名の立つ仕打もあらば、行々は命も捨てようと馬鹿らしきことを心がけ、命懸けの思付きをしける。



艶二郎は近所の道楽息子北利喜之介、輪留井思庵といふ太鼓醫者なぞと心安くして、いよ〳〵浮氣な事を工夫する。

「まづめりやすといふ奴が浮氣にする奴さ。こいつを知らねばなりやせん。凡そ人の知つた口近いめりやすの分、小口の所を申しやせう。まづ雉子、無間、盃、時酒、ゆかりの月、三つの鳥、三つ布團、二つ紋、四つの袖、禿立、沖の石、花の雲、朝顔、六歌仙、小町、遍昭、黒主、業平、康秀、白糸、獨心中、指切、入黒子、起請、昔草、萬年草、十三鐘、水鏡、稻舟、待宵、別れ、名殘の紅葉、假枕、夏衣、春の夜、秋の夜、萬寸鏡、



「とんでもなく浮名の立つ仕打がありさうなものだ。」

夜半の鐘、朧月、春霞、亂れ鳥、思ひ川、女參宮、
元服、萬菊、九月蟵、吉野草、夏の月、明烏、
むら烏、扇、花の香、花の宴、殘る暑さ、さし櫛、
相の山、とけず、染糸、冥土の鳥、戀櫻、
秋の七草、二つ文字、左文字、我心、
江戸浴衣、疊算、一つみぞ、
戀話、まだいつくらもあれど、
一寸した所が此位なものさ、
ア、口が酸くなつた、文の文句
には大分傳授のあることさ。
紋をつけぬと縁が切れると
申しやす。文の末へ
稚名を書くやうになると
むづかしいね。




艶二郎は先づ刺青が
浮氣の始りなりと、
兩方の腕、指の股まで
二三十程
あてもなき刺青をし、
痛いのを堪へて、
此處が命だと
喜びけり。
「色男になるもとんだ辛いものだ。」
「中にちと消えたのもなくては悪いから、あとで又灸を据ゑやせう。」

江戸生艶氣樺焼


艶二郎は役者のうちへ、美しき娘などの駈け込むを浮氣なことゝ羨しく思ひ、近所の評判の藝者おえんといふ踊子を五十兩にて雇ひ駈け込ませるつもりにて輪留井思庵頼み來る。
「これが頼みの、兎も角もおあやかり申してちと出世の筋さ。」
「駈込むばかりなら随分承知さ。」


家内の下女共覗き見て、おらが若旦那に惚れるとは千家か、古流か、遠州か知らぬが、飛んだ茶人だとさゝやく。
一みづからと申すは、拐寄邊定めぬ轉び妻、この新道に住馴れて、人の心を浮氣にする白拍子でござんす。茅場町の夕藥師でこざつ
番頭候兵衛
一若旦那のお顔ではよもやかういふ事はあるまいと思つたに。コレお女中門違ひではないかの。」



艶二郎さんを植木の蔭から見そめました。女房にすることがならずば、おまんまなど炊いても居りたいのさ。それもならぬとおつしやれば、死ぬ覺悟でございます。」
など〻注文通りの臺辭を並べたてる。
「ハテ色男といふ者は、どんな事で難儀をしようか知れぬものだぞ。もう十兩やらうから、もちつと大きな聲で隣りあたりへ聞えるやう頼む／＼」
艶二郎が親彌二右衛門頼んだ事は知らず、氣の毒に思ひいろ／＼と意見して歸しける。

この噂さぞ世間でするだらうと思ひの外、隣でさへ知らぬ故、張合抜けがして、讀賣を頼み此譯を板行に起して、一人前一兩づゝにて雇ひ、江戸中を賣らせる。



「評判々々、仇氣屋の息子艶二郎といふ色男に、美しい藝者が惚れて駈込みました。とんだ事〳〵、事明細々々、紙代板行代に及ばず、只ぢや〳〵。」

「何さ、かたも無い事だのさ。みんな拵へ事さ、誰でも讀むが面倒でござんす。」



艶二郎嚔をするたび、世間でおれが噂をするだらうと思へども、一向に町内でさへ知らぬ故、此上は女郎買を始めて、浮名をたてんと思ひ、仲の町浮氣まつ屋へ来り、輪留井思庵北利喜之介なぞかみにつれ一杯に洒落る。
女「瀬川さんと歌姫さんのうちをきゝに遣しましたが、さつき小松屋てこのもを見かけましたから、歌姫さんはてつきりお悪うござりませう。」
「木挽町で高麗屋が墨河さんをするさうでござりますね。」

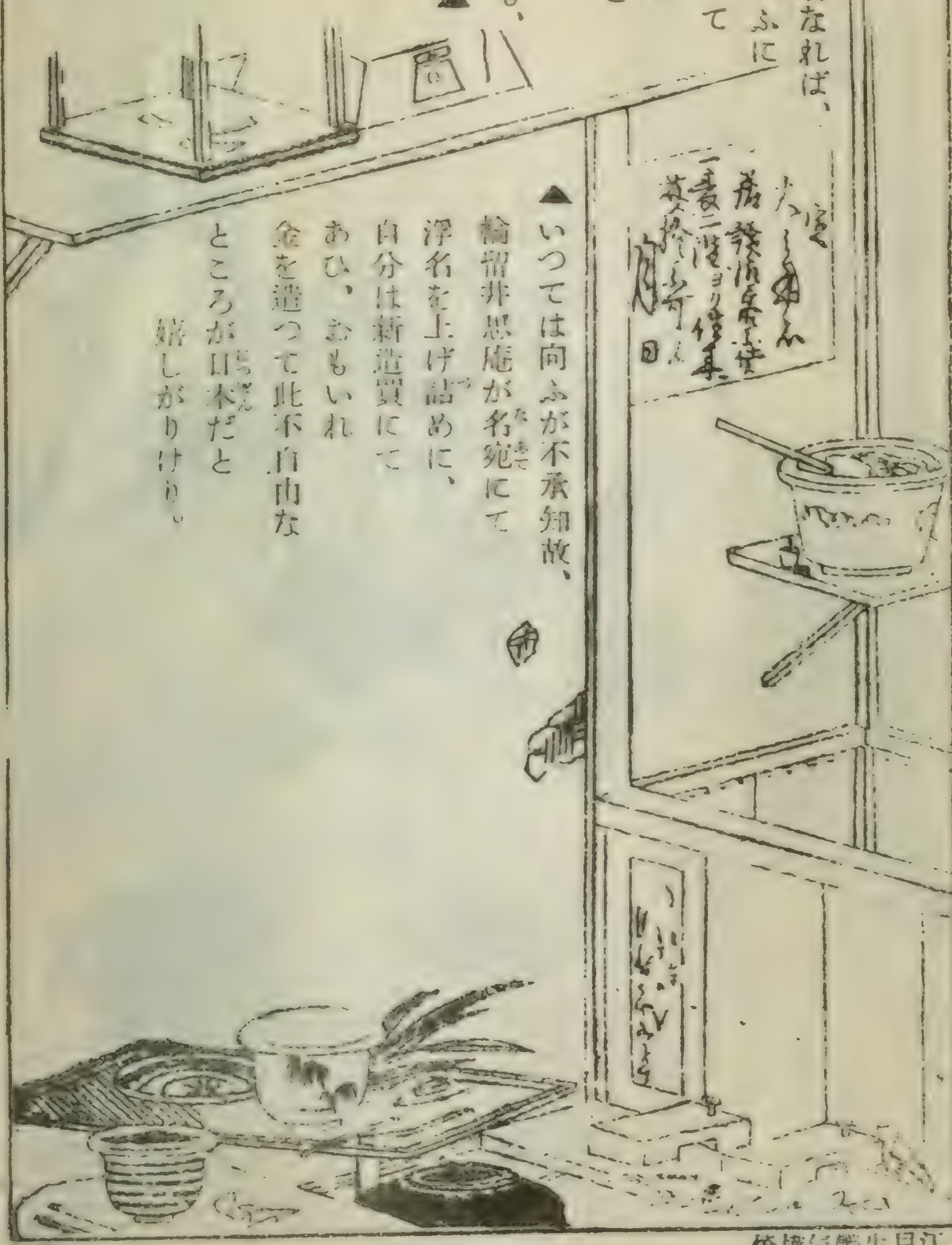
江戸生艶氣樺焼


艶二郎は、浮名屋の浮名といふ手のある女郎にきめて、十が十ながら惚れられるつもりにて、一杯に見得をし、襦袢の半襟ばかりいぢつて居て、色男もさて〳〵氣の詰る事なりと思ふ。
「茶をいひなんすな、拝みんす。」
「大黒屋ちやアねえが、何でも女郎衆の總録だねっ。」
「モシ花魁、お前を世間ではとんだ手のある女郎だと。」


艶二郎女郎買に出てもうちへ歸つて妬もちをやく者がなければ、張合がないと肝入を頼み、やきもちさへよく妬けば、容貌は望まぬといふ注文にて四十近い女を、地たゝか金二百兩にて妾に抱へる。
「去年の春中洲で買つた地獄ではねえか知らん。」
「小便組などゝいふところは御免だよ。」
「わたしをお抱へなされましても、大方女郎買や色事でわたしをお構ひなされますまいと、もう少し手見せに妬きかける。
花山書

艶二郎もとより浮氣者なれば、深川、品川、新宿はいふに及ばず、端々まで買つてみたれども、浮名ほど手のある女郎はないと思ひしが、一通では面白からずと思へども、たゞ間夫にならうと▲

▲いつては向ふが不承知故、輪留井思庵が名苑にて浮名を上げ詰めに、自分は新造買にてあひ、おもいれ金を遣つて此不自由なところが日本だと嬉しがりけり。




「手前がおれが所へ来ると、あつちらの大盡がやけを起こすわ。遣手やまはしを呼んで小言をいふうちの心持のよさは、どうやすく踏んでも、六百両がものはあるのさ」
「おれが役もつらい役だ
これも渡世だと思へば腹も立たぬが、
「ほんに主は酔興な人で御座りんす」

艶二郎は家櫻を思ひ出し、「かへるさつげる犬櫻、口舌の蕾、綻びし袖を、禿が力草、ひかれて行くや後髪心強くも桐が谷」といふ文句より外の客人の捉まるを羨しきことに思ひ、何の事もないに、新造や禿を頼み、こつちから大門につけて居て捉り、羽織位はひつさけても大事ないといふ約束にて、引きずられて行く。

「これさ、まあ、放して呉れろ。から引きずられて行く所はとんだ外聞がいゝ。」



新造禿は人形を貰ふ約束にてむだをいひ〳〵、引きずつてゆく。


艶二郎五六日振りにて
うちへ歸りければ、
待ちまうけたる妾、
此處を奉公の仕どころと、
かねて服して置いた
存分をやきかける。
「ほんに男といふ者は、何故そんなに氣強いもんだねえ。それほどに惚れちれるが嫌なら、そんないゝ男に
生れつかねえがいゝのさ。また女郎も女郎だ、人の大事の✕
✕男を留めて置きくさつて、又お前さんもお前さんだ、愛想なすつたがいゝのさ、と先づこきりに仕やせう。」
このあとは八丈と縮ちりが來ての事さ。
きしきし
「恥しいこつたが、生れてから初めて燒餅をやかれてみる。どうもいへねえ心持だ。」
「もちつと賴む〳〵。」
「もちつとやいてくれたら、手前がねだつた八丈と縞縮緬を買つてやらう。」


艶二郎は役者女郎などの心意氣にて、回向院道了のお開帳へ挑灯を奉納せんと思ひ、浮名と手前の紋を比翼紋に附けさせる注文に、北利喜之介請合ひて、田町の挑灯屋へ誂へける。
「とんだ急ぐね、骨はしげ骨にして、側は本塗に眞鍮の金物、いくらかゝつてもいいから、随分立派にしてえの」

中屋へは手水手拭を誂へ、これも比翼紋にて、所々の流行神、随分日に立つやうに奉納するこれも餘程の痛事なり。

勿論何の願もなけれども このやうに奉納物は 成程浮氣な 沙汰なり



艶二郎芝居を見て、とかく色男といふものはぶたれる者と思ひ、頻りにぶたれたくなり、地廻りのきおひを一人前三兩宛にて四五人頼み、仲の町の人高い所にてぶたれる積りで、茶屋の二階には藤兵衛を雇ひおきて、めりやすを唄はせ、亂れ髪を浮名に鳴かせる積りにて、月代へは青黛を塗り、揚屋町の銀出しにてさつと水髪に結ひ、髻を攫むと直にばら〳〵とほどけるやうにしてぶたれけるが、つい擲所悪く、片息に成つて、髪梳どころではなく、氣附よ、鍼よと騒ぎて、やう〳〵氣が附きけり。此時餘程馬鹿なものだといふ浮名少しばかり立ちけり。



艶二郎世間の噂するを聞くに金持故皆慾でするといふ事を聞き急に金持が嫌になりどうぞ勘當をうけたく思ひ、両親に願ひけれども一人息子の事故、決してならねどもやう／＼母のとりなしにて、七十五日が間の勘當にて日限(ぎり)が切れると、早々(さう／＼)うちへ引き取るとの事なり。




薬研堀の
名ある藝者七八人
艶二郎に雇はれ、
勘當の赦るやうにと、
淺草の觀音へ
裸足參をする。
成程裸足參といふ奴が
大方は浮氣なものなり。
「十度參り位で
いゝのさ。」
「えゝ加減になぐつて
早くしまはうねえ。」

江戸生艶氣樺焼



艶二郎は望みの通り、勘當を受けたれども、母の方より金は入用次第に送る故、何不足なけれども、何ぞ浮氣な商賣をして見たく、色男のする商賣は地紙賣だらうと、まだ夏も來ぬに、地紙賣と出掛け、一日歩いて大きに足へ肉刺を出かし、これには懲り〳〵とする。

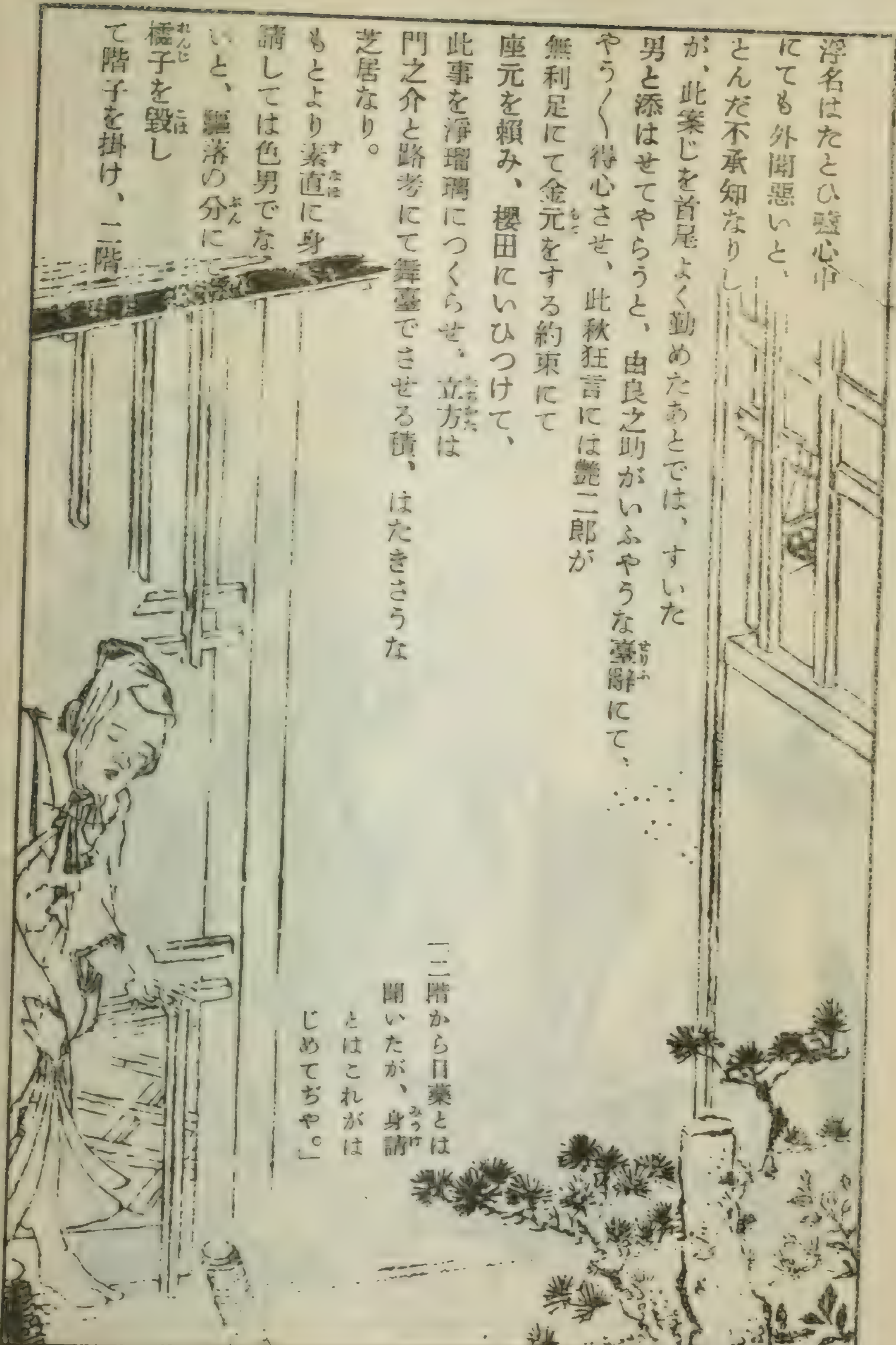
此時大きな粹狂者だと餘程浮名立けり。

艶二郎金のりが来て、かれこれとする中七十五日の日限が切れ、うちかたよりは勘當を許さんと毎日の催促なれども、未だ浮氣をし足りねば親類中のとりなしにて、廿日の日延を願ひ、どうしても心中程浮氣なものはあるまいと、手前は命も捨てる氣なれども、それでは浮名が不承知故、嘘心中の積りにて二人が辭世の發句は、摺物にして仲の町へ配らせる。



さきへ喜之介と思庵を
やつておき、南無阿彌陀佛
といふを相圖に留めさせる
注文にて、まづ浮名を
千五百兩にて身請をし、
心中の道具立を買ひ集める。
紋の小袖の模様には屑に金挺、
裾には碇、質に置いても流れの身
といふ古歌の心を學ばれたり。
これも中宿山崎の備ものなり。

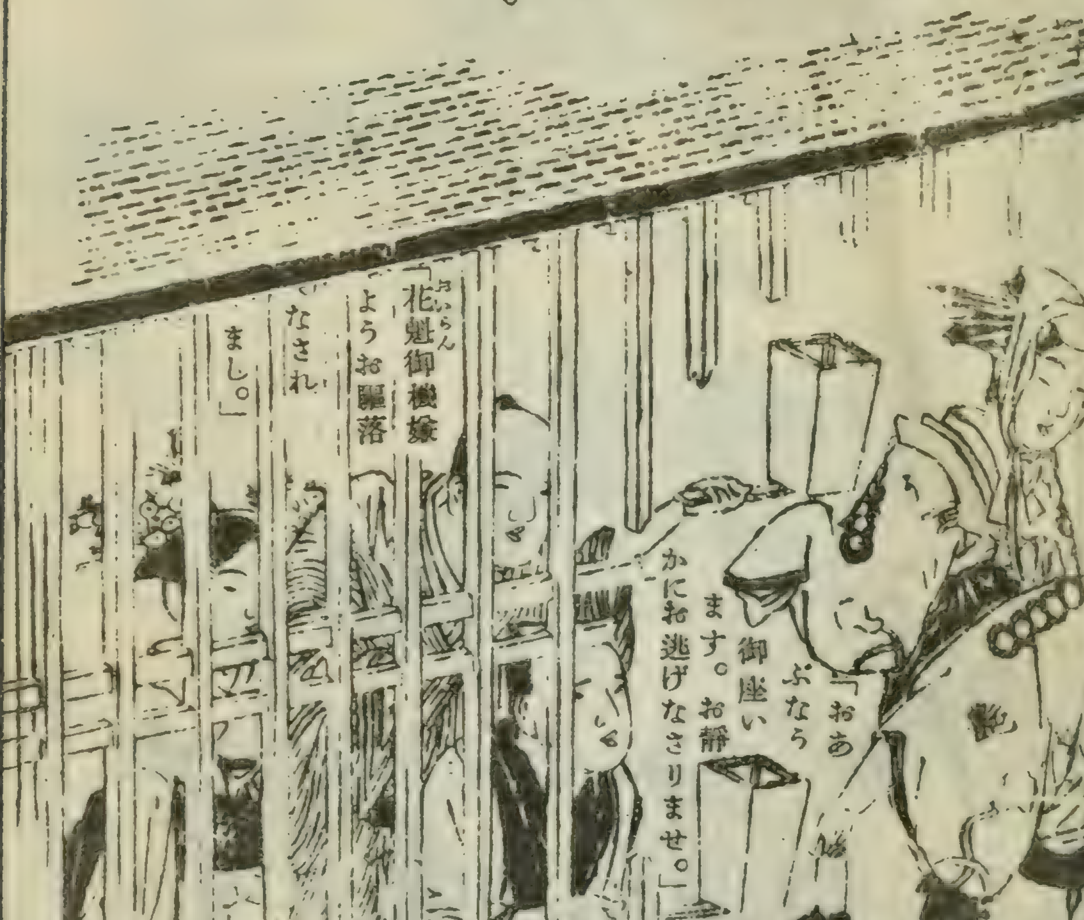




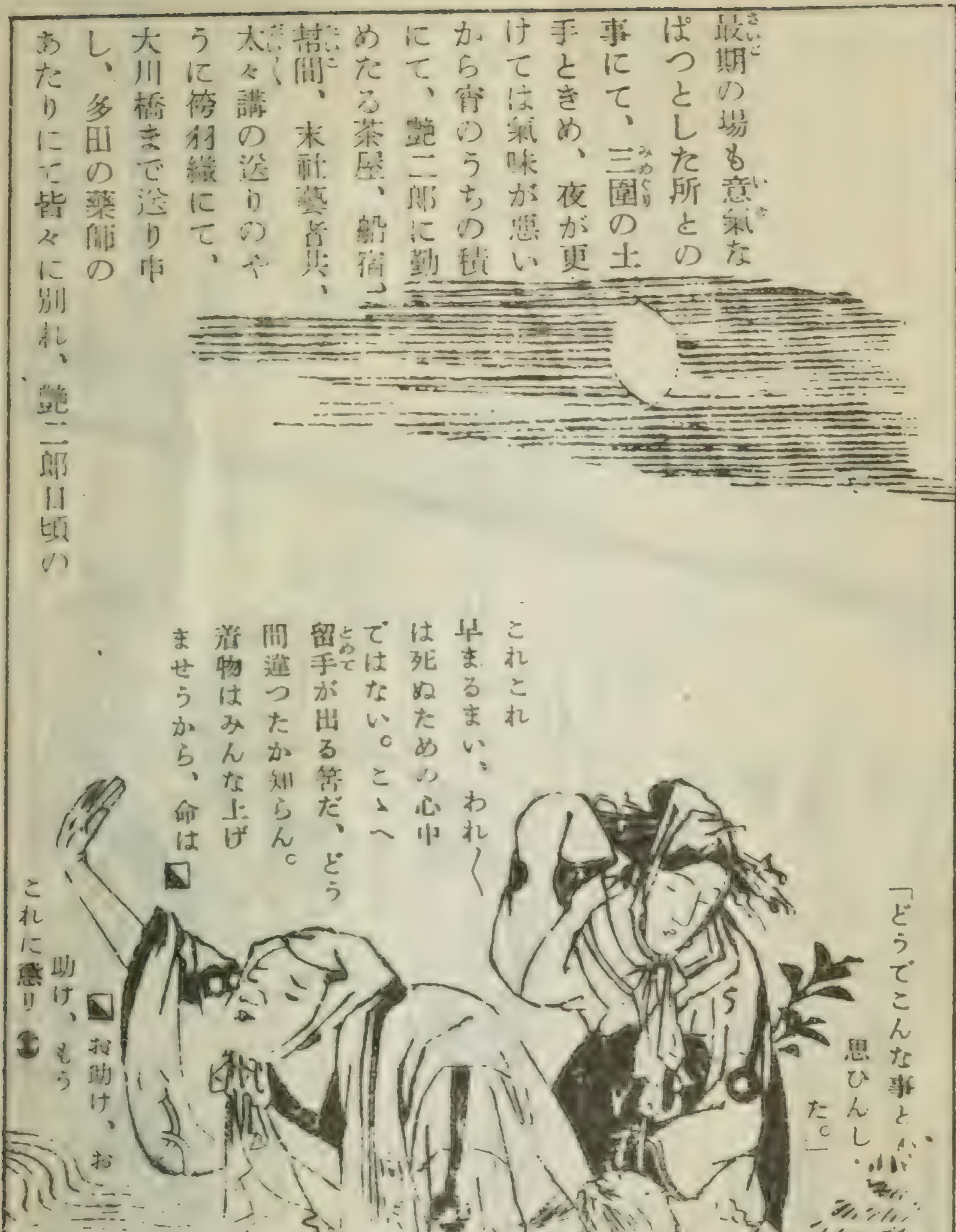
浮名はたとひ嘘心中にても外聞悪いと、とんだ不承知なりしが、此案じを首尾よく勤めたあとでは、すいた男と添はせてやらうと、由良之助がいふやうな臺辭にて、やう／＼得心させ、此秋狂言には艶二郎が無利足にて金元をする約束にて座元を頼み、櫻田にいひつけて、此事を淨瑠璃につくらせ、立方は門之介と路考にて舞臺でさせる積、はたきさうな芝居なり。

もとより素直に身請しては色男でないと、驅落の分にて櫺子を毀して階子を掛け、二階

から身うけする。内証ではどうで身うけなされた女郎故、お心まかせになさるがいゝが、櫺子の繕ひ代は二百兩で負けてあげませうと慾心をぞ申しける。



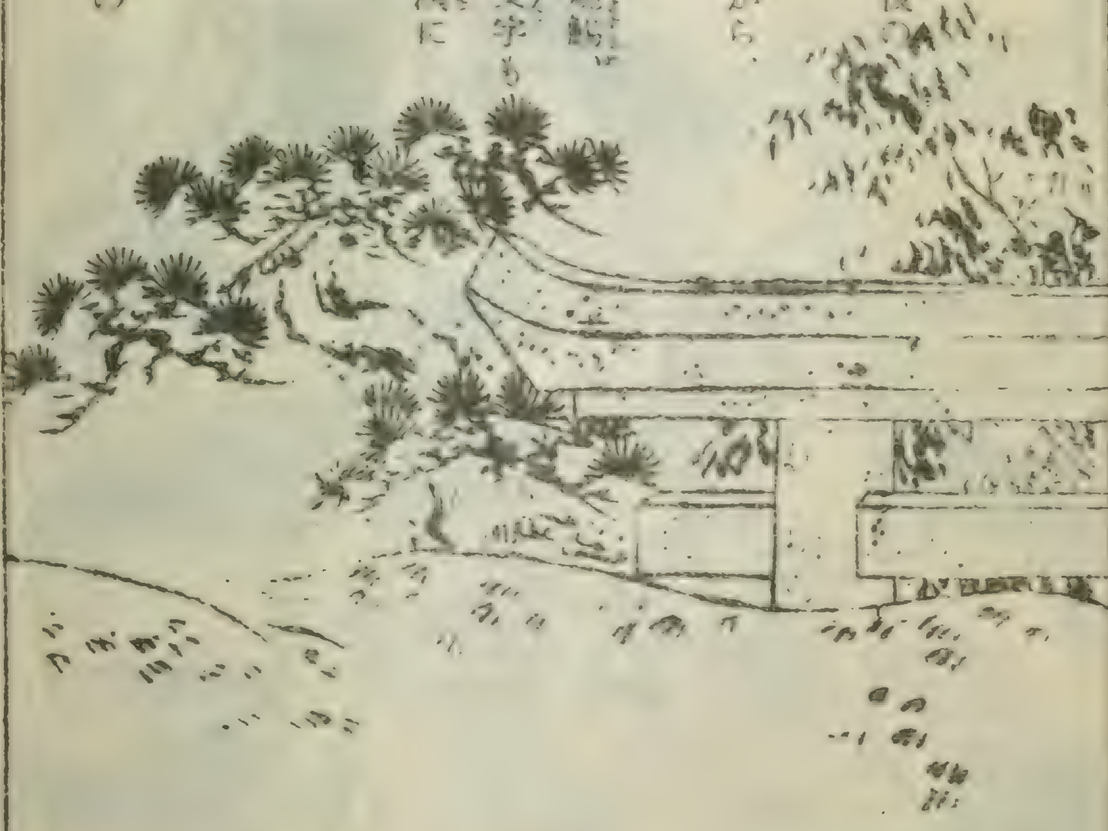
最期(さいご)の場も意氣(いき)なぱつとした所との事にて、三圍(みめぐり)の土手ときめ、夜が更けては氣味が悪いから宵のうちの積にて、艶二郎に勤めたる茶屋、船宿、幇間(たいこ)、末社藝者共、太々講(だいだいかう)の送りのやうに揃羽織にて、大川橋まで送り申し、多田の藥師のあたりにて皆々に別れ、艶二郎日頃の




願かなひしと心嬉しく道行をして行き、此處こそよき最期場と箔置の脇差をぬいて、すでに斯うよと見え、南無阿彌陀佛といふを相圖に、稻村の蔭より、黑裝束の泥棒現はれ出で、二人をば眞裸にして剝ぎとる。
「わいらはどうで死ぬ者だから、おいらが介錯してやらう。」
ぬ事は御座りません。」
「此以後こんな思附はせまいか、せまいか。」

道行輿鮫肌

「朝に色をして夕に死すとも可なり、とはさても浮氣な言の葉ぞ。それは論語の堅い文字、是は豐後のやはらかな肌とはだかの二人して、結びし絆を一人して解くに解かれぬ疑はふしんの土手の高見から、とんと落ちなば名や立たん。どこの女郎衆かしらみ紙、結ぶの神もあちらむかさんし上醤油の燒鯣ぴんとひぞるも今は早、昔となりし仲の町、外八文字も断うなれば内七文字にたどり行く、涙にまじる水洟にぬらさん袖は持たぬ故、下の帶をぞ絞りける。身にしみわたる東風かぜに鳥肌だちし此素肌、殿御の顏は薄墨に書く玉章と見る雁に便聞かんと書く文の假名でかな挺裾模樣、ゆかりの色も七つ屋の名に流れたる隅田川、互に無理を五百崎の鐘は四つ日や長命寺、君には



胸をあくる日の
まだ四つ過の、
緋縮緬、褌ながき
春の日の
日高の寺にあらずして
裸の手合急ぎ行く。引三重
牛は願から鼻を通すと、
艶二郎が悪案じの心中、
此時世上へぱつと浮名が立ち、
諸團扇の繪にまで書いて
出しけり。



艶二郎は丁度勘當の日延切れければ、悠々として、うちへ歸りて見れば、衣桁に三圍にて剝がれた小袖掛けてある故、不思議に思ふ折柄、一間より親彌二右衛門番頭候兵衛立出で意見する。

艶二郎ははじめて世の中を諦め、ほんとうの人となり、浮名も男の惡いも不承して、外へ行く氣もなく夫婦となり、もとより身代に不足もなく、末繁昌の榮、しかし一生の浮名の立ちをさめに、今までの事を草雙紙にして世間へ弘めたく、京傳を賴みて世上の浮氣人を教訓しける。

若き時は血氣いまだ定らず、誡むる事いろ〳〵ありといふ事を知らぬか。すべて案じが高ずると、皆斯うしたものだ、恐ろしき。



莫切自根金生木（きるなのねにかねのなるき）

序

諺に貧の病あり。持つたが病あり。金が敵（かたき）といふ側（そば）からたつた三百兩とは、こいつは有難いと感心して餘りあれども、算用しては不足だらけ、そこの所は、入我（にふが）、我入、おれが、われか、われが、おれか、どちらへ張つたら與かん平（へい）、何か難波のあし早く、拵ぐ（かせぐ）に追付く貧乏者に、足る事を教へんと、一寸一部の此雙紙は、友人唐來參和が、變らぬ春の出放題なることを、口もとにあやなすのみ。

和泉門人 ㊀小

爰に御存じの金々先生の叉隣に、萬々先生といふ者あり。七珍萬寶倉に充ち滿ちて、代々榮耀に暮しけるが、物事自由に手の廻るがしきりに煩さく、三日なりとも貧乏せば今の思ひはあるまいと、家に傳はる名作の大黒を引きずり退けて、貧乏神の繪像を調へ、曆の內の大の惡日を緣日として信心なしける。



「旦那のお顔も此頃は貧相におなりなされた。」

「さればでござります。これではお家御衰微の基。お目出度うござります。」

「捨てられる神あれば助けられる神も有がてえか。」

「おんぼろ〳〵、びんぼうなりたやそわか。」

「一昨日來い〳〵。」



萬々は信心の奇特も見えねば、いろ〳〵と工夫をめぐらし、何でも矢鱈に貸しかけて、世上の人に無沙汰をさせたならば、金藏も寛ぐべしと、貸金接待の高札を門口にかけて委細かまはず來る人毎に貸し出す。

「御返濟のおあて事がござつては御借用は御無用でござる。」

「私は女でござりますから、證人をつれて參りませうか。」



「きつとした證人があつては、お貸し申されませぬ。」

「隨分申し觸らしまして、横着な借手をあげませう。」

「かやうに申しますからにはお返し申すといふやうな人外な儀は致しませぬ。」

「これで今朝から八百二十八までは數へたが、あとは覺えぬ。」

「小鰭の鮨、鯵の鮨、なんときついか。」



煤掃時分の切落の如く借手の入りは落ちけれども、金藏は百分一もあかず、これではならぬと又々工夫をめぐらしけるが、昔より金持の紙衣姿になるは傾城買ひに若かずと、俄に青樓の遊と志し、表は立派で內證は苦しい慾の深さうな女郎を見立て、初會から山吹を降らし、三百六十日に閏月を添へての揚詰と、



城の落ちるを樂しみけり。

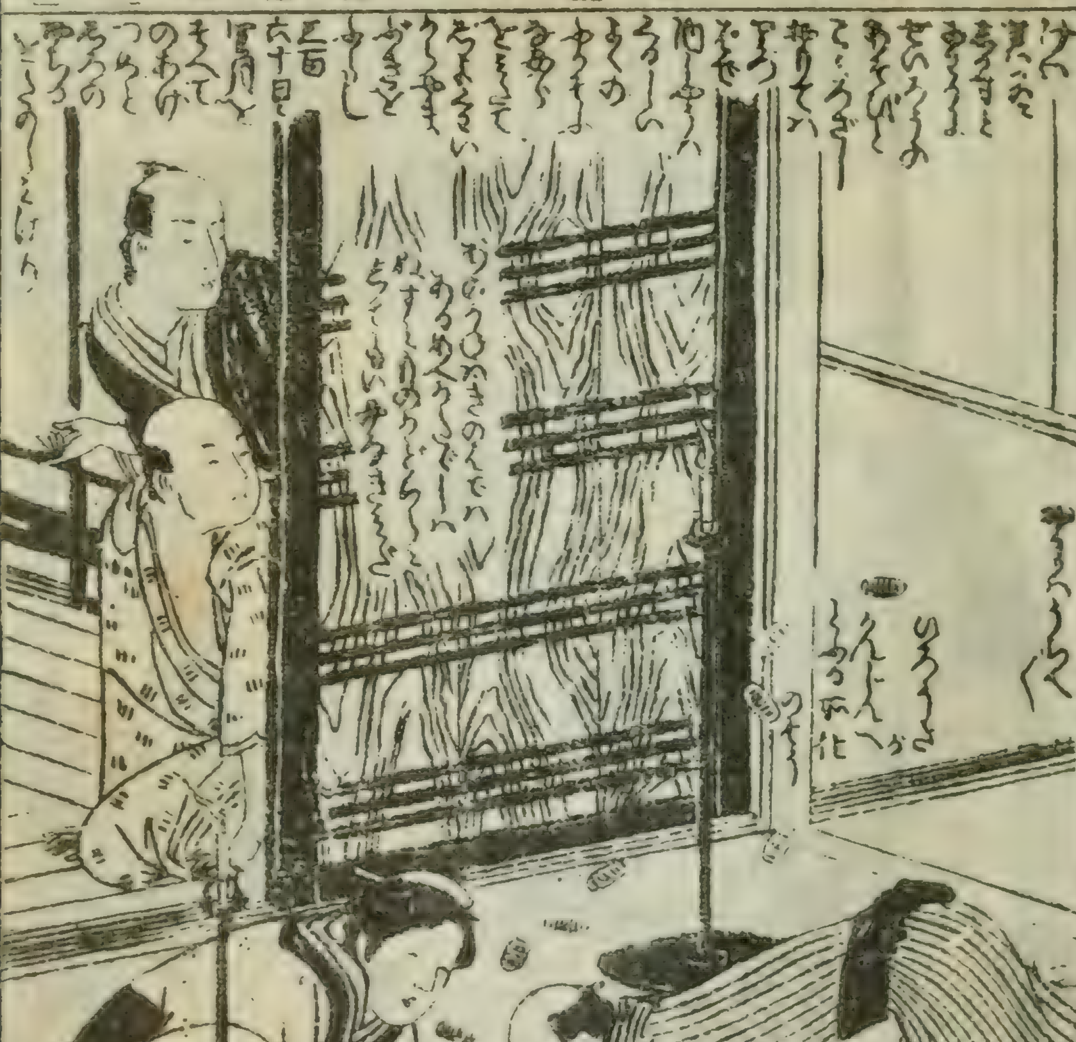
「エ何とえ、金山さんか一寸來いとえ、アイ行きいせう。」

「福は外へ撒きちらしの、鬼は内へ〳〵。」

「拾うたがかんじんへ通る所化の僧。」

「あの金は木の葉ではあるめえか、但しは盗み物か、どちらにしても嫌な氣味だ。」

「これは有難山吹色。」



初會の入目、裏約束、三會目の床花、觀音のあげ物、桃の節句や菖蒲葺く軒の燈籠、二度の月と語りながら、これでは餘ツ程息つき、さうなものと思ひの外、か並に外れて大金をつかふ故、尻でも來ようか、と内證から差圖して、撒きちらした金をとりあつめ、譯もないことぐし／＼いつて殘らず返す。

「ソレお前樣もソレ通とか何とか、ソレよしかえ、とところをすつとね、ソレかへる金。」

「ソレよしかえ、へゝゝゝゝゝゝゝゝ」

「手前のいふ通り、」おれもソレナソレ、すつとそれだによつて歸りは歸らうが、金は難澁だの。」

「わつち共も戴きたうはござりやすが、こんなにお貰ひ申しやしても内證でやかま



しうござりやす」
女郎屋の仕打にぐつとふさいで夜の明けるを待ちかね、歸る途中より駕籠に乘れば、先に乘りし人の忘れて落せしと見えて、四五百兩も財布に金がありけるが滅多な口をきいたら又こいつもくゝりつけられんと知らぬ顏をして、
「私共は荒錢をとりますから、そのやうに戴きますと冥利が惡うござります。御慈悲でござりますからモウ酒代は御免なされまし。」
「ソレでも手前、乘る時、酒代は遣り次第ときめたから、何といつてもやらねばならねえ。」◇



◇「棒組下さらぬやうにお願ひ申しやれ。」

萬々はさだめの場より降りて江戸節など語りながら行く、うしろから以前の駕籠舁、駕籠の中に落ちてありし金を持つて追つかけ、無理無體におつ付ける故いろ／＼いひわけをすれども、きゝ入れず、後には喧嘩となる。

「知りもせぬものを人にいひかけをする訓い奴だ。」

「入らねえといふならしやつ面へぶつつけて歸れ。」

「正直なことをいへば人が恐がると思つてけつかるか。」



今年は世の中も穏かなれば、澤山米の買置をして下りを見て賣拂ひ損をせんと思ひつき、手代共へいひつけ諸國の米を買置きをする。

「霜降や磐城の水あるまじりを兩に五升で買置きました。」

「その相場なら美濃や尾張は二三升位のことだらう。何でも働いて高くかつてくりやれ。」

「これで金藏もちつとせきが出來よう。嬉しやく〳〵。」



博奕(はくち)を打つと身が持てぬといふことを聞いて、これ屈強と大勢鐵火打を集め、四割八分を七割ぐらゐにして、胴をとりはらひかけけれども、因果と張りがかたつりになつて、空目(あきめ)へ空目(あきめ)へと出でければ、したゝか胴へひいて存じの外儲ける。

「旦那はどうだ、よさまうか、それでは又御機嫌が悪からう。」



「ちつとうけつこと云つて、誰ぞ手を出さつせえ、氣のきかねえ。」

「台が一(ぴん)で、ひつきりがソレ六だ。よしか。」

「このやうな、忌(いめえ)ましいよとう博奕はねえ」

「この博奕は一から六まで張れば損はねえが、さういふ張はみんな嫌ひだ。」

「一番もかけねえ。」



する程の事が間違ひければ、世の中には富で身代をしまふもあるから、さらばこれからつけてみんと、その身は勿論、手代どもまでにいひつけ、見徳の悪い夢をいくらも買ひ、無性に札をとゝのへる。

「明神の百枚も、天神の五十枚も、止めの七十枚も、感應寺の五十枚が五十番ながら皆當りました。一から止までありたけ出ました。一枚もむだはござりませぬ。」

「ほんに當る因果ならはなばかりでおけばいゝに一までとるとはあんまりだ。」

「私共が不働き、申上げやうもござりませぬ。」



この上は盗人にとらせるより外はなしと、蔵より金をとり出し、家を開けばなしにして、夫婦は勿論、手代下女はしたまで、いづくへか出行く。

「出入の不自由のないやうに、家尻をば大く切りやれ。そして金はとりよいやうに纏めておくがいゝ。」

「これをしまつたら、盗賊除の守りを引つはなしておかう。」

まんまと盗人が来ればいゝが。」

「宝蔵の錠ゃへは、撒きちらしこきました。」

「ヤ、油があるなら向拵へをして、擔ぐやうにするといゝ。」

「匂を嗅ぎ〳〵盗みにはいるでござらう。」



業の如く盗人大勢はいりは入りしが、あまりの大金ゆゑ、持出す工夫や荷拵へに手間どり夜もほの〴〵と明けければ、とることはおいて、他所にて盗みし金箱、衣類、道具まで持つて出憎くなりしや、夫婦が歸りし聲を聞くと、その身ばかり足をはかりに逃げてゆく。

「よもやモウ盗んで歸りましたらう。お歸りなさりませ。」

「それだからマアちつとばかりでも取ればよかつたものを、脇で盗んだのまでおいて行くとは、長者のはぎへ味噌をつけた詮議だ。」



兎角思ふやうに金も減らねば、また〱思案し、京大阪から大和巡りを志し、道々も覺えを考へ、一日に二三里位づつぶらり〱と行きける。

「丁度金川泊りでようございませう。」

「かな川は金の縁がうるさいから、日高でも川崎へ泊らう。」

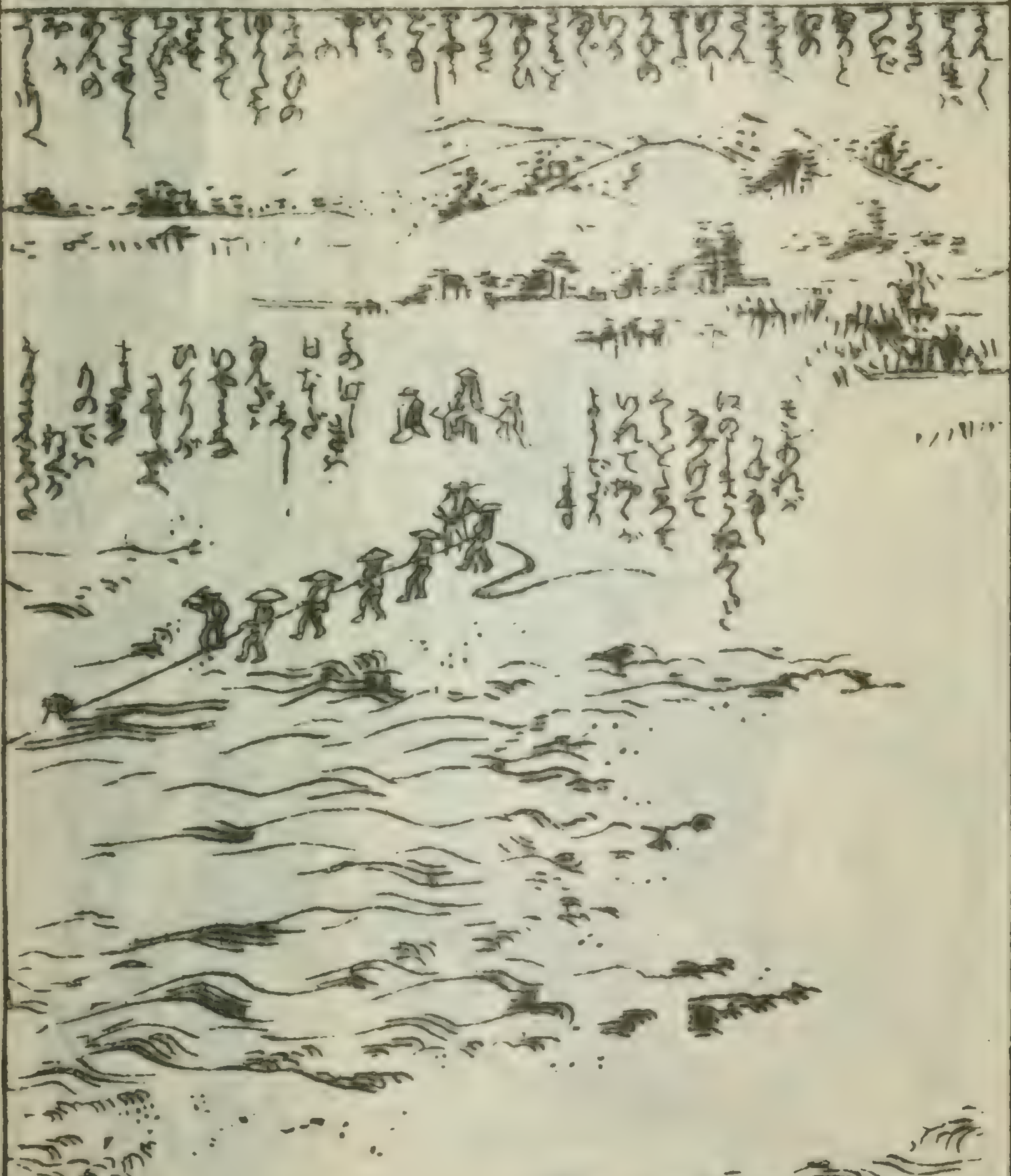
「□□お金をつけると申すは、馬の爲に御きとうになります。」

「四五十里も只御負はせなされてくださりませ。」

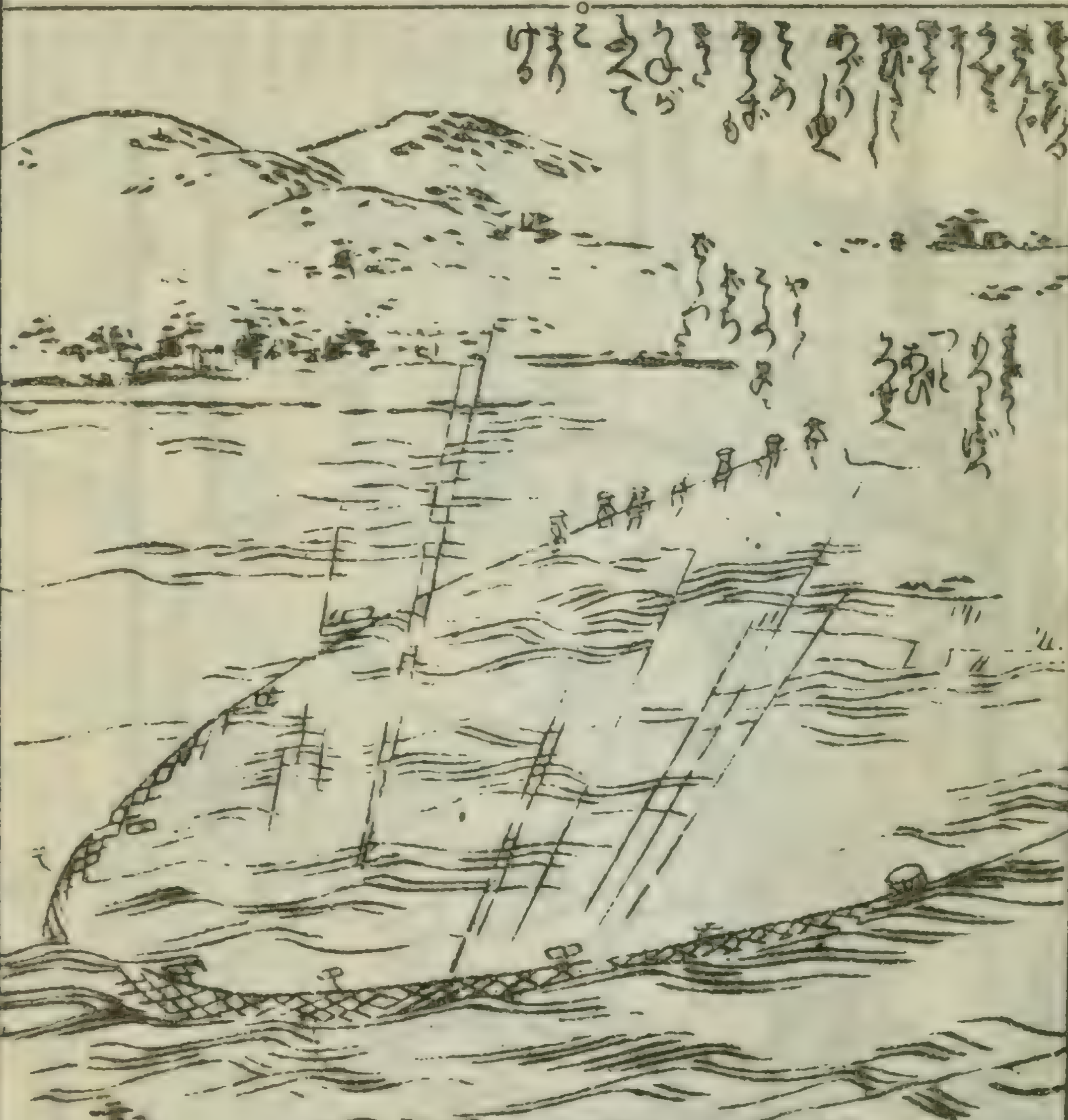


萬々先生はよき序なりと、江の島へ參詣し、また金のいる悩みを思ひつき、漁師ども一様の揃ひの浴衣を染めて着せ、地引きをさせしが、案の外海川へ廢れる金銀、魚にまじりて夥しくあがりし故、心ならずも又々金が殖えて困りける。

モ、あれが金なら、江の島かねくらと名



づけて、嶋を縫つて入れておくがようござります。」
「この景色は日本だ。しかし何だか嫌みな光がさすぜえ。またえての物ではねえか。うるさいこつた。」
「先からもつとづつツとあびかつせえ。」
「ヤイ〳〵こらつ貝にばちばらつた。」



此頃、大雨降りつゞき川々も閊えければ、暫く旅宿に逗留のうち、この大荒に買ひおいたる米一度に値があがつて、儲けたる由、書状着きける。

「これはまたとんだ事だ。騰り目が見えたなら賣らずにおけばえゝに。またおれに髭がせる。」

「御尤もでございますれども、先々から金に致して突きつけますから、致しやうが御座りませぬ。」

「こばんだものだ。困つたものだと、聞えるか。」



所詮一通りでは身代もまはるまじと、ぐつと智慧をめぐらし、三保の松原の松を堀らせ江戸までの運賃かれこれ、この入りやうではよもや金もなくなりさうなものと、先づ大勢請負人を集め入れ札をさせる。

「なんでも高い方へ落しますから、技倆一杯、つがもなく高く積りやれ。」

「入れ札の儀でござりますから、随分儲けるやうに積りました。」



翌日早朝より、金にあかして地を買ひ、人夫を集め、あまたの松を掘らせければ、中より石の唐櫃を掘出し、開けて見れば、また金ゆゑ、膽を潰して腰がぬける。

「石の唐櫃で百萬兩とつたやうな面をして怠けずと、手前も行



つてあとを擔いで來やれ。」
「ほんに金のあるのは首のあるには劣つたことだ。」
「四百四病の病より金ほどつらいものはない。おれはマアどうした因果で、このやうに金に緣があるかあやまり入つたて。」
「まだ〳〵こんな唐櫃が二三百もござります。」



萬々は腰が拔けてより勿怪(もっけ)の幸ひ、ものをいれて養生せんと思ひの外、けろ〳〵と治りければ、もはや我が運もこれまでなりと觀念して我が家へたち歸り、ちと古(ふる)けれども、金々先生の先覺の通り、藏の金銀を殘らずとり出し、海中へ棄てさせる。
「まだ奥の藏の三十戸



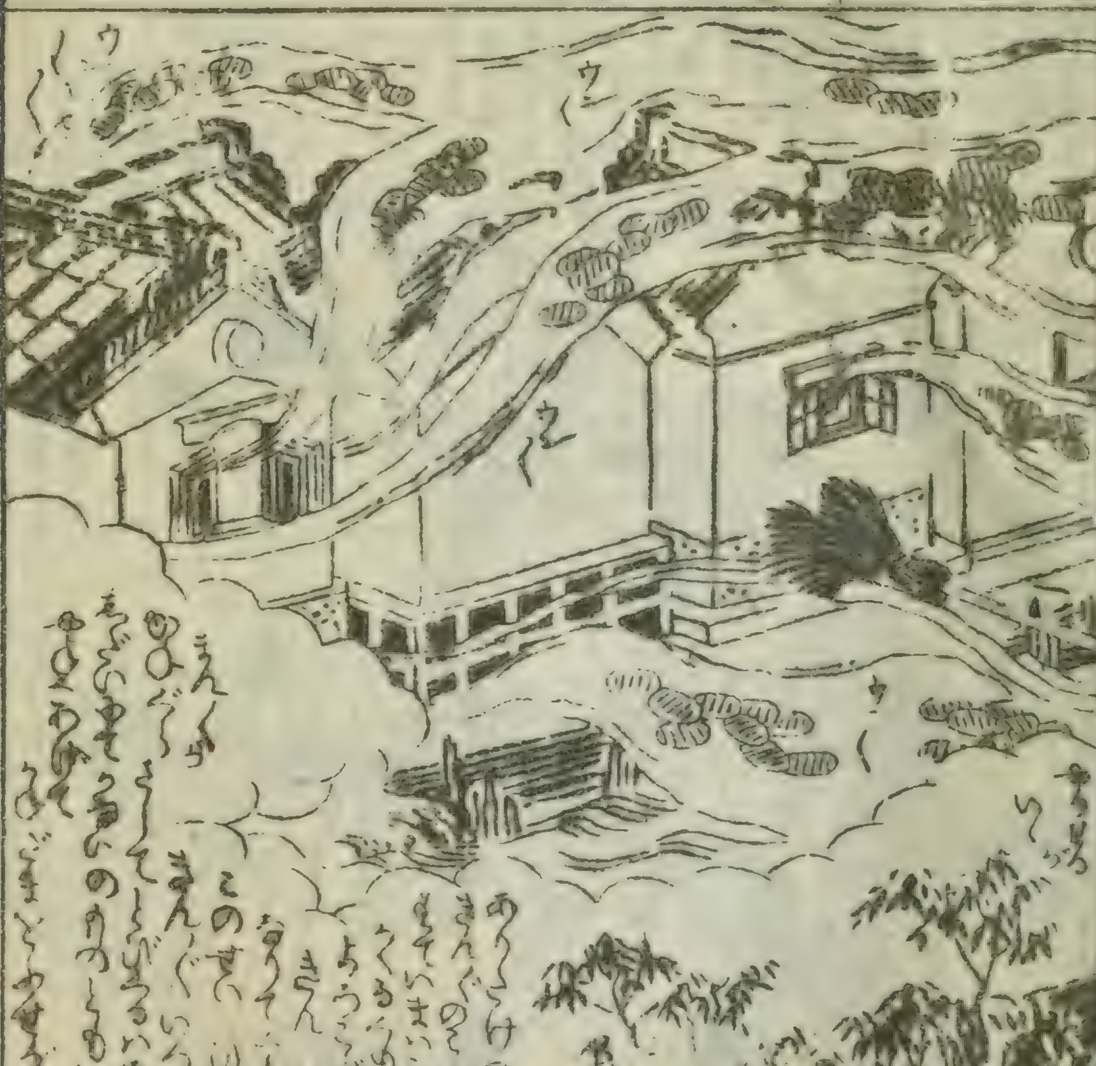
前が、手がつかぬ。
みんな稼いで棄てた
棄てた。」
「今まで金に恨みが數
々あつたが、のうの
うとした。」
「殘らず棄てたら、あ
とへ鹽花を振らせま
せう。」
「これ〳〵、そこらへ
零れぬやうに棄てさ
つせえ。」



ありたけの金銀残らず棄て、今は心にかゝる雲晴れたりと喜ぶ折から、棄てたる金銀一塊になりて空中へ飛びあがれば、この勢にひかれて世界中の金銀一緒に集り、萬々が金藏さして飛び來るは、目もあてられぬ次第にて、家内のものどもを金藏の屋根へあげて金だまを防がせる。一金の唸る聲をはじめ



て聞いたが、なるほど、ウン〳〵といふの。」
「黄金がまじつて來るわ。旦那は大ごんまりだらう。」
「無性に燒味噌をやかせるがいゝ。」
「ウン〳〵。」「ウン〳〵……」
「ウン〳〵。」「ウン〳〵。」
「ウン〳〵。」「ウン〳〵。」
「ウン〳〵〳〵。」



棄てたる金銀、世間の金と一塊になりて、倍増しになりて飛び歸りければ、今はうちにも立ちきり難く、夫婦諸共出奔して、野山もわかず歩きしところへさきに借りたる人々、今は金持となり、借りたる金に利に利を添へて持ち來り、無理無體に返濟せんとて辰巳上りにおつ付ける、

「なんでもうちへ引きずつて行つて、金を皆括しつけるがいゝ。」



「ほんに金持の女房には何がなるか。」
「置所(おきどころ)のない金は逆さにして振つても置所がござらぬ。」
「元利揃へてお宿(やど)へ返濟に參つたら、ちやんと留守をつかはつしやるから、これまでやつ掛けて參つた」
「わし等はお蔭で金持になりました、その恩を忘れさせようとは、太(ふと)い人だ。御受取なされずば、高辯に致して御返濟申す。」



其後、大尽は心を改め我が家へ帰りは帰つたれど、金子借どころのなきほど目出度く迎ふ春の、はるい趣向もおさい草雙紙と師はづかしく。



文武二道万石通

質、文に勝つて野暮なり。文、質に勝つて高慢なり。文質元結人品として月額青き君子國。五穀の外に挽きぬきのおそば去らずの重忠が、智慧の斗桝に謀られし、大小名の不知の山、三國一斗一生の恥を晒せし七湯泉の垢、とけて流れて三島にあらぬ大磯の化粧水に、しらげすませし文武二道、萬石通と名づけしを富士の裾野の蔦十が需に應じて龜山人作。

質勝文野暮也。文勝質高慢也。文質元結人品にして月額青き君子國。五穀の外挽ぬきのおそばさらずの重忠が智恵の斗桝に謀られし大小名の不知の山三國一斗一生の恥を晒せし七温泉の垢をとけて流れて三嶋にあらぬ大磯の化粧水にしらげすませし文武二道萬石通と名づけしを富士の裾野の蔦十が需に應じて龜山人作

頼朝公御前の人を退けて仰せけるは、一如何に重忠われ四海を治めしより日本の大名小名安堵の思ひをなすと雖も、武備に怠る心生ずべし。治世といへども文ばかりにては治め難し。今鎌倉の大小名、文に傾く者何程、武にはやる者何程といふ事を、汝が智慧を以てこゝろみるべし。[illegible]文武兼備したる[illegible]ければ、[illegible]重忠畏り



申すべし、文文でもなく武でもなきぬらくら武士多かるべし、三つに分けてお目にかけませう。」

「御人拂ひの御用は何であらう。何か文福茶釜で劍菱を飲むと云ふやうな聲が聞えた。」

「秩父殿は四相を悟ると云ふがお寺から使の來る事を悟るのかね。」

「さればもし雙六の賽の目の事か。」



かくて重忠謀にて、富士山の中に不老不死の藥あり、鎌倉の大小名人穴より入り此藥を求むべし、と仰せ渡されければ、不老不死の藥と聞き皆々富士の人穴にぞ入りにける。



重忠神楽堂の禰宜の身振にて下知する、

「見合つて／＼、是で大概一番の桝は仕舞うた。」

「人穴三文／＼。」

先知らぬ穴は富士の根いつとてか小糠もどきに武士の降るらん。」



富士の山穴の内の態(てい)。
「俗物(ぞくぶつ)の行かれぬ所だ。」




妖怪岩
柔弱輩不可入

文武二道の外に選りのけられし擬武士の分は恥をかくとも知らず、重忠が謀にて百人いかさまにかゝる東海の天なるべし

文道に心ある人皆此穴へ出る。

拔穴の口へとろゝ汁をこぼし置ける故、皆々辷り落ちる。これぬらくらふくべの當りなり。

「この粘るの水不老の藥かの、さて嫌しからぬ潤ひだ。



長命の場だらう。」

「一體が大ぬら〱だ。どうも足が踏み止められぬ。ア、どうも〱。」

「是がほんの穴へはまつたと云ふのだ。あな悄や〱。」

「妖怪がおらが手合を恐れたかして、一疋も出なんだ。」

「ねつから張合が無かつたの。」



「文人より武勇の人が余計でござります。然しぬらくらの方がしたゝかにござります。斯かくの如く仕分けましたは米搗の下石従からの存じつきでござります。」

「文より武の勝つたるは珍重々々。長く世の静な程、自然と文は勝つものだ。己が世話を焼くは其処の事だ。」

ぬらくらの大小名を見分け、文武両道の内に勧め込むべき由仰せを受け、七湯へ御暇賜はる條諸司の別当工藤左衛門へ申渡す。

一、此度長生不老



門に入し輩、山氣に中り不快の由、其上山より落候面々も多く有レ之段被レ及二聞召一、箱根の七ゆへ日數三廻りの御暇被レ下候間、申合込合不レ申様七ケ所へ可レ有二入湯一旨被二仰出一條可レ被レ得二貴意一候者也

月 日

重忠奉レ之

「長生不老の拔穴より出たる面々ばかり申渡すでござらう。」

「小名へは私より申渡しませう。」



湯元の躰

数多(あまた)の大小名七湯に別れ、三廻りの間、好(すき)な事をして楽しむ。
重忠のはからひにて鎌倉の女藝者を七湯へ間配(まくば)り置き、働きの休め種に仕掛けおく
十字除陰の三郎、頭の内に居る所は、五の三郎ちやアねえか。」
「伊藤九郎祐清(すけきよ)、嬢の思ひも天に登るとは湯の事ちやアねえか」
「ありく」



一變からの三郎、拳をしては勝負のつかぬ男さ。」

石臼屋の藥助とて何もかも少しづゝ嚙み分けた男あり。諸大名の御意に入り、此度湯場へお供にて來る。

皆きゝをせうといふ原小二郎。香を聞く事は、餘程うぬ野の小太郎。佐原の十郎、茶の湯は飯より好にて、鞘から茶腹の十郎。



塔の澤の躰

影法師で見ては皆黒彌五だ。」

「金屋金五郎の風呂屋の段をお語り。」

「黒彌五さんだから御所望申しやす。」

「おれが語ると、風呂屋の段ではない、黒彌五段だ。」

「茨左衛門」

「手みきん／＼。」

「たいらくの平馬の丞。將棊をさす時は桂馬の丞さ。うすぎの八郎、寒さうな身で居る。」

「いばらく待ち給へ。飛車手、王手をか



けられて、竹の下のまごつき左衛門だ。」

「先祖御厨(みくりや)の三郎より傳はりしめくりさ。」

「おらが先祖はよみの宿禰(すくね)。」

土井の彌太郎、やたらに何を吐く。

お厩(まや)のとく齋。

「とく場なら致しませう。」

「うゑ物が近いで謝(あやま)る。」

「人倫よし戀よし平山の馬所だ。」



堂ケ島の躰

一おれ等かけ者は數所の矢ア面ア立し安西が通し通矢數の役、一二數の時は萬歲の通し通きの土壇の千二間堂寺法を錬ふ。



「おれが名の亀甲亀（きつかふがめ）は御免だ。」

伊豆の二郎、今日はすつきりですずの二郎だ。」

「苗字（めうじ）が三浦だから、獺は得手ものだ。」



宮の下の躰

「しんがいのわらはせ郎はどうだ。」「是はあやまる〳〵。」「的はすつきりお音がない。太鼓ばかり成景様。」「豐後の次郎で義太夫も氣まぐれだ。」弾きながら首をふるや五郎。



木賀の躰

小四郎義時。
「しやんと小棲を。」
「おつと皆までかくに及ばず。うけとり兜だ。」
「犬坊さんなら、わんと小棲はどうだ。」
梶原三郎。
「箱根は駒のよい所だから、買つて行きだ。」
「私は鶉が欲しい。」



底倉の躰

●土屋三郎。
「杉暁が身振はどうだ。」
「まづ紋所がきつい身は無業ちやわいの。」
「そちが若衆なら、おれは小山だ。」
「りうさい。」
「それ勝つたぞ。」
「口惜しい滅相に負けるの。」
「とつことな。」
「こんな色子もねえもんだ。」



「茶、香、生花、鞠、俳諧は文道へ引込まれる。碁、將棊、鷹、釣、網は無理に武へこじ付けるがよい。同じ淨瑠璃でも義太夫は武の方へ引込み、豐後と河東は文へ入れずばなるまい。楊弓、小弓、めくりの三つは何と片をつけたものだ。」

「楊弓は弓の字故、差詰武に詰し、小鳥は不風流ながら文に致しませう。めくりは行司の貰ひか。」

「底倉遊びの方々は身振、聲色、相撲、皆武邊の内へ詰しませう。」

「同じ拳でも本拳は文の場がござります。唐拳は武の事さ。」

重忠廻者石臼藝助ぬらくら次第一々帳面書留め來る。



蘆の湯の躰

榛澤六郎、本田の次郎、古代の定九郎どうかと云ふ身にて三人を試す。

「金があらば此處へ出せ。」

「褌ばかりは御免下さりませ。」

「悪くじたばたすると芋ざしだぞ。」

「命と下帯はお助けだんな[illegible]だんなら。」

流石大名の事なれば駕かきは一人もなく



青の湯へは誰も来ず
といへども、油断に
地獄ありと聞きて、
中洲の執頭にて作り
湯の遣りを尋ね歩き
大きに凹む。

「女と侮つて無禮め
働き、御人體にも
似合ひませぬ、お
相手になりませう
か」

「今の様に云つたの
はほんの作興さ。よ
ふものきら嫁なら
様で済んだ事だ。
氣のみなけれ、
「地獄と見たかに、
ためあやまりさ、



大礒のてい

扨數多の大小名、湯場を立ち大礒へ泊りし折柄、重忠のはからひにて馬入の川上、川下に堤を築かせ、川上の水を切て落しければ酒匂満水となり、渡る事かなはず、皆々大礒に十四五日逗留して現を拔かして樂しむ。大礒にては此度こそ金の儲け所と思ひ、旅籠は晝夜三分を一時三分と値を上げ、藝者はありやすひとつに迎ひ三つ程かゝり、平澤が、若妻は安い所が千疋、最中の月八片を、以て小判一両にかへ、甘露梅一つが一匁づゝ、山屋豆腐は一丁で南一などゝ滅相界な事どもなり。

かくて大礒の大おどりに百人の背中にて三萬両の下り



が出來、川が開いても立たれぬ仕誼になり、百人云ひ合せ無間の鐘をつく事になる。

「何ぞ氣の變つた遊びがありさうなものだ。」

「阿波太夫を呼びにやれ。」

「生爪に火を燈す人もあるに、揚詰に日暮すとは有がてえ。」

「是から化粧坂へ押して行かうか。」

「それがよからう、少將でも買ひませう。」

「大きにお世話。」



大名の撞く無間の事なれば、各々揃ひの浴衣にて大盥の揚屋の池を手水鉢と擬へ百人にておつ取卷きしは繖子立に異らず、三萬兩の金が欲しいなあと云ふ聲、百千の雷の如く、振上げたる柄杓は水車の化物かと怪しまる。大磯中の女藝者めりやすの爲に惣仕舞にして同音に歌はせしははな〳〵しき貧乏なり。

一、路銀にはとほした穴のあく事と、身にぞ知らるゝ、湯場つらや。下略



めりやすも事終り、一イ二ワ三イッの掛聲にて既に打たんと振上げる。不思議や池の内よりも現はれいでの山吹色三十箱にて三萬兩ざぶり／＼と持ち出でる。これも重忠の謀なるべし。
「黒ん坊なら技珊瑚樹と云ふ場だ。」
「三つ重ねて三五十五だ。」



「此衣類脇差お覚えがござらう。以来表裏の心を改め武を励み給へ。」

重忠の嫡子六郎重保「地獄かとお目違ひの女はそれがしよ。」

「以来はきつと改めますでござりませう。」

「面目次第もござりませぬ。」

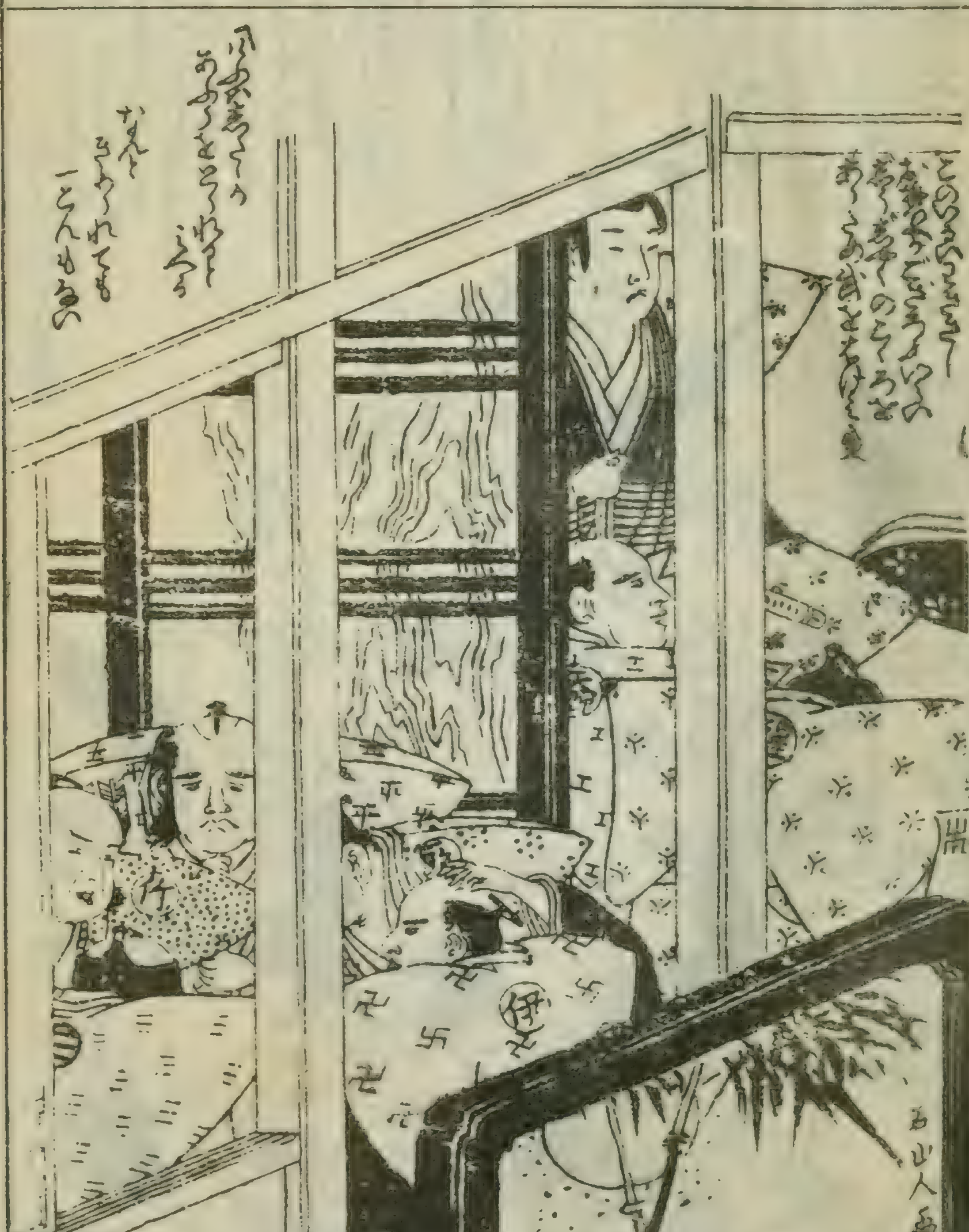
「其節の讒言は我々両人でござります。」

「其の場にての振舞、主命なれば御免下されませ。」



「今日はしたゝか青をとられると見える。」

「何ときめられても一言もない。」



頼朝公ぬらくらの大小名を召して仰せけるは一さきに重忠にはからせ文武の性をふるひ分け、ぬらくらの面々は七湯にて晒し、大磯にて身上をふるはせ、文武二道に導かしむ。自今以後それ〴〵に文武の道を學ぶべし。必ずしもぬらくらの心を持つべからず。今にも軍があるならばとろゝで軍がなるものか。文とも武ッとも云つてみろ。」

「いづれも有難う存じ奉ります。」



孔子縞于時藍染

京傳作
政演畫

鳳凰時をつくらねば、きぬ〴〵の愁もなく、麒麟入を吠えねば、夜道する邪魔にもならず、凰も出よ、麟も出よ、麟凰つけるが武藏坊辨慶さんの力でも、微塵も動ぬ。君が代の紅粉屋八百屋は、史記にうたはれ、二六は入魂先生の會日ぢやが、拒障があつて、止みましたとは、大通家の天窓にひとしく、聖代の時いたれるかな。

山東京傳述

中人以下不可以語上と怖るゝに至れども、かの川柳點の句に「褌に紐があるので緊まるなり」とは宜なるかな。上を學ぶ下々まで、善き風を移し、惡しき俗を易へて、芋賣りの孝行、大工の忠義、酒屋の御用も朋友の交りを厚くし、切見世をそそりて、やい礫野郎と、口から子の曰はくを讀めば、四海皆兄弟の如く、專らとして物貰ひ非人に至るまで禮を好む。「魯の西の狩に麟を得たりと



孔子縞于時藍染

あれば、孔子も淋病は瘥ましつたと見えます。

「六臣註の文選の拂ひ物がござるがお求めなされぬか。」

「左傳に、匹夫罪無し、玉を懷いて罪ありとあれば、此方共の様な幸福な身の上はござらぬ。」

「時に先生。逝く物は、斯くの如きか、晝夜を舍てず。」とは、物日を切りかけられた客の事かね。」

「私共も昔はそんな事もござりました。」

「不佞は淺草「無宿でござる。足下は昨夜、掃き溜の中にお寢なされたか。」



玆に通り町筋に、有徳(とく)なる町人ありしが、不義にして富みまた貴きは、我に於て、浮める雲の如しと悟り、仁徳の最上は金銀を施すよりは、無しと思ひ、蓄への金銀を惜しげもなく、人に呉れんと思へども、また先の人も富貴天に在り、

天理に應(かな)はぬ金銀は受けられぬと、誰一人貫つてくれる者なければ、始んど困り、町内の番人は何うか慾の深さうな親爺(おやぢ)と思ひ、先づ百兩ばかり施さ

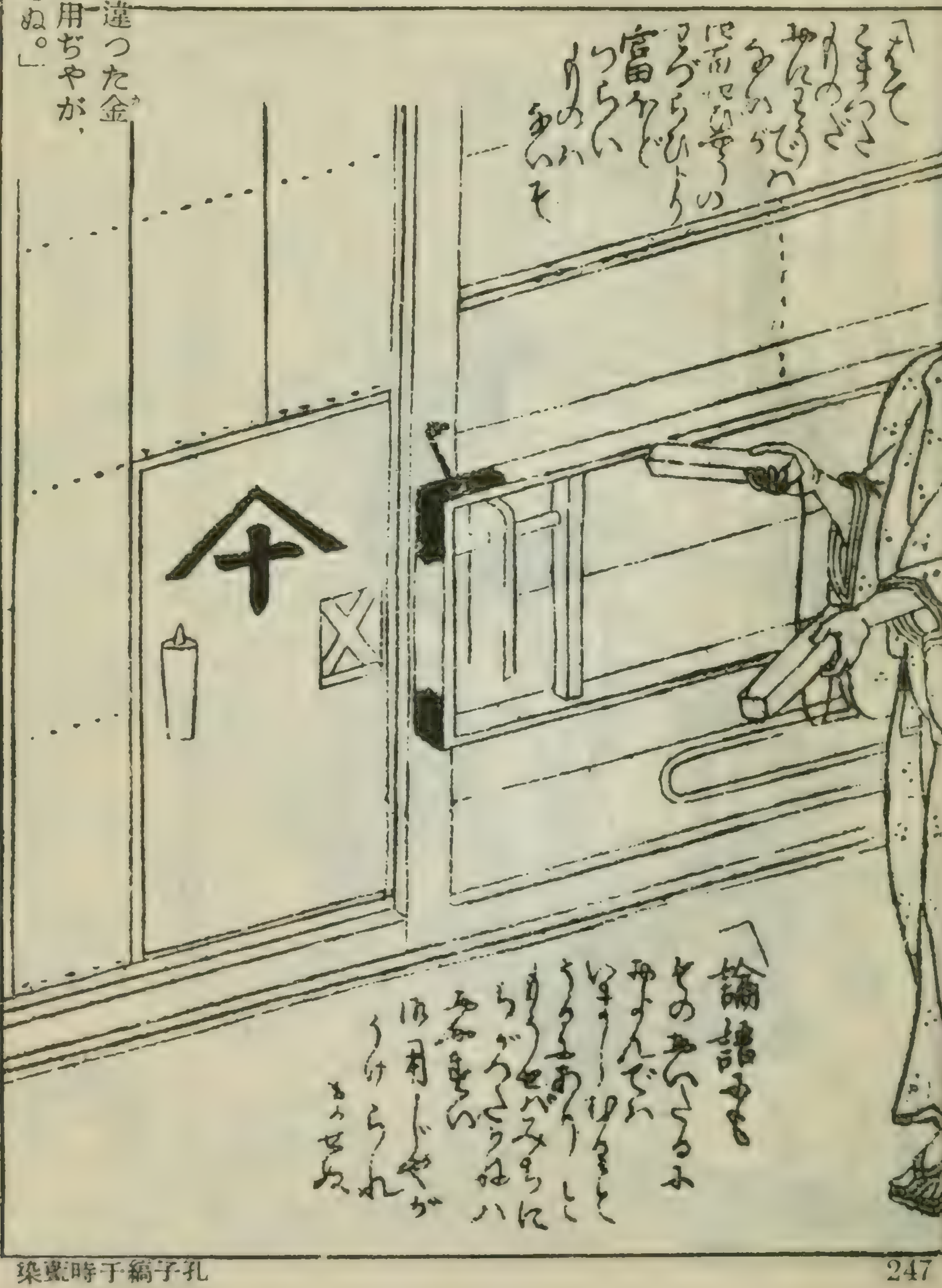


んと呼びかける。

「はて困つたものだ。鬼王ではないが、四百四病の患ひより、富ほど辛いものはないぞ。」

「これあの人、近頃無心の至りぢやが、見掛けて頼む。俺を助けると思つて、何卒此金を貰つてくれぬか。」

「論語にも、其老いたるに及んでは戒むる事得るにありと申せば、道に違つた金銭はお安い御用ぢやが、受けられませぬ。」



列子に財を以つて人に分つ、是を通と言へるの語を思ひ、傾城買ひも女郎に引かれて遊ぶを色男なりとし、女郎は旅人の客なぞと見ると忽ち襟元についてかけのめし、兎角大金をおつつけたがる、油断のならぬ世の中なり。無心の文の文句に曰く。またぞやしめしまゐらせ候。偖々此方事も色々と仕合せがち、御察し下されかし。その中へ、此程も枕探しの客に上がり縞の財布に入れて五十両、蒲團の下へ押附けられまゐらせ候。それより段々と都合



宜しき事のみにて、節句前も呉服屋より是非々々百両ばかり請取り費(つか)ひくれ候様に申し、兎角押附(おつつ)けたがり候ひしまゝ、やうやうと遣手衆に受合せ、盆前までと申しのべまゐらせ候。ぬし様へは此様な事は申し上げまじと存じかへしかど、どうぞ〳〵盆前には御都合遊ばし、せめて七十両ばかりも御費(つか)ひ下されかし、くどうも〳〵御頼み申上げまゐらせ候、かしこ。」

「こんな謝(あやま)ることはない。何うも俺も此頃は都合がよく×



斯くて世の中の人、正直を專らとすれば、人として愼しむべきは慾の皮なり。その慾も多くは金銀より起る所なれば、金銀ほど穢はしき物はなしと、兎角金銀を忌み嫌ひければ、貧乏人ほど尊く、福人ほど卑められ、中にも女郎買ひに身をうちて、多くの金銀を押附(おつつ)けられたる子息(むすこ)手合(てあひ)は金錢の棄て場に困り、座頭にひど金錢をやる。其の證文に曰く。

やり棄て申す金子證文の事



一金拾兩
但し文字小判也
右の金子やり棄て申所實證也
引取の議は來る何月何日迄にきつと受取可申候、利足は毎月金貳兩づつ無相違受取可申候。爲後日之證文如件

月日
やり主
うけ人

「極め通り受取る節、四の五のとは申しますまい」。「さやうなら拾兩きつと御用立たれます」。「しかし渡す時の地藏顏、受取る時の閻魔顏と申す事が御座る」。



若き手合は女郎買ひにて多くの金銀を背負ひ込み、親の厄介にかけるは不孝の至りなり。五刑の罪不孝より大いなるは無し、と孝經にもあるものをと正し、せめては罪を減するため、弟に家督を讓り、大金を背負つて勘當をうけ、立退かんと願へば、親はまた過つて改むるに憚る事なしと一向に不承知なり。

一「何卒御勘當なされて下されませ。七生がならずば二升五合でもようござります。」

「大學にも人の父としては慈にとどまると言ふを知らぬか。勘當するぞ



事はならぬぞよ。

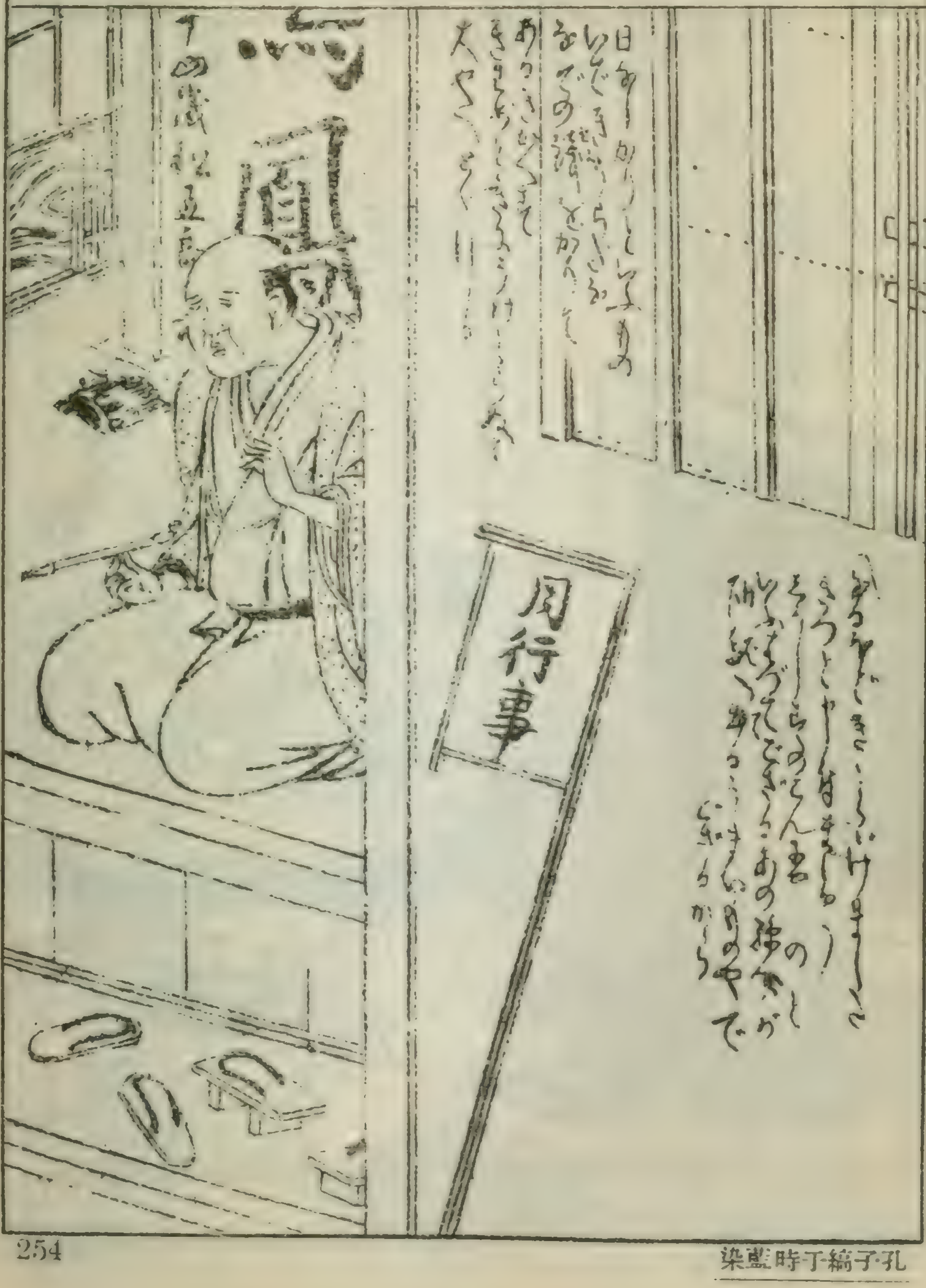
俺が身代は有難いことには一年に二百や三百は手輕く喰込む身上だが、これしきの金錢をおつ附けられても苦しくないぞ。」

楚國には以て寶とせず。唯善以つて寶とすと言ふ文言を守り、段々世の中にて金銀を忌み嫌ひ、中にも才覺なる男、案じて曰く。燒味噌を燒くと金錢が逃げると言へば、さらば燒味噌を燒かんと大火鉢にて燒きかける。



「どうもおらが近所はかねが多くてならぬ竹籔と溝とがたんとある勢だらう。」

日なし借と言ふ者出でき、裏店などの銭を借りて歩き、返す定め時に受取らぬと大屋へ届ける。「お前はお家主様で御座りますか。別の事でも御座りませぬが、お店の孫介殿に三貫文借りうけまして、毎月二七日の日に二百文づつ返す約束でござりますが、兎角、酢の蒟蒻のと言つて受取りませぬ。よく申し附けて下さりませ。」「成程、聞届けました。きつ



と申し附けませう。然し酢の蒟蒻のと言ふ筈でござる。あの孫介が下馬へ出る、甘い物屋でござるから。」

「もしえ、大家さんへ。此裏の子供衆が何處のこに打ちこむものもあらうに、私共の店へ小判をぶちこみやした。わつちらがうちぢや、もの忌めえだからいつそ氣にかけて居ります。どうぞお叱りなすつて下はりやし。ばか／＼しい。」



呉服屋も福神の名を家名については縁起が悪いとて、町の恵比須屋も貧乏神屋と名をかへ、随分地合の悪い代物を、大高賣りにしければ、殊の外流行り、買手山の如く、市をなしけり。

「手拭の高賣り。三十八匁〳〵。」

おきやアがれ。矢張り無益記の型だと言ひつこなし。作者もそれは承知さ。



「もう五匁高く賣つて下さい。この木綿は地合が良すぎる。」

「ナニサ、六百目なら隨分高うございます。此やうに見えても、とつともう二三度お召しになるとぢきに破れます代物ぢやさかい、これより高くは上げられませぬ。」

「古語にも千金の裘あつて千金の布なしと申します。」

されば堺町の禰宜山も損山と改名し、深川の八幡も富が岡を改め貧が岡と唱へ、人々遣手と言ふ名を羨みにける。



君子は争ふ所なしと言へば、博奕諸勝負事は決して弄ばねども中に物好きな者は嘘事にてめくりを始めても、互ひに勝を人に譲り、禮儀を正しくする故、一番のめくりに鳥が鳴き、睡い目をして、面白くも何ともなし。「拙者がひよつと八をめくると赤藏が出來ますから、平に八をお踏み



なされ。」
「イヤ、それでは貴公様のお爲に惡く、殊に拙者は大引で御座れば踏みますと八が上がつて、この方へ仲藏が出來ます。此儀は御用捨なされ。」
「イヤサ、それでは拙者の志が無になります。」
「合つて呉れろ。」
「御火を入れませう。」



中にも別して徳のある人は所々へ施行の蕎麦店を出し、無代にて往き來の人に振舞ふ。或日、折介躰のものこの蕎麦を三杯喰ひしが、代もやらずに振舞はれるはあまり道に缺けた事と思ひ、人の見ぬ間を覗ひ、錢を五十匁膳の上において逃げ出でしが、是を擔きが見つけ、あとより大勢追かけて引ずり戻し、この樣に陰徳のある人を唯おいては此の方の道が缺けると、無慘やな、かの折介を大勢



寄つて、握り拳で頭を思ひ入れさすつて突放す。一何でも禮を盡して歸すがいい。」

「赦して下され、そんな陰德のある者では全くない。拜みます〳〵。」

「きやうに卑下なさるほど猶尊く存ずる。」

「お怪我のない様におさすり申さう。」

「昨日も向ふ新道の倉の矢尻を切つて、千兩箱を授けて、その上、壁の繕ひ代に金十兩おいて行つたといふ事だ。大方其人だも知れねえ。」



列女傳に陰德ある者は陽に是を報ずと聞く。陰德を施さんと兩國或は山下(やました)の廣小路などには巾着切られ徘徊してうつかりひよんとしてゐる油斷を見すまし、袂へ胴亂や紙入を押し込まるゝ、用心すべし。

「叔敖(しゆくごう)が兩頭の蛇を埋めたよりも是が陰德の早道だ。」

一先づ今日も餘程陰德を施した。」

「是から山下へ出て、奴(やつこ)が莊子の講釋でも聞から。」



倹なるは固し、寧ろ固しけれと當世を譏す通人は粗服を伊達として、上總木綿の着物に地荒き縮の羽織なぞを好む。

「向うの新道はうつかり通ると、金を踏んづけてならぬ。忌々しい。」

「あれもどこか通人ださうな、木綿揃はまた格別意氣だぞ。とかくうるし木綿の事だ。」



芝居なぞは百三十二文づゝ札錢をやつて見物を入るれば、貴き人は切落へ入り、賤しき者は棧敷で見る。狂言の筋も曾我の貧乏を取組み、明六つの鐘を相圖に、三百兩の金をきつと受取ませうと、團三郎が臺辭をやんや〳〵と嬉しがり、對面の幕にも五郎が臺辭に寶の山とはいはず貧乏の山へ入りながら、手を空しく歸るが口惜しいわいと言へば、見物その氣取をほむる。

「三百兩の金が欲しくも



何ともないナア。」「男女交り坐せず、手づから授けを受けずと、男棧敷女棧敷と言ふが出來る。此時入込みの湯屋へは一向はいり手がなし。」「東西東西。やかましいわえ。」「コレそら八殿、肌を入れさつせえ。曲禮にも裳をかゝぐる事勿れとある。」「狂言作りは諸事左交りがことだよ。おいらは、てんだぞ。」



大音寺前なぞは物騒になり。夜更になると、追剝がれといふ者出で丶、往き來の人を待ち受け、取摑まへて、おのれは眞裸になり、衣服大小金銀を括しつけて逃げる。「追剝がれといふ者は扨々張合のない者だ。斯うした所が別アねへ、丁半のくづれか、駈込み訴訟に行くやうだ。」



「褌は此方の例刻が見えるから勘忍してやらう。おさらば／＼。」

「ヲヽ、寒い寒い。斯うしてはみたが、さぞ貴様は温かだらう。美しい／＼。」

「金銀は申受けませうが、せめて衣服大小は御免なさりまし。悲しや／＼。申し申し。」

「おれがなりは手習ひ子が留められたやうだ。」



斯くて世の中の人、聖賢の道を學び至徳要道ありておのづから君子の徳至れば、紛争のなき御代となり、天明地察と言うて、地もその徳を感じ、五穀作りもせぬ野山に生えて、穗に穗が咲き實りければ、百姓も置き所に手古摺り、爲方なくぼら長左衛門様へいで、三年が間御年貢を一倍増しにお取



り上げ下されと、御慈悲を願ふ。ぼら長左衛門も仁徳の厚き人故、早速聽屆け給ひ、お救はれ米を取りあげ給ふぞ有難き。

「あまり地神が通りもの過ぎて困つたものだ。」

「御訴へがすんだら、雨國の麒麟の見世物を見ませう。」

「うち續きました豐年で、何を申すも、置所に難儀致します。」

「お年若ぢやが有難い殿様ぢや。」



天もまた其德を感じ、御料簡違ひにて空より金を降らせ給ひ、初手のうちは、此處に三兩、かしこに五兩位の事なりしが、段々大降りとなり、深山嵐に山吹の、花吹きちらす如くにて、人々大きに難儀する。

「是は何でも大變でござります。天



上で無間の鐘を撞くさうだ。」

「紀文大盡の年越の趣向といふもんだ。」

「金の降る夜はナアひとしほ床し。」

三味線の手は人の知る所なればこゝに略す。

「とんだ惡い天氣だの。もう上がりさうなもんだの。」



斷くて高き山深き海、谷も川も家居も、米と金にて埋みけれども、天道人殺さずと諭の通り、世界の人、金銀の中をかき分けてやう〳〵生き命を助かり、至極上々吉飛切この芽出度き御代こそ有難き。

「金は湧きものだとは、よくいつたものだ。かう湧かれてはは謝る。」

「上州の森とは強いてん違ひだの。」

「芽出度いにも程があつたものだ。かうまた芽出度い事もないものだ。ばか〳〵しい。」

「そりや出た出た、金の子お出たよのう。親もむぐれば、子もむぐる。」





大極上
請合賣
心學早染艸
上
大傳馬二
大和田出店

繪雙紙は、理窟臭きを嫌ふといへども、今その理窟臭きをもて、一ト趣向となし、三册に述て幼童に授く。もし其理を得る事あらば、天竺の親分も、方便を懷にして退き、魯國の伯父も、天命を袖にして去るべし。しからば我國の姉子なんども、淸く淨とし給はん哉。

京傳述

画草紙は理屈臭きを嫌ふといへども。
今その理屈臭きをもて。一ト趣向となし。
三冊に述て幼童に授く。これも手理也
迂をしあらば天竺の釈迦も方便を懐よ
しくて退き。魯国の祖父も。いなか命き袖紬
あつかひもちて画し。志のつぶ我國の嬶子
なりと毋の清く浄しとなん哉

京傳述

人間に魂といふものあり。如何なるものぞといふに、男の魂は劍なるべし、又雛小松の淨瑠璃、俊寛が云分をきけば女の魂は鏡に極りたり。又芝居の魂は銅に赤き紙を張るものなりと。そんな論は皆脇へ退けて置くがよし。劍と鏡なりといふは皆準なり。又年代記の端を見るに魂を知る歌とて「一木九からに火三つの山に土一つ七つは金と五水りやうあれ」とあれどもこれは率強なり。意より外はなきものなり。これを生ける時は精氣と云

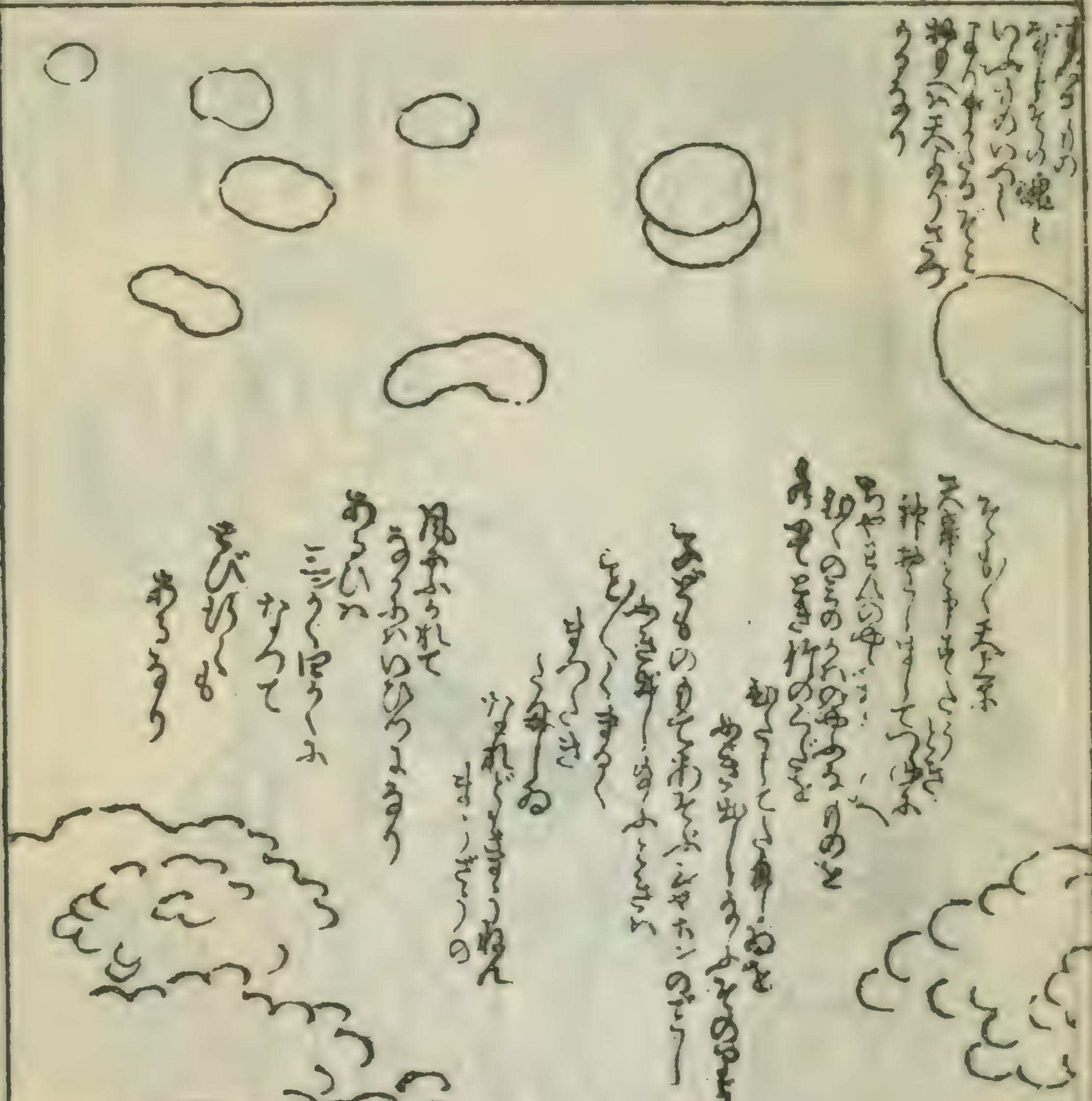


ひ、死す時は魂(こん)魄(はく)とも云ふ。又心神とも云うて人間の大切なるはこれに過ぐるものなし。その魂といふもの何處(いづこ)より來るぞと思へば天より授かるなり。

「おれがなりには畫工(ゑかき)も困るだらう。今日のなりは日本に限る天帝だ。他(ほか)の國へは沙汰なし沙汰なし。」

「評判々々々々。」

そも〳〵天上に天帝と申す尊き神在(おは)しまして、常に茶碗の様なものへ椋(むく)の實の皮のやうな物を水にて溶き、竹の管(くだ)を浸(ひた)して魂



を吹き出し給ふ。

その理方(りかた)子供の弄(もてあそ)ぶシャボンの如し。吹き出し給ふ時は悉(ことごと)く丸く全(まつた)き魂なれども、妄念妄想の風に吹かれて中にはいびつになり、或は三角四角になつて飛び行くもあるなり。

爰に江戸日本橋の邊りに目前屋理兵衛といふ有徳なる商人ありけるが、妻姙りて當る十月目といふに出産して、玉の如くの男子を儲けゝれば家内祝詞を述べてさゞめきける。「幼きは白き糸の如く、如何様にも染るものなりとは、宜なるかな。理兵衛が悴出生すると等しく彼のいびつなる悪魂皮肉へ分け入らんとする所を、天帝



現はれ出給ひ、悪魂が手を捻ぢ上げ給ひ全(まつた)く丸きよき魂を入れ給ふ。これ親理兵衛が常に一心の修(をさ)めよき故、天帝恵(めぐみ)を垂れ給ふ故なり。されど凡夫(ぼんぷ)の目には少しも見えざるこそあさましけれ。
「コヽ構はずと行け。」
「ハア。」
「チョン〳〵チヨン〳〵。」
と拍子幕　いふ所なり。



理兵衛は悴を理太郎と呼び育てしが、よき魂日々附添ひ守り居けれぱ、成長に從ひ利發にて行儀よく、その上器用にて外々の子供とは事變りけれぱ、兩親掌中の玉の如くいとほしみ育てけるにぞ、三つ子の魂百迄と末頼もし／＼もえけり。

「これは／＼　たおれが子ながら後世恐るべしだ。餘り不思議だが誰ぞ



に書いて貰ひはせぬか。」
「ほんに御器用な御子様でござります。」
「お師匠さんがこれからは國盡しを書いてやるといひなさつたよ。」
「坊はおとつさんや、おかゝさんが大事だよ。穴一や寶引はしねえもんだねえ。」
魂後に鬚撫でゝ居る。
「ちつとさうもござるめえ。」



かの悪魂（わるだましひ）、理太郎が體へ這入らんとせしを天帝にけちをつけられてより、身の置所（おきどころ）なく相應の體（からだ）もあらば這入らんと思へども當時は儒佛神（じゆぶつしん）の尊き道、しきりに行はれて人皆悪き心を持たねば、立入るべき所もなく宙にぶらぶらして居たりけるが、折もあらば理太郎が體（からだ）のよき魂を亡（な）きものにして我々長く理太郎が皮肉の中を住家（すみか）にせんと工（たく）みける。



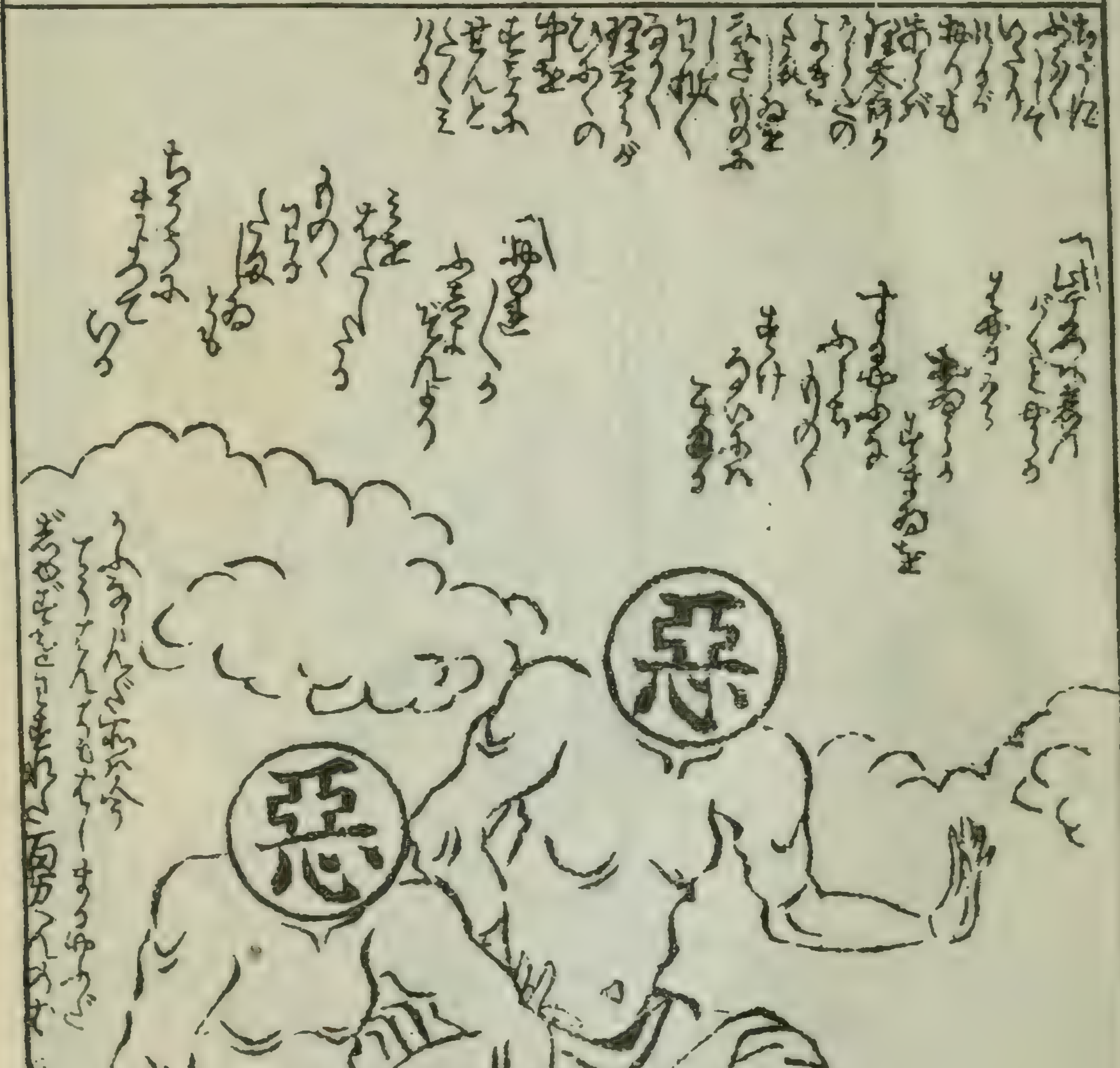
「ナント此群(むれ)で五十番めくらうではないか。

「イヽ體の株を買ひたいものだ。」

「此頭は心學(しんがく)とやらがはやるから、おいらが住(すま)ひをするやうな不埒者の少(すけ)ないには困る。」

おのれ／＼が不所存より身を果(はた)したる者の惡魂共、中有に迷つて居る。

から並んだ所は今丁半でも始(はじま)るやうだ。珠數(じゆず)を忘れた百萬遍の場もある。



今は早や理太郎十六歳となりければ元服をさせけるに、生れつきもよくよい男となり、さて店の商賣向ある儘預けてさせければ、型の如く律義者故朝も早く起き夕も遲く寢ねて、隨分萬事に心を配り儉約を元として、親に孝をつくし家來に憐みをかけ、算盤を常に離さず内外を守りければ、その近邊に評判の息子となりけり。

「額は拔かぬがよい。人柄が惡いぞや。」

「ハイ〳〵。」

「よくお似合ひなされます。」




大極上
請合賣
心學早染艸
中
大傳馬三


善

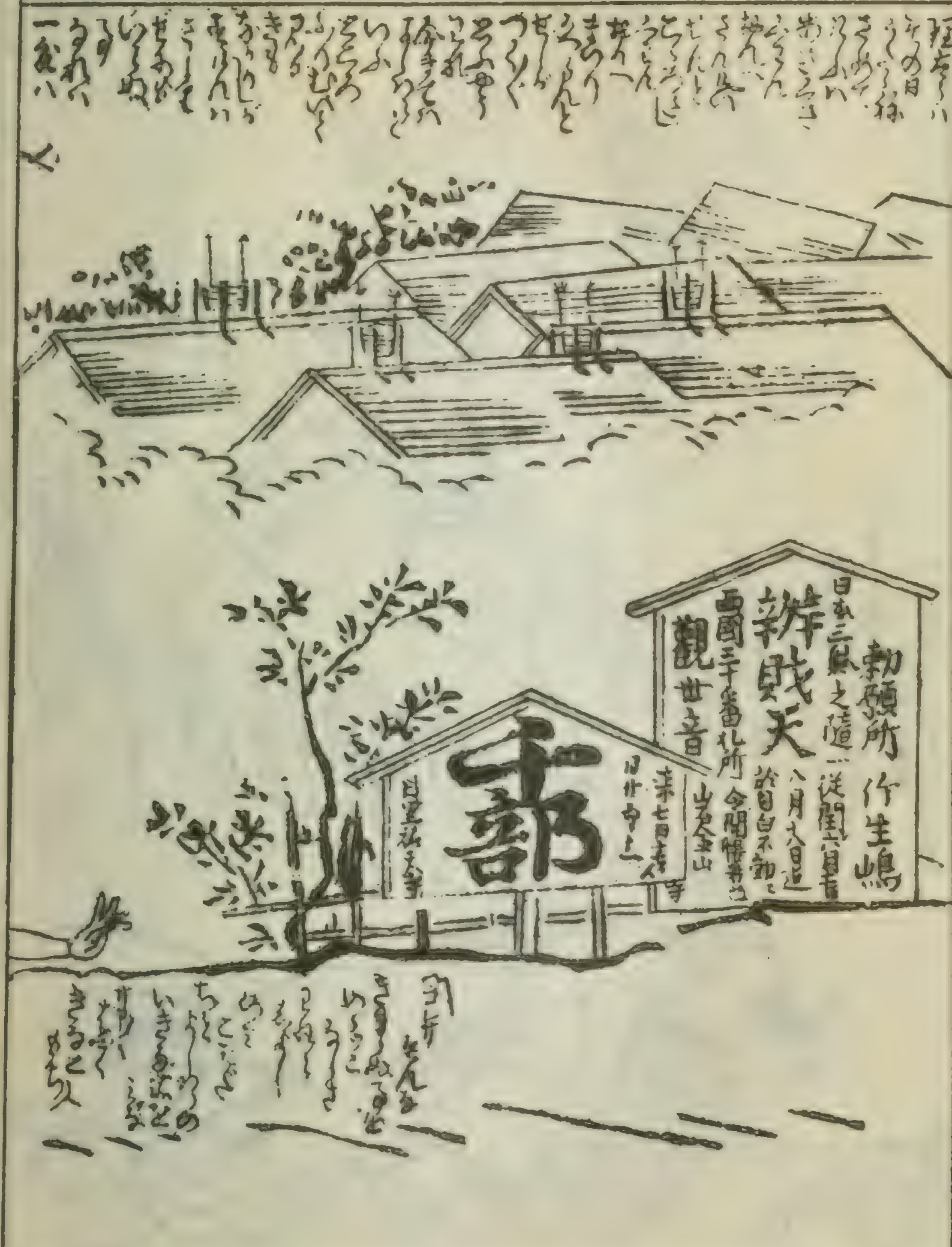
人の寝たる時は魂が遊びに出ると云ふ事違ひなし。理太郎十八の年、ある日帳合に疲れて轉寝(うたゝね)しける。かの魂日々悪き魂を近づけまじと守り居る事故、少し草臥(くたび)れて、理太郎が轉寝(うたゝね)を幸ひ其處らへ遊びに出しが、例の悪(あく)魂(たましひ)はよき折柄と仲間を語らひ來り、よき魂を縛(しば)りおき後(あと)の體へ這入りける。

「よい氣味(きび)〳〵。」

「エ、殘念な。」



理太郎はその日轉寢覺めて今日は淺草觀音へ參詣せんと志し、觀音へ詣り歸らんとせしがつく〲思ふ樣、我今迄は吉原と云ふ所振り向いて見る氣もなかりしが、素見はさして錢も入らぬ事なれば一度は見ても苦しかるまじと思ひ、うか〱と土手八丁へさしかゝり(け)る。これ惡き魂皮肉(に)分け入りし故なり。「イヤ〱行かうとは思つたが、内で案じるてあらうか。



然しとても此處まで來たからは一寸見て行かうか「但、歸らうかと色々迷つて、上手を行きつ戻りつする「これ惡魂の所爲なり。」

「コレサそんなきまらぬ事を云ひつこなしさ。我等諸事呑込だ。ちと吉原の意氣な所を見な。サアノヽ早くきな粉餅〳〵」

魂曰「おれは追剝に會つた宿引といふ身だ。」

「ウヽ〳〵〳〵。メたぞ〳〵。ウヽ〳〵〳〵其處だえ〳〵。おいらが身は人間の車を曳くやうだ。」



理太郎は惡き魂に誘はれ吉原へ來り、素見物にて歸らんと思ひしが、仲の町の夕景色を見てよりいよ〳〵惡魂に氣を奪はれ、とある茶屋を賴みて三浦屋の怪野といふ女郎を揚げて遊びけるが、忽ち魂天上へ飛んで歸る事を忘れ、更に正氣はなかりけり。魂宙に飛んで、



踊ををどる。
「そつこでせい。
「よい〳〵。」
「アリヤ〳〵。」
「アヽいゝ句が
する。
岡本の乙女香
といふ句だ。」
「酒に明かさぬ
夜半もなし。
それが高じた
物狂ひ。」
「アヽ面白い面
白い。こんな
面白い事を今
迄知らずに居
たが残念。」



「マツ今晩はこれきり。ドン〳〵〳〵〳〵〳〵。」
「うちをかぶつたらどうする、するもんだ。」



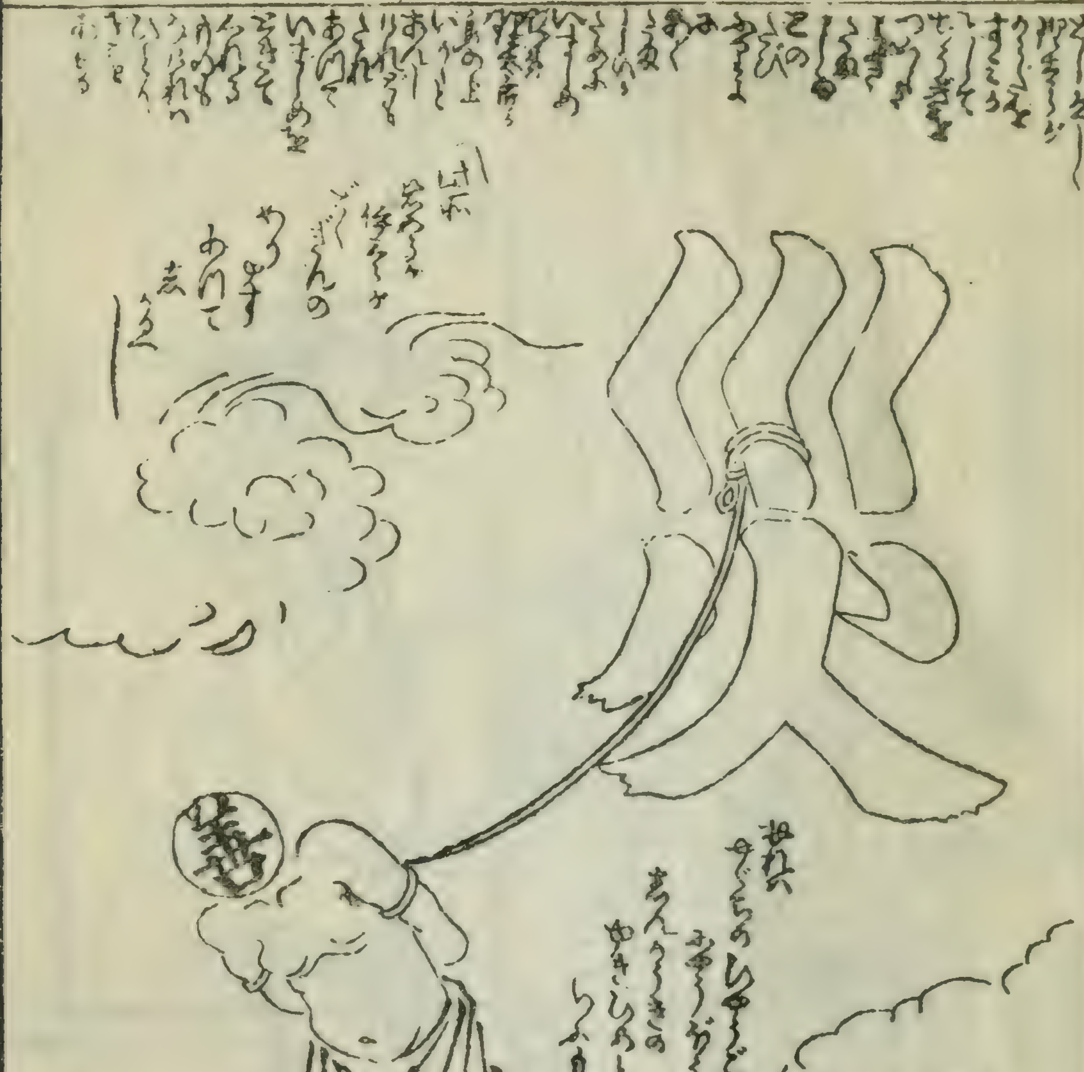
「オヽ冷めてえ。」

「合點だ〳〵。」

年久しく理太郎が體を住家として忠義を盡したる善き魂、この度不慮に惡魂が爲に縛められ、理太郎が身の上如何と案じけれども、誰あつて縛を解いて吳れる者もなければ、一人氣を焦せる。

「此所、忠五郎か、伊三郎が獨吟のめりやすあつて然るべし。」

「おれは矢口の兵庫が女房、信仰記の雪姫と云ふものだ。」



惡魂は背から踊り草臥れて、女郎の懐へ入りすやすや寢入るとひとしく理太郎はしきりに内の事が氣にかゝり、おれはどうして此處へは來た事ぞなぜこんな氣にはなつた事ぞと、夢の覺めたる心地して、ものも云はず立歸らんとせしが、此騒ぎに惡魂目を覺して、歸してはならじと早速理太郎が體へ飛び込みければ、又心かはり遂に流連と來りし所へ、かのよき魂縛の縄をやう〱引切り、一散に馳來り手をとつて連歸らんとする。惡魂



は歸すまじと引とめる。理太郎左へ引かるゝ時はアヽいつそ流連（ゐつゞけ）ようと思ひ、右へ引張られる時はイヤイヤ早く歸らうというて、廊下を行きつ歸りつ思案まち〳〵なり。

魂の姿凡夫の目には見えぬ故、茶（屋）の男は

「怪（け）しからぬ身振をする斧人（きやくじん）だ。」

「お歸りなんすとも居なんすともしなんしな。馬鹿らしいよ。」

「井戸替といふ身だ、コレ屁をひらつしやんな。」

「ヨイサア〳〵〳〵サア〳〵。」



理太郎は元の如く善き魂又入りける故、此間の女郎買の事は夢の様な心にて、思ひ出すも穢しく帳合ばかりして居た(り)しが、かの怪野が所から魂膽の文來りしを何心なく開きければ、又惡魂此文の中へ入り來り取つく。

茶屋男「初會からお文の參ると申す事は、神代にもない事でござります。」

善き魂、文を見せじと氣を揉む。




大極上
請合賣
心學早染艸
下
大傳馬三



理太郎、怪野が手を盡したる魂膽の文を見しより又々心迷ひ、おれが身上で一年に三百や四百の金遣うたとてさのみ痛みにもならぬ事、千年萬年生きる身ではなし、死ねば錢六文より外はいらぬものを、今までは無益の儉約をした事ぞ、何ぞ燭を乗つて遊ばざると、古詩を以て手前勝手な例に引き、惡念しきりに萠しける。

理太郎惡念萠しければ此時を得て、惡魂善き魂を切り殺し、日頃の念をたちける。

「覺悟ひろげ」

「一無念々々」



悪魂共遂に理太郎が皮肉へ分入り、よき魂の女房二人の男子を追出しければ、三人手を引き合つて年久しく住み馴れし體を立退くこそ哀なり。これより理太郎は大の放蕩者となり、四五日づつ流連する。理太郎が番頭迎ひに來て、奥山もどきで理窟をいふ。「左樣に御料簡のないお前樣ではないかりしが、天魔の見入れか是非もねえ。」「コレサ、そんな野暮をいふな。どんな事があつても歸



る事はいやだの鮨だ。」女郎も理太郎が餘り長く居る故、神がつて言葉を濁す。
「ほんにお父さん、お母さんがお案じなんすだらうねえ、わつちやアどうも歸し申したくねえが、どうしたもんだらう。」
魂「これからはおいらが世界だ。」
魂「アヽえい態だ。」
魂割竹にて追出す。
「きりきり立つて失しやアがれ。エヽ。」
「今に思ひ知らせん。」
「悲しや悲しや。」
「かゝ様いのう。」



理太郎は段々悪(あく)魂ふえて女郎買の上に大酒を飲んで暴れ、博奕(ばくち)をうち、騙(かたり)をし、親にも不幸に當りければ、遂に勘當の身となり今は身の詮所さへなきやうになり、あまつさへあるに親の内の土蔵の家尻(やじり)を切る。
悪魂(わる)共多く集り、つき纏(まと)つ



て色々悪事を勧むる。恐しき事也。慎しむべし／＼。

犬曰「山科の隠家ぢやアねえが、昔の旦那今の泥、吠へねばわたしが役目が缺ける。わんわん／＼。」

「斑犬よ、おれだね、吠へるな／＼、荒神様の吠へるな／＼はどうだ。」



理太郎は遂に宿無しとなり、何更悪魂増長して今は盗賊となり、人家離れし所へ出て追剝を致しけることそうたてけれ。然るに又爰に博識秀才仁德の世に著き道理先生と聞えたる學き人在しけるが、或夜講釋より歸りがけ此所にて盜賊に出會ひ、



豫て手に覺えあれば早速引捉へ不愍の事に思ひ給ひ、如何にも教訓して善心に導かんと其罪を許し、同道して宿所へ歸り給ふ。「憎い奴の。」惡魂共、おのれらが業にて今此の身にして仕舞ひながら、皆々指さしてどつと笑ひけるぞ憎らしき。



爰に又善き魂の女房、二人の悴は、如何にもして親の敵を討たんと附狙へども、悪魂は多く方人ある故力に及ばず、無念の月日を送りしが、本心に歸りし時を得て、難無く本望を遂げゝれば、その外の悪魂は皆々逃げ失せけるぞ心地よき。

「夫の敵、勝負々々。」

「思ひ知つたか。

「親の敵、觀念しろ。」

理太郎は道理先生に命を助けられし上、儒、佛、神の導き道を聽



き、今は前非を悔い、本心に立歸る、

「道理のたゞはわし一人、可愛と云うてくれの鏑も、物前の金も、今はもう穢し！や／＼」

「人間萬事大切なるは一心なり。皆おのれが心より出て、おのれが身を苦しむる。今心は即ち魂ぢや。こゝの道理をとくと合點せねばならぬ。」

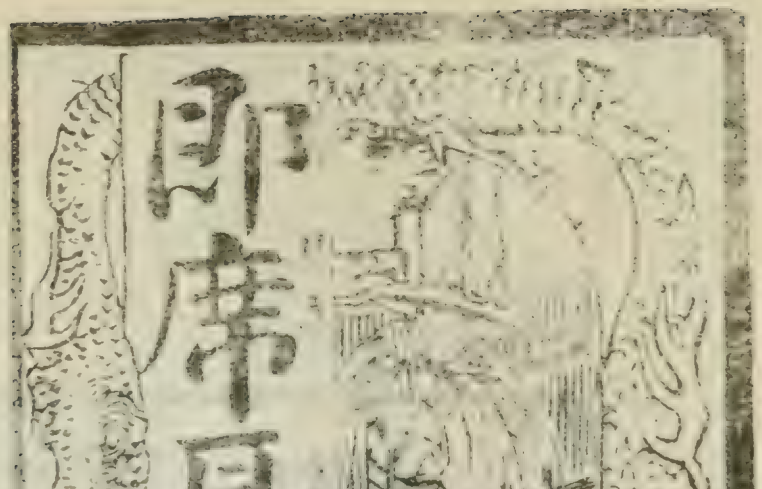
「此序に此本の作者をもきめねばならぬ。大分不埒ぢやさうな。」

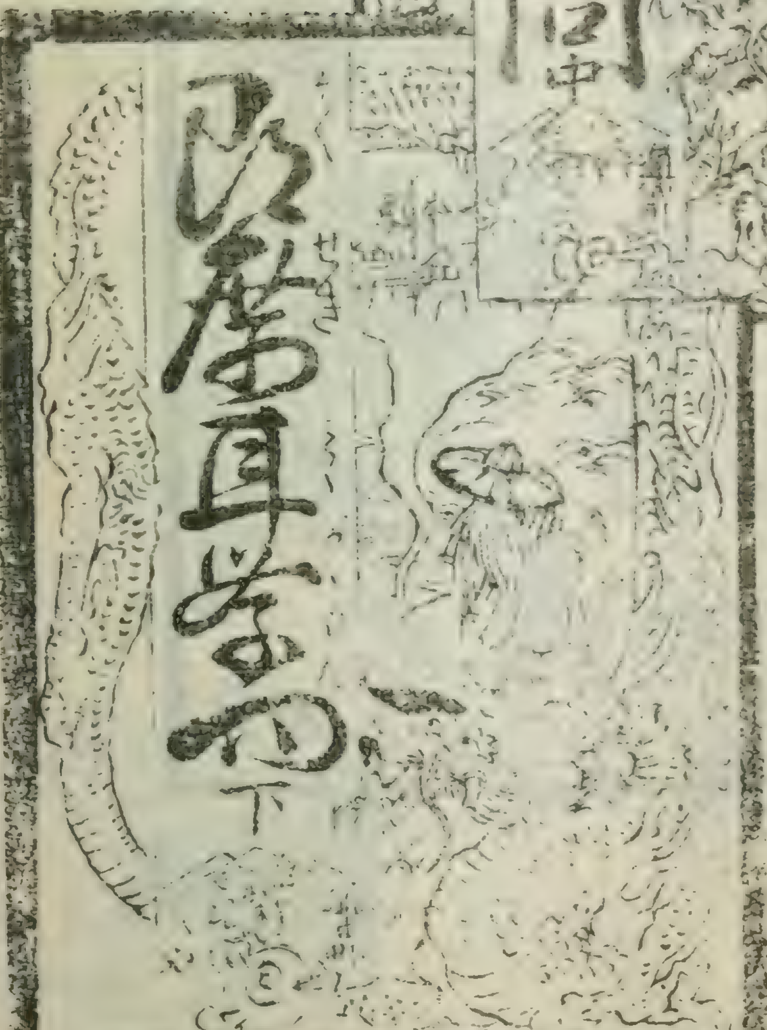


道理先生悉く数訓して後日前屋の両親に勘當の詫をし給ひければ、両親も大に喜び早速呼び返しければ、理太郎これより道をあきらめ、親に孝を盡し稼業を憐み、大君子とぞなり家富み榮えける。是皆道理先生の仁徳なりと世に云ひもてはやしける。かの悪き魂の悴両人は親の跡目を繼ぎ、長く理太郎が體を住びとして母をも育み忘らず守りけり。これより魂居据って再び立つ事なし。



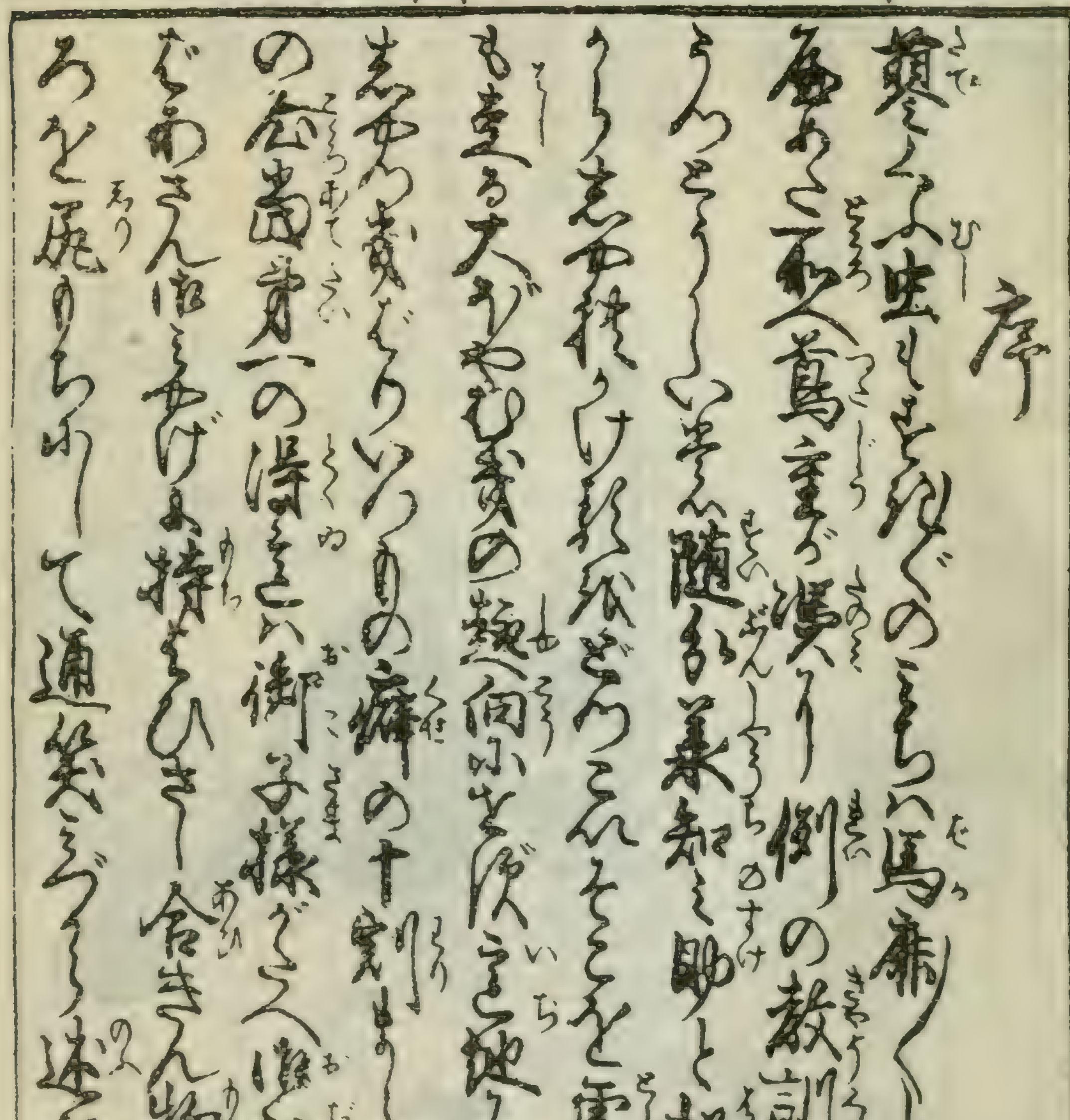

即席耳學問
上


即席耳学問
中


下

序

蓼くふ虫もすき〴〵のみちは馬鹿々々しいと、二三年やめた所へ、蔦重が馮に例の教訓異見のうつとうしいも、随分承知之助と板元の方から、しやれかけるをどつこいそこを虎の皮千里も走る大ぼやむきの趣向にせず、意地にかゝつてしやつきばり、いつもの癖の十割まし、たつた一つの心當、第一得意はお子様方へ、おぢいさん、おばあさん、お土産に持ちよいさし合禁物のない所を尻もちにして通笑自ら述ぶる。



爰に島屋仙右衛門とて
正直一遍に商ひを心掛け、
其身六十にあまる比は、人も知る
金持となりしを、ぐつすり
息子に譲り、名を學心と改め
樂な身となれば、あたりの子供を集め
忠孝の道と一生の心掛を
耳近く話しける。先づ父の恩は
富士山を眼の下に見る程高く、
母は恩龍宮の掘抜より深く、
主從の緣は四世の契り、
何と疎にはなるまいがと、
やは〳〵と敎ゆる其上、男は家を保ち、
女は夫を始め、舅姑のつかへやうまで、
まゝ譬をもつてこれを導きける故、
子供の行儀も目立つ程によくなれば、
後々には、子供より親爺おふくろが
我も〳〵と詰めかけ、



有難いを口の酸くなる程にいひて、
日々に聽く事が面白く、少しの
懈怠もならぬやうになりしも、
元來此隱居、商人といふ者なれば、
向うの心持を承知して
二十に賣るものは十九文、
四十のものは三十八文と
賣りかける心地の所へかゝつては、
釋迦でも孔子でも及ばぬ事、
卽座卽效の敎へ方、早業八人前の
學問の上を行つた手廻し、
早業千人前なり。
これをきゝて後、
道ある事を知りて學問を始めて
大極上々吉の人となりたる者、
その數を知らず、
隱居の悅び限りなければ、
又そのもとは
隱居の齋と悅ぶ



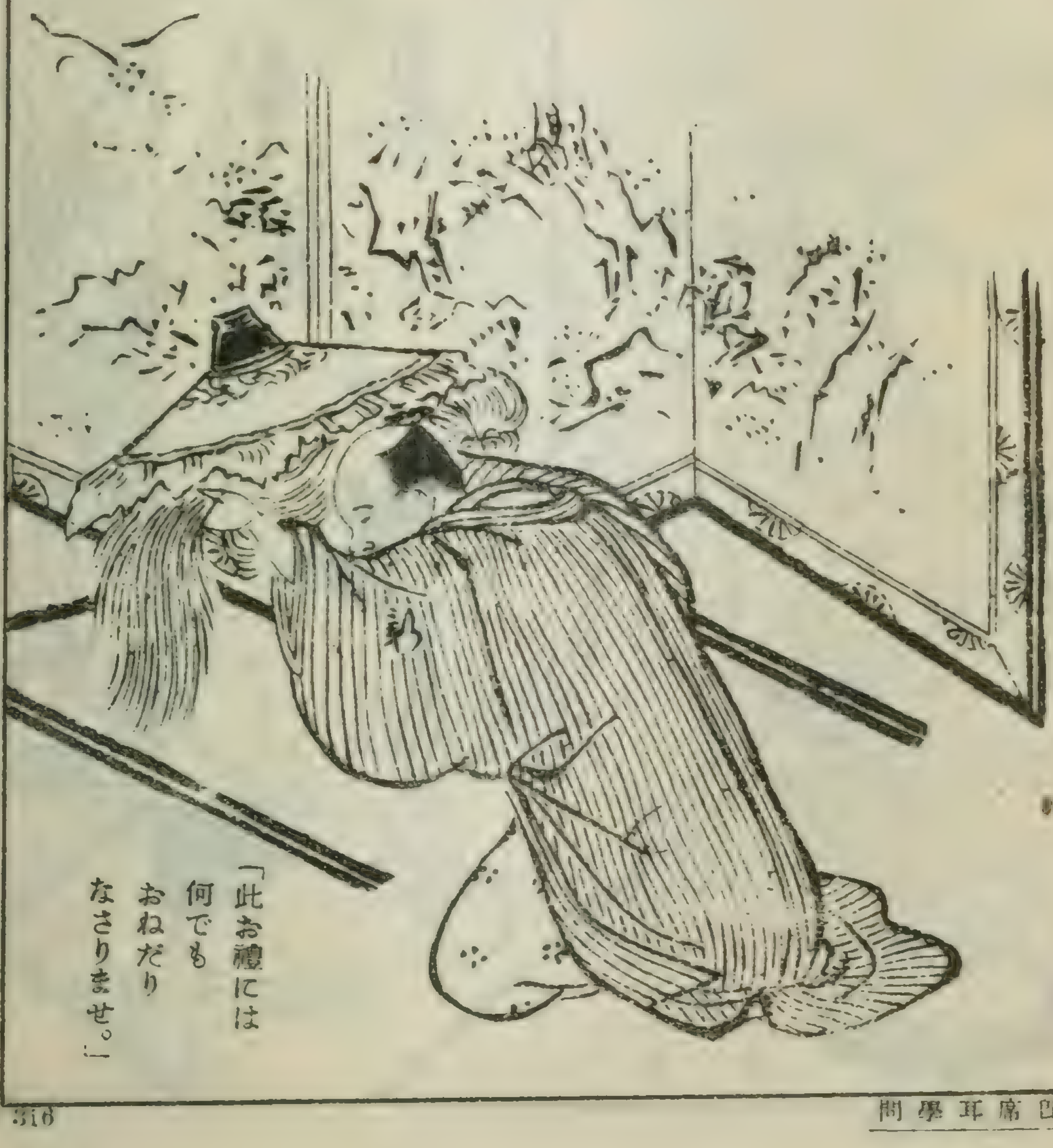
又島屋の一軒おいて隣に、
徳田屋新右衛門といふ者あり、
これもそこらでの身上なれば、
何不足なく、其上六つになる
一人息子寵愛限りなし。
有る習ひ、我一人可愛がれば
近所で憎む事を
母親は氣の毒に思ひ
島屋の隱居様の前も
面目もなしと、
段々亭主に意見すれど、
つんぼう程も聞かず
うつちやつておかつせえ、
子供は皆こんなもんだ、
何のあの隱居が
いふ事なれば、
聞いた事はねえが
忠孝の道ぢやとて、



それを知らぬ者があるものか、御公儀様の掟を用ゐれば、忠孝の道はいふに及ばず、聞くにも及ばず、こんな叉知れた事もねえもんだ。よもやあの隠居もそんな事を珍しさうにいひもせまい。何ぞほかに面白い話でもするてあらうから、それて聞きに行くであらう。小僧も來年から師匠様へ行くとおとなしくなります。
ナア坊。



新右衛門型の如く律氣者にて、
尤も、商人なれば
大黒天を信じ、甲子怠りなく
•御神酒供へに黒豆の御飯のみにて
九つまで我一人起きてゐて、
悴息災延命、猶成長の上
野呂間てござらぬやうに、
今の内は洟を垂らしても
後々は洟つたらしで
ござりませぬやうに、
偏にお願ひ申上げますと、
繰り返し繰り返し
お頼み申上げければ、
不思議なるかな
大黒天現はれ出で、
善哉々々、我は是など、、
しかつべらしき事なく、
とんとお心やすく、

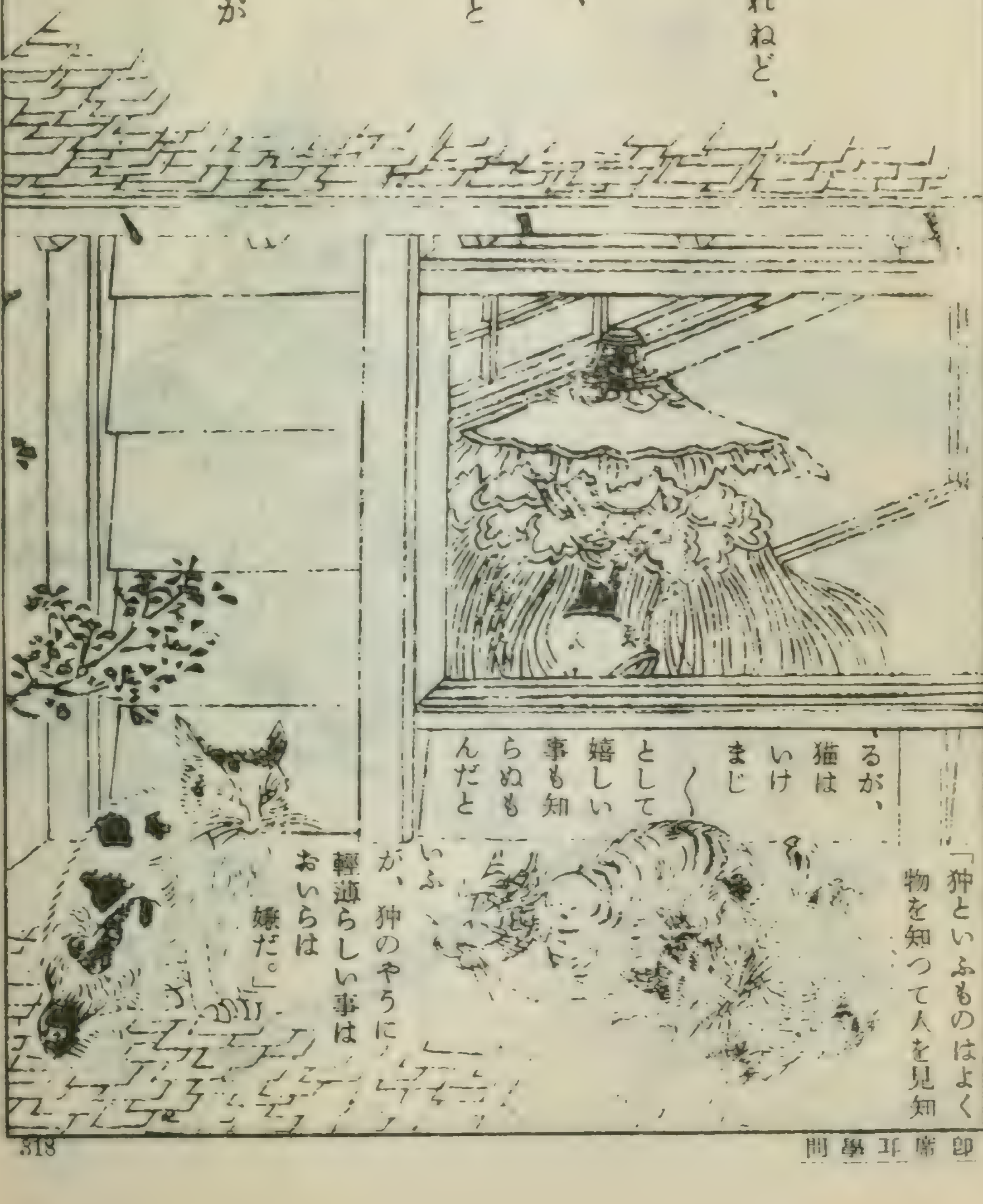


新公さてお主が望は
世間の者とは事變り、
かの物を欲しいともいはず、
唯息子の事ばかり
かれこれ言やるが、
打出の小槌の方より
おれが料簡にはむづかしい。
然しながら
頼むとあれば
立引(こも)くてはないが、
殊にお主が事は、
持前の額の皺に皺をよせた
隱簔隱笠此二品を
お主に進上、ではない
暫く貸すから、
これを着てみやれと
お貸しなされけり。
大黑樣も
何といつても、お年寄だ
けて重さうなる御趣向なり



「食物(くひもの)の事をいふは
勿體ないが、黑豆の飯は
強(こは)いと御免だ。
神酒(みき)德利(とくり)も
よく振つて
くりやれ。」

授かりし簑と笠を
そつと二階へ上りて
着てみたところが、
隠れたか隠れぬか手前には知れねど、
窓から屋根を覗いてみれば、
近所の猫三匹
日向ぼこをして居れども、
見て居ても逃げも騒ぎもせず、
さてはこの姿、猫の眼にも
見えぬさうだ、これは面白いと
息を殺して覗ひければ
一匹の猫がいふ。
虎、手前は鼻の先をどうした
といへば、虎がいふ、
鰹を一切引いたら、おさんめが
途方もなく擲りあがつた、
かみ様が飯を入れてやれと
いはしつても、
面倒がつて入れてくれず、



「狆といふものはよく物を知つて人を見知るが、猫はいけまじとして嬉しい事も知らぬもんだといふ、が、狆のやうに輕薄らしい事はおいらは嫌だ。」

ひたるいから引くのだ。
すゝ、おらが内でも昨日
けつかる。おいらも
今度は猫に生れたい
好きな鼠を食つて一日寝て居る、
こんな楽なものはないといふから
大笑ひちやアねえか。
おれはもう鼠は嫌ひだが、
あいつがうせて飯つぎを
囓つてやられては済まねえ。
内の者が寝るとおらあまんじりともしねえ。
晝睡くなくつてどうするもんだ。
鼠も山椒醤油の附焼か、又食卓のやうにでもしたら
食へもしようが、
その儘食つて喰はれるものか。
さりとは人間といふ者はものを知らぬもんだ
と話せば、新右衛門は初めてかやうな事を聞き、
呆れ果て、膽をくる／＼
でんぐりかへす



猫の話に我折り果て、
又犬の心意氣を聞かんと覗へば、
これも同じく夜番の話、
昨夜胡亂な奴が見えたから
まんじりともしねえ、横町の方でも
時々飯の一杯づゝも食はせるから
此處も行き廻つて見たり
肴屋は一得意だから粗末にはならず、
鳥の鳴くまで聲を枯らした故、
草臥れて通り中に他愛なく寢て居たら、
何處のべら坊か、したゝか踏みやがつた。
おれが考へてみるに、咎もねえ者を
責めるといふ痴もあればあるものた。
此處ての事だが、おいらは
世間の狹い者だから、旦那衆の氣に
背いてはならねえ。子供衆が手を
くれろといはつしやると幾度でも
進ぜる。兎角可愛がられるが得だ
と話せば、新右衛門聞きて
おそろ感心々々。



新右衛門はかの簑笠の
威徳を知りて、少し料簡ありて、
江の島鎌倉大山の邊、
箱根邊りへぶらつかんと、
たゞ一人にて出かけ、
此簑笠さへ着ると
箱根も手形入らねど、
其處が大黒様なか〳〵天下のお關所、
こゝでは隱れといふ字はお嫌ひ、
その他品川で酒落ても
笠をかぶり三軒屋でおごり、
濱川で生きた鰈をしてやり、
神奈川泊り藤澤泊りも
簑さへ着ようものなら、
うまいものゝ親玉なれど、
こゝが新右衛門、
大黒の氣に入る正直者、
それてなければ大事の物を
お貸しなされぬ筈、
神は其處が見通して大の御承知さ。



それより御殿山の方へ行く程に、
鳥の一群ちやちやくちやと鳴き行く故、
こいつも面白さうな事と、
かの蓑笠引かけ後を慕ひければ
森々たる森の打續いて、
覗へば一つの庵ありて
向うの方より來るものを見れば
鳩なりけり。大小仕形にて
こなたの鳩は袴羽織、
はたと行き逢ひしが、
その禮儀正しく慇懃なること
人も恥づべきなり。
實、鳩に三枝の禮あると。
親より三枝下りて止る由、
他人すらかやうなれば
親にはさあるべしと、
又鳥類にも恥入りける。
またかの庵をさし覗けば、
老人の鳥に息子らしき鳥が



給仕して食をすゝめける。
何ぞ御氣に入りましたら、
お替下されませ、といへば、
いや〳〵皆々うまき故
十分なりといふ。
これらをや烏に反哺の孝とや
いふべくと思へば、
百日親の養ひを受け、
百日親を養ふといふ
それでは元値商ひ
損得なしの孝行ぢやと思つたが、
なか〳〵老人への扱ひ、
百年の孝ありとも見ゆる。
いやはや、人間として
烏類にも大凹みだ、
息子の烏
今日は御番でござります
といふ故、
後を慕はんと思ふ。



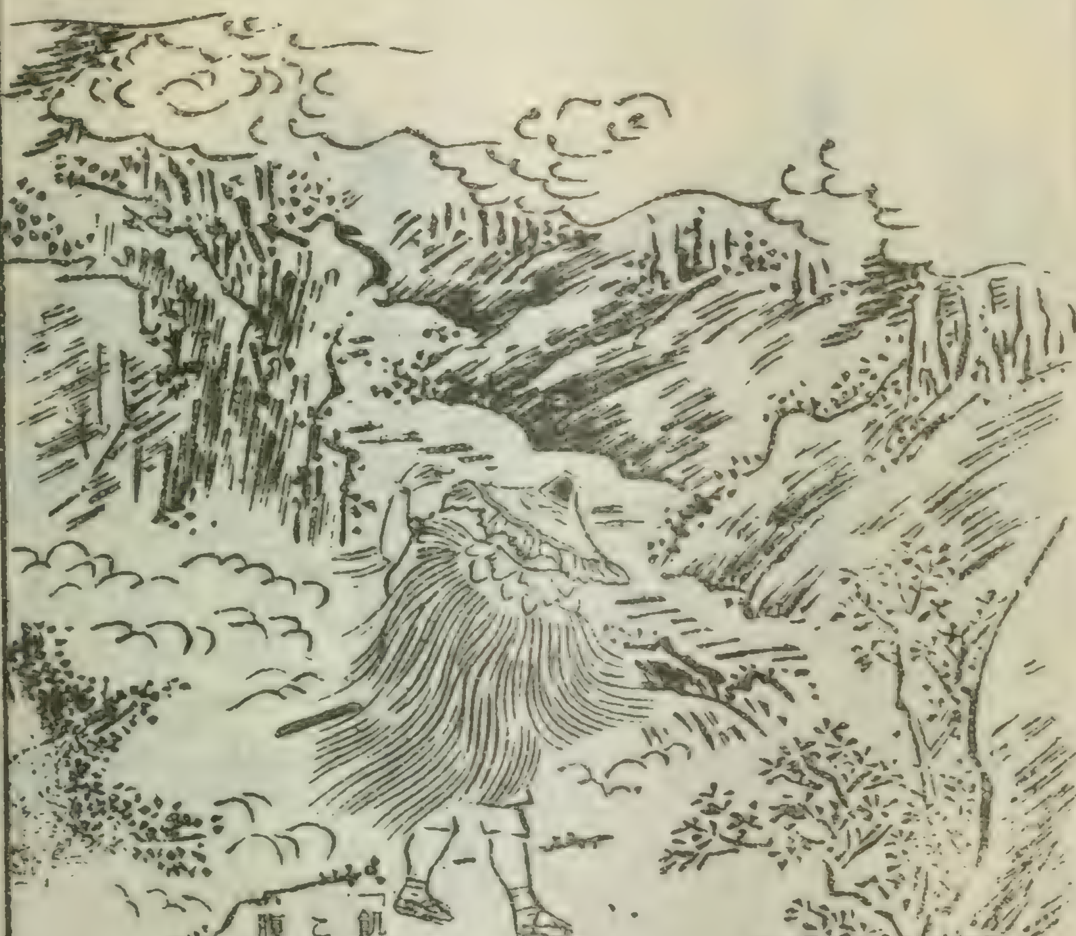
鳥の後につき來りて見れば、
鳥類のお役所と見えて、
さま〴〵の願ひ手あり、
鷄の喧嘩出入雙方お叱り、
稻穗に雀、粟に鶉、
いづれも零れたるより外
一向取るまじき由
仰せつけられける。
先立つて雁鴨にも
申しつけたる通り、
百姓の骨を折りたるものを
只食ふては相濟まぬ。
零れたる分は
大切の雜穀すたる故、
この分は勝手に食すべし。
また啄木鳥は枯木の外は
一切禁制、櫻に遊ぶ鶯に
御不審のお尋ありと評定の中へ
鳶の繩付を引き据ゑ、



御吟味の條は、
その方前々より嚴しく
申しつけしにいかゞ相心得、
豆腐油揚を盗み居る。
それを食はねばならぬ
といふこともあるまい。
畢竟おのれが奢りの沙汰、
その他肴賣の魚を
浚ふつもりであらうが、
四文錢一本浚うたる咎、
油揚と思つて煙草入を
浚ふのみならず、
小僧が手を引掻きし咎、
又三百が蒲燒をしよしめたる事迄
一々露見しけるが、
大膽不敵一々舊惡御吟味の上、
蜜柑籠に入れられ
非人に下され、
家々の前に晒さるゝに極る。



新右衛門は
鳥類の樣子
あらまし聞き、
まだ面白さうな事も
あるべけれども、
先を急ぎて
大山の方へ志し、
不動へ參詣し、
それより
小田原の方へ
かけ越しのつもりにて
山道にかゝり、
足にまかせて
無性にのめくり、
やたらに歩きけるが、
行けば行くほど
茶を一杯のむことも、
團子を一本食ふ所もなし。
さてはこれは



途方もなく道に
踏み迷つたと見えたが
簑笠のお蔭には
災難はない筈、
されど腹のきたのは
差當つての災難、
杣にでも
獵人にても、
少々は泥坊にでも
逢つて
道をきゝたいと
獨り言を
いひ／＼
行く。」



さてまだ
行く程に〳〵
大きなる岩を越え、
谷を飛びても
道らしき所はなく、
一つの岩窟あり、
凄じく熊跡がある故、
覗いてみれば
大きな倉作りのやうなる
洞穴なり。
奥の方に二つ
ぴかり〳〵と光るを
よく〳〵見れば、
大熊の眼玉を怒らし
煙草をのんで居る故
びつくりし、此所は
さしづめ簑笠を
着る所なれど、
道が知れねばつまらぬ故
怖々ながら、



ちとお頼み申します、私は道に踏迷ひたる者でござります。小田原の方へはどう參じますと、無性に慇懃にいへば、それはつがもねぇ間違ひだ。今日は貴公は二十里ばかり山を歩いた。どうで今日は歸られねえ、まあこちらへ這入らせえ。さぞ(腹)も減つたであらうが、飯などはない事なればこれを嘗め給へと手を出しけるは、かの蟻を塗りつけたるなり。これは冬中の蓄へなれど進ぜるといふを嘗めてみた所が、なか／＼二つ膳つきのお振舞よりうまい事どうもいへぬ腹鹽梅なり。世の人いふ通り蟻は熊(の)食物と聞きしに嘗めるは今が初めなり。



他に馳走もならず、そして面白くもない所なれば、明日は道まで送らせてやりませう」と田舍の親類より深切に世話をするは奇特な事なり。

猿と兎は熊の使ひに狼を呼びにゆく。

なんぼ深切にしてくれても、其夜はまんじりともせず、はや夜も明けゝれば狼にいひつけ道の知れる所まで送らせける。
新右衛門も送り狼とは聞傳へて承知なれば後生大事に足元に氣をつけ道々話しながら歩きければ、顔つきとは違ひにて、
私共は兎角人間程怖いものはございませぬ、人が怖いから威してみたり、張込んでみたり、先からさへ構はねばこつちからどうしてさと話せば、いかさま
お前達の氣象てはさうであらう、昨夜からのみんなのお世話は大抵なこつちやあねえと、
空輕薄をいひながら、狼は近道を知つてゐる故、昨日の二十里を半日かゝらず本街道まで出でけり。

「熊が道に迷つて來ても、一晩でも泊める人間は日本國にはあるまい。おれもその仲間だ。氣恥しい。」



新右は獸世界の厄介になりても、禮に行く惘れもなく
江の島も詣り、七里ヶ濱にかゝりしに、大蛤を見てつく／＼
思ひけるは、花に鳴く鶯、水に棲む蛙も歌を詠むは日本だと、
住吉明神白樂天を張込み、又勸學院の雀は蒙求を囀つたといふ。
雀も四角な文字をひねくりしその上りに、海中に入つて
蛤となりしが、さりながら桝ではかる奴等まで雀て
あらうものなら、人の食ふ稲穂はない筈、此大蛤は元が
學者故、蜃氣樓といふ唐の屋作りを吹いて樂しみけるを、
新右も面白き故、ふわりとその蛤に乘りければ、だん／＼と
底へ沈みける。新右思ふは、簑笠の德あれば水も濡らすまじ、
さらばよきついでなれば、龍宮を見て來んとの出來心、
ぐつと目口をふさいで蛤任せに行きにける。さりとは
大黑樣はおつりきなものを
お貸し
なされたと
心て樂しむも
可笑し。



新右衛門暫く過ぎて目を開けば、
ちよつくり龍宮に着きけるが、
此處も簑笠にて隠れ見るに、
大昔の通りなるは龍宮ばかりなり。
まづ此處にては八大龍王に歯の立つものはなし、
鳥獣の世界は人と交り棲む故、時々の變り目あり、
また海中廣しといへど
潮のさす限りを龍王の支配なり。
それ故鮃が鯛の上にも立たず、
鯔や鱸は、名を改める度に
お目見得する事なり。
さて世上に鰒が人の命を取るといふ事を聞き
龍王これを改めんと近く召され、
此事を問ひ給ひければ、
鰒申すやう、其儀われ／＼の
なす所にあらず、てふといへる
虫のつきて人を失へる事にて候と、
明白に申譯立ちけれども、龍宮へ
悪名つけし事の恥かしさと、



我家へ帰ると其儘腹を掻切つて
死しけり。それ故か今も
鰒に限りて腸なし。
この位堅い所なれば
王法の正しき事なりける。
新右衛門忍び居て思ふやう、
淡海公の時分、此簔笠て
玉取りに頼まれたら、
うまい仕事だ。然し
盗む事には
利くまいかは知らず。

「鱸鯔の類はもと
川より勤めるもの故、
成長に従ひ、官名を
下され、又龍宮に
棲むものは鯛より
鯷まで親の名を継ぐは
よくきめた世界なり。

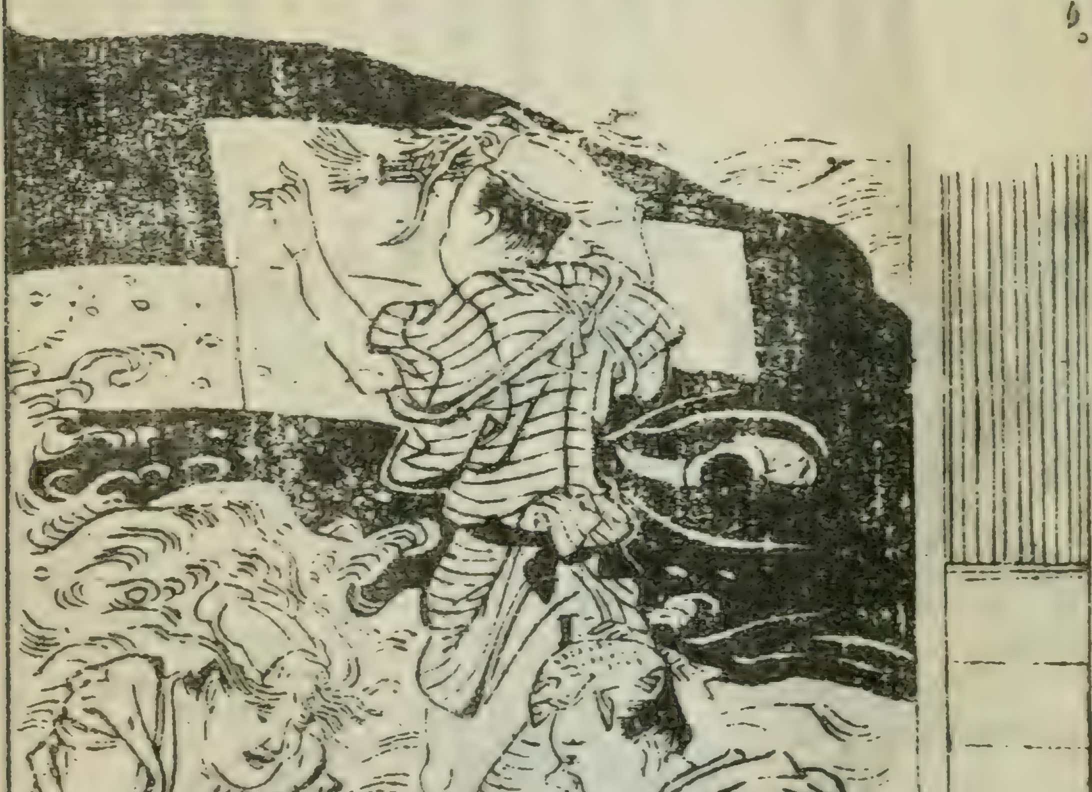


新右衛門、龍宮もあらまし見けるが、
食はぬまでも
精進日には目の毒と
歸るつもりに出立つて
とある格子作りの家を
覗いてみれば醫者の由、
大勢療治に來る。
病は十人が九人は
口中を痛めたるが多く見えける。
これは皆釣られはぐりし輩なり。
昔、彦火々出見尊
あかめといふ魚に
鉤をとられ給ひしを、
此所に尋ね來り、
取り返して歸られたる事を
今は早や知る者なきと見えたり。
それが知れて居れば
一匹も釣れる筈はなし。
とかく、刺のある食物に

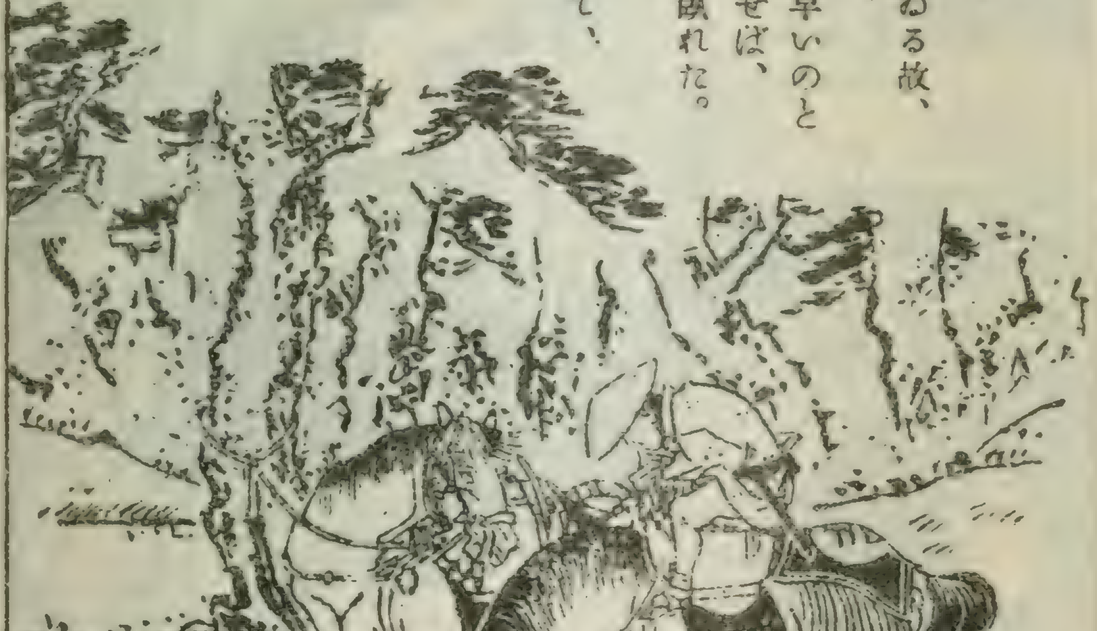


あてられしとばかり思ふも理なり。
また鰐に突かれたる鯨は
膏薬を貼る事繪の如し。
さて小魚の怪俄は、
淺草川の邊(て)養生しける。
さすれば川水は
龍宮の湯治場なるか。
鯨などは湯治とは
事むづかしければ
膏薬で直すも
理なり。

「膏薬か腰張か
知れぬ。
いつそ鏝で
塗るのが
よさゝうな
理窟だ。」



思ひの外に遊び過ごし、大黒様も内の者も
案じるであらうと心附き、馬にて急ぎしに、
權田坂へかゝれば、仲間の馬子が一服してゐる故、
またそこへ繋ぎて馬子は煙草にしかけると、
さきに休み居る馬、新右が乗りし馬に、お早いのと
挨拶するに、新右もびつくりして眠りを覺せば、
馬同士の附合ひ、さて昨日は途方もなく草臥れた。
宿から川端までげんこといふ仕事をして
また戻りを臺まで酒代ぐるみやみはんとつて、
またちばて宿まで乘せて、それから
のたまくめが内まで乘つて歸りをるに
がつかり弱り切つたといへば、
新右が馬、そいつはよかつたの、
おいらは角の酒屋の前にあぶれて、
子供等には太鼓を打ての何のと遊ばれ
おらが生酔もお觸が嚴しいから、
かの事もならず、のつつそつつして
やう〱拜むやうにして、
たつたばんどう取つて歸ると



「お主が旦那は眠るさうだ。ひんといつて起せ。」

親方は二疋でこれは何の態だと
機嫌が悪いも尤も、一本づゝも取らねば
勘定に合ふもんぢやあねえ、
一本にもなればまづよしと思へば
そのうちをくらう、
氣が痛んでなるもんぢやあねえ。
いつそ植附時分には
骨を折るけれど何とも思はぬが、
駄賃をとりに出ると氣が痛む。
先づ乘つた人を落すまいと
氣をつけるをば知らずに、心持がいゝから
こく／＼眠りしてはのめくり落ちて、
盲目馬の跛奴のといはれ、
こんな又割の弱い事もねえもんだ。
今度の世には殿樣の馬に生れて、
うまい物を食つて猿の踊でも見て
樂しみたいと話せば、新右衛門は
耳をすまして聞けども他の者にはひん／＼
とばかり聞える。これも叢笠の德なるべし。

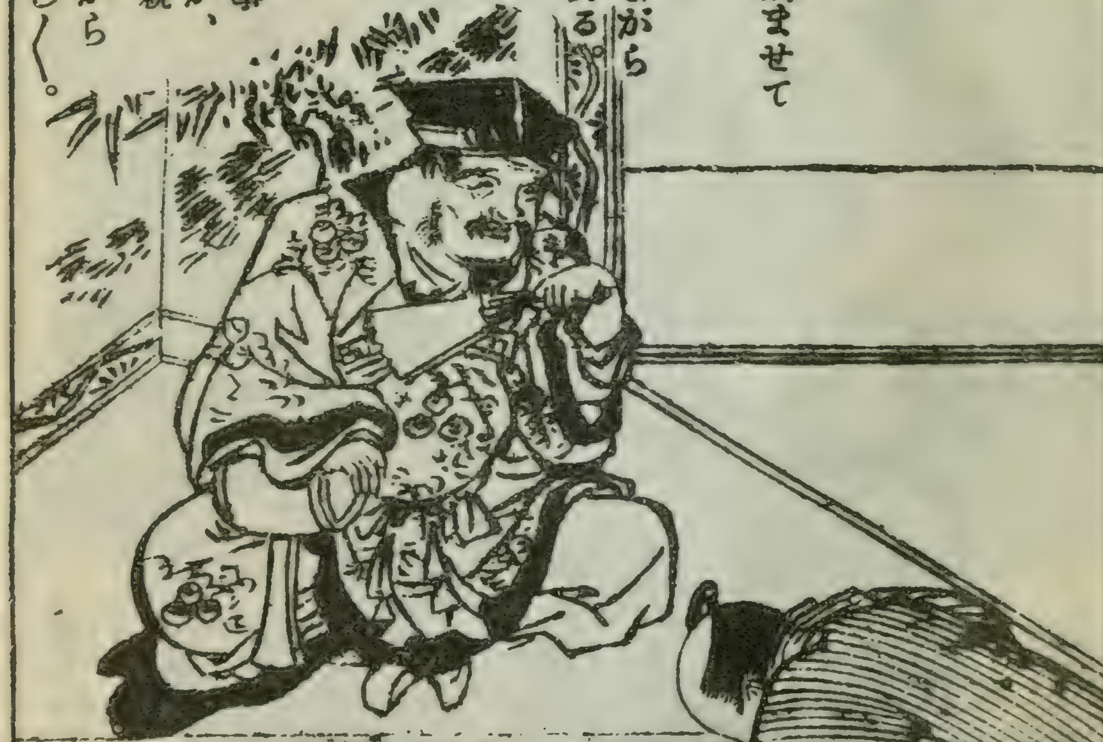


新右衛門すた〳〵家に歸れば、家内の喜び大方ならず、扨湯に入り飯を食ひ仕舞ふと、大黒天少しお待兼と見えて、のさ〳〵座敷へ現れ出給ひ、さて新右衛門、お主は今度は味な心得になることを見聞しやつたが、何でも同じ理窟だ、話して聞かせよう。遠慮なしに家内の者にも聞かせろさ。

「扨ちと高慢くさいが、それ、人は天が下の御霊物とあれば、天地の霊物ぢや。よつて生を保つもの丶惣御頭だが、悪くするとそいつに鳥獣より遙に劣つた奴がある。神仲間でも不愍には思へども、おのれが心の置所が違うた故、護るべき道理なし。その中にお主などはよく天下の掟を守り家を大切にして先祖の孝を立てるはよい事に違ひなき故、我々もかく心安くするぢや、よく考へて見やれ、鳥獣に横着者はなし、いづれも正直我が生を愛するのみなれば、口に食ふ事にばかり馳け巡りける。これ彼等が道といふもの、人はや丶もすれば



おれは正直でござるといふ。
正直といふは人の持前、何の味噌を
上げる事があるものだ。不正直とくらべ物に
するから道を取りちがへる。お主は
あまり物を讀まぬさうだが、正直一遍で
すんだからいゝが、鳥獸も今いふ通り正直、
それでは人間の詮がない。兎角、息子には讀ませて
人の道ある事を敎へやれ。よくいふ事だが、
本を讀むと高慢だの仔細らしいのといふが、
そのやうなものは口元ばかりの學問、然しながら
物を讀んでその先ばかり穿鑿するはせぬに劣る。
とかくに身の行ひをよくするが一冊でも、
讀んだ詮といふもんだ。人には上下の差別
はありといへど心に上下はなし。
下々の者乍らもよく道を守るを
人の人といふもの、身の行ひ惡い奴は、
わん／＼にやあ／＼といふと同じ事だ。
これはまあ大概の話、兎角學ばねば知れぬ事
だ。おれは遂にこんな事をいうた事はないが、
お主が悴をよくせんとおれを頼みやる志、親
たる者の道にかなふ故、據なく口不調法ながら
長言をいうたが、必ず／＼世間へは沙汰なし／＼。



大黒天の仰に任せ、息子七歳より孝經大學を讀ませ、手前も側にて招伴の學問、今までは我ばかりよかれと思ひしを、我より人をよかれと思ふ。今まで金銀でなければ世は渡られぬものと思ひ、兎角錢を儲けて儲けてと、うぬが竈の下の用心ばかりして居るを得のやうに思うたが、それは一旦の利潤にて遂には亡ぶるぞと大神宮様もお誡めなされ又聖人も他からさがつて入る時はさがつて出ると教へ置かれた。何と結構な事か。新右衛門は息子の餘學問なれば、唐詩選とやらを書いた扇などは讀む事もならねど、手前の身を修むる事は呑込み、其上犬猫鳶烏の心意氣まで承知しければ、島屋の隠居の跡繼と世間でも用ゐられける程に、息子は學問する上にそれを見習ひ、上々の人となりさうなれば夫婦の喜び、これも大黒様のお蔭といつ〳〵よりも又目出度く春を迎へけり。




京傳戯作
上
中
下

序

に出まするは
市川團十郎でござい

歌「雨の降る夜はナア。一しほゆかし「何といはつせえます。草冊紙の趣向に。夢が古いといはつしやるのか。こりやァこな樣のが尤もぢや。したが、古きを溫ねて新しく書かゆるが卽ち趣向の新しきといふもの。古いといはつしやるこな樣が夢か。新しいといふわしが夢か。浮世が夢か。夢が浮世か。嗚呼莊子じやナァチヤンチヤンと爾云。

嘉き夢見んと臥す亥の床

正月二日の夜

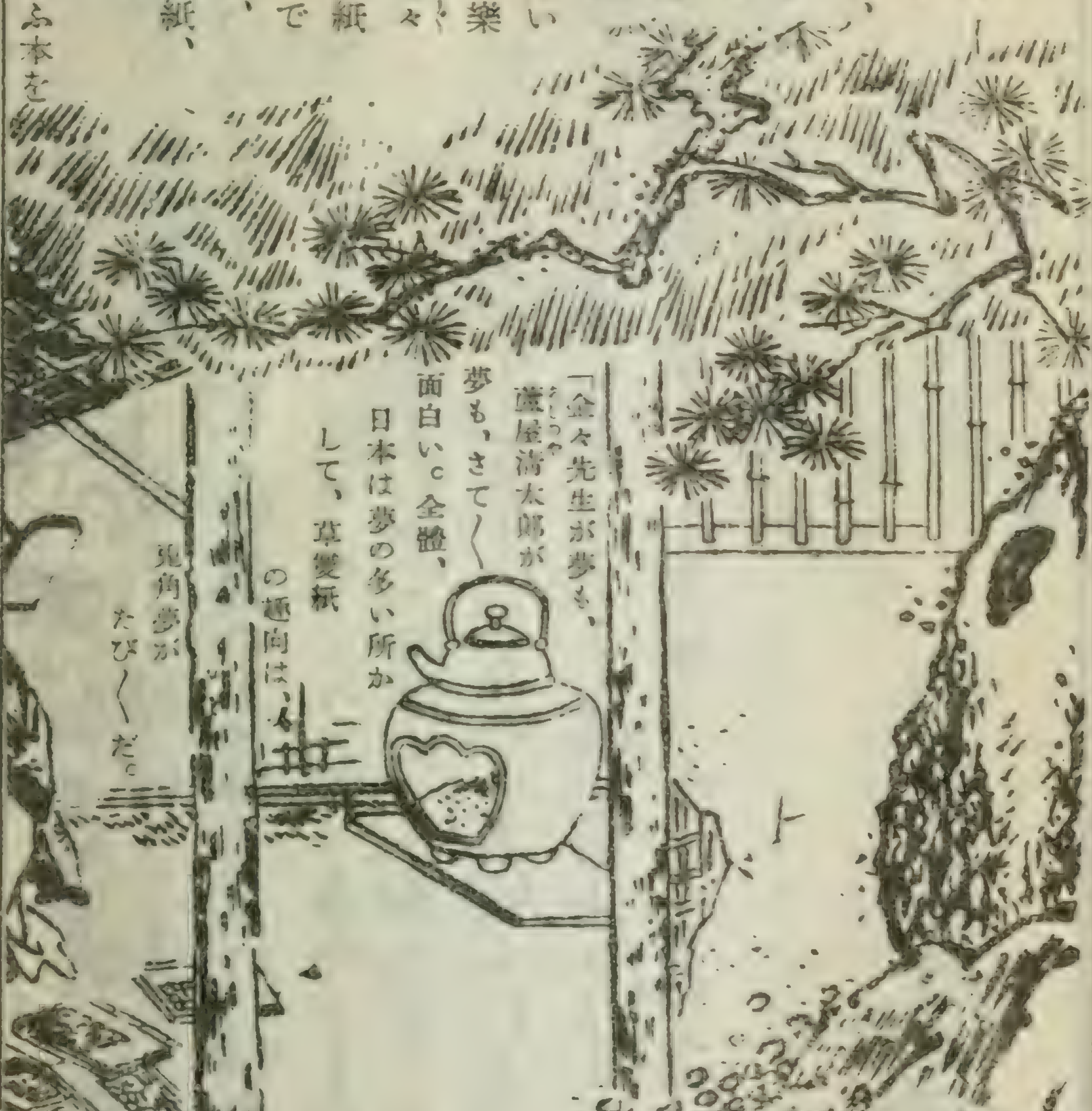
山東京傳述

序 よ出ますするハ　市川の團十郎でござい
夢のうき世ハサア。ゑいとしゆめ〳〵　なんと
いろ〳〵世へ出ます。邯鄲の夢のやうに。ゆめがたりぶるひ
と云ツ夢中の心。まづ初春のこれ金のぶりつるもや
あてがふ夢を事の縁で。何ぼしく書ゆうぶすおち
あるうれ。あくほまてうりの。ふるひといつられし夢
あるきあらが夢ろ。あくてしひとつふつしが夢ぁ
うき世が夢ろ。枕がうき世ろ。嗚呼荘子しやァ
チヤンチヤンチヤント爾云

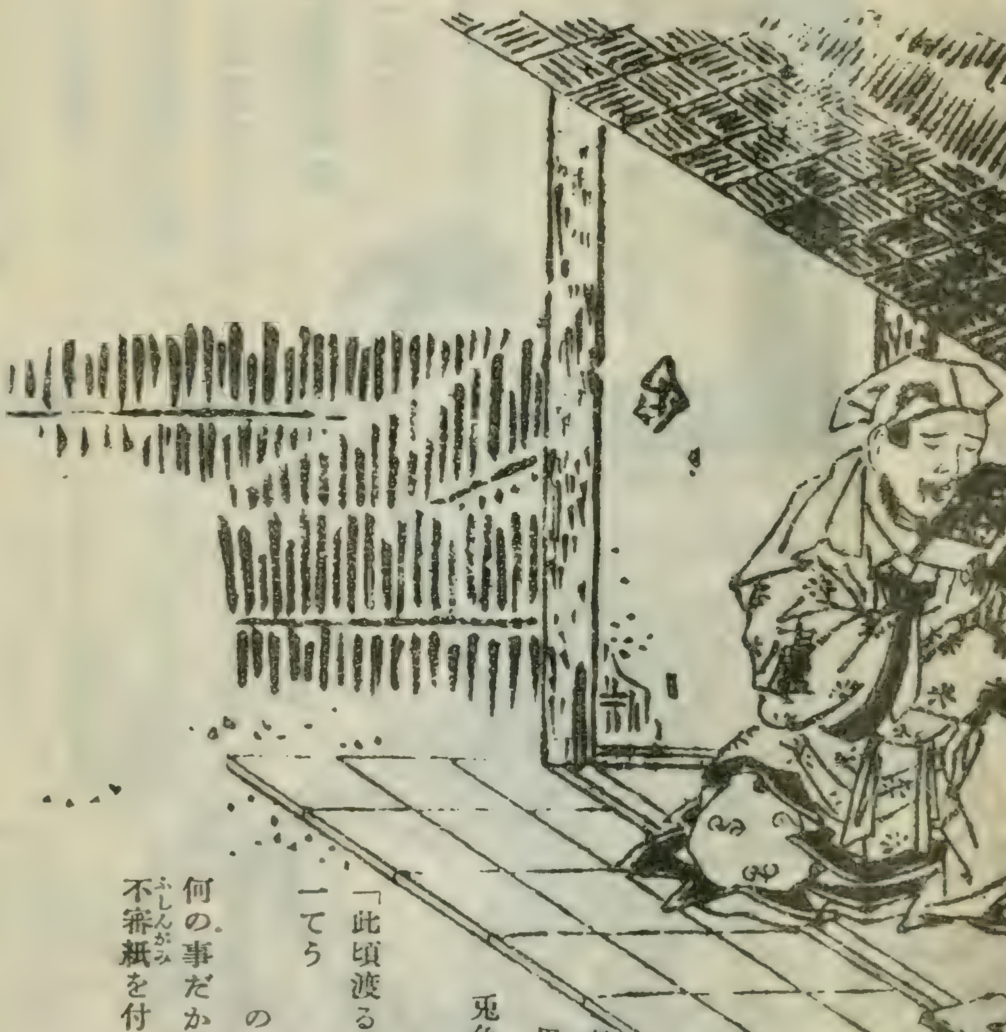
よ此ゆ之ころんと
ゆめうつゝの床
正月二日の夜

山東京傳述

昔唐土、蜀の國の傍に盧生といふ者ありしが、身貧しくして、心の欲する所に任せず、女郎を買ひたいには金がなし、地色をしたいには、男が惡し、甘い物食ひたいにも錢が無く、何も樂しみが無き故に、常々日本より新渡の草雙紙を求め、これを讀んで氣を晴し暮しけるが、先年出版したる草雙紙、金々先生榮華夢、見徳一炊夢なぞいふ本を



見て、せめてこの本の
やうに、夢にでも
榮華を極めたきものと、
果敢き事を望み、
これより片時も
起きて居る事を費と
定めて、榮華の夢を
見んことをのみ、
待ちて暮しける。



一京の夢大阪の夢
一式道具
一地獄極樂の夢
一式道具
一富見徳の夢
一式道具
一和漢吉凶の夢
一式道具
一佛神御夢枕の藥等
御請負ひ仕候

爰に又天上と人間界との中二階に、夢茶羅國といふ世界あり。此國には多くの夢住みて、色々樣々の夢を案じて、人間に見せる事を商賣とするなり。此國のお頭を夢魂道人と申し奉る。それ、



夢の形といふものは、どうしたもんだといふに、男かと思へば女の如く、若いかと思へば白髪も生え、唐人かと思へば日本人の如く、何處といつて、つかまへ所のなき者なり。夜はいふに及ばず、晝寢にもちよびとした夢を見せねばならぬ故、夢ほど忙しき者はなく、夢魂道人、毎日々々案じに頭をわらす。なか／＼茶番を案する位の事ではなし。



「此作者も夢の衣裝付には大分手古摺つたさうにござります。」

夢魂道人は、色々様々の夢を案じて、下細工の夢手合に申しつけ、夢の道具や人形を拵へさせる。その忙しさ、さも祭前の茅町の如し。

「この松は、唐土哭の丁固とやら、てれめんていことやらが腹の上へ生えさせる夢だげな。何とひやうひやくな夢ぢやあねえか。したが、蒙求とやらを讀んだ奴でなければ、こいつは分るまいといはしつた。」

「この二筋の矢は、源頼光に夢中に授ける水破兵破とやら、曲馬評判とやらいふ矢だとさ。」

「莊子に見せる蝶々の夢は、手前で拵へるまでもないといつて、蝶々賣の手前から、そりや止まつたといふ奴を買つて用ゐる。」




「是といふ字は、日の下の人といふ氣取だげな。これは眞柴久吉に見せる夢の道具になるげな。」
「唐土の玄宗皇帝に見せる鍾馗の夢と、矢根五郎に見せる祐成の夢は、針金細工の切張にて吉原の燈籠の如し。
「これから周の文王に見せる夢の熊を一匹拵へねばならぬ。」
「小僧よ、生薬屋へ行つて、
水膠を三木と緑青と丹を三十二文が買つて來い。

「これ〳〵、そいらが出來たら、後の仕事に懸つて貰はう
あとに神のお告と佛の夢枕と、
注文が二口ある、お告
の文句は此書付の
通りだ。はじめの
善哉々々と仕舞の
夢々疑ふ事勿れ
といふ文句を、随分
耳立つやうにいつて
貰ひたい。先づ、
びんづら結うたる
童子の人形を
拵へたがいゝ。」

「全體この夢枕の注文は、夢と
もなく現ともなくといふ誂ひ
だから、この細工は手古摺物だ。」



「熱のある人に見せる夢は、
高い所から突落
される夢なり。
矢張釣人形の理方
にて拵へるなり。
これも念の入る
誂向の夢は、竹田
の絡繰の理方にて、
發條仕掛にする也、
尤も、山は張拔なり。

「寐小便を垂れる時の夢は、人形の尻の穴へ水鐵砲を仕掛けるなり。かるが故に、小便をする夢を見る時といふと、得て澁つて出兼るものなり。これは水鐵砲の工合の悪い時と知るべし。また、寐糞を垂れる時の夢も同じ事なり。竹の筒へ糠味噌を詰めて突出す。矢張心太の理か。




「此頃聞けば、神田邊のさる學者が自ら孔子の氣取で、我は未だ夢にだも周公を見ずなど〻高くとまつて居るさうだ。こいつに周公旦の夢を見せて、膽をつぶさせようと思ふ。また吉原のさる女郎が、いつそ惚れて居る色男に會ひたがつて、せめて夢にでも見てえと古歌の通り
いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣をかへしてぞ寝る
と、昨夜も床着を裏返しに着て寝たさうだ。可哀相に。これにも色男の夢を見せてやらう。」
「さやうなら、この二色の道具立にかゝりませう。」

程なく道具出來上り、かの儒者と女郎の所へ夢を見せに見く。何の事はない、竹田の邸行といふものなり。

この擔いで行く榮螺の尻子玉のやうな物が、夢の道具第一の物なり上の夢の時は針金にて拵へ、白練の切にて張り、又は絹綿を薄く張る。下の夢の時は、竹で曲げ吉野紙で張るなり。



また夢の形は、結んだやうな物故、歌にも夢を結ぶと詠み來れり。

夢手合は、あんまり早呑込をして、道具の合印を間違へ、女郎に周公旦の夢を見せ、學者に色男の夢を見せる。按ずるに心にもなく、根ツから葉ツから思ひもつかぬ飛んだ夢を見る事あるものなり。それは、みんな此のやうに夢手合の間違へた時の夢と見えたり。



學者は色男と廓を駈落して、中田圃で心中と出かける夢を見る。これらはからつきり思ひもつかぬ夢なり。夢判じに判じさせても分るまい。作者にも分らぬ。

淨瑠璃

「何時ぞや史記の素讀の夜、お醫者さん方學者衆、多くの中でこなさんの

此末あまりこじつけなれば略す。

「おれはそもじのその口臭の鬚むしや／＼といふ爺むさい所に惚れた。何と茶人であらう。それだから着物も茶微塵だ。」

「女郎と儒者とぬたにしたやうな嫌味をいふ。



「足下に任ソした不佞が身を、そんなに疑ひなんすなら、寧ろこの割つて見せたらヲス。思按ずるに、わつちより、主の心意氣が未だ詳らかならずでヲスよ。」

此内手あきで居た夢、何の所詮もなく、彼の學者の家の飯炊に金を拾ふ夢を見せる。

「おわが身は、白痴が釣をするやうだ。」

「どうでついでだから、われにもまけに氣の揉める夢を見せてやらう。それ嬉しいか〳〵、うんつく奴、夢とは知らず、無性に嬉しがるやつさ、此處までござれ、甘酒進上、獅子の洞入り、洞返り、三介待つたり〳〵。」

「こいつはなか〳〵おもしれえ。」



「これは金ぢやさうな嬉しや〳〵何でも運の開きめだ。」

「さて〳〵此金は變つた金だ。無性に宙を飛ぶ金玉か金玉か知らん。

ア、ぢれつてえ、どうも捉らねえ。」と獨言をいひ〳〵

終ひには、じれ込み、思へば此かね恨めしやとて、兩方の手をかけ、とるよと見えしが、うぬが睾丸をしつかり握り、冷汗を流して目が覺める。

夢魂道人夢手合をきめる。

「手前達はマア、女郎に周公旦の夢を見せ、學者に色男の夢を見せるといふやうな、氣の利かねえ事があるものか。夢を商賣にして居るやうでもねえ。ちつと身にしみたがいゝ。」

「夢人足(にんそく)手合の辨當には、牡丹餅を拵へて持たせて出すなり。かるが故に、夢に牡丹餅といふ事はじまつたり。」



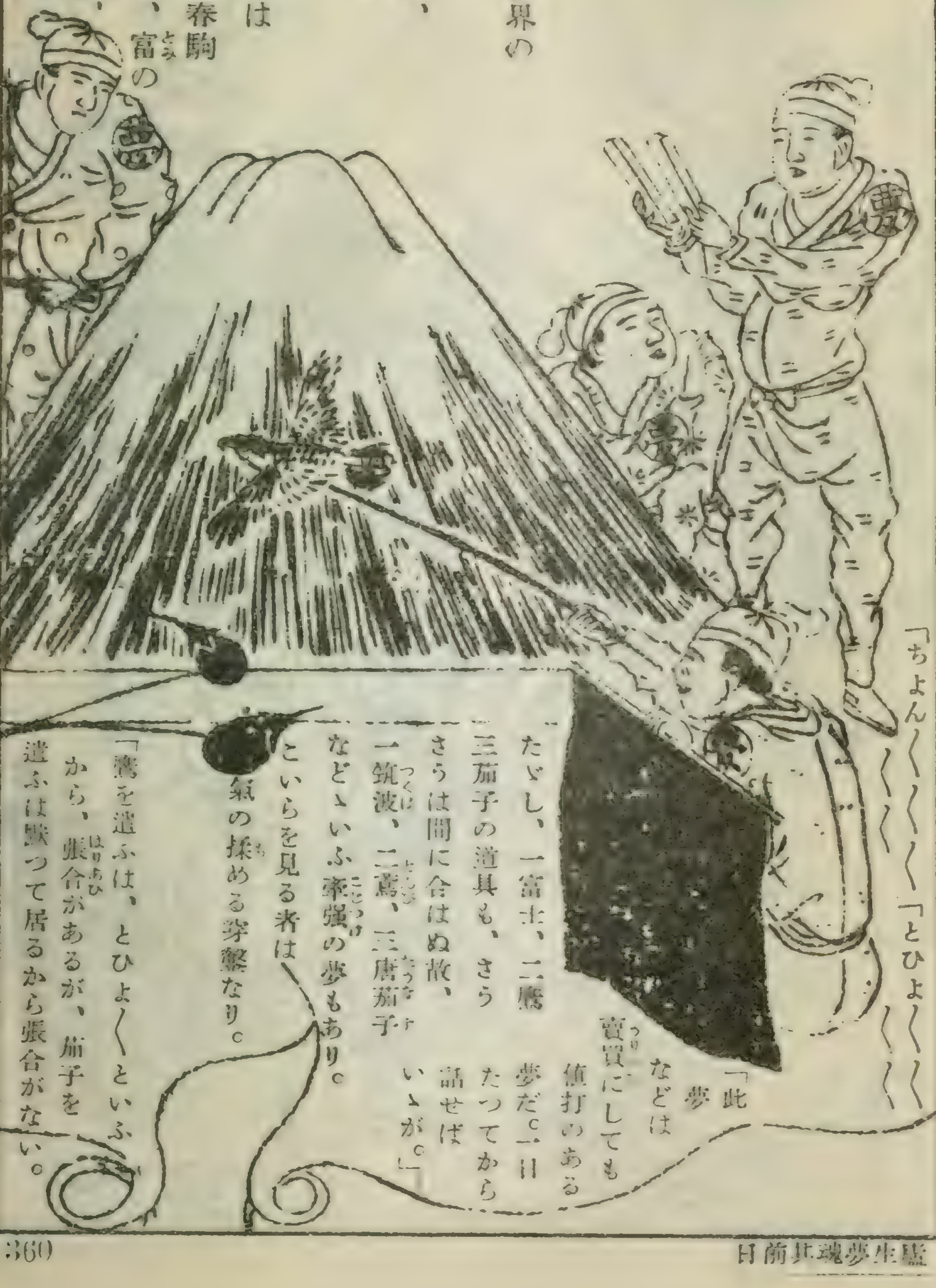
周禮の春官に曰く、日月星晨を以て六夢の吉凶を占ふと。所謂六夢は一に正夢、二に噩夢、三に思夢、四に寤夢、五に喜夢、六に懼夢、これなり。その外數多き夢の内に、遺精の夢を禁ずるなり。これは俗にいふ妄想の事なり。此類の淫がましき夢を見する奴は、死罪に行ふなり。然れども、夢といふ奴が刃物で切つても切れぬ者故、獏といふ獣を飼つて置き、さやうの罪人は、これに喰はせて制當するなり。これを思へば、獏は夢を食ふ事違ひなし。吉原で、ばくらしらうありんすといふもこれより出たる言葉なり。





獏曰く
「科人の懐に二朱銀が
二つ三つあるさうだ。
出してくんなせえ。
歯が堪らねえ。」
「風吹きには
火の用心の
悪い獣だぞ。」
獏は一散に
駆け出し、
忽ち夢を喰ふ。
「獏に食
はれる
とは、
あん
まり
智慧がねえ、
ア、ゆめえましい。」
「夢に
なれ／＼
といふ
場だが、
こつちが
夢だから
據無く
人になれ
／＼。」

正月二日の夜は、初夢といふて、夢の世界の大物日なり。寳船を敷いて寝た程の者には、それ相應の夢を見せてやらねばならず、一富士、二鷹、三茄子はお仕着通り、春の初の春駒なんぞはいふに及ばず、富の見徳には呉服屋の番傘、人に斬らるゝ夢は逆夢



といふて、身に金の入る事あり。色々様々の夢を仕組んで、幾組も〳〵出るその忙しさ、年越の晩の大神楽、松の内の大黒舞の如くなり。中には三人詰、四人詰、もやひの夢もあるなり。

「ろく〳〵夢を見とゞけもせぬに拍子木を打ち、隣へ曳いて行く。祭の所望の如し。それだから、初夢は空覚えなものなり。




夢魂道人芝居下の夢を呼び集め申し渡す。
「此度唐土蜀の國の傍に住む盧生といふ者が、榮華の夢を見たがる故、見せてやらずばなるまい。然し、これは悟の夢だから、一通りでは行かぬ。五十年ばかりの事を、取組まねばならぬ。今度は人形では間尺に合はぬから、歌舞伎にする積りだ。みんな役をとつて稽古にかゝつたがいゝ。」
「深川の夜具包のやうに夢に札をつけて置く。」
「廿日餘りに四十兩の上を行き一晩に五十年と來ては、道具衣裳によつほどかゝる。よい金主をつけずば、此夢はたゝけまい。」
「それは大驗の不動でござります。」

抑も盧生が夢の狂言の筋といつぱ、邯鄲の謡にある通り、楚國の使玉の輿をもつて迎ひに來り、帝の位を盧生に譲り、庭には金銀の砂を並べ、東には三十四丈に白金の山を築かせて黄金の日輪を出し、西には黄金の山を築かせて、白金の日輪を出し天の濃漿を沆瀣の盃で飲ませ、女官のかしづき、四季の景色を一時に見せるなど、今時の盧生そんな野暮な事では榮耀とも榮華とも思ふまじ と、夢魂道人これを新狂言に書換へ、楚國の使を北國の使にして、吉原の榮華を見せるつもりなり。



程なく道具建衣装等も出來、稽古も固りければ、まづ夢の惣浚ひをする。

「夢の正面二三尺の間黒幕にて松の立木あり。うすどろにて幕が開くと、夢の若衆大勢四手駕籠を舁いで出で來り、いろ〳〵捨臺辭思入あつて、とゞ盧生得心して駕籠に乘る。若衆乘物やれといふをきつかけに



「みんながなか〳〵器用でございます。」

「相撲の行司と盧生は、團扇が看板だ。」

「夢魂道人大帳を拵へて、忘れた臺辭をつけてやる。」

「みんなとちらぬやうにしやれ。」

「夢の内の立物、盧生の役をつとめる。盧生膽をつぶす思入れ、いろ〳〵仕打あり。

「如何に申すべき事の候。楚國の使にあらぬ北國の文使これまで參りたり。是非をば如何で計るべき。御身

行列三重になり、何處ともなく消え失せると後の黒幕ばつたりと落ち、下座菅搔通り神樂になほして、夢の正面、廓の道具に變る。



色男の御瑞相こそましますらめ。通子屋の稲鶴さんと申す花魁、御身を見ぬ戀に憧れ給ふにより、御迎ひのためこれまで參りたり。早々四手に召さるべし。」

道具變れば、實にも妙なる花の廓、金銀の砂子を時いたる唐紙を押開き、名ある色達立出て盧生にしなだれかゝると、後は荻江流の唄になる。盧生は五文も痛まずして、かゝる樂しみをする事、日頃の望みに百倍したる心地する。

「此處、差詰東の方には三十四丈に黄金の日輪を出し、西の方には三十四丈に白金の月輪を出す場なれど、所をぐつと洒落て、東の方よりは




三十四五になる
黄金を欲しがる
ばち鬢の幇間を
出されたり。
又西の方よりは
三十四両に賣られた禿が
白金の七輪で煮た
煮花を出されたり。
「又天の濃漿と
流瀣の盃
とやらで
飲ませるも
面白からずと、
鯛の味噌吸を
花魁の笄の箸で
食はせる。
「ナント
うまからう
おれも
食ひたい
たんと上れ〱」
「モシ
旦那へ、
どうで
ごぜえ
すと
「廬生現を
千八百本程
ぬかす所
大でけ〱。」
夢の幇間だけ
酒落も嫌味なり。

その次の幕は、仲の町八月の景色、夜かと思へば、夜見世のあかり、この里ばかり晝のごとく、禿がさしたる櫻の花かんざしを見て春かと思へば、幇間は絽の羽織を着て夏の如く、菊を植ゑて秋かと思へば八朔の白無垢揃ひは雪の降りたる如く、




四季折々は目の前にて、夜昼となき楽しみの栄耀にも栄華にもげにこの上やあるべき。
夢魂
道人曰く「これほどにみんなが骨を折るが、肝腎の盧生奴が寝がへりをして、此夢を忘れねばよいが。」

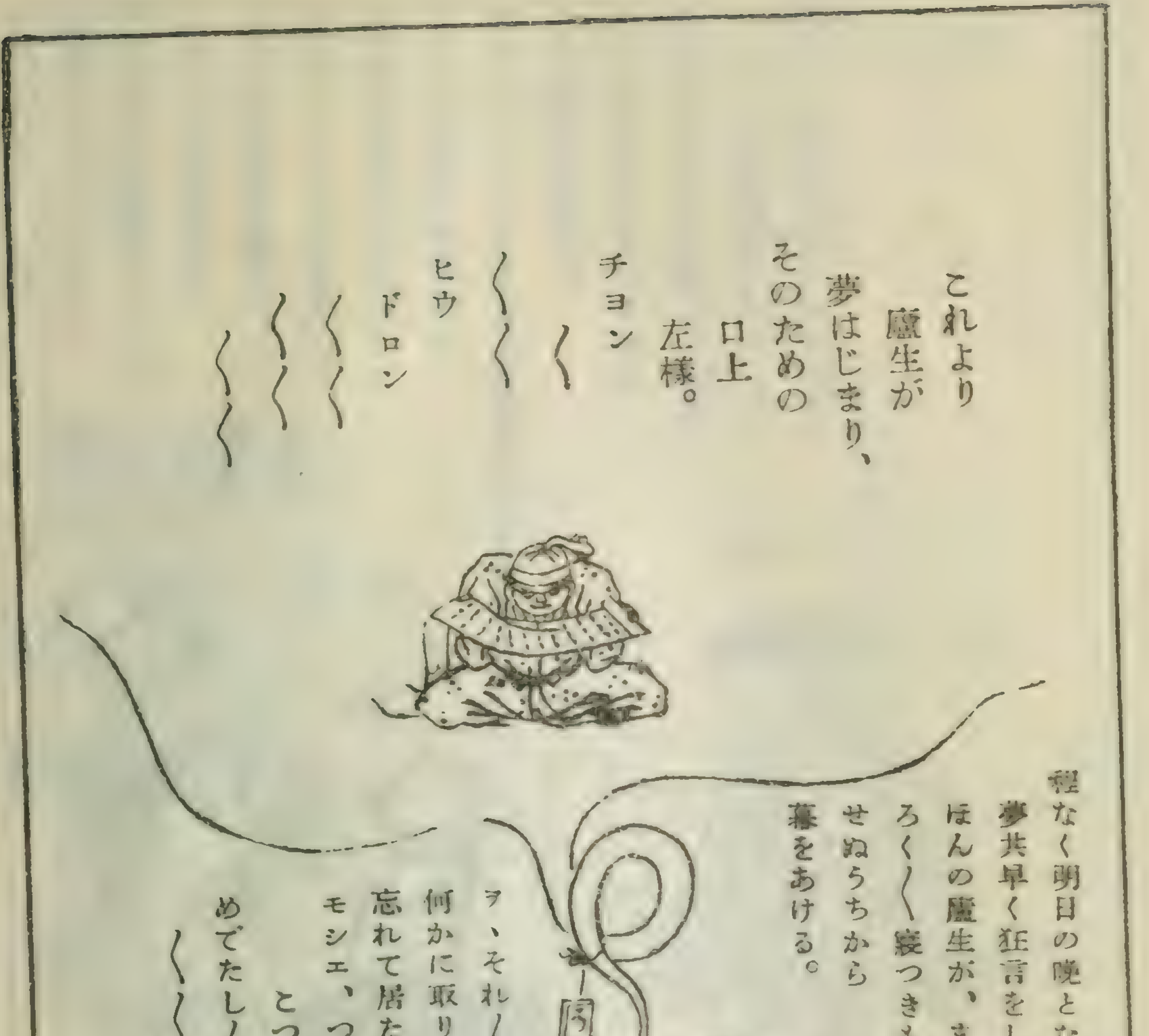
盧生夢魂其前日

盧生思はず吉原に流連して、つひに五十年目の大晦日となり、猫が棚からばつたりと擂鉢を落した音に驚き起きあがり、傍にありあふ鏡をとつて見れば白髪の姿となる。これはどうだと膽が宙がへりをして今まで一緒に寝て居た通子屋の稲鶴を引起して聞けば、こはいかに、早々苦界十年を五度代つて五代目の稲鶴なりと聞き、さては五十年の夢に



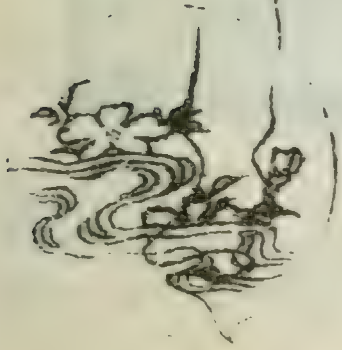
逢ひなしと、又候
膽がでんぐりかへる
ところへ禿大勢たち出、
「ナント盧生さん、
迷のお眼が今醒めんした
かえ。」といふをきつかけに、
座頭夢魂道人立出で、
まづ此夢はこれぎり
ドン〳〵〳〵とうち出し
さて惣淩の出來も
すつぱりうまくいつた故、
夢共みな〳〵手打して喜び、
いよ〳〵明晩見せべしとて、
明日の夜を待ち居たりけり。




これより廬生が夢はじまり、そのための口上左様。
チヨン／＼ヒウ／＼ドロン／＼／＼／＼
程なく明日の晩となれば、夢共早く狂言をしたがり、ほんの廬生が、まだろく／＼寝つきもせぬうちから幕をあける。
ヲ、それ／＼、何かに取り紛れて忘れて居た。モシエ、つかねえとつたが、めでたし／＼／＼／＼。
京傳作



江戸ッ子わ——
覚楽吾丁
梅川 若黒載
よれてよ——



櫻川の邊に如何にも後生樂な男ありて、もとより讀書算用も知らず、算盤の珠は鯔の臍に似て居るから、鯔の臍原風吹けばと詠みしと感心する位の男、世間の毒にも藥にもならず。目の寄る所へ玉のやうなる男の子、とつさん正月が先か、五月が先かと云へば、年季小僧の伊五はそれは五月が先といふ。その發明いづれをいづれと褒めるも親馬鹿とやらなれば、主の喜びいはん方なく、さらば古事つを聞かせんと鼻の下の長持内へ蕨風呂敷へ包んだ書物を取り出してさらば古事つけ申さんといふ。

「お旦那、冬とは初午の事かえ。」

「馬鹿を云ふな冬とは六月の事だ。」

「とつさん、それだから氷水が冷つこいのう。」



ソレまづ春といふは、人の氣がはるといふ心から春大晦日迄は汚なりでも目にもかゝらぬものなり。早一夜明けると青梅縞の光がそこら中から出る故に同じ様な仕立下を着て歩かねばならず、そこで氣がはるといふやうか。



又ばくせつに正月の諱名を、親玉ヱ付。三八ヱはる。十町ヱ同。龜藏ヱ同。中富ヱ同。魚樂ヱ同。

「京棧にしようと思つたが、思ひきつて唐棧どうた。」

「羽織のとう　ありがありが。」



二月、此月をきさらぎといふ心は人のきさらぎといふからきさらに博奕うつとも、女郎買ふとも、更に身をうち、親爺に勘當されようとは更に思はねども、かの正月は遊ぶものと心得て、はめをはづして遊んだところが、つまらず、はや三月のもの前が鼻の前にしやつき張つて居る故、成程つまらなく錢を遣つたと狐にばかされたかと思ふ心から、重ねて誑されぬやうにと、稲荷様を祭り、このしろや豆腐のお鼻薬を支うたものなり。



初午とは狐を午に乗せたからの思ひつきと、年中古事附錄にみえたり。

「高麗屋に描かせるとはいい趣向だ、高麗屋の御趣向く。」

「なんだ、親玉がよく似た、紀の國屋もいゝの。」

「よく描いたぞ、とんと出たやうだ。」

「こつちとは濱村屋のおやぢがいゝ。」

「えゝ加減に仰向け、エ、鳶が糞をするぜ。」



三月、此月を彌生風雨暖まり、草木も彌おひ出る故彌生と尤至極なり。又俗説にやよひのやは矢野の矢を書きてよひを醉と書く。下戸も上戸も矢野の山川に醉ひる故に矢醉の節句ともいふとあり。いかにも古事附な事と聞えます。草餅の事は艾にて製す。これは昔の灸嫌ひの人がはじめける。灸するゐるより、艾は餅に搗いて食ふがましとなり。雛といふに古事あり。子ど



もに見せしに、アレアレいいなといひそめしを、今は洒落れてひいなといふ。

「アレ見や、いゝなく\、ひいなく\と見てえる。」

又白酒は源平を表したり、白し、酔へば顔赤し。もう飲まれませぬといふに愈々強ひて弱はせる故に、くどく彌生々々と申すなり。

「これ御覧、顔が眞赤(まっか)になりました。」

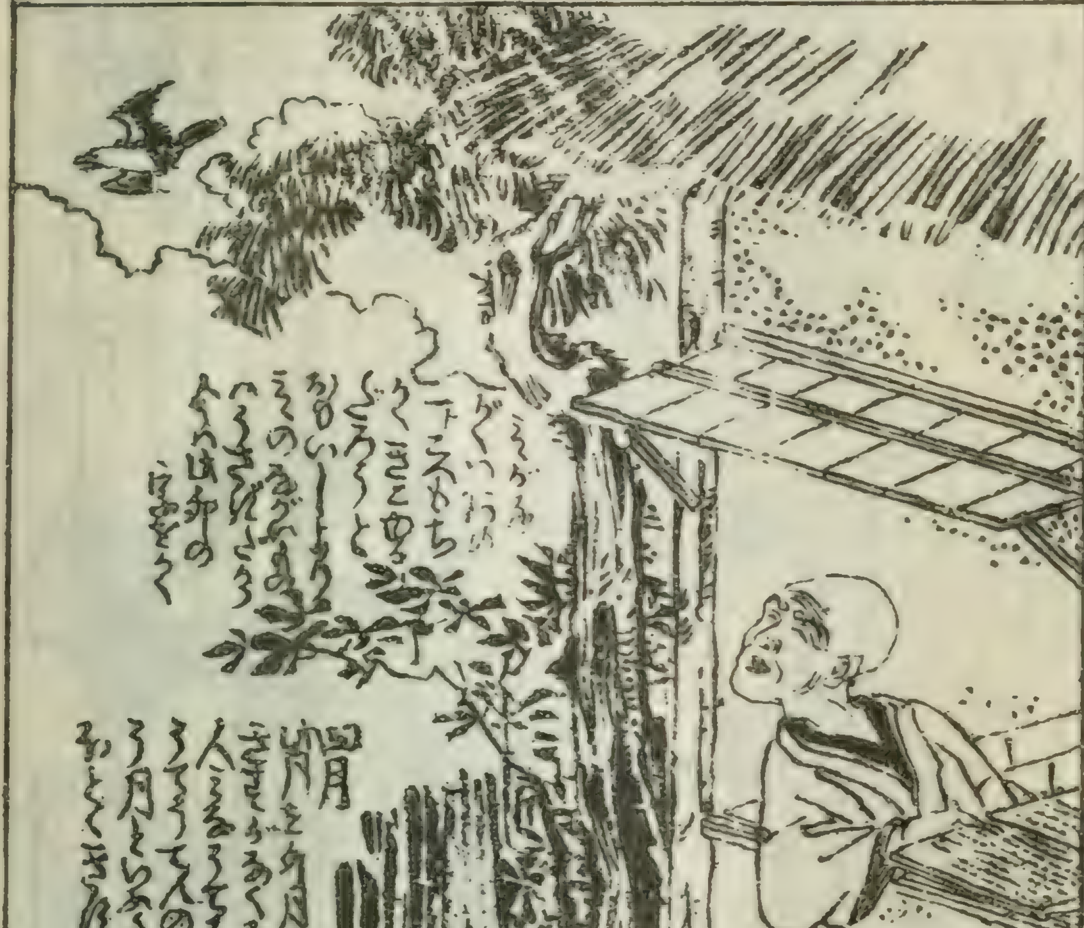


四月

此月を卯月といふは、此月多く時鳥が鳴く。その聲を早く聞かんと、人皆有頂天になつて居る。そのうの字と月と書いてう月といふ。「たつた今月が鳴いたかほとゝぎす」との句で考へて見るべし。

耳が長くばあの一聲も近く聞ゆるだらうと思ひしより、耳の長いものは兎だから、今は此卯の字を書く。

段々生暑くなつて、頃がたかる故、衣がいゝと衣更といふ。

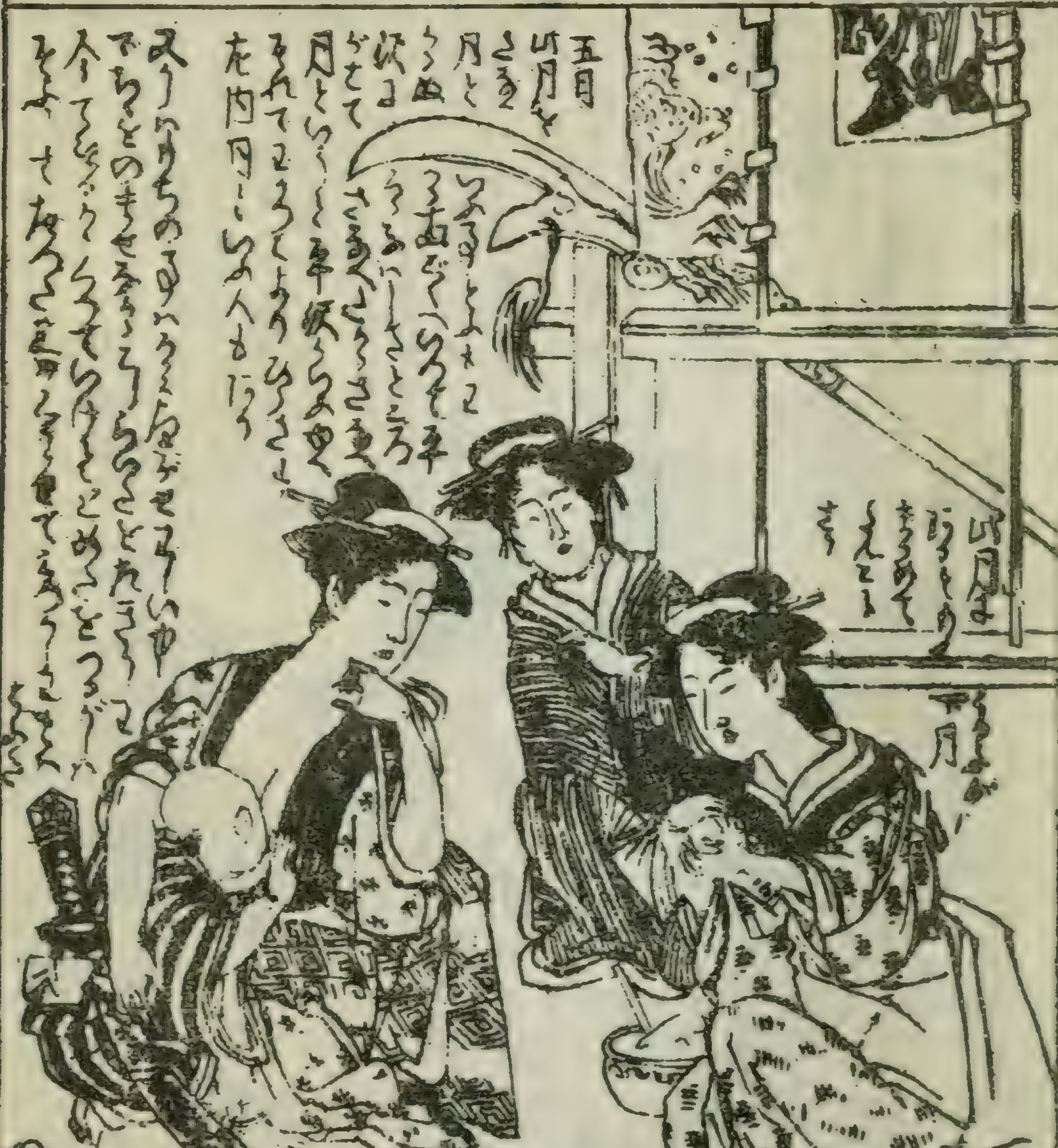


五月

此月を早苗月といふ事、どうも解らぬから、兩國へ行つて平澤に占はしたところが、はてさなへだから、さなへ月といふと、平澤がいふ故、それで解つてより平澤左内月といふ人もあり。

又柏餅の事は、かみ様が忙しい中で乳を飲ませながら拵へたを抱柏。今出來るから食つて行けと止めたをつる柘。さうしてたつた三つ食はせて三つ柏とはどうだ。

此月に閏があると、もう一月まるめて團子にせう。



六月

此月の晦日に六月祓とて禰宜の借錢拂をするなり。すべて水邊に出でゝする事なり。これは古い借をば水にして了うといふ心。その中に味噌屋へ拂つたをみそぎのはらひといふなり。掛取をば邪鬼といふ。不斷責められてあつ鬼果てたといふ。

此はらひにて禰宜は晦日忙しき。

歌に

湯豆腐のさらば支度を
ゆふだすき禰宜はみそ
ぎにあひまはしけり。

川端へ出したのは碑文谷の馬か。なにさ、書出しさ。



七月

此月七日に牽牛織女のはじめての契に、餘り嬉しがり過ぎていろ〱痴話り給ひて、痴話文を雲間より下界へおとせしより、文月といふ。又その文を下界の人々ふんだが踏月ともいふとあり。その文をそこへ届けんとすれども、よい便がない故、竹の先へつけて空へ届けしを、今は五色の紙に書いて出す。

「壹本四文にさつせい。」

「お爺が飴ぢやアあるめえし。」

「それでいやなら よしなんし。内へ持つて歸つて、煤掃竹までしまつて置きます。それで殘りはもうさう竹だ。」



八月

此月八朔吉原の雪といふ事謂知らず、吉原通に聞くべし。

十五夜を望月といふは、下戸がはじめたからもち月、このもちが取つて食はれぬもの故、仕方なく團子を拵へて食うたもの。

秋風になると寂しいもの故、人の心が塞いで來るところを見世さえるなり。

歌にも

ふさぎ〳〵何見世騒ぐ、
十五夜お月様見てさえる。



「思ひ烏よりわしが角鷹さ。」
「ぬか鯝さん、ぐにゃ富と高麗屋息子をつかひねえよウ。」
「有難山の吉ほうなんだらうの。」
「宵に降つたる雨上り花水橋の樋の口から。」
「葱に鮪はなア、一入よからう。」



九月

此月を菊月といふは菊の花の事にあらず。そして何だと聞く月なり。聞くは當座の恥、聞かぬは末代の恥。長月とはもし聞かぬと長月恥をかくといふ心なり。くどい人が何遍ものもの聞くをきくかさねといふ。重陽とは蝶が菊の露に醉つたからの思ひつきで蝶醉。人も此日菊酒を飲めば長命なり。長命の長と蝶のてふと二つ合はせててふてふちやと吾妻與五郎といふ書に見えたり。

「此花もおいらが側に居ると、共に猩々菊だ。」

「月を見て飲んだからおと月なんぞはどうだの。」

「わたしは酌をしながら、おとゝつぎがよからう。」



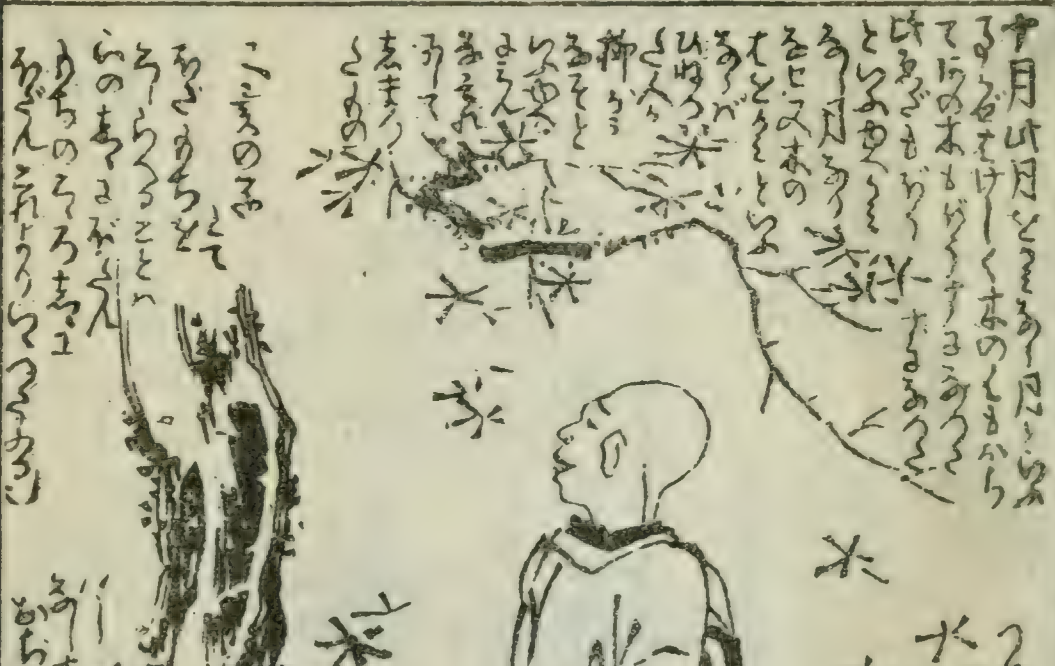
十月

此月を神無月といふ事、風激しく木の葉もおちて、あの木も坊主になつた、此枝も坊主になつたといふ故、髮無月なり。何故又木の葉をかみといふならば、ひねつた人が柳髮なぞといふ故に、皆それにしてしまつたもの。

又亥の子とて牡丹餅を拵へる事は猪に牡丹餅の心、獅子に牡丹、これよりいひ傳ふる。

徒然なるまゝに日暮に箒に對ひ、そこらに散りし木の葉を、こゝ運ぶとなく掻き散らせば嵐吹くこそもの狂はしき。

「だしなし木の葉がおちたの兼好だ。」



十一月

此月を霜降月といふ。むだに芋賣月ともいふ。祝ひ髮置、帶解、これは何の事もなくあとの月はかみなし月だによつて、此月から髮をたてはじめるなり。帶解といふは子供の祝ばかりにもよらず、岡場所の女郎買を聞くに、霜枯には女郎のあふれる事多くある故、客を大事にする事この月からなり。



「あの熊さんも情(じやう)なしだ、この頃は、ふつゝりはつたり足が止つた。」

「昨夜(ゆうべ)の夢見が悪かつたが、凶が吉へかへつて、今夜アとんだ事の。」

「勤はじまつてお前の様な嬉しい客はねえぞ。」

「お前(めへ)ほんに脇へ行きなんなよ、もしそんな話があると聞かねえよ。」



十二月

此月を臘月といふは、人も年積れば老人といふ故、此としも　はやらう月といふのなり。

歳暮
歳末

此さいまつといふ事は、此月のいそがし序に約束した女房なぞを、どさくさに引ずり込む事なれば、男も妻をまつ、女も女房にならんと待つ故、さいまつ。

暮は遺物なんぞ持て來ても、せわしい故に、置くと直に歸る足のひき樣が早いからしほ引。



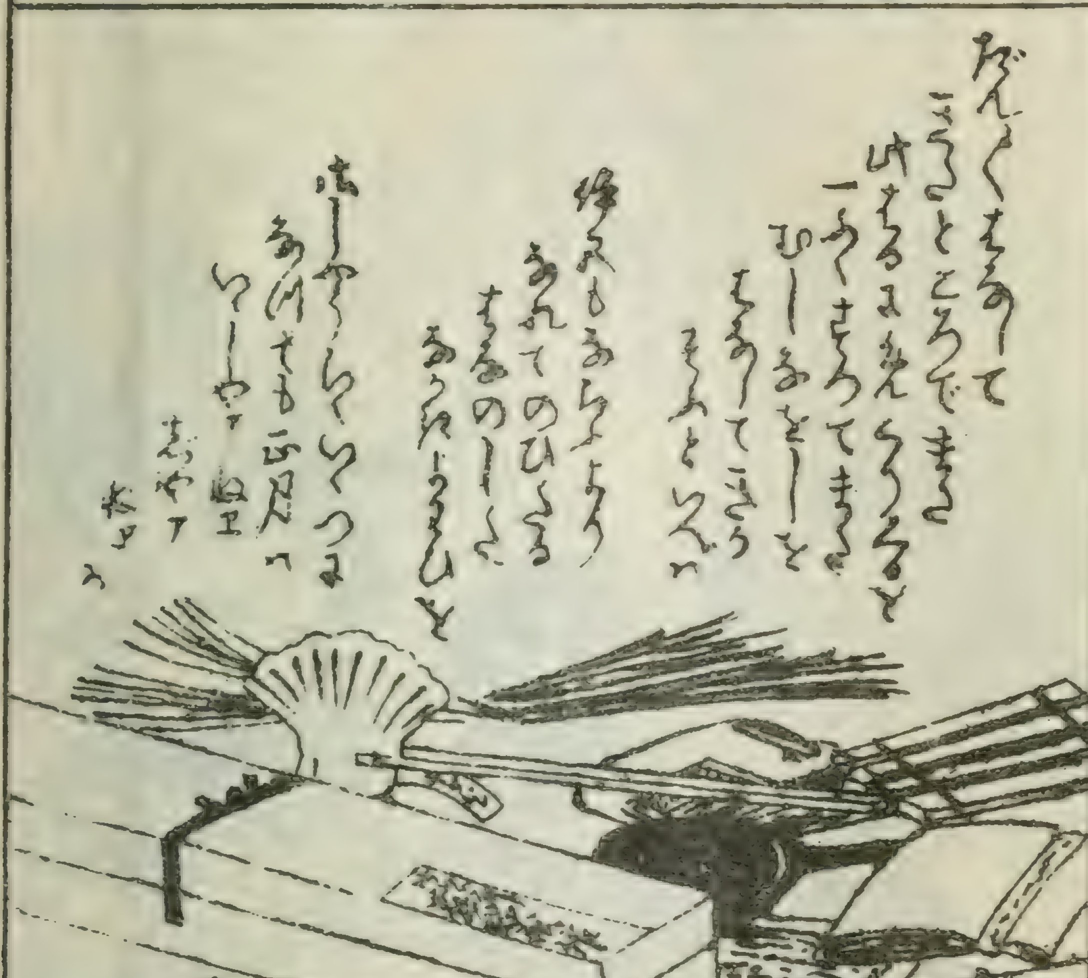
又つき出して歸るからほう鱈。匆々立つから田作。人も尻燒けだといふ心で、燒いておつつけろの牛蒡。まづこんなもの。

「さあ〳〵、丸綿をとつて餅花でもいけて下さい。」

「仲人は宵の程だからひらいて書出でも書きてえ。」



段々話して來たところて、また此春にめぐり來るを、一服すつてまた蒸し直しを話して聞かさうといへば、伊五も習ふよりなれて伸びたる鼻の下、長き齢を後生樂、幾つになつても正月はいゝぢやアねえぢやアねえか。



京傳戯作

通油町蔦屋板

世上洒落見絵図 上

亥春新鐫




亥春
新鐫
世上洒落見絵図
中
京傳戯作
通油町 蔦屋板
戯作
油町 蔦屋板
洒落見絵図
下

洒落見繪圖序

洒落ること難し、黄山谷がいはく、茂叔が胸中洒落たること、光風霽月の如しと、これらが洒落といふものか。當世の洒落は洒落に非ず、猶廡下の扁螺の房堂上の猫兒の屎の洒落たるが如く、悉く皆本意を失ひ、且行き過ぎて頭を前の十字番の搵にぶつつけるに及ぶ。於戲洒落ること難し。

山東京傳菊亭に識す

洒落見繪圖序

洒落難矣黄山谷云茂叔胸中洒落如光風霽月此洒落乎當世之洒落非洒落猶廡下扁螺房堂上猫兒屎之洒落乎悉皆失本意且行過而及觸頭於前十字番搵也於戲洒落難矣

山東京傳識于菊亭


爰に繪草紙の作者京傳といふ者、例の無益の事に案じ入つて、獨り机にもたれ居たる折節、草庵の前を酒落見の繪圖〳〵と呼んで通りければ、京傳はたと手を打ち、ア、つら〳〵おもんみれば、世の中の人心からでもない、あゝでもないと、無性に酒落々々してみた所の末は、如何なるものになるやらんと獨りつぶやきしが、
風鈴の音で夜蕎麥賣を知り、笛の音で按摩と知るは昔の事、今は人差指を曲げて見せると、質をおくことゝ悟るは成程酒落た世の中だ。
親爺も酒落れば息子も酒落る。娘も酒落れば乳母も酒落る、しやれて〳〵酒落見の繪圖〳〵。

即ち一つの趣向となりければ、嬉しや
さらば書かんとて、筆おつとつて
よりかゝり、すでに草紙を綴りけりト、
それはさなきだ道成寺、
これは茶な氣だ、オ、
笑止サ。



おん
あぼきやア、
べくろしや、
のうまかも
だら。

木魚の音に曰く
「ポク〳〵〳〵
タポ〳〵〳〵
タコ〳〵〳〵
ひたこ、
あがつた
ら煮て食
はう。

古語にも天地一番の戯場といふて、芝居といふものはもと勧善懲悪の器なるを、何時しか大に洒落て来て、見物も理窟のある狂言よりは、目先の面白い狂言を喜び、楽屋落を嬉しがるやうになりければ、段々しやれ〱して今ははや狂言は一向に止めにして仕舞ひ、舞臺で役者のうちをその儘正寫しにして見せければ、大入にて羽目をはづす。



世上洒落見絵圖

本舞臺三間の間、
市川團十郎内のかゝり、
團十郎素顔不斷着の拵へにて、
俳諧の點をして居る。
本當の女房お龜
奥より出で、
このマア海老は何して居る
事ぞと案じるこなし、
トゞどりや縫物にでも
かゝらうかトいふをきつかけに
揚幕の内にて若旦那お歸りと
呼ばゝり、海老藏素顔にて
他所行の拵へにて升五郎に
手を引かれ、押上の
妙見詣りの
歸りの氣取りにて出れば、
見物がわツというて鳴り止まず。



今時は、開帳なぞも信心で詣る者は
少く、やれ水茶屋によい娘が出るの、
取持に役者が出るのといふ評判をきゝ、
それを見に參詣する事なれば、
畢竟本尊は有り甲斐なしにて、
無くても濟むものと、これらも
大洒落に洒落て來て、本尊は
かたから止めにし、正面に
美しい娘と色男を立たせ置き、
又靈寶はまだない〳〵というて、
これも止めにし、又愛敬の守りや
運の守り位はまだな事と、
女郎買に行くと初會から
惚れられて、あつちから
身上りをしてよぶ守りや、
富をつけると一の富二の富
突きどめまで一人でせしめる



世上洒落見繪圖


守りや、百両の仕度金で嫁に行き、お妾に住んで御世繼を産む守りを出しければ、老若男女貴賤群衆して参詣する。何とマア酒落た世の中に非ずや。
一轉んだ所で金を拾ふ守りもこれから出ます。

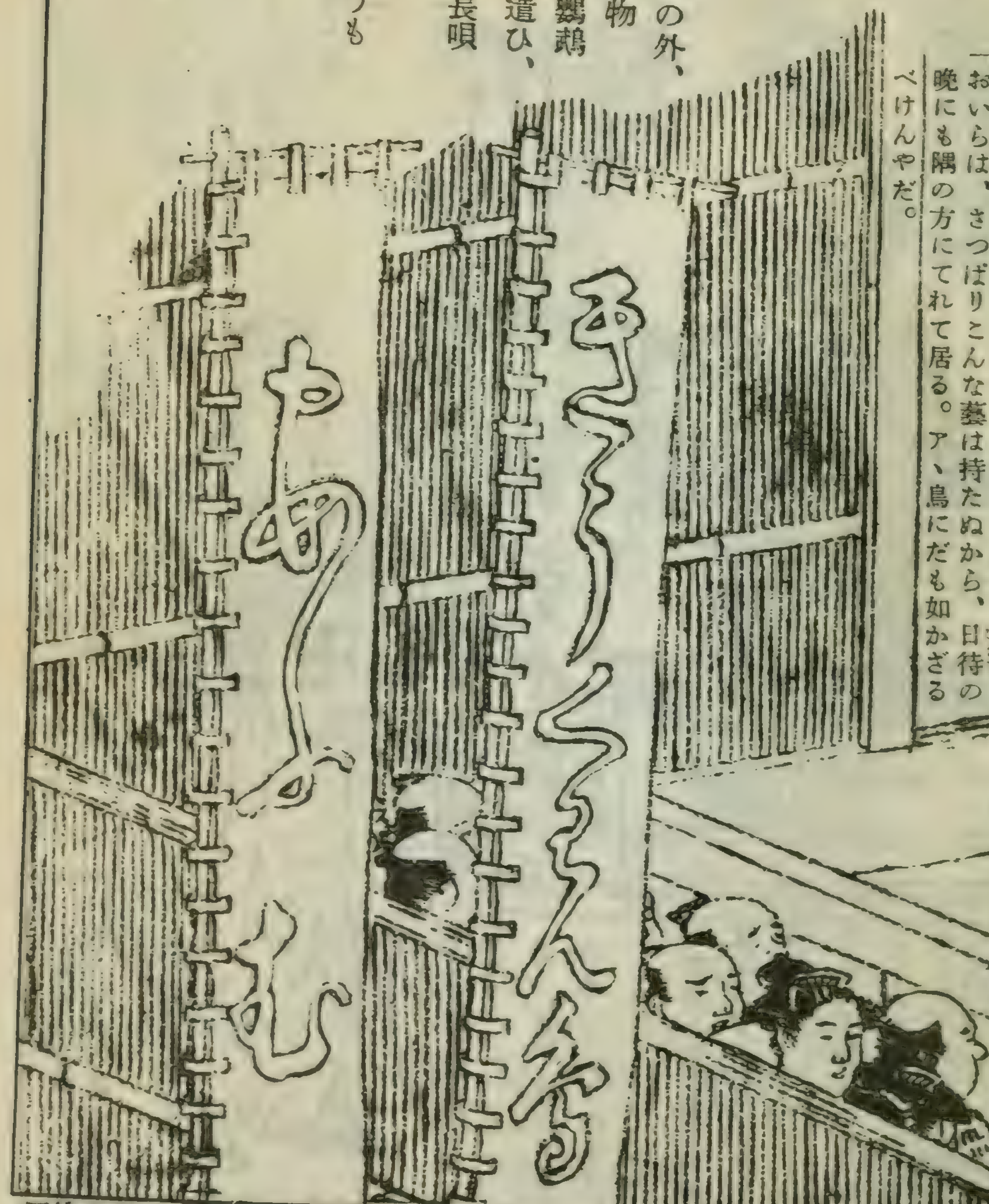
世上酒落見繪圖



鸚鵡
「序に出まするが市川高麗藏金升でござります。
「宵に降つたる雨上り、澤邊の葦のざわ〳〵と。」
九官
「更けて砧のなア音さへゆかし。」
「トッテッチン〳〵。」
「東西〳〵、只今迄は人間が人間の聲色を眞似ましたが、これは能く似てからが出來さうなもの、私芝居の太夫は鳥でござれば、致し難い藝でござります。」

世上洒落見絵圖

猿の藝や
狆の輪潛り、
鼠が姉様を
咥へて來る
なぞは古けれども、
葺屋町の河岸で蝙蝠の
輕業、近年の洒落と思ひの外、
そんな事ではなく、見世物
なぞも段々洒落て來て、鸚鵡
が三芝居の役者の聲色を遣ひ、
九官鳥が座かゝり荻江の長唄
をうたふ見世物が出る。
なんとマア此上の洒落やうも
あらうか。



世上洒落見繪圖

さるお寺の和尚、毎日々々地藏菩薩の本堂建立(こんりふ)の勸化(くわんげ)に出(い)でしが、本堂の足(た)しにはせず、うぬが鼻の下の建立や、

の建立にばかり遣ふ故、本尊の地藏尊思ひ給ふは、かういふ事では末々(すゑぐ)つまらぬ。此上はあいらを出さずにおれが自身に出ようと、忝(かたじけな)くも地藏尊自ら勸化に出給ふ。されば今は佛も人に助けられる世の中、とんだ酒落たものなり。



「今迄うか〳〵あいらを出して、無駄遣ひにされたのは、一生の地藏そんだ。」

地藏様も我が口から地藏菩薩本堂建立ともいひ憎し、

又默つて歩いては人が知らぬ故、據(よんどころ)なく私(わたくし)の建立〳〵はありがてえね。

「昔ならから石の地藏様が出歩いては、やれ有難いの、絲瓜(へちま)のと俗物が騷ぐ場(ば)なれど、酒落た世の中故平氣にて、橋本町同然に思つて居る。

世上洒落見繪圖

狐なぞも大洒落にしやれて來て、狐の方から罠をかけて獵人を釣る。これらはどうか嘘らしいけれど、深川の壬生狂言や、髮結床の障子にも出て、最も確なることとなり。かるが故に今は騷ぎの三味線にも、狐を浮かそ、こん〳〵ちき〳〵こんちきちとはいはず、獵人浮かそかり人ちき〳〵かりちきちと手おもく囃す。



世上洒落見繪圖


狐は段々洒落て來て、生男を化かすは面白からず、とても化かすならよい女郎を化かして遊ぶがましと、色男に化け女郎買に來る。女郎も又その上を大洒落にしやれてきつ印といふ事、承知で客にする。
「此引出へわつちが駒下駄を入れて置いたがおつせんよ。」
「この客の箸紙へ夜の殿さんと名書しておくなどは洒落たものなり。」
「今時の人間の客衆は甘い酢ではいきんせん。それだから内證でも矢ツ張ぬし達の様な

世上洒落見絵圖

「もしえ、そんなに遠慮しなんすな、主はこんこんだといふ事は、わつちもとうに承知で居んすけれど、はておきつさんでも何でも客人に二タ色はおつせん。又この床花にお呉んなんした金も定めて木の葉でおつせうが、木の葉でも何でも金の通用さへすればようおす。主は全體律義だよ。矢ツ張これから白化けに來なんし。」といへば、流石の四ツ足も大に凹み、洒落には上手のあるものと感心する。



「客人を嬉しがりんす。」

「コレあの子や、この金の木の葉にならぬ内早く質屋へ持つて行つて、先度の襠袢と鏡を受けて來や、ちつと氣を利かせや、遅くなると木の葉になるぞよ。先で木の葉になつた分にやアかまやアしねえ。」

昔は鳶が油揚を浚ふとて、酒屋の御用の手を引搔きしものなるが、かゝる大洒落の世の中なれば、今は鳶も洒落て來て、そんなさもしい事はせず、肴賣の手前から三貫四貫する初鰹を高錢出して買ひ、雲の上にて飲みかける。その鰹の頭を人間が浚つて食ひはどうだ。

折節鳥刺來つてこれを見附けしが、寒鳶なら錢にもなるが、夏の鳶は五文にもならぬと、目はかけざりしが、鳶がよそ見をして居る



世上洒落見絵圖


所を見すまし、側にある貧棒樽をちよいとさしておつとる。
「然し酒を買つて尻切鳶はちと見徳が悪いの。」
「芝の山の尻切鳶もよびにやればいゝ。」

世上酒落見繪圖


「今年はとんだ孑孑の多い年だ。」
去る程に我勝に酒落て來て、二三月時分からまだ蚊になりもせぬ孑孑が出て人を喰ひ、まだ鰻に成果せもせぬ山の薯の内から蒲焼にして賣る新店が出來る。
「山の薯の蒲焼店へ俗はあまり這入らぬが、坊様は幾人も食ひに來る。これ鰻の影富を附ける心意氣との事なり。



或は男が血の道の薬を飲み、下戸が水雑炊を食ひ、こいつは洒落だらうと嬉しがる。
「これは中橋のまき屋薬か、ア、血の道の薬は野暮でねえ奴だ。」
「水雑炊は意氣なものだ。諸事この事だ。甘い／＼。
これでおいらがやうな下戸と餅を食ふ上戸と丁度入れ合ふだらう。」
「呆れ返る程上りますよ。」

世上洒落見繪圖

昔は泥坊も黒装束、目計頭巾なぞといふ甲斐々々しき出立なりしが、今は洒落てぢん〱端折りに京草履、店者のしくじりが虎屋の五種香賣に出たやうな形なり。



昔は犬も泥坊と見ると矢鱈無性に吠えしものなるが、これも段々洒落て來て頭からは吠えず。

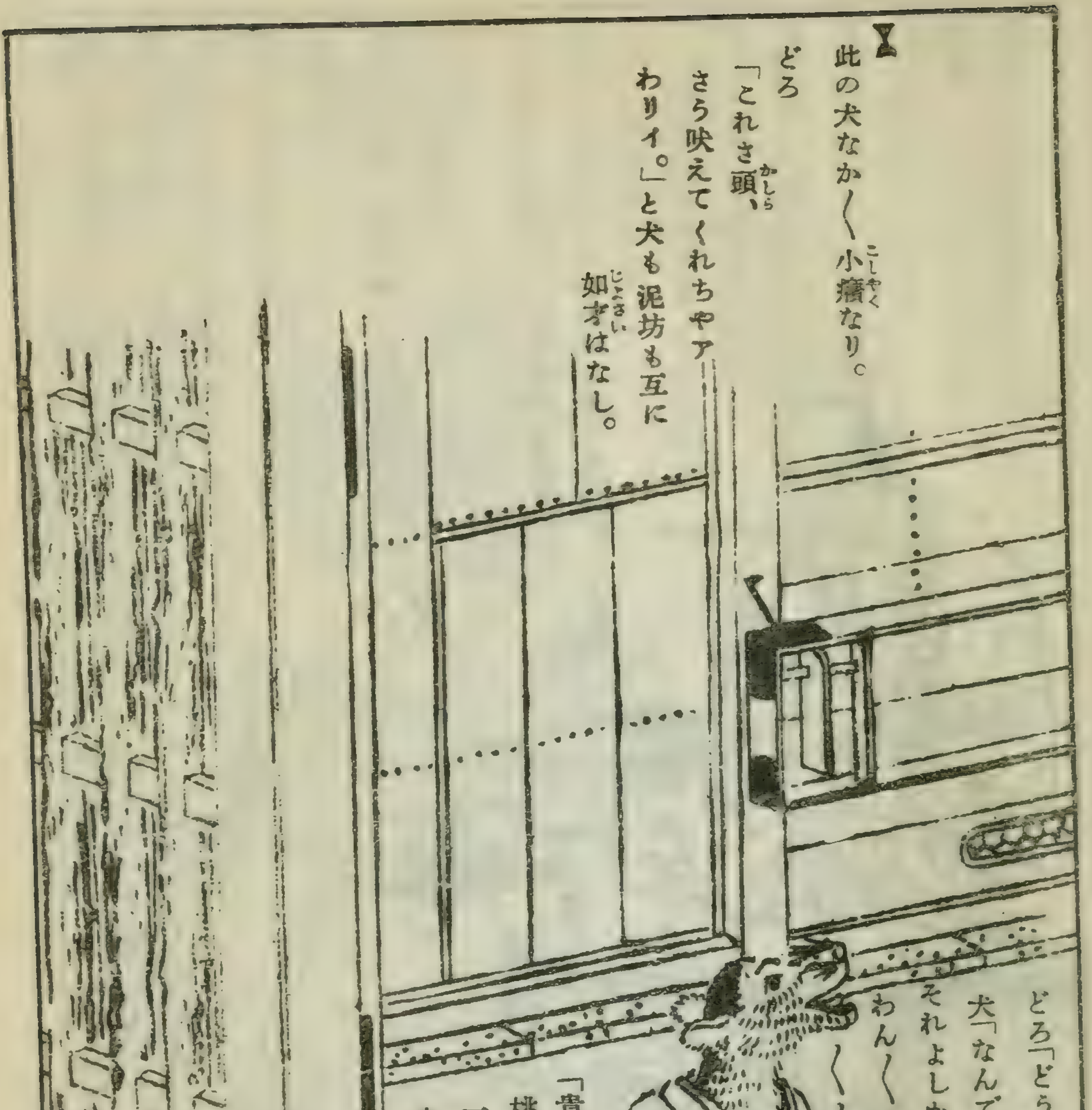
犬「これ泥州、今夜は燒飯いくつだ。

泥棒「五つばかりで負けてくれやれ。

犬「とんだ事を。おのしは氣が違つたさうだぜ。おれもこの町内ぢやア相應に吠えて、番太郎にも立てられる犬だア。おのしも又何處無宿何小僧と名の通つた泥州だ。そんな茶化しをいはずと、もつと出さつし出さつし。」

「わしは燒飯ちつと古いが、やる氣ぢやけれどさい〱、おめえ犬の性で吠えなさる。犬の子さい〱。猫の子さい〱。

世上洒落見繪圖



此の犬なか〳〵小癪なり。
どろ「これさ頭、さら吠えてくれちやアわりイ。」と犬も泥坊も互に如才はなし。
どろ「どうぞこれで不承して啼き止んでくりやれ。」
犬「なんでも十五よこさねえと直にわんだナ。それよしか、わん〳〵〳〵〳〵。」
「貴様の先祖は桃太郎に黍團子を一つ貰つて、鬼ケ島まで供をした。それから見れば五つでも高いものだ。」
「桀狗吠堯といへば、人を吠えるがおいらが役だ。所を吠えぬからひねるだらう」と、


雷なども洒落て來て、人間がやかましからうと隨分小さく鳴り、偶々落つこちた時は、その近所へ義理をのべて天上する。雷の荷拵へ米搗が仕舞つて歸るやうな身なり。
「オヽ雷殿か、御苦勞でござる。いやはや今の夕立で暑さを取返しました。」
「雷奴でござります。只今はおやかましうござりましたらう。お隣ではお留守さらにござります。憚りながらお序に雷めお御挨拶に參つたとおつしやつて下さりませ。」と、なか〳〵律義なものなり。

世上洒落見繪圖



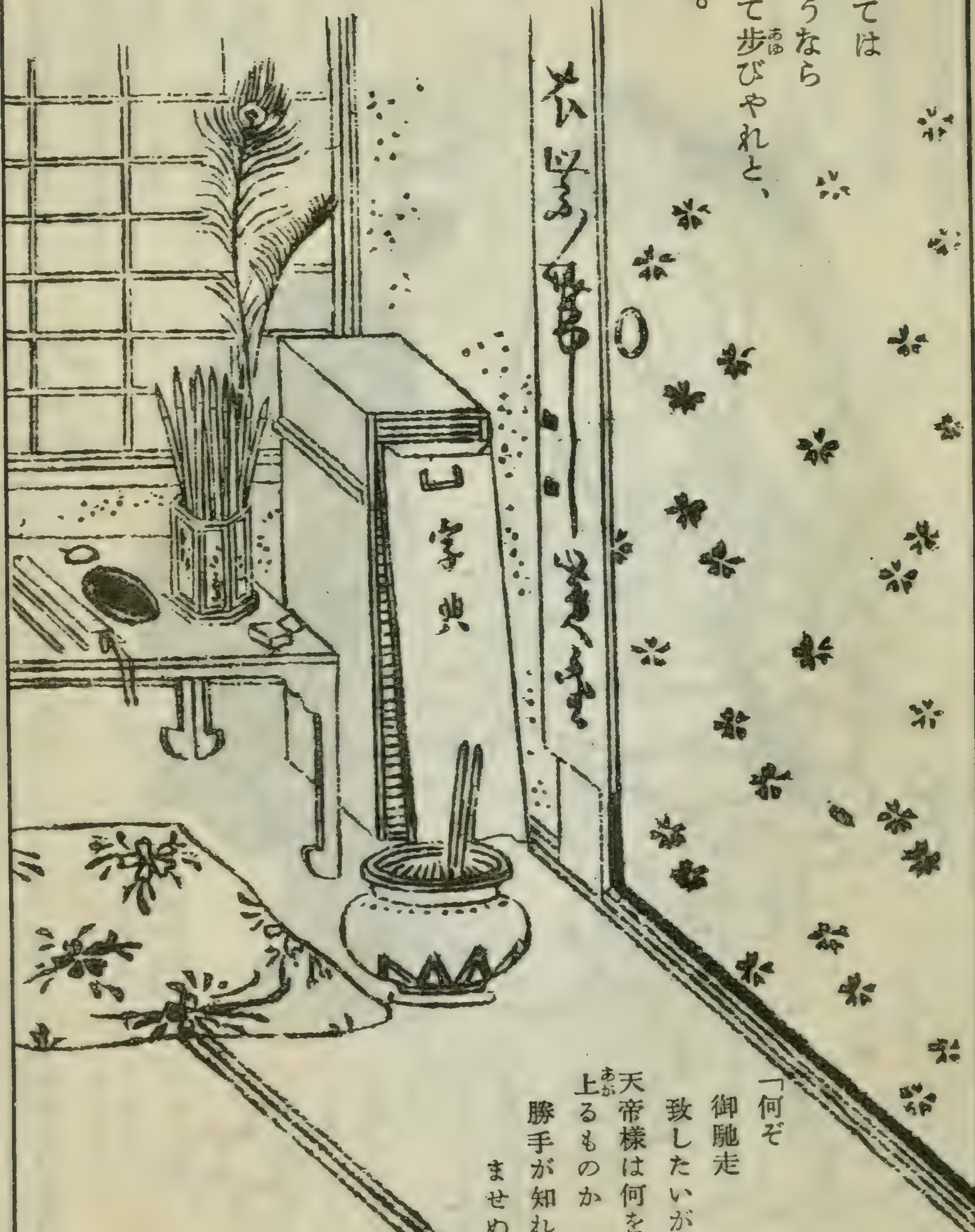
かくて京傳は、かの世の中の
洒落て來た草雙紙を中の卷まで
書き、末の工夫をして居る所へ、
草の戸を叩く者あり。
京傳きゝつけ、ハ、ア蔦屋の主では
無きか。草雙紙の作の催促なら
まだやう／＼中まで出來て、
下の卷が出來ぬぞやといへば、
いや／＼其やうな
者ではない、
我は去年も
汝が筆に
度々書かれたる
天帝なり。
こゝ開けよ
と宣ふ。
「羅月さんではないか、但し吉原の掛取か。
僧は敲く月下の門、おい／＼といへど叩くや雪の門
といふやうな風流な所ではあるまい。」
「手前のうちを天てい訪ねたとつちやアねえ。」

世上洒落見繪圖


天帝宣ひけるは、此處は差詰汝が夢の内に現るゝ場所なれど、かゝる洒落の世の中にそんな古い趣向と出かけては、凡夫等にすこたんと思はれるも殘念故、白化けに來りしなり。さて汝この頃世の中の洒落たる草雙紙を作る事を知つたる故、洒落のとゞのつまりを見せん爲來りしなり。早くおれと一緒に
「去年の惡魂は大分受がよかつた。」
「今年も又惡魂の後篇肝心が一心といふ本を著しました。御覽じませ。」

世上洒落見繪圖

歩べ。
又見物が夢だと思つては
悪いから、もし睡さうなら
とくとよく眼を覚して歩びやれと、
天帝戯まぢりに宣ふ。



「何ぞ
御馳走
致したいが、
天帝様は何を
上るものか
勝手が知れ
ませぬ。

天帝は京傳を同道して何處ともなく行きけるが、一つの海の端のやうなる所へ出、そこらを見れば、土にもあらず、石にもあらず、木にもあらず、如何にも朽ちたる一塊づゝになりたるものいくつもあり。天帝宣ふ。

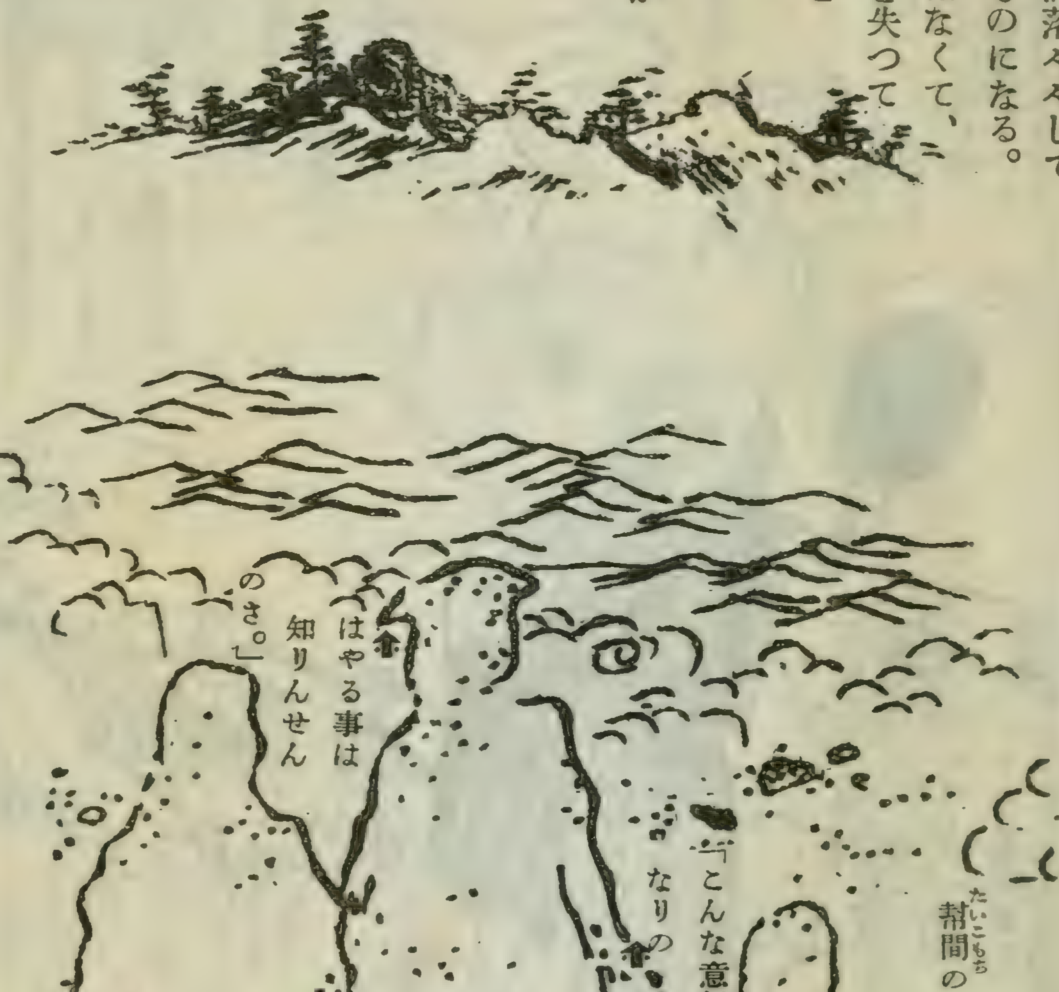
是が皆洒落の高じたものぢや。此一塊づゝになつたものが、武士・百姓・職人・商人・儒者・佛者神道者・醫者・俳諧師・藝者・幇間その外色々の人の洒落たのぢや。中でもいつちよく洒落て居るのが、通人と女郎の洒落たのぢや。何とそれとは見えまい。からでもない。



「是を柳橋の珍物茶屋か、兩國の・唐の開帳へ出したらどうでござりませう。とんと金澤の蛇木といふもんだ。

次郎どんのいろと、太郎どんのいろと、みんな洒落て仕舞つた。

あゝでもないと段々洒落々々して
遂にはこんな分らぬものになる。
今時の洒落は洒落ではなくて、
皆行過ぎだから本意を失つて
このやうに初めの形を
なくしてしまふ。
無性に洒落た／＼と
思つて元を忘れる輩が
多いからかうだ。
何と珍らしいものを
見たらうと宣ふ。



世上洒落見繪圖

たとへば海にある貝殻の洒落るやうなもので、はじめは榮螺や鮑の貝なれども、かうでもない、あゝでもないといふ潮に揉まれ、浪に打たれて、遂には何だか分らぬ形になつて、がら〳〵一文〳〵にほかならぬ。人の事ばかりでもない。草雙紙なども餘り洒落ると本意を失ふ。汝は洒落ぬと思へど、これ見ろとて天帝の天眼の鏡にて見せ給へば、京傳がからだも段々洒落て來て、遂に朽木のやうになる。



京傳曰

「人の事ばかり目くじら立て、おれは洒落ぬ〳〵と思つて居たが、これは堪らぬ、もう半分洒落かゝつた。誰ぞとめて呉れ〳〵。

これはどうだ秀郷と悪い洒落をいつたら、又半分洒落て來た。洒落が高じて物狂ひといつたらみんな洒落て仕舞つた。」


天帝「おれもとめて
やりたいが、
おれがにもどうも
仕方がない。
しやれての後の
御料簡さ。」
「過ぎたるは及ばざるが如しと
古語の通り、味噌の味噌臭きこそ
悪けれど、武士は武士臭く、
町人は町人臭きがよい。
洒落過ぎるとみんなさうだ。」

世上洒落見繪圖

天帝つら〳〵思ひ給ふは、これはつまらぬものぢや、何でもこの洒落た手合を元の通りの人間にせずばなるまいと、造化の神を集めて御相談の所へ、大千世界の切幕から暫く〳〵と聲を掛けて搖ぎ出でしは、柿の衣に鶴菱の袈裟をかけて、水晶の大數珠をつまぐりて、まだ草雙紙へは初舞臺の彌勒菩薩なり。洒落た手合を元の通りにするは、我らが受取り、サア〳〵我らに渡し給へと宣ふ。



天帝「おれが相談の場所へ、暫くと聲をかける奴は、普天の下、率土のうちに恐らくは無い筈だが、マア何奴だ。エヽ、引。」


「當時繁昌北廓青樓意氣八荒天地てんつんの
菅搔に浮れ出でたる大通佛。
大千世界の花道の此方に安置し給へば、
一番待つてくれのかね、盆前のかね、
勤のかね、打ちに打つたる銅鑼鐃鈸、
遠からん者は音にも聞け、近くは
寄つてみろく菩薩の御臺辭、
誰も根つから嬉しがらねば、
これを今に彌勒洒落損と申し奉る。
「京傳こんなつまらぬなりになつても、
氣ばかりは矢ツ張り強く、おんなじ
やうに何やつだエ、といふ。
「我を誰とか思ふ。
姓は慈、名は彌勒、
字は阿逸多、見知つて下せえ、
アヽつがもねえ。」

京傳作

かくて天帝は世の中を彌勒佛に渡すはまだ十千億萬年も後の事。人間の風俗斗りは直して呉りやれと頼み給へば、彌勒佛受合ひ給ひ、かの酒落た手合を集め、雛の古いのをこそぐるやうに彩色をし直し、衣裝をきせかへた人間は即ちこの繪の通り少しも酒落の無き世の中と成り、若やぐ春ぞ勿論酒落ず矢ツ張古風に目出度し〳〵。



此時隅田川の渡守も掛烏帽子を着て舟を漕ぐ。


桃太郎發端話説
山東京傳作

それ赤本は、一つ趣向を種として、萬の笑ひとぞなれりける。竹に鳴く雀は、糊の爲に舌を切られ、穴に住む蟹は柿の爲に甲を破らる。惡老婆のふさ〳〵しきは力をも入れずして重き葛籠を動かし、桃太郎のてんこちもなきは、目に見えぬ鬼神もあはれと思はせ、鼠の娶入は男女の中をも和らげ、御子様方の御心を慰むるは赤本なり。これや久方の雨にしては乙姫に始りて猿の生肝をぬらし、あらかねの土にしては狸の船に起りて兎の手柄を見せ、彼善に勸め是惡を懲す。かくてぞ紅粉皿闕皿の碎けたるを集め、鉢被姫の故きを温ねて世に新しく櫻木にのぼせ、花咲爺の灰をあふぎ、慳貪爺を惡まざらめや。

浦島太郎月　　　　山東京傳

それ赤本ハ一ッ趣向を種として其の笑ひをそゝるれまほるに小鳴
雀ハ糊の落れ舌を切よ穴に猿蟹ハ柿の恨に甲を破る悪意
のあきく大きさハ力をも入れずして重き葛籠をうらぞかし桃太郎
てんとちを動かし目にみえぬ鬼神もあはれと思ハせ鼠の嫁入ハ
男女の中をもやはらげ猛き武士の心をも慰むるハ赤本なりけり
ひさされて爾ふしてハ乙姫にはしまりて猿の生肝ぬれしあり
かねれ昔ふしてハ狸の手にせられて兎の手柄をみせ嵯峨
まつお出く悪ひこつてお紅皿缺皿乃障けるをいのあ
鉢被姫の古きをたづねて世く新しく桜木の花咲
もぢの戻をあぶぎちゃんちんを悪まぎしや

蔦唐丸

山東京傳

話說す、昔々の事かとよ、陸奥の片ほとりに爺と婆とあつたとさ。夫婦共にずんど正直な者で、かりにも惡しき心を持たず。憐み深き者なりけるが、飼鳥を商ひて世渡りとす。されど生あるものを養ふも大きなる罪にして商賣の道ならざる事を歎き、常に物事に情をかけて暮しける。

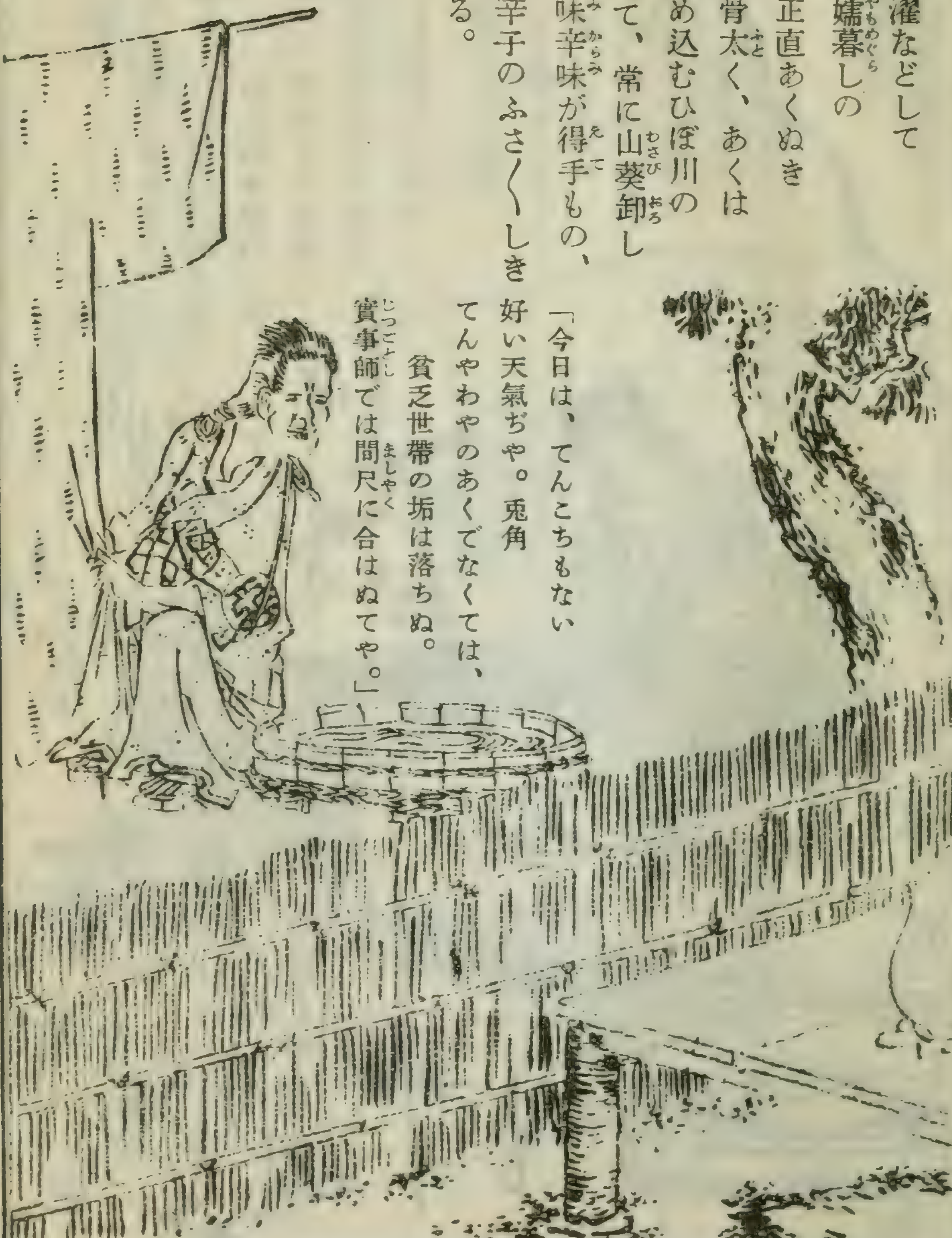
「譬のふしに猿と犬は仲の惡きものなれども、正直夫婦の篤實故に、飼はるゝものまで和順して、狆と猿は別して仲好く、雉などは此家のあひ口なり。

「お婆や、放鳥ならば損をしても賣つてやるがよいぞや。」

「何とお婆、燒野の雉子、夜の鶴、畑の里芋、鮭の胎子を思はぬものはない。こちらは此年になつて子の無いといふは、てんと心細いことではおじやらぬか。」



その隣に、人の洗濯などして身のたつきとする孀暮しの慳貪婆あり。隣の正直あくぬきにも似ず、色黒く骨太く、あくは澤山にて、慾で占め込むひぼ川の饂飩愚鈍な生れにて、常に山葵卸しの目に角たて、嫌味辛味が得手もの、卸大根ふと印、唐辛子のふさ〲しきお婆にてぞありける。





爰に又、其頃中將實方といへる人、勅勘を蒙り、陸奥の方へ彷徨ひ來り給ひしが、さなきだに旅は憂きものなるに、踏みも習はぬ山坂に苦しみ、飢に臨み給ひし故、慳貪婆が家に立寄り、食物を求め給ひしが、もとより情無き者なれば、食を奉らず、痛はしくも追立て申すぞ不敵なる。

「から腹がへりま大根と來ては、ふと印といはれても、後へも先へも行くことは、ならずの森の鷦鷯。」と一人つぶやきおはします。

「こつちの上げ下げさへてんやわやと來て居るものを、けちいまいましい。てんと内裏雛の棚晒しと來たわ。」

正直の夫婦は此態を見て御痛はしく思ひ、實方を我家に伴ひ、

「こは情なの鄙人や。」

いろ〳〵いたはり申すぞ優しき。

「何ぞ上げましたらはござりますれど、東の果の山家と來て居りますれば、ひきの屋の銅鑼燒、薩摩諸、四方の瀧水といふ場所も梨の切口といふ穿鑿さ。」・

「これは背戸になつた桃でござります。これでもおせしめなされて、飢をお凌ぎなされませ。

てんとお痛はしや〳〵。」

「うまいもゝや可愛のもゝやとは故人白猿がお定りかへ。」

「これは、てんとうまさうな桃ぢや。しかし、大の痛事、近年の大當りと來たわ。」



さても實方卿は正直夫婦が情の桃にて凌ぎ給ひ、また行先に赴き給ひしが、此程の疲れにや御心持例ならず、道の傍に病臥し給ひ、懐しき都は雲とのみ眺めやり、つれなき命を喞ち、かく陸奥の土となるとも花の都の慕はしく、涙に咽び給ひしが、折節傍の一叢茂れる竹藪に雀集り巣につきて卵を暖め居るを見給ひ、われ此の所にて空しくなるとも、一念雀となりて都へ上り、臺盤所の飯を食はんと心に観念し、彼の雀の卵と實方卿の一念と合體して一羽の雀と化す。

この時、實方の朝臣幼き時、親の恩深かりしを思ひ出でて、かくなん詠み給ひける。

「泣くとだに親は業の切艾
さしもしかりなすゆる思ひは」

此歌道化百人首に見えたり。




これ賓方雀と申す謂なり。
「お雀御様もお血心も無うておめでたい詮議でござる。」
「おふくら様、まあ〱奥の竹椽で酒でも上りませ、鯛の味噌吸を申しつけました。」
「よいお子やの。」

實方の一念雀の子となり、都の方へと志しけるが、まだ巣離れの事故、はかばかしくも飛びやらず、里の子供にとられて難儀に逢ひける折柄、正直爺此の所へ來かゝり、實方の一念とも知らず、雀の難儀を見かね、子供等に價の錢をやり雀を乞取りて我家へ歸りける。

「子供等をよくくるめて雀を助けてやりませう。」

「これ〱子供、この錢をやる程にその雀をおれに呉れ、よい子ぢや。」

「ぶつちめろ〱。」

「此雀はおいらが捕まへた、誰にもやる事はならぬ〱。」



正直爺、かの雀を連れ歸りけるが、
一體鳥屋の事故、早速籠に入れ、餌を與へて
勞(いたは)りけり。もとより實方の一念たる雀なれば、
重ね〲の情(なさけ)を感じ、正直夫婦を慕ひければ、
後々(のち〱)は籠を出して放飼(はなしがひ)になし、
夫婦ことなう可愛がりけり。

「勸學院(くわんがくゐん)の雀は蒙求(もうぎう)を囀ると申しますが、私(わたくし)はお前方にかんがくされる雀でござれば、モウ〲ぎうの音も出ませぬてや。」

「雀の難儀をお救ひ下されたからは、ちう〲の御恩でござります。」



さても雀は正直夫婦が愛しみを受け、籠中の苦しみもなく、放飼になりて暮しけるが、或日長閑なるまゝ、日當りに出でゝ遊びけるに、隣の慳貪婆が洗濯糊とも知らず、盥にありし姫糊をしたゝか嘗めけるが、慳貪婆見つけて、てんこちもなく腹を立ちて、雀の舌をちよつきりと見知らせてこませけり。

「糊をみんな瀬〆漆と出た。ふさ〳〵しい雀ではある。牛の角の切口、ふといの根付と來たわ。」

「てんと、しようづかの婆ア六道の辻の鉾臺顔と來たわ、この仕打は故人天幸もどき、雀に憂目を見せるからは、竹の子婆アではないか、今に思ひ知らせて呉れん。」



口は禍の門、舌は禍の元、雀は慳貪婆が姫糊をせしめて舌を切られ、今更面目なく、飛ばんとすれど糊をしたゝか嘗めける故、羽もからだも板天神と來て、元の古巣へも歸り難く、死ぬるより外なしと濱邊をさして迷ひ來り、兒ケ淵の白菊か古池の蛙かといふ仕打にてどんぶらこと飛込みしが、體の糊は溶けしが寒の中なりければ、一身凍りて蛤となるぞ牽強らしき事どもなり。まことや淺蜊蛤の糊賣をするといふ言葉も據りどころあることとぞかし。

「實方の一念化したる雀ほどあつて兒ケ淵の歌を詠む、青物盡し



「いつそ
此身を
すゞめに
かけて
さうぢや。」

蜀黍に百合
の根かやと
山獨活も、
零餘子の薯で
はだな油揚。

焼野の雉子夜の鶴、子を思ふ道は一筋にて、舌切雀の親鳥は、子雀の見えぬ故、羽の便りも聞かまほしく仲間の雀を頼み、尋ねに出づるぞ優しけれ。

「雀は迷子を尋ぬるに鉦太鼓では出でず、竹を叩いて出づる故てんと雀踊と節季候の幇間如き出立なり。

「節季候は雀の笑ふ出立哉と翁の句も眼前體なり。

此處は、所も西の海ちくらが沖といふなれば、暮れ行く年の豆囃子に厄拂共、かいつかみし悪魔外道を一纏めになして、古き葛籠に押込め沖中へ流せしを



此濱に吹きつけしが、對王丸の水入か、出かはりの破船かと、雀共引上げ持ち歸りけるとかや。何の所詮も無き事なれど、これが狂言の筋ぢやてや。

「さては此淺蜊にも悴めは法螺の貝のう。此月日貝なでし子貝で育てたもの、櫻貝の花を散らし、此やうな蜆を海松食とは帆立貝もない事ぢや、わしは片時も忘れ貝ぞや、遠い親類より近き田螺ぢや、榮螺はあるまいが、蝛蛤ながら貴様達も馬蛤のないやうに尋ねて下されや、たとへ串貝ぢやといはれても、赤貝々々大事ない。然し蛤になつたと聞けば、潮吹の頭に牡蠣宿ると御方便で一度は鮑で下されう貝。

「松浦佐用媛は石になつたが、わしが息子は蛤になつたといの。」

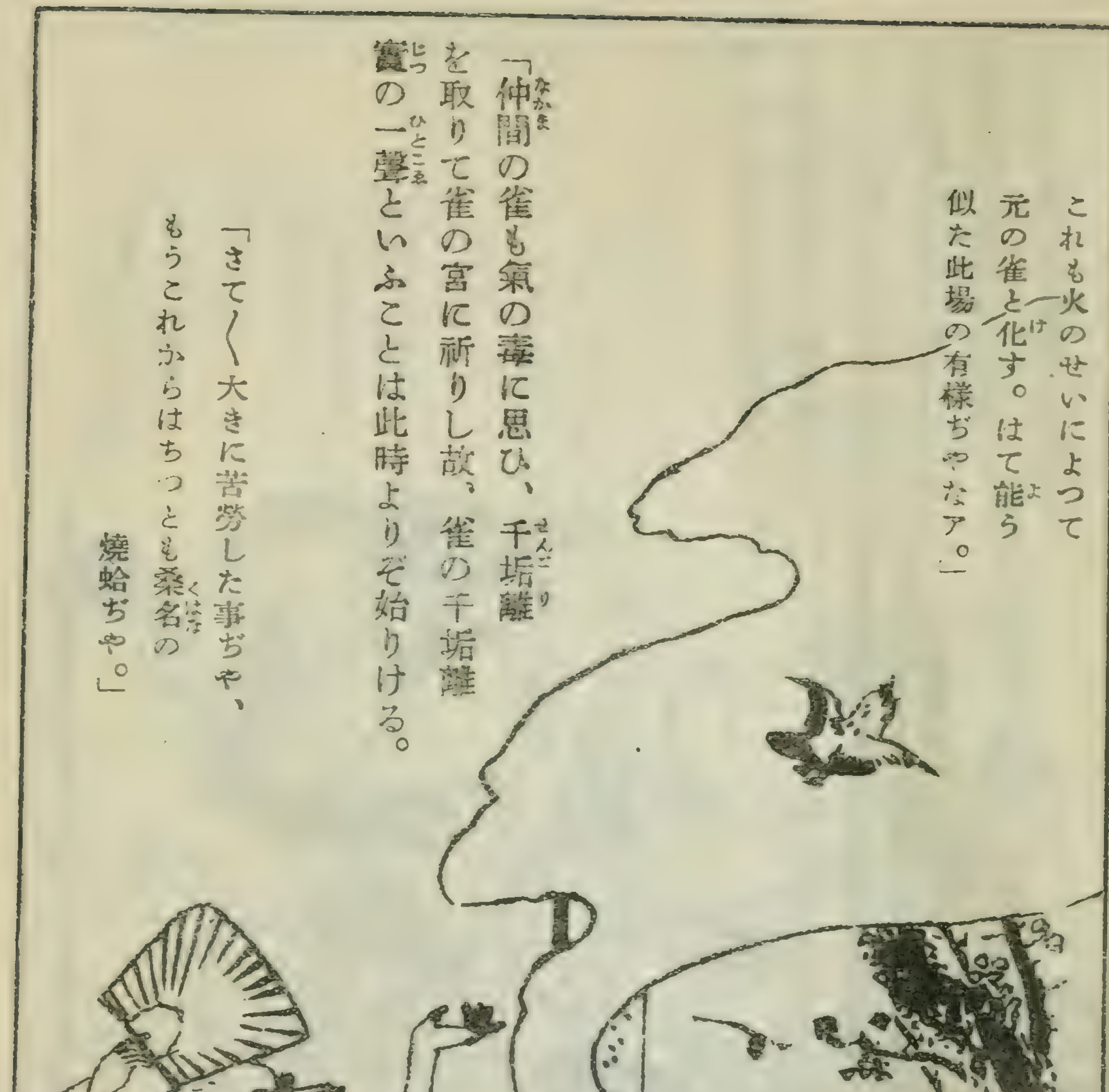


親雀は、子雀の蛤となりしを見つけ出して連れ歸り、鍼や按摩でやう〳〵と、暖め灸もとゞかねば、雀醫者指圖して、兎角強く暖めるにしくなしと、松毬を集め、焼蛤となしければ、蛤ちう〳〵と鳴きしがぱつくりと口あきて、蜃氣樓の尻子玉ともいひさうな氣を吹き、内より舌切雀飛び出づれば親雀、嬉し涙の雀泣こそ道理なり。

醫者雀曰く
「藥瞑眩せずんば
其病癒えずといへり。

秦の泰伯獵に出てて咸陽に至る
流火有り、下り化して白雀と爲る。




これも火のせいによつて元の雀と化す。はて能う似た此場の有様ぢやなア。」
「仲間の雀も氣の毒に思ひ、千垢離を取りて雀の宮に祈りし故、雀の千垢離實の一聲といふことは此時よりぞ始りける。
「さて〳〵大きに苦勞した事ぢや、もうこれからはちつとも桑名の燒蛤ぢや。」

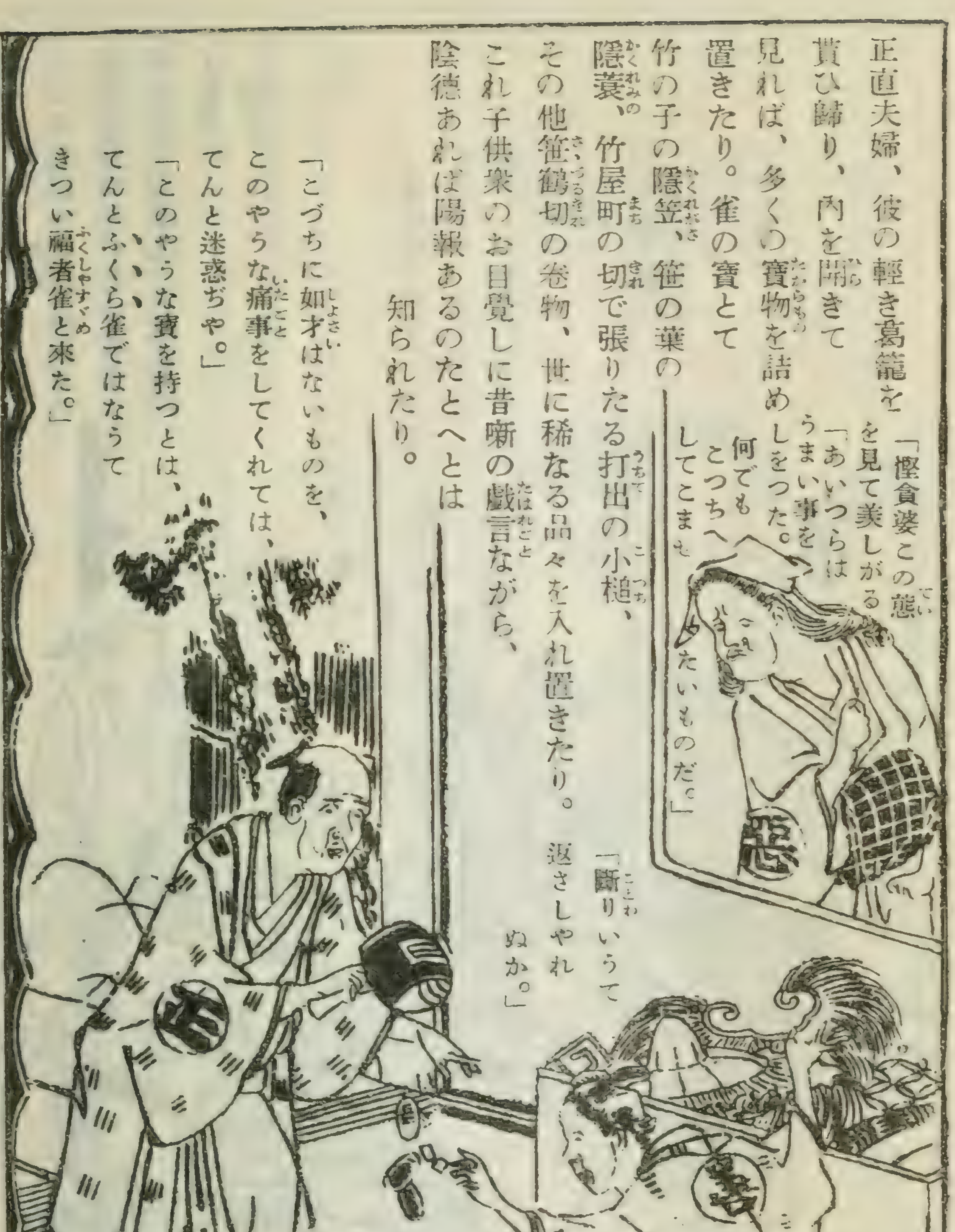
「舌切雀お宿は何處ぢや、
ちよつ〳〵ちよ、
「白木に鯣、
結納は婿ぢや。」
「下着はすみれ、
お江戸は派手ぢや。」

始終無きものは確ならずとかや。正直夫婦は雀の行衛を尋ねに出でけるが、思ふ心の誠届きて雀の隠れ里に尋ね當りければ、雀共正直夫婦が大恩を報いんと、心の丈を盡して馳走し、歸りに




一つの葛籠を土産に與ふる。
正直夫婦は慾のなき者故、
輕き葛籠を貰ふ。此の所は
子供衆がよう
御存じなり。
「雀は都とはよくいうた
ものぢや、山の中にも
此やうな座敷がある。」
「これは
いかい
御馳走ぢや。」

正直夫婦、彼の軽き葛籠を貰ひ歸り、内を開きて見れば、多くの寶物を詰め置きたり。雀の寶とて竹の子の隱笠、笹の葉の隱蓑、竹屋町の切で張りたる打出の小槌、その他笹鶴切の巻物、世に稀なる品々を入れ置きたり。これ子供衆のお目覺しに昔噺の戯言ながら、陰徳あれば陽報あるのたとへとは知られたり。



隣の慳貪婆慾深き心より羨しく思ひ、同じやうに
雀の隱れ里へ尋ね來り、葛籠を貰はんといふ。
「今度は雀も餘り馳走をせず、
仲間の鶯餅で間に合はせる。

「鶉のちょつくわいでは無うて、
葛籠のごしゆつくわいに見えたのぢやな。」

ばゝ
「放下師の小刀ではないが
呑込山なら、早う葛籠を
貰うて歸りましよ。」

「てんと、ふさ〲しい
お婆ぢや。」

「わしは達者だから、
随分重い葛籠がよいてや。」



君子は人の福を喜んで羨むの心なし。かるが故に己達せんと欲して先づ人を達す。小人は人の福を憎んで貪らんとす。この故に善を遠ざけて賢を憎む。慳貪婆が慾の張葛籠は、罪の重き事葛籠より甚し。心の慾の連尺に繋がれて罪を葛籠と共に負ひぬ。子供衆此處らがよい目のつけ所ぢやが合點か〳〵。

「てんと重い葛籠だ、何でも此内の寶をせしめ漆と出て銅鑼燒甘藷の食飽をしませう。」



舌切雀は一昨日來やれとお婆を蚰蜒の取扱ひにてあとへ鹽を撒く。

「何と、己が仕打は袖鑑の庵室の段、軍助もどきと見えようがや。」

慳貪婆は重き葛籠を持ち歸りしが、一體此葛籠はちくらが沖にて拾ひたる惡魔外道を籠め置きし葛籠なれば、蓋をあけるまでもなく、忽ち中よりめり〳〵と葛籠をこはし、異形の鬼神現はれ慳貪婆を宙に摑んで鬼ケ島へ飛び行きしは、てんこちもなき次第なり。

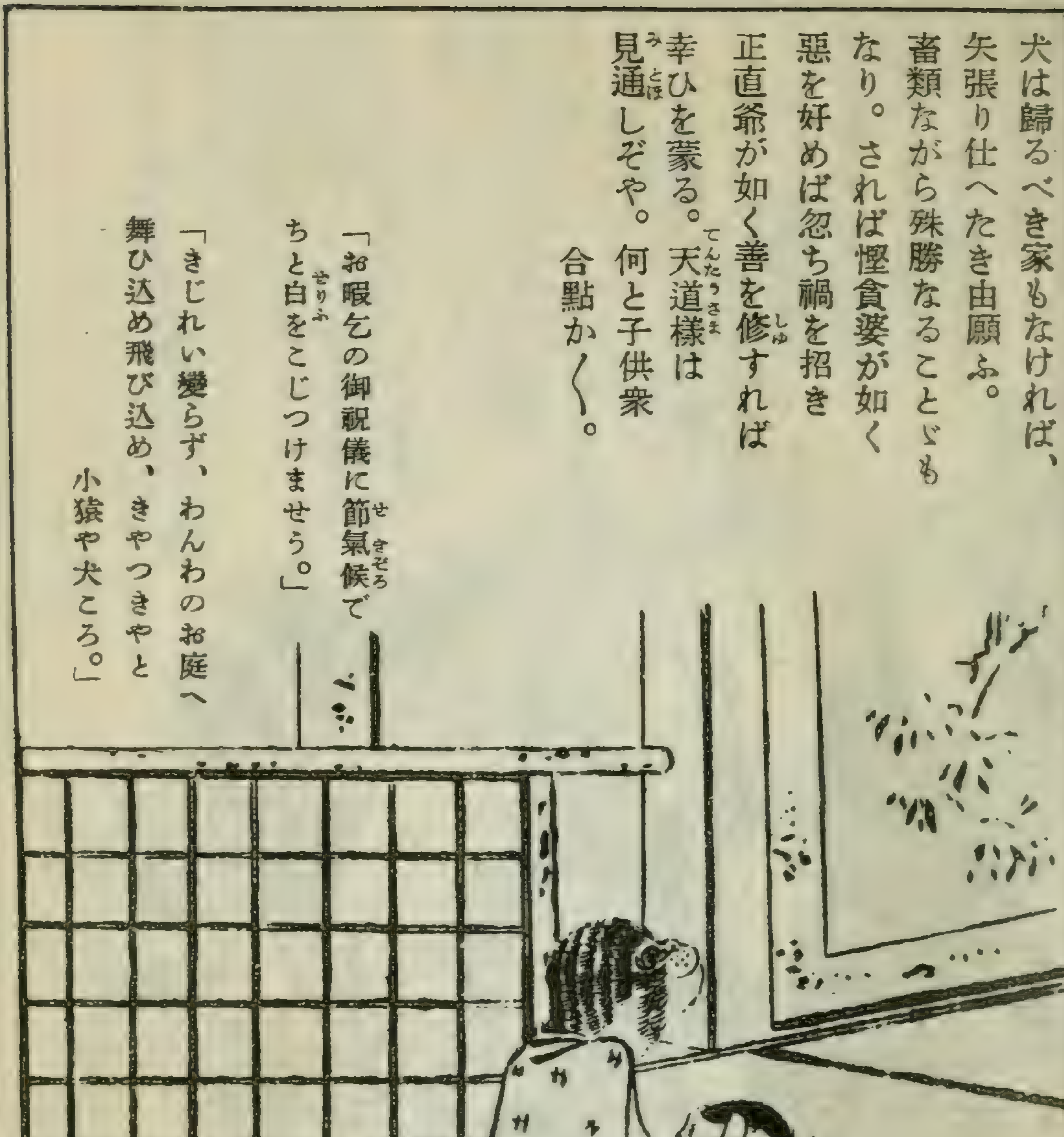
宇治拾遺に

今は昔女あり。雀の怪我したるを養ひて放ちければ恩を報ふため瓢の種を咥へ來る。その種を植ゑたるに、瓢多く出で來て皆内に白米あり。隣の女これを羨み、無理に雀に怪我させて養ひ放ちけるにぞ、此雀も瓢の種を咥へ來る。植ゑければ果して出で來にけり。さて瓢の内より毒虫多く出でゝ彼の女をいたく刺しける。此葛籠も彼の瓢より出でたる話なり。物羨みはせまじきものなり。



「德孤ならず必ず隣の婆に引かへ、正直夫婦は數の寶を授り、誠に生前の望足りて鳥屋商賣をやめ、いろは附けの倉を建てゝ、何暗からず暮しけるが、一體律氣一遍なる者故、昔の貧しきを忘れず、いよ〳〵慈悲善根を心がけて暮しける。さてこれまで飼置きたる生類殘らず放ちけるが中にも、猿と雉とは、これまでの恩を感じ、別れを惜しむ。




犬は歸るべき家もなければ、矢張り仕へたき由願ふ。畜類ながら殊勝なることどもなり。されば慳貪婆が如く惡を好めば忽ち禍を招き正直爺が如く善を修すれば幸ひを蒙る。天道様は見通しぞや。何と子供衆合點か〳〵。
「お暇乞の御祝儀に節氣候でちと白をこじつけませう。」
「きじれい變らず、わんわのお庭へ舞ひ込め飛び込め、きやつきやと小猿や犬ころ。」
「段々の御教訓有難う存じます。御夫婦の御恩は忘れませぬ。」
雉がいふ「地震の時は早速お知らせ申しませう。」

土も木も我が大君の國なれば、何處か鬼の宿と定めんと、紀伴雄が詠ぜしも理ぞかし。頭に角を戴き、虎の皮の褌はしめねども、道にそむける者は惡魔とも鬼ともなるべし。鬼界ケ島に鬼は無く、鬼は都に在るぞかしと、女護の島の文句も宜なり。

さても慳貪婆は、無理の慾をかはきしより、おのが心の鬼に摑まれて遂に鬼界ケ島の仲間入し、鬼の留守ゝには洗濯しておのれが心の垢を落すべき氣もつかず、ますく〜慾心增長して、兎角正直夫婦が



寶を得たる事を心憎く
思ひ、鬼の大王へ勸めて
正直爺が寶物を盜ませんと
工む、不敵なりける
穿鑿なり。

「そんなら何でも岩戸神樂の
くろどんと出かけずば
ならずの森の大天狗
ときんにとつての吉瑞だ。」

「何にも黑鬼する事はねえ、放下師の
小刀細工ではねえ、鋸 鉋 斧 鉞
のみ込山の墨壺だ。」

まづ前祝に四方の瀧水
をもめよう。」

「そいつは、ぶつちめ印と
せずばなるまい。」




慳貪婆は或闇の夜に
鬼共を伴ひ、勝手
覺えし我里なれば
案内して忍び入り、
隱笠、隱簔、打出の小槌に
錦の巻物及び金銀
米錢を奪ひ、
鬼ケ島へ立歸る、
不敵なりける
鬼どもなり。
「何でも六段目の切には
思ひ知らせてこまさうと
思うたに、てんとよい氣味〱。
思ひ知つたか、わん〱
〱〱」



慳貪婆は慾深き事ゆゑ、
まだ何ぞ寶あらんと
あとにひき殘りけるが
正直が手飼の犬に
食ひ殺さるゝぞ心地よき。
「慳貪婆、常に惡を好みし故、
煩惱の犬に食ひ殺さるゝ。
謹むべし恐るべし。
「後なる鬼に物問へば
鬼らは知らぬとつい通る。
「から風呂敷包を背負つた所は、
風の神の紙屑拾ひと見えようがや。」
「鬼の目にも闇だとは
このこつてあんべい。
暗いぞ／＼。」
「やれ逃げろ／＼。」
犬骨折つて寶とらるゝと申すは、此時よりぞ始りけり。
「あの犬は、大きなさまで吠えるわ／＼。
荒神様の吠えるわ／＼と來たわ。

正直夫婦は鬼に寶をとられ、昔の富貴引きかへて、今はもとの柴の庵に引込み、夫婦貧苦を淩ぎけるが、或日夫婦とろ〳〵とまどろみけるに、夢ともなく現ともなく、實方朝臣現はれ給ひ、爾不幸にして禍を受く、われ等爾に桃を乞ひて飢を淩ぎたり、その恩を報ゆるため明日その桃を返すべし、その桃を喰ふ時は夫婦忽ち若やぎ、孝行にしてしかも力量人に勝れたる一子をもつべし。その子必ず爾等が爲に鬼ケ島に至り、寶をとり返して仇を報ゆ。又夫婦が憐みたる猿、雉、犬、共に力を添へて恩を報ゆべし。再びかく貧しくなるとも、




天道如何ぞ爾等が正直を感じ給はざらんや。陰徳あれば陽報あり、積善の家には必ず餘慶あり爾等が末には又大富貴の身となるべし。ゆめゆめ疑ふ事勿れと告げ給ひ、數萬の雀と化して飛び去り給ふ。
「とひよ〳〵とひよ正直起きよ正直。」
正直夫婦は、寢言にまで正直なことをいふ。「お婆や、人に借りたものは早く返して、貸したものは隨分おそくとりやれや。正直フウ〳〵。
正直フウ〳〵ゴウ〳〵。」


昔々あつたとさ。
爺は山へ草刈に、
婆は川へ洗濯に、
川より流れて來る
桃に、若やぐ夫婦
の中に儲けし
桃太郎は、子供衆
御存じの鬼ケ島、
犬猿雉が忠臣話、
忠は雀の音に殘り、
桃の中なる實方に、みゝをとつたる花の春、
お子様方のお睡氣覺し、
やんら目出度の市が榮えた。
「やれ〱大きな桃が流れて
來申した。も一つ流れたら
お爺におましよ。」
春朗畫
京傳作

十四傾城腹之内

全交作
重政書

腹に心肝の父母あり。惣領の腎六、水をへらす則ば、肺は頤で追はれ、脾は虚空に高ぶる。十四傾情、此虚に乗ぜば、手のある奴に、足を付け各算用算談有。手の三年は年一ぱい。足の算用三里の灸、手管にはめたる、大妙傾、足の小陰、大淫婦、手の能ない釘の折、足の能ない大生酔手の小便病目にぬり足の大用雪隠壺、どつ經さつ經、おう浮雲、ヱイやらやつと追止めた。何を留めた、筆を留めたと爾云。

癸丑陬

芝全交

眞向になつて嘘言を吐く圖

おやばからしい　どうしんせう



後向の尻を抱いては誤る圖

しやくがいたうおす　うしろをむきんしやう



すべて傾城花魁（けいせいおいらん）の言葉に、ほんにわたしが胸の内を主（ぬし）に割つて見せたうおつす、わつちが心意氣はさうぢやァおつせん、心が見せたいのう、といつて腹を割つて見せた所が、心といふものは心の臓なり。上（うは）べと心はとんだ違ひ斯くのごとし。

「ほんにわたしがこれ程に思つて居（ゐ）んすものを、つれない事を仰（おつせ）んす。」

「好かねえ客人だけれど、爲になる人だから、まづ斯（か）う泣いて置いて初午でもくゝしつけねばならぬ、ア、可笑しい、アハ、〳〵〳〵ハ、。」



「さういふ心とは露知らず。」

「こんな野暮な挨拶をする客は、尻の毛まで抜かれる。」

「聞きなんし、隣に居る客人が、お前を切れて了へ。さうしたら、女房にせうといひやしたわな、」

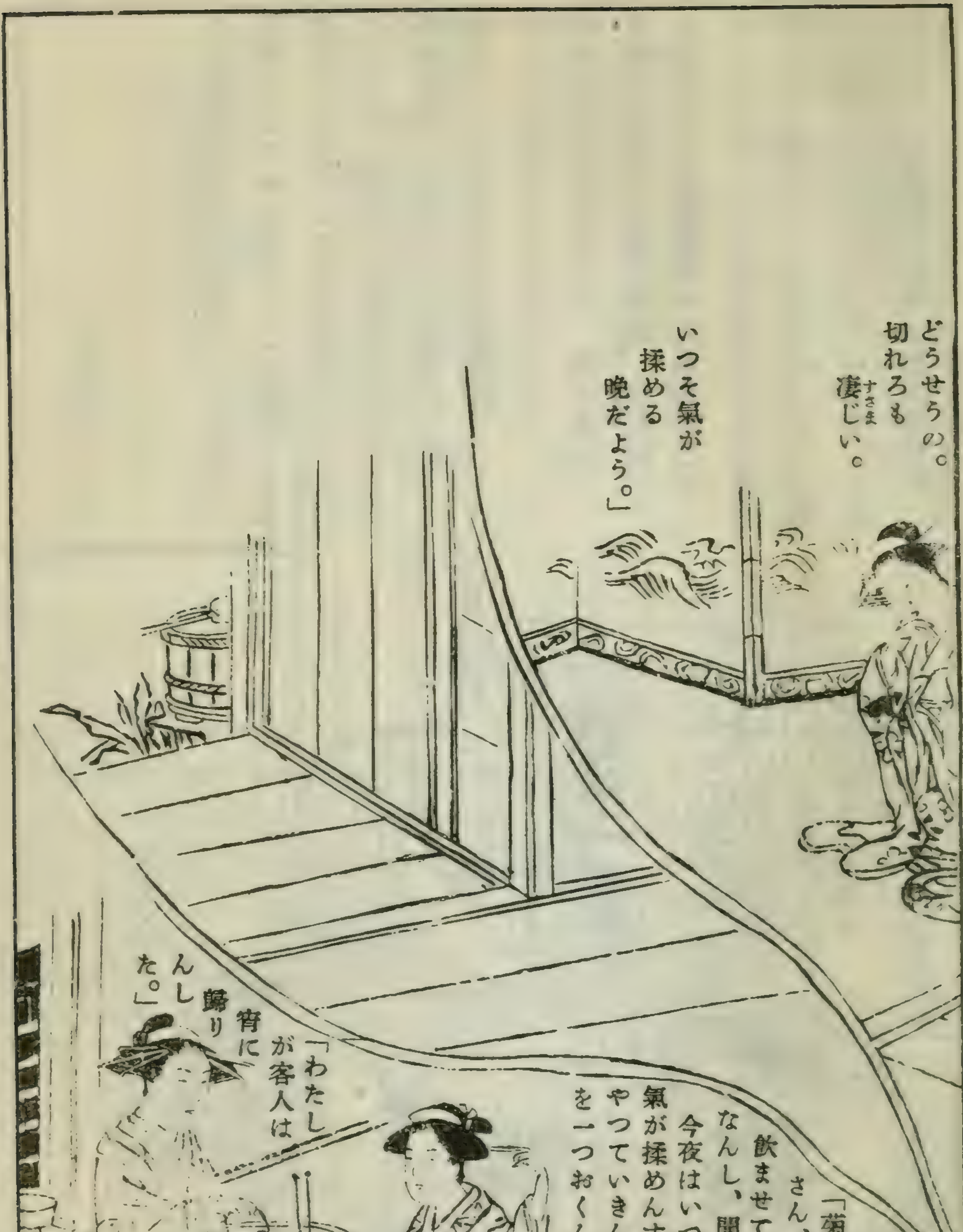
「これアノ子や、手前のう、よし綾さんの所へ行つてのう、わつちが申しんす、どうぞお前さんの下着をちよつと貸しておくんなんしといつて借りて來やそつといひやよ、エ、」

「此子は返辭をしやしな好かねえ子だよ。」

心といふ物はとんだ氣の多い物にて、客の三四人も落ち合つた晩などはどうも忙しくて心が轉々（てん〳〵）してならず、心がいつそ揉めるから、あくる日火（ひ）熨斗（のし）をかけて皺を延ばす、これを氣伸（きのば）しといふ。氣の伸びる時は手足も伸びをして、アヽ昨夕（ゆうべ）は草臥（くたび）れんしたなどといふ。

「心の臓（しんざう）は色赤く火に象（かたど）る、西瓜の看板行燈の如し。」

心之臓


どうせうの。切れろも凄じい。
いつそ氣が揉める晩だよう。」
「心の臓と書いておかぬと、蕪と間違ひます。
「菊浦さん、一つ飲ませておくんなんし、聞きなんし今夜はいつそ惡く落ち合つて氣が揉めんす。此茶碗でぐつとやつていきんせう。何ぞその肴を一つおくんなんし。」
「わたしが客人は宵に歸りんした。」

心の臟の次は肝の臟なり。肝の臟は形青くして木に象る。心の臟は腹の內の親玉にて惣先生なり、そこで肝の臟は心の臟の召仕にて萬事萬端、腹の內の事は皆肝の臟の承りにて、腹の中の番頭なり。そこで朝晩三度の食事の出入、今日は茶を何杯飲んだ、酒が幾度、小便が何度、大便が幾度、噫が幾つ、あひの物には薩摩芋が二本に大ころはしが三本、肝が幾つ潰れて芋を幾つ食つた、鼻頭がぐわんといつて、日の中へ蝿子が飛び込んだといふ事まで帳につけ、毎晩體が寢ると出入算用を



するから、腹の内の手合は皆肝の臓が支配にて大抵いそがしい事ではなし。これ皆心の臓への奉公なれば、ほんの肝臓あつて銭足らずの方なり。

「脾胃袋は延命小袋といふ氣取にて、何か金持の風をしておとなしい身をしたがる。」

「癪の虫は眞黒にて黒坊のやうなり。腹の蟲は眞白にて、蚯蚓の潤けたやうなものにて、年中ぐなりしやなりと怠けて居て、何ぞといふと、よくかぶる男なり。

「昨夜はもし親方、わし等は大きにかぶりやした、大根卸に生醤油をかけたやつを食はしつたから大當さ、今日もちとかぶりたい、など〻兎角強請りたがる。



肝の臓のつぎは腎の臓なり、
腎の臓は形黒くして水なり。
それ故、水舟そのほか容物小鉢
何でも水のはいりさうなものへは、
やたらに水を汲み込ませ、體の中へ潤ひを
つけて居る水屋なり。しかも肝の臓とは
直に隣合せにて、
別して懇、親類同然なり。
隨分水を減らさぬやうに商賣大切に
して居れども、強く心勞苦勞でもある
時や、また、とんだ事で氣を
揉んだり、不養生な事があると、
算用の外の水が減るなり。
或時一夜のうちに腎の臓が所の水、餘程
減りける故、大きに驚き、肝の臓、
脾胃袋をよび相談する。




「肝の臟様は御隣家(りんか)と申し一つお腹の事なれば、早速お届け申します昨晩旦那心の臟様から何の御届けも御座らぬに、どういたしたか、此通り水が減りまして御座る。
「腎ざらな事ではない。」
「膽玉にこたへると申せば、とれ程の
水の減りでは是非こたへがある筈でござるが、どうもこれもみづものだ、知れないもんだ。」

ほんの事か、嘘の事か知らねども、女の心の臟は形女なり、男の心の臟は男なり。心の臟はちと內證にて水をつかはねばならぬ事ありしが、五臟どもへもいひつけず、內々にてこれ程の事を隱して遣はるゝを、よもや知れまいと思ひの外、腎の臟がかたの水の減り樣露顯に及びければ、家來ながらもあとの四臟共が貶むところ、はつと思つて膽を潰すと、直に膽玉にこたへ、膽が平たくなつて半分つぶれる。



心の臓はあとの四臓共がつもる所もはづかしきとて、大きに心労して居る所に、悪い時には悪い事ばつかり來るものにて、折ふし暮の事なりしが、暮の仕舞、正月の紋日、あと着の着物の當までも、誰さんにはこれ程、かれさんには斯うと當にした所が一時に變更の文が來たれば、今度こそは膽がほんとうに皆潰れ、何處から來るとなしに、杵や棒が胸より湧き出し、胸の中は八人搗をしける故、心の臓が上の方へくつと吊し上り、てんてこ舞をぞはじめける。「これ、天手古舞のはじめなり、餘り見ずとよいものなり。」



「胸がどき／＼躍つて八人搗をしける故、肝の臓へ響き、肝の臓は地震の搖るやうに怖がつて動きえゝず。」

客人から斷りの文が來て、胸が八人搗をして躍り、はつと思つて膽を潰せし故、自體半分潰れかゝつて居た所へ、今度はほんとうにまるで潰し、今まで膽の太いのが、俄かに細くなつて痩せ衰へ、みしや〳〵と平たくなつて潰れ、大きに煩ふ。膽といふものは、肝の臟の脇について居て、肝の臟の厄介者なれば、いろ〳〵看病をしていたはる。

「から潰れきりになつては、男が立たず、腰が立たねえ。これでは當前の膽よりぢぎりの膽が潰れる。」

「わたしがなりは赤蛙を見るやうだ。」



「それは赤蛙といふもんではない。それは膽がでんぐりかいる、色が青かいる、どうか風でもひきがいるといふもんだ。」

胸がどき〳〵躍つて膽を潰すや否や、癪の蟲は、常々人の惡き奴なれば、こゝぞ幸ひと胸前へぐつとさし込み、板のやうに突張つて、花魁を苦しませける故、早速虎屋の解毒黑丸子、金龍丸、陀羅助まで飮みければ、流石の蟲も苦しがり、あつちへ潜りこつちへ潜り痛ませけるが、銀鍼金鍼の鍼を四五本うちこまれ、げつぷけつぷと下りしは目覺しかりける次第なり。

「何故これが目覺しいか、どうも氣が知れず。

「腹の虫は臆病者にて、癪の虫が折檻にあふを見て虫を殺して小さくなり、ぐうの音も出ずにじつとしてゐる。

「丸藥の降る所は、氣の短い人が碁をうつやうなり。

「丸藥粉藥、咽喉のあなより雨霰と降り下る。



心の臓
今度の事にて愈心労して、
大病となりける故、今は
心の臓も氣の毒に思ひ、女房をみる
やうに、家來乍らも介抱してやる。
「又心の臓に小さくついて居る臓に
あたらしきといふ新の字を書きて
新ざうといふざうあり
これ心の臓のゝ字を抜きたる
ものにて歳を經て心のざうとなると、
ど(こ)のか十四經にあれど、これは餘り
杜撰にして採るにも足らず。それでもさう
書いてあるから、爰に出す、決して
作者の刹那屁で、臭き事には非ず。




「うと〳〵と、こんな大きな夢が、何處から出るかいたはしい、夢は五臓の煩といへるに違ひなく、心の臓うつら〳〵と氣の減るやうな夢ばかり見る。大きな沼より姑慈の泥棒出でゝ腎の臓を剝ぎて水を皆絞りとる。
「いや、じんざうに渡せ、エヽ、心こゝにあらざれば視れども夢なり、食へどもその譯合を知らず、どうだえ引
何か一向わからぬ洒落をいふ。こゝが夢なり。
「脾胃肝の二臓曰く、「成程これは大きな夢が咽喉から出た、もちつと大く見るとおいらは居所がねえ。」
「みづからが胸の内を推量してたも。」
「病人の寝て居る内は顎で蠅を追はずに居るから側で新ざう團扇で蠅を追つてやるなり。」
「それはいゝ〳〵それはいゝ〳〵はいではない馬を追ふやうだ。」

腎の臟は水が殘らず減りきりて、日々顔色痩せ衰へければ、今は腹の中にて虚空に火が亢り、腹中を氣負ひ廻り、五臟六腑を熱くさせて喧嘩をしかけ、やけのやん八といふ惡者となり、腹中が困りはてる。



酒の好きな者の腹の脾胃袋の脇に酒が五升も三升もはいる徳利のやうなものがあつて、それへ皆はいつて了ふといふに違ひなし。花魁の腹の中に飴色の徳利がありて、晝夜飲む酒がこれへ皆收まり、腹の中の酒屋のやうなものなり。膽玉は潰れてよりこの方、膽が細くなつて煩ひける故、色々療治せしが、酒を飲み飲みすれば、膽が太くなるものと聞いて、毎日徳利が店へ來て居酒を飲みければ、だん〳〵膽が太くなり、今では酒屋に借が出來ても、どうするもんだ、借金で首足はもげめえしなどゝ、いけしやア〳〵と膽が太くなつてゐる。



腎の臓の次は肺の臓なり。肺の臓は色白くして金に象る。しかも心の臓をとりまいて守る役なり、心の臓は此の肺の臓がうちの眞中に大きな面をして坐つて居て、人ばつかり使ふ奴なり。そこで肺の臓が商賣は萬事聲を發する役にて、淨瑠璃でも長唄でも、おちやつぴいでも、おしやべりでも、皆この肺の臓から出す事なれば、これは腹のうちでの藝者なり。そこで痰が起つても、咳を咳くのも、此の男が係なり。腎の臓が水が減りし故、肺の臓は無性にごほり〳〵と咳を咳いて、晝夜に痰が耳盥に半分程宛出でける故、商賣の淨瑠璃、長唄も語られず、稽古も休んで居た所へ、花魁の不養生、醫者殿が食ふなといはしつた茄子の生漬と里芋を隱して買ひにやつて食ひける故、大きに



痰に當り、痰は恐しく怒(おこ)つて暴(あば)れ出し、稽古所をぶち壊(こは)す。

「咽喉のあなより里芋と茄子の生漬(なまづけ)ばら〳〵落ちて痰の頭へ當り、痰は大きにせき込んで怒(おこ)る。

「蟲共は間々(あひだ〳〵)にぐう〳〵と唸りてみたがり、肺の臟が所へ河東節の稽古に來かゝりしが、痰がおこつて、淨瑠璃が出來ないと痰をなだめる。



火はだん〳〵腹のうちを亢りて歩き、後にはおへなく人が悪くなり、鐵火の如く活氣強く熱くなりし故、着た物を一枚脱ぎ二枚脱ぎ、だん〳〵脱いで、今は襦袢のやうな物一つ着て火焰の姿になり、酒徳利が店へ來て、酒を飲んでぶう〳〵をいふ。

「咽喉のあなのぐい〳〵蟲、これも徳利が店へ來て、あし無しの酒を飲みたがり、依怙地惡く强りたがる。



膽玉は毎日酒を飲んで、飛んだ膽が太くなり、火も段々亢りて、人が悪くなり、今はぐい／＼蟲、三人共に悪者となり、いひ合はせ、酒屋が頭に載せける大事の徳利をひつたくりて來り、三人酒を暴れ飲みにして腹中を暴れ歩く。今までは花魁が冷酒が好きで、徳利の中の酒は冷でばつかりありしが、火が頭にて燗をして飲むから當らず。

「おれも頭で燗をして酒ばつかり飲んで居てもつまらぬ。春から薬研堀の不動へ火焔奉公に住んで一年苦しむと、此借錢は抜けらア。」

「小さい子が月代を剃るやうだ、氣がつまる。此頃頭を干しておいたからよく燃える筈だ。」

「焦れつたい、早く頭を燃やさつせい。持病のぐい／＼が起つた。」



「もちつとさうして居やれ、後で手前の頭で茶を沸して貰ひたい。」

さて肺の臓の次は脾の臓なり。これは黄色にして土なり。即ち脾胃袋の事なり。されど脾の臓と胃の腑と二つ合せて脾胃(ひい)といふ。脾は一切の食物をこなす役、胃は食を受けとる役にて、朝晩の食物を皆(みんな)こゝへ入れてこなすから、腹の内の甘物屋(うまいものや)なり。夜々(よゝ)通り町(ちやう)へ出る屋臺店のやうなもの也。

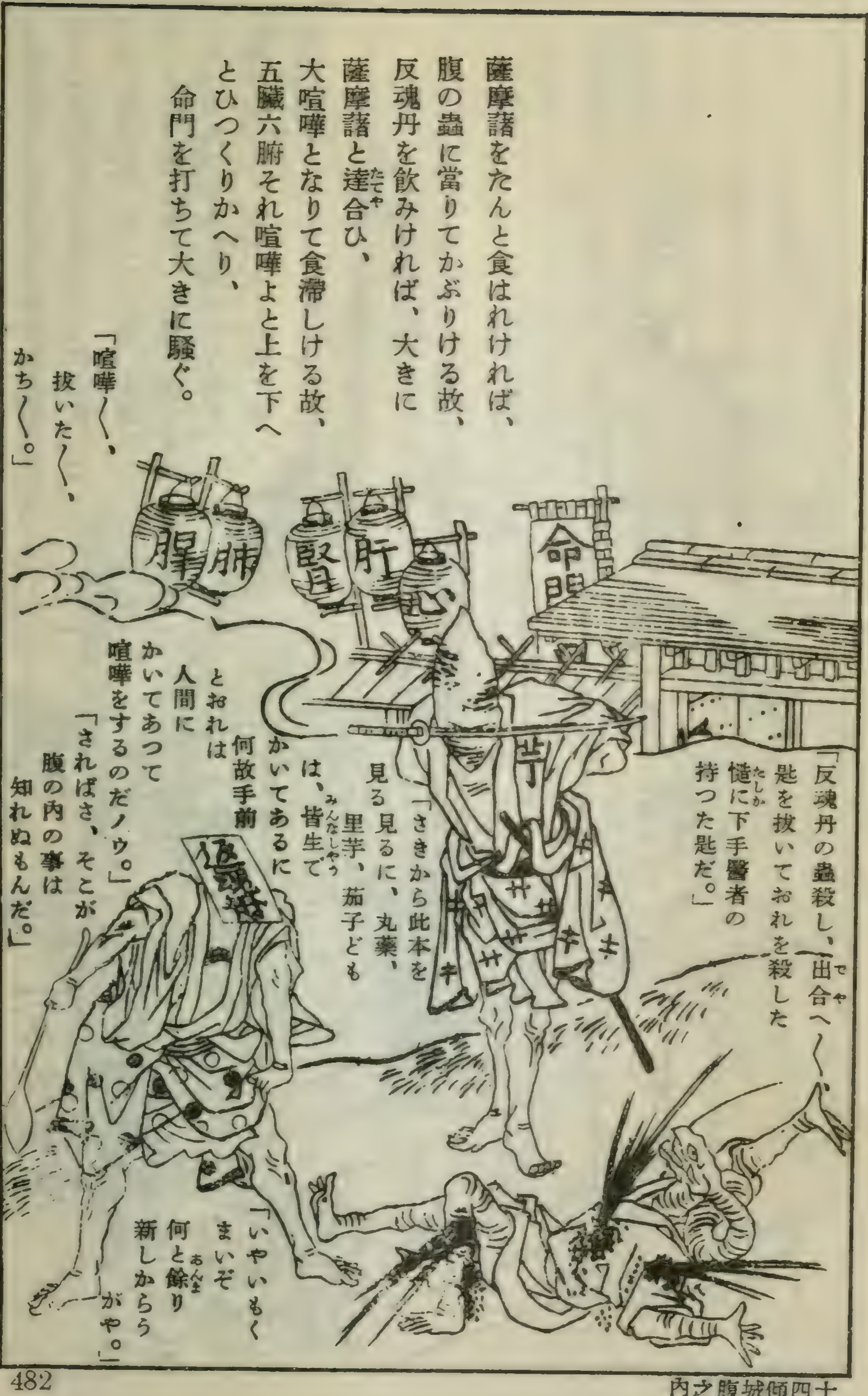
心の臓は快氣しけるが餘り食ひ込んだ故、脾胃袋が少しいたみ破れかゝりし故、心の臓氣の毒がる。

「あんまり破れの大きくならぬうちに、

心の臓脾胃袋の破れをこそくつてやる。」




「脾胃袋のうちの若い者脾藏胃藏の二人、毎日の食物を米を搗くやうにこなして大腸小腸の經（けい）へ渡してやる。大腸へ落つるは大便となり、小腸へ落つるは小便となりて下る。これ下り米を搗くやうなり。脾藏胃藏ひい〳〵〳〵といつて働く。今の世て切（せつ）ないのを、ひい〳〵といふのは此謂（いはれ）なり。
「これから梅干の種の丸呑（まるのみ）と蛸（たこ）の足を二本こなさねばならぬ。」
「昨日（きのふ）の團子は早くこなれたが、けふの――
牡丹餅は上（あが）りかねる。粳（うる）の混つたせいか。」
「おれが名も脾藏（ひざう）とは錢のねえ名だ。」



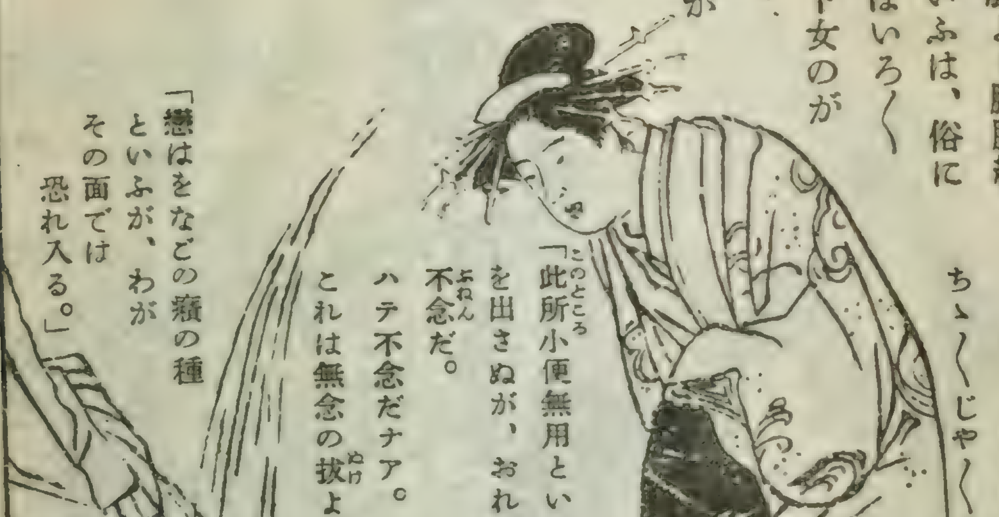
薩摩諸をたんと食はれければ、
腹の蟲に當りてかぶりける故、
反魂丹を飲みければ、大きに
薩摩諸と達合ひ、
大喧嘩となりて食滞しける故、
五臓六腑それ喧嘩よと上を下へ
とひつくりかへり、
命門を打ちて大きに騒ぐ。
「喧嘩〳〵、抜いた〳〵、かち〳〵。」
脾
肺
腎
肝
心
命門
「反魂丹の蟲殺し、出合へ〳〵、匙を抜いておれを殺した慥に下手醫者の持つた匙だ。」
「さきから此本を見る見るに、丸薬、里芋、茄子どもは、皆生でかいてあるに何故手前とおれは人間にかいてあつて喧嘩をするのだノウ。」
「さればさ、そこが腹の内の事は知れぬもんだ。」
「いやいもくまいぞ何と餘り新しからうがや。」

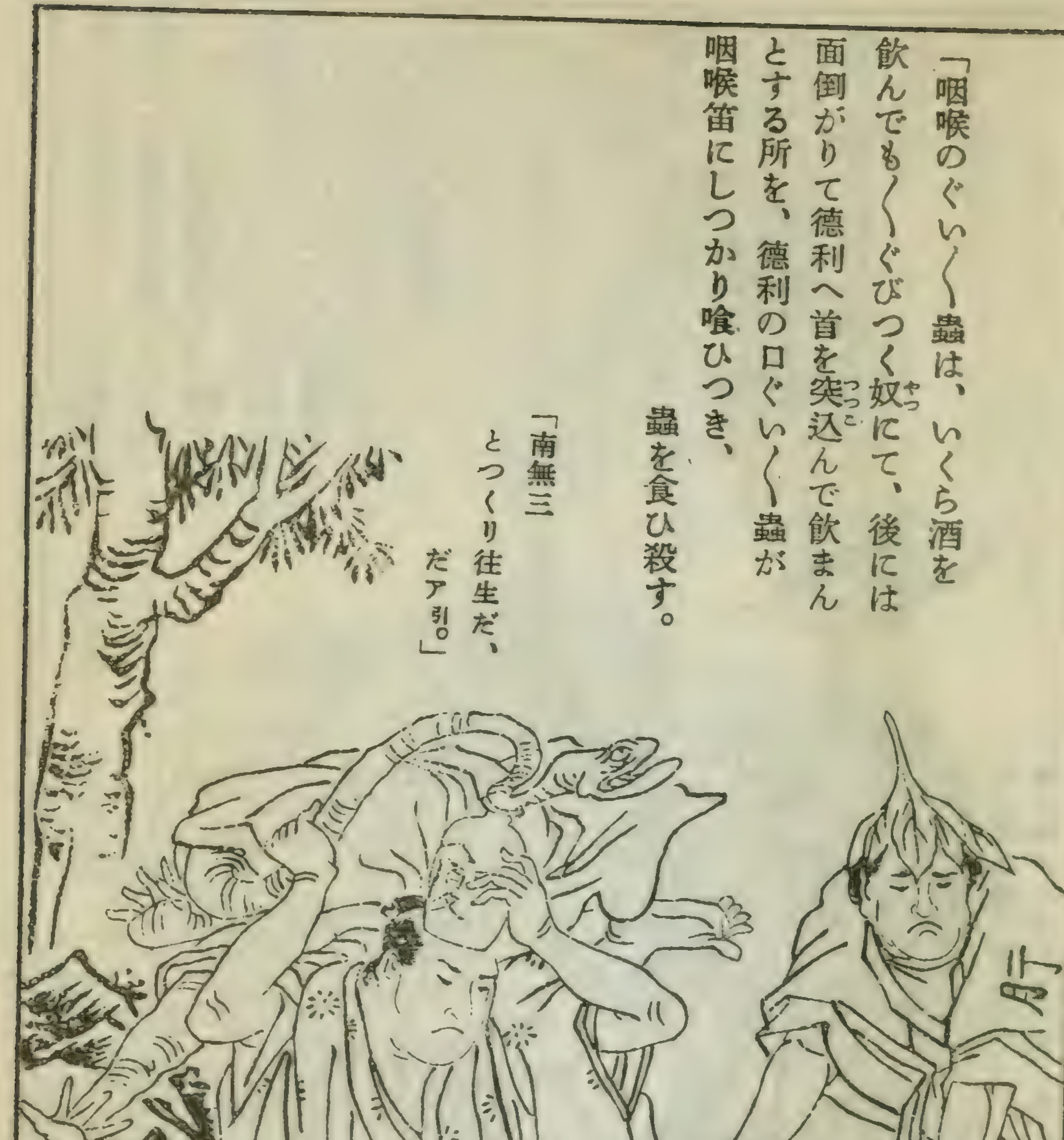
大腸經、小腸經は腹の中に隣合つて居るものにて、ぞくにいふ百尋の事なり。何か薩摩諸と反魂丹と達合つてより、無性に上げたり下したりしける故、咽喉のぐり〳〵の咽喉佛がだいなしに損じ、また下る方では大腸小腸の百尋が大小便の受持なれば、これも餘り下り過ぎて、百尋をだいなし惡くし、今は咽喉佛と百尋の療治最中なれば、大腸坊、小腸坊、咽喉佛、百尋の建立に歩く。



大便は大腸より大便道へ下り、小便は小腸より膀胱經に渡り、これより尿り下る。此膀胱經といふは、俗にいふ小便袋の事にて、殊に婦人の膀胱にはいろ〳〵あり、まづ花魁のは勤ぼう公、それから下女のが飯炊ぼう公、かゝアの出るのが姥ぼう公、ばアさんなんぞは雇ぼう公、娘の出るのが妾ぼう公、そこで小便組といふ事もなきにしも非ず。

「又菅の黒焼にしたのは、癪の虫の根を切るといふ事にて、肝の臓
菅笠の黒焼を持つて
癪の蟲を退治する。




「咽喉のぐい〳〵蟲は、いくら酒を飲んでも〳〵ぐびつく奴にて、後には面倒がりて徳利へ首を突込んで飲まんとする所を、徳利の口ぐい〳〵蟲が咽喉笛にしつかり喰ひつき、蟲を食ひ殺す。
「南無三とつくり往生だ、だア引。」
「徳利へ指を突込んで抜けねえとは違ふぞ。どうだ〳〵。」

腹の中に障子骨といふ高麗屋縞のやうな骨あり。菅笠の黒焼にて癪の蟲は消えけるが、どうしたか、そのかさの藥毒が殘り、障子骨の骨絡となりて、いくら引張つても、これがとれかね大きに難儀する。これ客人の置いて行きしかさにや、かさ當の所に膏藥を張つたあとがある。

「かさの骨絡になりし故、物言が鼻にひつかゝりて鼻の障子が下へ落ちる。鼻の障子は小さな障子にて火が亢つた時分、鼻の穴をだいなし燻らせける故眞黒く煤び破れて落ちる。



かさは骨絡みとなり、とれかねける故、上手な醫者にかゝり、五寳丹の下しを飲みければ、かさは皆粉々になりて、骨を離れ、大腸小腸が受持の孔より瀧の水の落ちるが如く下つてしまふ。鼻の障子もひとりでに鼻へはまり、舊の如くしやんとしたいゝ鼻となり残らず病の根を切りてしまふ。

「腹の中に土手のやうな所あり。それより瀧の落ちる如く病下る。俗にこれをどてつ腹といふ。

「膽玉は酒を飲みて、大きに太くなつて人が惡くなりし故、五臓共に大きに叱られ、小さくなつて、どてつ腹の脇に堅くなつてゐる。



十四經情その任脈の人柄によつて、蒟蒻の
田楽で酒を飲んでも大に督脈の附く事あり。
いはんやおまんまに於てをや。
一切の食つたり飲んだり納る所は
脾胃袋にして、まことに息災延命袋と
うやまふべきは脾胃袋也。殊に
花魁は勤のうちの堪忍袋、かたづいた
先でも始終お袋様と崇められ、金袋を
たんと持ちて、年々春袋を贈らば、
いかばかりめでたしと、何のこんな
糸瓜の皮の段袋な草雙紙なれど、
御子様方の御贔屓を以て
袋入の本ともならば
　版元鶴屋が大仕合
めでたう一つ打ませう。




山東京傳作
後日話
金々先生造化夢
通油町
蔦屋版

自叙

李紳農を憫む詩に曰く『禾を鋤いて日午に當る。汗は滴る禾下の土。誰か知る盤中の飧。粒々皆辛苦。』と、宜なる哉、盤中の飧とは、一膳の水漬の飯といふことなり。米一粒布一寸といふとも何ぞ謾に用ゐんや。その恩須彌よりも高し。況や衣食器財屋室、人間一生日用の萬物を製し出すこと、幾萬人の辛苦を負ひけん。量り盡しがたし。是に於いて、偶李紳が詩を感ずるのあまり、三巻の稗史小説を作り、その大意を書して序となす而已。

寛政六甲寅孟陬

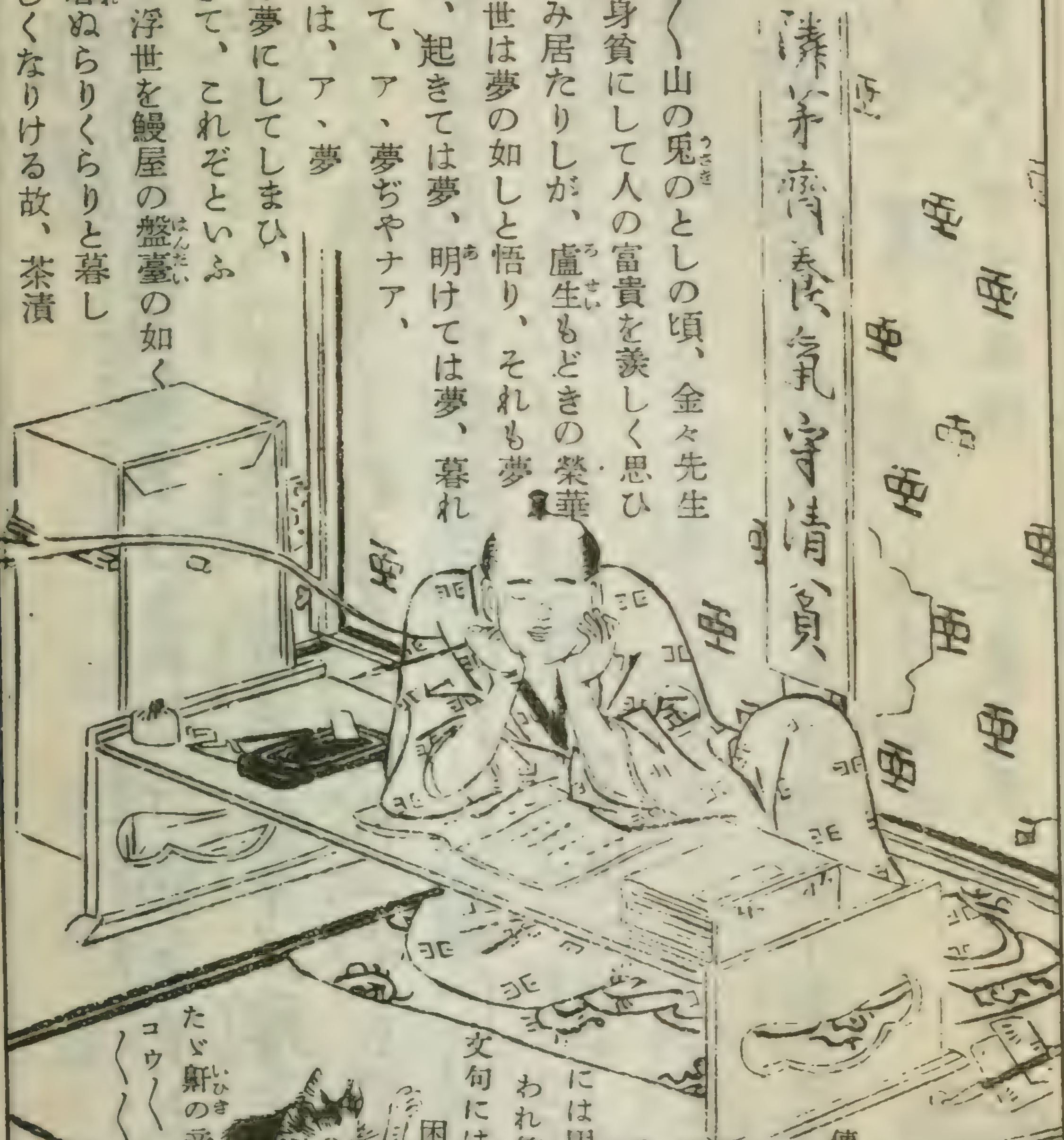
山東京傳題

自叙

李紳憫農詩曰。鋤禾日當午。汗滴禾下土。誰知盤中飧粒々皆辛苦。と宜哉盤中の飧とハ一膳の水漬の飯といふとも米一粒布一寸といふとも何ぞ謾に用んや其恩須弥よりも高し况衣食器財屋室人間一生日用の萬物を製し出すまでる。幾萬人の辛苦を費さん量がたし。是偶李紳が詩を感ずるのあまり三巻の稗史小説を作り其大意を書して序とかすと而已

寛政六甲寅孟陬　山東京傳題

昔々赤本元年、かち〱山の兎のとしの頃、金々先生といふ者あり。その身貧にして人の富貴を羨しく思ひあけ暮此事をのみ悔み居たりしが、盧生もどきの榮華の夢を見てより、浮世は夢の如しと悟り、それも夢これも夢、寝ては夢、起きては夢、明けては夢、暮れては夢、牡丹餅を見て、ア、夢ぢやナア、茄子の香の物を見ては、ア、夢ぢやナアと何もかも夢にしてしまひ、あまり物を悟り過ぎて、これぞといふ商賣も渡世もせず、浮世を鰻屋の盤臺の如く見なして、たゞ明暮ぬらりくらりと暮しけるが、或時ひもじくなりける故、茶漬





を一膳してやらんと、手づから煮花を仕かけ、その茶の出來るうち、とろとろとやらかしける。

「お前のお姿は唐兒の胴へ練供養の稚兒の首をすげたやうだ。」

「そちが鼻は南京おとしの出來損ひときてる。」

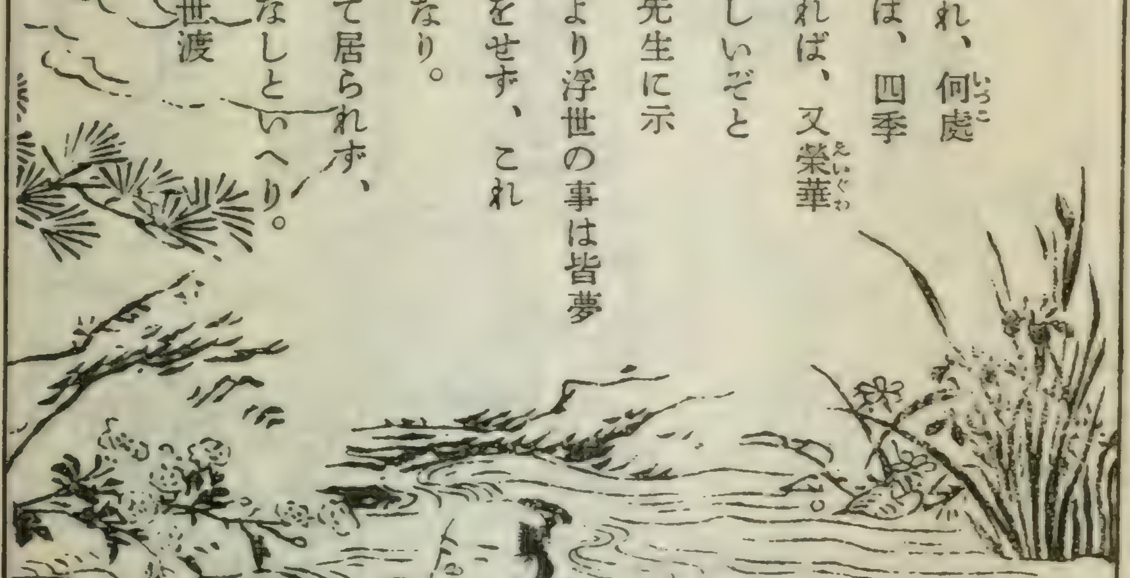
「こゝまで御座れ、甘酒進上。」

金々先生の夢の見やう、飴細工の鶯の尻尾の如し。

「小人閑居して不善をなし、貧人閑居して手せんをなすとは、まさにこれ此事ならん。」

此外にもし寝言の文句御案じ御座候はゞ、御知らせ下さるべく候。早速書き入れ申候。

金々先生夢の中に一人の童子に誘はれ、何處ともわかぬ深山に來り、と見てあれば、四季の草花咲き亂れ、異香四方に薫じければ、又榮華の夢の二番目ではないか、ちと欝陶しいぞと思ふ折柄、一人の仙人現はれ、金々先生に示して曰く、「汝さきに榮華の夢を見てより浮世の事は皆夢なりと悟り、これといふ世渡りの業をせず、これ大のいき過にて、悟らぬ時には劣りなり。なんぼ悟つても飯を食はねば、生きて居られず、すでに古語にも恒の產なきは恒の心なしといへり。吉田の兼好も、みづから蓆を織りて世渡とせしなり。まづしばらく此山に逗留すべし。汝が生悟りのあやまち



みづから合點ゆくべし。」と仙人長口上のうち、金々先生はひだるくてどうもならず。「どうぞ御茶漬をさらさらとやらかしてからお示しをうけましたう御座います。」とぞ申しける。

仙人曰く

「汝飢に臨みたるよし、何ぞ食物を與ふべなれど、仙人は玉の屑を食ひ、霞や霧を飲んで食物となす故、人間に食はする物なし。暫く待て、おしつけ茶漬を振舞ふべし。」と

さてさて仙人は氣の長き者なり。

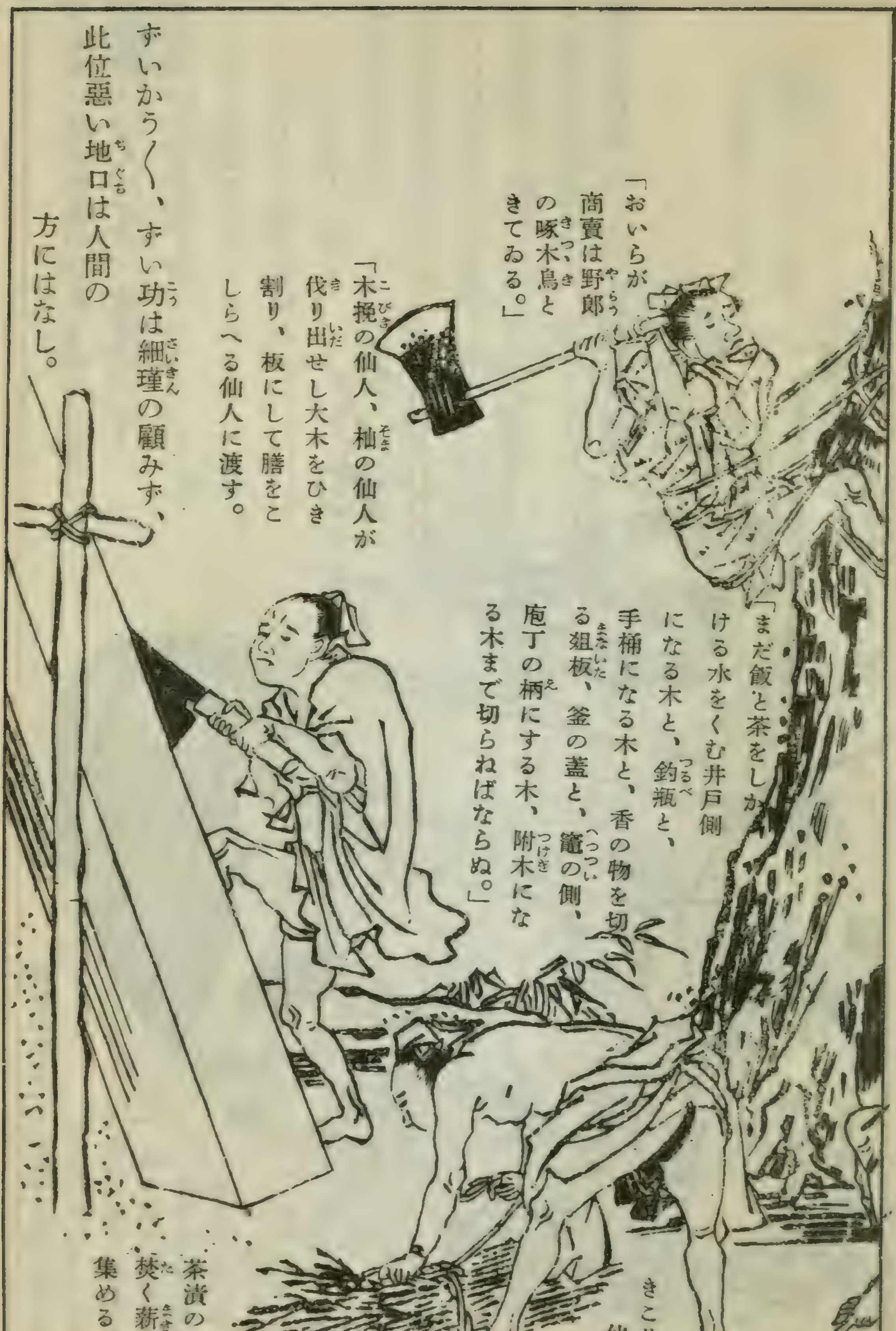
金々先生が腹の加減思ひやられてあはれなり。



かくてかの仙人のお頭、多くの木の葉仙人に申しつけ　金々先生に食はする茶漬飯の支度をする。泥棒を見つけて繩を綯ふよりもちつとじれつてえよウと申す次第なり。

仙人のお頭、金々先生を同道して此態を見せる。




「おいらが商賣は野郎の啄木鳥ときてゐる。」
「まだ飯と茶をしかける水をくむ井戸側になる木と、釣瓶と、手桶になる木と、香の物を切る俎板、釜の蓋と、竃の側、庖丁の柄にする木、附木になる木まで切らねばならぬ。」
「木挽の仙人、杣の仙人が伐り出せし大木をひき割り、板にして膳をこしらへる仙人に渡す。」
ずいかう〳〵、ずい功は細瑾の顧みず、此位惡い地口は人間の方にはなし。
きこりの仙人、
茶漬の飯を焚く薪を集める。

木地屋の仙人茶漬の膳の下地をこしらへて塗師屋の仙人に渡す。塗師屋の仙人漆屋の仙人より漆を買ひとりてかの膳を春慶に塗る。これにもまだ春慶下地の梔子を山からとつて出す仙人もあり、塗師屋の仙人の使ふ刷毛をこしらへる仙人もあり。そのさきざきを悉しく探せば幾萬人の辛苦か、數へ盡し難し。

「早く仕事をしまつて、熱燗を一杯せしめ漆と出かけたい。」



「漆屋の仙人は、茶漬の膳へ塗る漆をこしらへる。これも山から漆を採り來り、漆の仙人の手へ渡るまでには、多くの仙人の手にかゝる事なり。その辛苦述べ盡し難し。

「ヲツト盲仙人杖の方〳〵、これで今日も五度尻を突つかれる。漆屋は白澤と比目魚がうらやましい。背中に目があるから。」

「盲仙人得て漆屋の尻を

箸屋の仙人、茶漬飯を食ふ箸をこしらへる。此箸屋の仙人、懐中箸の如く短き氣にて、角箸の轉んだ事にも腹を立ち、引裂箸の夫婦喧嘩、雜煮箸の太印など〻人をば雜箸の如く追ひつかひ、杉箸のあげ下しに、やかましき仙人なり。

「道通りの女仙人、中にはつがもなく上代物あり。これ等も不用の人に非ず、かやうな美しき仙女を天から見▲



▲下して通りすがいにも此様な骨を折る職人の目を悦ばせ給ふなり。

つゝつくものなり。

焼物師の仙人、茶漬の茶碗と香の物の鉢と
手塩皿と、茶を煮る土瓶をこしらへる。これ
も土拵から薬の下地、びいどろを粉にして
薬をかける、その辛苦
いふに言葉なし。

金々先生ちひさい児が竈へ薩摩諸
を燻べて置いたやうに、早く〱
とついて居てせがむ。はて、かう
ひもじくては茶碗も絲瓜も
いるものか、早く頼む、頼む。
腹の皮がびいどろのぽこぽん
の尻を見るやうに
へこ〱〱するわな。



「さて〱人間といふ者は氣の短い
者だ。もう二三百年たつたら茶漬
を食ふやうにならう、もちつとだ。
耐へさつせえ。」

「丁稚の仙人お茶を
汲む、茶腹も一時
だ、お茶をあがれ。」

鍛冶屋の仙人は、金々先生に食はする茶漬の菜の香の物を切る庖丁、或は火箸、七輪の網などをこしらへる。これも鑛山から鐵を掘り出し、鍛冶屋の手へ渡るまでの辛苦をいはゞ、いかばかりなるか、はかり知り難し。

鍛冶屋の丁稚仙人は早く仕事をしまつて、屋臺見世をそゝり、眞鍮の薩摩諸、鉛の葡萄に銅の蜜柑、鐵の銅鑼燒をしてやらんと、それぞれの望みは仙人も人間も同じことなり。





百姓の仙人は茶漬飯の菜になる香の物の
大根を作らんと、まづ大根の種を播く。
この種を播くまでにも、畑をうない、肥料
をかけ、大根になるまでの辛苦は更に譬へ難し。
又茶摘の仙女は茶漬の煮花になる茶を摘む。これも
茶になるまでの辛苦いかばかりか知れず。
「茶摘の女中に見とれつゝ思はず茶の木に抱きついた。
粗忽な人さんぢや。チンツチヤンチヤンチヤンなどゝ、
茶摘の仙女豪勢に浮く。
「早くこつち
へ喜撰法師、
わが庵は都
「種から大根を
とらやア〳〵、
なむから堪能と
人間に聞えれば
いゝが。」


の茶摘しか
ぞすむよう
うぢ〱と
埒のあかぬ
子だぞ、
しれつてえ
ぞよう。」
「おさかさん、
見物の散つ
た豆蔵(まめぞう)を見
るやうに、
笊(ざる)を持つて
まご〱し
なさんな。」

金々先生に食はすべき茶漬の道具、まづ大抵揃ひけれども、まだ第一の米がなければ、百姓の仙人まづ田へ種をおろす。これ米を作る幕開の序開なり。

「仙人の親方金々先生を伴ひ、この態を見せる。

「此種播はすぎし頃と百姓が河東節でもあるまい。」

「あれが貴様に食はせる茶漬の飯になるのだ。」

金々先生曰く、

「最早わたくしもお前方の氣の長さには呆れかへつて腹が減り通して、もう平氣でござります。しかしまだひもじい氣の所爲



「仙人の親方には魚樂が紋のやうなしるしをつけておかねば、たゞの仙人と間違ふ奴さ。」

かして、わたしが眼にはお前の衣が木の葉煎餅のやうに見えます。」

それより女房仙人、かゝあ仙人、よめ仙人ばゞア仙人うちまじり田を植ゑる。これまでの辛苦なか〳〵筆紙に述べ難し。

俳諧師超波といへるが句に

『早乙女の夜も揃うて鼾かな』

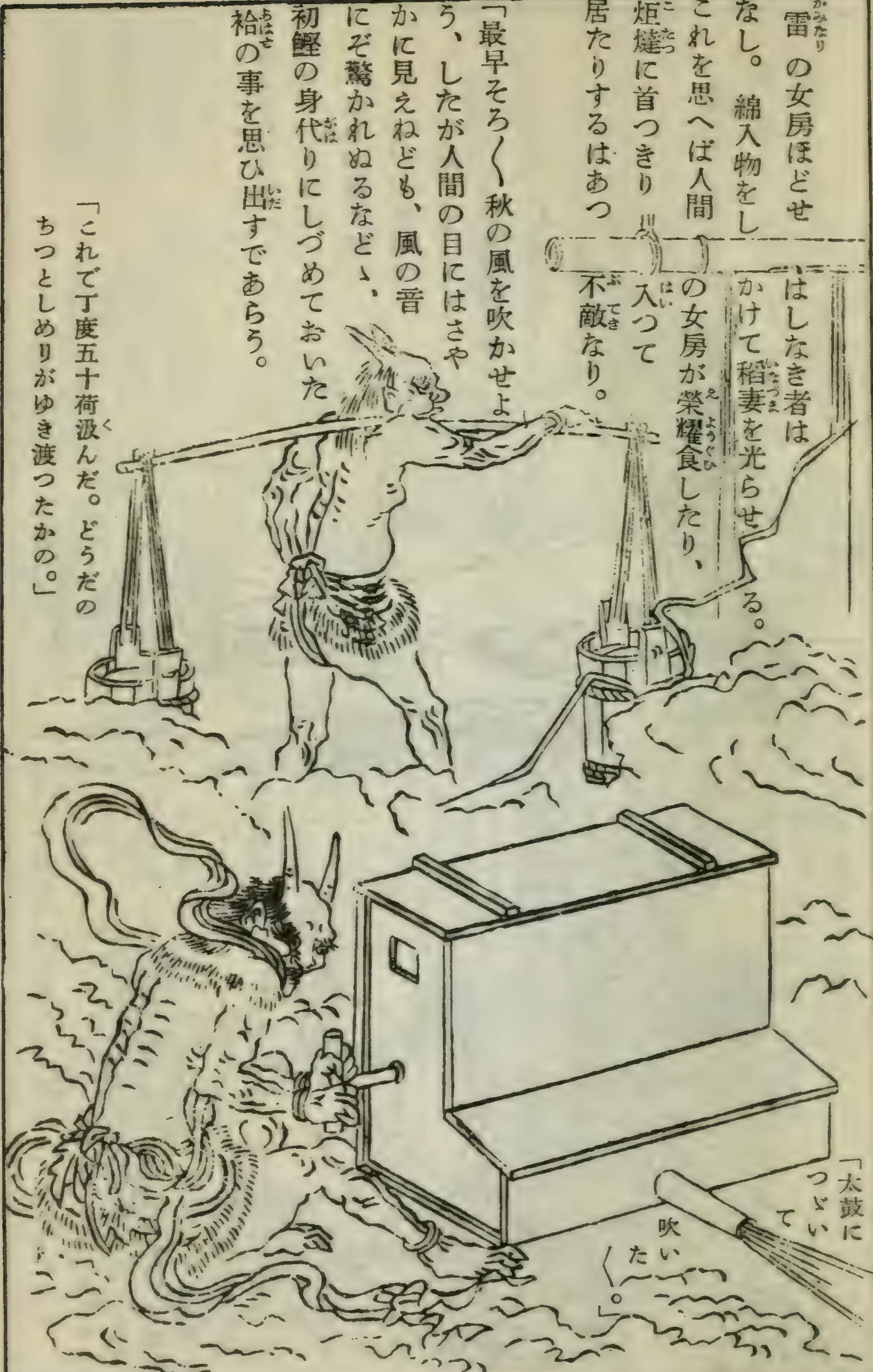
といへるも、晝のくたびれし様見えて、まことにその辛苦思ひやらるゝなり。




百姓の仙人、稲を植ゑつけ、だん／＼育つに從ひ、天竺にても、雷、風の神、十日五日の風を吹かせて、その雨稲に實を入れんと骨を折る。これ皆金々先生に食はするたゞ一膳の茶漬飯のために、天竺までが大騒ぎ、その辛苦またいかならんや。
これは雨を降らせる仕掛なり。
斯う叮嚀にかいておかねえと、しめ縄とみる奴さ。
「わたしが身なりは俊寛のおやすときて居やす。」

雷(かみなり)の女房ほどせはしなき者はなし。綿入物をしかけて稲妻(いなづま)を光らせる。これを思へば人間の女房が栄耀食(えいようぐひ)したり、炬燵(こたつ)に首つきり入(はい)つて居たりするはあつ不敵(ぶてき)なり。

「最早そろ〳〵秋の風を吹かせよう、したが人間の目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬるなど〻、初鰹の身代(がは)りにしづめておいた袷(あはせ)の事を思ひ出(いだ)すであらう。





地の下は濕氣が多いから朔日、十五日、二十八日には蒼朮を焚くなり。それだから地神達は朔日、十五日の禮こもさうじ一つの御祝儀申し上げますといふ。
天竺でばかり骨を折るかと思へば、地の下にても地神といふものありて、多くの手下の地神を集め、稻に花を咲かせたり、實をいらせたりするからくりの絲をひき給ふ。
「此所竹田の芝居の絲の下の如し、どこぞの達磨の地口のやうだ。」
「まづ早稻の絲か(ら)さきへひきやれ。」
これ又金々先生に食はする茶漬飯の爲にかく辛苦し給ふなり。されば、かゝる天地の恩を仇に思ふ者は、目前に罰も當る筈なり。

天地の恵みにて稲に實いりければ、百姓の仙人これを苅りとりて、籾を臼でひいたり、連枷で打つたり、何やかやして、やう〳〵米になるこれまでの辛苦いかばかりならんや。よく〳〵考へ思ふべきなり。

「金々先生在所へなりのぼりに行つたやうに、此態を見て出來秋の實いりをほめる。

田舎育の仙女、錫むねの柘植の櫛に銀流しのかんざし、手織木綿の柳に蹴鞠、ぐつとはづんだ出立と見える。



「連枷を打つはいゝが、もの前にぶさをうたぬやうに精出したがいゝ。」

汐汲の仙女は、かの茶漬飯の菜になる香の物を漬ける鹽を汲む。此汐汲といふもの、踊や狂言で見ては松風村雨などとて至極楽さうに見ゆれども、正寫しの汐汲は殊の外骨の折れるものにて、鹽になるまでは、なまやさしき事にあらず。その辛苦憐れむべし。

「昔は村雨だの、松風だのとて、駄菓子屋の代物を見るやうな、きいた風な名をつけて高慢な顔したと聞いたが、なんとしてこち等がやうな美しい鹽汲があるものか、今時行平さんが居さんしよなら、あつちから据膳で御座んせうなど〻、▲



▲汐汲だけつがもなくしほやをいふ。

百姓の仙人辛苦して香の物にする大根を作り、汐汲の仙女鹽をこしらへて渡しければ、糠屋の仙人糠を賣りに來たり、樽買ひの仙人樽を賣りに來たりければ、何もかも揃ひて、漬物屋の仙人、かの大根を澤庵につける。これ皆金々先生に食はする茶漬飯のためなり。香の物ばかりも大抵や大方の辛苦にはあらず。

搗屋の仙人、茶漬飯になる米を搗く。これも搗屋の晝飯の菜になる秋光魚の干物から、道を聞かれた時、汗を拭く手拭まで、それ〴〵に入用の品をつくり出すこと、そのさき〴〵は數へ盡し難し。



「仰向いて搗屋秋光魚をぶつり食ひ、」とは川柳の名句であつた。

桶屋の仙人、井戸側をこしらへる。これは飯を焚いたり、茶を煮たりする水の用意にて、別に井戸を掘るつもりなり。その木の餘りにて、手桶、米かし桶などをこしらへる。

「仙人のお頭、帳面につけて一々種數を揃へる。まだ香の物を切る俎板と米上笊、火吹竹と火打箱が出來ない、薪と炭は大抵出來上りだなど〻顔見世前の芝居の



石屋の仙人茶漬の煮花を煮る石の七輪をこしらへる。

如く大騒ぎなり。

「ひもじい所爲か、
わしがには石屋の玄翁が
薩摩藷のやうに見える奴さ。」

左官屋の仙人
竈を塗る。

「竈の上塗は、恥の上塗を
するよりましだの齒入で
ござる。」

「團扇屋の仙人、七輪の下を煽ぐ澁團扇をこしらへる。これも、籔より竹を切り出して骨となし、紙を漉きて團扇に張り、山より澁をとり來りて上にひく。團扇ばかりも、そのさきざきを思へば幾萬人の手にかゝる事やら知れぬなり。

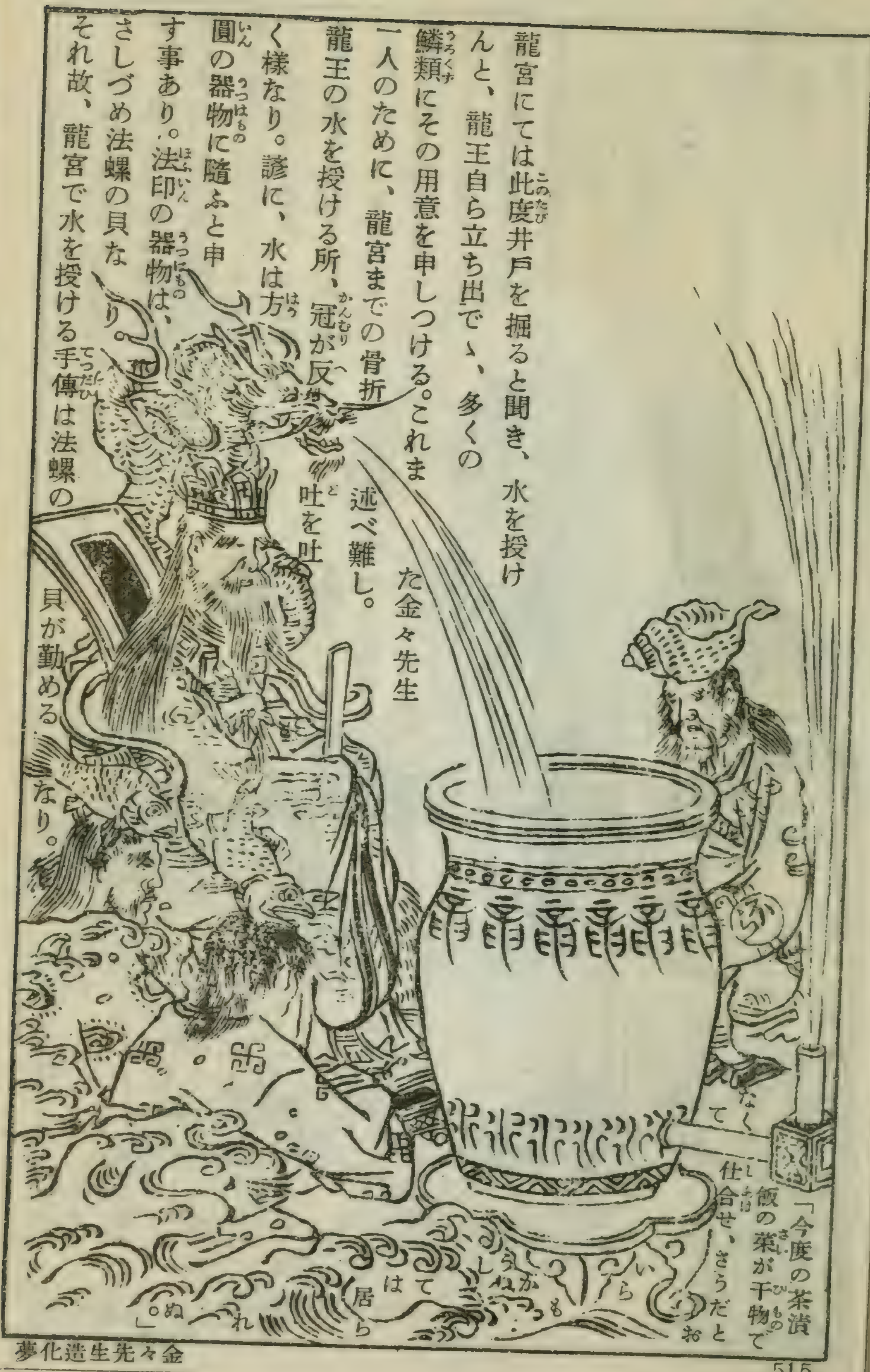


かくて、金々先生に食はする茶漬飯の道具立あらまし出來上りけれども、いまだ飯を炊き、煮花を煮る肝腎の水がなし。それ故仙人のお頭井戸掘の仙人にいひつけ急に井戸を掘らせる。これも井戸掘足代から、鋤鍬の類の道具をこしらへ、その辛苦幾萬人の骨折か、その先々は數へ盡し難し。

「女仙人、井戸を掘るを見に來る。これは何のために見に來るか氣が知れず。したが一體此本に女が◆



◆少き故、繪組の愛嬌に見に來たと見える。


龍宮にては此度井戸を掘ると聞き、水を授けんと、龍王自ら立ち出でゝ、多くの鱗類にその用意を申しつける。これまた金々先生一人のために、龍宮までの骨折述べ難し。
龍王の水を授ける所、冠が反吐を吐く様なり。諺に、水は方圓の器物に随ふと申す事あり。法印の器物は、さしづめ法螺の貝なり。
それ故、龍宮で水を授ける手傳は法螺の貝が勤めるなり。
「今度の茶漬飯の菜が干物でなくて仕合せ、さらだとおいらもかしこまつては居られぬ。」

さて何もかも出來上りければ、飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人集りて水を汲み、飯を炊き、香の物を切り、茶を煎じ、膳立をし、さま〴〵辛苦する。さて此飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人などゝいふものは、至極辛苦するものなり。下女だの丁稚だのとて、別に生るゝ者にあらず、その身貧乏に生れし故、かゝる辛苦の奉公もするなり。これ等も仕合さへよければ、新内ではないが、御新造さんの、奥さんのと人に尊びかしづかれ、上見ぬわしで暮す




けれど、ヤレ三介の、
ヤレおさんの、ヤレ
長松のと、やすく
されるは、その身
その身の拙き果報故と
思ひ、
いかなる三庄太夫も
憐れみ使ふべき事なり。
うに采配を
もち臺所を
守り給ふ。
はじめ
ちよろ
ちよ
ろ、
なかくわつ
くわつ三尺
下つてたか睡
といふから、
ちと舟を漕がう。

かくてやう〱一膳の茶漬飯出來上りければ、仙人のお頭これを金々先生に食はする。金々先生は此茶漬飯をこしらへる多くの人の辛勞を目前に見たることなれば、膳に坐りて熟々思ひけるは、わづかに茶漬飯一膳、たつた二タ切れの香の物といへども、幾萬人の手にかゝりけるか數へ盡し難し。まして況んや、美をつくし(た)料理なんどは、幾億萬人の辛苦なるか量り知るべからず。これを思へば、家を作り、着物を着人間一生の品々は皆これ幾萬人の辛苦を積めり。然る時は紙一枚、箸一膳も我が物にて我が物にあらず。皆天地より惠み給ふ所なり。米一粒も、遊んで居て食ふは勿體なきことなり。ア、さうぢやナアと感心の餘り、膝の上へ白き涙



をこぼしければ、お給仕の童子
がめつけて、もし飯粒が
こぼれましたもいゝ〳〵。

「いかに金々先生、汝生物識にして、
定まる渡世もせず、暖かに着、
飽くまで食ひ、千萬人の
辛苦を費して、
ぶらついて居たるは
大きなる誤りなり。
浮世はいぼ相持だ、なんと
これで茶漬飯を食ふやうに
さら〳〵と悟りが
開けたであらう。」



と思ひしは夢にて、あたりを見れば、
やう／＼煮花が煮え立ちければ、
手をはたとうつて、ア、奇なる哉
妙でござえす、盧生は粟飯炊ぐうちに
五十年の夢を見、われは煮花の出來る
うちに千萬人の辛苦を知れり。
われ浮世を夢と思ひなして、
たゞうか／＼と暮したるが、
今日より心を改め、天地へ恩を
報ずるため、一つの渡世をはじめんと、
これより無上に稼ぎければ、四五年
經たぬうち百萬兩の分限となり、
後は夢にあらぬ本間の榮華の身
となりけるぞ御誂へ飛び切りの
めでたし／＼。



京傳作

口上

此度山東京傳儀、紙煙草入新店出し、いろ／＼新形仕入仕り、下直の品にて、きれ煙草入同樣御用ひに相成候樣工夫仕り、何卒御贔負御取立一重ニ奉希上候以上

江戸京橋銀座一丁目
京屋　傳藏


忠臣蔵前世幕無　完
山東京伝作

物総前生あり。提婆が前生は、阿私仙人にして、信玄が前生は曾我の五郎なり。稗蒔の鷺の前生は烏賊の甲にして、精靈の牛の前生は瓜の撰屑なり。初松魚の前生は袷、茄子漬の前生は簪、齒磨の前生は房州砂。銅地藏が前生は烟管の雁首、風呂敷の前生に、五月の幟あれば、月見の前生に八朔の白服あり、是皆前生の因縁にして、其糸筋をひくこと、喩へば蓮根の切口、水飴の床ばなれ、瘦地に出來た薩摩芋にひとしく、三世因果の道理は、彼幕無の戯場の如く、過去未來現在すなはち是、のべつゞけの狂言に似たりと云爾。

甲寅孟陬

於紙製烟包鋪

山東京傳書

物總前生あり。提婆が前生ハ阿私仙人にして信玄が前生ハ。曽我の五郎なり。稗蒔の鷺乃前生ハ烏賊の甲にして。精霊の牛乃前生ハ瓜乃撰屑なり。初松魚乃前生ハ袷。茄子漬ハ前生ハ笄。歯磨の前生ハ房州砂。銅地蔵が前生ハ烟管の雁首。風呂敷の前生ハ五月の幟なれバ。月見の前生ハ八朔の白服なり。是皆前生の因縁にして其糸筋をとくと。喩バ蓮根の切口ハ水鏡乃床にくされし痩地に出来る薩摩芋れひと〳〵く三世因果の道理ハ彼幕無の戯場のごとく過去未来現在をとかいち是のへつゞけ乃狂言に似りと云尓

甲寅孟陬

於紙製烟包鋪　山東京傳書


兩替屋の道具、天秤と格子の手摺、鳥居と玉垣のやうに見える、
これも因縁なるべし。
「足利直義公の前生を尋ぬるに、鶴岡邊の商人にて、兩替屋で人形屋を兼ね、五月のあがり甲なども
足利直義前生
若狹之助前生
高師直前生
「此男は一體高くとまつて、滅多に口をきかず、すまして居る故、後の世にも高い所へ上つて默つてはかり居る。」
桃井若狹之助が前生は何故だか、丁稚にて、この猫を見ると苛める故、生を替へ、師直と生れてより又動ともすると若狹之助を苛めかへす、これ皆因果の道理なり。
「師直は前生が猫にて、ごろにやん〳〵と啼きける故、皆人
ごろにやん
こう〳〵と叫びけるが、後の世に師直と生れて師直公〳〵と人◐
◐にいはるゝもごろにやん▲

商ひけるが、生得寝坊にて
晝も一日居眠ばかりして、
何を聞いても、
たゞよし〳〵とばかり
いつて居る。
海馬といふ獸よく寐る故、
海馬がたゞよしと人が
渾名を附けゝるが後の
世に足利直義公と
生れ變りける。

「その甲も買はうよ、
こつちの甲も買はうよ。
それもかほよ、これも
かほよ、何でも彼でも賣るものを
かほよ〳〵といふ婆樣は
誰が前生か當てゝ見な。」



▲こうの地口なり。因果にも此やうな牽強な因果多し。

鹽冶判官の前生は、えんやらはんやらな〳〵と木遣をいふ鳶の者なりしが今は此所へ井戸替の手傳に雇はれて來る。

加古川が前生は、かの兩替屋と人形屋の隣に住む本道の醫者にて、殊の外本草に精しき人なりしが、或時庭へ松を植ゆるとて、其の松が倒れ、大に怪我をする、その報にて非情の松といへども因果は免れず、後の世に本藏と生れて松の枝を切り落す。

「若狭之助が前生の丁稚、此内へ薬とりに來り醫者の轉んだを見て無性にあはゝと笑ひし報にて、後の世には無性に腹を立つ。



加古川が前生の醫者は、隣の人形屋より藥代に貰ひし小判五兩、巻紙二十本、鰹節一連、座敷へ並べて置きしが、師直の前生の猫、かの鰹節を目掛けて來りし所を捉（つらま）へ、在り合ふ煙管の火玉にてかの猫の髭を焼きしその報にて、後の世には、これに十割増の進物をしてやらるゝのみならず、師直がお髭の塵をとるなり。



顔世御前の前生の婆様、あがり甲を買つて戻らんとせしが老人(の)事故、つい踏みはづして、ほとりの深き川へ落つこちけるを、鹽冶の前生なる蔦の者、奇特なる者にて、早速助けあげ、濡れた着物を脱がせて、我着物を着せかへて、うちへ送り届けゝる、されば此善根後の世に報いて、かのお婆は美しき女になり、鹽冶が妻となりける。川へ落ちし因縁にて深き縁となり、着物を借りし報にて、重きが上の小夜衣わがつまならぬつまなかさねそといふ歌にて貞女を立てる、一河の流も他生の縁とはこの事なり。

「早野勘平が前生は鰌と鰒を賣る商人なり。

鷺坂伴内が前生は



鷺なり。勘平が前生が賣る鮨を盗み食ひし報にて、後の世には勘平がために大きな目に遇ふ。

「梅ケ枝ではないが、三百程の鮨をせしめたから、先の世は何にならうと、伴内〳〵大事ない。」




加古川が前生の醫者
此處を通りかゝり、
猫を抱きとめる、
何故抱きとめたか、
知つた人一人もなし、
作者も知らず。
「此處では急に
猫が大きく見える
奴さ、人形芝居の
虎程ある。」
「此猫は屁をひつた
さうだ、ア、臭い〳〵、これ
でもおれに繪心がちつとでも
あると、大きな筆を揩いで
猫の屁をかゝう
かゝうといつて
出るけれど。」

忠臣蔵前世幕無

鹽冶が前生の鳶の者、人形屋の井戸替に雇はれ井戸の中より出たる鮒を持ち歸り、此奴(こいつ)を燒いてこながらせしめんと心樂しみにして行く所を、師直の前生の猫これを奪ひ取らんと飛びかゝる拍子に、鳶の者の額へ傷をつけゝれば、鳶の者ほう／＼逃げかへる、弱い奴なり。されば此猫後の世に師直と生れても、無性に爪が長く、鳶の者の



額をひつ搔いたる報にて、今度は鹽冶に額を切りつけらる、鹽冶を井戸の鮒に喩へて悪口せしも、皆これ前世の約束事と知られたり。

鍛冶が前生の蔦の者、かの猫に額をひつ搔かれしが、早速藥種屋の亭主に血止藥を貰ひ、その傷癒えたる返禮とて腹切金を出し、地腹を切つておごり馳走をする。

「今肴屋で大きな星鰈を見ておいたが、まだ來ぬか、コレ大星はまだ來ぬか、コレ爺や、これ爺や。」

これが力彌と聞えるも悪い地口の因縁なり。

「藥師寺が前生は生藥屋にて、蔦の者に血止の藥を施しけるを恩に着せ、血の出るやうな金にておごらせる。」

「又石堂が前生は、此草紙に女のなき故、據所なく女なり。殊にうまさうな年増にて、そのくせ堅き女故、石堂右馬之丞生れかはる故何事も物和かなり。



「此爺力彌が前生なり。蔦の者のうちに飯炊にて、毎日毎日お釜の前にばかり居る故、かまの緣により、後の世に若衆姿の力彌とは生れしなり。

斧定九郎が前生は鐵砲河岸の新なり。とんだ手のある新にて、おやぢをもよく殺し、多くの人に天井を見せしその報にて、後の世に定九郎と生れ、またもおやぢを殺し、後に鐵砲に當り死す。これ皆因果の道理にて、道理で南瓜は唐茄子の前生もこれで解りやした。

「與一兵衛が前生は勘平がうちの居候なり。定九郎が前生の新に、錢五百文と縞の浴衣をたてひきさせしが、此五百文の錢にだん／＼利がくひ、五十兩二分二朱と何がしはまけにして、あと五十兩が、後の世に報ひ、その金高を定九郎にせしめらるゝ。



「その中でまた反魂丹と和中散を買って宿六の嗅しにはむかにやアならねえ。」

「わっちも人に借りた錢だから、返しねえよ、ア丶借が敵の世の中で、かりがなければ何のいな。」

「さきの世で借りたをなすか今貸すか、兎角浮世に報はぬはなし。」

「此歌の通り違ひなし。

定九郎が前生の新は殊の外下卑蔵にて、酒も御座れ、餅も御座れ、やらず発さぬ報にて、後の世に盗人と生れしなり。勘平が前世の肴賣が持つて來たる鰒に毒ありとも知らず、すでに買はんとする。

此傘も前生故、買ひたてゞ新しけれど、後の世には古傘となり、猪の包紙となる。



早野勘平は、かやの痰切と聞える故、飴賣でありさうなものなれど、報いといふものはそんな地口のやうな茶な事ではなく、鰻一鯖、

鰒に毒ありと知らずすでに買はんとする。

「猪の前生は炬燵櫓を拵へる職人なり。四つ足の縁と温まるものゝ縁によりて、後の世に猪と生れしなり。それ故炬燵は亥の子に開き、亥の子に牡丹餅をするも牡丹の縁によるなるべし。此男此ところを通りかゝりしが、定九郎が前生の新が毒ある鰒を知らず買はんとする故、氣の毒に思ひ、意見をして鰒を買はせざりし後の世に報ひ、猪になりかはり、定九郎が鐵砲に當る。

「此炬燵櫓賣、全體向見ずな男にて、錢を借りても返さず、えては人をひつかけし故、その報では手負猪にも生れさうなものなり。

✖鼈、鰒などを賣り、多くものゝ命をとる商賣にて定九郎が前生の新に、とんだ萬八な掛値をいつて鰒を賣りつけようとしたる報にて、鐵砲を放す獵人となり又ものゝ命をとる生計をする。

「此所前生にては雪降りなりしが、後の世にても雨降りとなる、雪のあとでは得て雨の降るものなり。



勘平が前生の肴賣が内は煮賣屋にて、吸物にして賣らんと、一羽の雁を飼ひおきしが、おふくろは後生願故、放生會に用ゐると聞き、此雁を廉くして賣り渡す所へ、勘平が前生の男歸り來り、それを八百位に賣つては元値が切れる、是非渡す事はならぬと爭ふ。

「お輕が前生は雁なり。此雁に八百文身の代を渡し、放生會に用ゐるとて買つて行く御出家は卽ちこれ一文字屋才兵衛が前生なり。



「勘平が母の前生はやつぱり前生も勘平が母故、なんとも込み入つた仔細なし、こいらは作者の儲物なり。

「此爭ひに、あやまつて駕籠の戸が開きければ、お輕が前生の雁はつらと逃げて行き、虻も蜂もとらせず、勘平が前生に大きなる損をかけしその報にて、後の世に夫婦と生れ、勘平がために又身を賣らるゝなり。

「三段目にてお輕が文を持ち來るもこれ雁金（かりがね）の因縁なり。

「この出家、吸物になるべき雁を買つて放生會に用ゐんとしたるその善根にて、後の世は佛にも生れさうなものなれど、かへつて一文字屋といふ亡八屋（くつはや）に生れしは、大方前生で人に金轡（かねぐつわ）を嵌められし事ありと見えたり。

「後の世にお輕を載せる駕籠舁の前生は此雁を擔ぎし男なり。その縁にて駕籠舁の掛聲は雁の掛聲に似たり。



千崎彌五郎が前生は勘平が
前生の妹にて美しき娘なり。
此娘きつい蚤が嫌ひにて、
夏になると夜つぴて
蚤ばかり殺生して居る故、
彌五郎と生れても、
石碑が成就する迄は、
蚤にも食はさぬ此身など
前生の事をいふ。
何でもちつとかそつと
因縁のなき事はなし。
「與一兵衛が前生は
勘平が前生のきつく世話になりし故、
後の世にて、又勘平をはごくみ返す、
これ皆因縁なり。



「勘平が前生與一兵衛が前生の居候に縞の浴衣を借り、或夜抱火鉢をして、その浴衣を焦し、どてつ腹に穴を出來しけるが、此縞の浴衣は定九郎が前生の新に借りたるを、又借にしたる物故、言譯立ち難く、わが布子のはらわたを出してひき解となして纏ひける、此譯急には覺えられぬ程入り組みたる事故、後の世の報でも大間違となる。

「鐵砲傷には似たれども、これは、まさしく綻びだらうなどゝいつても、うまらぬ奴さ。」

「原鄕右衛門が前生は此家の女房なり。亭主が浴衣を焦したる事を強く業腹がりける故、後の世に、ごうはらを倒にはらごう右衛門と生るゝ。



さらだ。」

「與一兵衛が前生は勘平が所の居候にて、定九郎が前生の鐵砲河岸の新に上せ、何もかも入れあげてしまひ、うちでは死んだやうになつてゐる。

大星由良之介前生は星の化身にも非ず、由良鬼といふ鬼にも非ず。昔おもへば信田の狐にも非ず、鼈の生れ替りなり。この鼈、勘平が前生の煮賣屋にて吸物となる筈を、鹽冶が前生の蔦の者親の命日に買つて、蓮池へ放し、危き命を助かりし故、後の世にその恩を報い、鹽冶の爲に大きなる忠義を盡したるなり。すべきものは慈悲善根なり。




お輕が前生の雁駕籠を脱れて、此所へ飛び來る。これより鼈と落雁はのがれぬ仲となる。
おかる前生
「由良之介が前生の鼈は辨才天を信仰して、毎夜々々人靜りて、人間の形となりて辨天の御堂へ上り、金燈籠のあかりを照らし、お經を讀みしその善根にて、後の世に智慧才覺人に傑れたる忠臣と生れ、前生と後の世とは鼈とお月樣ほどの違ひなり。
大星前生
「あとの雁が先へ立つて貰ひしか何だか知れぬが、上より笄を落す。雁が飛べば石龜がじだんだとは此事なるか。」
「そこに居やるはおかりぢやないか。」
「九太夫が前生の犬、勘平が前生の煮賣屋より餔肴を盗み緣の下に忍び居て食ふ。」
九太夫前生

寺岡平右衛門が前生は山葵卸の目立なり。
それだから後の世にも平右衛門は
山葵卸のやうな着物を着て居る。
此男商ひより歸りがけ、道にて
お輕が前生の雁を見つけ、
命を呉れろと、出刃庖丁を
振りあげる。
滅相な男なり。
定めて菜を入れて食ふつもり
ならんが、雁にも
それ相應に羽が
生えてあるものを、
何をまごついて居るものか
忽ちつうと飛んで行く。
寺岡が前生の山葵卸目立、雁を逃して業腹まぎれ、
勘平が前生の煮賣屋へ寄り、鴨雜炊に
赤鰯といふところで飲みかけしが、九太夫が前生の犬、此男を見ると、
吠えたがるを、かねゞゝ憎がり居たる故、



赤鰯と鴨雑炊を食はせる振にて、したゝか打ちのめす。

戸無瀬が前生は鼠遣ひの飴賣なり。小浪が前生は白き鼠なり。綿にばかり包つて居たる故、後の世にて白小袖を着て、綿を冠り、山科へ嫁入のふり賣に來る、これ又鼠の嫁入といふ氣取の因縁なり。

「又小浪が早く後家となりしは、前生にて後家張の煙管にて打たれたる所以なり。

「鼠の鳴聲のちうといふも、忠臣藏の世界へ生るゝ前表因縁も色々ひつゝりひつぱりのあるものなり



本藏が前生の本草者の醫者、此隣へ引越し、笊と火吹竹を買ひ來る。これは後の世に虚無僧となる因縁だといふのか、さうは虎の皮だ。

「本藏が前生此所へ小便をひよぐり、内から御無用と聲をかけらるゝ。

戸無瀬が前生の飴賣、此處へ小浪が前生の白鼠を押賣に來り、おまけに子の年の大小を添へてあげませうといふ。此因緣にて戸無瀬は聟引出に大小二腰を持參して嫁入の直切こぎりをする。

「此時どういふ表裏か、棚の三寶が落ちて本藏が前生の額へ當る。この報にて此三寶後の世に本藏に踏み壞される。因緣はよくしたものなり。

「又こゝのうちは誰がうちだか知らぬが、一體綿屋にて由良之介がうちの前生なり。いろ〳〵の人が住み〳〵して後の世に由良之介が侘住となる、それだから一間をあくれば綿が散らかつてゐて、雪降の如く、



本藏が前生の醫者、力彌が前生の飯炊お爺が疝氣の起りし時、鍼をうつてやるとて、横腹へ痛い針をうち込みて痛がらせしその報にて後の世にて力彌がために本藏は横腹へ槍を突込まれる、この因緣などは、針程の事が棒程に報いしは、さりとては聞えぬ報なり。

塗桶に綿のかゝりしは、五輪の形、
籐弓(とうゆみ)は閾鴨居(しきゐかもゐ)に張るといふ
　雪もつ竹と見ゆるなり。

「大星女房
お石が前生は
本藏が前生の女房なり。
常々夫を尻にひきし故、
報にて後の世に
かへつて
本藏が尻にひかるゝ。

「由良之介が前生の鼈(すつぽん)も
此所に居るが、
それはまたどういふ
因縁だといふ譯は知れず、
さう〳〵因縁も
　こぢつけ憎いと見えたり。




了竹が前生は肴賣なり。
此男藪睨なりし故、後の世に
藪醫者と生るゝ、
又おそのが前生は
鯥なり。
よし松が前生は
鯥の子なり。
此因縁にて後の世にも
子をおいて親ばかり
去らるゝ。
丁稚伊吾が前生は
烏なり。此烏
アホウ〳〵と啼きし故
後の世に
阿呆と生れる。
伊吾お生
「烏、肴の腸をせしめんと謀る。
おそのお生
「天川屋が前生は此次に委しければこゝに略す。
天川屋お生
了竹お生
「親はいらねえ、子ばかり置いていきなよ。」
よし松お生
よし松が前生鯥の子母の別をかなしむ。


天川屋が前生は雨蛙にもあらず
長持の上へのぼれども
三つ布團の生れ替り
でもなし。
天川屋の義平は
男でござると
口綺麗にいふものゝ
實の所前生は女に違ひなし。
「小さい子に月代剃つてやるかみ様、
動くなといふ人に生るゝ。
「遣手は後の世にも
やつぱり捕手に生るゝ。
「前生にて蚤を取りし男
無性に捕つたく〜と
いふ人に生るゝ。
「前生にて菜を
茹でゝ掻き廻
したる下女
腕まはせ
エ、と
いふ人に生
るゝ。」


十一段目お生
「具足開の餅を鼠金槌にて砕き食つたる男具足櫃へ掛矢にて打ちこまれる人に生れる。
「燕、梁の上へ乗つて逃げる人に生れる。
「虚無僧、擂鉢を冠り、擂小木を持つて逃げる人に生れる。
「やすい役者のお冷飯になつた奴、首を切られる人に生れる。
「此両人利いた風に本蔵と
「菩薩を麁末にしたる飯炊女盲に生れ、褌を引きずつて逃げる。
前


女の手から物を
とれる出家は、
五百生がその間
手の無き者と
生るゝとかや違ひなし、
女の手から手切金を
とつたる出家は、
手を切らるゝ人と生れる。
「勘平が前生で
賣つた鰒おたふくに生れ
行燈を
さげて
逃げる。」
「心太賣
拍子木
うつ
夜番に
生るゝ。
「前生にて酒を買つた人、
後の世には尻を切られる人に
生れる、酒を買つて尻を
切られるとは、たとへに引く
程あつて割に合はぬ因縁なり。
平右衛門
の風をして
ゐる奴さ。」
ところてん
此女
と此
男は、
忠臣藏の
外へ生
るゝ
故、
いさ
くさ
なし

扨夜討の面々の前生を
委しく尋ね奉るに、
噎の咒に湯を飲んだる人
十文字の槍を持ち、竹の子
穂の所ばかり好いて食つたる人
階子を持ち、
才鎚頭の人掛矢を携ゆる。
しかしながら大鷲文吾は
大橋豊後と聞ゆれども
兼太夫にも非ず。
竹森喜太八は
かけもり伊太八と聞ゆれども、
蕎麥を食ひながら新内節を
聞いた人にも非ず。矢間十太郎は
いかさまさうだらうと聞ゆれども
尤な人の生れ替りでもなし、
報にもさう／＼牽強ばかりもないと見えたり。

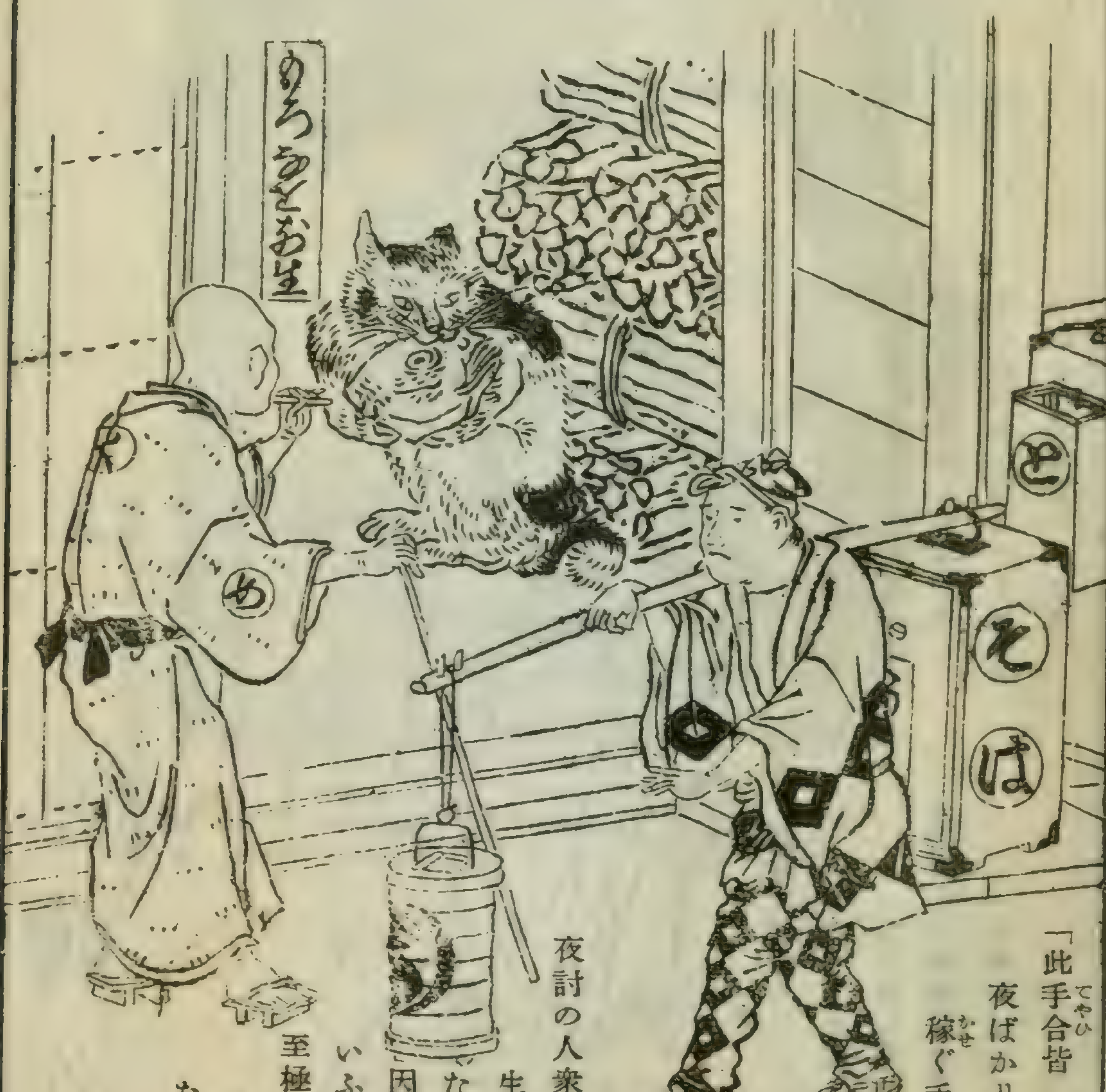


「甘酒を賣つたる人
天とかければ、
紐革饂飩を
商ひし人
川と答へる。

「夜討の面々
多くは
饂飩屋の擔の
生れ替りにして、
呼子の笛を
吹きし面々は、
多くは
按摩の
生れ替りなり。

「師直が前生の猫鯛の頭を盗み、薪部屋の隅にてしてやりし報にて、後の世に師直と生れ、つひに薪部屋にて首をとらるゝ。

「一體忠臣藏の正本でも十一段目は至極筋が荒き故前生もこのところはよつぽど手抜(てぬき)が見えるなり。



「此手合(てやひ)皆夜ばかり稼(かせ)ぐ手合故夜討の人衆に生れしなり。因縁といふもの至極理詰なものなり。」



そも〳〵歌舞伎狂言、操淨瑠璃の類、すべて作者の腹に過去未來現在の三世籠れり。いまだ案じつけざる前は、右にしるせる如き前生にて、埒口もなし。漸く案じつけはじめて作者の腹より出づる。これ即ち現在なり。或は二番目、三番目、後日の淨瑠璃を出す、これまた未來なり。

此所は假名手本の作者竹田出雲が腹より師直鹽冶はじめて生れ出でたる所なりこれより忠臣藏のはじまり。

京傳作

京傳
紙煙草入見世殊の外繁昌仕り、誠に御贔屓御蔭故と、朝夕いづれも様のおかげを拜し、しばしも忘れ申さず候。なほ又來る四月朔日より
裂地夏煙草入
めつきりよき品
賣り出し申候
相變らず御贔屓奉希上候。
一つ祝ひませう。
めでたし〳〵。

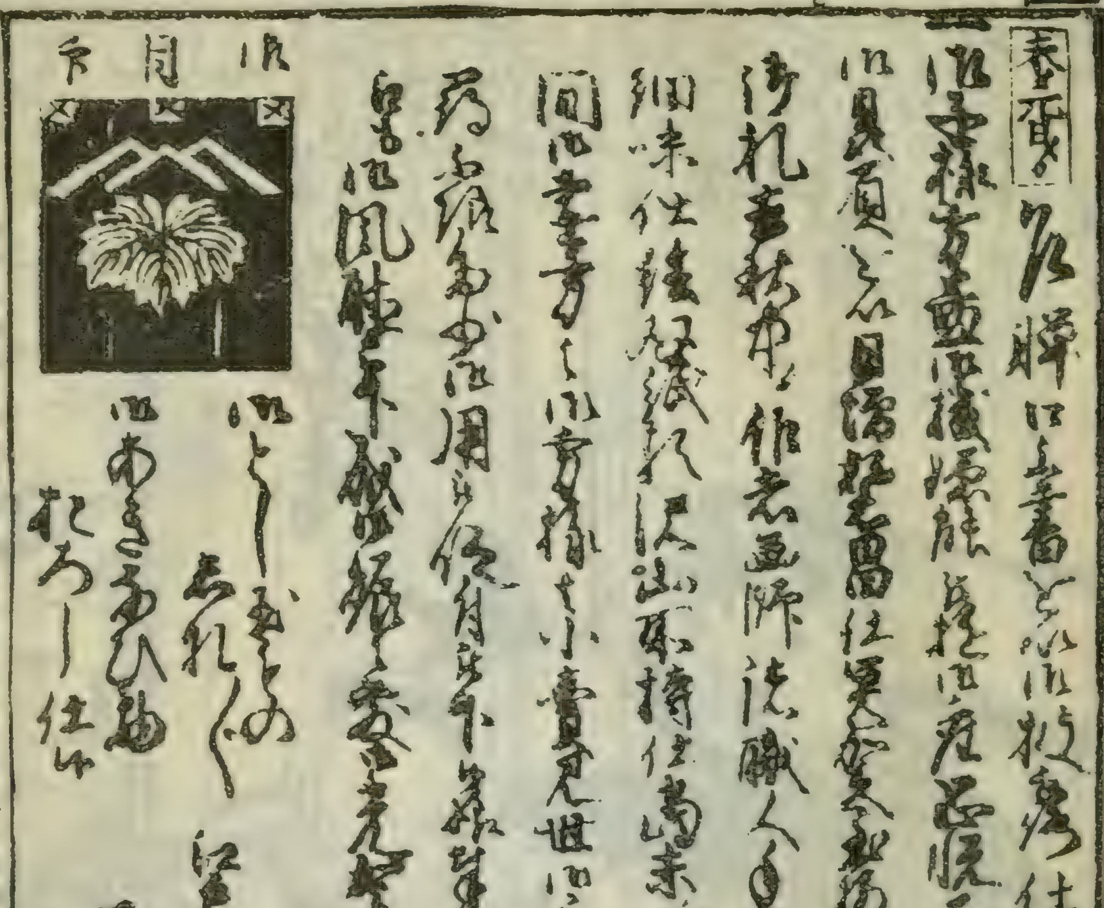

馬琴作
上
己未春


馬琴作
世諺口紺屋雛形
中
通油町
蔦十版
己未春
下
通油町
蔦十版
己未春

未ノ元日より

憚り乍ら口上を以て御披露仕り候

一御子様方益々御機嫌能く御座遊ばされ恐悦至極に存じ奉り候降つて私見世御品屑を以て日増に繁昌仕り冥賀至極有難き仕合に存じ奉り候。右御禮の爲去秋中より作者畫師諸職人手透の時節を相考へ諸事細味仕り繪雙紙類澤山所持仕り當未の元日より無類大安賣仕り候間御遠方のお方様は小賣見世御もより〳〵にて蔦屋板とお尋ね多少に限らず御用仰せ付けられ下され候様願ひ奉り候。憚り乍ら御手習傍輩様へも御風聽なし下され御賑々しく御光駕の程偏に希ひ上げ奉り候。以上。



御年玉物品々御商ひ物卸し仕り候

江戸通油町　蔦屋重三郎

古き諺にも、妻子は衣服の如しといふ事ありて、女房と着る物は新しい内程よいといふは、どうか不人情のやうなれど、着物も新しいうちは大切にして着る氣になり、女房も新しい内は至極睦じいものなれど、やがて身上の垢ついて子供の繈を當てるとふ雑巾同然に取扱ふ故、いざこざの種となる。人と生れて裸で道中もならず、女房持たねば親への不孝なれど、其身の程を考へて染色や縞柄に頓着せず、随分地太な丈夫向を着るが徳用といふものなれば、



必ず〳〵引札の安物に喰ひ込み美しい女房を持ちたがらず、甲斐〴〵しいが身代の徳用向だと常々兄貴のいはれたを、趣向にしてとう〳〵三冊こじつけました。

「こりやあ縞柄は好いが餘り地が悪い。」

「縮緬の板締と本八丈の變縞を見せて下せえ。そして花色繻子の袖口も忘れめえによ。」

「ソレハ値段も恰好物でござります。」

「お坊さんのお祝にはいゝべゝが、たんと出來ます。」



無地
情なしもめん
紋所ひつこひの
抱のぼり

ひつこひの抱登りは番頭がたきのすく紋にて得て女に嫌はるゝ。何をいつても染附の悪い無地丈無し木綿につけてよし。又は悪い事しな桟留、飛んだ目に青梅縞などにつけて裏は鮑の片面小紋、よしなせいこの半襟をかければ、うつりがよけれど、皆いふ事の辻褄が合はぬ故、女にかけてはいかん紋の始りなり。



「琴高仙人が異見をいはうが二十四孝の王祥が裸になつて詫事をしようが、此鯉ばかりは思ひ切られぬ。そんな怖い顔をして叱らずと、一つ笑ひ鯉にしてくれる氣はなしか。とゝなこくせう面奴が。」

「エヽモ焦れつてえ。食ひつくによ。」

「源さん久しいもんだ。奥におふくろさんが聞いで居なさるわな。」



模様
おい蘭に　しん草

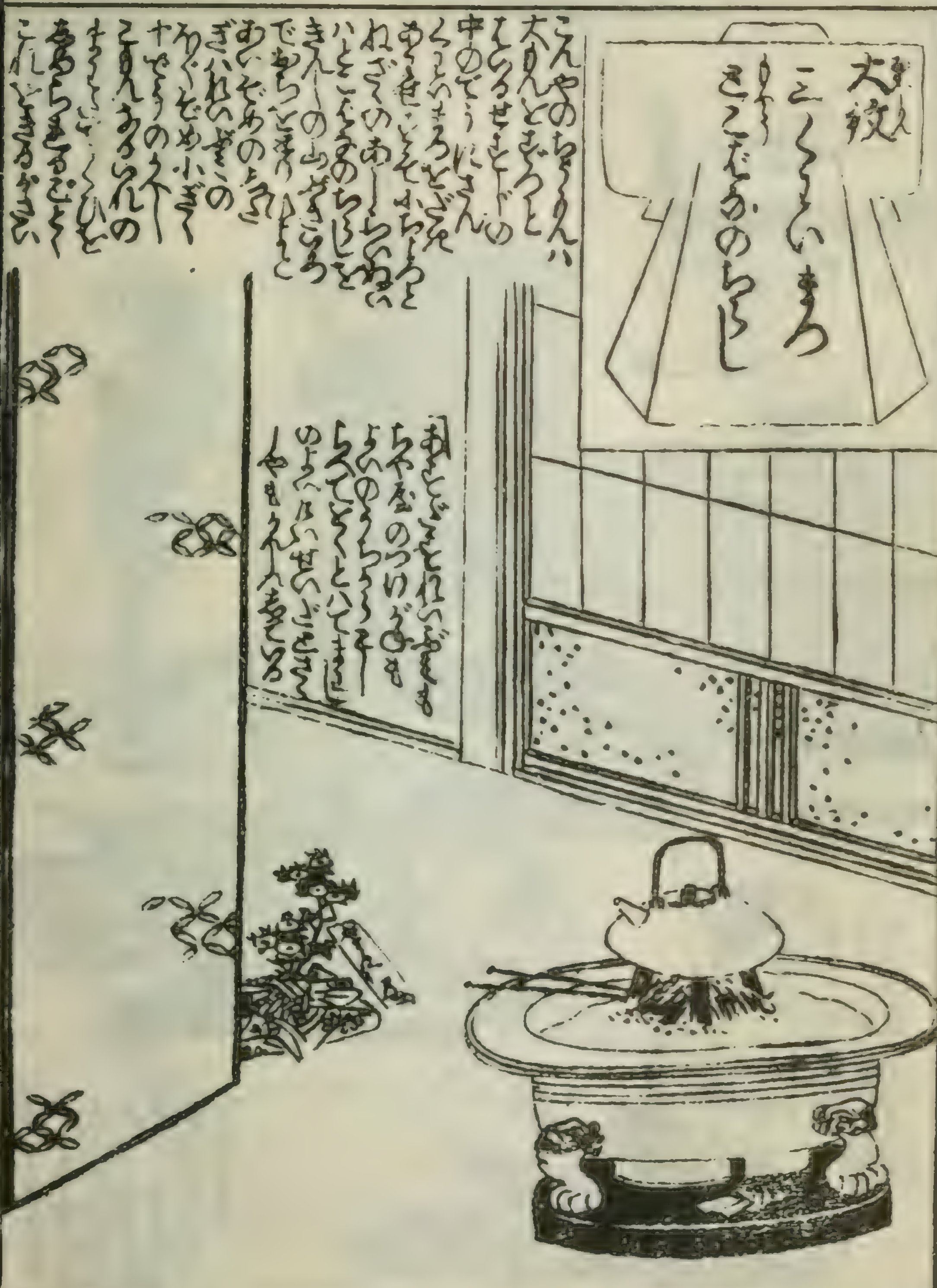
色頭の黒い鼠花魁に新造をつけて染賃一兩一分の痛事なり。表は羽二重と見えて裏は大の革羽織なり。故にふられる時は合羽の代りもする苦界十年を年一杯に縫出せば、鼻の下三尺程のびて來る。色は頭の黒い鼠にてうら〳〵へ引きずりこみたがる、至つて汚れぼくして始終眞黑となる。これを此廓の馴れそめ模



様といふ。「二十日鼠に四十両、遣ひ果して二分の無心とはしがねえ身の上になつた。昨夕(ゆうべ)格子(かうし)で話し残した事がある。晩にはきつときねずみ〳〵」。「コウりきんだ所は、荒獅子(あらしし)男之介(をとこのすけ)といふ見得(みえ)でおす。これで縛られて居ると、雪姫といふ身もありいすとさ。」「忠さんお出なんし。また猫撫聲で威(をど)されなんすな。」



大紋
三くわい松
模様 床花の散らし
今夜の注文は大もんをずつと這入る脊筋の仲の町に三會松を抱き合せ、裾にちよつとね笹のあしらひ、縫は床花の散らしを金糸の山吹色で落をとり、ひよこあひ染の下着は禮文の反故染、小菊十帖のかへし小紋、中入の眞綿で首を

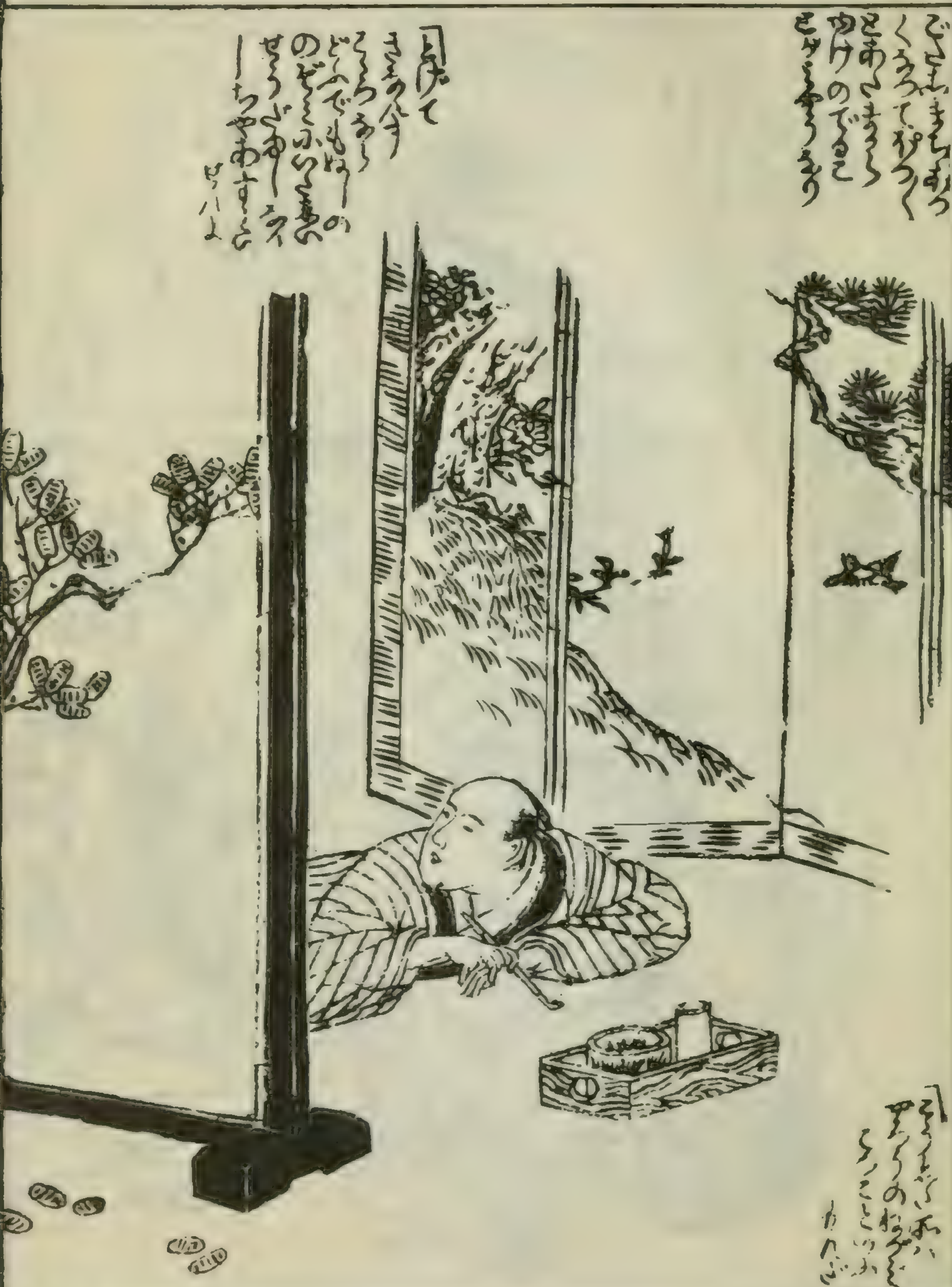


締められる如く、これを着るが最後忽ち熱くなつてぽつ〳〵と頭から湯氣の出る事が妙なり。

明日出す禮文も茶屋の附金(つけがね)も、宵のうちから拵へて置くとは手廻しのよい傾城(けいせい)だと、作者も感心して居る。

「かうした所は野郎の鼠ごつこといふもんだ。」

「遂(と)げて來なんす心なら、どうでも主(ぬし)の望に致しいせう、欺(だま)しなんしちあ濟みいせんよ。」



てんぼう小紋に
いざり松

てんぼう小紋にいざり松の紋所は、堀の内や雑司ケ谷詣りの晴着によし。かなひませぬ盲小紋を染返して妙なり。

「今日は根つから詣りがねえ。あとの八日も降られて大くされだつけ。」

「非人夏のうちといふ如く、から寒くなつちやア往生だ。」



こび八丈のこじき仕立(したて)

こび八丈のこじき仕立は、袖口をまめに叩く豆蔵頭巾にすればうつりがよし。一寸きて見る人も可笑しくなつて、直に吹出したがる。此小袖を不断着にする人、始終巾着の底をはたく事疑ひなし。

「逃げるが最後笊て尻を叩いてやるぞ。豆蔵を悪くすると、始終味噌地獄へ落ちるといふ事だ。アレ、叱つたら一文下さる気にならしやつた。怖い事は知つて居るさうだ。アハ、、、、。」

「こび八〳〵、これが精進のこびに油揚々々。」



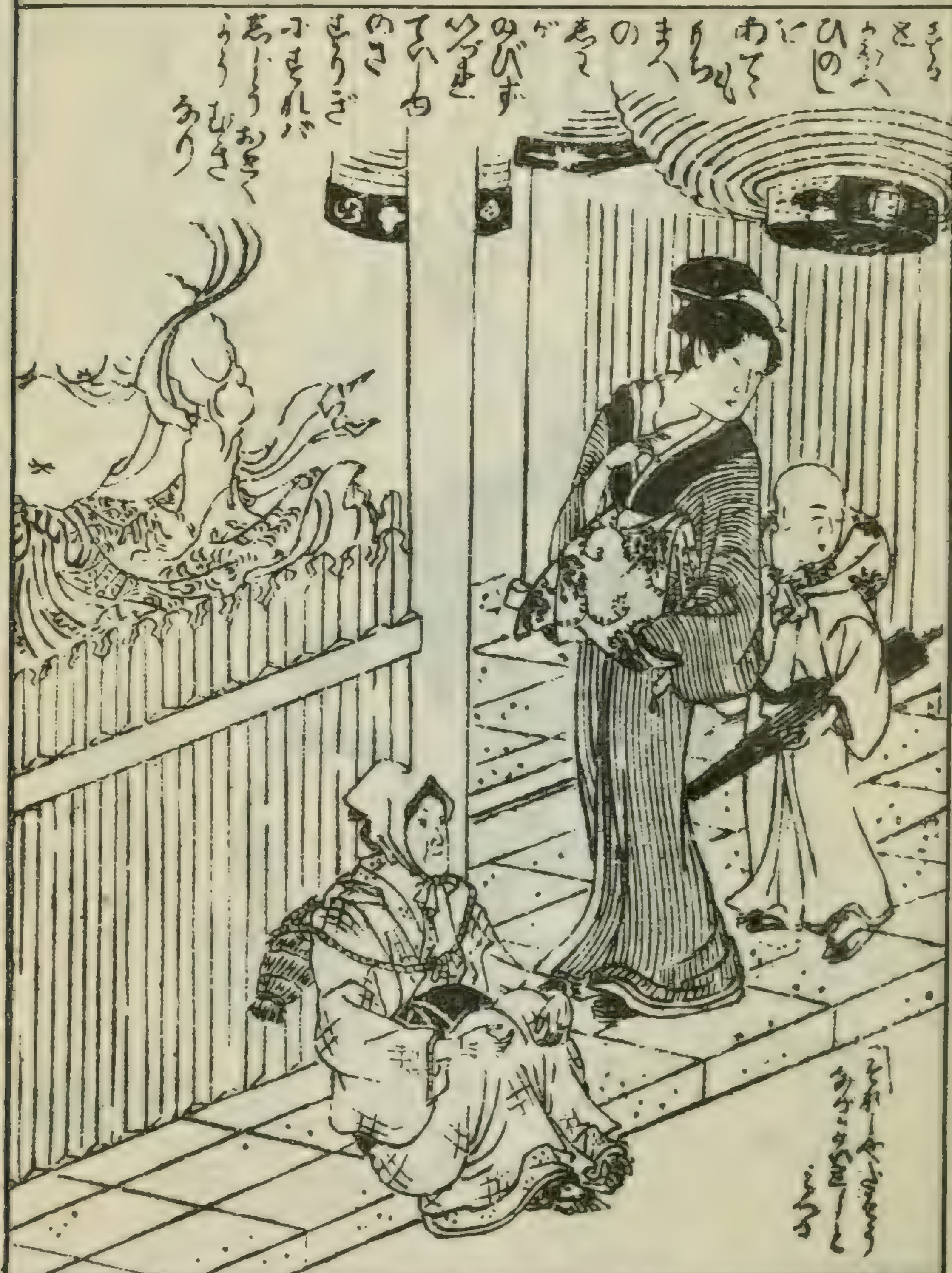
「トツチリトン〳〵。」

黒人素人の大ど島

黒人素人の大年増は、派手にも地味にも向く縞にて、三十振袖に仕立て、一寸見れば十五六も若く見える。然しものきを悪くすると、顔へ火熨斗をあてゝも持前の皺が延びず。



いづれ亭主のさすりぎにすれば始終お徳用向なり。
「駿河屋のかゝさんに何處か似て居んたあ。」
「花魁早く奥山へおいでなんし。」
「それ者(しゃ)ださうなが、よい年(とし)と見える。」



せんじ茶の法事こうしもん五葉牡丹餅

煎じ茶の法事格子は、婆様の嬉しがる縞柄にて紋所の五葉牡丹餅を小豆色に染めあげた地の黒砂糖に裏は黄粉色の欝金絹、五所紋の五つ盛られては胸に痞へて着にくゝなる。これ百の口が十六文程ぬけ六の好く定紋なり。



助六の遣手(やりて)は白酒に酔ふ筈だが、牡丹餅だけ眞面目で居る。

「朝顔煎餅より諸事牡丹餅の事だ。」

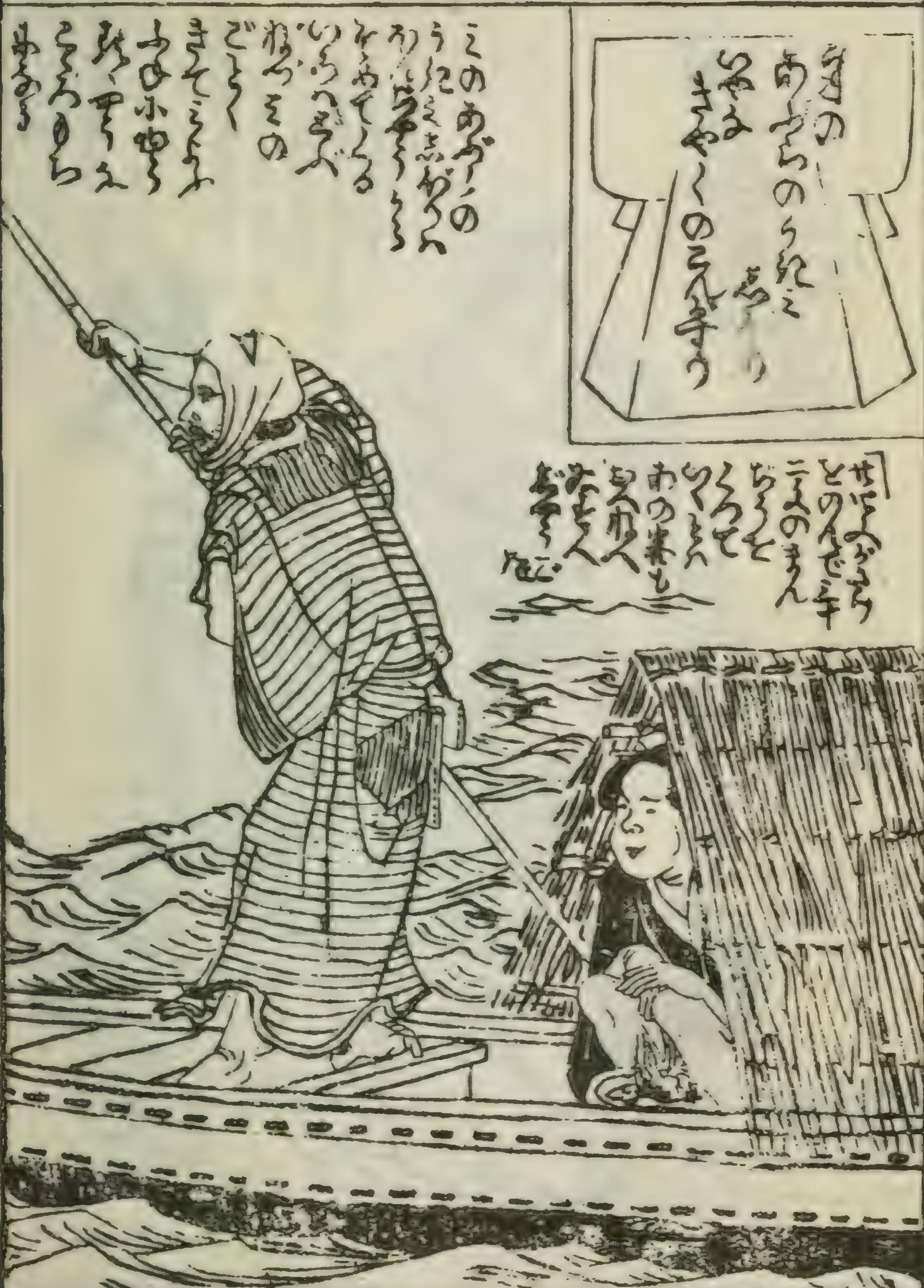
「小豆の方も黄粉の方も味に違ひは無けれども、うまいとまづい(まぶ)は間夫と客。」

「何もかう頭(あたま)へ下駄をのせて牡丹餅を食はずといゝけれど、これでなくつちやア意(い)休(きう)めかねえ。



身のあぶらのうきみ絞り、
いやな客のこんがすり

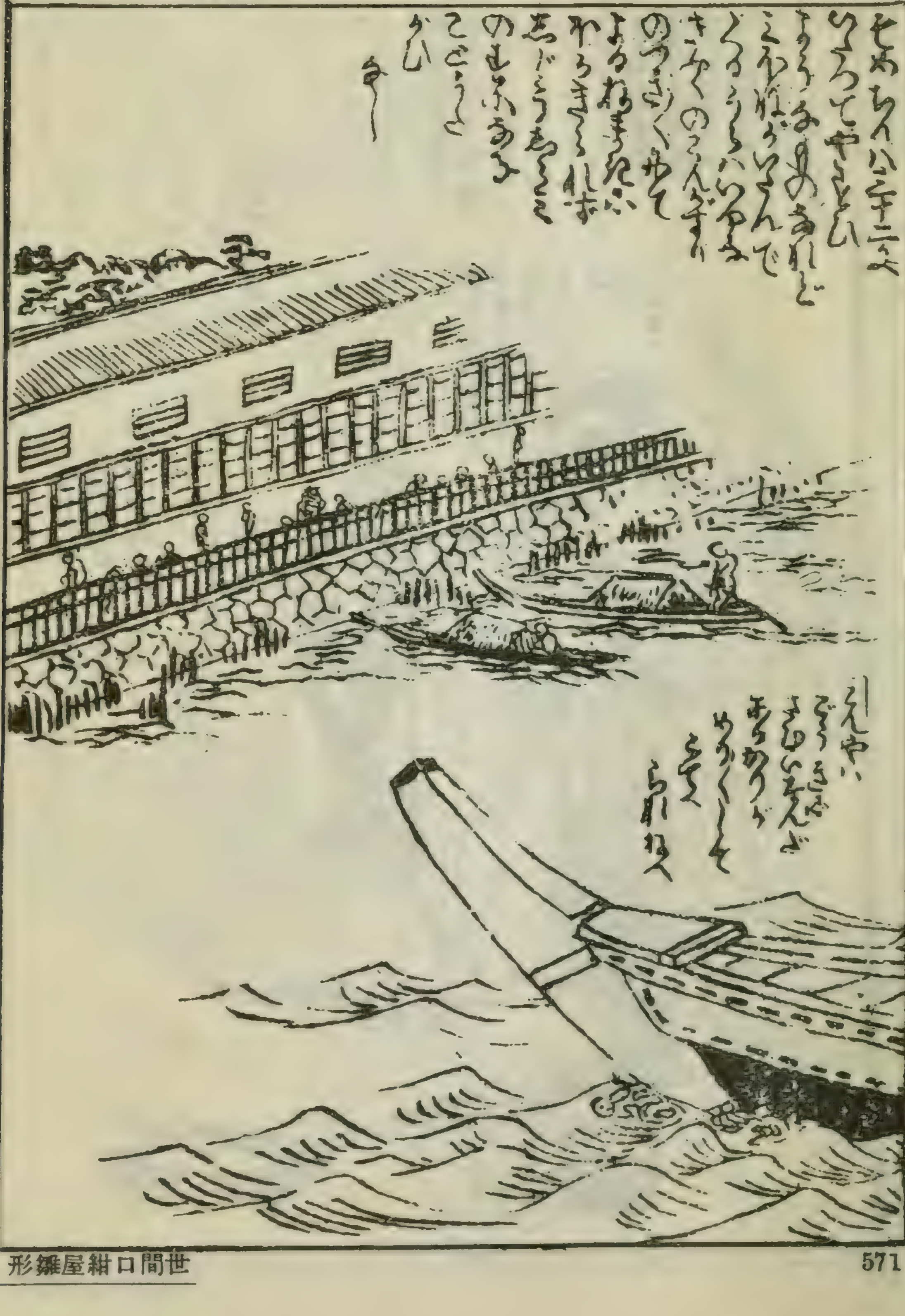
身の膏のうきみ絞りは本所から染めて來る。色は溝鼠の如く着てみよう舟に搖らるゝやうな心持になる。染賃は三十二文、至つて安いやうなものなれど身骨が痛んで來る裏は嫌な客のこん絣



の繼々にて夜寢卷にほか着られず、始終虱の巣になる事疑ひなし。

「二十四文が酒を飲んで、三十二文の饅頭を食つて行くとは、あの客もおへねえ盜人上戸だ。」

「今夜は豪氣に寒い晩だ。皸がめり〳〵してこてへられねえ。」



三度目のかはり島
うらは大きに打もめん

地は棧留で先の心の變り縞は飽の來る縞柄なり。ちよつと口ぼこにのりばかり故、忽ちに切れてしまふ。そこで裏は大の打木綿にて、紋は眞面目のふさぎをつけてよし。まじめのふさぎは眞



向の兎と聞えればいゝが。
「手前切れてしまつたといふが、まだ刺青が消さずにあるぜ。」
「ほる氣なら尋常にして居なんし、未練を出しなんすな。」
「畜生あまめ、襟元についておれを突出した代りに、今夜は生けちやア歸さねえぞよ。」



七生までの勘當じまうちは大もめん

七生までの勘當縞は息子毛氈を被る時に着る着物なり。我が身の布團に仕立てれば、今夜から置所を失ひ、あやまつた心なり。さまのみとてうにすれば、至つて仕立榮えがする。

「うぬ其頭からしてが氣に食はぬ、出て失せう。」

「久離をきるからは唐茄子程の涙もこぼさぬぞ。こゝなへぼ野郎奴が。」



「臺のもの」
松葉茶
うらに一分
いたじめ

臺の物の松葉茶(まつばちや)は上、喜八などといふ正札をつけて置く。裏に一分板締(いたじめ)の縮緬、客の鼻の下を五分長(なが)にしたれば至極恰好がよし。

「あなたのやうなお客ばかりだと、私共も氣骨が折れませぬ。」と若い者一分だけ一寸(ちよつと)合せ鏡をいつて居る。

「一つ飲まつせえ。」



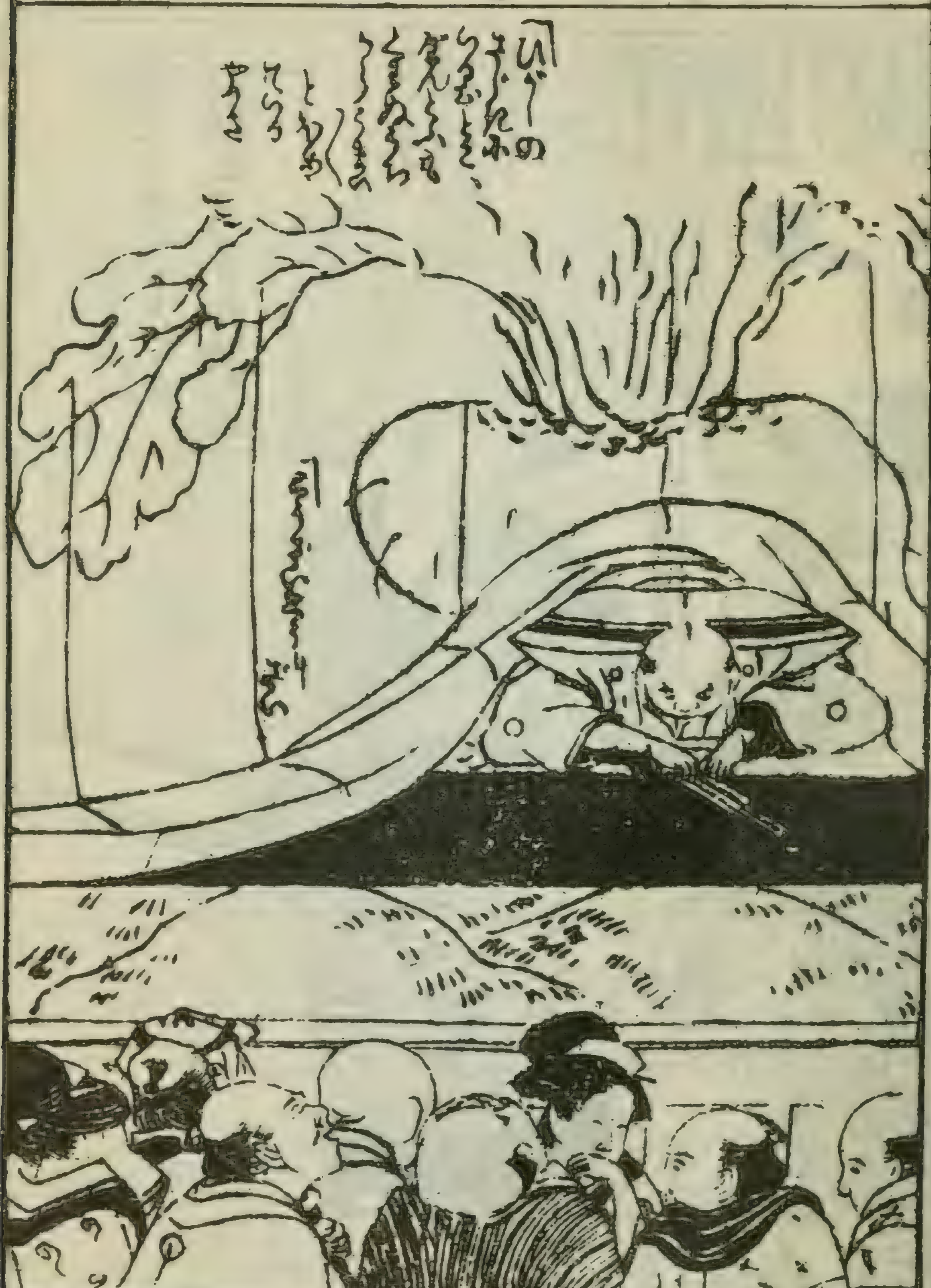
淨璃瑠こん
に
紋五三ノ切

淨瑠璃紺は太棹の三筋の糸で組上げた機の操りなれば、至つて聲も丈夫向にて、肥前土佐薩摩産などから染出す。紋所の五三の切は、きて見る人を泣かせて歸す紋なり。

「此本の繪組は頭が少な



くつてよいと思つたが、此一丁で大きに喰ひ込んだと板木屋が小言をいふだらう。」「早く隅太夫が聞きたい。」「東の棧敷に居る男は辨當も食はぬうちから、うまいうまいと褒めて居る奴さ。」「東西とう引ざい。」



地いろにあいみる茶
紋所いつそくろうの星

地色(ちいろ)にあひ見る茶は浮氣の樺色にまがひなんぼ心を疊みつけても、氣が揉めて無茶苦茶になりたがる。どういふもんの苦勞の星を染め抜にして後生(ごしやう)でざんす、主(ぬし)と袷に仕立榮(したてばえ)がする。



「上總屋へ來なんすは大方重さんでおつせう。」「隱しなんすな二丁目へ行きなんすといふ事はとうから知つて居いすわ。」「手前餘つ程手がお出來だ。何處の客に習つたのだ。」「若い衆が變つたから初會の顏で上んなんしな。」



下地は人のものをとろめんにおひ萩の惣ぬひ追剝の惣縫は眞黒であいろが見えず。人の物をとろめんにしようとは横糸の太い手合にてこれ人間の大引物何處へも向かぬ代物なり。「褌にはさんであるは小粒ではないか。幸手屋の虱紐とは



見えぬ〳〵」。
「皐丸も銭になるものなら置いて参りませう。命ばかりはお助け下さりませ。」
「逃げたの内に横木瓜(よこもつかう)とするがいゝ」。
などゝこの旅人よくよく慌てたと見えて、こんな新しい地口をいひながら逃げて行く。



かこひのすきや縮
染うす茶がへし
圍の數寄屋縮は一反が四疊半の定めにて、片肘がつかへて、至つて窮屈な仕立なり。千家、石州、遠州より出づる。地は薄茶がへし濃茶がへし、至つて高慢臭い爺汚い染色なり。おちやつぴいが、い丶べ丶を着たやうに褒めそやすを



嬉しがる。此縮東山義政公より始まる。「茶通箱は此間拝見いたしました。今日は先生の大天目のお手前を願ひます。」「下座の男は初心と見えて、もじ〳〵してゐる。綟と縮も似たものなり。」「客手前なども至極仕方のある事でござる」。「めでたし〳〵斯様申さねば草雙紙の仕舞らしく見えませぬ。これも傳授事でござる。」



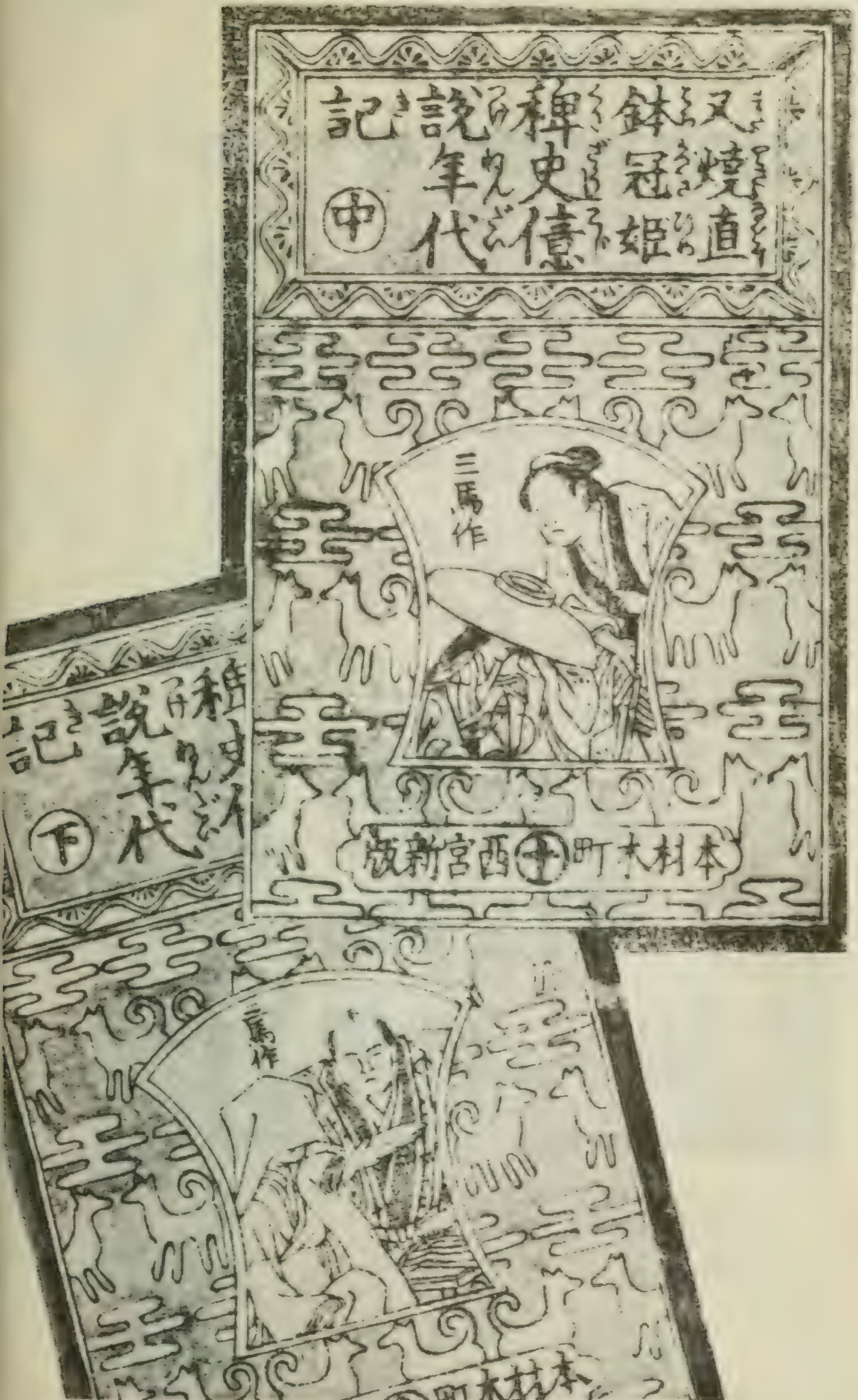
馬琴が新作の稗史に題す。

青柳や日は横糸にくれは鳥

東岡舎
羅文




又焼直鉢冠姫
稗史億説年代記
上
式亭三馬作
本材木町 西宮新版



又焼直鉢冠姫
稗史億説年代記
中
三馬作
本材木町 西宮新板
稗史億説年代記
下
三馬作
本材木町

稗史家不重寶記

此億說年代記は草雙紙の初りより、當世に至るまで、時の流行に從ひて移り行くさまぐ\を略して集めたるなり。然しながら初中晩の分ちは丁數に餘りて委しくせず、近く譬へば北尾先生は淸滿淸經と時を同じうして、晩年の今に到るが間、寫意月々に變り年々に移る。その餘の畫工は又かくの如し。さるによつて具にせず、猶委しくは來春の增補大全を待つべし。

ことしもちよつくら
式亭三馬編纂

江戸 地本問屋署印

○當世出板の印
△草雙紙相休の印

此外に洩れたるは、後より是に加ふべし。

△通旅籠町 鱗形屋藤兵衛
△大傳馬町 山本九右衛門
△通油町 丸屋小兵衛
△通油町 丸屋甚八
△通油町 松村彌兵衛

○通油町 村田屋治郎兵衛
○通油町 蔦屋重三郎
○通油町 鶴屋喜右衛門
△山下町 伊勢屋次介
△馬喰町 よしや左兵衛

○茅町 岩戸屋源八
○横山町 岩戸屋喜三郎
○通旅籠町 榎本吉兵衛
○馬喰町 山口屋忠介
○馬喰町 西村與八
○神明前 和泉屋市兵衛
△大傳馬町 大和屋出店
△通鹽町 奥村源六
○本材木町 西宮新六

○雙紙問屋の數を知る歌

△鶴、蔦屋、泉市、村田、山口屋
岩戸、榎本、西は村、宮

○赤本時代の詞癖を早く覺ゆる歌

△大木の生際と來て太印
てんとふといの根ぢやふてらこい。
△あらうがや「來て居る「來たわ「てんやわや、ナント子供衆がてんかく\。

中古の作者、此外にあまたあり。作者の印圖は凡近き分を記す。

戯作者名寄（げさくしやみやうよせ）

○休の印　●故人の印

當時出作する御存じの作者は新古によらず、こゝに略す。

●和祥　●丈阿　○喜三二　○萬象亭　○通笑　○三橋喜三二

明誠堂龜山人（又云 手柄岡持）

唐來三和（又云 東來亭）

錄山人

●蓬萊山人龜遊　●文子　●戀川春町　○唐來三和　●可笑　○錄山人信普

戀川春町（又云 酒上不埒（さけのうへふらち））

芝全交

●田中益信　●通交　●芝全交　●櫻川岸田杜芳　○七珍萬寶　●芝甘交

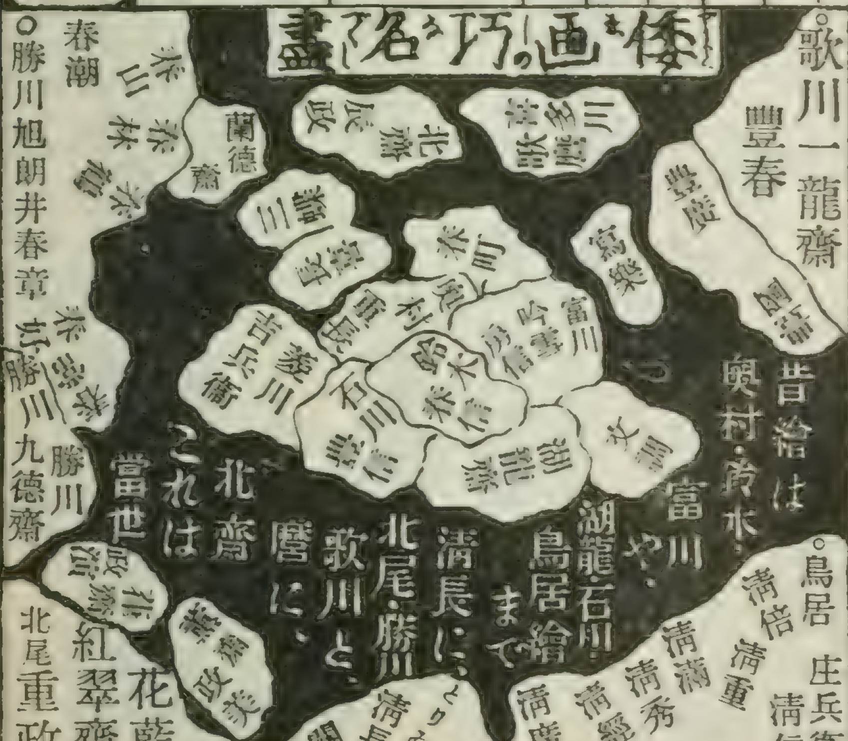
森羅萬象　後號 萬象亭　全改 桂林舍　又云 竹杖爲輕　風來山人

七珍萬寶　後號 森羅亭　今云 二代目萬象亭

又焼亭鉢冠姫

稗史億說年代記

草雙紙の畫工に限らず、一枚繪の名ある畫工、新古共に載する。尤も當時の人は直弟又一流あるを出して末流の分はこゝに省く。○但次第不同なり。但し西川祐信は京都の部故、追て後編に委しくすべし。



【大昔】昔々あつたとさの國へ、大なる桃一つ流れよる。

【同】慳貪婆、雀の舌を切つて放す。猿、龜に乗りて、龍宮城へ至る。

【仝】諸國百物語ある。化物屋敷立、腥き風吹き震動する。

【仝】有難山の寒鳥、此頃餘ツ程新しゝ。

【仝】桃太郎、鬼が島へ渡り、猿、犬、雉と共に寶物を得る。

【其後】花咲爺、灰を降らす。枯木に花咲く。

【仝】道中雙六、十六武藏始まる。目附繪を工夫する。

【仝】土佐節、外記節を唸る通り者ある。

【仝】かち〱山の奥にて、猿蟹の合戰あり。狸、正直爺をたばかる。

【仝】蜘蛛の巣絞りに力紙をつけたる泥棒、勾引はやる。

【仝】茶筌髮、まき羽織の人、作り髭にて出づる。

【仝】通り者の諱を通人とそやし奉る。

【仝】兎、土舟をたくみて敵討ある。狸、最期。

【同】落斷、口合といふもの初めて出來る。〽トいうたと落す。

【仝】山谷通ひ吉原馬はやる。編笠にてぞめく。

【仝】雨落の細螺、珍しく洒落る。

【仝】鼠の嫁入あつて晴天に雨降る。化猫、どぶ鼠謀叛。

【仝】色子との出入、劍術の勝負よりお定まりの敵討起る。

【中古】野暮と化物を初めて箱根の先へ送る。

【仝】牽强の後仕舞ひは、此時よりぞ始まりけりといふ。

【仝】朝比奈、見越入道をほろぼす。金平地獄巡り。

【仝】辨慶島へ渡る。女島の王、辨慶と首引、小人國へ大きなる鶴降りる。

【仝】待兼山より時鳥出づる。

【仝】口合を秀句と改め秀句を地口と改まる。

（本）この頃は草雙紙かつてなし。

（仝）物語と名づけたる本、松會より出る。

（画）菱川吉兵衛の繪本はやる。傾城高尾を初めとし一枚繪に出る。

（仝）一枚繪、繪本彩色摺は紅を用ゐず丹か又は蘇芳にていろどる。

これは此頃の板元なり。即ち奥書をこゝに記す。

松會開板

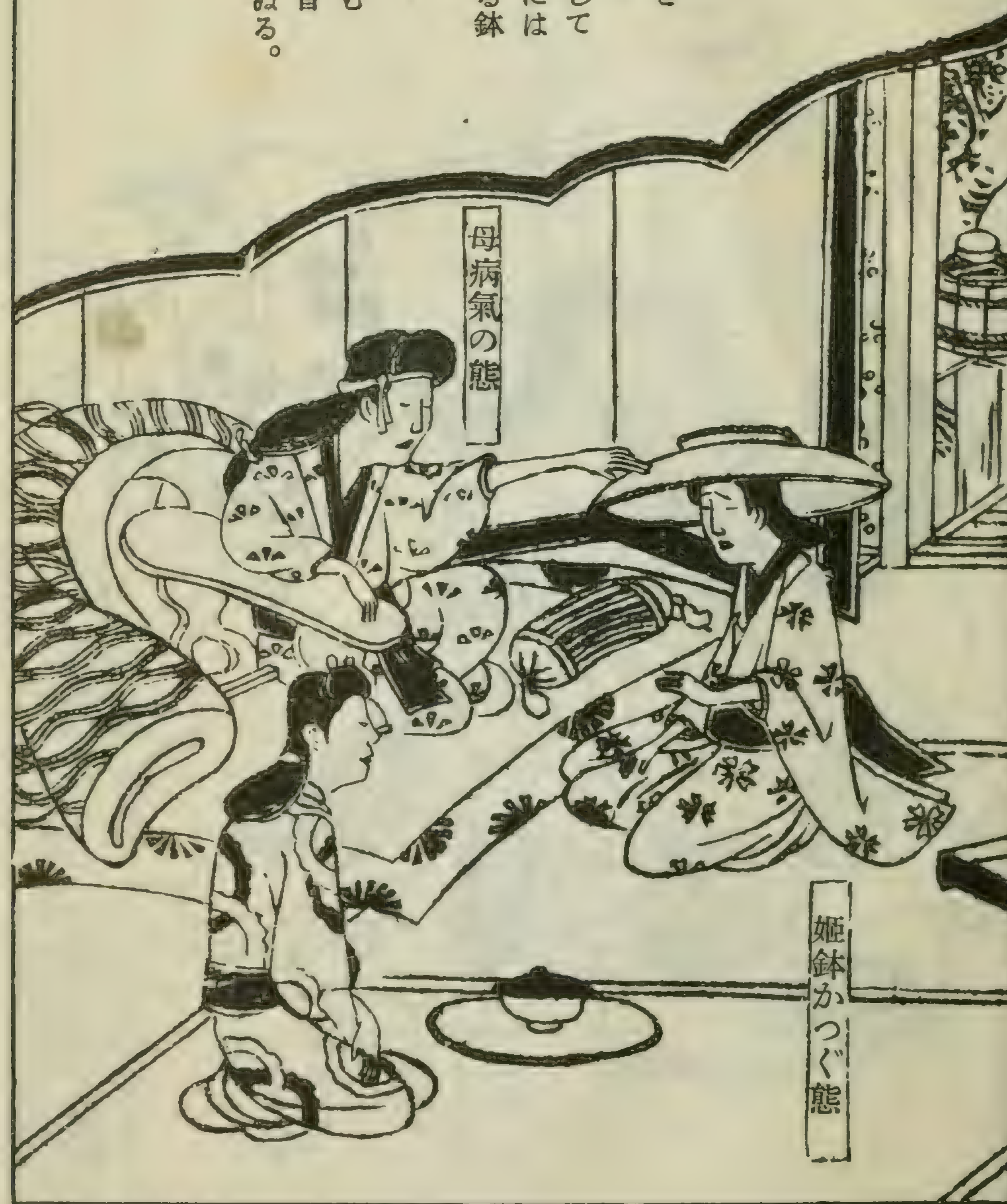
その昔、何時の頃にやありけん都の片邊に平太となんいへる者ありける。元より家富み豐に暮すが中にも、常々一子なき事を憂ひてければ朝夕に觀世音を念ずる志、感應ありけん、遂に一人の眉目よき女子をぞ儲けゝる。かゝれば父母の喜びいふばかりなく、尚行末娘のめでたからん事を祈して年月を經る程に、娘は早十二といふ年の春をぞ迎へける。さるが中に母、風邪の心地と打惱みしが日々夜々に衰へ、



今はの際となりて娘を近づけて、いふやう、「妾はあの世の道へ赴くなり。おことが行末をも見ずして先立つ事の悲しさよ」と涙堰きあへず、傍なる手箱より重げなる包取出して娘の頭に戴かせ、上には肩の隠るゝばかりなる鉢を冠らせ、

母、かくぞ詠みける、

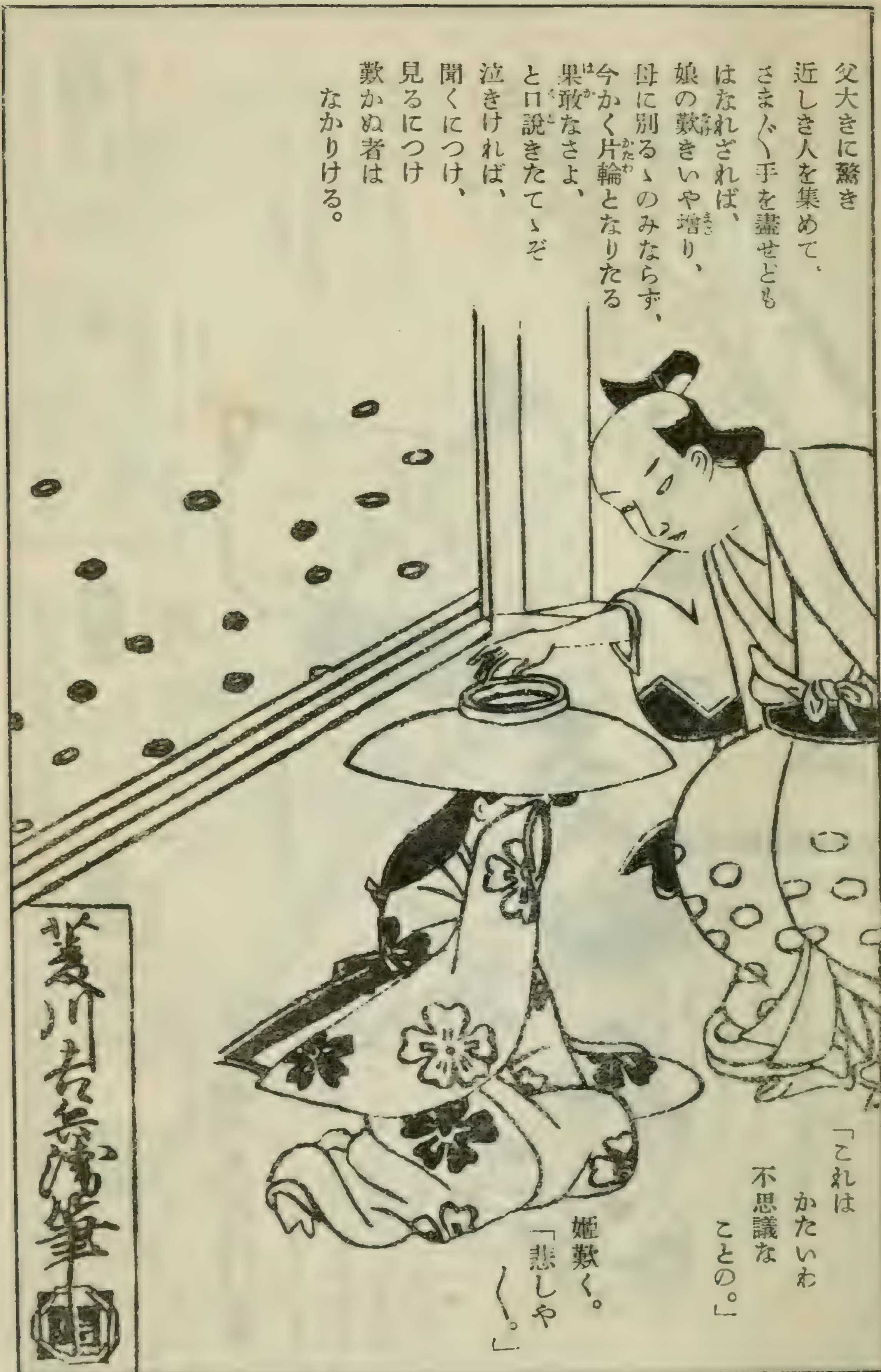
さしも草深くも頼む観世音
誓のまゝに戴かせぬる。



さて一首の歌を詠みて、
母は空しくなりければ、
家内の歎きいはん方なく、
娘はわけて別れを悲しみ
前後を知らず歎きけるが
やう〳〵に心を鎮めて、
悲しくも野邊の煙となし
にける。
兵太は形見の品々を
改めんと、
娘に着せおいたる鉢を
とらんとしけれども、
頭に吸ひつきて更に取れず、



「法力の奇特を
見せうぞ。
のうまく
さまんだ、
ばさらだ、
おのれ
その鉢を
とらいで、
おかうか。」


父大きに驚き
近しき人を集めて、
さまゞ手を盡せども
はなれざれば、
娘の歎きいや増り、
母に別るゝのみならず、
今かく片輪となりたる
果敢なさよ、
と口説きたてゝぞ
泣きければ、
聞くにつけ、
見るにつけ
歎かぬ者は
なかりける。
「これは かたいわ 不思議な ことの。」
姫歎く。
「悲しや〱。」
菱川吉兵衛筆

赤本 赤本初めて出來る。表紙一面の表題に繪を書かず、紙を黄色に染める。

仝 赤紙の外題に、白紙の表題をはる。この時、表題に繪を書入るゝ事はじまる。

畫工 鳥居庄兵衛といふ者大きにはやる。つゞいて清倍行はる。

黒本 黒表紙に青赤の外題をはりて黒本と稱す。外題表題の紙を俗に色紙短冊といひはじむ。

作者 地本屋の筆者丈阿といふ人、赤本を作り、作者の名を出さす。ナント子供衆、合點か〳〵の書入、此人より起る。

かくて年月を過すにつき親しき人々寄集り、何時まで男の獨り住にても濟むまじとて、勸めに任せ後の妻をぞ迎へける。それには變りて、姫は生れもつかぬ片輪を恨み、明暮歎き悲しみけるが繼母はつく〴〵と姫が片輪なるを疎み憎みて、夫の手前ばかり親切に見せかけ、留守になればいろ〳〵の



「うとましいあまではある、穀潰しとはおのれが事ぢや。この棒で打据ゑてこますぞ、けちいま〳〵しい。」

近所の人、とり支ゆる。「いやもう興がる事ぢや。それでは堪忍がなり申すまい。先づ平に〳〵。」

繪師鳥居清信筆


姫は餘りの
悲しさに
亡き母の墓詣りして
わが身の不運を託ち、
もはやこの世に
甲斐なき命なれば
とく〲迎へとりてたべ
と、打臥してぞ
歎きける。
「南無頓生菩提
南無阿彌
〲。」
咎を拵へ折檻するぞ
あさましき。
「のう、かゝさま
許して下され。」



父も妻(の)言葉を誠として、姫を憎みければあるにもあられず、立退きしが、道にて盗賊に出會ひ難儀する。
「てんと嵐富之介が舞臺顔と來てゐる。これ姐さん待たしやれい。」
おぢが悪くはせまいぞ。
「やつちやしてこい。大分甘いもさぢや。」
「のう、恐や、怖ろしや。命ばかりは助けてたべ。」
鳥居清満画

青本 白紙又は赤紙の書外題に、黄表紙をかけたる本をはじめて製す。是を青本といふ。

全 繪師の名を雙紙の終りへばかり出さずして、上中下の分ちなく、ゆきなりに名を誌す。

畫工 鳥居清秀、清重、富川吟雪、富川房信、田中益信、江戸繪と號して諸國にはやる。

全 奥村重長、石川豐信の繪はやる。田中益信は、草雙紙の、畫作を著す。

作者 文字、通幸、和祥、丈阿、専ら雙紙を作る。総に作者の名を出す事は此和祥より始まる。




遣手婆、話する。
「あれは菅笠では
ござらぬ。
皿鉢の類ぢや
さうな。」
亭主
いぶかる。
「好い器量の娘ぢや、
合點の行かぬ。五十兩なりや
こちの抱へにしても大事
ない。笠をとりやいの。
親のため勤めするか、
かわいや〳〵。」
「そなた、いくつに
なりやるぞ。
ても良い子の。」
「不思議な
ことの。
早う
ぼい出す
がよう
ござん
す。」
繪師富川吟雪

鱗形屋山本の本、おびたゞしく賣れる。

青本　一代記敵討、武者繪本等にたまさかに序文有。

赤本、青本、黒本、三色の雙紙、ならび行はるゝ。

富川が繪の風は、鳥居に似て少しかはる。

豆繪といふもの、富川、鳥居より始まる。

玉屋新兵衛、桶伏の本草雙紙の大當り。

鉢かつぎは片輪なること現はれて大磯にも住家ならず追出されければ、當所もなしに迷ひ出るに、百姓ども、姫が姿を見て、化物なりとて驚く。



赤本は此節絶ゆる。

青本

青本を新板として黒本は古板と稱す。

仝

青本に彩色摺（すり）の外題をはりて鱗形屋（うろこがたや）より始めて新板。

画工

鳥居清満、同清經、同清長、北尾重政、いづれも同じ繪風にて、少しづゝの變りあり。

仝

鳥居家の風、清經よりはじめて、少し當世に移る。此頃の書入れ文句に野暮なる洒落混る。

作者

喜三二、通笑つくる。戀川春町一流の書を書出して、是より當世にうつる。

姫は當所（あてど）なしにさまよひけるが、とある渡し場に至りて、何卒その舟へ乗せて下され、と賴みければ、船頭、乗合の人々、怪しき姿を見て、舟へ乗せること叶はずとて、艪を押切つて漕出（こぎいだ）す。かゝるところへ以前の百姓ども大勢、化物を打殺せとひしめいて、か弱き姫を取卷きて、既に危く見えたる所へ



「おれと一緒に歩（あゆ）びなせえ。何ぞ面白い事があるだらう。」

「だん〳〵の御禮は言葉につきませぬ。嬉しや〳〵。」


江戸者と見えたる二三人
つれの男來かゝりて、
この態を見るより、
不憫にや思ひけん、
大勢の百姓を
なだめて
歸し、
先づこなたへ
來るべしとて
姫を伴ひ、江戸の
方へぞ、いでにけり。
北尾重政画
「何でも
あやしゝに
牡丹だ。」
「王子路考にそのまゝの風俗だ。
田舎娘の所作ごとが
見たい。」
清長画
「なんと吉公、
すとんだおむく
ではないか。」
此時代の通言也


さて彼の男と連立つて江戸へ來りしに、深切とは思ひのほか、田舍歩きの大の山師なれば、内へ歸るや否や大勢の友達と相談の上、何でもよき金儲なりとて、姫にいろ〳〵の藝を教へて兩國へ見世物に出す。
「さてお目通りに控へましたるは、新下りの太夫、御評判の鉢娘にございます。いよ〳〵これより藝當にさしかゝらせまする。
テンカラ
〳〵
〳〵
〳〵
ハリトウ〳〵〳〵
さて〳〵〳〵この次のかぶり業。
北尾政演画
「さあ今が前藝々々。評判の鉢娘ぢや。」



青本
草雙紙いよ〳〵
酒落る事を
專一とする。
當世風躰
此時より始まる。

袋入
袋入本始まる。
茶表紙に細き
外題。
新袋入にして
青板とは別板なり。

作者
芝全交出る。
喜三二は洒落たる事
を作り
通笑は人の
常にすること、
なす事の穴探し妙也。

畫工
柳文調、役者似顔の
元祖、
勝川春章
續いて
似顔繪を書く。

鈴木春信、湖龍齋、
女繪の一枚繪
一流なり。
柱隱し女繪本はやる。


鉢冠姫を見世物に出した所が、一向評判もなくまづさつと二百兩ばかりの損をしければ、これではいかぬと、此度は幸ひ三味線なども教へたること故、藝者にして押出したところが、今度はとんだ大評判にて、鉢かつぎだから轉ばしたら割りやうもあらうかと、ためになるお客大勢出來て、見世物の損はさつそく儲け出しけり。
瀬戸物
中古の清長画
「早く歩び給へ。是からずつと、それずい行きの、ぐい上りのずい洒落の、ぐい歸りといふ所はどうだ。」
中古の勝川春章画
「此頃は
無ぶつぱらつたから青樓も面白からず
さつすと こんだこと ね」
中古の北尾重政画
「其の鉢がとれたら頭は直に焼接にして貰ひやせう。」

或時心安くする客大勢にて相談をつけゝるは、何卒(たつて)して頭の鉢をとつてやりたいものとて、色々すれどもはなれぬ故、この頃はやりの瀬戸物焼接(やきつぎ)に頼んだら、ひよつとして取りやうもあらうかと大勢にて友達の焼接へ連れ來り頼みかける。



青本

草雙紙は大人(おとな)の見るものと極まる。

画工

北尾勝川の浮世繪はやる。春章を俗につぼといふ。

仝

歌川豊春、浮世繪に名あり。鳥居清長、當世風の女繪一流を書出す。世に清長風といふ。

仝

一流ある畫工、おの〱畫のかき方、當世風にかはる。

作者

芝全交が社中萬象亭、雙紙を作る。戀川春町畫作。萬象亭、全交、可笑味をおもにとる。


焼接の手際にも、鉢冠ばかりはいかぬ事と断りけるにぞ、もはや鉢の事は思切つて藝者を(よ)して稽古所を出し、親方がゝりにて暮しけるが、頭の恰好は悪けれど、器量は美しき生れ故、張りに來る人多く、姫も萬更でもなければ、面白く憂さを晴らして暮しけり。
古風の春英画
「一段さらつてくんねえ。」
「おらあお前にすゑてやりてえ。」
「すゑてやるのは恩ならず、すゑさせるのを恩にしてかえ。」
古風うた麿画

青本

青本、大當りを袋入に直す。表紙の白半丁に口のりをつけぬ事起る。

画工

春好續いて似顔繪を書出す。俗にこれを小つぼと稱す。但し役者、角力也。

仝

蘭徳齋、春道一度繪の姿かはる。春朗同斷。此頃の雙紙は重政、清長、政美、政信、春町なり。

仝

政美、政信、繪の姿一變する。勝春、英、役者、角力の似顔繪をかく。

作者

通笑、全交、喜三二、三和、春町、萬象、杜芳、いづれも大當りある。

鉢かつぎの稽(古)所大きに評判よく、何處の浦でも女の子の稽古屋は淨瑠璃附りにて大概は張連中の多きものなるが、此娘にも手足をつけたがる者大勢ありて、日毎に入込むのらつき連中、てんでに入れ札の心持にて居る中にも有徳なる町人の息子株、獨り住の徒然に慰みながらの稽古に來りしが、鉢かつぎが心ばえ優しきに心を寄すれば、姫も流石に萬更でもなく、誘ふ水あらばの折節なれば、錦木の面倒もなく洒落かけける。



草雙紙 青本 だん〳〵と理窟におちる。

女繪の姿は、画工 清長に始まつて春潮に至り、當世に變化する。

彩色繪の遍數、仝 中古に倍す。江戸繪、ます〳〵奢し。

柱かくしの女繪は 仝 湖龍齋よりはやり出し清長に至つてます〳〵世に用ゆ。

森羅亭萬寶、作者 雙紙を作る。烏亭焉馬久しく廢れたる落噺を再興す。談洲樓と號す。

彼の息子株と姫が戀中今は互に慕り合ひて、一世も三世も變らぬ女夫などゝとんだむづかしき譯となりしが、所詮親方の手前といひ、又兩親の心底を恥ぢて二人連立ち行方知れずなりければ、一家親類從兄弟再從兄弟、伯父伯母、店請、親分、子分、大屋樣までの大騒ぎとなり、やう〳〵に尋ね出して親里へ連歸り二人の胸を尋ぬるに、




夫婦にならねば生きては居ぬとの相惚にて意見も絲瓜も聞入れねば、兩親を始め親類も呆返り
あのやうな片輪者を嫁にとつては、嫂 姉婿大勢に對しても外聞惡し。何卒して片輪者を思ひきらせんとて大勢賺りつ賺しつ敎訓する。
「お前の皿ぢやアねえがどうしても離れねえ氣でゐなさるか。オヤあつかましいのう。」
ハテお前が料簡、かつぱによ何だかかつぱり分らねえぞ」
「コウ地口をいふたらおれがやうにいふもんだ。」

青本の趣向甚だ高慢になる。

青本

袋入のあとを青本にすることはやる。

繪のかき方、また〱當世に移る。

畫工

北尾、勝川、歌川、おの〱その名高し。

・歌麿當時の女繪を新たに工夫する。

仝

北斎獨流の一派をたつる。

豐國、役者似顔繪に名譽。歌麿の錦繪、

仝

北斎の摺物世に行はる。

いづれもめでたし〱。

作者

千秋萬々歳。

大勢の意見も馬の耳に風なれば兩親も今はせん方なく、もて倦みてゐる所に智慧自慢の男罷り出ていふやう、是はよき謀あり、まづ嫂大勢を美しく粧りて並べおき、其中へ鉢かつぎを呼出し、嫁の器量競べをし給ふべし。この事の定日定まらば、鉢かつぎも、



恥を思ひて己より身を引く事疑なし、といひければ、皆々尤もと同じけり。又鉢かつぎは器量競べの噂を聞くより、我身片輪のことなれば、嫁競べの座敷へ出ては、いとしき人に恥を與ふるにひとしければ、何處へなりと身を忍ばんと息子にも忍びやかに語り聞かせ互に名殘の涙堰きあへず、其夜も明けゝれば泣く〳〵立出でんとする折柄、不思議や戴きたる鉢がばと落ちて中より數の寳物自然と湧出でければ、二人は喜び限りなく、嫁競べの定日をぞ待ち居たる。




當時部
かくとも知らず嫁競べの定日となりければ、嫂大勢こゝを晴ぞと着飾りて、白粉べつたり油こて〳〵なすりつけて打掛捌きに蹴躓くやら大騒ぎにて、今や出ると斜に構へける。もし鉢かつぎ出たらば、一度にどつと笑はん、とさゞめきたつて居る所へ一間の内より鉢冠姫しとやかに立出る。その有様、嬋娟たる容貌、桃李芙蓉の花の顔、實にも氣高き粧ひにて年は二八を過すとも、
豊廣画
長喜画
婿大勢身をひと〳〵して、何れも、嗅ア自慢これ見てくれでて並居る。
婿、心の内で曰く「成程おらが嗅ア奴はどう見ても美しいわえ。」
婿壽入
同斷
豊廣画


まだ二九からぬ
愛嬌に
色ある小袖を
襲ね着てしづ〳〵
座敷に直りければ、
並居る姉婿
嫂も、おのが
手盛の毒食はゞ
皿にはあらぬ
鉢かつぎに、
一ぱい参つた
大勢が
呆れて言葉も
なかりけり。
婿書入
同斷
豐國画
「何とどうだ。
又美しいの
段が違ふだ
らう」と、
これも心の内
で思つて
居る。

さても鉢かつぎが眉目よき
姿を見て、両親はじめ
大きに喜び
早速
婚禮も首尾よく調ひ
夫婦睦じく榮えけり。
爰にまた鉢かつぎが
實の両親は、
かの繼母の
邪より
娘を追出し
たる報にて
忽ち巡りて二人とも
乞食と成下り、やうやう
その日を送りけるが、
或時姫夫婦大勢の供を
連れて、かの過ぎ去
りし母が信心したる
観世音へ詣でけるが、
かの門前にて不思議にも
巡り合ひける、



姫は一目見るより、わが
父上とは思へども、
數多の家來を憚りて、
せき來る涙をおししづめ、
一先づ我家へ歸りける。
兎角して夫にもかくと告げ
知らせければ、其後乞食を
取上げて一生安樂に過しける。
是をや仇を以て
恩に報ずるとや
いひつべし。
偏に大慈大悲の妙智力、
行末目出度く
榮えけり。



此畫は鉢かつぎの本文をかりて、古代より十年前の文法に從ふ。之に依て當時の青本と口調大いに違あり。すべてこの十五丁の圖は一流の形を眞似て青本通のお慰みに備ふるなり。必ず筆意をかねたると思ひ給ふな。各々流儀の鑿と穴とを穿ちたるに非ず、たゞ繪の形を似せたるのみにして、近くたとへば役者の聲色をつかふが如し。

作者名寄拾遺

戀川好町

亀山人門人 亀遊女

萬象門人 若松萬葉門

畑芋輔

千差萬別

壁前亭九年坊

竹塚翁東子

南陀伽紫蘭

當時体の問屋 (宝) 寶屋大吉 茶町 追加

▲中古まで自畫作をする人名

田中益信

戀川春町

▲中古まで自筆自作の人

觀水堂丈阿

畫工名盡

これは來草雙紙板下を作の部

鳥居（關）清長

勝川九徳齋春英

喜多川歌麿呂

北齋辰政

北尾政演

蕙齋政美

▲唐來三和 廻文の外題を作る　きるなの根から かねのなるき

▲昔より青本の畫をかゝざる人の名

奥村

鈴木春信

石川豐信

文調

湖龍齋

勝川春章

春好

春潮

春林

春山

春鶴

春常

勝川門人數多あり

歌川豐春

此外にも漏れたる畫者多かるべし。追て加之。

▲名人戲作者六家撰

喜三二

戀川春町

萬象亭

通笑

芝全交

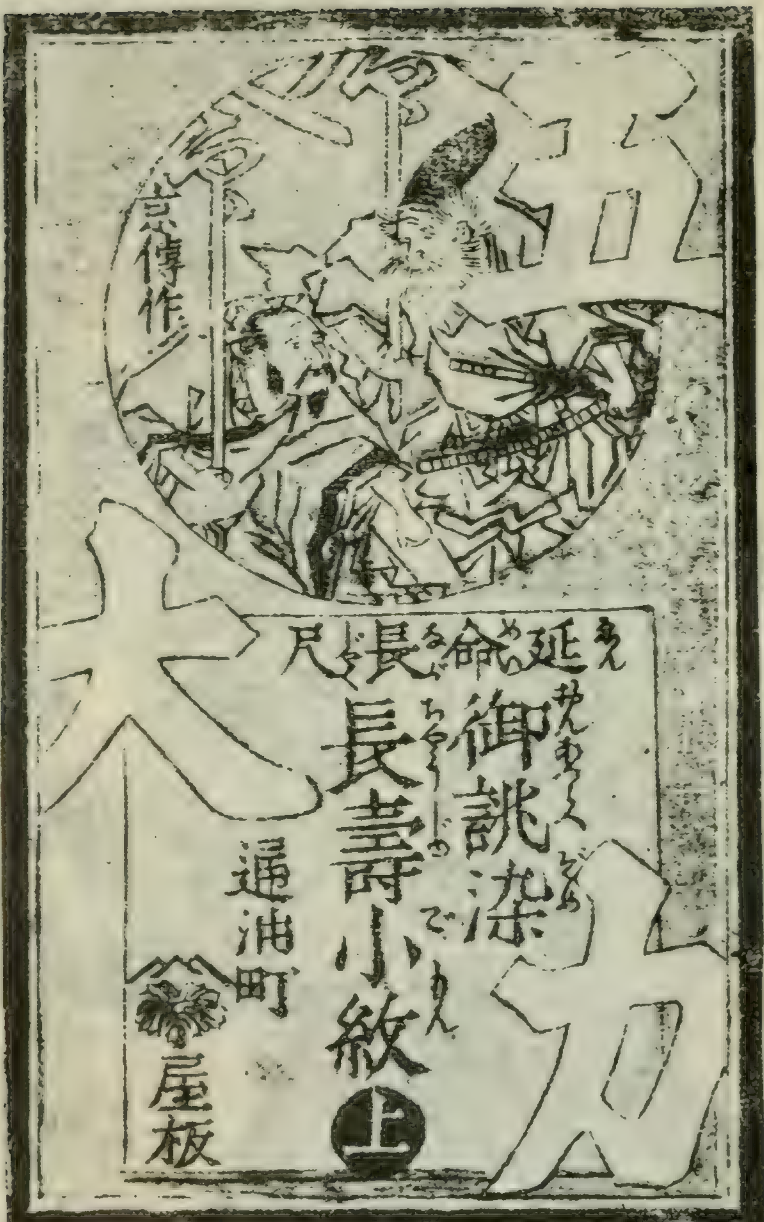
唐來三和

三馬自畫作

名作青本略記

一 金々先生榮花夢　戀川春町當る
一 高慢齋行脚日記　同
一 鼻峰高慢男　同
一 三幅對紫曾我　同
一 無益委記　同
一 鸚鵡返文武二道　同
一 悦贔屓蝦夷押領　同
一 三升增鱗祖　喜三二當る
一 鐘入七人化粧　同
一 桃太郎後日噺　同
一 空多雁取帳　同
一 虛言八百萬八傳　同
一 長生見度記　同
一 文武二道萬石通　同
一 大違寶船　芝全交當る
一 遊技之定卵角文字　同
一 鼻下長物語　同
一 大悲千祿本　同
一 拜壽仁王參　同
一 十四傾城腹の内　同
一 夫從以來記　萬象亭當る
一 莫切自根金生木　唐來三和當る

其外大當り擧げて數へ難し。別して萬象、通笑の部は大全にゆづる。

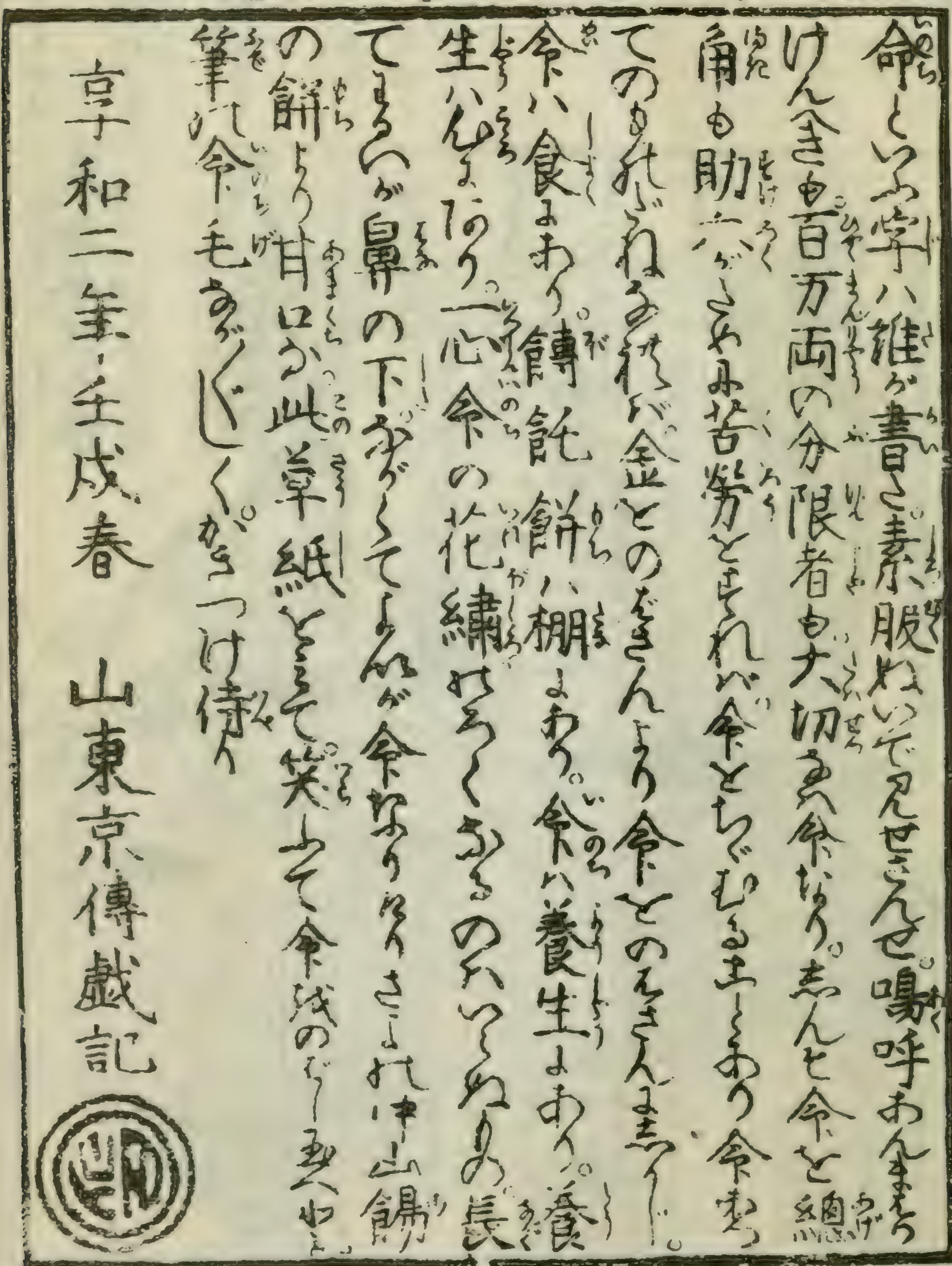

京傳作
延命長尺
御誂染長壽小紋
上
通油町
屋板


京傳作
延命長尺
御誂染長壽小紋
通油町
屋板
中
京傳作
延命長尺
御誂染長壽小紋
下

命といふ字は誰が書いた。素服脱いで見せさんせ、鳴呼按摩鍼痃癖も百萬兩の分限者も大切な命なり。しんぞ命を總角も、助六がために苦勞をすれば、命を縮むることあり。命あつての物種なれば、金を延さんより命を延ばさんにしかじ。命は食にあり。餺飥餅は棚にあり、命は養生にあり、養生は心にあり、一心命の花繡、のろくなるのはいらぬもの、長くて惡いが鼻の下、長くてよいが命なりけり小夜の中山、餳の餅より甘口な、この草紙を見て、笑うて延ばしたまへと、筆の命毛ながくヽしく、書きつけ侍り。

享和二年壬戌春

山東京傳戲記


命といふ字ハ誰が書さ素服ぬいで見せさんせ嗚呼あんまはりけんぺきも百万両の分限者も大切な命なり。志んぞ命を總角も助六がためみ苦勞をすれバ命をちゞむることあり命あつてのものだねなれバ金をのばさんより命をのばさんにしかじ。命ハ食にあり。餺飥餅ハ棚にあり。命ハ養生にあり。養生ハ心にあり。一心命の花繡のろくなるのハいらぬもの長くてわるいが鼻の下ながくてよいが命なりけり小夜の中山飴の餅より甘口な此草紙を見て笑うて命をのばしたまへと筆の命毛ながくゞしくかきつけ侍り

享和二年壬戌春　山東京傳戲記

錢金にも代へられぬものは命なり。世の中に大切なる物を、命から二番目といふ。さすれば命ほどの寶はなし。その命といふもの、何處から出るぞといふに天地造化の神、多くの命を仕入れて、忉利天の一丁目に店を出して、命の問屋をし給ふ。



造化の神、古今人の命の棚卸しを仕給ふ。

「神代の時分は無性に命が長いから、勘定に手間がとれる。

「彦火々出見尊は〆高が六十三萬七千八百九十二歳、鵜茅葺不合尊は八十三萬六千四十二歳だ。このやうな長い命は置所に困る。倉數がたんと出ては勘定が引合はぬぞ。」

命は人ばかりにあらず鳥類、畜類、魚、虫螻、草木に至るまでそれぞれに仕入あり。鶴龜の長き命、蜉蝣の一期の短き、松の千歳、朝顔の一盛り、皆定まりの命なり。

木火土金水の五行は命の番頭なり。この五人にて、命を受持にして支配する故に、すべての人の命は、木火土金水の番頭持なり。一人缺けても命全からず。

命の仕入、符牒がついて刀掛のやうなものにかけてある。



日月の物指にて命の長短を計る。

「繁華の地は人の養生が悪うござれば多分短い命が賣れます。とかく長い命は田舎向でござります。

命といふもの、太く丈夫に見えても短きあり、
細くて弱々したるにも長きあり、
見かけにはよらぬものなり。
「一代の守本尊、わが預り子の
生れる度に、命の問屋へ来り給ひ、
それ〴〵の因縁に従ひて、或は長く
或は短き命を買ひとりて授け給ふ。
少しも依怙贔負はなされず、
兎角、長短は
定まれる因縁なり。
「命ばかりは賣買にならぬと
いふは尤もなり。
命を賣買にし給ふは
神佛ばかりなり。



「男の命は二十五と四十二、
女の命は十九と三十三、
これらは
厄年というて
人が嫌ふ故に値段安し。
八十八は米の守とて、
目出度がる故、値段高値なり
七十八十の命も、
よい〳〵になり、腰が抜けたり、
手足が利かなんだり、
老耄したりすれば、
生きてゐる甲斐もなき故
假令命が長くても
これらは、これらは
ひけ物にて値段格別安し。



東方朔が命は九千丈、浦島太郎は八千丈、三浦大介百六丈、皆これ天より定め給へる命にて、神佛のお細工にも伸び縮みの出來にくきものは命なり。

然しながら、善をなせば短きも長くなり、悪をなせば長きも短くなる。とかく心の持ちやうにて、伸び縮みもまた無きにあらず。

「東方朔が命は槍の如し。浦島太郎が命は臺傘の如し。三浦大介が命は立傘の如し。この三色は表立ちたる大切な道具なり。命もまた人の爲に大切な道具なり。合點かく。



彭祖が命は鯨差にて七百丈顔回が命は上總木綿にて丈なし。長いもあれば短いもあるは、八百屋の緣の下と、人の命なり。

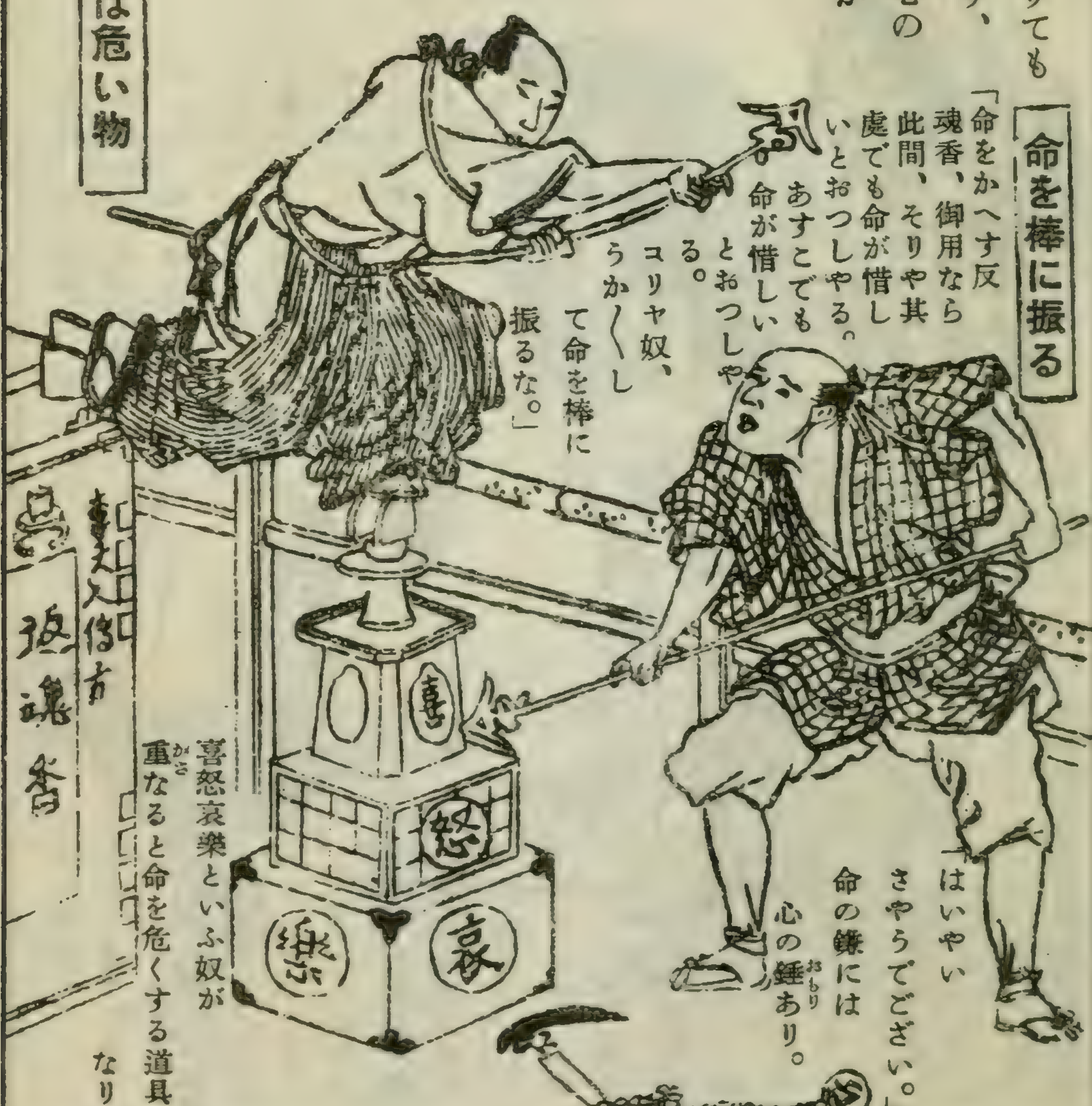
「己が命を鎗に譬へたは命を大事にしろ、遣り放しにするなといふ事だ。」

莫邪が劔も持手による。長い命を授りても持手の手置が悪ければ中途で折れたり、先を縮めたりする事あり。これ皆一心の持ちやう悪しく、または不養生なるが故なり。

命といふものは、譬はゞ居合抜の刀の如し。大事の命を腰に差して高いところへ足駄穿いてのぼり、長い命を抜いて振廻すやうなものなれば、命ほど危きものはなし。悪くすると踏みはづして命を失ふ事あり。用心せずんばあるべからず。

命は危い物

命を棒に振る



命といふものは手置が大事なり。一心の手置が悪いと、如何ほど長き命を授かりても、我と我が手に縮めることあり。怒り、腹立ち、憎い、可愛い、喜び、悲しみ、惜しい、欲しいの類皆命を縮める役者なり。



命を延ばさんとて金銀をふんだんにつかひ、上無き樂しみをしても、尻のつまらぬ事あれば、延ばした命却つて十層倍に縮まることあり。食はず貧樂といふ諺もあり、雪隠の窓から梅が香を慕ひ、肥船で月見をし、土用前に時鳥を聞き、盆過ぎに初鰹を食ひ、施餓鬼船の夕涼み、日蓮忌の芝居見物、接待茶を啜りながら焼團子をしてやり、小鰭の昆布巻で濁醪をひつかけても、樂しみに二色はなし。心さへ安ければ、命の延びること恰も小む(す)めの背丈、狸のきん玉、南風にあてたる飴のごとし。



命を延ばす

世の中に命ほど大事なものはなけれども、
その命と釣替なものは金なり。
金といふやつが、得ては命にも向ふ
ものにて、金には命をとられた事の
昔から數へ盡し難し。

金は命と釣替

「命は長いほどがよけれども、
年寄りて子なく、かゝらうしまも無き
身にて、べん〳〵と長生するも亦惨め
なものなり。
これは畢竟、命に手足を搦められる道理
なり。

「わしが亭主は水菓子賣で
こがなし〳〵といつて賣り歩き、
とう〳〵子が無くて、
わしが此のさまに
なりました。」

命が手足にからむ



命と釣替にせねば金持
にはなられぬ。たとへ
命に代へても、たゞ欲
しいものはかねだの大
からくりだ。

金に恨みが數々ござる。親の金を
つかふ時は、家業夢中と響くなり。
おのが金をつかふ時は、始終滅亡
と響くなり。正直律義の
帳合は格別氣樂と稼ぐ
なり、聞いて
驚く人も
なし。

命とり

女は執念の深きものにて、へびとなり蛇と
なりし例多く、道成寺の縁起でも
皆様御存じの事なり。
女の一心の蛇奴が紅猪口を嘗めた猫のやう
に、紅の舌をべろり〳〵と出しかけ、塗簞
笥の鋲のやうな眼を光らせ、解き
捨てた丸絎のやうにのたつて男の
命をとらんとする。かるが故に、
美しき女を褒めて命とりめとは
申すなり。

「好かぬ事をばいはしやんす。如何に
流の身ぢやとても、心に二つはない
わいな」と震へ聲になつて、ほろ〳〵と膝
の上へこぼしたる涙は恰も蛇の卵の如し。
そこで途には男の命をとり畢んぬ。
なんぼう怖しき物語にて候。



傾城は宵から
蛇を使ひて寄
りつかず、客は
熱くなり、もう
かへる〳〵とい
ふ心を、「何だえ、
ばからしい」と、
頭から
呑んで
かゝる。
とかく
女は
男の
命とり
なり。

酒といふ奴は人の命を削る小刀なり。故に酒を飲むことをけづるといふ。鰹節の痩せるも削る故なり。
楊子の細くなるも削る故なり。
松板の薄くなるも削る故なり。
鰹節も揚子も松板も掛替あり。
人の命には掛替なし。
削つたゞけは埋る事なし。

酒で命を削るは、小刀で削るやうなものなれば、まだ命の減るには手間がとれるけれど、女といふ奴は、男の命を削る鉋なれば、暫時のうちに、命が減るなり。用心すべし。
女は命の敵薬なること、恰も金に焼味噌、



「酒で命を削る」

「命を削ると知り乍らどうも酒がやめられねえ。どうするもんだの明神様へで願懸けをしようか。」

「さアいゝ燗だ。もう一つのめの若草とし給へ、注ぎ捨てられた燗冷しはあけてしまふがいゝ。公は寝酒の味知らずだ。」

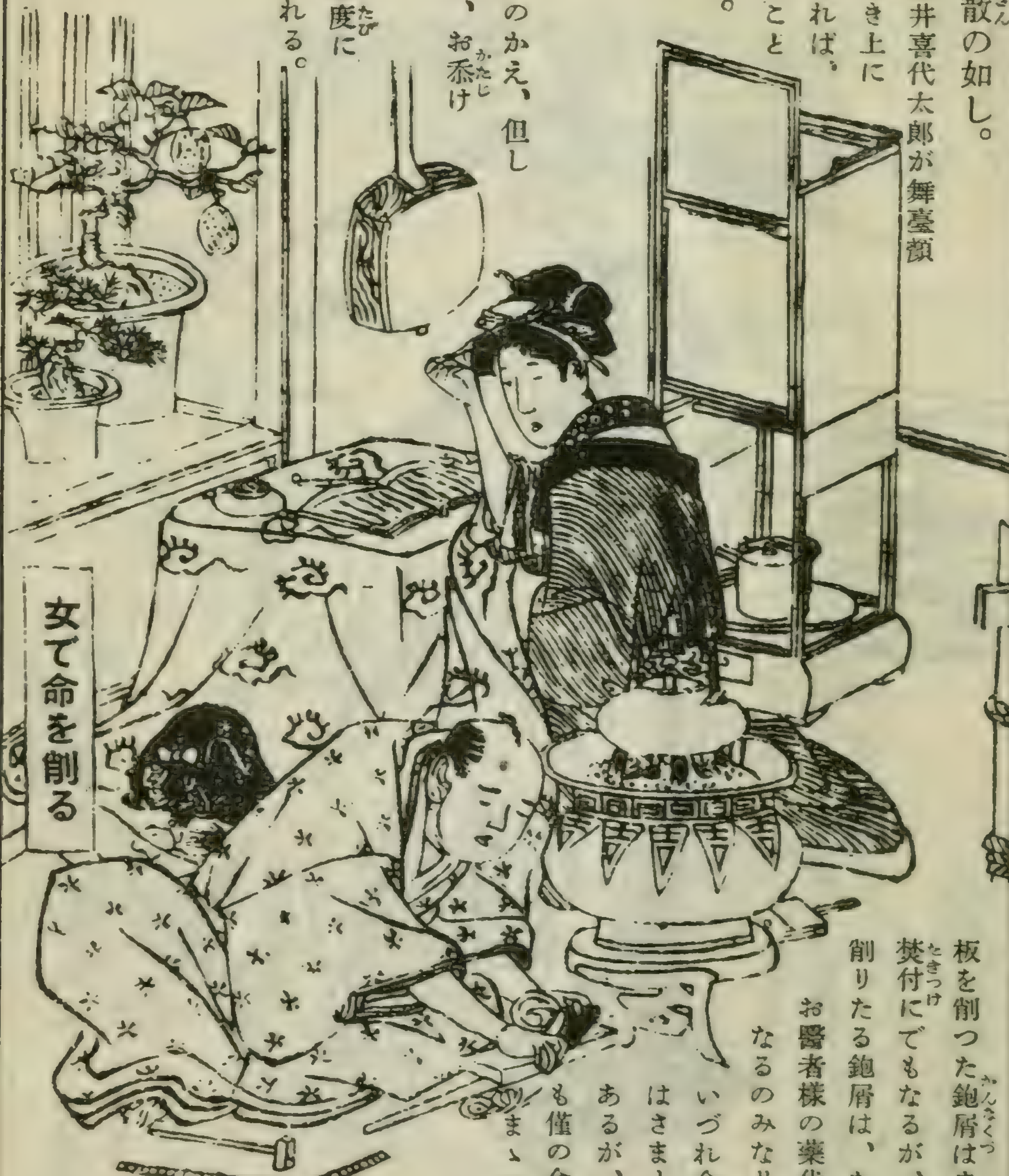
「岩田の⌃さやまはよく飲めるぞ。」

御誂染長壽小紋

蛞蝓(なめくじ)に鹽、西瓜に和中散(わちゅうさん)の如し。

この女中、岩井喜代太郎が舞臺顔ときて、美しき上に手がたんとあれば、男の命を削ること附木屋(つけぎや)の如し。

「今夜はまた遅いのかえ、但しお焦(じ)らしかえ、お忝(かたじ)けなどと云はれる度(たび)に命が削れる。



女で命を削る

板を削つた鉋屑(かんなくづ)はまだ焚付(たきつけ)にでもなるが、命を削りたる鉋屑は、たゞお醫者様の薬代となるのみなり。

いづれ命数はさま〴〵にあるが、中にも僅の命だまゝの川〳〵

道行仇寝言
夢の浮橋

悪玉か何ぞと人の問ひし時、通と答へて消えなまじ、物思はする秋の暮、

向う通るは清十郎ぢやないか、かさ屋三勝半七といひかはしたる言の葉も、そりや可愛いのぢやない、にく布團、今切りかけたは兄さんか、あぶないあぶないの事ながら、おなかのやゝも早や三月、廿日餘りに四十兩、使ひ果して二分殘る、金より大事なこの命、捨てに行くとは大膽な、飛んだ茶釜ぢやないかいな、藥鑵と見せて頬被り、昔の身ならば



「此作者は道行の夢を見たさうで文句は恰も寢言の如しだ。」

「とてもわしは捨てねばならぬ命、ところを捨てずにこゝからうちへ歸るほどにそなたは後にとゞまつて、捨てるともどうともしやれ。」

「お前はよいところへ氣がつきなすつた。命を捨てる相談は、マア七八十年延ばししやせう。」

どのやうに、しやう模様は龍田川、
高尾も比丘尼も色の道、踏迷うたる
戀の道、因果ぢや、柳、糸柳、
繋がる縁や鵺の尾の、蛇を
使ひてこれまでも、
生延びたのが徳若に、
小萬才三にお駒さん、
しまさん、
こんさん、中田圃、
一寸先はまゝの川、
遂の命の捨てどころ、
いざ彼處へと急ぎ行く。



忠臣水滸傳 京傳作 後篇五冊
當年出來賣出し申候

○**京傳店新物御披露**
△定九郎くすべ紙
煙草入品々
「これは手當りが羽二重で羊羹色なる故にかく名づけ申候
△遠州形
△富貴形
△立身形
右御多葉粉入新物、
此外品々新形あり、
にも珍しき新形いろ〳〵あり。
委しくは誌し難し。

ある人酒に酔ひ、ひよろ〱しながら、川端を通り、踏みはづして川へはまり、命危く見えたるところに、折よくとん〱唐辛子賣通りかゝり、危き命を拾ひあげる。辛き命を拾ふといふことは、

この時よりぞ始りける。

「ひりゝと辛いが山椒の粉、
ひよろりと長いは、たしかな人の
足であんべい。これは七色唐辛子
ではなくて、名前の業晒しだ。」

「あゝあぶ内といふ奴さん
酒に酔つたと見えるわえ。」



辛き命を拾ふ

からだは沈む、命は昔噺の桃の
やうに流れて
行く。

命を玉の緒といひて、命の細きこと糸の如く、また露命といひて命の脆きこと露の如し。蜘蛛の網に荒れたる駒は繋ぐとも繋ぎかねるは命なりけり。

「命長ければ恥多し、四十にして死なんこそ目安かるべけれと、」兼好法師の書殘されしも宜なるかな。長生をして恥多きは畢竟命の爲に苦しめらるゝが如し。

「一つ竈の細き煙の糸をもつて、露命を繋ぐは、千石積の船を絹糸で繋ぐよりも尚危し。



露命をつなぐ

「おれは長々の浪人者ではない。長生の業人者だ。」

命といふ奴が、時々洗濯せぬと、よく垢煩惱に汚れて、油屋の雜巾の如く汚れ、遂には命がねぐさるものなり。然し命の洗濯も洗ひ過ぐせば、手の皮を擂りむき、內證が綻びて、身代の地合が惡くなるものなれば、その程々を考へて洗濯すべし。

必ず洗ひ過ぐすべからず。

心に皺みのこらぬ様に命の洗濯をするのだ。

命の洗濯




襦袢なら一文が糊ですむが命の洗濯には小判
ごなければ糊が利かねえ。
ウタ
「さても見事や、振もよし、
裸すがたのかはいらし、
様の締めたる犢鼻褌は
何と申すふんどしぞ。
ちりから〳〵
すた〳〵
ぽらす

命の洗濯も、し過ぐせば大晦日に掛取が、野郎の冬瓜船か、五百羅漢の還俗したやうに詰めかけ、折角引伸ばした命を一時に縮める。

「命の縮むにもいろ〳〵あり。女故に命の縮むを業平縮といひ、金持の命の縮むを脹縮といひ、食物で命の縮むを舌切縮といひ、茶人の命の縮むを透綾縮といひ、かすりばかりとりたがる人の命の縮むを越後縮といふ。絹縮、木綿縮にも、それ〴〵に謂あるべし。



蛞蝓は蛙を恐れ、蛙は蛇を恐れ、
蛇は蛞蝓を恐れ、狐は獵人を恐れ、
獵人は庄屋を恐れ、庄屋は狐を恐る。
蚤虱の拇指を恐れるも、皆これ命が
惜しき故なり。
されば無益の殺生をし
もの丶命をとるべからず。
「放龜、放鰻、放鳥など、
命の親に恩を返したる
ためし多し。

そばから龜が、「これ雀、この祝にちつとおごりやれ」といへば、雀が、「オ丶、さて合點ぢや、アリヤセ、コリヤセ、ヤツトセヨイ〳〵」といつて嬉しがる。
これを名づけて雀おごりといふ。



「あなたは命の親でございます」と嬉し泣きにめそつこ鰻はめそ〳〵と泣く。

車の命は楔なり。扇の命は要。傘の命は轆轤なり、風鈴の命は短冊なり。親船に命綱あり、旅人に命金あり、いづれ命は大切なるものなり。

然るに、戀は曲者にて、その大切なる命も、戀ゆゑには失ひ易し。思ふ男を命にかけて、清水の舞臺から飛降りるも、皆戀といふ曲者の仕業なり。恐るべし。

命にかけて思ふ

萬一願のかなはぬ時は、皮は破れ骨は微塵になる。傘には古骨買もあるが、命の古骨は何にもならぬ。



侍の命は譬へば辨當持の辨當、槍持の槍のごとし。ナゼといふに辨當持の辨當は、我が持ちながら我が物にあらず、槍持の槍も、まさかの時は旦那のものなり。

侍の命は豫て君へ差上げておく命なれば我が命にて我が物にあらず。事ある時は命を的にかけて働かねば、忠義の人といはれざるなり。



忠義は重く 命は輕し

「忠義にならでは捨てぬ命」とは、加古川が金言だ。

「命は大事のものだが、忠義の爲には輕い。世の中に忠義ほど重いものは無いぞ。」

世の中に醫者ほど大事の業はなし。
醫者は人の命を預る者なれば、
少しも油斷のならぬ業なり。
「お醫者様、脈の講釋をし給ふ。
「療治は第一に脈の見やうが肝腎
でござる。心痛の病で折々
胸先でぎつくりばつたりと
動悸の打つ脈を、名づけて
拍子脈といふ。
上方では早脈ともいひます。これは療治の
きつかけがむづかしう御座る。
また、女中など、強い癪で折々痞へる症の脈を
名づけて、脈閊といひます。冷飯がきつい毒
でござる。
また、症によつて少しのうちに
いろ／＼變る脈が御座る。これを名づけて
早變りの脈といひます。風引に引返しの脈



といふのがある。これは鍼を繋ぎに打つてゐねばならぬ。また熱が強くて、この場はこの儘立別れん、方々さらばなどと譫言をいふを面脈とも、かたしやぎりの脈ともいふ、また沈んでうつを黒脈とも、だんまりの脈ともいひ、きびしく打つをちよん〳〵脈といひます。



料簡が悪いと、僅の事に
早まつて命を失ふ事あり。
破鏡(はきやう)再び照さず
落花再び枝に上らず、
一度捨てたる命
再び戻る事無し。

「わしが此叉手(さで)で命をすくつて
進ぜよう。さて〳〵危(あぶな)い事ぢや」と、
急な時は地口(ぢぐち)までがとじつけなり。
「質の流れるは利上げも出来るが、
命の流れる、仕方がない。」



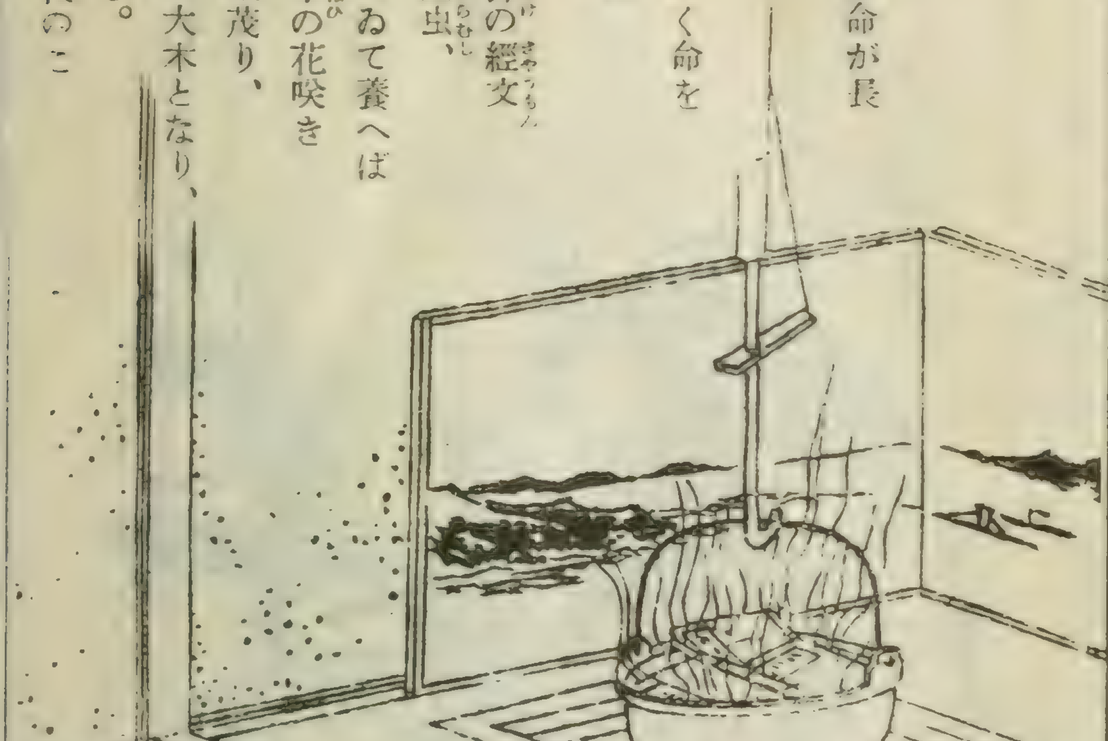
水ッ洟(ぱな)の流れるはたゞ啜るがよし。命の流れは、すくふがいゝ。

いらざる事を苦に病(や)んで、
命を縮むべからず。
命あつての物種(ものだね)なり。
死んで花實(はなみ)の咲くことなし。
金の蔓(つる)にありつくも、金のなる木
を求むるも、名の高くなるも、
子孫のはびこるも、皆命が長く
なければ大事をなし難し。

「嬉しや〳〵おれも今年(ことし)八十八になるが、
金の蔓(つる)も大分延びが見える。
名も殊の外高くなつて、天井(てんじやう)へ突抜けさう
だ。
子孫も大分はびこつたわえ。
成程、命が物種だぞ。」



人は命が物種なれば、兎角命が長くなければ、大事はなし難し。その命を長くするには、よく命を養ふに如かじ。命を養ふは草木を養ふが如くすべし。常に聖賢の書物の白水、佛の經文の煎汁をかけて、利慾の油虫、名聞の毛虫を去り、心を用ゐて養へば命よく育ち、延々として幸の花咲き富貴の實のり、子孫の技葉茂り、千歳の老松のごとく常盤の大木となり、名木の譽を殘すこと疑なし。枝も榮えて葉も茂る。千代のこ



お目度やとは、この事なり。

命を養ふ

「松は辛いと皆おしやんすけれどな命の長いは松の事だ。」

先度初會の見立の時、客の金をせしめんと炬燵の蔭により給ふ　この客、俄に大俗となり、反叫をつき手を鳴らし、新造禿とふざけしより、客をきやほと申すとかや。

一、それは老松の繰り、こつちは命といふ字の松の木が根強くなつて、どんな風が吹いても折れる氣遣ひはない〳〵つぶりだ。



「命といふ木は誰が植ゑた。白水かけて見せさんせ、あゝあんまりな―」とこの爺さま、

江戸節をも、ちつとは唸つた人なり。

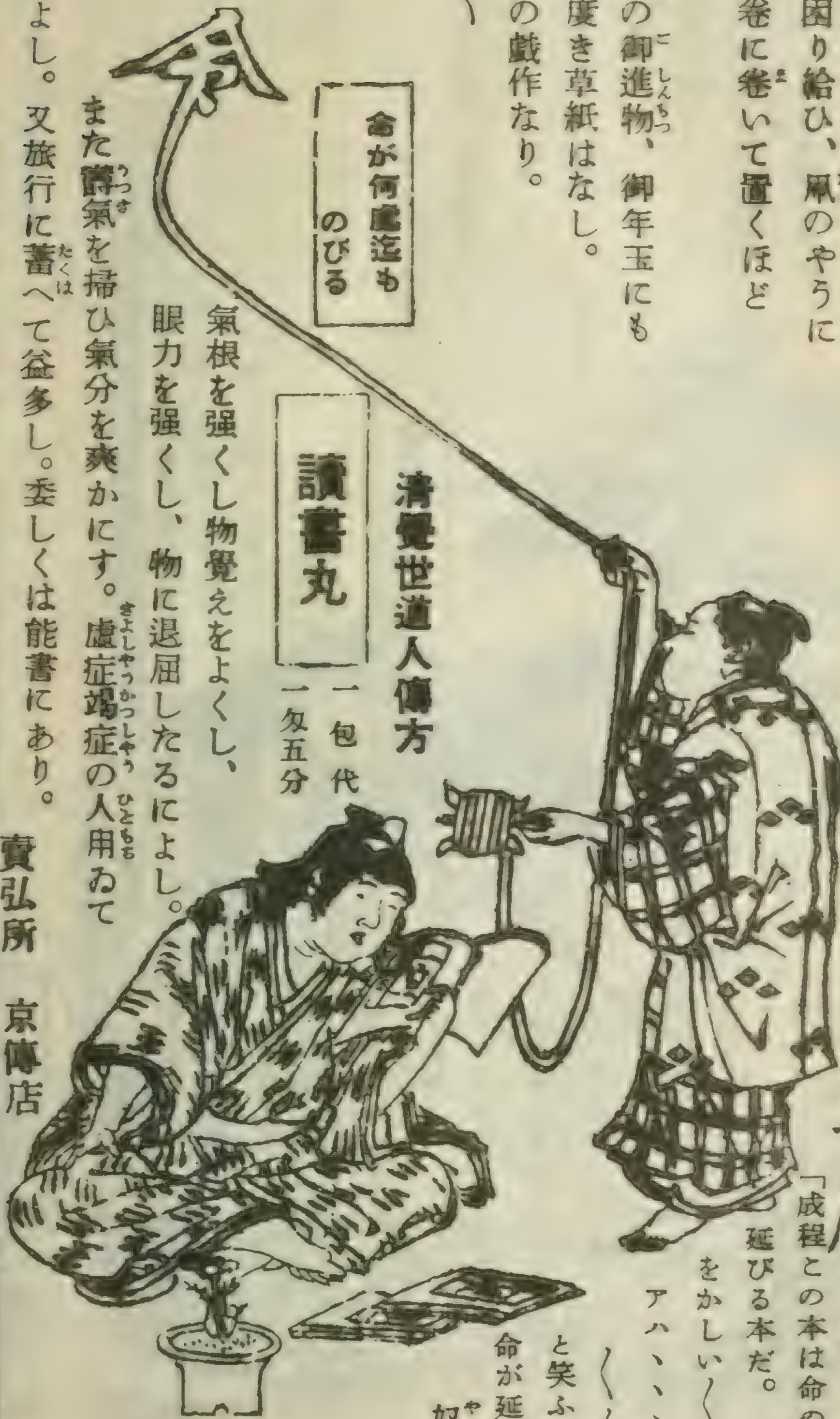
京傳戲作

命の薬といふは、笑つて暮すほどの薬はなし。この繪草紙を御覧じて笑ひ給ふ子供衆は、命が延びて長くなり、命の置き所に困り給ひ、凧のやうに命の尻尾を糸巻に巻いて置くほどのことなり。

されば、初春の御進物、御年玉にもこの上の目出度き草紙はなし。誠に延命長壽の戯作なり。

御評判〳〵

命が何處迄も
のびる



哥麿画

「成程この本は命の延びる本だ。をかしい〳〵アハヽヽヽ〳〵」と笑ふ度に命が延びる奴さ。

清覺世道人傳方

讀書丸　一包代　一匁五分

氣根を強くし物覺えをよくし、眼力を強くし、物に退屈したるによし。また鬱氣を掃ひ氣分を爽かにす。虚症癇症の人用ゐてよし。又旅行に蓄へて益多し。委しくは能書にあり。

賣弘所　京傳店



壬戌春
發兌
村
的中地本問屋
おあたりぢほんどいや
十返舎一九著

商買は草の種本。書けども盡きぬ、濱の眞砂の洒落次第、蹉跎次第の出放題。金の生る木を彫つて、小刀細工の錢攏は、作者の得手に嗜欲、趣向は書肆の金筥に、山吹色の黄表紙と一寸祝つて筆を執る。

壬戌孟陽

十遍舍一九

商賣ハ草の種本書しより浮世流行
生娘の手まりに似す。咲分泥水乃生出なり。
金の生る木を彫りて小刀細工の銭もふけ。
作者ハ引ぱり喰ひ向ハ書肆の金
仙台平山吹色乃黄ハ表紙と。一寸鍍て
筆しりを菰小扶

壬戌孟陽

十返舎一九 ㊞

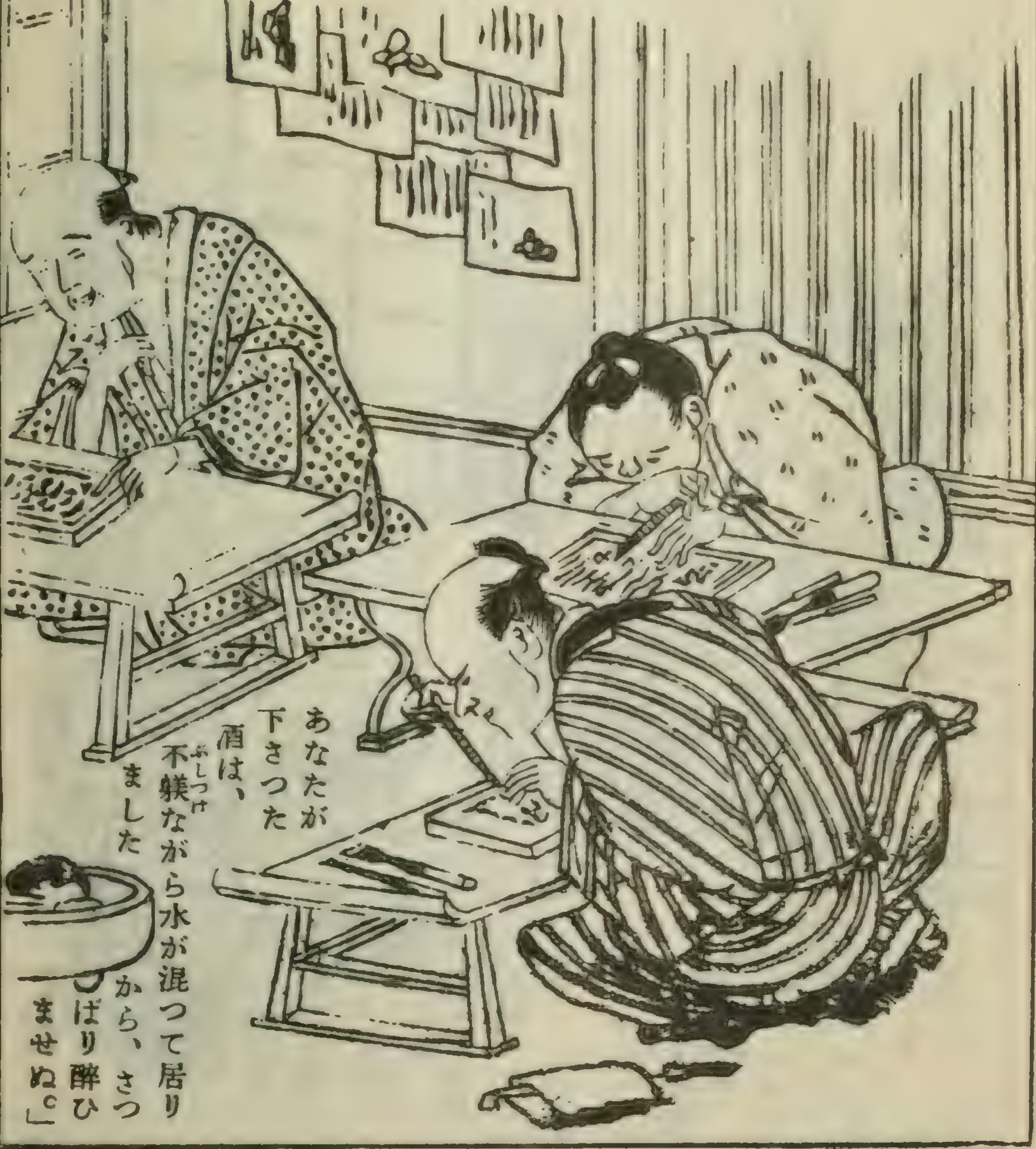
御存じの草紙の版元榮邑堂の主、年々の雙紙皆變りたる趣向もなし。今年は一番當てるつもりにて、いろ〳〵と工夫をなし、まづ、雙紙の作者、例のなまけ者の十遍舍一九を呼び寄せ、何がなしに酒を出し、その酒の中へ作のよく出來る妙藥を入れて飮ませける。その藥といふは、干鰯、馬糞、鋤、鍬、これを皆細末になし、



百姓の身の脂(あぶら)をしぼりて
錬合せ(ねりやはせ)、丸藥となし、
一九に飲ませけるに、
不思議や、妙藥の德にて、
今年の作は途方もなく
よく出來ける。



一九が作よく出來ければ、繪をかゝせて版木屋へ誂へ、村田屋何でも早く仕込んでおいて、思入れ賣るつもりなれば、早急にせねはならず、版木屋にずるけられてはなるまいと、豫て蓄へ置いたる寳永年中、富士の山の湧き出でたるときの近江の湖の水を酒の中へ入れて版木屋へ持參し飲ませければ、これも妙藥忽ちしるしありて、一夜のうちに




彫れたりければ、版元大きに
喜び、
藥も利けばきくものだ。
これから又どうぞ
版刷手合に
精を出させる
妙藥を
調へませう。
朱肉
青肉
色々
「夏の内仕込
んでおかねば、思
ふやうに商ひが出
來ませぬ。それ
を今夜中に上げて貰つて、そ
の後に喜久丸の大錦が六七
番彫つて貰ひてえ。」

何でも思入れ仕込んで置くつもりにて、版行(はんかう)をする手合(てやひ)に、朝比奈の腕と景清の腕とを黒焼にして、これも酒の中へ入れて飲ませければ、版刷手合(はんすりてやひ)の腕が途方もなく力が強く達者になり、一日に一人で何萬枚といふ數を刷りける。偏(ひとへ)に朝比奈が草摺(くさずり)を引切りし腕の力と、




景清が錣を引切りし力にあやかりしと見えたりける。
「それよりかア菱屋へ行つて、すつぽん煮で飲むがいゝよ。」
「おらア、先度柳屋の傘を置いて來たから取りに行かざアなるめえ。」

雙紙を順に一枚づゝ揃へるを、丁合をとるといひてかくの如くするなり。これも早く嵩のとれるやうにと、豫て工夫をして置いたる事なれば、

道中小夜の中山のやから鉦を黒焼にして、丁合をとる者に飲ませければ、妙薬のしるし、やから鉦を打つ如くに




その手の早さ、ちやん〳〵と直様丁合をとつてしまふ。
「苗字のある地口はならぬぞ。」
「それよりか、てうあいさんなの方がよからう。」
「早く晩になればよい。烏飴を買つて食はうに。」

雙紙の丁合をとつてしまふと、
それから後前天地を截ち揃へる。
これがまた截ちにくいものにて
暇の入るものなれば、
これを截つ者には祇園豆腐の庖丁
を煎じて飲ませければ、
忽ちこの男手が早く、
截板も定規も
いらず、豆腐
を切る如く、
とん〜〜
とゝゝゝとんと
きつたり
ける。



扨これから雙紙の表紙をかけねばならず、これは皆子供のする事故はかどらず、宿六(やどろく)もこれには困り、何ぞよい妙薬がありさうなもんだと色々工夫してみる。




表紙掛には妙薬もなく、
ふと思ひつきて、太鼓を
叩きたてゝ囃しけるは、
かけるわ／＼
表紙をかけるわ
拍子にかゝつてかけ
やんしよ、
かけるは鉤裂、頭は斜がけ、
逃げるは追かけ、鍋釜鑄
掛、闈ひはお手かけ、
嚊アは燒かけ、
旦那は矢鱈に
通ひかけ、
そりや／＼かけるわ、
「そりやこそかけるわ、表紙をかけるわ、どこすどん／＼。」
「おいらもどうか踊りたくなつた」とこの小僧とんだことをいふ。

表紙をかけるわ、
拍子にかゝつて
かけやんしよ、
どこ〳〵どこ
すこどんと
囃し立つれば、
子供は皆々うかれ出し、
この表紙掛は面白いと、
夢中になつて飯を食ふ事も
打忘れ、
夜も何時までも眠る事なく
精を出して表紙を
かける。



扨又雙紙を綴(と)ぢるは女の仕事、これも埒があくまいと、いろ〱と工夫するに、昔唐土(もろこし)より渡りし七つに曲りし玉に糸を通すに、蟻に糸をつけて穴の口元に入れ、此方(こなた)の口へ蜜を塗りおきたるを、かの蟻、蜜の匂を嗅ぎつけ、だん〱と玉の内をこなたの口へ脱(ぬ)け出でたり。これを蟻通(とほ)しといふ。



この如くにしたらばよからんと、蟻を捉へて糸をつけ、草紙の穴を通すつもりのところ、どうもさう甘くは行かずこれは止めにして、口も八丁手も八丁といふ女ばゝかゝに綴ぢさせける故、先づこれも間に合ひける様子なり。



雙紙賣出しの日は、糶の手合に韋太天様の守を持たせて出しけるに、作が殊の外よく出來ける故、賣れる程に／＼背つて出ると賣つて仕舞ひ日には幾度となく歸つては背負ひ出し／＼、韋太天の守のおかげにて江戸中を馳け歩きけるに、先々の本屋にても買ふと直に賣れてしまふ故糶の手合の後を追つて歩き、こつちへ來て下せえと



「たつた今置いて行かしつた傍から、もう直に賣れて仕舞つたから、何でもありたけ買ひませう、こつちへ來て下され。」

「これは無體な、先づ此處を放して呉んなせえ、今に參ります。」

やう〳〵引ずつて來ると、あとから、いや先づこつちの方へ來て下せえとしきりに引張る。あつちこつちと一日引張凧に困り果てる位にて、仕込どんと仕込んである故、足限り根限りに
江戸中へ
卸して廻る。



村田の雙紙大評判にて店先には
人の山をなし、流石澤山に
仕込んだる草紙、みな賣切れて
しまひ、買手をも待たして
置いて綴ぢるやら仕立てるやら
大騒ぎ、買手もせきこんで
來て、さつきから待つて
居るに早く下せえ、
いやまだ綴ぢませぬといふに、
綴ぢるはこつちで綴ぢようから
その儘で下され
と持つて行けば、




こちらへはどうして下さる、
イヤ今刷つて居りますといふに、
いや／＼刷らずとようござる、
その儘で下せえと、
大きに儲りけるぞ
潔し。
「ヲットとゝへ／＼。」

くさ雙紙の賣出しには蕎麥(そば)を
買つて祝ふ事、
何れの版元にても極りたる
吉例なり。一九、賣出し
に村田屋へ呼ばれて蕎麥
の馳走に預る。

至つての好物、
いくらでも食次第(くひしだい)、
今年から身代もこの蕎麥の
通りに延びる瑞相(ずゐさう)
まづは目出度く市が榮えた。



人間萬事吹矢的 上



京傳戯作

享和癸亥發行
華鐙し通油街
仙鶴堂梓行

予一日芝神明の御社に詣で、偶吹矢の店に佇みて、一觀せしに、吹息の長きはたえずして、しかも實の的にあたらず。ねらひに歪む手のうちの、且はづれ且八つあたりして、一つも思ふつぼならず。金時を出さんとして化物を出し、朝比奈を出さんとして鬼を出す。千疊敷の家形は變じて奈良綠青の山となり、張貫の岩は飜りて淺黄木綿の波幕となる。其かはること速き、光陰の矢かといぶかる。一心の矢あり、禍福の的あり。善惡邪正の人形あり、正にこれ三世因果。十二因緣の糸をひきて、もろ〳〵の正體をあらはすものなり。人生一代の光景、從來一筒六文の吹矢の如し。猛然として發悟し、家に回りて這册子をつくれり。

山東京傳述 印

享和三年癸亥孟春

年中一日是神明乃みやしろハ集まりて偏に吹矢の店にあそびて一銭をちらふ。吹息の下がるハ臭べして。志ある貴の的にあたらしと行ふ

あまむ手に持らちもの目に見えぬ目ハ八分あたりして一つも思ふ様ならず矢

金時にハ山さんらして化物を出し。朝比奈を出さんとして鬼を出す。

千疊敷の家形ハ変じて奈良の緑青を山がけの張貫の岩となる

ぶらず浅黄木綿の波幕をふる其かくる遠き光隠の矢ハ

ござふられ一心の矢あり。禍福の的あたる。善悪邪正の人形ある正是

三世因果。十二因縁の糸とひかれてもろもろの正體とあらはるゝもの此

人生一代ハ光景従来一箇六丈の吹矢乃ごとし。猛然として發

悟し家に回て遺冊子とはしくもの。

享和三年癸亥孟春　山東京傳述



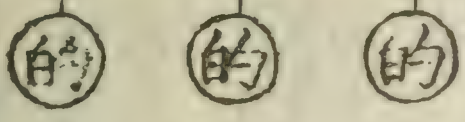
吹矢道具之圖

○筒と矢と氣と心と合體せねばならぬものなり。



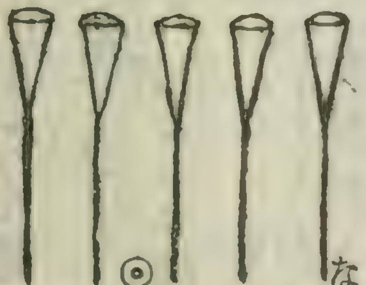
▲この吹筒は、たとへば、人の氣の如く長きもあり、短きもあり、兎角人はこの筒の氣が長くなければ心の矢、思ふ的へ當らず。

▲この的へ心の矢が當ると善惡邪正、善きも惡しきも、それぞの人形の正體あらはれ出づる。外目で見れば、善も惡も的は皆同じやうにて、何の人形が出るか知れねども、この的からは善が出る、この的からは惡が出る、といふ事は天道様はとうに御存じなり。これ人の心のはかり難きこと、この的と同じことなり。

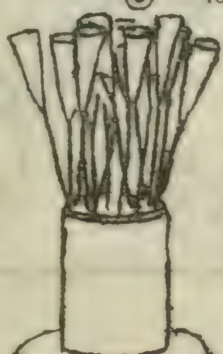


▲この糸は禍福善惡を繫ぎとめておく因縁の糸筋なり。

▲吹矢の矢は人の心に喩ふ。この心の矢、如何にも眞直でなければならず。



人の口のあたる所に金がはめてある。金は人の口あたりよき物なればなり。



◎少しにても曲りあれば、ねらひ脇へ外れて思ひがけない飛んだところへ中り、または何本も素矢を食つて空しく矢代ばかりをとられ、まことの人形の形を見ることとならず。これ思ふ的へ當らねばなり。

息（いき）

「野郎の鐵拐仙といはゞ云へ。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。長いきあれば、短いきあるは吹矢の縁の下だ。」



▲吹筒の氣が長く、心の矢が眞直で思ふ的へあたつても、息が長くなければ心の矢、彈き返されて人形の姿現はれず。この息、長き短きは喩へば人の壽命なり。兎角人は長生でなければ大功はなし難し。その息を長くするは平生の養生にあり。養生惡しければ、天壽も縮むるなり。

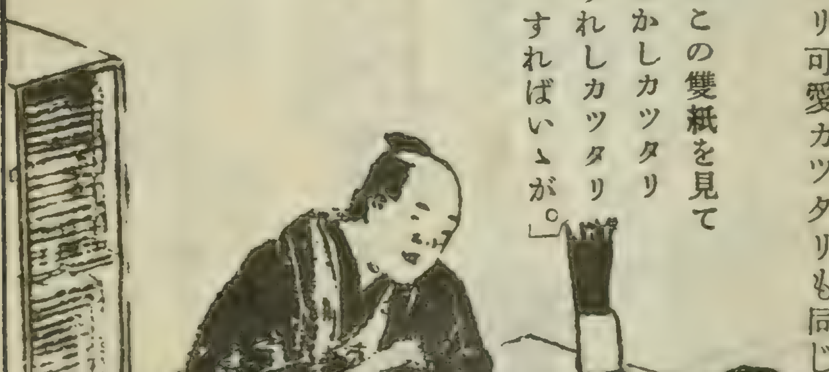
吹矢は息の長きが肝心、人は長生が專一なり。

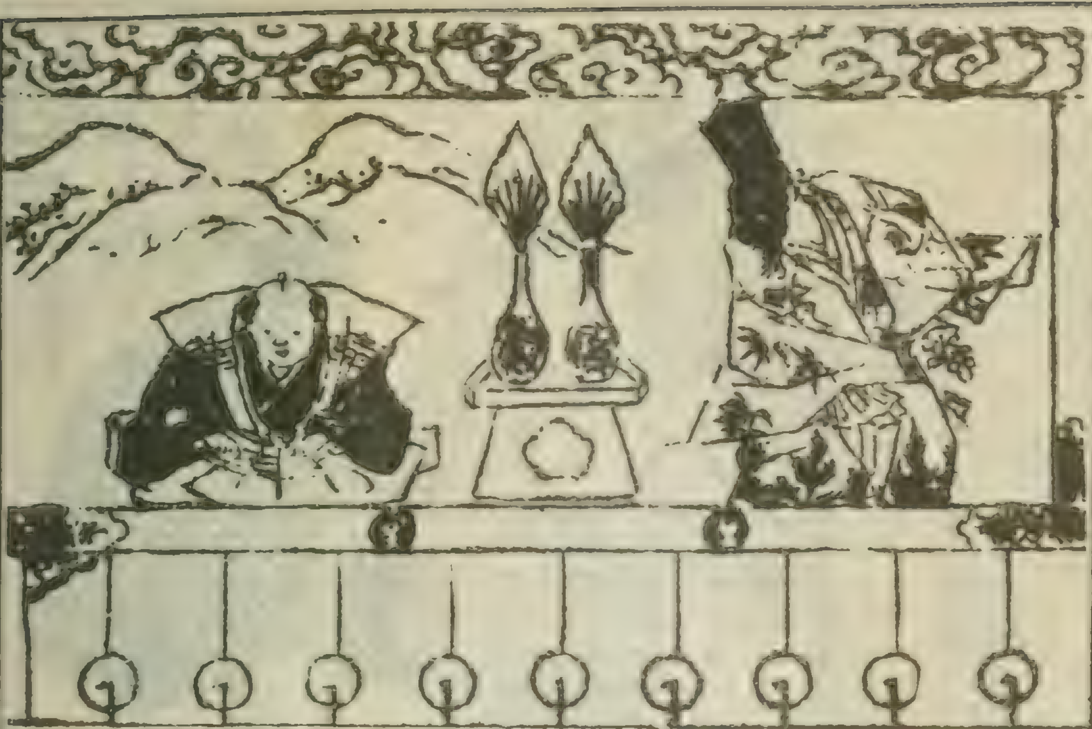
音

▲吹矢の的に當れば、ガツタリと音がして人形、姿を現はす、このガツタリは合多理と書きて、多く理を合はすとよむ。この雙紙も多くの理を合せて作る。これ合多理の謂なり。

憎ガツタリ可愛ガツタリも同じ道理なり。

「人がこの雙紙を見ておかしカツタリうれしカツタリすればいゝが。」



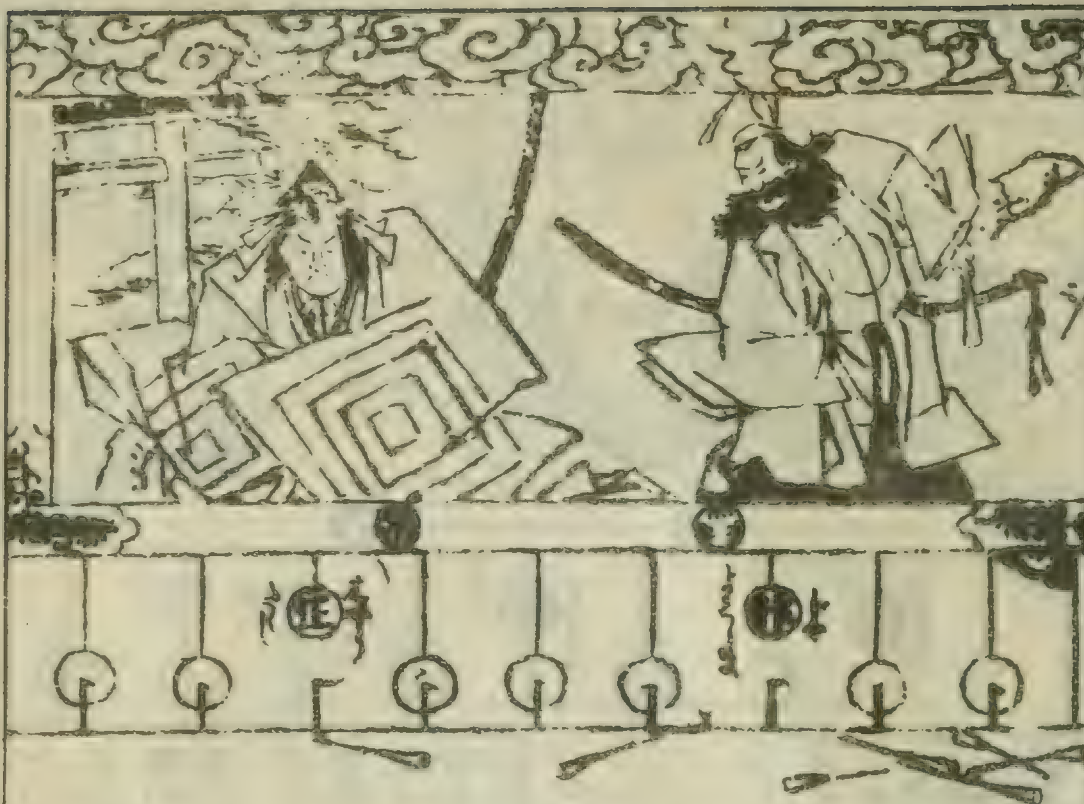


それつら〳〵月日の移り行き、光陰の速きを思ふに、人の一代はたゞ一箇六文の吹矢にかはる事なし。去年は今年と變り、昨日は今日と變り息子(は)親爺、娘はおばゝ、嫁は姑と變ること、僅一寸の的に細き糸筋をつけて、危く繋ぎとめたる物なれば、變りやすきこと、瞬きせぬ間なり、また吹矢の店の緣の下と人の心と同じ事なり。善の人形も惡の人形も緣の下の人の心のうちに隱れありて、ほか目からは見えず、心の矢がそれ〴〵の的へ當れば、遂には正體を現はすなり。

故に的が肝腎なり。

ねらひが肝腎なり。





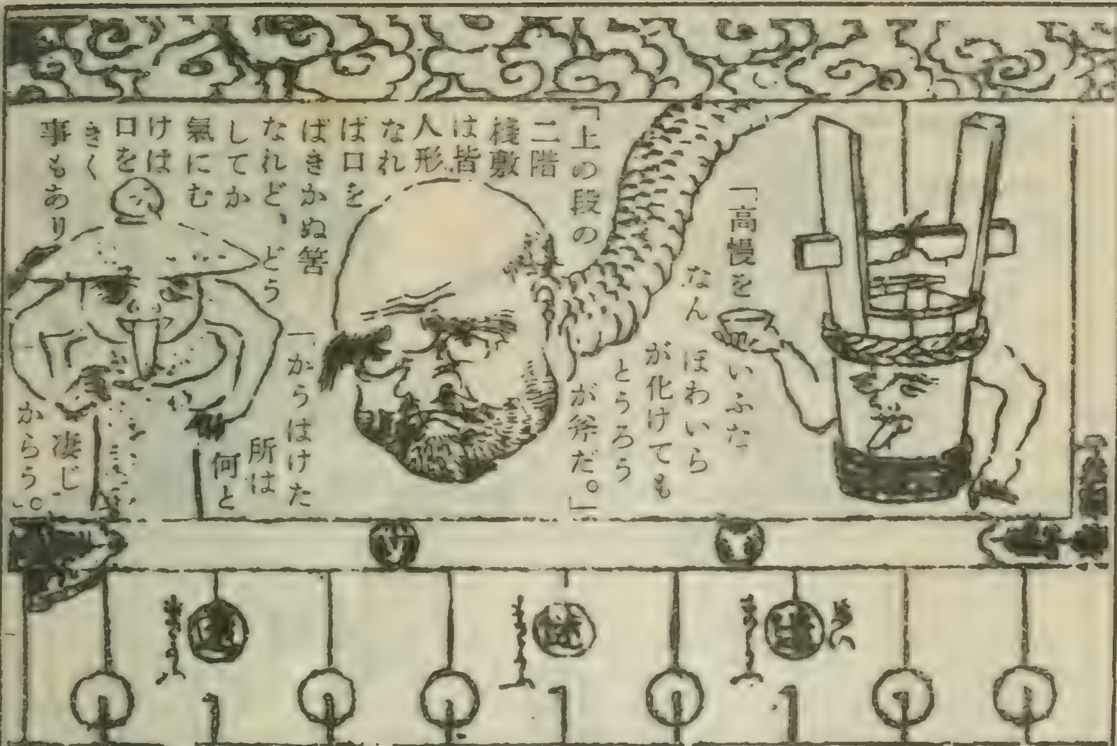
・心の矢が外れて邪の的へ當れば、暫のうけを出す。これ邪といふものはいろ〳〵の悪を企みて人に禍するものなれば、心の敵役なり。この的へ當らぬやう心がくべし。

・心の矢が正しき的へあたれば、暫を出す。正は邪を退け、暫は敵役をぶつちめて若殿姫君の難儀を救ひ、紛失の寳物をとりかへす。智勇忠義すぐれたるものなり。

これ人の心の大立物なり。人皆この的を狙ふべし。

「此所上の段は人形なり。下は吹いて居る人にていづれも口をきかず、そこで云草の書入なし。





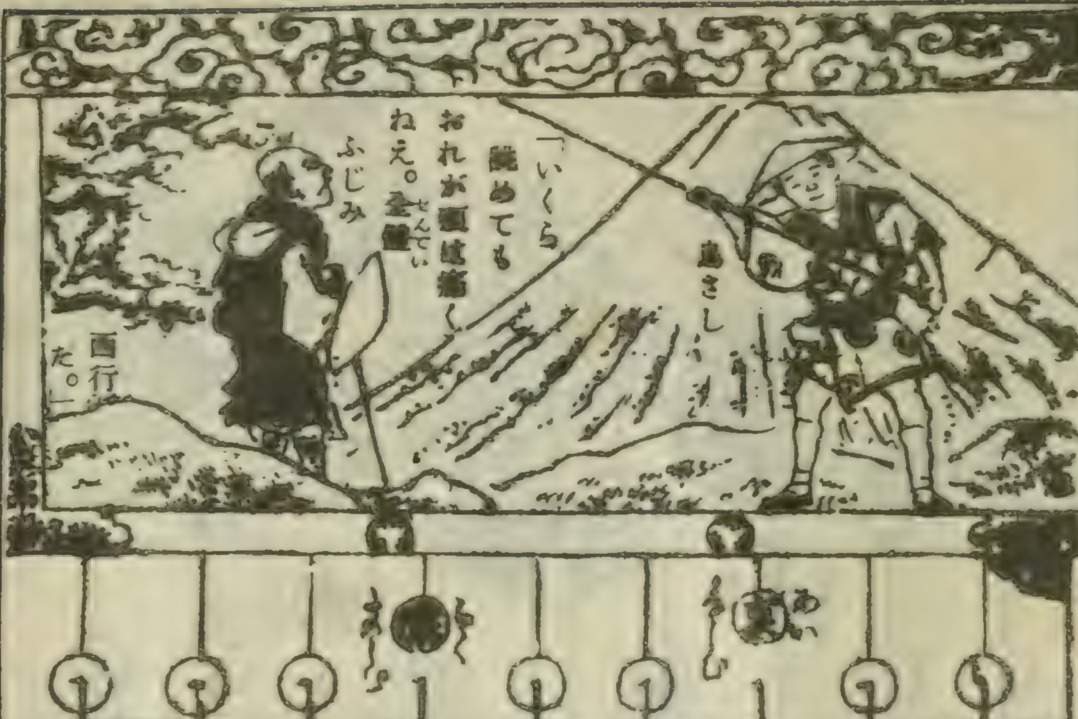
・心の矢が迷の的へあたると、いろ〱の化物を出す。柳の木を見ても幽靈と思ひ、白犬に飛びつかれても猫又と思ひ、我が影法師を見ても化物と思ふ。皆これ心の迷にて、われと我が心より化物を出すものなり。




草雙紙はそこがやり放しなり。そのつもりにて御覧下されませう。
河童
化けの河原の小僧菩薩とは己が事だ。」
「幽霊に御報謝。」
迷
まよう
迷
まよう
悟
さとる
「下の段の鶉桟敷は浮世の人なり。上の繪にて事はわかれども、下桟敷ばかりあけても置かれず、ほんの埋草の繪なり。いはゞかはかしの見物の如し。下に繪があれば上は無駄なり。上に繪があれば、下が無駄なり。上が無駄か、下が無駄か石橋山の合戦と來て、
いづれどつちか
無駄なるべし。
・心の矢が悟の的にあたれば、金時を出す。金時は化物を退治する者なり。悟は迷を滅すものなり。多き迷の化物も、悟の金時に出つくはしては五體が竦むなり。悟の力強き事を知るべし。



「にこはごや この浦舟に 帆をあげ て。」
「なんと 己(おれ)が面(つら)は とはからうがや いやはん にや 途方も ねえ。」
・心の矢が喜(よろこひ)の的へあたれば、大黒を出す。大黒天はいつでもにこ〳〵笑つてばかり居給ふ、笑ふ門には福来るといふ、家内中がつね〴〵大黒のやうににこ〳〵さへして居れば、家繁昌疑ひなし。随分この喜の的を狙つて心の矢をはづさぬやうにすべし。
・心の矢が怒(いかり)の的へあたれば、般若(はんにや)を出す。これ即ち心の鬼にて腹立怒るより、我と我身を責めて、片時も安き心なし。随分この的にあたらぬやう心がくべし。
此喜怒哀樂の四つの的は人情の常にて生あるもの一日ものがれ難き事なり。

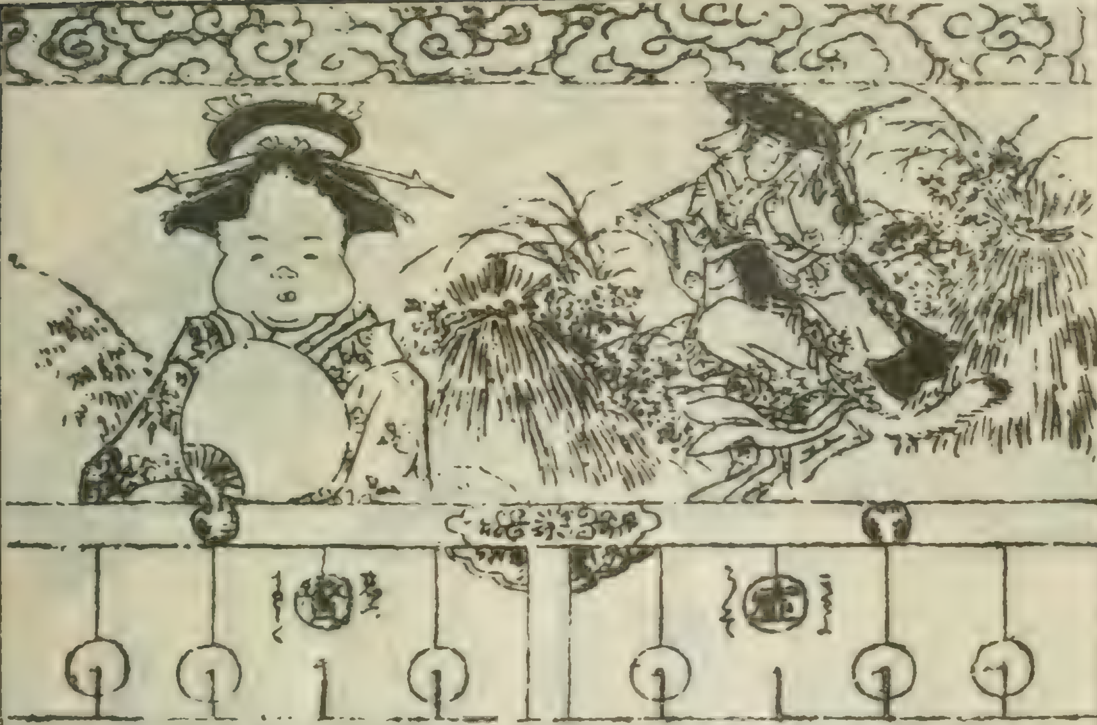


・心の矢が哀(かなしみ)の的へあたれば、鳥(とり)さしを出す。もろ〳〵の鳥ども、この黐にくつつきて悲しむが如く、人もいとしい可愛い、會ひたい見たいなどといふ愚痴の黐竿に自ら身をくつつけて歎き悲しむなり。この道理を悟らざれば鳥にだも如かざるべけんや。

・また心の矢が樂(らく)の的へあたれば、西行(さいぎやう)を出す。西行の如く浮世を悟つてみれば、氣が樂なり。金持ばかりが、樂をするにあらず。錢がなくても足る事を知れば樂なり。一生樂の的をはづすまいと思はゞ食はず貧樂(ひんらく)といふ道理を悟るべし。



親に別れ、子に別れ、夫に別るゝ悲しみ、皆この的より糸がつけてあるなり。これ惡き因緣を引く糸と諦(あきら)むべし



・心の矢が虚の的へあたれば、葛の葉の姿を出す。葛の葉は顔は美しき女なれども心は畜生にて、何處ぞでは化の皮を現はす。美しき奴ほど、虚は多く實は少きものなり

油斷すべからず。

・心の矢が實の的へあたると、お多福を出す。心に實さへあれば、顔はお多福でも不承すべし、不器量な女に結句貞女多し。

「人の魂は劍なり

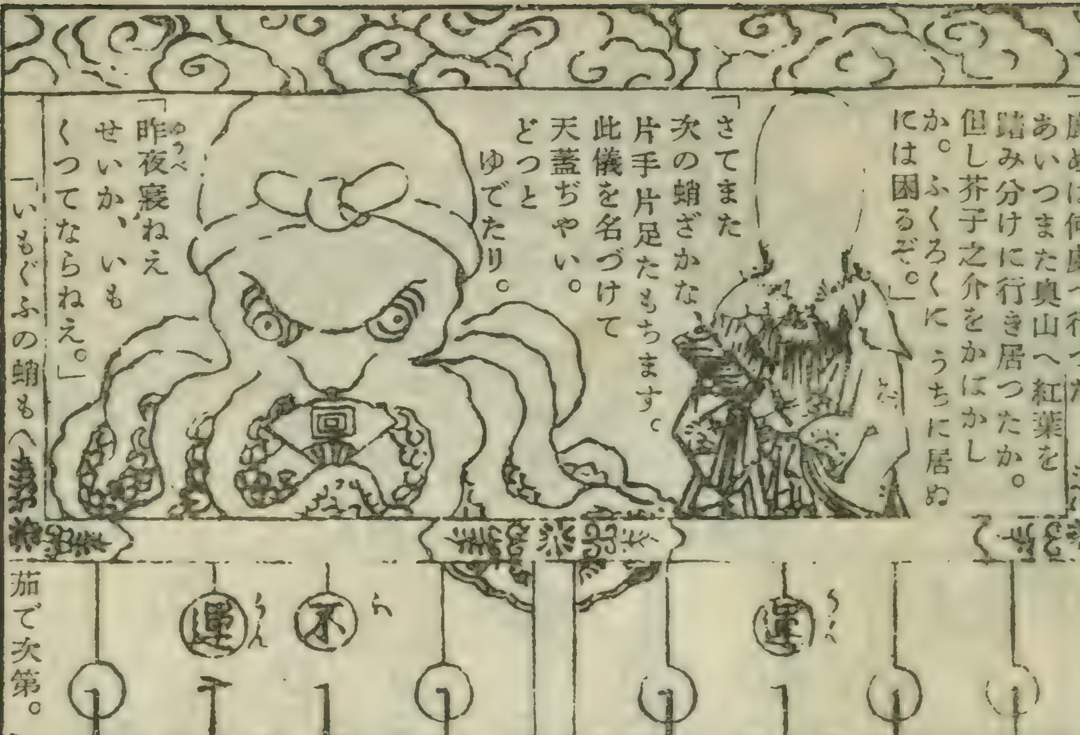
劍によく切れるとなまくらあり。

人に利口と馬鹿のあるが如し。又劍に正眞あり。贋物あり

人の心に實と虚のある如し。これ目利の肝心なり。



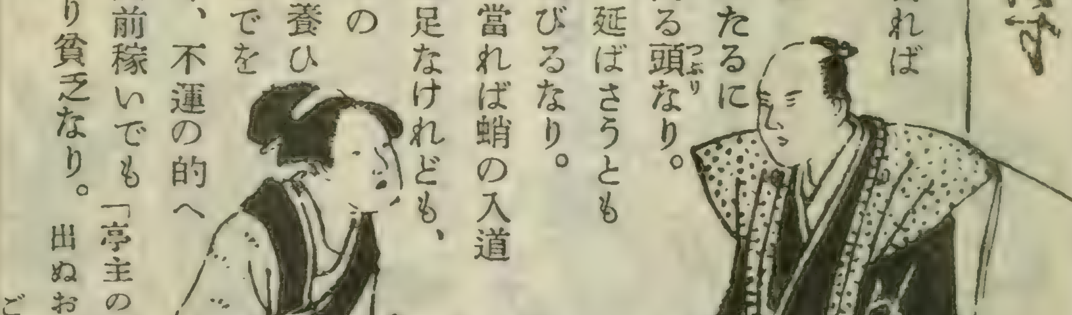
「その刀は葵下坂でよつく切れます。それから御覧じませ。」



開運御守

・心の矢が運の的へ當れば福祿壽を出す。延ばさうと思つて延びたるにあらず。自然とのびたる頭なり。人も運の的へ當れば、延ばさうとも思はず、自然と金が延びるなり。

・心の矢が不運の的へ當れば蛸の入道を出すなり。鯛、鮃は足なけれども、立派に暮し、蛸は八本の足あれども、口一つを養ひかねて岡へ上り、芋までを掘喰ふ。人もその如く、不運の的へあたれば、たとへ八人前稼いでもやつぱり貧乏なり。





・心の矢が仁の的へ當れば、龍王を出す。龍王は龍宮の主なり。人も家國の主となれば、仁心がなくてはならず。

・心の矢が義の的へ當れば、いろ〳〵の魚を出す魚は龍王の家來にて、よく玉を守護す。これを守る玉は主人なり。よく守るは役目に怠らぬなり。

これを忠義の士に譬ふ。

・心の矢が禮の的へ當れば、寶塔を出す。いかほどの名玉も、裸でゐては信仰なし。寶塔といふ着物を着せておけば、自ら尊く見える。これを人に喩へていはゞ、上は冠より下は羽織袴に至るまで



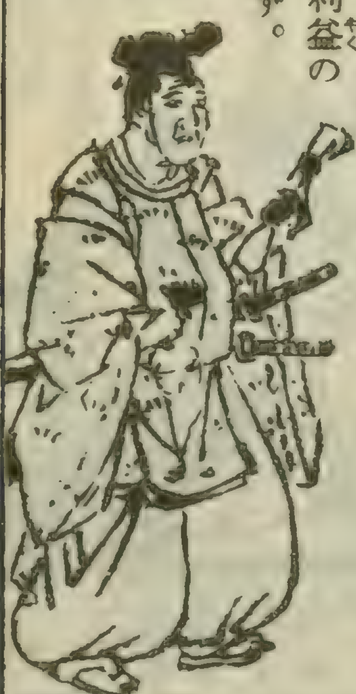


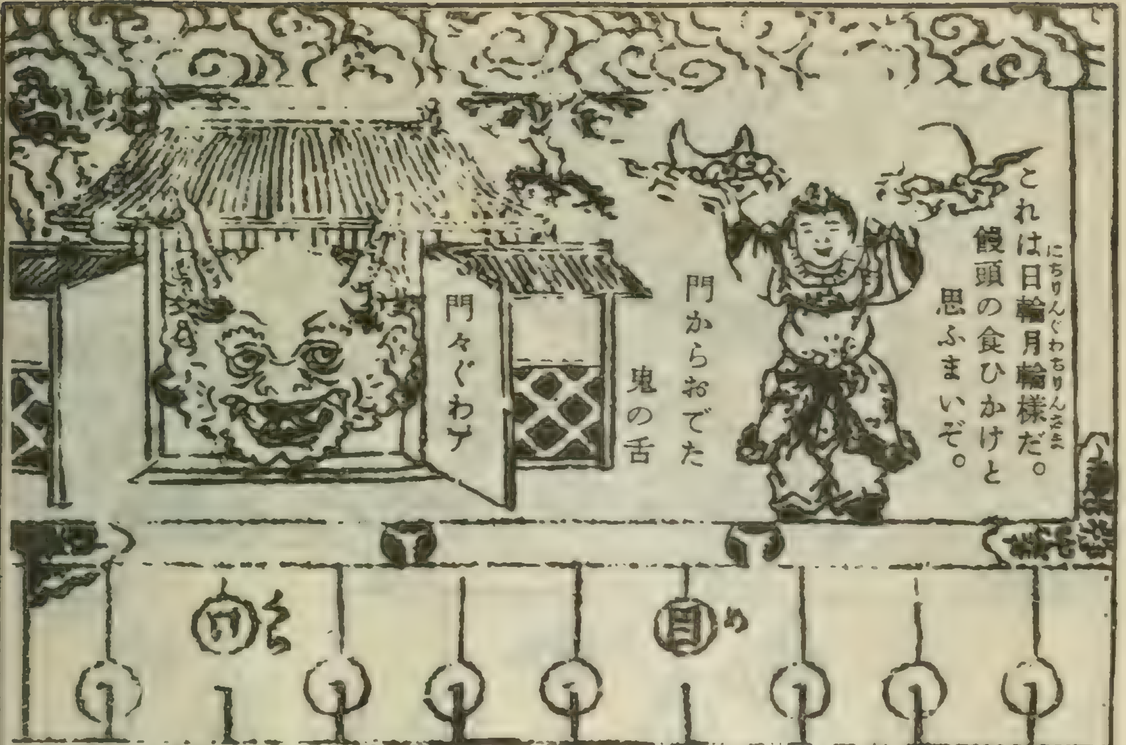
四季の禮服を以て貴賤を分つが如し。

。心の矢が智の的へ當れば一面海の景色とかはる。智慧の深きに譬ふ。



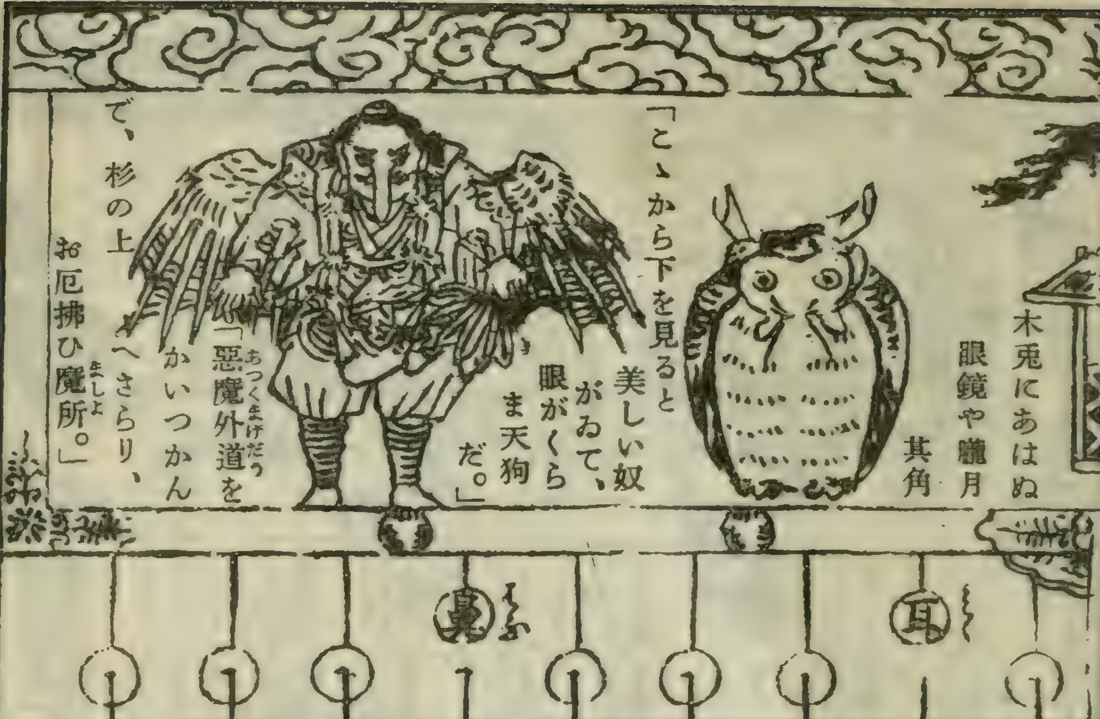
。心の矢が信の的へ當れば、海女を出す。心の神佛を祈るも、海女が玉をとらんとする如く、一心を固めねば、利益の玉を得ることならず。





・心の矢が目の的へ當れば、
日月を出す。人に目のあるは、
天に日月あるが如し。
天に日蝕月蝕あり。
人にも目のくれる事あり。
慾に目がくれ
子に目がくれる。
・心の矢が口の的へ當れば、
門ひらけて内より鬼を出す。
これ口は禍の門なればなり、
また口に悪を持つといふも、
人の口に戸がたてられぬといふも
この故なり。
・心の矢が耳の的へ當れば、
木兎を出す。
木兎は耳の邪魔なる鳥なり、
人の耳も、よい事悪い事を



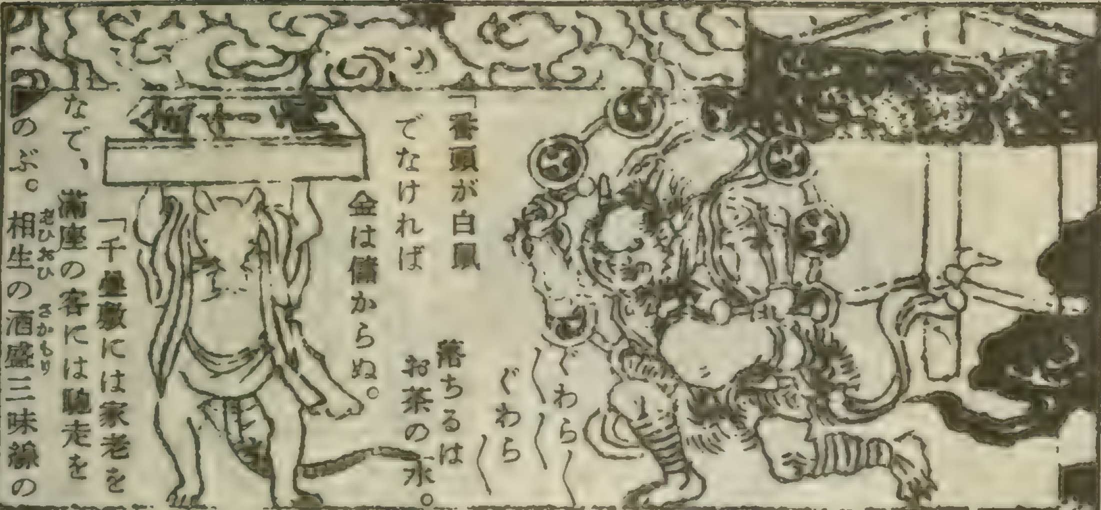


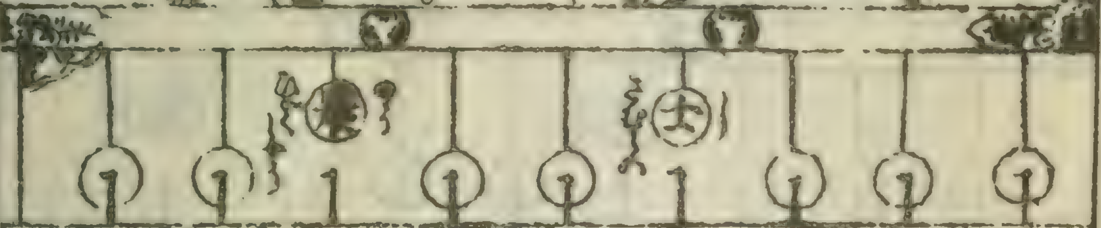
聞くにつけて、大きな心の邪魔なり、
また立聞、耳こすりなど
ろくなことはなし。

・心の矢が鼻の的へ當れば
天狗を出す。

人の鼻といふ奴が、
掛香の薫をかげば、心ときめき、
蒲焼の匂をかげば食ひたくなる。
皆、鼻の業なり。
また高慢の鼻、
自慢の鼻、
己惚の鼻、
いづれも高し。
とかく、鼻の穴は
天狗の棲家と知るべし。





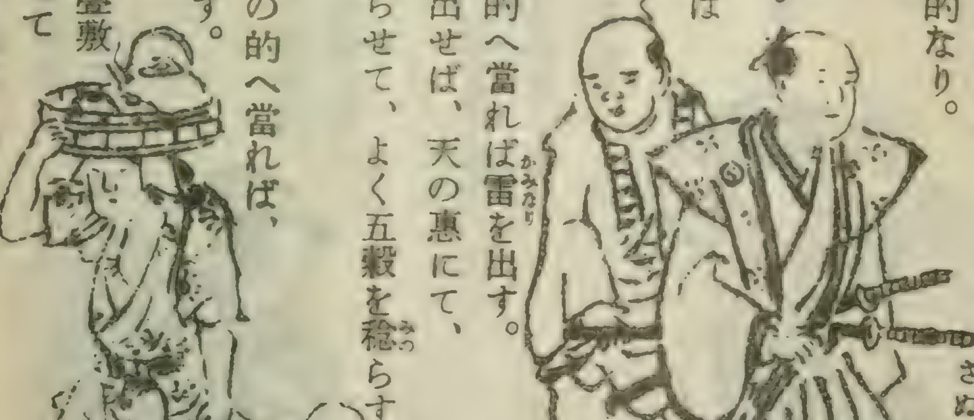


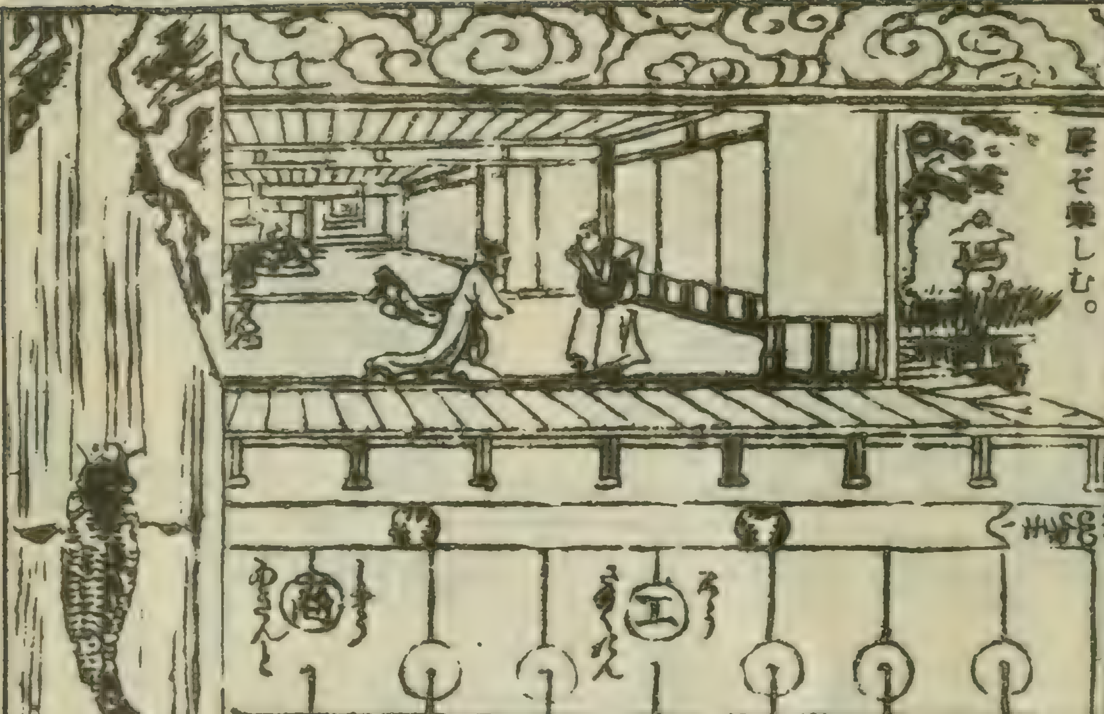
此士農工商の四つは、人間一生を送る渡世の的なり。

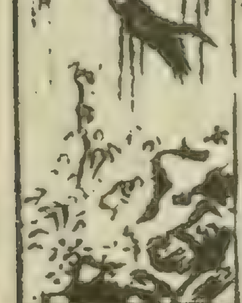
・心の矢が士の的へ當れば、鯉の瀧登りを出す。これ士の立身出世は鯉の瀧のぼりの如くなればなり。

・心の矢が百姓の的へ當れば雷を出す。これは耕作に精を出せば、天の惠にて、日照にも、雨を降らせて、よく五穀を稔らす。

・心の矢が細工人の的へ當れば、千疊敷の座敷を出す。職人も精を出して上手になれば、千疊敷の大仕事も請合つて大金を儲けるなり。







・心の矢が商(あきなひ)の的へ當れば
千兩箱を出す。
別して商人は常に代物(しろもの)のよしあし、相場の
上り下りを考へて、商の的をはづさぬやうに
せねばならず。この的へさへ當れば、
千兩箱のみにあらず、家倉地面(いへくらぢめん)、
思ふ程のもの出でずといふ事なし。



「千兩箱を出す糸は細き利の糸なり。安賣でなければ繁昌せぬと知るべし。」



・心の矢が焼餅の的へ當れば、唐辛子を背負つた奴を出す。唐辛子はその色赤く悋氣の胸の火の如し。その形は角の如し。戀の奴、この悋氣の角の戀の重荷を背負つて苦しみ、遂に夫に愛想つかされ、追ひ出され辛き目を見るなり。

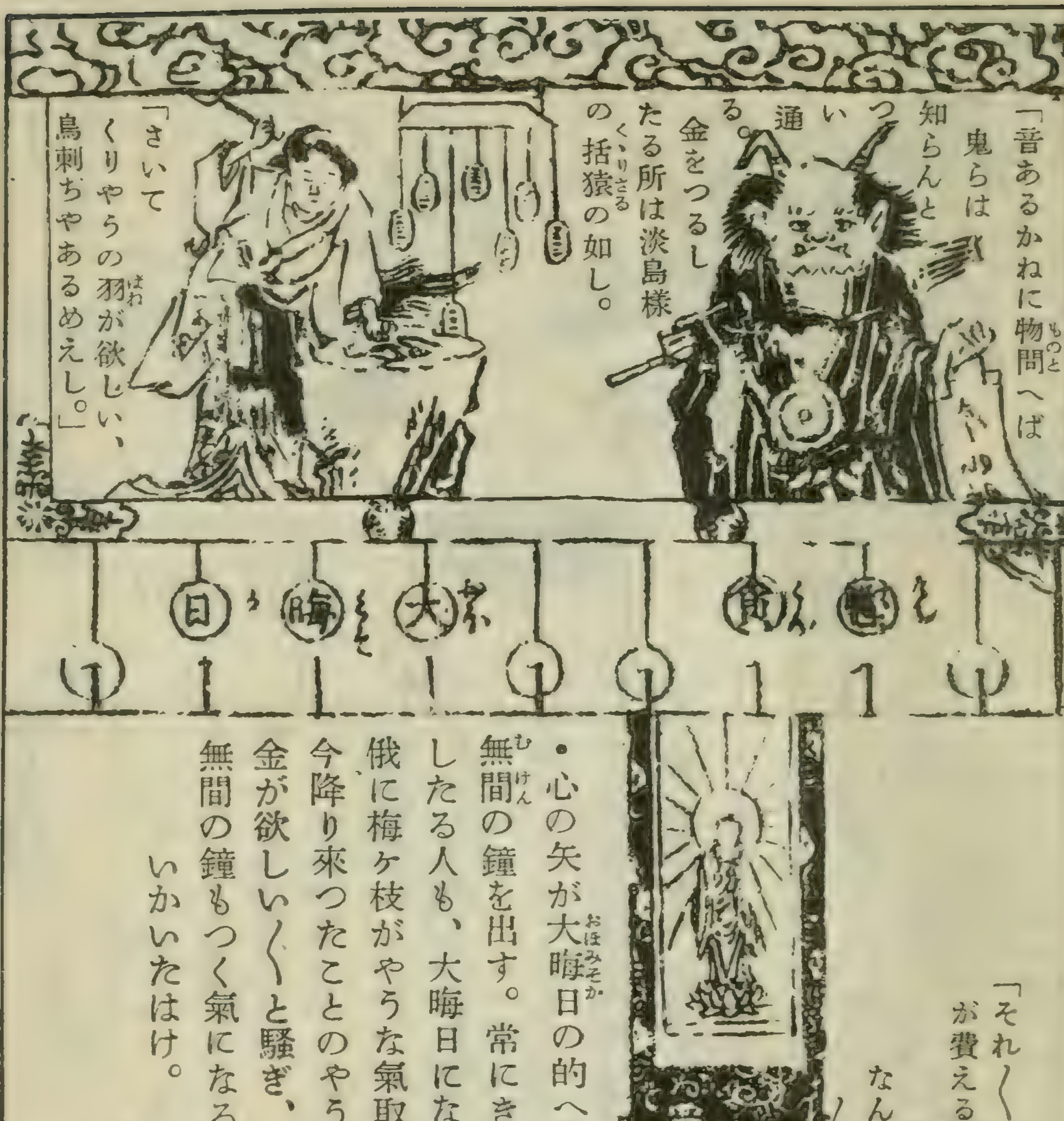
・心の矢が煩惱の的へ當れば犬を出す。

・心の矢が欲の的へ當れば、座頭を出す。欲には目の見えぬものなり。

・心の矢が慳貪の的へ當れば鬼の念佛を出す。慳貪婆のお看經は鬼の念佛と同じことなり。







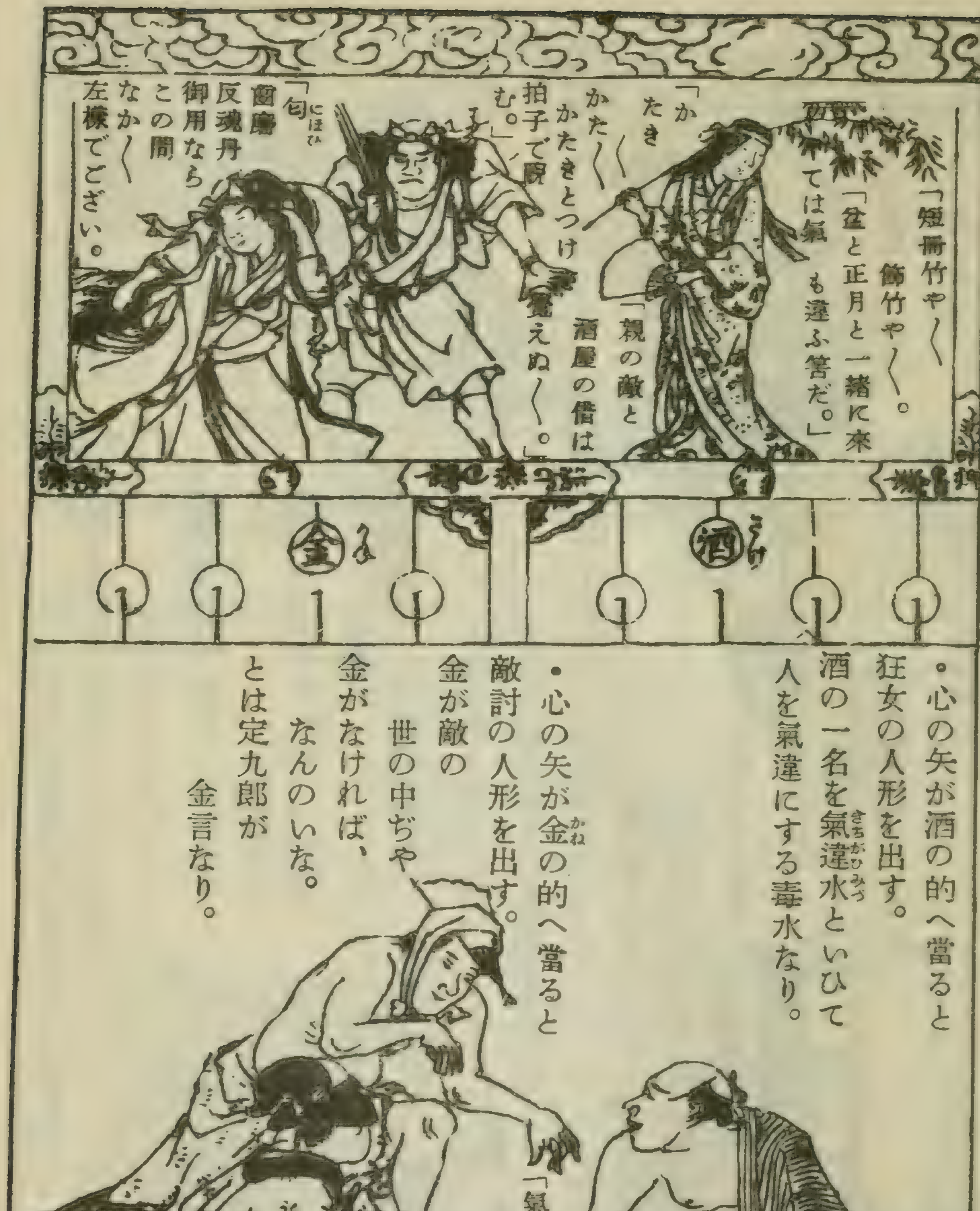
「音あるかねに物問へば鬼らは知らんとつい通る。
金をつるしたる所は淡島様の括猿の如し。
「さいてくりやらの羽が欲しい、鳥刺ちやあるめえし。」
・心の矢が大晦日の的へ當れば、無間の鐘を出す。常にきん／＼としたる人も、大晦日になれば、俄に梅ケ枝がやうな氣取になり、今降り來つたことのやうに、金が欲しい／＼と騷ぎ、無間の鐘もつく氣になるは、いかいたはけ。
「それ／＼それでは薪が費える。燈心を一筋減らさぬか。なんまみ／＼／＼」
「さういはれては一言もなつ豆をお寺から貰つておいた餅へつけて上げませうか。



・心の矢が分銅の的へあたると、強さうな相撲を出す。強い相撲は負けた事もなく横に寝たこともなし、現金懸値なしの商ひと同じ事なり。商人は、互にこの的をよく狙ふべし。

・心の矢が似山の的へ當ると蟒を出す。似山な奴は、人を見ると呑んでかゝつたり、毒氣を吹きかけたりして見たがる。ぐつと滾つた人には、なきことなり。似山は人の中の蟒なり。必ずこの的へあてるべからず。



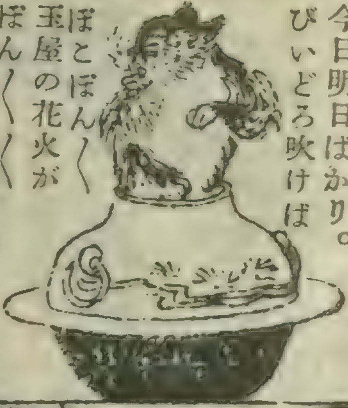


•心の矢が酒の的へ當ると狂女の人形を出す。酒の一名を氣違水(きちがひみづ)といひて人を氣違にする毒水なり。

•心の矢が金(かね)の的へ當ると敵討の人形を出す。金が敵の世の中ぢや金がなければなんのいな。とは定九郎が金言なり。



「龜に沈みし
さるのふち
チンチリツ
やつ
きや
ツキ
ャ

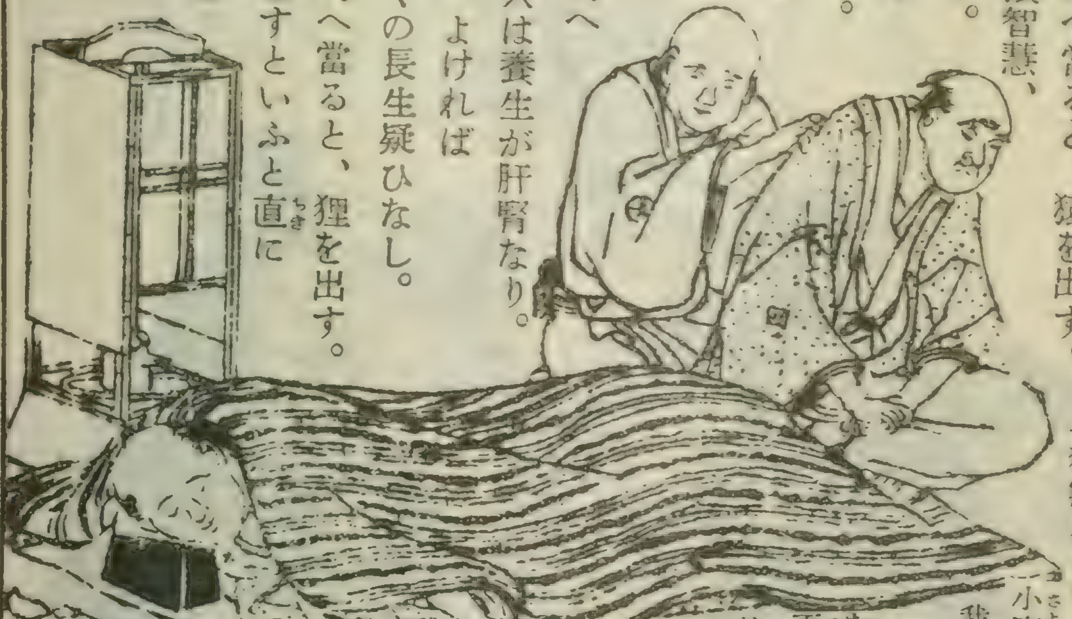


「たぬきは損氣ぢや。
氣を長く腹鼓をうたう。
ポン〳〵ポンは
今日明日ばかり。
びいどろ吹けば
ぽとぽん〳〵
玉屋の花火が
ぽん〳〵〳〵
狐の鳴き聲スポポンポンとれがぽんとの業腹鼓だ。」

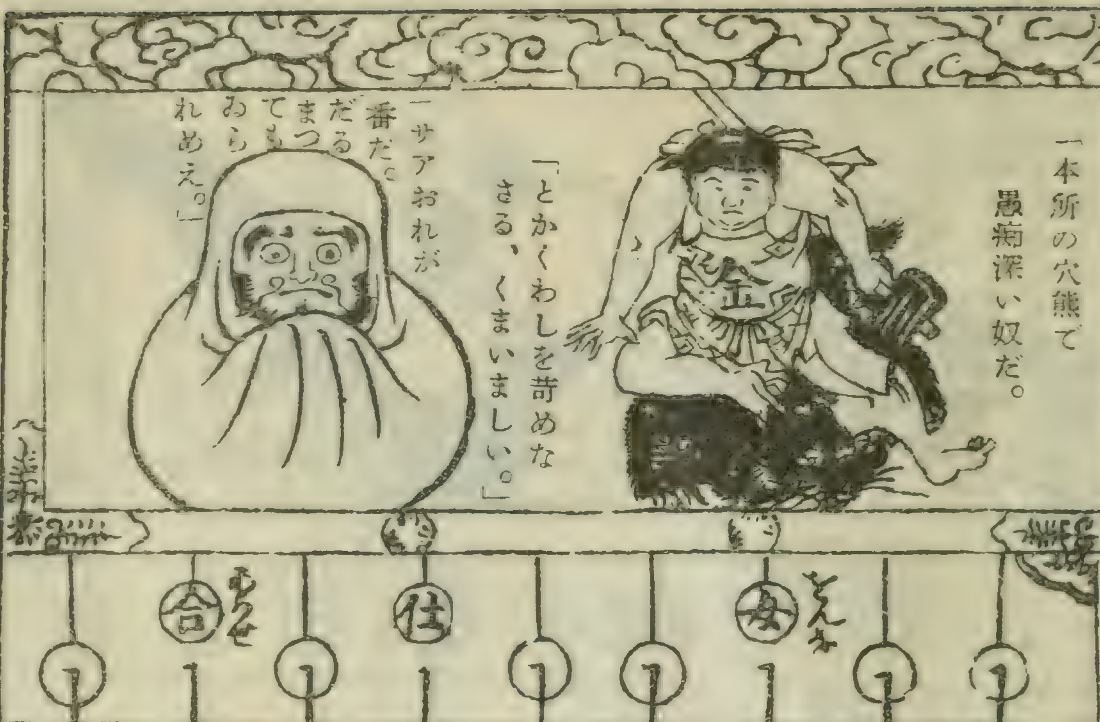
・心の矢が智慧の的へ當ると、猿を出す。人の智慧、多くは猿智慧、猿利口なるものなり。眞の智慧のある人は稀なり。鼻の先へ出づる智慧自慢にろくなはなし。

・心の矢が養生の的へ當ると龜を出す。人は養生が肝腎なり。養生身持さへよければ龜の如くの長生疑ひなし。

・心の矢が懸取の的へ當ると、狸を出す。懸取がお頼み申しますといふと直に狸寢入と出かけるはよくある奴なり、卑怯千萬〳〵。



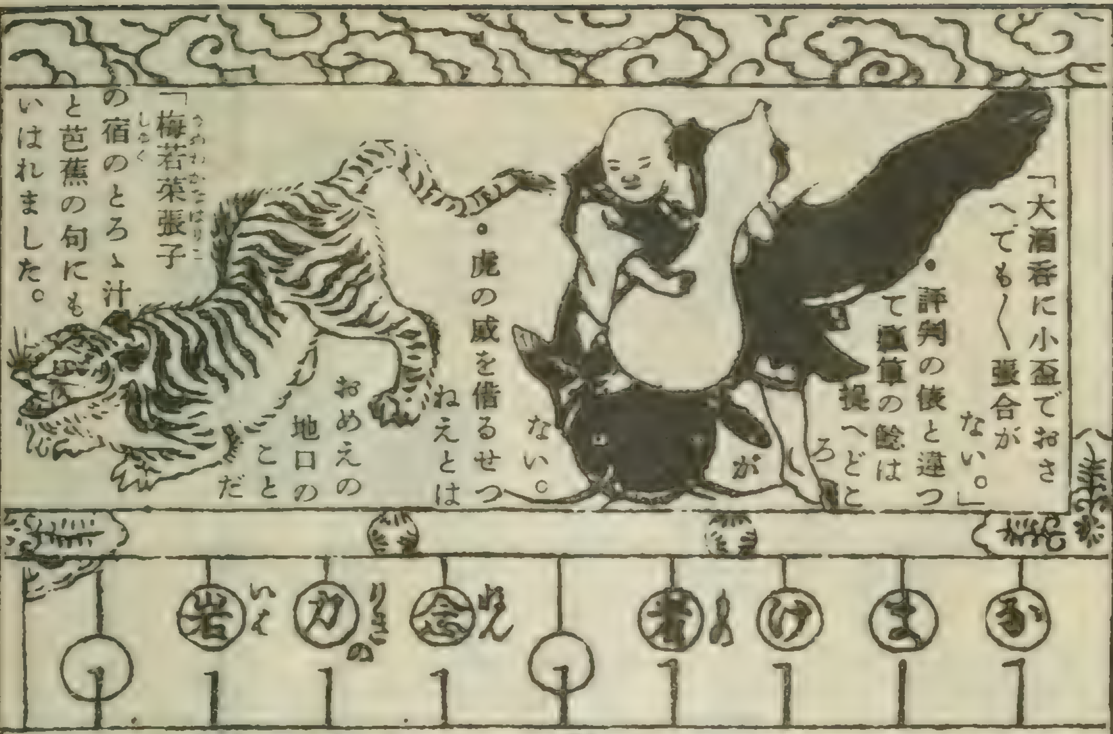
「狸寢入りの
小夜衣、
我が
つら
ならぬ
面な眺
めそ。」



•心の矢が女の的へ當ると、金太郎小僧を出す。女は手に男の命を斷つ斧を持つて、熊のやうな色黒く髯むしやくしやにて氣の荒き男をも、膝の下へおつかつて、ぎう〳〵いはせる。これ金太郎と女と同じ事なり。

•心の矢が仕合せの的へ當ると起上り小法師を出す。これ七轉八起の故なり。





「大酒呑に小盃でおさへでもく張合がない。」

・評判の俵と違つて瓢箪の鯰は捉へどころがない。

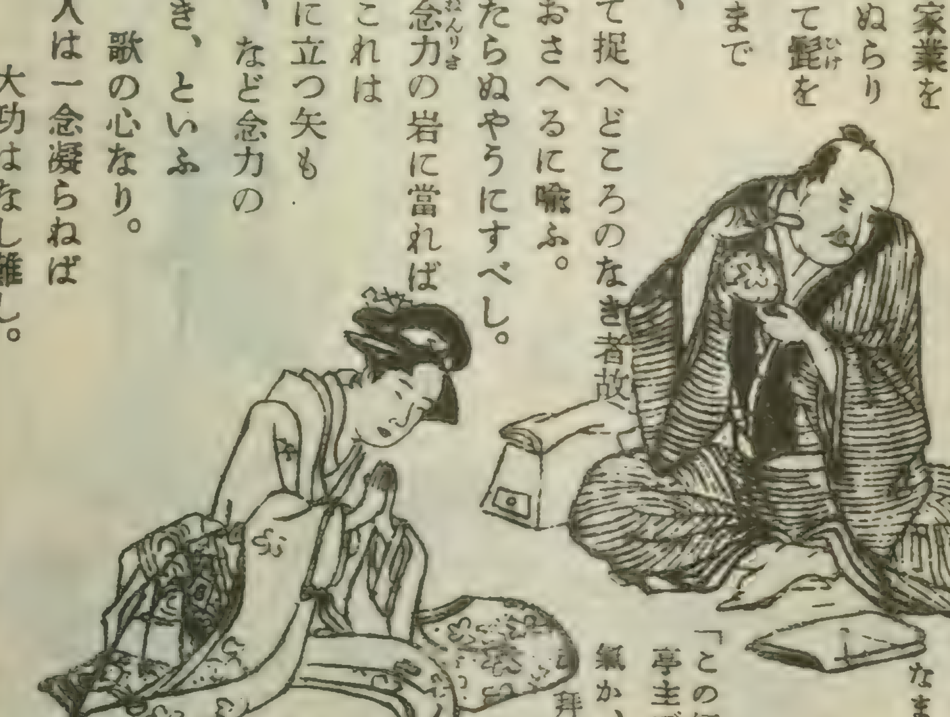
・虎の威を借るせつねえとはおめえの地口のことだ

「梅若菜張子の宿のとろゝ汁」と芭蕉の句にもいはれました。

・心の矢がなまけ者の的へ當ると鯰を瓢箪でおさへたる人形を出す。なまけ者は家業をいやがり、ぬらりくらりとして髭をくひそらすまで馬鹿を盡し、どことい つて捉へどころのなき者故瓢箪で鯰をおさへるに喩ふ。この的へあたらぬやうにすべし。

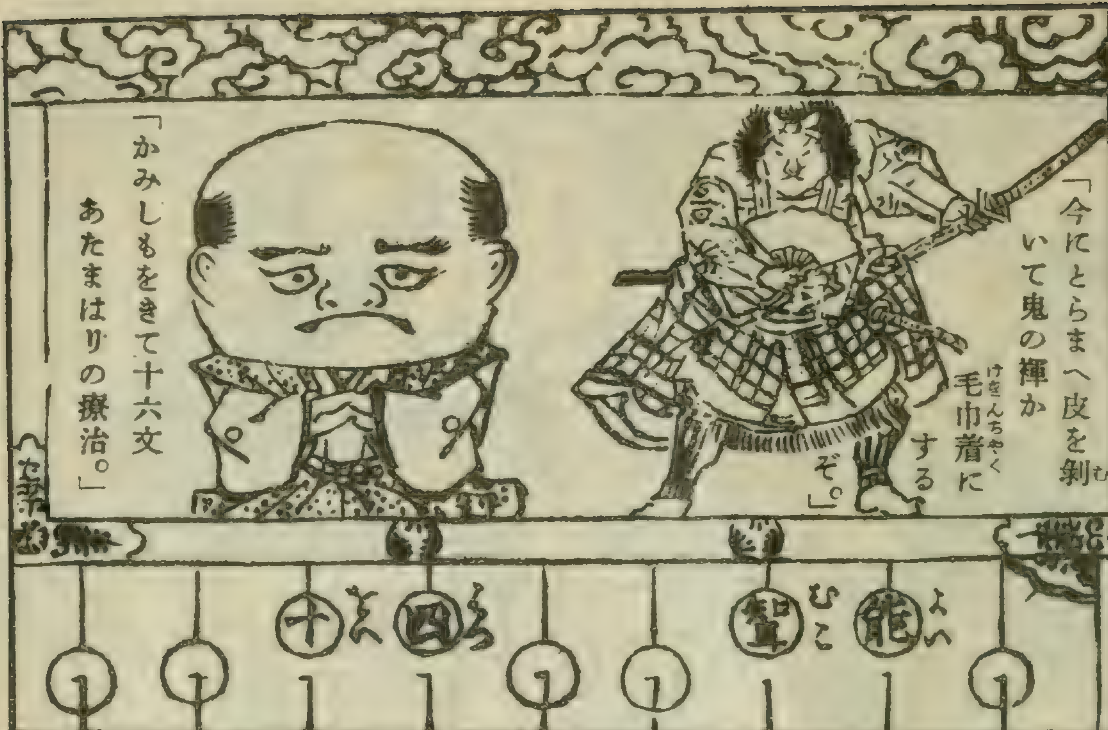
・心の矢が念力の岩に當れば虎を出す。これは虎と見て石に立つ矢もあるものを、など念力の徹らざるべき、といふ歌の心なり。

とかく人は一念凝らねば大功はなし難し。



鳥に七毛鸚哥あり、人になまけ隠居あり。

「この娘、よい亭主でも持つ氣か、無性に拝むやつさ。」

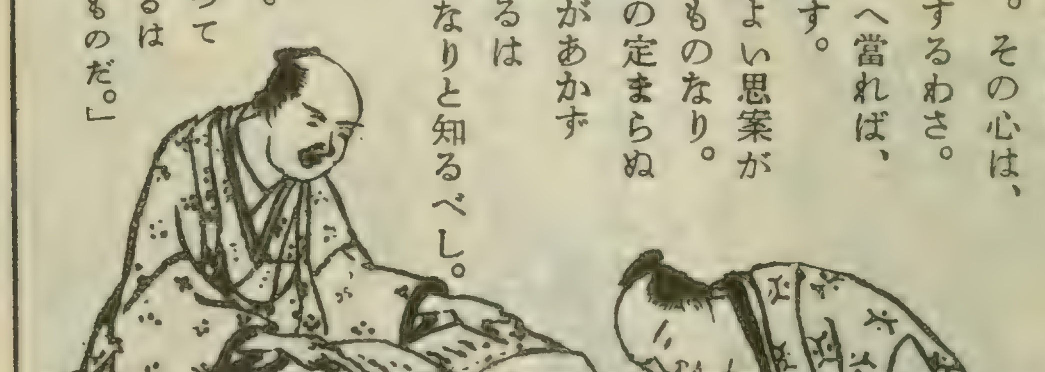


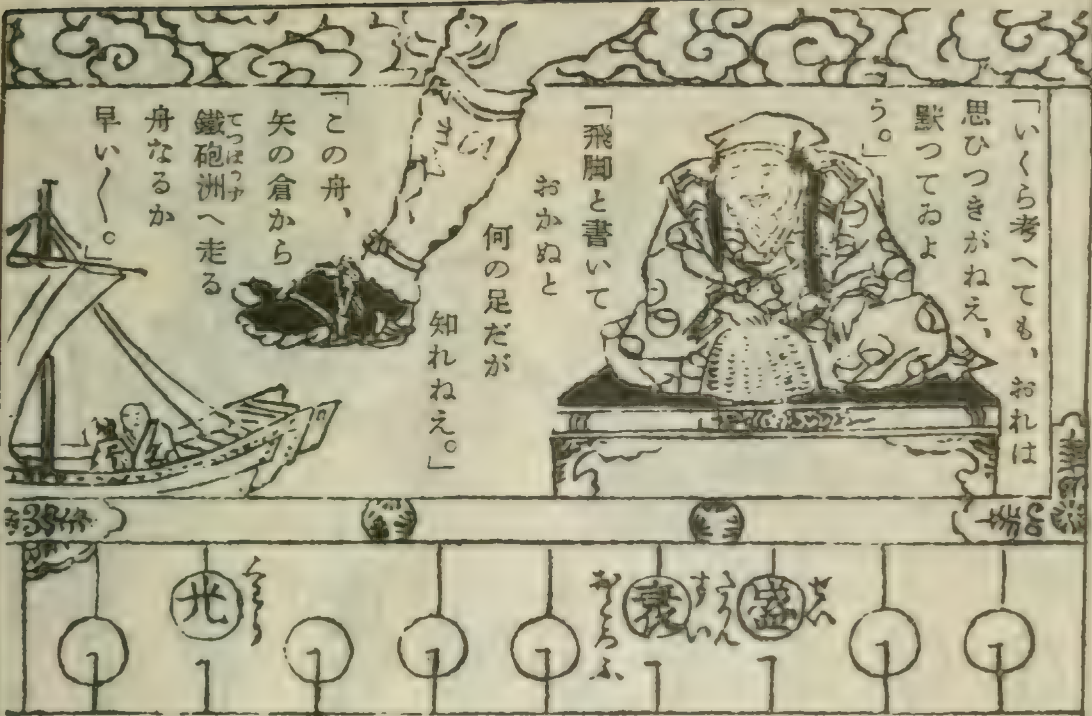
・心の矢が能聟(よいむこ)の的へ當れば和藤内(わとうない)の人形を出す。その心は、ハテ他(よそ)の國で手柄をするわさ。

・心の的が四十(はつをい)の的へ當れば、手を組んだ人形を出す。

とかく人は四十からよい思案がつくものなり。

四十になつても思案の定まらぬものは、一生埒(らち)があかず商人の大頭(あたま)になるはよい思案が肝腎なりと知るべし。





・心の矢が盛衰の的へ當ればおで〻この人形を出す。だから盛つてゐる時は盛つて出づる。盛なるものは必ず衰ふ。昔の奏者、今の鈴道理で南瓜は唐茄子とかはるが早いことおで〻この人形の如し。

・心の矢が光陰の的へ當れば、飛脚の足と帆掛船と隙行く春駒を出す。これ皆走ることの早きものなり。それ嫁が姑になるは早く、大振袖の二八娘が談議参りのお婆と變り金々たる息子株は手洟をかむ爺と變る。田鼠化して鶉となり




「かほのまじめは春駒なんぞは船に見てさへよいとや申す。」
「夢が覺めてしまへば榮華過ぎての棒ちぎりきだ。」
陰
一
生
白紙、芥子之介が泥餡となり瓦は海中に入つて、温石となり、節季候一夜越せば萬歳を聞く。これ皆光陰の早く走るが故なり。うか〳〵として暮すうち極樂か地獄へ鞍替日前なり。
•心の矢が一生の的へあたれば盧生の人形を出す。これ一生は夢なるが故なり。
「屠蘇に醉つてごはいあがりませう。又と開帳はかなひませぬ。」
「きやつきやと小猿や節季候〳〵。」



佛様は、地口などは、おつしやらず。
「閻魔さん方、亡者衆、地獄の中でこなさんの。
「慳貪婆ア、何事も情を張りし報いにて浄玻璃の鏡にうつる。
正直爺は狐拳をうつやうな身をして居る。
「慳貪婆は繼子を叱つて居る形なり。すわと云はば横ツ面を握拳を膝の上に拵へて待つて居るところ。

心の矢が善の的へあたれば、極楽の態相を出す。悪の的へあたれば地獄の有様を出す。この地獄極楽は先の世にあるのみにあらず、有財餓鬼とて金持にも餓鬼の苦しみあり。我心の鬼、我身を責むる活地獄この世にあり。又たとへ貧しく暮すとも我身の足る事を知れば、生きながらの極楽なり。人間萬事心の矢を善の的へ外すべからず。これ人の一生は吹矢の如しといふ謂の締括りなり。

讀書丸 清悦無道人傳方 一包十五粒入 代壹匁五分

○氣根を強くし物覺えをよくす。○心腎の虚分によし○氣の方ぶら〱患ひによし。○常に身を使はず心を使ひて心勞多き人、老若男女によらず、一週り用ゐて身に覺ゆるしるしあり。○道中なされ候か、又は病身の人は常に懐中に貯へべき薬なり。○氣鬱○酒の醉○癪痞○腹痛の類、一粒にて即效あり。委しくは能書に誌す。

賣弘所 江戸 京傳店



さきの年、市川白猿茸屋町の顔見世に御贔屓の息で働く茸屋町金時もあり暫くもあり。

○矢の根五兩

玉磨かざれば光なし。玉といへども、なんぞ親爺の頭の如く磨かずして光るべけんや。心の矢の根も先づその如く、よく磨かざれば役に立たず。齒磨にて齒を白くする息子、洗粉にて衿を磨く娘は多けれども、心の矢の根を磨く人なく、銹だらけな心が澤山なり。心の矢の根を磨くには先づ堪忍が第一にて、堪忍五兩負けて三兩といへば、これを矢の根五兩と名づけて此半丁のおまけに添へて上ます。

も一つおまけに御披露あり。

當年も相變らず新切御・疊入新型御進物御・革紛ひ紙御
・縮緬蠟引御　大極上ふすべ紙御
・新型御　御提煙草入
御鼻紙入類　新切類　品々

京傳店

東風吹矢香を
射てとめん梅の的



矢の字で切れぬ所が
めでたし〳〵

醒世老人　京傳戲作

有金時
有化物
人意吹矢的 上中下

(上)

京傳作

蔦屋重三郎板

此草紙繪ハ喰多の人形の毛ぐさり云云

上ノ段ハ人形ノ毛トリ、御去ゝのトリ、下ノ段ハ左の繪ヘ

此序文 北尾先生ハ御執筆ニトモ御去ゝ

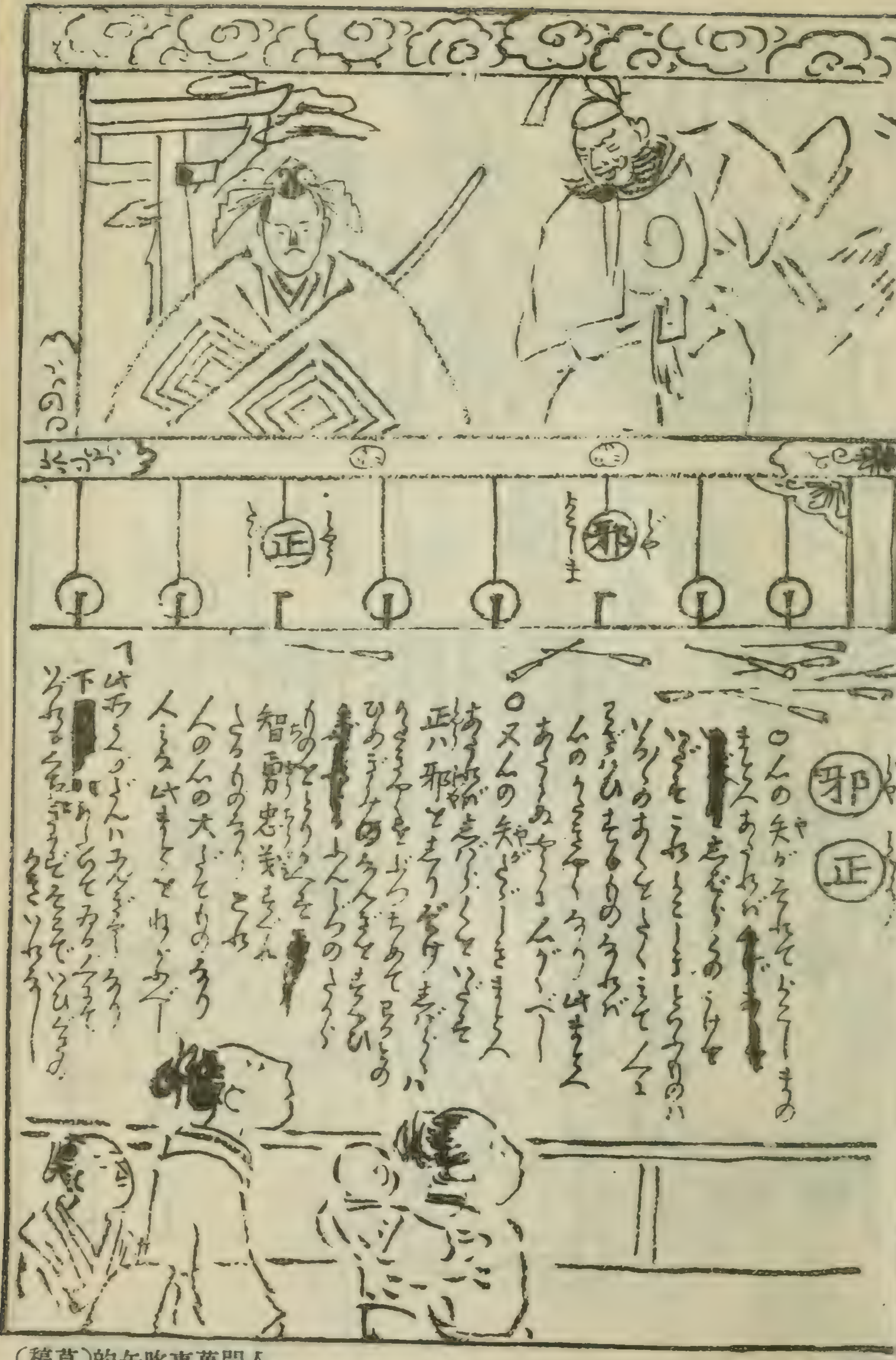
文字アラク繕ヘヨメ安キ様ニ

印校合ノ節此分ニテハワカル云云

手あひして日芝神明乃みやしろへまうで。偶吹矢の店にしばしまちて。こゝろみに一観せしに。吹魁のあやしくおかしくて。まことに賞の的はおもしろくて。けしからむ手のうちの。目なざる目ハ八ツあたりして。一ツも思ふつぼならざれ。金時を出さんとして化物を出し。朝比奈を出さんとして鬼を出す。千両箱の家や数ハ変じて奈良緑青の山となる。張貫の岩ハひつくりかへりて浅黄木綿の波幕となる。そのかはりにこゝまなこを。光陰の矢をとゞむる一心の矢あり。禍福の的あり。善悪邪正の人数あり。正是三世因果十二因縁の糸をひくにもあらしの正辨をあきらむるもの也。人生一代の光景。従来一筒六文の吹矢の如し。猛然として發悟し。家に回て這冊子をつくれり

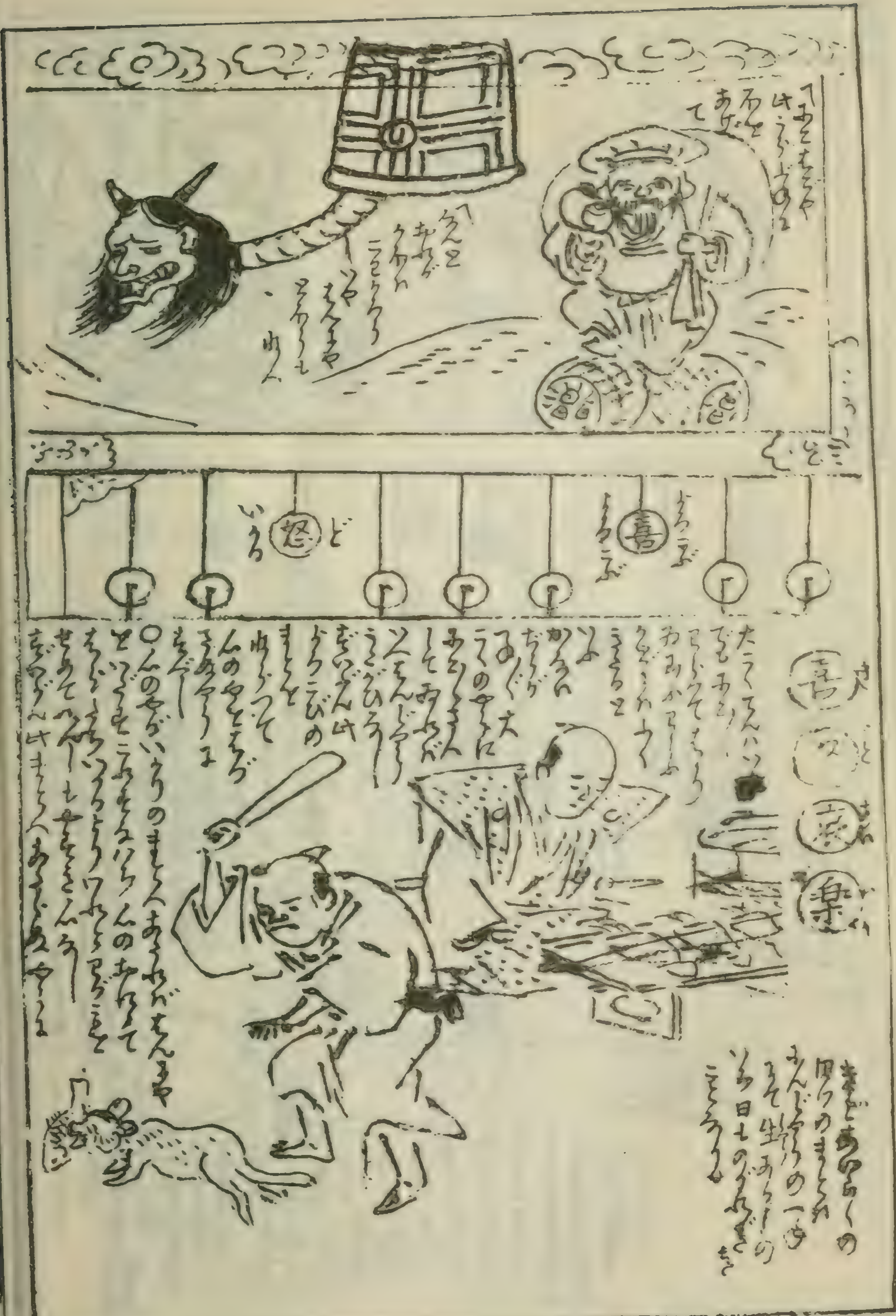
享和三年癸亥孟春　山東京傳述




正
邪
邪
正
智勇忠義


迷
迷




怒
喜
喜
怒
哀
楽


楽
京



人間萬事吹矢的（草稿）

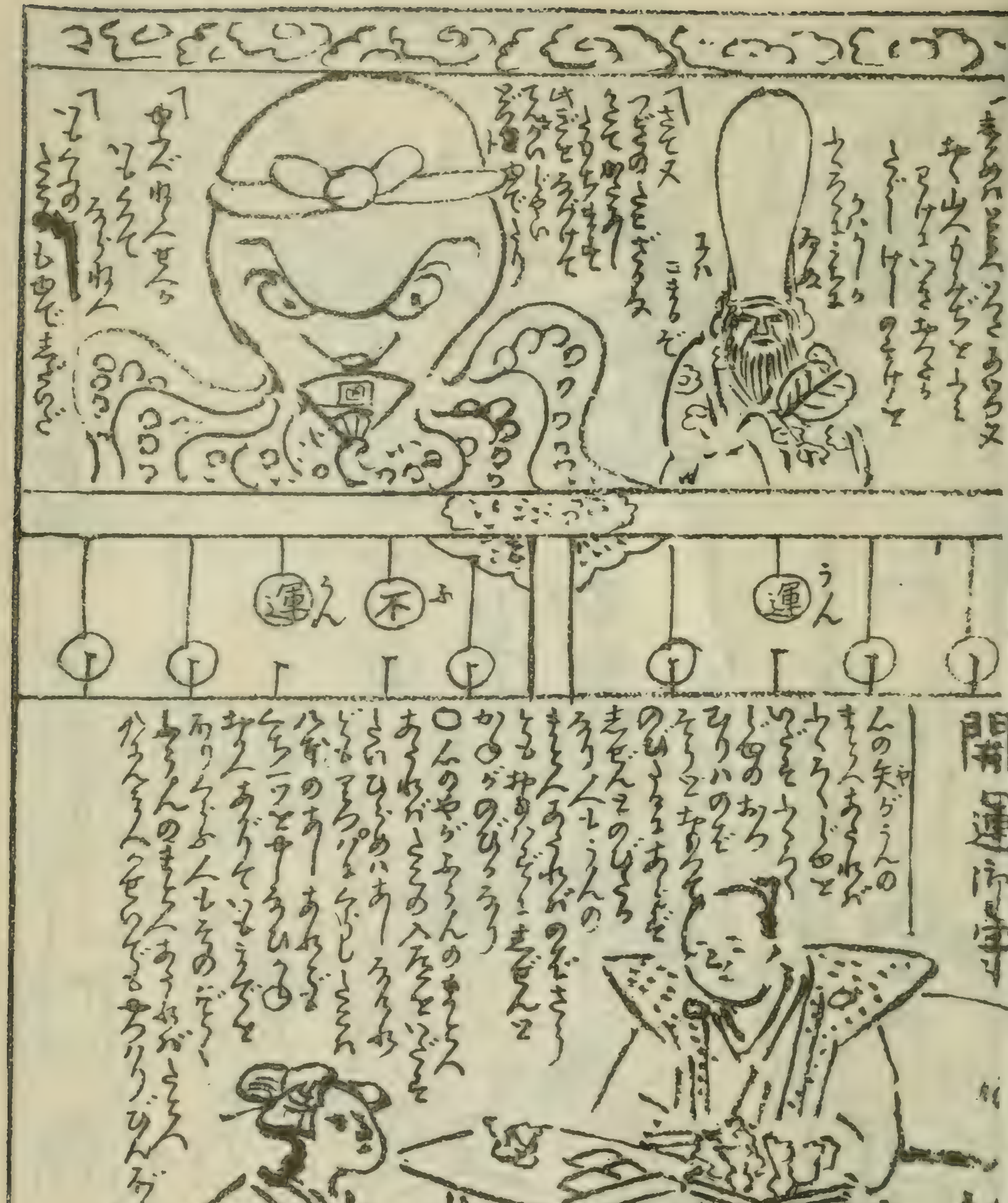
有金時
有化物
人意吹矢的　上中下

㊥

京傳作

蔦重三郎板

まりよりも的ラなりしに
的のこゝろの字ハ月ヲ据え
赤去
一瓢

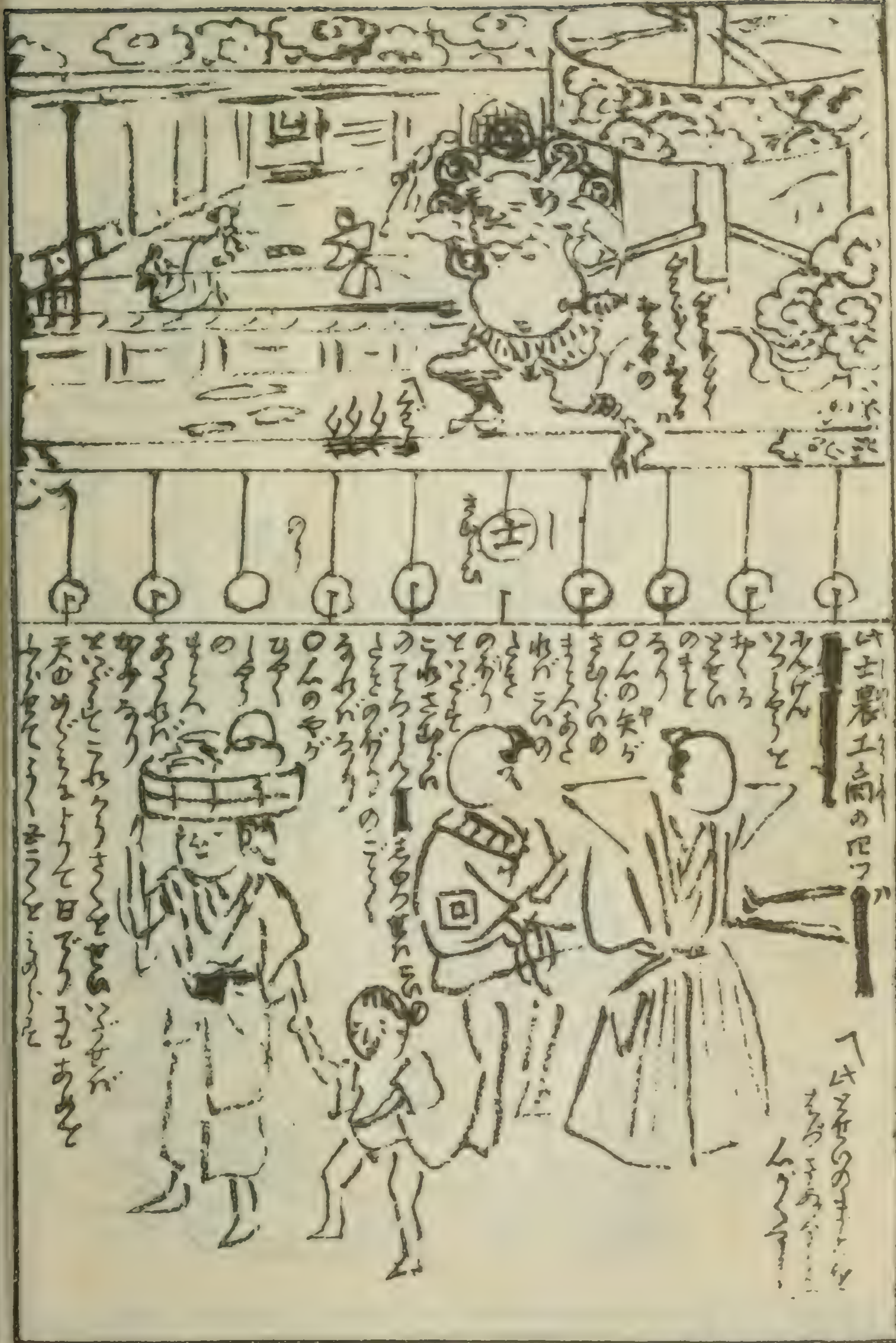

開運御守
うん
運
ふ
不
うん
運


じん
仁
ぎ
義

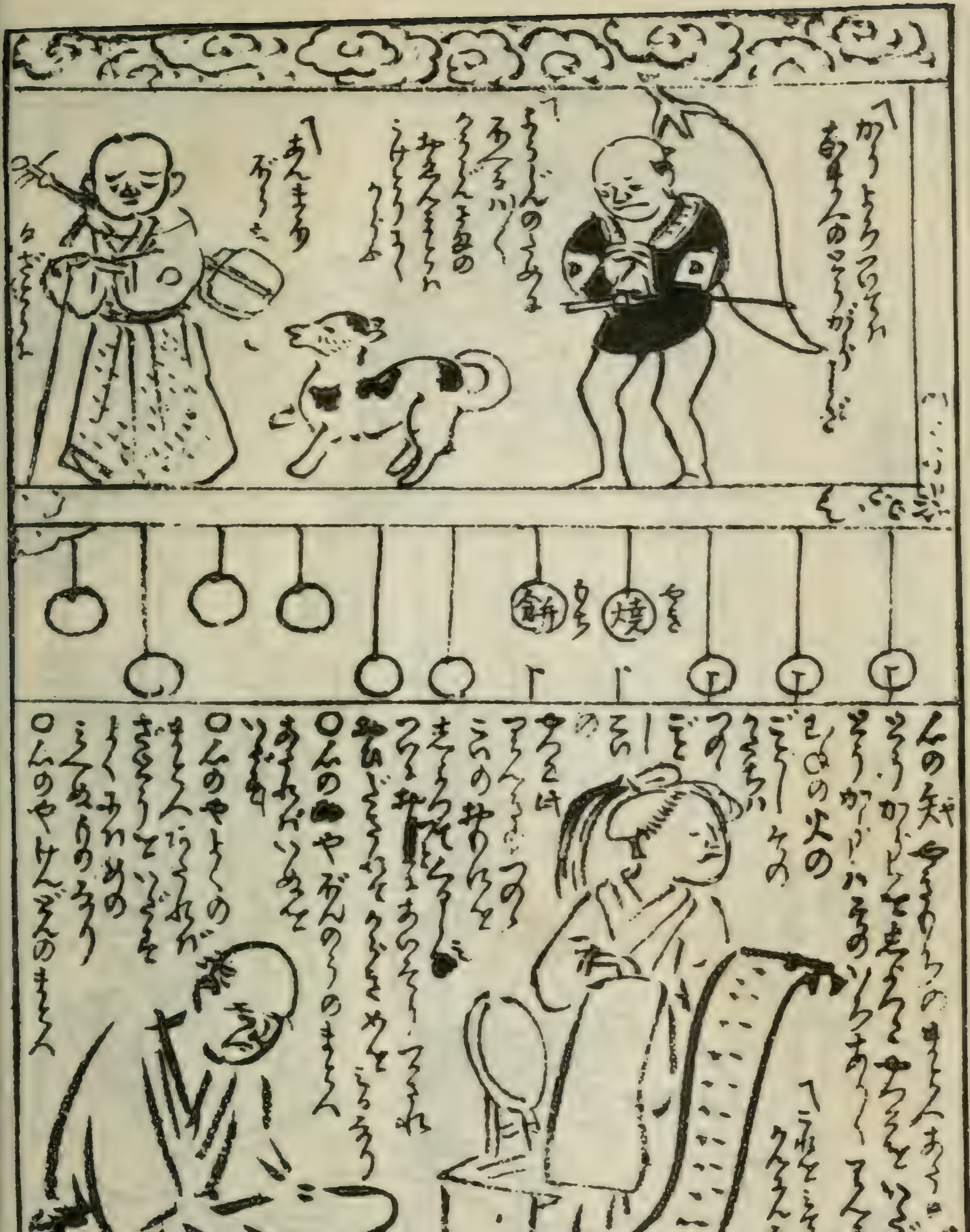

信
智


目
め
口


其角




商
工
帳箱


餅
焼




山
金
現

口上
上中まきしにげだいハ女あて
此通りのげだいに仕に候
割印帳面へ此通りの外題御記會ニ候

人間萬事吹矢的（にんげんばんじふきやのまと） 上中下

㊦

京伝作

豊国画　いづみ市の板

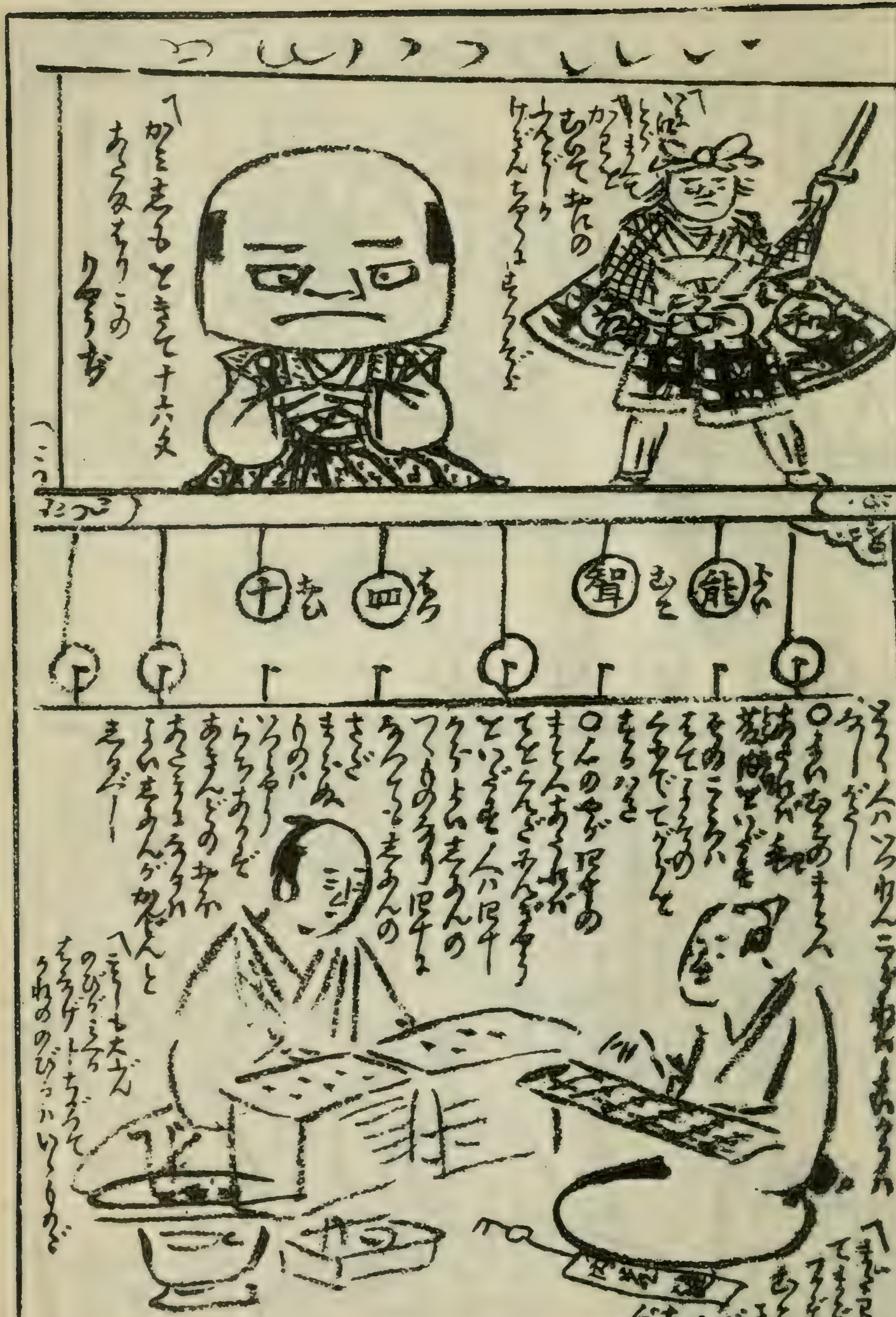

金
酒
さけ



智
恵
養
生


金
合
仕
女

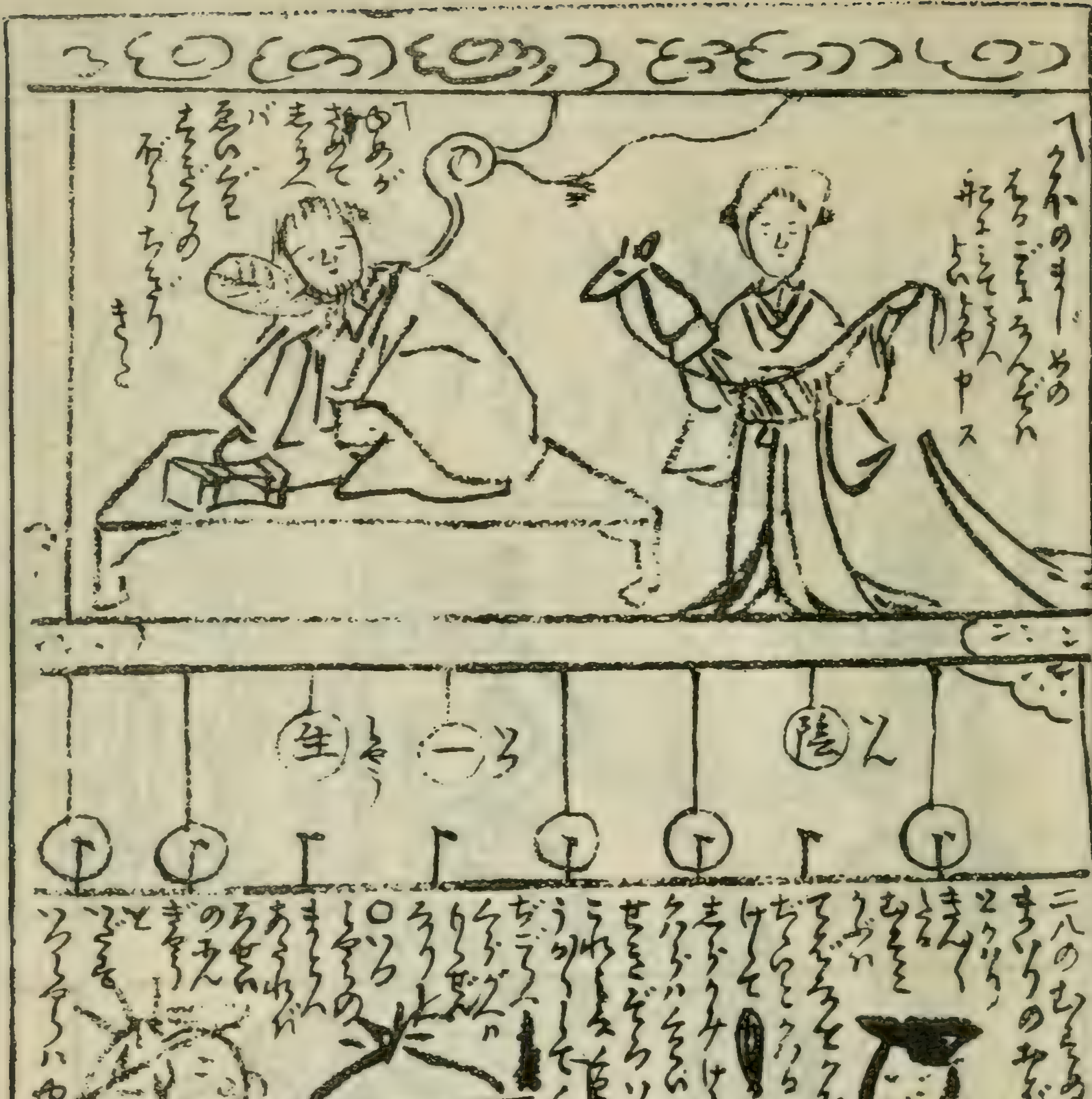




能
智
四
十



盛
衰


陰
一
生


悪
善

人の邪善のまよひはみなしんぞうのこゝろをとゞむ
悪のまよひもみなしんぞうのあやまりにて有財餓鬼
ごとくハこゝろのまよひより人のおそれるこゝと
となりかゝるものもかゞみのごとくこゝろのおもひによる
まなこあかりてこゝろをまよはせ又こゝろのまよひも
人間萬事のこゝろのもちやうしだいにて人のこゝろ善の正しき
これ人の一代ハふき屋のごとし心をいましめ
まもるべし

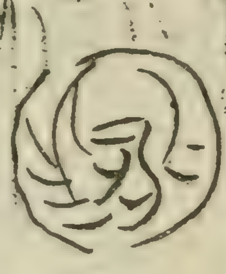
讀書丸（どくしよぐわん）

清覚世道人傳方（しんかくせいだうじんでんぽう）
一包十五粒入代壱匁五分

○きこんをつよくしものわすれをせず
○心腎のこまもりをよくし○まなこを
よくしつかれをやすめ○つかれをとりてひらく
ものをおぼえさせ人を老若男女に
かぎらず一包のめば才よくわかる
あり○ものかきにはよし又は
びやうにんのはつめいのちからをますなり
そのほか業をおこたる○きこうでものの
ことにつかはせ一たびのめばそ
のこゝろもちゆるまぬ
がくもん
売弘所江戸京傳店



きものし
市川白猿
ふき屋町のかべ
こもよ
市川白猿の
鼻でまはる
ふき屋町
よんどころ
あり
まはらくも
あり



醒世老人　京傳戯作

まづハごきげんよふござりまして御
めん〳〵さま〴〵ますますごきげんよく
口上をもつて申上まするは年々ぶさいく
なるくさぞうし御らん下されありがたく
ありがたく存じ御ひいきにあづかり
年々おびたゞしくうりけあきなひ
さんざん仕りましたもひとへにお客様
がたの御ひいきの御かげゆへ作者
ばかりでなくおかげにて私店年中
一日にあきなひ仕合にござります
それゆゑまして ますますごひいきにて
稿本当板山東老人の
遺作わらくなる
御ひいき〳〵仕り

人相
手紋



千秋萬歲

大己叶

編輯後記

一 この巻「黄表紙廿五種」の解題及校訂一切は、山口剛氏の力に成つたものであるが、編輯及製版上のことに就いては、善悪共に當編輯部にその責任がある。たとへば、風教上抹殺を必要とする箇所の如き、校訂者山口氏の意見といふよりは、むしろその御一任を受けて當編輯部に於いてこれを處理した。黄表紙は、繪と文と相俟つて初めて一體をなすものであるが、文だけでは何の事もないもので繪の方にあやしい箇所もある。さういふ場合は、餘儀なく畫面を抹殺或は變更した。繪と文と共に如何と思ふものは、むろん兩者ともに割愛せざるを得なんだ。それらの箇所を何頁何行目の文何字、或は第何頁の繪のしか〴〵といふ風に、茲におことわり致し度いのであるが、一たん抹殺したものを、また改めて愛惜するやうで却つてどうかと思ふから、知る人ぞ知る、全然暗から暗にすることにした。餘儀ない事情を御諒恕下さい。

一 本文の校正に就いては、校訂者山口氏及同氏夫人をせきたてて、炎暑中大いに御苦勞をかけたことであるが、校訂者の興味は、假名書の本文を如何に讀み如何なる漢字をこれに當てるかにあつて、活字その物に對してまで十二分の興味を持つて戴くことは、仕事を急ぐ上からも無理なことであつた。編輯部においても、むろん三校四校したことであるが、假名づかひその他、活字その物の統一等についてまで、校訂者の領分内に入つて、檢討整理する遑がなかつた。從つて文字いぢりの嫌辯者から見るならば、或は校正上の統一を缺く箇所もあるであらうが、それは或る大學者のまとふ衣物の微小なるシミが、その人の學力と更に交渉を感ぜぬ如く、本書の眞價とは別問題のことであらしめたい。校正といふ仕事は、イヤな仕事で、むづかしいところはちやんと行つてゐて、つまらぬ一字二字の見落し、それも本になつて見ると、誰でも直ぐ見つけられるやうな誤りを見落して居る場合がある。

おそらく天下何人も「校正の自慢」だけは出來ぬことと思ふ。殊に發行を急ぎに急いだこの巻には、さういふ誤植が間々あるであらうと思ふと、折角の努力もいやになるがそれも致し方がない。もしさういふ點があつたなら會員諸賢の御深切によつ

て隨時訂正して行かして戴きたい。こちらで見つけたものは、本會の機關紙「書物愛」その他の機關によつて直ちに正誤表をお送り致す故、御めいめいに貼込むか、書込んで戴き度い。例へば、「備前擂盆一代記」と入替へて、一番最後に追加した馬琴作「世諺口紺屋雛形」の柱の如き、諺と間と間違へてある。多勢で何十度も見て、いよ／＼刷上つて初めて發見するといふ風で、訂正する遑がないから、そのまゝにして送ることにした。さういふ點では、第二回配本の「近松名作集」は、ゆつくり時間をかけて致しただけに、大いに自慢したいやうな氣がする。ソレまた自慢が出る。「校正」ばかりは自慢するものぢやないと、自らたしなめつゝも――。

一 黄表紙廿五種、各卷の表題を中扉として、それに原本の貼外題を用ひたものと、用ひぬものと、御覧の如く、いろ／＼になつてゐる。貼外題も或るものは、その中の「上」「中」「下」等の文字を抹殺したのがある。「金々先生榮花夢」の如きそれで、題字の下の「下」の字を抹殺した。それらは全體の體裁の上からしたことで、一種上中下三卷、完全に黄表紙の體裁そのまゝに掲載したのは、「心學早染草」一種だけで、他はいろ／＼の都合上、その體裁にすることが出來なかつた。假に紙數の上から云つても「心學早染草」のやうにすると四頁づつふえる、廿四種について四頁づゝ増加すると、全體からいふと九十六頁もふえることになる。それらも斟酌の上に入れた。どう探しても貼外題の全然見つからぬものもあつた。「狂言好野暮大名」の如きそれで、止むなく活字でと思つたが、それも業腹なれば、いやがる山口剛氏を煩はして名筆を揮つて戴いた。

もと／＼序文のない本もある。序文があれば、表題裏の空白頁に、原本の木版と對照して、その飜譯の活字文を入れたりして體裁をなしたが、貼外題も一枚きりより外になく、序文もないといふ本は、その空白をうめ、同時に興を添える爲に、他の黄表紙から材をとつてカット代りの繪を挿入した。例へば、「大悲千祿本」や、「馬鹿長命子氣物語」の表紙裏、「心學早染草」の「中」「下」兩卷の外題裏の如きそれである。

一 御覧の如く、本卷に收めた黄表紙廿四種の中には、木版本の文字をそのまゝ保存して、その飜譯を頭註組にしたものと、文字は一切消してその代

りに、同樣の體裁で活字をはめ込んだものとある。

一は研究者の爲に不鮮明ながらも原本との校合の便を與へんがため、一は一般讀書子の爲に樂々と讀めるやうにせんがため、煩をいとはず兩樣の版面に致したのであるが、これらも山口氏より一任された當編輯部が勝手に致したことである。

全部を從來の覆刻本の如く頭註組で押通すなら、これは樂な仕事で製版上何等の面倒も要さなかつたであらうが――但し本卷にはその頭註組すら各頁の文字數の多少によつて活字を大小にしたり、行間をあけたりして、隨分面倒な骨折は致して居るが――繪の中に本文の活字を、原本の體裁のやうに組込んで行くといふ仕事は、並大抵の苦心ではなかつた。かういふ試みはおそらく我が出版界空前のことであり、また到底マネの出來ぬ一種の組版藝術だと自信する。編輯部員一同の努力は、もとより當然であるが、その活版面の組みについては、福井安久太氏の、これまた半道樂的努力に俟つところが多かつた。

一 繪の修正手入については、松山荘平氏を煩はした。何分にも原本の汚いのには閉口した。きれいな本も何處かにあるであらうが、キレイにも汚いにも、僅かには、てんで手に入らぬのだから致し方がない。中には隨分綺麗な本もあつた。内田魯庵氏所藏の「桃太郎發端話說」や、笹野堅氏所藏の「人間萬事吹矢的」の稿本の如き、その一例で、それらは全然修正の要もなく、複寫寫眞その物が、そつくりそのまゝ原稿に用ひられた。

一 いよ／＼のオフセット製版は、共同印刷株式會社と、東京プロセス社と二ケ所においてし、印刷は、上記共同印刷と、東洋印刷株式會社及小林印刷所の三ケ所で急がしめた。

一 オフセット製版及印刷面の面白いことは、古書の木版刷の味ひを、さながらに彷彿させる事の出來ることで、これは從來の凸版印刷では出來ない。凸版では、總ての線が餘りに器械的にハッキリときまり過ぎて柔かなカスレなどにいひ知れぬ妙味を持つ木版刷の趣致と遠ざかり易い。さういふ點ではコロタイプ印刷が一番いゝのだが、あれは又全體に薄墨色がかゝるので、どうも感じが暗くなる。純白な紙面に線畫だけクッキリ浮かすといふことが出來ない。凸版のその堅さを柔げ、コロタイプのその暗さを明るくして、木版刷その物のやうな匂ひなり味ひなりを出すには、オフセット印刷

に限るやうである。殊にそれがこの卷のやうな繪の多い本の覆刻に目立つて有效に應用され得る。例へば從來の所謂凸版印刷では、黑いところが、一面にベッタリ黑くなつてしまふ。本書百九十一頁の屋根瓦、六十一頁の暖簾や女の帶のやうなところが漆でもぬつたやうに墨黑々となつてはギゴチない。本書のどこを一寸あけて見ても分るが、例へば四百三十一頁の竹の垣根、五百四十四、五頁のお蕊さんの蕊のやうな線は、手摺の木版を、そのまゝに見せてゐる。百五十八頁の女の影繪なんか、印刷が汚いのだと思はれては浮ばれない。しかし原本が汚いところが多いのには閉口した。なまじ手を入れて似て非なるものにするよりはと思つて、文字の如きは殆どそのまゝ、汚いものは汚いなりに覆刻した箇所もあるので、さういふ箇所は、も少しいゝ原本が手に入つたなら、もつとよい版面にすることが出來たであらうが、珍本搜出難の近頃では、それも致し方がなかつた。老婆心かも知れぬが、とにかく繪の線がカスレたり、きれたりしてゐても、それは印刷が惡いからではない、むしろ原畫の味ひを出すためにその儘にしたものであるといふことを茲に一言お斷り致しておく。その證據には、活字面がキレイに出てゐることによつて、一目瞭然ではあるが。――

一振返つて見て、何もかも、こんな力一ぱいの仕事はなかつた。こゝまでする迄には、實に編輯、組版、製版、印刷、それらに關する幾百人かの熱い息が八百餘頁の隅から隅まで、幾百回と吹きかけられてゐる。それでもまだ、粗忽が何處かにあるかも知れぬと思ふと、一完本を作ることの至難さを、あらためて痛感する。

記して大方の御叱正をまつ。

日本名著全集編輯部記

大正十五年十月五日印刷
大正十五年十月八日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第十一卷
黄表紙廿五種
（非賣品）

編輯發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

共五

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿六卷及追加篇二卷 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○近代艷隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土產 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれづれ ○一日玉鉾

第三卷 芭蕉全集

正篇 ○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四卷 第五卷 近松名作集 上 下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月の紅葉 ○堀河浪の鼓 ○卯月潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○栬狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴門 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔曆 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍權三重帷子 ○壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎浪枕 ○平家女護島 ○雙生隅田川

○心中天網島　○攝津國女夫池　○女殺油地獄　○信州川中島合戰　○心中宵庚申　○關八州繋馬

第六卷 第七卷 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女　○本海道虎石　○心中涙の玉井　○金屋金五郎浮名額　○金屋金五郎後日雛形　○椀久末松山　○お染久松袂の白しぼり　○八百屋お七　○笠屋三勝廿五年忌　○心中二つ腹帶　○傾城思升屋　○愛護若塒箱　○富仁親王嵯峨錦　○鬼鹿毛無佐志鐙　○大塔宮曦鎧　○須磨都源平躑躅　○壇浦兜軍記　○蘆屋道滿大内鑑　○苅萱桑門筑紫𨏍　○敵討襤褸錦　○御所櫻堀川夜討　○釜淵雙級巴　○ひらかな盛衰記　○鶊山姫捨松　○夏祭浪花鑑　○菅原傳授手習鑑　○義經千本櫻　○假名手本忠臣藏　○双蝶々曲輪日記　○一谷嫩軍記　○本朝廿四孝　○奥州安達原　○關取千兩幟　○近江源氏先陣館　○神靈矢口渡　○妹背山婦女庭訓　○攝州合邦辻　○新版歌祭文　○伊賀越道中雙六　○近頃河原達引　○絲櫻本町育　○繪本太閤記

第八卷 歌舞伎脚本集

○參會名護屋　○兵根元曾我　○源平雷傳記　○百夜小町　○傾城淺間嶽　○成田山分身不動　○中將姫京雛　○丹波與作手綱帶　○傾城壬生大念佛　○鳥邊山心中　○嫗髮歌仙櫻　○心中鬼門角　○伊勢頭戀寢刃　○漢人漢文手管始　○五大力戀緘　○金門五三桐　○四谷怪談　○與話情浮名横櫛

第九卷 浮世草子集

○傾城色三味線　○傾城曲三味線　○傾城歌三味線　○世間息子氣質　○浮世親仁氣質　○世間娘氣質　○咲分五人娘　○傾城禁短氣　○商人軍配團　○常大門屋敷　○鎌倉諸藝袖日記　○日本新永代藏　○御前義經記　○好色萬金丹

第十卷 怪談名作集

○御伽婢子　○狗張子　○玉箒木　○虚實雜談集　○怪談登志男　○近世百物語　○西播怪談實記　○茅屋物語　化物判取帖　○豐年珍話集　○實物語　○怪談實錄　○英草紙　○繁々野話　○雨月物語　○垣根草　○壽句冊　○近代百物語　○怪談記野狐名玉　○怪談名香富貴玉　○清誠談　○臥遊奇談　○深山草　○怪異前席物語　○古加良志草紙

第十一卷 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢　○親敵打腹鼓　○長生見度記

○噓多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本
○江戸生艶氣樺燒　○莫切自根金生木　○文武二道
万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○卽席
耳學問　○盧生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語
○世上洒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城
腹之內　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○
世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽
小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間
萬事吹矢的（草稿）

第十二巻　洒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の巻　○嫖客三體誌
○娼妓絹籭　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林
○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園
○和唐珍解　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房
○寸南破良意　○仕懸文庫　○猫射羅子　○道中粹
語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○三教色　○契國策
○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　婦美車紫
鄽　○起承轉合　○粹町甲閨　○古契三娼　○滸都
洒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問
○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟煙の巻
○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三巻　讀本集

○昔話稻妻表紙　○本朝醉菩提　○日本水滸傳　○
旬傳實々記　○三七全傳南柯夢　○飛騨匠物語　○
天羽衣

第十巻　滑稽本集

○浮世風呂　○浮世床　○花暦八笑人　○四十八癖
○妙竹林話七偏人　○古朽木　○奇妙圖彙　○小紋
雅話　○和歌始衣抄　○客者評判記　○無駄砂子
等。○附錄に落語本を添ふ。

第十五巻　人情本集

○春色梅暦　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對
暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用
○八萬鐘

第十六巻　第十七巻　第十八巻　南總里見八犬傳　上中下

第十九巻　膝栗毛其他

○東海道中膝栗毛　○木曾街道膝栗毛　○六阿彌陀
詣

第廿巻　第廿一巻　修紫田舍源氏　上下

第廿二巻　第廿三巻　和文和歌集　上下

○眞淵歌文集　○蘆庵六帖詠草　○桂園一枝（景樹）

○うけらが花(千蔭) ○琴後集(春海) ○宗武歌集 ○曙覽歌集 ○藤簍冊子(秋成) ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿四卷 俳文俳句集

○五元集(其角) ○五元集拾遺(同) ○五元集脱漏(同) ○雜談集(同) ○類柑子(同) ○玄峰集(嵐雪) ○其袋(同) ○去來丈草發句集 ○ひとりごと(鬼貫) ○鬼貫句選(鬼貫) ○七車(同) ○とくとくの句合(素堂) ○韻塞(許六) ○風俗文選(同) ○葛の松野(支考) ○笈日記(同) ○雅文消息(許六・野坡) ○蛙合(仙化) ○俳諧職人盡(蓼和) ○鶉衣(也有) ○蕪村句集(蕪村) ○蕪村文集(同) ○新花摘(蕪村) ○寫經社集(同) ○十番左右句合(同) ○明鴉(几董) ○續明鴉(同) ○新雜談集(同) ○井華集(同) ○太祇句集(太祇) ○春泥句集(春泥) ○三春日記(蓼太) ○芙蓉文集(耳得) ○白雄句集(白雄) ○骨書(樗良) ○俳ざんげ(大江丸) ○はいかい袋(同) ○曉臺句集(曉臺) ○佐渡日記(同) ○おらが春(一茶) ○一茶句集(同) ○鼠の道行(成美) ○成美家集(同) ○蔦眼集(道彦) ○鶴芝(士朗) ○斧の柄(乙二) ○續綸歌仙(宜麥) ○屠龍の技(抱一)

第廿五卷 狂文狂歌集

○古今夷曲集 ○萬載狂歌集 ○萬代狂歌集 ○四方のあか ○四方の留糟 ○千紫萬紅 ○萬紫千紅 ○めでた百首 ○かくれ里の記 ○(石川雅望の作では)狂文あづまなまり ○吉原十二時 ○(風來山人のものでは)風來山人六々部集(前篇) ○風來山人六々部集(後篇) ○風流志道軒 ○(手柄岡持のものでは)我おもしろ

第廿六卷 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十篇 ○誹風柳多留拾遺四篇 ○川傍柳五篇

追加篇 第廿七卷 歌謠音曲集

○義太夫(近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。)

○傾城阿波の鳴門(八つ目・順禮の段) ○艶容女舞衣(下の卷・酒屋の段) ○戀娘昔八丈(下の卷・鈴ケ森の段) ○桂川連理柵(下の卷・帶屋の段) ○廓文章(吉田屋の段) ○傾城戀飛脚(下の卷・新口村の段) ○碁太平記白石噺(七つ目・揚屋の段) ○花上野譽の石碑(四つ目・志渡寺の段) ○木下蔭狹間合戰(七つ目 竹中陣屋の段) ○蝶花形名歌島臺(八の切・小坂部館の段) ○三十三間堂棟由來(平太郎住家の段) ○玉藻前曦袂(三の切・道春館の段) ○八陣守護城(八の切・正清本城の段) ○生寫朝顔日記(宿屋の段) ○壺坂靈驗記(澤市内の段) ○近江源氏先陣館(八つ目切・小四郎切腹の段)

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内 ○神樂獅子 ○隅田川舟の内 ○秃萬歳 ○灸すゑ巖の疊夜着 ○酒中花（水調子 ○うかぶ瀬 ○ぬれ扇 ○亂髪夜編笠 ○助六所縁江戸櫻 ○常陸帶 ○花柵 ○道成寺 ○淨瑠璃供養 ○邯鄲 ○熊野 ○泰平住吉踊 ○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍巻（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季 ○松づくし ○泰平船づくし ○高砂松の段 ○神樂高砂 ○蒔繪の島臺 ○萬屋助六心中 ○自然居士過去物語 ○源氏妹が宿 ○夕霞淺間獄 ○尾上雲賤機帶 ○源氏十二段 ○頼光大江山入 ○鉢の木 ○與作小萬夢路の駒 ○道行三度笠 ○鵜飼石和川 ○お夏笠物狂 ○競牡丹 ○源平妹脊の鶏合

○常磐津節

○老松 ○子寶三番叟 ○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○雨顔月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靭猿 ○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木）○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲緣苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（将門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清 ○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女 ○戻り橋 ○三保の松 ○松の島 ○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○[illegible]連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○描筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野 ○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春 ○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草 ○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間苅豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り、○月花茲友鳥（山姥）○○笹花手向楯（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮塒鴎○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鈍菊睦言（菊畑三菊）○菊嬉闇睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重樓閣の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歲）○色増艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新　内　節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花蘭平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○累身賣の段○千日寺名殘鐘（三勝半七）

○薗　八　節

○道行相合巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行綠花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹背の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解說）○劔烏帽子照葉盞（劔烏帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乘掛情の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戯面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○童獅子○教草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○嫐染分紅葉（うはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉敷顔鳥（三重霞傀儡師）○舞扇薗生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城。越後獅子・橋辨慶・相撲蛋）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀罠奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閨茲姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

○新獅子　○三升猿曲舞（猿舞）　○石橋（外記の石橋）　○老松　○不動　○七所御攝初鐡漿（西王母・藪入娘）　○大和い、手向五字（宮女・牛若）　○外記猿　○復新三組盞（初雁の傾城）　○廓三番叟（廓三番）　○歌へす〴〵餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）　○月雪花蒔繪の巵（月の巻）　○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）　○八重霞賤機帶（賤機）　○後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）　○御歳玉海老手遊（とんび奴）　○吾妻八けい（八景）　○六歌仙容彩（業平小町）　○姿花後雛形（小鍛冶）　○初子日　○俄獅子　○外記の傀儡獅　○初しぐれ　○巽八景　○花翫暦色所八景（助六・景清・新鷺娘）　○勸進帳　○花兄弟十二月所作（若菜摘・鐘馗・雷）　○島臺　○軒端松　○士農工商　○秋色種　○雛鶴三番叟　○花見車　○手習子　○織どの　○常磐庭　○鶴龜　○五色の絲　○今様小鍛冶　○柳糸引御攝（裸三番叟）　○壽　○鞍馬山　○翁千歳三番叟　○廓丹前　○菖蒲ゆかた　○喜三之庭　○紀州道成寺　○連獅子　○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇 廿八巻

謠曲三百番集

○脇能物

○高砂　○弓八幡　○志賀　○淡路　○御裳濯　○代主　○佐保山　○松尾　○養老　○老松　○白樂天　○放生川　○鶴龜　○東方朔　○白髭　○大社　○寢覺　○源太夫　○道明寺　○難波　○鵜祭　○輪藏　○富士山　○江島　○賀茂　○嵐山　○氷室　○逆矛　○要石　○和布刈　○竹生島　○九世戸　○岩船　○金札　○吳服　○西王母　○右近　○繪馬　○鱗形　○玉井　○內外詣

○修羅物

○田村　○八島　○箙　○忠度　○俊成忠度　○經政　○通盛　○兼平　○賴政　○實盛　○巴　○清經　○朝長　○敦盛　○生田敦盛

○三番目物

○野宮　○井筒　○芭蕉　○采女　○東北　○梅　○佛原　○墨染櫻　○身延　○半蔀　○夕顏　○定家　○江口　○楊貴妃　○雪　○二人靜　○千手　○六浦　○藤　○杜若　○羽衣　○誓願寺　○小鹽　○雲林院　○遊行柳　○西行櫻　○陀羅尼落葉　○源氏供養　○大原御幸　○吉野靜　○住吉詣　○松風　○熊野　○草紙洗小町　○山姬　○祇王　○胡蝶　○吉野天人　○鷺　○葛城　○龍田　○三輪　○卷絹　○檜垣　○關寺小町　○鸚鵡小町　○姨捨

○四番目物

○三井寺　○櫻川　○柏崎　○百萬　○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蟬丸○花筐○班女○
加茂物狂○水無月秡○籠太鼓○富士太鼓○
梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○
碪（砧）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○
鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女
郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松
虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月
○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱
法師○俊寛○攝待○鉢木○土車○高野物
狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落
○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○
曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正
行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東
岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲
○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛俱
養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸
○禪師曾我○闕原與市○現在巴○正尊○草
薙○泰山府君○現在七面○諷伏曾我○望月

（五番目物）

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇
風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○
善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石
○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖
○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲
○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達
原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜
○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏
○絃上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大
典閑曲曲舞獨吟○護法○豐干○千引○常陸
帶○空蟬○鷄龍田○阿古屋松○紫式部○鶉
○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛
花○十番切○笠卒都婆○隠岐院○明智討
○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○
鞨○碁其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戸文藝之部」一至廿六卷及追加篇二冊は、この卷黃表紙廿五種を第一回配本として今後毎月一冊乃至二冊づゝを刊行するもので、豫約申込は、今年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に伴ふ多量製產の利得を以て、益益いゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので每月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）

